

幻想殺しと電腦少女の 学園都市生活

軍曹(K—6)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある魔術の禁書目録の主人公。上条当麻に相棒がいたら。そんな作者の妄想が暴走するとき物語は始まる——！

要するにクロスオーバー作品です。

上条さん強化作品です。幻想殺しの自己解釈があります。

電脳少女はカゲロウデイズより榎本貴音。エネちゃんです。

※二人とも原作キャラとはほど遠いと思います。

基本は原作に沿って進めていく所存です。既に完結済みではありますが。

まだまだ少しづつ手を加えていくのでよろしくお願いします。

目次

プロローグ

幻想喰いを持つ少年のお話 The

Imagine | Eater. | 1

原作開始前編

上条当麻と榎本貴音 | 8

統括理事長との出会い | 16

闇夜の黒猫は黒皇龍へと | 29

幻想殺しと電腦少女と一方通行

37

絶対能力進化実験 | 48

閃光の舞姫&動画投稿者“ENE”

74

電腦少女“エネ”爆誕 | 83

上条当麻の“裏”“表” | 91

不登校児上条当麻の活躍 | 99

超能力者 御坂美琴 | 106

禁書目録編

電腦少女は幻想に寄り添う AI,

Imagine nary, Girl.

114

奇術師は終焉を与える The 7 t

h | Edge. | 152

魔道書は静かに微笑む Forge

t | me | not | 179

幻想喰いが終わりを創る the p

| | | | | | |
|----------------|--------------|-----|---------------|----------|-----|
| レディオノイズ | Level 2 (Pr | 474 | 魔術世界のヘクスサクペクト | — | 474 |
| product Model) | — | 327 | 戦闘世界のデイトイクティブ | — | 491 |
| ノイズキャンセル | Level 3 (O | 497 | 有害世界のエンゼルフォール | — | 497 |
| version spec) | — | 344 | 単一世界のラストウィザード | — | 516 |
| レールガン | Level 5 | 366 | 日常世界のマイベトレイヤー | — | 537 |
| アクセラレータ | Level 5 (Ex | 394 | 夏休み最終日編 | — | — |
| tend) | — | — | 始まりの夜 | Good Bye | Ye |
| マルチスキル | Level 0 (Err | 548 | sterday. | — | — |
| or) | — | 420 | とある化学の狂科学者 | — | 561 |
| オンリーワン | ID Not Fou | 442 | とあるお嬢の超電磁砲 | Doubt | — |
| nd | — | — | Lovers. | — | 570 |
| 御使墮し編 | — | — | とある異郷の幻想喰い | — | 578 |
| 現実世界のパラレルワールド | — | 456 | とある御坂の最終信号 | — | 590 |

虚数学区・五行機関編

舞台裏の表側 | 605

始業式 | 614

アフタースクール | 624

放課後 Break Time. | 631

閉鎖化 Battle City. | 646

終止符 Beast Body, Hu | 702

man Heart. | 653

表舞台の裏側 | 661

天草式十字清教編 | 709

学園都市 Science Works | 674

hip. | 674

学園都市 式 Science Wo | 674

rship. II | 681

学園都市 参 Science Wo | 687

rship. III | 687

学園都市 肆 Science Wo | 693

rship. IV | 693

学園都市 伍 Science Wo | 702

rship. V | 702

ローマ正教 The Roman C | 709

atholic Church | 709

ローマ正教 式 The Roman | 709

Catholic Church. | 709

| | | | | | | | | | | | |
|-------------------|-----------|-----------|-------|-----------------|----------------|-----------|--------------|------|------------------|-----------|-----|
| ch. | 天草式十字清教 | 突撃! | 打ち合わせ | church. | イギリス清教 | f VONGOLA | 死ぬ気の炎 | III | Catholic Church. | ローマ正教 | II |
| 770 | AMAKUSA | 760 | 754 | 746 | Anglican | 732 | The Blood of | 720 | 715 | The Roman | 715 |
| | S | | | | C | | o | | | n | |
| | チャーリン学園都市 | EX 2. 猫の日 | 813 | EX 1. ハロウィンでの一幕 | his Halloween. | 短編集 | 日常編 | Shut | 行動終了 | 激突! | 法の書 |
| EX 4. バック・トウ・ザ・フユ | 825 | 820 | | 797 | | | | 790 | The Page is | 783 | 777 |
| | | | | Thi | | | | | | | |

チャールズ学園都市 II | 836

EX5. バック・トゥ・ザ・フュー

チャールズ学園都市 III | 845

映画 とある魔術の禁書目録 エンデ

ミオンの奇蹟編

宇宙エレベーター | 856

ARISAとENE | 878

鳴護アリサ | 901

約束の地エンデュミオン | 910

エピソード エンデュミオンの奇蹟

922

大覇星祭編

大三者から見た準備期間 Pare

nts | View Point.

927

炎天下の中での開始合図 Comm

nce | Hostilities.

938

魔術師と能力者の競技場 // Stab

Word. " | 956

戦いの結末は勝利か否か Being

Unsettled. | 969

緊張の糸の上の休憩時間 Resum

ption of | Hostiliti

es. | 976

追撃の再開とその終わり Accid

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|------|---|--------------|---------------------------------|------|---|--|----------------------------|-----------------------|--|--|---------------------------------|-----------------------|---|---|---------------------------------|-----------------------|--|---|----------|---------------------------------|
| アドリア海の女王編 | 1012 | N e x t C h a l l e n g e r. | 終わつた後に待っていた者 | T h e | 1004 | d. | W h o H o l d O u t a H a n | 終わつた後に待つ者達 | T h o s e | 999 | o f a N i g h t S k y. | 右の拳を握り締める理由 | L i g h t | 994 | o l i c A n t e n n a | 倒すべき敵、守るべき者 | P a r a b | 988 | e n t a l F i r i n g | 北イタリアの旅行 | U n V i a g g |
| アドリア海の女王 | 1044 | L i b e r a z i o n e. | 火砲と砲火の戦い | L o t t e d i | 1035 | e l a S c o n f i t t a. | 水の都の船の上で | I l m a r e | 1026 | e n t o d i u n P i a n o. | ロンドンへの準備 | U n F r a m m | 1021 | d i C h i o g g i a. | キオツジアの街並 | I l V e n t o | 1017 | o i n I t a l i a. | | | |

a | d e l | M a r | A d r i a t i c
o . | | | | | 1049

.....では教育してあげましょう。

本当の吸血鬼の『闘争』というものを!!

b y 榎本貴音 | | | | | 1055

学園都市への帰還 L | | i n i z i o

| N u o v o | | | | | 1062

学園都市騒動・神の右席『前方』編

午前中授業のひだまり W | | i n t e r

| C l o t h e s . | | | | | 1067

罰ゲームはどんな味? P | | a i r | C

o n t r a c t . | | | | | 1081

ミサカとミサカの妹と S | | i s t e r

| a n d | S i s t e r s . | | | | | 1085

緩やかに交差する二組 B o y | M e

e t s | G i r l (× 2) . | | | | | 1097

曖昧に過ぎていく日没 H a r d | W

a y , H a r d | L u c k . | | | | | 1106

冷たい雨に打たれた街 B a t t l e

| P r e p a r a t i o n . | | | | | 1118

雨粒を血の色に変える R e v i v a

| o f | D e s t r u c t i o n .

1127

神の右席と虚数学区と F u s e

K A Z A K I R I . | | | | | 1137

立ち塞がる障害の違い T w o ? K i

nds of Enemies. 1142
 彼らのそれぞれの戦場 The Wa
 y of Light and Dar
 kness. 1148
 正と負の進むべき道へ The Br
 anch Road. 1157
 C文書・神の右席『左方』編
 あまりにも暗い聖堂 Bread a
 nd Wine. 1162
 早すぎる変化の速度 In a Lo
 ng Distance Count
 r. 1166

行間 一 引つ越しの準備中の一幕 1174
 決定打となる引き金 Muzzle
 of a Gun. 1178
 魔術師から遠いもの Power I
 nstigation. 1182
 アビニヨンで的一幕 1193
 V. S. 神の右席 1202
 空を覆う鋼鉄の群れ Cruel T
 roopers. 1212
 その解は次の謎へと Questio
 n. 1222
 『グループ』『スクール』『アイテム』『ブ

ロック』『メンバー』……『ド
ラゴン』編

愛しい貴方へ極上の鉛玉を Mana

gement. 1226

誰にも聞こえぬ確かな号砲 Comp

ass. 1233

ゆつくりと動き出した者達 Hiko

boshi II. 1246

超能力を封じられた土地で Refo

rmatory. 1257

第二十二学区・神の右席『後方』編

平穏から破滅に続く道筋 Battl

e of Collapse. 1271

標的《ターゲット》は上条当麻 Tar

get not die Imagin

e Eater" 1280

東洋『武術』対 西洋『聖人』 Ori

ental VS. Western.

敗北く復活 桁の違う怪物の闘争 V 1288

ampire. Human. Go

d. 1298

『王室』『騎士』『清教』派編

何気ないやり取りの違和 Irreg

ular Spark. 1306

イギリス迷路の魔術結社 N::L::

- 1359 ar I I I .
 1359 W 善と悪、各々の入国 World W
 1354 第三次世界大戦・神の右席『右方』編
 1347 うく 争い終結！ すぐさま次の争い
 1340 of Mercy. 今日はお休み く雑談でもして過ごそ
 1328 写真撮影の一悶着 N : L :
 1328 東方神秘の幻想異境 N : L :
 1372 1372 その剣は戦と災厄を招く Sword
 1366 1366 侵入と逆襲の幕開け
 1393 1393 巨大な歪みを正す時 Broken
 1388 1388 彼らの多角的な攻撃 Combina
 1381 1381 天空に皆殺しの天使 M I S H A t
 1372 1372 展開される本物の闇 U p t h e
 1366 1366 ここからが反撃の時 H e r o e s
 1366 1366 t a l k e r .
 1366 1366 A n g e l | S

| | | | |
|--|--|---------------------|---------------|
| | | R i g h t H a n d . | |
| | | 最終術式下準備完了 | R e b i r t h |
| | | t h e :: | 1408 |
| | | 黄金に輝く天空にて | S t a r |
| | | B e t h l e h e m . | o f |
| | | 北極海の最後の決闘 | 1414 |
| | | L a s t | F i |
| | | g h t . | 1420 |
| | | まとめとその他 | |
| | | 全話のまとめ | 1424 |

プロローグ

幻想喰いを持つ少年のお話 The Imagine Eater.

「——あつはつはつ！ くっそー！ 今日もトツポみたいにな不幸タツプリだぜこんちくしようがアアあああああ!!」

その叫び声に続くように哄笑をを上げながら上条当麻は凄まじい逃げ足を止めようとしな。

深夜の路地裏をかれこれ二キロ近く走り回っているのに、まだ八人。

基本平和主義者の上条当麻からしてみればこの人数を相手にケンカを挑む事はできない。力加減を誤つて殺めてしまう可能性があるからだ。

現在は七月十九日。

そう、この日が悪いのだ。明日から夏休みだという皆が幸福になる日には、必ずと言つて良いほど上条には尋常ではない量の「不幸」が襲いかかってくる。

それでもせめて他人だけは、と人助けに乗り出したのがそもその間違いだった。

そして、さらにニキ口ほど走って大きな川に出た。大きな川にはそこを渡れるような大きな鉄橋が架かっている。それを渡りながら中心当りで上条は後ろを振り返る。

「やつと撒いたか……」。あーあ。何してんだろーな俺」

「つたく、本当何やってんのよアンタ。不良を守って善人気取りか、熱血教師ですかあ？」

「やあ、御坂美琴嬢。君がここにいて言う事はアレだ。後ろの連中は」

「うん。めんどいから私が焼ヤッいた」

（可哀想に、コイツに関わったのが運のツキだ。俺はもう半ば諦めてるよ。ハア、不幸だ）

別に出会いは普通だった気がする。上条は通学路の邪魔をする不良共スキルアウトを片付けようとしただけだったし、その不良に絡まれていたのが御坂美琴だった。それだけだ。

それなのに彼女は勝負とかこっつけて上条を追い回す。いい加減にしてくれと言うのは上条の言葉だった。

「……つか、俺が一体お前に何をしたってんだよ。強いて言うならお前をぞんざいに扱ったかもしれないけどさ」

「……私はね。自分より強い『人間』が存在するのが許せないの。それだけあれば理由は充分」

「お生憎様。俺は『人間』じゃあないよ」

「アンタはそうやって馬鹿にする。私は超能力者なのよ？ 何の力もない無能力者相手に気張ると思ってるの？ アンタは、一体。何を、隠してるのよ」

「俺はお前と会ってから嘘は一度もついてないと思うぜ？」

大体、と上条はそこで区切って、

「スプーン曲げるならペンチ使えば良いし、火が欲しければ一〇〇円でライター買えば良い。テレパシーなんかなくてもケータイあるだろ。頭の血管千切れるまで頑張って手に入れるもんかね？ 超能力ってのは？」

上条は呆れたような目で、美琴というレンズを通して学園都市（街）を見据えて、

「大体どいつもこいつもおかしいんだよ。超能力なんて副産物で悦に入りやがって。俺達の目的ってな、その先にあるもんだったよな？」

「はあ？ ああアレね。何だったかしら、確か『人間に神様の計算はできない。ならばまずは人間を越えた肉体を手に入れなければ神様の答えには辿り着けない』だっけ？」

少女は鼻で笑う。

「いや、目の前にその『答え』がいます。とは流石の上条も言い出せなかった。

「. ていうか。まったく、強者の台詞よね」

「は？」

「強者、強者、強者。生まれ持った才能だけで力を手にいれ、そこに辿り着くための辛さをまるで分かかってない——マンガの主人公みたいに不敵で残酷な台詞よ。アンタの言葉」

学園都市に七人しかいない超能力者、そこに辿り着くまでにどれだけ『人間』を捨ててきたのか……それを匂わせる暗い炎が言葉の端に灯っている。

それを、上条は否定した。

たった一言で、たったの一度も振り返らなかった事で。

たったの一度も、負けなかった事で。

「ありやま。自分の言動には気を遣ってるつもりだけど、流石に傷つきやすいプライドって言うか、沸点低くない？」

「本当にアンタはうるさくて、余計な事しか言わないわね！」

苛立ちをぶつけるように、普通の人間が壁を殴るように、彼女は自分の必殺技を繰り返した。

「レ……電磁加速砲……!? おまつ！ 艦載兵器をどうやって再現しやがった！」

「簡単よ。コ・レ」

「ゲーセンのメダル？ それ持ち出し禁止じゃなかったか？ というか、それをどう

やって……」

「こんなコインでも、音速の三倍で飛ばせばそこそこの威力が出るのよ。超電磁砲レールガンとしては使える代物ってわけ」

「絶対、人に向けて使うなよ! 俺、中学生が殺人事件で少年院行きとか見たくねーからな!」

「ばつかねえ。使う相手ぐらい選ぶわよ」

「選ぶ選ばないの問題じゃねえ! 人に向けて撃つなっつてんだ!」

「うるっさいわねえ……。あんな無能力レベルゼロ——追い払うにやコイツで十分でしょ、つと!」

少女の前髪から角のように青白い火花が散った瞬間。

槍の如く一直線に稲妻が襲いかかってきた。

激突音は一瞬遅れて耳に届く。

上条が顔を庇うように差し出した右手に激突した電撃の槍は、彼の体内で暴れるのみならず、四方八方へ飛び散って鉄橋を形作っている鉄骨へと火花を撒き散らした。

……、ように見えた。

「で、何でアンタは傷一つないのかしら?」

「なあビリビリ。お前のコレって何なんだ? 雷も稲妻もどっちも自然現象でしかも

デツカイ静電気だつていうじゃねーか。お前のも体内で発電した電気を相手に向かって撃ち出してるのか？　まるでピカ○ユウみたいだな」

上条の挑発じみた言葉には耳を貸さず少女は続けて言葉を紡ぐ。

「まったく何なのよ。そんな能力、学園都市の書庫（バンク）にも載つてないんだけど。私が三二万八五七一分の一の天才なら、アンタは学園都市でも一人きり、二三〇万分の一の天災じゃない」

忌々しげに呟く少女に、上条は一言も答ええない。

「そんな例外を相手にケンカ売るんじゃ、こつちもレベルを吊り上げるしかないわよね？」

「………、それでもいつつも負けてるくせに」

返事は額から飛び出す『電撃の槍』を使い、音速を軽く超える速度で襲いかかってきた。

だがそれはやはり上条の右手にぶち当たった瞬間、四方八方へと散らされてしまう。

さながら水風船でも殴り飛ばすように。

イマジナリーレイカー
幻想殺し。

一般的にはテレビの笑い物——そして学園都市（このまち）の中では数式の確立された超能力。

その『異能の力』を使うモノなら、それが例え神様の奇跡であっても力の善悪強弱問わ

ず問答無用で打ち消す異能力。

それが異能の力であるならば、少女の超能力『超電磁砲』にしたって例外はない。

ただし、上条の幻想殺しは『異能の力』そのものには作用しない。簡単に言えば、超能力の火の玉は防げて、火の玉が砕いたコンクリの破片は防げない。効果も『右手の手首から先』だけだ。他の場所に火の玉が当たれば問答無用で火だるまである。

それが、上条当麻以外の人間についていたら、である。

だから上条は心の底から、負け犬の遠吠えをしている少女を見下しながら鼻で笑いながら笑みを浮かべる。

まるでサンタクロースの正体を分かっている少年のような小悪魔の笑みを浮かべて、

上条は笑う。学園都市をこの世界を

「なんていうか、不幸っつーか．．．．．ついてねーよな」

上条は今日一日、七月十九日の終わりをこう締めくくった。

たった一言で、本当に世界の全てを嘆くように。

「オマエ、本当についてねーよ」

原作開始前編

上条当麻と榎本貴音

——それは一体何なのか。僕には何も分からなかった。

生まれ持った時からある一般常識や良く分からない力の事。

怖くて怖くて仕方がなかった。

本で読んだ事がある。力を使いこなせない人間は周りの皆に危害を加えるって。

だから、これは力のコントロールができていない僕への罰なんだと思う。

「来るな。疫病神！」

「お前なんかあつち行け！」

疫病神。僕が周りの皆に危害を加えているんじゃない。多分これは僕が不幸なだけだ。でも、周りの皆は僕に関わると不幸になると信じて僕を避けている。何だろう。こういうのを「悟る」って言うのかもしいれないけど、こういう運命さだめなんだと思う。

なのに、なのに。なんで、君は僕にそうやって笑いかけてくるの？

——貴音ちゃん。

▽

榎本貴音は、上条当麻の一つ上のお姉ちゃんである。上条家の隣家に引越してきたその家族は、上条の噂を聞いてもものもしなかった。

そのため、上条の両親も気を許せる間柄になったのか、楽しそうに話している。

ある日、二人で留守番をしていると、急に大人びた貴音が不思議そうな顔で上条に声をかける。

「ご主人。見事なまでの子ども演技ですけど、これからどうするのです?」

「・・・貴音ちゃんどーしたの?」

上条は純粹に疑問に思ったただけだろう。だが、貴音は心底驚いているようだ。

「あ、あのご主人? 今は二人きりですし・・・」

「ご主人って・・・貴音ちゃんそーゆーのが好きなの?」

「えっと、当麻。不思議な知識とか記憶とかない?」

「知識なら・・・。一般常識。それと変な力」

「変な力?」

「イマジネーション幻想喰いって言う力の使い方ぐらいしか・・・」

「・・・!」ご主人が純粹無垢に育つチャンスですか! とは言っても、死ぬ気の炎も、

あの金髪怒野幼女怒のことも、忘れてるって事ですか!

それはマズいですねえ。と首をひねる貴音。上条はエピソード記憶。机上で例える所の日記帳を失っていた。辞書は残っているが、単語が分からないため検索すらできていない。

「とにかく、当麻の事を鍛えますか」

「お、おー」

その日から榎本貴音の上条当麻育成計画が開始する。

*

「さて、当麻。貴方には自分の力の使い方ちゃんとマスターしてもらわよ」

「おうー」

どんとこいと息巻いていた上条も流石に初日から気絶すると言う事態に陥った。

貴音からの指令は、自分の中に意識を向ける。ただそれだけだったのだが、なにぶん上条の中には数億単位の魂がある。そんな物を目の当たりにしてしまつては気絶するのも頷ける。

だが、次の日には上条は大分大人っぽくなつていた。

「なあ貴音ちゃん。昨日の自分の中に意識を向けるつてヤツ、結局どういう意味があつたんだ？」

「十分効果は出てるじゃない」

「ん？」

「当麻の口調、理解度。そして経験を限りなく前世の状態に近づけるための儀式だったのよ。十分すぎるほど元に近づいてるわ」

「・・・そ、そうか？」

「さて。当麻はどちらかというと努力家なんだけど、今だけは天才肌でいてもらいますか。さ、感覚でバシツと蠅王紋^{ゼブルスベル}出現させちゃって」

「()うか？」

貴音の指示通り動いた上条の右手の甲には見慣れた紋章があった。

「おおう・・・。まあ前まで当たり前に使っていた物だし、案外普通の事かもね・・・」

「さあ、どんどん行こうぜ！」

「あまりさくさく進むのもアレなんだけどねえ・・・。そろそろ皆帰ってくるしまた今度にするわよ」

「ういーっす」

—— 深夜の河川敷。

「なあ、こんなところで何すんだ？」

「さて、では魂の切り替えを行うわ」

「魂の切り替え？」

「そうよ。今現在の当麻の魂は人間なのよ、それ以外に切り替えてもらうわ」

「どのぐらいの速さで？」

「一瞬、が理想的」

「OK。ホッ」

その一息で上条の魂は人から鬼へと変わった。生き血をすする最強のアンデッドに。

「うおっ。超見える」

「さて、では川向こちらの的を撃ち抜いてもらおうわよ」

「銃とかないぞ？」

「影の中に手を突っ込んで好きな物をとって」

「えっと・・・」

言われたとおりに影の中に手を突っ込んで中を探した上条が取り出したのは、黒塗りの大型装飾銃二丁だった。

「対化物戦闘用拳銃 “ジャツカル” とオリハルコン製の “ハーデイス” 良い組み合わせね」

「・・・コイツで狙えば良いんだな？」

「そうそう」

上条は川向かいに向かつて左手でジャツカルを撃った。

「ナイスショット。相変わらずうまいわね」

「全く反動がねえ……。これが吸血鬼……。」

「さて、警察が来る前にトンスラするわよ」

「ウィツス」

上条と貴音は家に逃げ帰った。

「今日は何すんだ？」

「家で眼の練習ね」

「眼エ？」

そう。と肯定する貴音。上条の眼の能力はいくつかある。

まず、いつでも開ける“神々の義眼”。これさえあれば大抵の事はできるチート。

次に、これもいつでも開ける十一匹の“蛇の目”。これは使い方さえ間違えなければ

大丈夫。

そして、吸血鬼状態の時に吸血鬼の魔眼。人を洗脳したりできる。

これらを上条は以前のように使いこなせなければならぬ。

「アガッ！」

「グツ」

「イツテエ！」

吸血鬼の魔眼。蛇の目は難なく使いこなした上条だったが、神々の義眼が映し出す景色は彼を傷付けていた。

「難しいわね……」

「やれる。まだいける……」

「がんばんなさいねー」

神々の義眼を習得するには三日間かかったという。

——とある日の事。

いきなりだが、貴音の両親が事故に遭って亡くなった。周りの人間は皆、疫病神に関わったからだと言ってくる。

そして、貴音は謀ったように上条家の養子に來た。ただし名字は変えずに。

そして、上条が小学生に上がる前。彼の両親は学園都市に行く事を進めていた。

「学園都市？」

「そうだ。今度からそこに通ってくれ、当麻」

「う、うん」

「もちろん貴音ちゃんも一緒にね」
「はい！」

統括理事長との出会い

上条当麻と榎本貴音は東京西部に存在する学園都市に数ある小学校の一つ、彼等が入学予定の学校の入学式に出席するために、神奈川にある彼等の親元を離れ二人だけ訪れていた。

両親が着いてきていないのは、学園都市の警備がそれだけ嚴重であることを示すと同時、未成年が対象の『学生の街』であることがよくわかる。

本来であれば、親元を離れることなく地元の学校に通うこともできたのだが、上条が呼び込む不幸によってあらゆる人から呼ばれるようになった、疫病神という名が再び呼ばれることのないように、科学が発展しオカルトが信じられるケースが少ない学園都市に親によって送られたのだ。

「……」が、俺が暮らす街……か」

「みたいね」

首が痛くなるほど見上げなければいけないその壁を越えた先で、上条はそんな感嘆の声を漏らした。

外とは二、三〇年科学技術が進歩しているとよく言われるその街は、上条が予想して

いた鉄道パイプラインや建築格納機能は実装されていないようだ。それでもセキユリテイ面で言えば恐ろしいほど厳重な管理体制が引かれているのは簡単に見て取れる。

上条当麻は小学一年生、榎本貴音は小学二年生だが、二人は同じ小学校に入学・転学することになっていた。それぞれ別学年別クラスで挨拶を終えた後、入学式に出席する。そして、そのあと上条は一年生全員、貴音と二年生数人そろって校内の施設へ連れられた。

「・・・何ハン」

「ここは超能力開発施設。簡単に言えばすごい力を発現させる機械よ」

「へえ〜」

上条はもちろん。貴音も同様に半日で得られた成果は無能力者判定^{レベルゼロ}だった。もし上条達の持つ能力が完全に解析できていたとしたら、超能力者以上の存在に判別されるのは確定事項だろう。

だが、学園都市の能力開発はあくまで一人につき一つまで。異質すぎる能力は確認されず、能力も発現しなかった故、上条と貴音は無能力者というランク付けをされた。

「はあー・・・。無能力者かあ・・・」

「仕方ないわよ。ここの能力じゃあないんだから」

「諦めるしかねーのかな。最強の能力者・・・」

「最強の無能力者つてのもカッコイイと思うわよ」

「マジで!？」

上条は貴音のそんな言葉に、子供っぽく笑いながら未来への展望を想像し、目を輝かせていたが。ふと視界の端にキャソックを着た神父のような風貌の男達が、辺りをキロキョロすると言う挙動不審な態度をとりながら路地裏に入っていくのを横目で見かけた。

「なあ、貴音ちゃん」

「んー?」

「あれ、怪しくネ?」

「あー。サイエンスにカトリックはないわー」

「変装という概念がないのだろうか」

「ないんですよ。聖職者様にはね。どうする? 首を突っ込むの?」

「そうだな。行ってみようか」

戦闘準備を済ませて、上条達は男達に気付かれないように路地裏に入っていた。

——学園都市、路地裏。

「・・・ハアツ。・・・ハアツ」

「・・・こつちだ！ こつちの方へ逃げたぞ！」

「くそつ、あの野郎どこへ行きやがった」

（・・・しくじった。まさか「ヤツら」が待ち伏せしているとは・・・！ まさか統括理事会の連中に内通者が・・・!?!）

大人か子供か、女か男かすら分からない。「人間」は逃げていた。肩と脇腹に傷を負い、もう体力も残りわずか。そんな状況でも、その「人間」は逃げ続けていた。

相手は学園都市の近くで「人間」を待ち伏せしていた。超能力とはまた別の能力『魔術』を使う魔術師だ。キャソツクに身を包んだカトリックの神父達だ。

（・・・！！ 行き止まり!?!）

逃げ続けた「人間」が逃げ込んだのは路地裏の突き当たりだった。少しばかりのスペース。入口は交差点のようになっていたが、三方向全てから敵がやってくる。もう逃げ道はない。

「・・・くつ！」

「・・・はっ。追いつめたぞエドワードIIアレクサンダー！」

「最高にして最低の魔術師であるお前もこうなっちゃおしまいだな！」

もう窓のないビルへ戻る気力もない。この体は壊れてしまうのだろうか。アレクサ

ンダーは柄にもなくそんな事を考える。

だが。

突如、アレクサンダーから見て左側の魔術師の頭が文字通り吹っ飛んだ。まるで頭に小型の爆弾でも埋め込んでいたかのように。

上条当麻は路地裏で魔術師達の様子を、遠くのビル影に隠れて眺めていた。

「どうやら、誰かを追い詰めているようね」

「エドワードⅡアレクサンダー……?」

「またの名をアレイスターⅡクロウリー」

「恩を売っておいて悪い相手じゃあねーな」

そう言っただけは影から取り出したリボルバーの装飾銃に弾頭が赤く塗られた特殊弾を装填する。

「恩を売る……?」

「コネつてのは持つててなんぼつてね」

「俗世を追われたエドワードⅡアレクサンダーがそんな物を持つているとは思えないけど……」

「でもなんかスゲー魔法、一つぐらいいは教えてもらえるかもしれないだろ♪」

「楽しんでるでしょ」

「あ、分かる？」

貴音は上条のそんな様子に思わず首を横に振るが、彼はそんな事気にした様子もなく自分達から一番近い魔術師に照準を合わせ、何の躊躇いもなく引き金を引いた。

撃ち出された弾丸は、魔術師の頭部に着弾すると同時に小規模の爆裂を起こし、首無しバーストブレットの死体を作り上げた。

「炸裂弾つ」

「R-18Gな光景ね……」

「………なっ！ ○○○!!」

「……誰だ！」

「何しやんがんだてめエ！」

「ゴミ掃除だよ。吹きだまりに相応しくしてやるよ。大人しくしてろよ、ゴミ共」

アレクサンダーの位置からは姿は確認できないが、少年のような高い声とそれに似合

わぬ鋭い殺気が伝わってくる。もし彼が擬音を聞きとる事ができたらゴゴゴゴゴゴなんて音が聞こえていただろう。

「このガキがッ！」

激昂した魔術師の一人が、己の手の平に巨大な炎球を生み出す。思わずアレクサンダーも息を飲んだ。不本意だが自分は戦えない。乱入してきた少年に勝ち目はないうろ。

が、アレクサンダーの予想を大きく外れ、少年の声は『へえ』と言っただけで自分が凶器を向けられているのも分かっているはずなのに、容赦なく銃を乱射した。

その銃弾は魔術師達の心臓・脳を正確に打ち抜き、炎球もかき消してようやく止んだ。少年は人を殺したのを全く気にも留めていないのか、物言わぬ骸となった魔術師の成れの果てを蹴り飛ばしながらアレクサンダーの視界に入ってきた。

「エドワード！アレクサンダーを狙ってるっていうからどんなヤツらかと思ってみれば……、期待を大きく下回ってくれやがって」

「目先の利益に飛びついて、組織にも秘密にしたまま自分達のグループだけで来たのよ。きつと」

「……君達は、一体……」

「んー？ 通りすがりの小学生さ」

「うわっ……。酷い怪我」

「貴音ちゃん。治療、できるか?」

「一般的な術式で良いんだったらね」

「術式……? 君達は魔術師か!」

貴音は地面にポケットから取り出したお札を張り、龍脈を通して力を引き出して術式を完成させる。その術式の効果は凄まじくアレクサンダーの傷はみるみるうちに回復した。

「何よ魔術師って……、あんなヤツらと一緒にしないでくれる? あんな薄汚い……汚泥みたいな……こう形容しがたいゴミと」

「貴音ちゃんは陰陽師とか、巫女さんとか……何か色々混じった娘だよ。あと貴音ちゃん魔術師の第一印象をあいっつらで決めるのはダメだと思っぜ?」

「それもそうね。今度から気を付けることにするわ」

「……ありがとう、助かったよ。……君達は一体」

「誰でも良いだろ?」

「いや、良くない。助けてもらった相手の名前も知らないというのはいささか頂けない。私はアレイスターIIクロウリー。ここで会ったのも何かの縁だろう」

「縁……ねえ。名乗られたら名乗り返さなくちゃな。俺は上条当麻。こう見えて小学一

年生だ」

「小学二年生榎本貴音」

そこまで自己紹介を終えたとき、上条は唐突に眉をひそめて振り向きざまに銃を一発。

その銃弾は路地裏に現れた新手を一撃で仕留めた。上条の射撃能力に舌を巻きつつも、魔術師のしつこさに言葉を漏らす。

「・・・まだいたのか・・・」

「どこにいやがったんだ？」

「おそらく別の路地口を見張ってたのね。様子を見に来たのかしら」

「何にせよ黒光りする昆虫みたいに湧いて出てこられたら困るな」

上条がそんなことを言いながら入り口を見ていると、おそらくかくれた状態で発動させたのだろう。

紫電がビル影で生まれた。

「当麻。電撃！」

「超能力か？」

（路地裏ごと焼き尽くすつもりかっ！）「マズイ、逃げ——」

アレイスターがそう言うが、時すでに遅くビルの影から大量の電撃が上条達のいる路

地裏の壁や地面に撒き散らされながらほとぼしった。

が、上条は慌てることなく冷静に、ただその右手を水平に上げ四方八方へ飛び散る電撃を避雷針のようにかき集め右掌で受け止めた。

上条の右手がに触れた電撃は元から無かったように跡形もなく消し飛ばされた。

「……なっ」

「一体どれだけいるんだよ……」

「マジでゴキブリみたいにわんさかと……。でも流石当麻のイマジンプレイカー幻想殺し。ワケの分からないモノ相手でも余裕ね」

（イマジン……ブレイカー……？ 彼がか！）

上条は電撃を放った者を含め、アレイスターを追って学園都市に侵入した魔術師を皆殺しにして息をついた。

「……とりあえず。お礼がしたい。私の部屋へ案内しよう」

「いや、そんなのいい……」

アレイスターの誘いを断ろうとした上条が言い終わるより前に、彼らの周りの景色が変わってしまった。

そこは辺り一面の暗闇、ところどころ光っている所もあるが、床天井壁全てにおいて機械やコード類が露出している。そんな不安定に見える空間で足場がしっかりしてい

るのは機材の上にガラスでも敷いてあるのだろう。

「……………ここ……は……………」

「改めて自己紹介しよう。私はアレイスターⅡクロウリー。学園都市このまちの統括理事長をしてる」

「……………は？ ……え？」

「何かの……………冗談よね……………」

「冗談ではない。助けてもらった事に礼を言うよ。上条当麻君。榎本貴音君」

「……………はっ。で？ 俺達をここに連れて来たのはそれなりの理由があるんだろう？」

「君達に頼むのはお門違いかもしれないが、私は先程の連中も含めた『魔術師』にそれなりの怨みがあつてね」

「復讐を手伝えって？」

「元々君はもう少し成長してからプランの要に入ってくるはずだった。だが、どうやら君はすでに成長しているようだ」

「だから、手伝えと？」

「ああ。どうだろうか？」

上条はアレイスターを値踏みするように見つめて、

「……嫌だと言ったら？」

「力づくで、行かせてもらおうぞ？」

「勝てるだけでも？」

「……ははっ。そんなつもりはない。だが、一つ提案だ。聞かせてもらった君達の目的の為に強力なコネは欲しくないかい？」

「……あんたがなっしてくれんの？ 俺のコネに」

「……条件付きだ。幻想殺し」

「何だ」

緊張した空気がビル内に漂う。

「君が私の甥になる事だ」

「……はい？」

暫く考えた後、上条は渋々頷いた。甥になるという事がどういう事かも理解していなかったし、何より統括理事長や統括理事会に顔パスができるというのは何よりもおいしい事でもあった。

「よろしく。上条当麻」

「ああ、アレイスター＝クロウリー」

「二人とも仲良いわね」

それから上条が、ここに予想以上に入り浸る事になり第二の我が家とも言えるようになるのもうちよつと先の話である。

闇夜の黒猫は黒皇龍へと

とある冬の日のこと。

人身売買に手を染めていた研究所が何者かに襲われた。

「なっ・・・何者だ、お前は！」

「冥土の土産だ教えてやる。俺は黒^{BLACK}猫^{CAT}だよ」

銃声が響く。少年の前にいた研究者は額から血を流して床に倒れ込んだ。

「ウィツス。こちら黒猫。掃討完了だぜ」

『こちら闇^{Darkness}夜。それで、一人か二人ぐらいは生かしてるんでしょね?』

「あ・・・」

『バツカじゃないの? 情報を聞き出さなかったら意味ないでしょ!』

「あつはつはつ」

『笑って誤魔化すな!』

「でも安心しろ。子ども達の居場所は聞いてる。まだ移動させられる前の子達がいるは

ずだ」

『どい?』

「第十三学区」

『私達が通う学校がある学区じゃない』

「○○小学の地下だと」

『なるほど。現在も使われている小学校の地下に牢獄を作る、ね。考えるじゃない』

「そっちは任せて良いか？」

『どうするの？』

「俺は能力者狩りを行ってるスキルアウトの方に向かう」

『了解』

黒いコートをなびかせ、黒猫と名乗った少年は学園都市の闇に消えていった。

——大きな廃倉庫。

「・・・はっ。何が学園都市だ。何が超能力者の町だ・・・。意味ねエじゃねエか」

「なアお前ら！ 超能力者が憎いか！」

「「おう！」」

スキルアウトのメンバーが能力がある者達へ強い反感を持っていた。

その理由は簡単。力を持つと人は力の無い者を見下し始めるからだ。

大人が子供を、社長が部下を……。

「……………」(……コイツら。根は良い奴なんだが……。やはり俺ではま
とめ上げ切れんか……?)

「東城のアニキ。どうします?」

「ん? ああ。何の話だったか」

「決まってるじゃないっすか。次の能力者をボコるんすよ」

「調子に乗ってるあいつらをまた締め上げるのが目的です!」

「……そうか」

第七学区辺りを占めるスキルアウトのリーダー。東城鬼彪とうじょうおにとらは好き勝手するメンバーに手を焼いていた。

先代リーダーから受け継いだグループだったが、どうも自己主張が強すぎる奴らで上手く扱いきれないようだった。

(……こいつらをまとめ上げるほどの器の持ち主はいないのか……)

「グアツ!」

と、その時。メンバーの一人がボロボロの姿で倉庫内に放り出された。

「なっ!」

「どうした!?!」

「あ……化物……」

「誰が化物だ」

そう言つてその倉庫の唯一の入り口と言つて良い扉から入つてきたのは、黒いコートをなびかせたボサボサ頭の少年だった。

「誰だテメエ」

「一応黒猫と名乗つてはいるが、好きに呼んでくれ」

悪党でも、糞野郎とでもな。と笑う少年に、少し気圧されたスキルアウト達だったが、すぐさまナイフやパイプを持ち出して臨戦態勢に入る。

相手の少年はただひっそりと、どこからともなく二丁の拳銃を取り出した。リボルバーの装飾銃とオートマティックの装飾銃。

「な……テメエ。銃は卑怯だろ」

「……裏の世界に卑怯も何もあるか。俺達は明日を生きるために今を闘つてるんだよ」

「……スキルアウトをなめんなよッ!!」

「不吉を、届けに来たぜ」

鉄パイプやナイフを持つて襲いかかるスキルアウトに、黒猫は容赦なく銃弾を撃ち込んでいく。

「ガッ！」

「グアッ！」

「・・・ゴム弾!？」

「テメエも警備員あいつらと同じか!!」

「舐める? 特殊な火薬のおかげで警備員アンチスキルのより数倍痛いんだぜ」

「ガハッ！」

「アガアッ！」

——数分後。そこでは呻き声しか聞こえなくなっていた。それと悲鳴。まだ数人残っているが、完全に戦意喪失している。

「・・・アンタがここのリーダーか？」

「・・・ああ、東城鬼彪だ。お前は？」

「・・・上条当麻だ」

「聞かない名だな。それだけ強ければ知られていてもおかしくない」

「不良じゃないし、この前入学したばかりの小学生なんでね」

「・・・どう見ても大人だが？」

「そこは上の都合さ。俺を動かすのに身体が大きいほうが動かしやすいんだろ」

「・・・そうか」

東城は上条が両手に持つ銃に目を向ける。

（今までの戦闘で分かったのは、あの銃が両方とも化物だつて事だ。金属バットの衝撃フルスイングを受けて傷一つ入っていないリボルバーに、明らかに装弾以上の銃を撃ち出している大きさからして普通じゃないオートマティック・・・）

「・・・どうした？ リーダー格。来ないのか？」

「・・・お前、優しいんだな」

「・・・は？」

「何言ってるんですかアニキ！ コイツのせいであんなやられたんですよ!？」

「・・・ああ。だがコイツの銃の腕からして、今頃撃たれた奴全員あの世逝きだったろうよ。ゴム弾で良かったな」

「・・・なっ!？」

「・・・なあ黒猫。頼みがあるんだが」

「・・・力づくでなら聞いてやるぜ？」

「・・・そうか」

東条が唯一と言つても良い能力を発動させる。それは低能力レベルの発火能力バイロキネシスだが、その低さ故に体温を上げる程度もしくはマッチのみの炎しか生み出せない。

「・・・もう良いだろ？」

「——ッ!?!」

ポツリとつぶやいた上条は、正面にリボルバーを構える。それは何かの咆哮のようだった。

ワケの分からない音が響いて、倉庫の壁に穴が開いた。分かったのはそれだけだった。上条は、能力者を恨むのはやめておけ。とだけ言い残し、その場を去った。

「何なんだ……アイツ……」

「まるでバケモンのビームだぜ!?!」

「ゴジラだぜ。ゴジラ!」

「……上条当麻……か」(フツ……。強いじゃないか『不吉』の届け屋。プレゼンター。またいつか……どこかで会ったら弟子にでもしてもらおうかな)

「……ニキ。アニキ!」

「ん? おうどうした?」

「アイツ。上条当麻の事ですが。アイツの最後の技、『ドラゴンブレス 竜王の咆哮』なんてのはどうですか?」

「あははっ。いいな。よしお前ら、都市伝説風にウワサを流しな。XIIIの黒龍には近づくな。つてな!」

「「「りよーかいイツ!」」」

——何だかんだで仲が良く気さくなヤツらなのかも知れない。

——少し離れた場所。

「こちら黒猫。応答願う」

『どうした黒猫』

「スキルアウトを懲らしめる任務完了だ。しかし、良いのか？」

『良いんだよ。その奴らは基本良い奴らだ』

「へえ・・・」

幻想殺しと電腦少女と一方通行

——九年前。

とある事件が起きた。学園年当時の最大火力が投入され、たった一人の能力者に向けられた事があつたのだつた……。

始まりはそれよりも前、ただ一人の少年が生まれた時（正確には物心ついた時）にはすでに薬漬けや実験漬けの日々。そして手にした能力が——

「——アクセラレータ一方通行。今日も頼んだぞ」

「……」

無言でうなづく白髪の少年。真つ赤な瞳のその少年は、研究者のような男達と共に
実・験・を繰り返していた。

能力の本質は『向きベクトル変換』ありとあらゆるものの向きを自在に操る事が可能。しかし、彼はまだ自分の能力を完璧に使いこなせていない。

「いいか。絶対に一方通行に触るんじゃないぞ。奴は触れたものの向きを自在に操る」
「しかし、彼はまだ完璧に操りきれないのでは？」

「だからこそだ。奴の皮膚の表面には反射膜がついている。触れただけで骨が折れる可能性も考慮しておけ！」

だからこそドタバタと実験が続いていた。そんなある日、一方通行に外出許可が出た。

「遊んでいー」

その一言で外へと出された一方通行は十三学区の小学生がよくいる公園に来ていた。周りのみんながワイワイ遊ぶ中、一方通行は一人で砂場にいた。

「……………」

崩れる砂にイライラしながらも何とか形になった山にサッカーボールが激突する。

「……………あ」

「……………悪い悪い！ ちょーつと変な方向に蹴っちまっつてよ」

「……………」

ボールが飛んできた方向から頭を下げながら走ってくる少年を赤い瞳で睨みつける。それだけで研究者達はビビっていたため、一種の脅しや威嚇として一方通行は使っていた。

が、その少年はにこやかに近づいてくる。

「……………あれ？ もしかして怒ってる？ なら覇気がねエぞ。こうしなきゃ」

笑って細められていた目は鋭く細められ、黄金に輝く瞳が一方通行を貫いた。

「……うっ」

「! 悪い! そうだよな……普通の人間に耐えられるわけねエよな……」

「つたく……当麻は。もうちよつと人に気を利かせてやんなさいよ」

「うっさいぞ」

大丈夫か? と一方通行の肩を掴むその右手を、一方通行は凝視していた。

「……」

いままで一度も、研究者達は触れてこなかったんだから。

「……そう言えばお前どこ小? 俺はその第三小。よろしくな」

「俺は……第一小……」(戸籍上は)

「おお! 近いじゃん。オレ上条当麻。良かったら一緒にやるか?」

「私は貴音。榎本貴音」

「白夜……。鈴木白夜」
すずしなはくや

長い時間のなかで忘れかけていた自分の名前を口にする。

「そっか。よろしくな」

「……よろしく」

「やるか? 超次元サッカー」

「……は？」

そして、後に白夜は語る。あの日は地獄だったと。

「——いやー。楽しかったなー」

「疲れた……。なんでそんなに動けるんだよ……」

「人とは鍛え方が違うからな！」

ケラケラと笑う上条。その笑顔に白夜は思う。「もし自分が、学園都市第一位だとも知ったら彼はどうするか」序列など気にせずに彼は接してくれるだろうか。彼はどうみても学園都市の裏の顔を知らない人間だ。まず一番に関わらせてはいけない。まあ最も今の一方通行にそんな早い思考回路が存在するわけもなく。上条当麻と友達になっていた。

いく月か時が経ち、一方通行の能力が定着するのも時間の問題だった。

「……そう言えば一方通行。最近お前表の子供と遊んでるらしいな。あんまり関わらせらんじやねえぞ。お前に友達などできるはずがない」

「……おう」

そうは言ってもまだ小学生。特例で学校にも通う事を許してもらえて楽しい毎日を

送っていた。

——が、些細なことが原因だった。見た目が能力か、理由はなんだったかわからない。突っかかってきた同級生の腕の骨が折れた。『反射』してしまったのだ。一度暴走してしまつてはもう止められなかった。止めに入った先生も怪我をし、そして最終的には学園都市最大主力に囲まれた。

(・・・どうしてこうなつたんだろう)

全ての弾幕を反射しながら少年、白夜は思う。どうして自分はこんな力を手に入れたのだろう。この力があると誰かが傷ついてしまう。だが、今となつてはこの力を失うことはできない。ならどうすればいい？ 小学生の少年が必死に考えて、導き出した答えは

(———そうか。圧倒的な力があればいいんだ。誰も寄り付かないほどの圧倒的力が) そう覚悟を決めた。そして、今から反射膜に触れた銃弾全てを殺す目的で向き変換しようと思つたその時。白夜の目の前で爆発が起きた。顔の目の前で。

反射的に顔を覆いに行く白夜だったがふと疑問に思う。誰もグレネードなど撃つていなかったというのに。なぜ爆発が起きた？

慌てて周りを見渡すと、その姿を発見した。少年の体に不釣り合いな黒いコート。そ

してその両手に握られた裝飾銃。ツンツン頭に金色の瞳。自分の友達上条当麻がそこにいた。

「な．．．んで．．．」

銃弾の雨の中を彼は歩いて白夜に近づいてくる。今の自分はもう化け物だ。人もすでに何人か殺しているだろう。そんな自分にもう上条に關わる資格などない。そう思った白夜は飛んできた銃弾の雨のほとんどを上条の方へ向き変換する。ほとんど殺す気で。

「?!」

だが上条は違った。右手に持った裝飾銃で全て防がれる。

（ありえねエ！ あの銃弾の壁を!?! いや、アイツ：：自分に当たる弾だけを弾きやがった!!）

「よオ．．．白夜^{びやくや}。お祭りか？ コレ」

「来るな．．．．．俺はこんな事に巻き込まれる化け物だ．．．。關わるな．．．」
「俺に“友人”を見捨てろだとオ？ いきがるのもいい加減にしろよ。たとえ世界中がお前に恐怖し見捨てたとしてもなア．．．。俺は絶対見捨てねエ!」

上条がそう言った途端。銃撃が止まる。そして、全ての電子機器から総じて少女の聲が響く。

《もっしもーし。聞こえてますか?》

「な!? 何だコレ!」

「ハツキングか?」

「まさか! 学園都市最新鋭だぞ!」

《あはっ! 聞こえてるみたいですねえ。だったら、さっさと諦めるやコラア!》

甲高い金切り音。

耳を引き裂くようなその音に、警備員はもちろん全ての電子機器が悲鳴を上げショー
トする。

「?! な、なんだ?」

「派手にやってるねえ貴音」

「貴音・・・? アイツが?」

「あ! ガキが増えてます!」

「何としても止めろとの命令だ。子ども一人増えた所で止められるか!」

再度銃が撃たれる。コンピューターが壊れてしまったので自らの手で標準を合わせなければならぬが、それでも上手かった。

「・・・白夜。反射はしとけ」

「・・・・・・・・・・は!? でもお前・・・・・・・・」

初弾が着弾する瞬間。上条の体が縦に回転する。まるで銃弾の軌跡が見えているように神技なウルトラCを繰り出す。

「!」

再度地面着いたはずの足は、地面を蹴り上条の体を横へ回転させていた。

そして、今一度地面に足が着きかけたその時、高い金属音が連続で響き始める。

（・・・・・・・・・・銃弾を・・・・・・・・銃身で弾いてやがるのか・・・・・・・・?）

「・・・・・・・・・・遅エな。全然足りてねエ。お前らに・・・・・・・・俺の中に溜まりに溜まった悪運を・・・・・・・・不吉をプレゼントしてやるよ・・・・・・・・!」

左手で構えられたリボルバーから撃ちだされた一発の銃弾。それが全てを左右した。たった一発の銃弾がすでに撃ちだされた銃弾に当たり、ピンボールのような弾き合いを引き起こす。全ての銃を破壊し、全員の手首に重傷を与える事になった。

「あいにく黒猫オレの不幸は受け取り拒否はできねエよ」

（・・・・・・・・スゲエ。やっぱ上条はスゲエ・・・・・・・・俺もこんな風になつてみてエ・・・・・・・・）

——病院。

「うん。今回も異常なしだね? しかし何だつてあの事件の中で無傷なんだい?」

「人とは鍛え方が違うから、としか言いようがないな。しかし、毎度毎度怪我もしてない

のに事件に首を突っ込むたびに、ここに来なくちやいけないんだ?」

「仕方ないね? 心配症のキミの伯父さんからお金をすでに受け取っているんだから。例え無傷でも内出血や目に見えない怪我を探しておかないとだめらしいからね?」

「にやろオ・・・。どうしてくれようか・・・」

上条が診察を受けている間。病院の外のベンチに腰掛けている白夜と、立っている貴音。

「・・・なア」

「なに? 言つとくけど、何者だ? なんて質問には答えないからね」

「・・・違エよ。上条は・・・アイツは何をしてるんだ・・・?」

「人助け」

「・・・!?!」

まるで信じられないものでも見るように白夜は貴音の目を見る。

「アイツがやってるのは傲慢なわがままの押しつけよ。こうなつてほしくないから、とか困ってる人は見過ごせない、とか理由なんてどうでもいいの。当麻は目の前で自分以外の人が不幸になるのが許せないだけ。だからアイツは、自分が避雷針になるつもり。事件の騒動なんかは自分から首を突っ込むのはそのせいよ。自分だけが不幸になれば良いって」

「アイツは馬鹿なのか？」

自分の友人の性格に、少しばかり頭を抱える白夜だった。

「よオ。お前ら。待たせたな！」

「遅かったわね」

「看護婦さんたちにオモチヤにされたからな。ん？ どうした白夜。幽霊でも見たような顔して」

「・・・なア。お前はこうしてこんなことしてるんだ？」

「そうだな・・・」。伯父のため、かな」過保護な

「おじ？」

「ああ。何かを守りたいって思ったときに人は強くなるからな」

「・・・だから。人助けなのよね？」

「おう」

「俺にもそんな相手ができるのか？」

「俺たちじゃ不満か？」

「背中を追いかけて、いつか隣に並んでみなさいよ」

「・・・あア」



「——懐かしいな……あの時からか、俺が上条の真似して背中を追いかけ始めたのは」
街中で一人、白夜は歩いていて。これからも上条当麻のようになるために。」

絶対能力進化実験

とある日の夜。

唐突に上条の部屋のチャイムが鳴る。

「はいはい。どちら様でせうか？」

「俺だア」

「ドアの前で顔を突き合わせた状態での俺俺詐欺か？　．．．新手だな」

「なんだその。対応に困るぞみたいな反応は」

「．．．当麻？　誰か来たの？」

「んー。オレオレ詐欺に遭ってる」

「鈴科白夜ですウ！」

「．．．おう。いらっしやい。こんな時間にどうしたんだ？」

「いいから入れろ」

「いやいや、入れろったっていきなり過ぎだろ？　それにその子は？　どちら様」

「全部説明する、だから早く入れろオ」

「OK、分かった。入れよ。この子は．．．．．ソファアに寝かせといて良いんだな？」

「アア、頼む」

リビングの一角に集まる上条と白夜。貴音はお茶くみ、女の子はソファアに転がされて眠っている。

「なア、とりあえず何があったんだ？ 営利誘拐なら協力はしねエぞ？」

「・・・あ、白夜。コーヒーで良かったわよね？」

「冗談も休み休み言え。・・・悪いないきなり押しかけてよ」

「ま、かまわねエよ。とにかく聞かせてくれ手伝える事なら手伝っから」

互いの拳をテーブルをはさみつき合わせる二人。丁度貴音がコーヒーと何かよく分からない赤黒い飲み物（上条専用）を持ってくる。

「・・・上条くん、アイツを見てどオ思った？」

「どうって・・・あの常盤台の超電磁砲レールガンにそっくりだろ」

「あれは妹達シスターズっていつてな、超電磁砲のDNAマップから造られたクローンだ」

「はあ、クローン。クローンってアレだろ？ 外の世界で最近、牛で造られたって奴だったよな。この街じゃ人間できるようになったか。流石実験都市・・・。って待てよオイ」

上条がテーブルを叩くが、白夜はコーヒーをすすする。

「人間のクローンの製造は法律で禁止されてるぜ？ それに人道的にも許される事じゃねエだろうし」

「上が黙認してんだよ。とある実験の為になア」

「実験？ そんなとち狂った実験、一体何の？」

「LEVEL6、絶対能力者を生み出す為の実験だ」

「LEVEL6・・・そんな能力があるのか？」

「樹形図の設計者の演算の結果、ある能力者がLEVEL6へと進化する為にはあの妹達が必要なんだとオ」

「その能力者って・・・まさか、お前？」

「そのまさか。学園都市第一位の俺だってよ」

ケラケラと白夜は笑いながらコーヒーのカップを揺らす。

「だが、何だってその実験にクローンが必要なんだ？」

「それがよオ。ふざけた上に頭のネジが飛んでんだよコレが」

「この街の科学者の頭のネジが飛んでない事なんてあるのか？」

「ハッ、無いに違いねエ。それでだがな。俺がLEVEL6に進化するには超電磁砲御坂美琴を二百以上の戦闘シナリオで二百回殺害する必要があるんだとオ」

「ハア？ 御坂が二百人もいる訳ないだろ？」

「そうだよなア。だが、研究員のクソ共は違う方向でこの問題をクリアしやがった」

「違う方向・・・？」

「あつ、私の・・・」

上条は貴音が飲んで床に置いていたコーラを飲みながら首をかしげた。

「超電磁砲のクローンである妹達を使つて、二万以上の戦闘シナリオで二万回殺害するっていう馬鹿げた方向でなア」

「クローンって劣化タイプなんだな。異能力程度か？」

「相変わらず計算速いな。今その話してねエだろ。ま、理解が速くて助かるがな」

「ハハツ。どうも・・・。この事を御坂は知ってるのか？ 知らないだろうな。うん。だが・・・、分からねエ。どうやって御坂のDNAマップを手に入れたんだ？」

「それについてだかここに来る前に少し調べてみたんだがな。オリジナルが元々は低能力者^{LEVEL1}だった事は知ってるか？」

「ああ、努力をして上まで上り詰めたって奴だろ？」

「DNAマップを手に入れたのはその頃みてエだ」

「でも御坂がLEVEL1だったのはかなり小さかった頃だろ？」

「当時オリジナルとはある病院に呼ばれてた」

「病院に？」

「そこじゃある病気の患者が何人かいたそうだ」

「その病気って？」

「筋ジストロフィー症候群、簡単に言えば徐々に身体を動かす機能が低下して最終的には指一本動かせなくなるってやつだ」

「・・・ほどなる!」

「? その病気と御坂美琴とどんな関係があるの?」

貴音が思わず首をかしげると、白夜が少し笑って上条に、

「上条、人がどうやって身体を動かすか解るか?」

「おう。分かるぜ?」

「答えてくれ」

「そりゃあ、脳から動かさせて信号を出してるからで・・・」

「・・・、あ!」

「気づいたか? 脳からの指令は電気信号だ、そしてオリジナルの能力は・・・」

「電撃使いエレクトロマスター・・・、って事は御坂美琴の能力を使えばその患者を治せるって事?」

「可能性はある、少なくともOじゃねエ」

「じゃあ御坂美琴はその為にDNAマップを?」

「提供したんだろうな」

「でもなんでそれがクローンなんかに?」

「そう言いくるめられたんだろオな、恐らく」

「言いくるめられた?」

「当時の記録はあまり残って無かった、それに意図的に消された部分もありやがった」
「けど本当に御坂は騙されたのか? どこかの研究員がDNAマップを盗んだって事も」

「それもありえる、だが恐らく医者と研究員はグルだ」

「わかるのか?」

「憶測にすぎねエがグルだと考えれば辻褃が合うんだよ」

「筋ジストロフィー症ってのは厄介な病気だな、未だに明確な治療法が見つかってねエ」

「……なるほどね」

「だから? 何なんの? 二人だけで納得しないで教えなさいよ!」

貴音がプンスカと怒ると、上条と白夜は微笑ましそうに笑って。

「解らねエか? もし治療目的に使われたんだとしたら今までに一人くらい回復したって話があつてもおかしくねエはずだ。だが当時から今までそんな記録は一つとしてなかった、つまり最初から治療目的じゃ無かつたって事になる」

「じゃあ御坂美琴はこんな事になるなんて思ってたの……?」

「当時のオリジナルはまだ10歳いくかどうかでぐらいのガキだしな、大人の考えなんて読めねエ。目の前で苦しんでる患者を見せられたら助けてエって思うのが普通だ、そこにつけ込まれたンだろオナ」

「酷すぎる・・・」

貴音が奥歯を強くかみしめる。

「ああ、確かにア、酷い以前に腐ってやがるンだ、学園都市の裏側ってやつは」

「・・・、なあ白夜おかしくないか？」

「何がだ？」

「さっきも言ったけど御坂がDNAマップを提供したのはかなり前の事だよな？」

「ああ、そオだ」

「ならなんで今更クローンを創る必要があるんだ？ DNAマップが手に入ったならすぐにも実験は出来たはずだろ？」

上条がそう質問すると、白夜は少し驚いたように目を開いて、

「・・・お人好し馬鹿じゃなかったのか・・・！」

「何に驚いてんだよっ！」

「・・・当麻は元々頭だけはいいから・・・」

「どういう意味だっ!」

「それについては調べがついてるんだが・・・」

「・・・量産能力者計画?」

「・・・聞いた事はあるわ」

「・・・でもあれは中止になったはず・・・。今回の実験に有効活用できるからって再稼働されたのか?」

「そう言う事だ」

上条はひとしきり唸った後、

「・・・・・・・・・・、なあ白夜、聞きたい事がある」

「なんだ?」

「お前はこの実験、参加するつもりなのか?」

「・・・・・・・・・・、参加するって言ったら、お前はどっするんだ?」

上条は白夜のその質問に即答した。

「お前を、止める」

「ま、そうするだろオナア。だがな、上条。お前の身体能力がどれだけ化け物じみてようとその右手が能力を無効化出来ようと、俺はお前を遠くからいたぶることだってできる

ンだぜエ？」

「それでも止めるさ。どれだけボロボロになろうとも、例え体中の血を抜かれても、お前がこの実験に加担する限り何度でも立ち上がってお前を止める」

「.....」

「もし、お前が二万人の命奪っても何も感じないで自分が進化する為に実験に参加するってんなら、俺は何度でも立ち上がってお前のその幻想をぶち殺す。お前じゃなく、幻想を」

（ああ、お前はそう言うだろオナ。だから俺は.....）

上条は真っ直ぐな目を白夜に向ける。それを見て貴音も感心していた。

「プツ、クハハハ！」

「あ？ 何で笑うんだよ!？」

「俺はこんなゴミみてエな実験に参加する気なンギコレっぽっちもねエよ」

「本当に？」

「当たり前だ、そもそも参加するつもりなら妹達抱えてここまで来ると思うか？」

「ぐう・・・正論」

「心配すんな、俺はLEVEL6なンギ興味はねエ、今のままで満足してンだよ」

「そっか、良かった」

「なんだア？ 俺の幻想をぶち殺すって凄んでた癖によオ」

「知るか。オレの能力は寝てる間は使えねエんだよ。お前が本気になったら上条さんは一瞬で壁のシミですー！」

「そいつはギネス級に愉快なオブジェだなア。今度試すか」

「実験台にすんなよ!?! それこそ試しに壁のシミにされるとか真っ平ごめんだね！」

「もう十分生きただろ」

「まだ十六年です！ 上条さんはこれからもつと長生きするんです！」

「んな事よりコーヒーおかわりイ」

「はいはい………俺も飲もつと」

台所へ向かう上条。

「ブラツクなア、砂糖なンざ入れやがったら壁のシミだかなア」

「了解、了解つと」（壁のシミ気に入ったのか？）「ん？ ……うわっ！ もうパツ

クがねエ！ ……買い溜めはこの辺りに…おつあつたあつた」

「……」

『お前のその幻想をぶち殺す。お前じゃ無く、幻想を』

（……、なあ上条、知ってるか？ 今の俺があるのはお前のおかげだって事……もしお前と知り合わなけりや、俺はこの実験に嬉々として参加してた……自分

の能力で他人を傷付け無い為にはどうすればいいか悩んでた頃の俺なら、LEVEL 6 なのは喉から手が出るほど欲しいもんだただがお前はそんな俺を救いだしてくれた。誰にも相談なンギでできねエ苦痛と不安、そんな泥沼にはまった俺をお前はその右手で引き上げてくれた。なあ上条、気づいてるか？お前その優しさが、俺にとつてどれだけ嬉しい事かを、化け物扱いしかされなかつた俺に對等に話しかけて来たのはお前だけだったんだ。俺はお前のそんな生き方に憧れてんだ、お前みたいに生きて見たいお前みたいに誰かを救う事が出来るようになりたい。なあ上条・・・、俺が今ここでこうして居られるのは、他でもねエお前のおかげなんだぜ？)

「コーヒーお待ち〜」

「遅エ、後コンマ3秒遅かったら壁シミコースだったなア」

「上条さんは九死に一生を得たのか・・・？」

「美味エ」

「インスタントだけどな」

がぶ飲みする白夜とすする上条。白夜が飲み終わり、上条に向き直る。

「ンじゃ、そろそろ俺がここに来た理由を話すか」

「？ 妹達の事じゃないんですか？」

「それもあるんだけどなア」

「………？ な、何か嫌な予感が……」

「上条、頼む」

「お、おい白夜！ 頭上げろって！」

「………」

「あー！ わかった、わかりましたよ！ 何でも言ってくれ！」

「………、本当か？」

「上条さんに二言はありません！」

「交渉成立だなア」

「え？」

「お？」

「なアに簡単な事だア」

「いや、だから」

「あそこで寝てる妹達、お前のところで匿え」

「はい!？」

「え？」

それだけ言っただけで白夜は立ち上がる。

「それじゃア俺はそろそろ帰ンぞ」

「ちよつと待て！ さすがにそれはちよつと．．．！」

「何でも言ってくれって言っただろオ？」

「上条さんは健全な男子中学生なんですよ？」

「だから？」

「見た目中学生とは言え女の子と二人つきりで一つ屋根の下はさすがに」

「．．．当麻。今何気に私をハブったね？」

「あ、いや、悪い」

「．．．お前に二言はないんだろう？」

「．．．．．だーっ。分かったよコンチクショウ！」

上条が頭を抱えながらもそう言ったのを確認して、

「すまん、だが俺は本気で妹達を助けてエと思つてんだ。こいつらは俺のせいでこんな

実験に．．．．．殺されるために生み出されちまった」

「責任つてやつ．．．．．？」

「罪滅ぼしだ、俺がこんな能力に目覚めなきやこいつらは実験に使われる事は無かつた、

だから」

「白夜」

「あ？」

「これはお前にも、御坂にも言えることだけどき。御坂がDNAマップを提供しなかったらこの子達は生まれる機会さえ無かった。それに白夜、お前が居たから彼女達はこの世に生まれて来る事が出来たんだ、その事だけは……、お前や御坂に誇って欲しい所だと、俺は思うぜ」

「……、くせエ」

「？」

「前からくせエ奴だとは思ってたが、今回はとびきりくせエ」

「な?! 上条さんはちゃんと風呂呂に入っているから臭い筈が……」

「意味がちげエよ馬鹿」

「……あーびっくりした」

胸をなでおろす上条を横目に白夜は玄関に向かう。

「それじゃ、また明日の朝来るからな、今後の話もしてエシ」

「いや、明日つて上条さんは普通に授業があるんですよ?」

「知るか、休め」

「無茶苦茶言うな!」

「一日くらい休んだってどうってことねエだろ」

「普通はな!! しかし上条さんにとっては大問題なんだよ!」

「チツ、しかたねエ、なら今すぐ学校なんぞに行けねエようにボコボコにするか」
「何恐ろしい事企ててやがりますか！」

上条はバンツと壁を叩くと、

「それに百歩譲つて休んだとしても後には鬼の様な課題が待ってるんだよ！」

「そんな物俺がコーヒー飲む前の暇つぶしに片付けてやる、だから休め」

「なあ、上条さんを選択の余地は……」

「無エ、あると思うか？」

「ですよね〜」(不幸だ……)

上条は一度ため息をつく、

「分かった、休むよ」

「じゃあ帰る」

「あ、ちよつと待っててくれ」

「？」

「ほいこれ」

「なんだ？ カギ？」

「俺の部屋の合鍵、明日もし俺が寝たらそれ使ってくれ」

「ンじゃ今度こそ帰る」

「あ、白夜」

「今度は何だア？」

「今更かもしれないねエけどよ」

「さっさと見え」

「俺さ、お前が友達で良かったよ」

「……………、最後までくせエ野郎だな、お前はよ」

「上条さんはただ友情の確認をしただけなんですが」

「今度こそ帰る。じゃあな」

「おう」

——— 帰り道。

「友達で良かった……………か。逆だバカ……………」

（上条、俺はお前と友達になれて本当に良かった）

「らしくねエかア？……………いや別にかまわねエ……………俺は俺だからな」

『お前は、お前だろ？他の誰でも無い、キャラに無い事やっただって良いんだよ。自分なんだから』

（そう言ってたよなア……………上条）

白夜は軽く笑う。

「さて、コーヒー買って帰るか」

——上条家。

「さて、白夜も帰って後は寝るだけです」

「そうね」

「もちろんベットでは寝れません。というわけでお風呂場に行きます」

「……えー？ 敷き布団引かないの？」

「うるさい」

——次の日の朝

「9時かア、ちつとばかり早かったかなア。まア合鍵持つてるんだし寝てりや叩き起す」

白夜は上条の部屋のドアノブを捻るが開く気配はない。

「……、やつぱ閉まってやがるなア。OK、愉快で素敵なモーニングコールをプ

レゼントしてやる！」

白夜が鍵を開けようとした時、部屋から渴いた音が鳴り響いた。

「!？」

「そんなもんどつから！」

「観念しなさいとミサカは」

（何騒いでやがんだア？）

合鍵でドアを開け、室内に入る白夜。

「朝っぱらからなアにやってんですかア？」

「白夜！ おはよう！ そして助けて!!」

「ア？」

「変質者め！ 覚悟しなさいと、ミサカは銃を構えます！」

「銃口向けないで！」

「上条、お前何したんだ？」

「何もしてねえよ！ 上条さんはただ美咲を起こそうとしただけで」

「そんな嘘が通用すると思つたら大間違いです！ と、ミサカは自分の貞操が奪われた

可能性を懸念します！」

「上条、俺とお前の仲もこれまでかもな・・・」

「そんな汚い物を見る眼はやめて！ 地味に傷つくから！」

「……………ところで、美咲って誰だ？」

「……………あ？ その子の名前だよ。いつまでも検体番号じやダメな気がするからな！ 昨日寝ながら考えた！」

「器用だな。オマエ」

「美咲……………ミサカの名前……………フへへへ」

「おい、み……………美咲」

「はいっ！ と、ミサカは自分だけの名前を呼ばれたので大きく返事をしてみます」

「ふう〜」

一息ついた上条に銃が乱射される。

「おうわっ!? な、何すんだよ！」

「寄るな変質者。と、ミサカは自分の貞操を奪った可能性のある変質者に銃を発砲します」

「やめとけ。もし、コイツに一発でも銃弾が当たっていたらお前が本当に汚されるぞ」

「脅してまで変質者を庇うんですか？ 一方通行の性格を疑います」

「こいつは馬鹿で、アホで、無能力者で、無駄に女にフラグ建てて、毎日ろくな目にあわないキングオブ不幸だが……………」

「……………」

庇われているはずの上条はその場で両手をついて項垂れていた。

「女の寝込み襲うような腐った野郎じゃねエ、それは俺が保証してやるだから銃下ろせ」

「……………そこまで言われれば信じるしかありませんね」

「ふ……………朝からモーニングコールじゃなくてモーニング鉛玉喰らうところだったし、親友からは悪口を言われるし……………」

「どうせ起こそうとしたら足を滑らせて、ベットに手を着いた所でコイツが目覚まし たってオチだろ？」

「オイ。いつから見えた」

「見てねエよ。長い付き合いだろオ？ なんとなく分かる」

「ほほう。一方通行と、この上条はそこま^{へんたい}で深い関係を……………」

「オイ、ビリビリ妹。親友までだからな。変な振^ルり仮名^じをふるんじゃねエ」

「一々情報を捻じ曲げんじゃねエ」

「一応知ってるみたいだけど、俺は上条当麻。よろしく」

「榎本貴音よ」

「一方通行。でも良いが、鈴斜白夜だ」

「ミサカは検体番号00001号美咲です。と、ミサカは三つ指を立てて上条さんに挨拶

「撈をします」

「そりや、初夜で使う奴だろ？ 普通に挨拶しろよ」

「初夜などと言うワードを出すとは中々のムツツリですね。と、ミサカは上条さんがムツツリである事を認識します」

「誰がムツツリだコラ」

上条が美咲の頭にチョップをする。

「グハッ！ 何ですか今の痛みは？ 三発位チョップされた様な気がしたんですが！

と、ミサカは涙目で頭をさすります！」

「自業自得だ。バカタレ。さ、その顔じゃ白夜も朝飯食ってねエだろ？ ちよつくら美

味しい物作るから待つとけ」

「遠慮なく食わして貰うぜエ」

「食わして貰うぜえ。と、ミサカは一方通行の真似をします」

「はいはい。大人しく待ってる」

「手伝うわよ」

「お、じゃあ頼むわ」

台所に向う上条。以前説明したとおり、上条の料理の腕はプロ級である。

「ゲームでもするかア・・・」

「あの、一方通行」

「ン？」

「一つ聞きたい事があります。と、ミサカは質問をします」

「ンだよ、言いたい事あんなら言え」

「なぜ、ミサカを殺さなかったのですか？ と、ミサカは一方通行を問いただします」

「・・・」

「あなたは今回の実験が成功すればLEVEL6へと進化出来るのにも拘らずミサカを殺しませんでした、その理由がミサカには理解できません。と、ミサカは・・・」

「無敵なんだよなア？ LEVEL6って」

「はい。と、ミサカは質問の意図が分かりませんが、それが先程の質問の答えに繋がるのならイエスと返答します」

「例えどんなに力を手に入れたって、俺は無敵にはなれねエって分かってんだよなア」

「・・・？ それは一体どういう・・・」

「現状で満足してるしよオ。それに、俺は最強であつて最強じゃねエンだよ。俺はそいつに幻想を殺されたんだ。この街の人外によってなア」

「ですが、ミサカを初めとする妹達はLEVEL6進化実験の為に造られた言わばモルモットであり、貴方に殺される為に存在します。と、ミサカは自身の存在理由を説明し

ます」

「……」

「つまりあなたが実験を拒否するとミサカの存在する理由が無くなってしまいうのです。と、ミサカは……」

「……、あのよオ」

「はい。と、ミサカは続きを促します」

「俺はお前等を殺さねエが、実験はするぜ？ あの研究員を出し抜く為になア」

「しかし、殺される為に生み出されたミサカは……」

うつむいてしまう美咲。

「おい、それは……」。「それは違うんじゃないのか？」

「え……」

声の主はもちろん上条である。

「どんな生き物だつて『死ぬために生まれてくる事』なんて絶対無い。例外はありえない」

「ですが、ミサカは」

「例えクソ共がどんな理由で作り出そうとも、人間として生まれて来た時点で自由に生きる権利があるんだからなア」

「死にたいなら死ねばいいけど」

貴音の言葉に白夜が眉をひそめるが、

「私達の眼の届く距離。学園都市の中で勝手に死なせはしないわ」

「お前が何千何万と居ようが、生命として生まれてしまった以上。『生きる』しか選択肢がないんだ」

「実験動物なんてものは存在しない。生まれた時点でお前は人間だよ」

「上条。朝飯イ」

「はいはい。もう出来ますよー」

「しかし・・・私は・・・」

「自由って言ってるんだろオ!」ズビシツ

「痛っ! と、ミサカは先程までとは全く違うチョップである事に少し安心します」

「悪かったなア。アイツみてエに素早いチョップを撃つ事は俺には出来ねエンだア」

「それで良いんです。と、ミサカはあの痛みを思い出し震えます」

「ハイハイ完成しましたよー」

「メニューはア?」

「え? 普通にハムエッグだけ?」

「ハンバーグとかも食べてみたいですね」

「いつも通りだなア」

「悪いのか？」

「おおいに結構オ！」

「それでは・・・」

「Stop the season in the sun！」

ハムエッグに箸を伸ばそうとした美咲の頭に、上条のチョップがめり込む。

「にぎやああ!!」

「儀式をせずに食おうとするからだア」

「ぎ、儀式・・・ですか？ と、ミサカはチョップでは有り得ない衝撃を喰らった頭を擦

りながら聞き返します」

「手を合わせんだよ」

「オイ、上条。気になってたんだが、何でお前は人を止める時Tubeになるんだア？」

「良いだろ？ 別に」

「これで・・・どうするんですか？ と、ミサカは」

「それでは皆さん手を合わせて・・・！」

「ミサカは既に準備完了です」

「ほい」

「はいな！」

「「いただきます!!」」

「い、いただきます!!」

——食事後。

「そういえばさ」

「なんだ？」

「妹達の実験を続けるのはいいとして、俺達だけじゃ無理じゃね？」

「そこは我々妹達にお任せください。初めは難しいですが、実験が続けば続くほど人員は増えるので」

「なるほど。フルトン傭兵みたいにするわけねエ」

「フルトンて……」

「MGSですか」

これが、上条達の絶対能力進化実験の初めの第一歩だった。

閃光の舞姫&動画投稿者 “ENE”

——五月。人間が怠惰になるこの季節に、元気が有り余る少女が居た。

「ふっふーん」

「偉そうにしてるが、そんなに強いのか？」

「あつたり前じゃない！ これに関しては当麻よりもうまい自信があるわよー！」

偉そうにふんぞり返っている貴音だが、威張っている内容はオンラインゲームの物であり、上条はどうでもいいだろうそんな物。と思っている。ただし、オンラインゲームとは言っても流石は学園都市。ゲームセンターの台で対戦さえできるという使用だ。

「へえ。で？ 何だっけハンドルネーム」

「ENEよ。ENE！ 学園内二位の実力なんだから！ 百万人の中の二位よー！」

「二三〇万の中の一位が友人にいるだろうが」

「そんな事はどうでもいいの！」

「良くねーだろ。って言うかお前そのハンネ好きだな。動画録画してる時もそのハンネだったよな」

「う、うぐっ」

「えのもとたかねの最初と最後をとってエネ。か……。お前センスなさ過ぎだろ」

「いいじゃないの！……そこまで言うんだつたら見せて上げるわ！ 閃光の舞姫。エネの実力をね！」

「ヤダよ」

「なんで！」

「どうせアレだろ？ 俺にお前と対戦しろって言うんだろ？ 面倒だからヤダ」

「負けるのが怖いんでしょお〜」

「勝つても得るものがないだろ」

「じ、じゃあ！ アンタが勝つたら当麻の事ご主人様って呼んで何でも言うこと聞いて上げるわよ〜」

「いや、別に要らないし。……でもそうだな。自分をかけるほど勝つ気満々なら。それはそれで面白そうじゃねエか」

「ふっふっふっ。勝つわよ」

「……ゲームセンター」。

「何そのカード」

「え？ 登録者用カード。装備とか色々あるのよ」

「へえ」

「アンタはゲストで十分じゃない？」

「かもな」

上条はスナイパーライフルを選択する。と、コントローラーが選んだ銃の形に変化した。

「へえ。ここまで学園都市の科学力は発展してんのか」

「まあ、学園都市だしね」

そういう貴音はマシンガンの二丁拳銃だった。

「反動とか大丈夫なのか？」

「ゲームのコントローラーよこれは」

「そうか」

そしてゲームが始まった。貴音の画面は忙しく動くのに対し、上条の画面はゆっくりと少しずつ動いていく。

（スコアは当麻の方が上！ 負けるのはイヤッ！ いや、別に負けても良いけど・・・）
（簡単だなーこれ。何でこんなゲームに皆夢中になるんだろ。現実で掃除してた方が楽しいだろうに）

最終スコア【t o u m a W I N N E R！】

「うがああああ！ 負けたああああ」

「簡単だな。このゲーム」

「う、うう・・・」

集まっていた周りもぎざぎざとし始める。帰り支度を始めている者もいるのだろう。

「あ、別にあの罰ゲーム無効で良いから。どうせやつても意味ないだろうし」

「なッ!?」(コイツは、またそうやってムカつくことを！ 記憶を失ってもアンタはアンタかつ！)

色んな意味で悔しがる貴音を置いて、上条は家に帰ろうとしていた。

「あ、悪い。貴音、仕事が入った」

「え。ああ、そうですか。では私は趣味をして帰ります」

「オツケー」

——廃墟ビルの上。

「で？ 内容は」

『つい最近落ちた船のことを覚えているか？』

「あー。確か八十八の奇蹟。オリオン号だっけか」

『その真実を隠してくれ』

「真実を？」

『あのオリオン号は出発した時と着陸した時で人数が変わっている』

「ハア？」

『八十八人乗っていた乗員乗客は八十九人に増え、一人。オリオン号の機長が……死んだ』

「奇蹟を起こした張本人が死んで、讃えられることもないってか？　でもだったらその事実を公表した方が良いんじゃないか？」

『そういう考えの者がいる。その組織を潰してほしい』

「いや、だから」

『今更公表して、誰が喜ぶと言うんだ？　全員助かったと世間は盛り上がっていたし、死体もない。例えご家族も、公表したら何故公表したと言い、公表しなかったらひた隠しにしてと恨むだろう』

「ならいつそ、多数派に合わせるといった所か」

『不満か？』

「いや？　民主主義派な人間の良くやることだ」

上条は了解と仕事内容に頷いて闇の中に消えていく。

一方貴音は、カメラを片手に髪を青く染め、顔に電極を貼り付けて歩いていった。

「ういゝ」

「あ、あの・・・」

「にゅ？」

「エ、エネさんですか？」

「何故私の名を!？」

「あ、有名だから・・・」

・・・近くのベンチ。

「はあ、鳴護アリサさんですか・・・」

「うん。エネさんってすごいよね。歌ったり踊ったり実況したり・・・」

「そういう事をやりたいからやってるんですよ。アリサちゃんも何かやってみたら？」

「何ができるのかな・・・」

「とりあえず、歌ってみる？」

歌姫を歌に導いていた。

拳銃の発砲音が響く。構成員は全員脱落。そして、

「お前も暗部か？」

「結局、私はここまででつてわけよ」

一人の少女を前に上条は立っていた。

「答えろ」

「貴方、黒皇龍さんよね。私じゃ絶対敵わない。裏じゃ任務失敗は死を意味するって知らない？ 余計なことば喋らないでつてわけ」

「じゃあ、俺の方に来るか？ 賃金は弾むぜ？」

「黒皇龍の下に？ 嬉しいお誘いね。情報を話したら殺すなんて事されちゃうわけ？」

「いんや。珍しい物体^ア移動^{ホト}の持ち主だからな。殺すのは勿体ない」

「……生かしてもらえるの？」

「当たり前だ」

「……失敗したら殺されるとか」

「ないない。こつちでカバーする」

「……そつちに行くつてわけよ！ これからよろしくお願いしますりーダー！」

「おう」

と、そこで上条は一瞬で学生服に着替える。その腕には風紀委員^{ジャッジメント}の腕章がしてあった。

「リーダー？」

「少しの間だけ上条でよろしく」

「り、了解！」

「上条くん！ 大丈夫!？」

「俺も今来たところだ」

風紀委員が何人かやってくる。

「あれ。貴音さんは？」

「流石にいつも一緒じゃないですよ」

「そ、そうなの？ あんなに仲良しなのに・・・」

「余計なお世話です」

事後処理に追われたが、なんとか上条と少女は解放された。

「リーダーは風紀委員なの？」

「ああ。裏の仕事で事件現場に良く居合わせて、なおかつ解決してたりするからスカウトされた。貴音って言うのは俺達の組織のもう一人のメンバーな」

「へえー」

「そう言えばお前。名前は？」

「フレнда。フレндаⅡセイヴエルン！」

「よろしくな。フレンダ」

電腦少女 “エネ” 爆誕

——とある夏の日。

「あ．．．いや」

「うへへへ」

「お前マジでそういうのが好きなのか？」

「わかんねーな．．．」

「分かんなくて良いんだよ。俺はこういう子が好きなだけだから」

「どう見ても小学生だよね」

「テメエはロリコンか」

「「!?!」」

「よう糞餓鬼共」

「ジャツメン風紀委員よ」

「は？ 風紀委員？ 風紀委員つてのは校外に口出しできないんじやねーのかよ」

「ああ。確かに管轄外だぜ？」

「でもさ。こういう場面を見て放っておけてるのは」

「何か違うんじゃないの?」

そう言つて少年は不良達に近づいて、

「大人しくしといてくれよ? 警備員は呼んである」

一瞬で全員倒してしまつた。

「ふう……。よお、大丈夫か小学生」

「あ、ありがとうございます……。」

「当麻。警備員が来ますよ」

「お、そうか」

「名前。教えてもらえませんか……。」

「上条当麻だ」

「榎本貴音よ」

「風紀委員なんですよね……。?」

「なんで校外の事件に首を突っ込んでるか、だろ?」

「くくりと頷いた少女に上条はこう答えた。

「目の前で困つてる人がいて、手を伸ばせば助けられるなら。助けるしかねーだろ」

「……………!」

「ゲッ。当麻!」

「ん？」

「こらー！ またお前等じゃん!？」

「ゲツ。黄泉川！ じゃな！」

「黒子、白井黒子ですよ！」

「・・・じゃあな！ 黒子！」

「またね、黒子ちゃん！」

「こらー！ そこで待つ！」

「嫌だね!!」

警備員から逃げるように去って行った二人だった。

ちなみに、この日であった白井黒子という少女と上条達は暫く一緒に遊ぶことになるのだった。

「え？ 黒子ちゃん風紀委員になるの？」

「はい！」

「止めとけ止めとけ。馬車馬のように働かされるぞ」

「私達みたいな事してたら警備員に目をつけられるしね・・・」

——またある日。

「なあ。上条」

「ん？ なんだ？」

「お前、榎本先輩とどういう関係なんだよ」

「貴音先輩？ 親しい間柄ではあると思うぜ？ 確か義理の姉弟だったはずだから」

「名字が違うじゃねーか」

「確かに。でも養子だったはずなんだよな・・・覚えてないけど」

「ふーん」

少しづつ暑くなってきた七月の頃。上条はクラスメイトから質問攻めにされていた。

一年生の上条当麻が二年生の榎本貴音と仲良く下校していた。という噂が原因だった。

ちなみに本日この中学校の二年生は外で能力の計測中だ。

「貴音え〜聞いたわよお」

「え。な、なにを？」

「一年坊主と仲良く下校デートしてたんでしょ？ どんな関係なのよ」

「え!? あ、え、えと・・・。っていうか！ どこ情報よそれ！」

「ええ〜？ 知りたい〜？」

「知りたいに決まってるでしょ！」

「あつはく教えて上げない」

「お・し・え・な・さ・き・いっ！」

貴音が追いかけた少女が逃げた先では、テレポーターがいた。その子にぶつかつたため、少女の演算がぶれる。変な演算をしたからか、本来飛ばせないはずのグラウンドの土を抉つて、貴音の頭上にテレポートさせていた。

「へ？」

「貴音え！ 避けて！」

「あ……」

それなりに固められたグラウンドの土は、かなりの質量を持つて貴音を押し潰した。教員は焦り、冥土ヘブンキヤンセラ帰しと呼ばれる名医がいる病院に少女を運ぶのであった。

——病院。

「ゲコ太ア！」

「病院内では静かにしてほしいね？ まあ今の君には何を言っても無駄だろうけど？」

「貴音は？ 貴音先輩はどうなってる！」

「一命は取り留めたね？ でも、聞いた限りじゃ相当な質量に押し潰されたみたいだからね？ 起きるかどうかは分からないよ？」

「・・・・・・・・・・」

心の準備は良いかな？ と、聞かれた上条は一度頷き『榎本貴音様』と書かれた病室に入る。

そこには、生命維持装置に入った貴音の姿があった。

「一応彼女自身に配慮して病院服のまま入れてるけどね？ 目を覚ます兆候は未だ見られていないんだよ？」

「・・・・・・・・早く起きやがれ。馬鹿音」

上条はその後、面会終了時間まで一緒にいた。

肩を落として家に帰ると、パソコンにメールが届いていた。

「メール？ 仕事か・・・・・・・・？」

確認のためメールを開いた上条。その瞬間彼のパソコンが一瞬フリーズする。

「ん？」

そして女子向けアニメの変身シーンのように、青いジャージの少女がデスクトップ上に表示された。

『初めまして・・・・・・・・ですね。ご主人。メール、開いてくれてありがとうございます。これから、このパソコンに住まわせてもらうことになりました。エネです。よろしくお願ひしますね』

「あ……貴音？」

『？』

「貴音だろ!! 流石の俺もその見た目と声じゃ間違えねえぞ!!」

『アハハ。前のご主人なら騙せたんですけどねえ』

「おい。それは何だ? 嫌がらせか?」

『ご主人と呼んで上げると言っただけでしょう? ご主人様』

「……ハア。不幸だ」

『こんな超絶プリティ電腦ガールを前に不幸だとはどういう事ですかあ!!』

「……いや。もうなんか前より騒がしい」

『かーっ! 腹立ちますね。イラツときましたよ。ご主人の秘蔵ファイル捨てておきましよう』

「待った待った待った!!」

上条はあわててマウスを握りファイルを移動する。

『大人しく捕まりなさい! 捨てておきますから!』

「嫌だね!」

数十分後……

「で・・・どうするんだよ。その姿」

『戻るんですかねえ』

「以前も、なんて言ってたから戻る方法は分かってるんじゃないの？」

『分かってるんですが・・・。まだその条件が整っていないんです』

「じゃあ条件とやらが整うまで」

『この姿というわけです』

「ハア・・・」

『そんな落ち込まないでくださいよう』

「風紀委員のメンバーにはなんて言えば良い」

『はて？ 何と言いましょう』

「どうにかしないと駄目だろ・・・」

上条当麻の `裏` `表`

裏

「貴様・・・統括理事会の狗が！」

「飼われてなどいないさ。俺を飼い慣らせるのは俺だけだ」

そう言った彼の首元では金の鐘がついたチョーカーが高い音を奏で揺れていた。

「全く、いくら掃除してもゴミは出る物だな」

「流石。人を人とも見ないその生き方には惚れ惚れするわ。結局リーダーの魅力はそこ

よね。まああくまで裏の顔なわけだけど」

彼の後続くベレー帽を被った少女はそう言った。

「なあ、フレンジ」

「何？」

「帰るのだから。寮の部屋アポートできない？」

「無茶言うなー!! 無茶すぎるってわけよ! そんな事出来たらそれこそ」

「超能力者だわな」

「どうせリーダーのことだから真に受けんなよとか言うんでしょ？」

「ご名答。さ、表に車が来てるだろうからそれで帰ろうぜ」

「・・・？ 車が来てる？」

研究所からでて上条達は道に出る。

「・・・まだ来てないのか？」

「？」

と、曲がり角を思い切りドリフトして出てきたスポーツカーがあった。

「うえ!？」

「おー。あれだあれ」

止まった車には誰も乗っていなかった。が、少女の声だけが響く。

『はいはいお待ちせしましたご主人！ 間に合いました!？』

「数十秒ほど遅刻だな」

『あっちゃーやっぱりですかあ！』

「り、リーダー？」

「さ、送ってくぜフレнда」

夜の街へ消えていった。スポーツカーだった。

ちなみに。上条達が乗ったスポーツカーはフェアレディZツインターボをモデルに

した改造車。時速四〇〇キロを叩き出す怪物である。コンピュータ制御で操縦ができればようになっており、エネがそのコンピュータの役目を果たすことで、普通のコンピュータでは不可能な複雑なコントロールさえ可能にする。タイヤは最新の超伝導リニアを使用しており、まあ要するに電気で動くエコカーである。

表

とあるコンビニ。

「か、金を出せ！」

「ヒイツ」

「このバッグに金を詰めろ！」

「はいはい。金じゃなくて首を出して、身ぐるみ詰めて投降しようね」

一瞬にして強盗の男の体が縦回転し、床に叩き付けられた。あまりの痛みに目を瞑ってしまった彼の体を、ゴムの銃弾が叩いた。

「能力者の強盗ってのは武器を持ってなくて楽だな。逮捕が」

「あ、あの・・・お客様？」

「安心してください。風紀委員です」

「・・・良かった・・・」

「ナイスだ少年!」

「はは・・・では」

男の手に手錠をかけて少年はコンビニを後にする。始末書を書きたくないため彼は逃亡した。

「逃げるが勝ちとはこの事よっ!」

「逃がすと思うの?」

「ゲツ。警備員・・・」

「はあ・・・。全く、毎度毎度良くもまあ規則を破って校外の事件に首を突っ込んでくれるじゃん」

「黄泉川・・・勘弁してくんねーかなあ?」

「お前みたいなのは一度甘やかすと駄目だって事は教師人生で学んでるじゃん。ほら、さっさと支部に戻って始末書を書くじゃん」

「くっ!」

「なにをしても無駄じゃん」

「それはどうかな!」

えいっ。という軽いかけ声とともに、黄泉川の胸が上条当麻によって鷲掴みにされ

る。

「ほう。なかなか良い物をお持ちで・・・」

「なっ!」

「じゃねえ〜!」

その行為によつて手が離されたため、自由になった上条は一瞬で遠くまで走つて行つた。

「逃げ足だけはピカイチじゃん」

「でも、ああいう人間が風紀委員だと対能力者の事件の時、役に立ちますよね」

「それで死にでもしたらこつちの責任じゃん。あいつもこの街に住む学生はみんなあなたらの教え子。死なせるわけにはいかないじゃん」

「そういうものですかねえ」

一方上条はさらに事件に首を突っ込んでいた。

「ねえねえお兄さん達イ。そんな事して楽しいかいっ!」

喝上げらしき行為を行っている不良生徒の股間を蹴り上げる。

「ガッ!」

「テメツ」

「風紀委員です。お掃除に参りました」

そう言つてにこやかに、彼は裝飾銃を乱射した。

「ガハツ・・・テムエが・・・あの・・・」

「あの、何？」

「無能力者の風紀委員・・・」

「なーんだ意外と有名なのね、俺」

上条は氣絶した生徒をもう一度踏みつけて、踵を返して歩き出す。

「あーあ。どこもかしこも変わらねえなあ。現実のままならねー、まるで週刊連載だぜ」
大げさに両手を広げて彼はそう言った。この世界を恨めしく、羨ましく見つめて。

表と裏

「・・・これが金だ。例のブツを頼む」

「慌てるなよ。これだ」

「ワントウスリーってか？ ベストホームかっつての」

「!?!」

「やあ怪しげな取り引きを行うお二人さん。風紀委員だぜ」

樂しそうに上条はハーデイスを構え、撃鉄を親指で倒す。

「その銃は……！」

「黒皇龍！」

「ん。なーんだ。裏の俺を知ってる人間か。じゃあ遠慮は要らねーか。俺の目の前で何やってんだ？ お前等は」

「あ、アンタには関係ない！」

「関係大ありだ。例えソレが個人的なスキャンダルだったとしても、数百万単位の金を動かせる代物ってわけだ。見過ごすわけには行かねーな。な、アンタだったらどう思うよ。もう一人のお仲間さん」

「くっ。気付いていたのか」

「俺に気付かれずに近寄りたかったら、宙を無音で来ることだ。それでも空気の流れで分かる可能性もあるけどな」

「くっ。これだけは！」

「何なのか言ってみろ。中身によっちゃ見逃してやれるかも知んねーぞ」

「データだよ」

「あつ、ちよ！」

「コイツの研究所がやらかした重大な失敗の」

「なにをした？」

「人身売買とかじゃない。電子機器の方だ」

「・・・？」

「新製品の開発データをコイツがおじやんにした瞬間が入ってるんだよ」

「・・・。。。しようもなっ」

「しかもこのスーツケースは上げ底で、入っているのは十数万程度だ」

「・・・。。。あほくさ」

上条は神々の義眼で嘘をついてないことを見破ってその場を去って行った。

「子どもらしからぬ事を言わせてもらうが、ちゃんと責任はとった方が良いと俺は思う

ぞ」

「・・・。。。うるさい」

「説教なんてのは大体そういう物だ」

ケラケラと笑って上条は大通りへと消えていった。

不登校児上条当麻の活躍

上条当麻は不登校児だった。だが、家においてもやることはなくなっておかつ暇なので、彼は良く外に出て事件を解決していたりした。

なぜ、不登校なのか。まあ学校生活が楽しくなくなつた。からだろう。

貴音の事故があつて、周りは上条に同情した。あれだけ仲が良かった少女は昏睡状態（表向き）なのだ。そうするのが当たり前だろう。だから上条も表面上気丈に振る舞つた。実際貴音は姿は変われど自分の傍にいてくれる。上条はそれだけでも笑つていられた。だが、周りの人間はそんな上条を見て、「悲しまないなんてサイテー」と言い出した。

流石の上条もキレた。

「サイテー!?! いつまでも悲しんでいたら良いつて言うのか!?! 悲しんでいたらずつと引きずつてるよキモチ悪いなんて言い出すんだらうお前等は!! 見せかけの善意で優しくして、感謝してたのに……。テメエらの言う『悲しまない俺』なんかよりよっぽどサイテーだと思つて。お前等は」

上条はそう言つて次の日から学校に行かずに、街を歩きながら事件に首を突っ込んで

いた。

そして、そんないつものある日。

「郵便局か・・・そろそろお金下ろしておくかな・・・」

と考へ彼は郵便局へ足を運ぶ。

お金を下ろそうとATMに並んでいる間に、入り口付近で話す少女達の会話が聞こえてくる。

「トキワダイって、あの常盤台ですか」

「ええと。学園都市に同名の学校はありませんから多分それかと」

「・・・・・・。ふええええええ。スゴイですねー」

「そ、そうですなの?」

(常盤台中学?)

上条は無事にATMからお金を下ろして郵便局を出ようとする。が、銃声かと思わず足を止めてしまった。

「・・・・?」

「お、おかしなマネすんなよ」

「きゃ・・・・!?」

「おっ、お客も、あんま騒がないでくれよな? もちろん逃げちやダメだぜ」

「あー。よう、何だよ。今郵便局にいるんだけど。は？ 携帯禁止？ 良いだろ別にんなの」

少年のその声に銃声が二発響く。固定電話で電話をしようとしていた係員と、少年の傍の壁にだ。

「おおお、おかしなマネすんなって言ったよな？ な、なんで分からないんだ？ みせしめにひ、一人くらい殺つといた方がいいのかな？ ねえ？」

その後すぐだった。男の後ろから近づいた少女が見事な動きで男を倒してしまった。だが、その後すぐ少女の悲鳴が響く。

「きゃあつ!!」

「チツ。何ガキにノされてんだ。クソがっ」

「あ？ 銃声？ 悲鳴？ んなもん郵便局強盗に遭ってるからに決まってるだろ？」

「テメエ！ 何余計な事言ってるんだ。これが見えないのか」

「ん？ ああ、お前がタンパク質の塊にナイフを向けてるって事か？ いや、もつと細か

く言えば水が60〜70%にタンパク質15〜20%脂肪13〜20%ミネラル5〜6%糖質1%その他の物質が6%だっけ？」

「オマ・・・」

「何にせよ電話の邪魔しないでくれるか？」

「貴方・・・人を人としてみてないの!？」

強盗事件の最中だというのも忘れて、現場に居合せた少女が声を上げる。

「んな事言つてねーだろ? そいつだつてその子のことコレなんていつてたじゃねーか」

「それ・・・は!」

「あー。でももう切つちまいやがつた。はいはい静かにしますよ」

「・・・で? そのガキ、オマエ風紀委員か? 他にもいるなら出てこい。後んなつて分かつたらこのガキ・・・」

「・・・」

「二人か。チツガキにノされやがつて。・・・仕方ないな。そのバッグの中には工具が入つて、それでATM取り外せ」

「・・・なあ。もしかしてオマエ金がほしいの?」

「ああ? またオマエか。そうだが」

「何のためにさ。奨学金はちゃんと入つてはるはずだろ? 何のために金が必要になるんだよ。ちゃんと考えて生活しないからそうなるんだぜ?」

「うるせーな。センコーかよオマエは!」

「違えよ。俺は警備員じゃねえ。風紀委員だぜ!」

どこからともなく銃を引き抜くと同時、上条はそれを撃った。躊躇なく。そしてそれは相手のナイフを飛ばし、額を撃ち抜いた。

「ガッ……」

その瞬間で少女は解放された。

「テメエ……」

「なんだーい？」

「聞いたことがあるぜ。無能力レベルゼロの風紀委員。警備員が使うゴム弾を拳銃で撃つっていう

そういうのをな」

「あらら。バレてる？」

「ってこたあテメエも風紀委員だつてわけだ。なんで黙ってた」

「俺としちゃ俺以外の人間がどうなるうが関係ないし？ 捕まって殺人罪になるのは

そっちだからさ。別に良いかなって。バレなきゃ問題じゃねーんだよ」

上条はその手に持った銃弾を一度全て地面に落とす。

「何のつもりだ」

「こういうつもり」

上条が笑って取り出したのは一発だけ金属の弾頭が混じったスピードローダーだった。

「ロシアンルーレットと行こうぜ」

それを込めた後、彼はシリンドラーを回転させた装飾銃を下に向けたまま口を開く。

「さて、じゃあ撃ち抜こうか」

「お、おい……」

「せいやっ」

そんな軽いかけ声と共に銃弾が撃ち出された。

「ガッ！」

左胸に当たったそれは、ゴム弾だった。

「……………」

不満そうな顔をした上条はさらに続けて一発、二発と男に向けて撃っていく。

最後の一発を残すのみ、後は全部ゴム弾だった。

「チッ。運の良い奴だな。お前」

「このっ！」

「鉄球？」

イコルスピード

絶対等速。投げた物体は能力を解除するか投げた物が壊れるまで何があろうと同じ速度で進み続ける力だ。

だが、

「鉄球なんて投げても意味ねーだろ」

上条は右手でそれを軽く振り払った。

「なっ」

「さて、最後の一発。もう何が撃ち出されるか、分かってるな？」

「・・・撃つ気か!?!」

「アデュー」

またも軽いかげ声で撃ち出された銃弾は、男の胸の中心に当たり赤い液体を床に散らした。

後で分かったことだが、それはペイントで麻酔が塗られた銃弾だったようだ。

外に出るとロクな事がねーな。と言いながら上条は外に出た瞬間。警備員の特殊車両を見つけて逃げ出した。

「こらー待つじやん! またお前が関わってんのか!」

「あーもう。不幸だあああああ!!」

事件の後の鬼ごっこはほんの少しの間だけ続いていた。

超能力者 御坂美琴

「キミ可愛いねー。うひよー しかも常盤台じゃん!!」

「今からオレ達と遊び行かない?」

「帰りはオレ達が送ってやつから」

「まっ、いつ帰れっかはわかんねーけどさ」

「ヒアツヒアツ」

「ふ——」(私に声かけてくるなんてバカな連中ね……。まあ、あんまりしつこいようなら電撃くらわせて追っばらえばいいか。しっかしま……。)

周りの人間は不良に絡まれている少女がいる状況に我関せずといった様子で歩いていた。

(おっ 目が合った)

「……」フイツ

(アハハ そりゃそっか。別に彼らが薄情って訳じゃない。分かってる)

「ナニ見てんだよ」

「えっ……僕!？」

(実際ここに割って入ってきてても何かできる訳じやなし。ケガをするだけだ。誰だっ
自分がカワイイ、それがフツー。見ず知らずの人間のためにそんな事をするヤツがいた
としたら、ソイツはただのバカか——)

「なあ、邪魔だ。退けよ」

(——よほどのお人好し……ってあれ?)

少女を助けに入ったわけではなく、路地裏から出てきた少年は不良達を睨みつけてそ
う言った。

「何だテメエ」

「文句あんのか?」

「は? 文句。大ありだ。こんな所でたまってんなよ邪魔だ」

「ハア?」

「文句の内容言っただけでハア? とか耳が遠いのか? それとも更年期障害ですか?
?」

「テツメエ」

「邪魔だ」

少年はそう言うのと裝飾銃を撃った。

ただし、それは銃弾の軌跡さえ見えない速度で反対側のビルの壁に穴を開けた。

「なっ……!!?」

「電磁銃レールガンって名前ぐらいは聞いたことがあるんじゃないの?」

「レールガンッ!?!」

「ああ安心しろ。俺は電撃使いじゃねーから。これは細胞放電現象って言うらしい。ナノマシンと細胞核が結合して電気エネルギーが発生する現象だと。まあつまり、どっちにしろ科学的なレールガンなのは違いねーけどな」

そういう彼の体からはバチバチ電気が走っていた。

「……やっぱリテメエ。こいつ助けに来たんだろ」

「……は? 中学生の子供ガキじゃねーか」

「」

「まさかお前等。こんなガキを相手にするのに大人数で囲んでたのか? 情けねー」

「」

「アレですか。ロリコンですか? あんたらは」

「よーしコイツ砂にしちまうべ」

「い……いや、ちよつと待て。なんか様子が変……」

少女の髪が上条の体と同じように帯電し始める。

「ムカつくな。お前等みたいな群れなきやガキも相手にできねーようなのを見てると」

「私が一番ムカつくのは・・・、オマエだあああああああッ!!」

「「ギャウツ」」

その場を高電流の雷撃が襲った。

「こ・・・高位能力者の方でしたか・・・」

「あ——。こんな雑魚ザコ共に能力使っちゃ・・・」

「つぶね——。何だア？ 今の」

「・・・？」

「確か電気がビリビリって・・・。何者だオマエッ！」

「それはこっちのセリフよっ！ 何でアンタだけ無傷なわけ！」

「っーか何で俺まで攻撃？ 何もしてねーだろ！」

「うっさいっ！」

と、そこで何かを思いついたように少女の髪から紫電が少年に飛んだ。だが、

「おわっ」

少年のかざした右手で打ち消された。

（私の電撃を打ち消した？）「アンタ何者？ 何よその能力」

「いや、何て言うか。能力と言っているのか・・・。身体検査システムスキャンでは無能力者レベルゼロ”って判定

「なんだけど」

「能力・・・ゼロ？ そんなはずが・・・あ・・・あれ？」

「逃げるんだよお」

「あっ」

「退け退け！」

「こらっ。待ちなさいよ!!」



——一ヶ月後のコンビニ。

《暗証番号が違イマス》

「は？ いや、そんなはずは」

《暗証番号が違イマス》

「何でだ——ッ!?!」

上条は持ち前の不幸にて、コンビニでお金を下ろせていなかった。

《暗証番号が違イマス》

「ああもうっこうなったら別のコンビニで・・・」

と、上条は気付いていないがちやちな音楽と共にコンビニの自動ドアが開く。

「ギャ——！　今度はカードが飲み込まれて出て来ないくくくくくく」

「

不幸だあーっ!!」

／いらっしやいませ——／

「久しぶりね」

「ゲツ。ビリビリ中学生」

またここに偶然の再会を果たした二人の男女がいた。

「この間以来毎回毎回テキトーにあしらわれてきたけど……今日という今日は、決着をつけてやるんだからっ!!」

「あ——」。カードが無いと再発行されるまで無一文に。冷蔵庫の中はカラッポだし。やっぱ買い溜めしとかなないとダメだなあ」

「私を無視すんなーっ!!」

少女がATMの側面を殴ると、上条のキャッシュカードが出てくる。

「で……。出たあ~~~~。サンキュービリビリ!!」

「ビリビリじゃなくて御坂美琴っ!!」

「正直何でこんなのに関わっちゃったんだろうって思ってたけど、今初めてこの出会い

に感謝……」

「アンタねえ」

現金なことを言う上条の横で殴られたATMが警報音を鳴らし出した。

「不幸だあああああああ」

——どこかの河川敷。

「う——」。故障とかしてないと良いなあ。防犯カメラに顔映ってるだろうし。はあ……。って、俺は何もしていないのに何で逃げてんだ？」

「んな事は良いから、勝負しなさいよ勝負」

「勝負って……。今までお前の全戦全敗じゃんか」

「うっ、うるさい私だつて一発も食らつてないんだから負けてないわよっ」

「じゃあどうしたら終わるんだよ？」

「え？ そ……そりやもちろん………私が勝ったらよ」

「はあ——」

「そこっ!! さつきより大きい溜息しないっ!!」

「……分かったよ。それで気が済むってんなら、相手になつてやるよ。早く終わりにしたい」

「ようやくやる気になったみたいね」

河川敷に少し離れて向かい合った二人。

「いつでもいいぜ。かかってきな」

「言われなくてもこっちはずっとこの時を待ってたんだからっ」

美琴の髪から電撃が迸る。が、上条はその電流を右手でかき消して前に駆け出した。

「!?」

「浅草ぐらいまで飛ばしてやるよ」

「このっ」

苦し紛れに美琴が放った蹴り。その威力を上条は利用し、彼女の体を大きく吹き飛ばした。

「居合い払い『奈情嶺』」

と、

「ちよつとやり過ぎたかも……。あいつの姿見えねーし……。マジで浅草まで飛んでねーだろーな!」

少し不安になる上条だった。が、気にしてもしょうがないとその日は家に帰る事にした。

禁書目録編

電脳少女は幻想に寄り添う AI, Imaginar

y, Girl.

「……いや、こんなモンだつてことは分かつてんだけど、分かつてんだけどさあ」
『ちよつ！ ご主人にこんな『幸運』があるわけないじゃないですか！ 絶対的な不幸を
持つご主人が、幸運に恵まれるわけが無いでしょう！』
「どうしてそこまで人の不幸を笑うことができるのかね!？」

七月二〇日、夏休み初日。

エアコンが壊れてうだるような熱気が支配する『学園都市』の学生寮の一室で上条当
麻は絶句した。

どうも昨日の夜中に雷が落ちたらしく電化製品の八割が殺られていて、それは冷蔵庫
の中身が全滅している事を意味していた。非常食のカップ焼きそばを食べようとした
ら中身を流し台にぶちまけ、仕方が無いから外食をしようとサイフを探している内に
キヤツシユカードで転倒、机で後頭部を強打。

しかもふて寝の二度寝の泣き寝入りを電脳少女に叩き起こされたと思つたら『上条ちやーん。今日から補習ですよー♪』との担任からの連絡網。^{ラブコール}

天気予報みたいに流れるテレビの星占いなんてこんなモンだとは思うが、ここまで来るともはや笑いも起こらない。

『ご主人頭は良いんですけどねえ。記録術の単位でしょうか・・・?』

「記録術ね・・・ハハ・・・」

壁に掛けられたディスプレイの中を飛び回る少女、エネに上条は悲しそうな顔で言う。

占いは必ず外れ、おまじないは成功した例がない。それが上条当麻の日常だ。この素敵なぐらいに運に見放された体質は一族に伝わるモノかと思いきや、父は宝くじで四等をゲットし、母はジュースの自販機のルーレットで当たりを引けて止まらないのだった。

結論を言うと、上条当麻は不幸だった。

なんていうか、もうギャグとして消化しても大丈夫なレベルの。

上条は運に頼らない。それはつまり行動力が高いという事を意味していた。

「・・・さて、っと。目下の問題は冷蔵庫ぐらいなものか。無いと食材が冷やせねえ」
バリバリと頭をかきながら上条は部屋を見渡す。

『ネットで安売りしているところを探しましょうか?』

エネがネットショッピングサイトを開いて見せているように、問題は冷蔵庫——というか明日からの朝ご飯だった。夏休みの補習、なんて言ってもどうせ能力開発の補習なんて錠剤か粉薬を飲むに決まってる。流石に空腹はまずかろう。

学校の帰りに電化製品屋寄るかー、と上条はパジャマ代わりのTシャツを脱いで夏服に着替える。

「いい天気だし、布団でも干しとくかなー」

『この季節はいきなりの夕立が怖いですね? ご主人』

ベランダと言っても高い場所から綺麗な景色が拝める訳ではなく、そこから二メートルもない先には隣のビルの壁があるのだった。

「不吉な事言うなつての。あーあ、空はこんな青いにお先は真つ暗♪」

『私は青いですよーご主人♪』

「……っつかマジで夕立とか降ったりしねーだろーな?」

少女のポケを完全にスルーし上条は器用に足で、ベランダへ繋がる網戸を開けベランダへ向かう。と、すでに白い布団が干してあるのが見えた。

「?」

『……?』

学生寮と言っても造りはまんまワンルームマンションなので、上条は一人暮らしだ。（エネは除く）なので、この部屋でペランダの手すりに布団をひっかけるような人物は上条当麻以外に存在しない。

なので、よくよく見れば布団なんて干してなかった。

干してあったのは白い服を着た女の子だった。

「はあ!？」

両手で抱えていた布団が手を離れる。それを無意識に足で蹴り上げ、元の手元に持ち上げる上条。

謎だ。しかも意味不明だ。女の子は、なんか鉄棒の上でぐったりバテてるみたいに、腰の辺りにペランダの手すりを押し付け、体を折り曲げて両手両足をだらりと真下に下げている。

歳は……十四か、十五か。上条より一つ二つ年下という感じ。外国人らしく、肌は純白で髪の毛も白髪——じゃなくて銀髪だろう。かなり長いらしく、逆さになった頭を完全に覆い隠して顔が見えないくらいだった。おそらく腰ぐらゐまで伸びているんじゃないだろうか？

そして服装は、

「シスターさん……かな？」

『白いですね』

修道服？　とでも言うのか。教会のシスターが着てそうなアレだ。足首まである長いワンピースに見えなくもない服に、頭には帽子とはちよつと違う、一枚布のフード。ただし、一般の修道服が『漆黑』であるのに対し、女の子のそれは『純白』だった。おそらくシルクじゃないだろうか？　さらに衣服の要所要所には金糸の刺繍が織り込まれている。

と、そこまで見た上条とエネの意見は一致する。

『「禁書目録か」ですね』

ピクン、と女の子の綺麗な指先が動いた。

だらりと下がった首が、ゆらりと上がる。絹糸のような銀髪がサラリと左右に別れ、上条の方を向いた少女の顔が長い長い髪の隙間から、カーテンでも開くように現れる。

「ア、――」

女の子の、可愛らしいけどちよつと乾いた唇がゆつくりと動いた。

思わず上条は後ろのエネに助けを求めるが、少女はディスプレイの中でさらにファイルの中に逃げていた。

「あの・・・」

「テメエ。人見知りか!?　ンなんじゃねーだろ！　さっさとフォルダから出てこいっ

！」

『だが断る！』

「あのっ」

聞こえてきた第三者の声はまぎれもなく日本語だった。

「・・・」

一瞬。上条とエネは耳を疑った。そう聞こえる単語があるのかとも思った。

しかし現実はず違った。

「あの・・・おなががへったので、何か食べさせてください。お願いします」

「ナニ？ ひよつとしてこの状況でアナタは自分は行き倒れですとかおっしゃるつもり

でせうか？」

「倒れ死にとも言いかもしれないですね」

超日本語ペラペラ少女だった。

『ご主人』

「・・・はいはい」

上条は忌々しげに呟くと、器用にペランダの手すりをびよこつと越えた少女に、テーブルの上の焼きそばパンを放る。すると少女は、ラップを丁寧に解き、優しく口に含み始めた。それを横目に見た上条は、とりあえずとりわけ大丈夫そうな食材を冷蔵庫から

より分け、なんとなくでサラダを作り始める。上条は野菜が生きてて良かったーなどと呑気なことを呟いていたりする。

こうして、今日も上条の一日は遅刻の可能性と共に不幸から始まっていく。

「まずは自己紹介をしなくちゃいけないかな？」

「……………いや、まずは何であんなトコに干してあったのか——」

「私の名前はインデックスと申します」

「誰がどう聞いても偽名じゃねーか！ 大体何だインデックスって！ 『目次』かお前は——」

「見て分かってるかもしれないけど、教会の者です、ここ重要。あ、バチカンの方じゃないかってイギリス清教の方だね」

「意味分かんねーしこっちの質問は無視かよ!？」

「うーん。禁書目録インデックスの事なんだけど。あ、魔法名なら D e d i c a t u s 5 4 5 だね」

「……………エネ」

『……………一〇万三〇〇〇冊を有する魔道書図書館……………禁書目録であっているそうです……………』

「・・・チツ」

ヘッドセット越しにエネの話を聞いた上条が、頭をガシガシかいているとインデックスはボケーッとそれなりに不満そうに上条を見つめていた。

「で？ お前は何だつて家のベランダに干されてた訳？」

味がほぼ壊滅的な野菜炒めにしよう油をぶち込みながら上条は少女に向かって言うてみる。

「干してあつた訳じゃないんだよ？」

「じゃあ何なんだよ？ まさか追われてたから飛び移ろうとしましたーとかか？」

ハハ笑えねエ。と上条が言いかけた途端少女は

「よく分かったね」

そう言った。

この辺りは安い学生寮が立ち並ぶ一角だ。八階建ての同じようなビルがずらっと並んでいて、ベランダを見れば分かる通りビルとビルの隙間は二メートルぐらいしかない。確かに、走り幅跳びの要領で屋上から屋上へ飛び移る事もできると思いが・・・。

「でも、八階だけ？ 一歩間違えれば地獄行きじゃねーか・・・って追われてたのか」

「うんそうだね。でもそうするしかなかったんだよ」

そうかそうか、と上条は頷きながらインテックス用にさらに作った野菜炒め（有毒）をインテックスの前に差し出した。

ま、食えない事もないだろ。と思う上条にエネは呆れ呆れだった。

上条当麻はエネがパソコンのディスプレイにいるのを確認すると、インテックスに向き直る。

「——で、追われてるって。お前は一体ナニに追われてる訳？」

上条は一番のネックを聞いた。

いくらなんでも、出会って三〇分も経たない女の子に地獄の底までついていく、とまでは思わない。

かと言って、このまま何もなかった事にするのは、おそらく無理だ。

結局は偽善使用フオックススイートいだよな、と上条は思う。何の解決のものならないと分かっている、上条は首を突っ込んでしまう。

「うん………」

ちよつと喉が渴いたような声で、

「なんだろうね？」
ロゼンクローイツ 薔薇十字かS.M.黄金夜明か。その手の集団だとは思わんだけど、名前まで分からないかも。……連中、名前に意味を見出すような人達じゃないから

「連中？」

上条は神妙に聞く。という事は、相手は集団で、組織だ。

うん、と当の追われるインデックスの方がかえって冷静な風に、

「魔術結社だよ」

.....。

「はあ。まじゆつつて.....、『そっち』系かよ.....アレだろ？ 魔力とか消費して体力回復したりするんだろ？」

「む。なんか語弊があるみたいだけど。まあその通りかも」

「.....」。ゴメン、無理だ。魔術は無理だよ。俺も発火能力とか透視能力とか色々『異能の力』は知ってるけど、魔術は無理だ」

「.....?」

インデックスは小さく首を傾げた。

おそらく科学万能主義の常識人なら『世の中に不思議な事なんて何も無いっ！』と否定されると思っていただろう。

だけど、上条の右手には『異能の力』が宿っている。

イマジナリー幻想殺しと名乗る、それが常識の外にある『異能の力』であるならば、たとえ神話に出てくる神様の奇跡システムでさえも一撃で打ち消す事のできる力を。

「学園都市こじや超能力なんて珍しくもねーんだ。人間の脳こなんざ静脈にエスペリン打つ

て首に電極貼り付けて、イヤホンでリズム刻めば誰だつて回路開いて『開発』できちまう。一切合財が科学で説明できちまうんじや誰だつて認めて当然だろ?」

「・・・・・・・・よくわかんない」

『簡単に言うつとですね。普通の人間の脳の仕組みを無理やり超能力が使える仕組みに変えるつてというのが、学園都市のまちでは当然なんです』

上条の説明にエネが付け足しを加える。

「・・・・・・・・。じゃあ、魔術は? 魔術だつて当然だよ?」

むすつと。お前ん家のペットは駄ネコだとか言われたように、インデックスはふてくされた。

「えーつと。例えばジャンケンつてあるだろ? つてか、ジャンケンつて世界共通?」

「・・・・・・・・、日本文化だと思ふけど、知ってる」

「じゃあジャンケンを一〇回やつて一〇回連続負けた。そこになんか理由があると思ふか?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・、む」

「ないよな? けど、そこになんかあるつて考えちまうのが人間なのさ」

上条はつまらなそうに、

「自分がこんな連続で負けるはずがない。そこにはきつと見えない法則ルールがあるはずだ。

そんな風に考える人間の頭ん中に、例えば『星占い』を混ぜたらどうなっちゃう?」

「………、巨蟹宮かにざぎのあなたはついてないから勝負はやめておけ、とか?」

「そ。ウチらの間じや、非現実オカルトの正体はソレなんだ。運とかツキとか、見えない歯車ルーラーを夢見る瞬間。ただの偶然なんてちっぽけな現実を、エライ必然と勘違いする心。それが、非現実オカルトさ」

インデックスはしばらく不機嫌なネコみたいにむすーつとしていたが、

「……頭ごごなしに否定するって訳でもないんだね」

「ああ。だからこそ、真剣に考えてるからこそ、カビ臭い昔話はダメなんだ。絵本に出てくる魔術師なんて信じられない。MP消費で死人が復活するってんなら誰も育脳かいはつなんかやんねーしな。まったくもって『科学ゲンジツ』と無関係な代物オカルトは、やっぱり俺でも信じらんねーよ」

超能力なんて代物が『不思議』に見えてしまうのは、人間が単にバカだからで。

本当は、やっぱり超能力さえ『科学』で説明できてしまうというのが、ここでの常識なのだ。

「……、けど。魔術はあるもん」

むーつと口を尖らせながらインデックスは言う。おそらく、彼女にとって心を支え

る柱のようなモノなんだろう、上条の『幻想殺し』や『電脳少女』と同じく。

「まあ良いけど。で、何でソイツらがお前を狙ってるって——」

「魔術はあるもん」

「……」

「魔術はあるもん！」

どうやら意地でも認めて欲しいみたいだった。

「じゃ、じゃあ魔術って何なんだよ。手から炎が出るのか、ウチの時間割を受けなくても出せんのかあ？ なんならここで一丁見せてくれよ。そしたら信じる事が出来るかも知んないから」

「魔力が無いから、私には使えないの」

「……」

カメラがあると気が散るのでスプーンを曲げられません、というダメ能力者を見た気がした。

「じゃあ、仮に魔術なんてモノがあるととして、」

「仮に？」

「あるとして、」

上条は無視して続けた。

「お前がそんな連中に狙われてる理由ってのは何なんだよ？ その服装となんか関係あつたりするの？」

上条の言ってるのは、インデックスの着ている純白のシルク地に金糸の刺繍という超豪華な修道服の事だ。日本語に変換すると『宗教がらみ？』と言いたい。

「……私は、禁書目録だから」

「うん？」

「私の持つてる、一〇万三〇〇〇冊の魔道書。きつとそれが連中の狙いだと思う」

「……、『魔道書』ってあれだろ？ エイボンの書とかソロモンの小さな鍵とか、ネームレス、食人祭祀書、死者の書。えーとあと死霊術書か、でもアレって確か偽書が多いって聞いたような……」

『そうですね。死霊術書は確かに偽書が多く当てにならないそうです』

「そうか。そんな話は置いといてー。そう言った『魔道書』をお前が持つてるつてのかわか？ 急に詳しくなったね。魔術に関して詳しくかつたりする……？ もしそうならさつきまでのお話は無駄な戦いだつたり……」

心配そうに尋ねてくるインデックス。それを上条は何を今更といった調子で、
「あれくらいは嘘。見抜けるようになりませうぜ？ インデックスさんよ」

「……そんなに超能力って素晴らしいの？ ちょっと特別な力を持つてるからって、人

を小馬鹿にしていいはずがないんだよ」

.....

「ま、そりゃそーだわな」

上条は小さく息をつき、

「そりゃそーだ。お前の言う通りだよ。こんな一発芸を持つてる程度で、誰かの上に立てるだなんて考え方は間違ってる」

上条は自分の右手に視線を落とした。

そこには力が宿ってる。発動時には閃光も起きないし、ド派手な爆発が起きる訳でもない。

だが、それでも上条の右手はあらゆる『異能の力』を無力化できる。力の善悪は問わず、神話に出てくる神の奇跡システムさえ、問答無用で。

「ま、この街に住んでる人間ってな能力持ってる事が一個の心の支えパーソナリティになってっから、その辺は大目に見て欲しいかな。ってか、俺も能力者そーゆーのの一人なんだけど」

「そーだよバカ、ふん。頭の中いじくり回さなくなっただってスプーンぐらい手で曲げられるもん」

「.....」

『どこかで聞いた台詞ですね、ご主人』

「ふんふん。天然素材を捨てた合成着色男のどこが偉いつてーのさー、ふん」

「……、ナメたプライドごと口を封じて構わねーか？」

「て、暴力には屈しないもん」ふん、と不機嫌な猫みたいなインデックス。「だ、大体、超能力だなんて言つて、君には一体何ができるつていうの？」

「……、えつと。何がつて言うか」

上条はちよつと戸惑つた。

自分の幻想殺しについて、誰かに説明する機会は滅多にない。しかも『異能の力』にしか反応しないという事は、まず『異能や超能力』について知ってもらわないと説明にならない。

「えつとな、この右手。あ、ちなみに俺のは合成着色ドーピングじゃなくて天然素材うまれたときからなんだけど」

「うん」

「この右手で触ると……それが異能の力なら、原爆級の火炎の塊だろうが戦略級の超電磁砲レールガンだろうが、神様の奇跡システムだつて打ち消せます、はい」

「えー？」

「んだよ。自分のことは信じてほしいのに相手のことは信じねーのか。でもまあいいさ。魔術つてのはすげーんだな」

「絶対信じてないよね!? その面倒くさそうな顔は!」

「じゃあどうすればオマエは俺が魔術があると言うことを認めたと証明してくれるんでせうか!」

「じゃ、じゃあ・・・」

インデックスはおもむろに台所へ行くと、包丁を取り出してきた。

「これで私のおなかを思い切り刺してみろ!」

「・・・・・・は?」

『やめときなさいご主人。少女殺人未遂とか下手したら殺人罪ですよ?』

「大丈夫私には傷一つつかないから!」

「嘘おっしやい」

上条は包丁を持ったインデックスを押しつけるように、両手でインデックスの肩を押した。

その瞬間。

インデックスのまもっていた修道服がその布地を縫っている糸という糸が綺麗にほどけて、ただの布地に逆戻りした。

つまり、インデックスが身にまもっていた修道服がストンと落ちた。

『・・・・・・ご主人。グッジョブ』

「痛ってえ………。人にかみつくんじやねーよ。つたく……」

体中に歯形を作った上条が不満げにそう言葉を漏らした。言いつつ彼は巨大な安全ピンでインデックスの修道服を仮止めする。そこから縫い直そうと思った矢先、インデックスが横からかつさらった。

何十本もの安全ピンがキラキラ光る修道服を。

「えっと、着るのか?」

「………」

「着るのか、そのアイアンメイデン?」

『日本語では針もむしろとも言います!』

「……う、ううううううう!!」

ふとした瞬間に、上条はガタツと音を立てる。びっくりしてインデックスとエネは上条の方を向く。

「うわっ! そーだ補習だ補習!」

上条は携帯電話の時計を眺めて、

「えっと、あー……俺これから学校行かなきゃなんないけど、お前どーすんの? ここに残るんならカギ渡すけど」

「………私はおいとまするよ」

インデックスはすつと立ち上がると、玄関の方に向かってスタスタと歩いていく。

「は？ いや、ここに居ろよ。敵が彷徨いてんだろ？ だったら家に・・・」

そう言つて上条はインデックスを引きとめようとするが、インデックスは

「・・・・・・・・じゃあ、私と一緒に地獄の底まで付いて来てくれる？」

につこり笑顔だった。それは、あまりにも辛そうな笑顔で、上条は溜息をつきたくなつた。インデックスは、優しい言葉を使つて暗にこう言つていた。

こつちにくんな。

「・・・・・・・・いいや、嫌だね」

上条当麻は即座に否定する。それを見たインデックスは少し悲しそうなそれでいて安心したような顔をする。

「そうだよね？ それじゃ・・・・・・・・」

『勘違いしちゃいけませんよ？ インデックスさん。確かにご主人はあなたと共に地獄に落ちるのは嫌ですが・・・・・・・・』

「でもそれ以上に、今のお前を放つておくことなんて出来ないんだよ」

上条は、引き止めるようにインデックスの肩に右手を置いた。行かせつかよ。暗にそう言つていた。

かつて自分を助けてくれた相方のように。何度拒絶しても、何度否定しても、傍に居

てくれたこいつのように、

『ええ！ 地獄の底にあなたがいるというのなら、そこから救い上げてやるだけですよっ！』

エネはあの時と同じ、少々ウザったくなる位の、優しい笑顔でそう言った。

「……そう、君達は優しいね……」

インデックスはもう一度につこり笑うと上条の手をとって――

「――でもごめん」

「――ツつ！」

両手で上条の手を捻り上げ、ついでに軸足を大きく払う。

「う、うおっつと!？」

上条は床に手を着き、そのままバク中するように空中を一回転。体操選手並みのウルトラCをかましたが、そんな上条に賞賛の拍手を送る者は誰一人として――

『おお！ 流石ご主人！ すごいです！』

――訂正。一人だけいた。

「んな事してる場合か！ インデックスは!？」

『えと、騒ぎに乗じて部屋から飛び出したようです。なかなかヤンチャな事をしますね』

エネが喋り終わると同時に、玄関のドアが閉まる音が聞こえた。

「つく！ 俺は追う！ お前はカメラの映像を俺のデバイスに！」
『分かりました！』

上条は大きめの軍用ゴーグルを頭に引っ掛けると、脱走した少女を保護するために動き出した。

『ところでご主人？ 小萌先生の補習はどうするつもりですか？』

「……不幸だ……」

——完全下校時刻。

学園都市の学生に定められた下校時間を過ぎてなお、上条とエネはインデックスを探し続けていた。

『どうですかご主人？ インデックスさんいましたか？』

「いや、全然……エネ！ そっちはどうだ?！」

現在二人は別々に行動している。

イヤホンを片耳に突っ込み、マイクを口元に当てる。そして、軍用ゴーグルをかけた上条は、エネと通信で連絡を取っていた。

『そちらに情報が行っていない通り……インデックスさんの影すら掴めていませ

ん……むー！この電脳少女たる私の捜査網に引つ掛からないとは一体どういう逃げ方をしてるんですか!？」

上条が自らの足を使って探索を行い、エネが学園都市中の監視カメラをハッキングし映像と動きを操り索敵サーチを掛ける。

効率が良いように思えるが、学園都市は東京の半分を占めるほどのに広く、なおかつ全てのカメラをハッキングできる訳ではない。

それ以外にも小萌先生から補習をサボった事への呼び出し電話。携帯越しでも涙ながらになってるのが分かる、が掛ってきてきて必死に言い訳をする破目になるわ、武装無能力者集団に絡まれるわもうさんざんだった。

「だー、くそー！インデックスの奴一体どこに……」

「あつ、いたいた。この野郎！探したんだからっ！ってちよつと待ちなさ……ちよつと！アンタよアンタ！分かってんでしょ！」

『ご主人。無視しましょ』

「……言われなくても」

意見一致で無視をする事に決めた上条とエネ。

一体どこの電撃系ぶっ飛びお嬢様だか知らないがかまってる暇などない。

「アンタ今すつごく失礼なこと考えたでしょ!! いい加減にしなさいよ！ 今日という

今日こそ電極刺した蛙の足みたいにひくひくさせてやるから、遺言と遺産配分やつとけ
グラーア！」

「やだ」

「なんでよ!?!」

「インデックスシスターさんがいないから」

「ゴ——の。つぎけてんじゃねーぞアンタあ！」

上条としては至極真つ当な理由なのだが、どうやら相手の女子中学生にとつてはその
発言が何かのトリガーを引いたらしい。主に色々付け足し忘れているせいなのだが、

御坂は己が鬱憤を込めた一撃を歩道のタイルにぶつけようとして——

『——! ——ご主人!』

「——っ」

「.....」

一瞬、本当に一瞬の出来事だった。

何かをつかむ音と共に、御坂の顔上半分が上条の右手で覆われた。その途端、学園都
市でも七人しかいない超能力者である彼女の電撃は掻き消され、無へと消える。電撃は
おろか、静電気一つ起きずに

「.....おいビリビリ中学生」

上条は、御坂の顔面を捉えながら、声を低くして言った。

「……悪いけど今日は時間が無いんだ。また今度にしてくれよ？」

「な、なによ？ そんな事関係な——」

「——そっか。じゃあ……」

上条はハア、と小さくため息をつく。

「マジメにやるから覚悟しろ——」

数分後、そこには子犬みたいにビビっている御坂美琴がひとりぽつんと立っていた。

御坂美琴を振り切った上条は夕焼けの学園都市を全力疾走していた。

「いやマジでナイス！ エネちゃんマジ電脳少女！ もう見つけたのか！ 早い！」

『フフン！ そうでしょう？ なんかもうと褒めてくれてもいいんですよ？ 何かしあの鳴神娘、何を考えているんでしょうね。ご主人が止めに入らなければ、大変な事になっていましたよ……』

まったくだ。と、上条は賛同する。仮にもここは科学の街『学園都市』だ。

至る所に科学技術が使用されている都市のど真ん中で超能力者級の電撃を放つたら有線放送や警備ロボットのほか、道行く人々の携帯まで破壊されていただろう。

上条の対応があと少しでも遅ければ、間違ひなく警備ロボとの追いかけてしまつていたに違ひない。

『いやーしかし迫真の演技でしたね。彼女、ビクビクと震えていましたよ！ これで少し大人なつてくれると良いんですが……まあ少しばかり可哀想な気がします』
 確かに少し強引な手に出たかもしれないと思うが、まともに相手した場合間違ひなく日が暮れるし、そもそも今はそんな事を気にしている場合ではない。

「それで!? インデックスは一体どこに——」

『ええとそれがですね……』

エネは少しばかりバツが悪そうな声を出して

『カメラの最終記録によると、私達の寮の中へと……』

「……は？ な、何で今更？」

あんな事をしてまで上条を巻き込むまいと家を飛び出した、再び上条の部屋の近くに
 いる……？

どう考えてもおかしな事だった。

『さ、さあ……私にもさっぱり——!?』

エネが急に息を呑んだのが分かり、上条は戦慄する。

「おい、どうした!？」

『エネルギー反応。これは……魔力！ 術式は西洋の術式——！』

「魔術師！」

離れた場所で、上条当麻とエネは全力で同時に走り出した。

上条の住んでいる学生寮は、見た目は典型的なワンルームマンションだ。四角いビルの壁一面に直線通路とズラリと並ぶドアが見える。

鉄格子のような金属の手すりに『ミニスカ覗き防止用』のプラ板が貼っていないのは、ここが『男子寮』だからだろう。

御坂美琴を追い払い、日の落ちた学生寮の前まで戻ってきた上条は、エネと通信を再開する。

「エネ！ インデックスは?！」

『私達の家の前……鉄分の反応……まずいですご主人！ 怪我をしているかもしれません！』

「なっ?! —— ツツ！」

衝撃の事実にも、すぐにでも——を駆け上がってインデックスの元へと駆け寄りたいう上条だったが、どこからか感じた背筋を凍らすような気配に足を止める。

『感じましたか?……居るんです。近くに『人払い』を張った魔術師が……』

どう足掻いても一悶着ありそうだったが『その程度』で上条当麻とエネは止まらない。インデックスの怪我の具合がどれ程のものか知らないが、相方の具合から見て転んですりむいた程度のものではない事は明白だった。

一秒でも時間が惜しい。

「……………行くぞ」

上条はそう言うと、七階にある自分達の部屋の前へと急行する。

そして、ひどく驚愕した。

「……………は？……………」

自分の家の前で、床に張り付いたガムだつて一瞬で剥がすほどの破壊力を持ったドラム缶ロボが三台もたむろしているという状況に。

目を疑った。その三台にガツンガツンとまるで都会のガラスに小突かされているかのように体当たりをぶちかまされているインデックスに。

心臓が止まるかと思った。背中の腰の辺りをバツサリと横に一閃され、血だまりの中に沈んでいるインデックスに。

事前にエネから忠告されていなければここで大きなタイムロスがあつただろう。

「あ、くっそおおおおおおおおおお！」

『待ってください！ご主人！』

湧き上がる激情に任せて清掃ロボットをぶち壊そうとする上条。それよりも先に、スマートフォン画面からエネが飛び出し、ロボット達の方に手をかざす。と、それだけで清掃ロボットはその場を離れ、廊下の奥へと去っていった。

後で思ったのだが、もし上条がこの時清掃ロボットを破壊していたらおよそ三六〇万の弁償をしなければならぬ所だった為。上条追お財布事情的には超ファインプレーだった。

「——っつ！ エネ!!」

『分かってます。私を誰かお忘れで?』

エネはにっこりと笑ってインデックスの方に駆け寄る。

「……あ」

上条はそこで思い出した。今は電脳少女となり、能力の半数以上を失い。様々な能力を駆使しても数分しか現実世界に姿を現すことができない彼女。0と1の集合体。上条の神々の義眼眼で見ることのできない存在だが、彼女が一番得意とするのが回復系のスキルだった。何でも記憶を失う前の自分が良くケガをしていたらしい。

その為、インデックスの傍に座り、素早く演算を開始するエネ。

能力を使いインデックスの背中、患部に触れる。そしてなぞるようにゆっくりゆっくりと動かしていく。それだけで怪我は治ってしまうがなにぶん怪我が大きい上、イン

デックスが弱りすぎている為、あまり強い能力は使えないのだ。

もちろん『怪我を一瞬で塞ぐ』事も可能だが、能力を当てる対象が極度に弱っていると能力が掛けるちよつとした負担が死に至る原因にもなりかねないので、あまり強力なのをできないでいた。

——だがそれでも

『ふう。出血は止まりました』

エネの能力と腕は、そんな事など苦にもしないほどだった。流石だ。上条は素直にそう思う。

「もう大丈夫なのか？」

『大丈夫だ、問題ない』……とは言い切れませんが、これで死ぬ確率は5%以下に減りましたよ！ 後は……やっぱリカエル先生に頼むのが良いんですが、この街の部外者じゃ後々面倒そうですし、この後体力が回復したらまた私が能力を使いますよ！ 多分それがベストです！』

「ああ。良かった————それにしてもこんなことやりがったのは誰だよ？」

「うん？ 僕達『魔術師』だけど？」

上条は、ゆっくりと後ろを振り返った。

男は自分とは別の、エレベーターを使ってここまでやって来たようだった。

白人の男は二メートル近い慎重だったが顔は上条よりも幼そうに見えた。おそらく歳はインデックスと同じ十四、五だろう。その高い身長は外国人特有のものだ。服装は教会の神父が着ているような漆黒の修道服。ただしコイツを『神父さん』と呼ぶ人間は世界中を探しても一人として存在しないだろう。

『……邪悪、ですね。そういうチカラを使うからでしょうが少々気を使いすぎではありませんか?』

エネは相手を嘲笑するようにハッと笑う。しかしその目は笑っていない。男を分析しているのだ。

強い香りの香水に、髪染め。全ての指にはめられた銀の指輪に、耳に付いた毒々しいピアス。極め付けには右目まぶたの下にあるバーコードのような形をした刺青。

神父と呼ぶにも不良と呼ぶにも奇妙な男。通路に立つ男を中心とした辺り一帯の空気が明らかに『異常』だった——が

「おや、宗教観が薄いこの国の人間にしてはあまり驚いてないみたいだね? もしかして『それ』から全部聞いちゃってるのかな?」

「……色々あんだよ。色々な」

上条は全く動揺していないように見える。

実際はそう見えるだけで、上条から言わせれば十分すぎるほど動揺しているのだが、今までも結構奇妙な冒険を色々してきている為、『異常』に対する耐性が出来てしまっていた。

魔術師は「まあどうでも良いか」と吐き捨てるように言つて

「まったく、よっぽど君を巻き込みたくなかつたのかな？」

「………？ どういう——」

「『それ』がここまで戻ってきた理由だよ。知らないのかい？ 彼女が着ている修道服は『歩く教会』と言つてね。法王級の絶対防御を誇る霊装なのさ。僕達はそれから出てくる魔力をサーチしてた訳だけど……何の因果か今日その霊装の効果が消え失せた。全く、聖ジョージのドラゴンでも再来しない限り、法王級の霊装が破れるなんてありえないんだけどね……」

そこまで聞いた上条とエネは息が止まるかと思つた。全てが唐突に繋がったからだ。上条の右手には『幻想殺し』と言う異能の力が宿っている。それが異能の力であれば、力の善悪強弱問わず神様の奇跡だつて打ち消す事が出来る——いくつかの『例外』を除いて。

そんな上条の右手は、数時間前確かにインデックスの肩に触れた。『歩く教会』を通して。そしてそれを木っ端微塵に破壊した。

そして魔術師は言った。その歩く教会から滲み出る魔力をサーチしていたと……
 そしてインデックスは上条の家に忘れ物をして行った。歩く教会の残骸を……
 つまりインデックスは、自分達を危険な目に合わせないために残骸を探知して魔術師
 がやってきてしまうかもしれないと考えて、わざわざ危険を冒して戻って来た。

そして、上条の右手で絶対防御の霊装の効果が破壊されてしまったため、大怪我
 を負ってしまった……？

「………なんで、だよ」

少し間を置いてから、思わず、答えを期待していないのに上条の口は動いていた。

「何でだよ。お前達にも正義と悪ってモンがあんだろ？ 守る物とか護る者とかあんだ
 ろ………？」

上条当麻は、叫ぶように言った。

「こんな小さな女の子を、寄ってたかって追いかけて、血まみれにして。これだけの現実
 を前に！ テメエまだ自分の正義を語ることが出来るのかよ!!」

自分の中の信念に従い。

今まで歩んできた道を信じて。

正しいと思つた事を、殴りつけるように言葉にして放つた。

「だから、血まみれにしたのは僕じゃなくて神裂さんだけだね」

なのに、魔術師は一言で断じた。微塵も欠片も、響いていなかった。

「もつとも、血まみれだろうが血まみれじゃなからうが回収するものは回収するけどね」

「回収……？ やつぱりインデックスが持つてる十万三千冊の魔道書が目的なのか!？」

「ああなんだ。『そっち』は聞いてたのか」

魔術師は笑っているのにつまらなそうな声で

「そうさ、でも勘違いしないで欲しいね。僕達はあくまでも彼女を保護する為にやってきたんだから」

「……………」

これだけ真つ赤な光景を前に、この男は今なんて言つた？

「そうさ。保護だよ保護。ソレには魔力を練る力は無いけど、それでも十万三千冊の魔道書つてのは十分過ぎるほど危険な代物だね。使える連中に連れ去られる前にこうして僕達が保護しにやって来たつて訳さ。ソレにいくら良心と良識があつたつて拷問と薬物には耐えられないだろうしね。そんな連中に女の子の体を預けるなんて考えたら

心が痛むだろう？」

魔術師は挑発するように言った。否。それは上条をインデックスから引き離す為の紛れも無い挑発だった。

上条（焼き殺す人間）の傍にインデックス（保護するべき対象）がいたらそれだけで巻き込みかねないし、もしインデックスを盾にされたら厄介な事になるだろう。

余計な手間を掛けない為には、向こうからこちらに来てもらうのが一番だった。

「……………」

だが、上条当麻は動かなかつた。その目を瞑り、時が流れるのをただ静かに待つように、ただただそこに立っていた。

（……………？ 動揺しすぎて動けない、って訳じゃなさそうだけど。挑発が足りなかつたかな？）

ふむ、と魔術師は考えて、だつたら取り合えず魔術を使って少々強めに脅しを……

「——あー、名前。聞いとくぜ」

まるで初めて出会った人に挨拶をするように気軽な口調で話しかける上条。

だが、その瞳は闘志と怒りで満ちていた。

こいつをぶちのめす。内にある心が、しっかりと読めた。

「ステイルⅡマグヌスと名乗りたい所だけど、ここは『Fortis931』と名乗って

おこうかな？」

なのに、魔術師は口の端を歪めてタバコを揺らしているだけだった。

口の中で何かを呟いた後、まるで自慢の黒猫でも紹介するかのようにな上に上条に告げる。「魔法名だよ、聞きなれないかな？ 僕達魔術師って生き物は、なんでも魔術を使う時に

真名を名乗ってはいけないそうだ。古い習慣だから僕には理解が出来ないんだけどね。

—— Fortis 日本語では強者といったところか。ま、語源はどうだって良い。重要なのは魔法名を名乗り上げた事でね、僕達の間ではむしろ——」

魔術師は笑みを崩さない。上条では笑みを消す相手にもならないとも言おうように。

魔術師、ステイルⅡマグヌスは口の煙草手に取ると、指で弾いて横合いへと投げた。火のついた煙草は水平に飛んで、金属の手すりを越え、隣のビルの壁に当たる。

オレンジ色の軌跡が残像の様に煙草の後を追ひ、壁に当たって火の粉を散らす。

「殺し名、かな？」

「ああ、分かった。『もういい』」

上条は本当につまらなさそうに言うと、『魔術師を地面に叩き付けた』

「——な、ばああつ!？」

魔術師ステイルⅡマグヌスはその身を襲う痛みと、湧き上がる疑問に襲われていた。

どういう事だ？ 自分と上条の距離は十五メートルもあつたはずだ。魔術を使つて

消し炭にするだけの時間はあつたはず——しかし現にステイルは通路の床に肩を掴まれて仰向けに叩き伏せられている。『一瞬で距離を縮められた』そう考えるしかなかった。

どんなトリックを使ったか知らないが、まだ自分には十分すぎるほど余裕がある。と言うよりこの程度で魔術師を捕らえた気でいるならとんだ大馬鹿野郎だ。

ステイルはニヤリと笑うと右手に力を集中させて、

「——巨人に苦痛の贈り物を!!」

魔術師はついに吼えた。けれど、何も起こらなかった。

「——は?」

「悪あがきはすんなよ。言つたら『もういい』つて」

「——あ」

最後に言葉を聞いて魔術師ステイルⅡマグヌスは、言葉を発する間もなく気絶した。

「——よし。エネ、こっちは片付いたぞ」

上条はステイルが気絶したのを確認するとゆっくりと立ち上がり、エネに声を掛けようとするが、肝心のエネは何時の間に戻つて来たのか、自分の後ろ五メートル当たりの所に突つ立っていた。上条がこちらを向いたのを確認すると、フワフワと歩いて(?)上条の傍へと寄つていく。

「おお——キチンと顔、心臓、鳩尾、水月に掌打が二発ずつ打ち込まれてますね。これなら数時間は動けないでしょう。流石ご主人いい腕です！」

ステイルの様子を見て、エネは感心するように自分の事のように喜んで。

事実、上条は自分でも随分と化け物じみてきたなあとは思っている。能力を使ってもいなければ、学園都市の駆動鎧も使用していないものにも拘らず一瞬で四箇所を二回ずつ、計八回も人体の急所に正確に打撃を打ち込む事が出来るなど、もはや人間のカタゴリーでは無い。

「しかし、この人は実力と戦闘技術が並行してませんね。修行が足りませんよ？」

「チカラ頼りの人間が、身体能力を鍛えると思うか？」

「そもそも力を持つ人間は過信しますからね。少しばかり研究用にもらってきました」

と、エネはステイルがこの察に張り付けていたルーンカードを自慢げに見せ付けてくる。こう言うつては何だが、エネはこう見えて勤勉家で、出会ったばかりの頃は二人で一緒に様々な事を勉強したものだ。

「『ちよつと待つてあとちよつと！』とか必死に言つてたのはそう言う事かテメエ!! 俺はアイツの『お喋りに付き合つたり』『ワザワザ話を引き伸ばしたり』して必死に時間稼ぎしてたんだぞおい!! それにもし、魔術が暴走したらどうすんだ!! 配置とかつて結構重要だろうが!!」

「術者が気絶してしまった後じゃ、力の観測と保存が出来ないんですよ。．．．それに――」

「――ご主人なら大丈夫です」

ニツコリ笑顔でそう言った。

．．．．反則だと思う。それは、まるで主人に絶対の信頼を寄せる甘えたがりやの子犬の様な、エネから寄せられる、無償で全面的な信頼の証。お前の心配はしていない、むしろ後ろで怪我をしているインデックスが、魔術師の使う魔術に巻き込まれないか心配だった。暗にエネはそう言っていた。

上条はため息をついて「不幸だ」と言いながら、
右手で顔を覆い隠して笑った。

奇術師は終焉を与える The 7th—Egde.

夜。表通りから消防車と救急車のサイレンが響き渡り——通り過ぎた。

当然、それは上条の学生寮に向かつてなどいなく、さらに遠くの方へと向かつていく。

上条当麻は路地裏で舌打ちした。

「そこまで心配する必要も無いと思いますよ？ それに関わらせる人間が多ければ多いほど二次災害が酷くなる場合もありますから……」

そしてそんな上条をよそに、エネは先程からずっと傷ついたインデックスをゆつくりと治療し続けていた。あれだけ苦しそうだったインデックスの顔色はずいぶん良くなり、出血は完全に止まり、小さく寝息を立てていた。

「いや、別にお前の能力を疑っている訳じゃなくてさ。その……出来ればゆつくり休ませられるような場所が無いかって話」

「ん、確かに傷が塞がったとしてもこれだけの傷を負いましたからね。体内にダメージは多少残りますし、間違いなく翌日には熱が出ますね」

敵に自分達の居場所が割られている以上、自分達の寮に戻る訳にはいかない。エネ曰

く『相手はプロだから今更隠れようが大した差などない』らしいのだが、今は焼き石に水だろろうが掛けておきたい。

とりあえず目下の目的は『インデックスが安全に休める場所』の確保なのだが、それにしたっていい場所が思い当たらなかつた。

学園都市の『外』ならとっておきの場所が幾つか在るのだが、外出バスが無い事は勿論、怪我を負っているインデックスを抱えているこの状況では話にすらならないのだつた。

この際多少の金には糸目をつけずにホテルの一室でも借りようか、ああでもインデックスの事なんて言い訳すれば……というよりID確かめられたら一貫の終わりだし……そう上条が考えていると、突如としてエネが声を上げた。

「そうですよご主人！　こう言う時こそ頼るべきですよ！」

「な、何を頼るつて？」

「安心してください『私達の仲間風紀委員』や『先生方警備員』ではありません」

エネは月を見上げ指をさし、嬉しそうにその名を口にした。上条の伯父。絶対的な防御力を誇るビルの中に引きこもる逆さまなヤツ。

「学園都市統括理事長『アレイスターIIクロウリー』ですよ！」

一夜明けると、インデックスは本当に風邪と良く似た症状が出たが、その症状は本当に凄く軽いもので、明日になれば元気に歩ける程度のものであった。

あれだけの傷を負っていた筈なのに、その傷は殆どいや、『全く』残っていないはいない……本当にこいつには敵わないと思う。

で、それはともかくとしてだ……

「なーんでお前のビルの中にこんな少女用の服があるのかなア？ アレイスター!!」

「ふむ。まさかこの私にコスプレ趣味があるとでも言いたいのかな？」

『その可能性は疑ってますよ?』

能力切れで音信不通になっていたエネが、元気そうに笑いながら宙に浮かんだデイス・ブレイの中を飛び回っている。

「それは残念だ。ここへ来るのを聞いて急いで用意させただけなのに……私には信頼の欠片もないようだ」

「いや、でも感謝はしてるぜ？ こんな最強の鉄壁を用意してくれたんだからな」

チクチクと、布を縫う上糸は慣れた手つきで裁縫をこなす。

「しかし……、本当によく成長したものだ。……その体一つで法王級の霊装

を再現できようとは」

『本当。素晴らしい才能ですよご主人!』

その褒めの言葉に、インデックスの『歩く教会』を縫う手を止め、上条は、

「二度消した霊装を再現するのはそんなに苦じやねーよ? 知ってるだろ? コピーし

たみたいなものだから、異能力みたいに一度触ったら全部の力を使えるなんて訳にもい

かねーし。コピーしたのをペーストするより簡単な作業はねーっての」

「まったく。幻想殺しはどこまで強くなるんだ……」

「ご主人は護りたいモノを護る為に強くなるらしいですよ?」

「……どこまでも、という事か。化け物め」

呆れ呆れに額に手を当てるアレイスターと、ディスプレイからディスプレイへと飛びまわるエネ、熱を出してフカフカの布団で寝ているインデックス。このビルの中は完全に安心できる。

「知ってるさ。それと知り合いのオマエは何だ? 人か? 狗か? 化物か?」

「人間だよ。頭のとっぺんから足の先までね」

「そうですよご主人。アレイスターはご主人とは違って人間ですよ?」

「さいですか……」

上条は「はー」、とため息をつきながらも『歩く教会』を縫い終える。完璧な修道服に

戻った歩く教会をたたむと、上条はアレイスターに向き直る。

「そう言えばだけどき、アレイスター」

「ん？　なんだ？」

「禁書目録つてさ。何で追われてる訳？」

「そりゃご主人。魔道書の原典グリモワールが目的でしょう？」

「それ以外に何が考えられるというのだね？　この大魔術師をからかっているのか？」

そう言つて胸を張るアレイスターに上条は一言。

「だつてさ。魔道書の原典つて目にしただけで心まで汚れるつていう。何か恐ろしい代物なんだろ？　そんなものをアイツの体外に不用意に引き出したりしたら……全員
 廃人にでもなるんじゃないのか？」

「……あ」

「……確かに」

「それこそ毒性を完全に切り除いて文章を読めるとしたら……？」

「禁書目録か」

「ご主人くらいでしようね」

エネが上条を見つめると、アレイスターは恐る恐ると上条に

「まさか上条君。『アレ』をすべて読んだんじゃないだろうね……？」

完全記憶能力をインデックスと同じように持つ上条が読んでしまっているのか。それがアレイスターの疑問だった。まあ読んでいたとしても何ら問題はないのだが。

「流石に十万三千冊全部は無理だけどき。今も読んでるよ」

「……頼むからそれを悪用だけは使用しないでくれよ?」

『ご主人は私用にしか使いませんからね』

「人助けするためなんだけどな—」

そういう上条の頭には先程からバンダナが巻いてあった。そのバンダナにはいくつもの電極が貼られている。学園都市の学習装置テストダメントだ。それを使ってインデックスの頭から上条の頭に、十万三千冊の魔道書の知識をコピーしているのだろう。

『それでいくつのフラグを立ててきたんですか……?』

「いちいち数えてる訳ないだろ」

『……こんの変態偽善者英雄気取り女たらし浮気者—ツ!』

「ちよつやめろ!! マジでやめろオオオオオオオオ!」

ディスプレイの中の少女を止める術は上条にはない。大事なフォルダがゴミ箱で消去されていくのを眺めるしかない上条だった。その様子を見ていたアレイスターはヤレヤレとため息をついたという。

——夜。

「おっふる♪おっふる♪おっふるー♪」

と、上条当麻の隣で病人やめました、と言わんばかりにパジャマから修道服に着替え、両手で洗面器を抱えたインデックスは歌っていた。

そんな彼女に影響されたのか、同じくスマホの中のエネも同じように歌っていて、なんだか奇妙な二重奏を醸し出している。

「なんだよそんなに気にしてたのか？ 正直、匂いなんてそんなに気になんねーぞ？」

「汗かいてるのが好きな人？」

「そういう意味じゃねえッ!!」

『ご、ご主人、そんな趣味があつたのですか……?』

ちツがああああああう!! と言う上条の訴えが辺りに響きわたる。あれから

一日経って、普通にあちこち出かけられるようになった彼女の願いが風呂だった。……が。

アレイスターの窓の無いビルには『風呂』などという概念は存在しなかった。なので上条達は最寄りの銭湯へ足を運ぶのだった。

……まあ上条とエネとしては時々大きな風呂というものが恋しくなって稀に

足を運ぶ事があったので「じゃあ銭湯行くか」と駆り出して見たものの、肝心の近場銭湯が時期外れの大掃除をするだとかで二日間休業中になっていた為、こんなに遅くなってしまったのだ。

「とうま、とうま」

人のシャツの二の腕を甘く噛みつつインデックスはややくぐもった声で言う。噛み癖のある彼女にとつて、どうやらこれは服を引っ張ってこつちを向かせる、位のジエスチャールらしい。

「……なぜかエネが対抗するようにスマホの画面に顔を張り付けているのが気になるが。」

「……何だよ？」

上条は呆れたように答えた。『そういえば名前知らない』と言うインデックスに一昨日の朝自己紹介してからかれこれ十八万回くらい名前を呼ばれまくったからだ。
「……なぜかエネが対抗するように自分の名前を呼びまくってたのが気になるが。」

「何でもない。用がないのに名前が呼べるってなんかおもしろいかも」

たったそれだけで、インデックスはまるで初めて遊園地に来た子供みたいな顔をすする。インデックスの懐き方が尋常ではない。まあ、原因は三日前のアレだろう

が……上条は嬉しいと思うより、今まであんな当たり前の言葉すらかけてもらえなかったインデックスが過去の自分と重なって複雑な気持ちを抱いてしまう。

「ジャパニーズ・セントーにはコーヒー牛乳があるってエイワスが言つてた。コーヒー牛乳って何？ カプチーノみたいなもの？」

「んなエレガントなモン銭湯には——」

『ええ、それだけではなくフルーツ牛乳と言うのも有つてですね！ いやまさに日本が生んだ——』

エネの話はそれほど無駄でもないもののだが、それでも上条は話がややこしくなるから黙つてると言いたくなってしまう。

「んー、けどお前にやデカい風呂は衝撃的かもな。お前んトコつてホテルにあるみたいな狭つ苦しいユニットバスがメジャーなんだろう？」

「んー？ ……その辺は良く分かんないかも。私、気がついたら日本にいたからね。向こうの事はちよつと分からないんだよ」

地雷を踏んだ。一瞬でそう分かった。

「私ね、一年位前から記憶が無くなつちやてるから」

インデックスは、笑つていた。本当に、生まれて初めて遊園地に行つてきた子供のよう。油断してた……と、上条は自分を責め立てる。直接的に地雷を踏んでい

なくても、その地雷の上にある土を踏んでしまえばそれだけで爆発するというのに。

この数日間、上条はエネと今後の事を徹底的に話し合った。そして、告げられた。インデックスには恐らく『記憶がない』と。その時の確信めいたような彼女の表情に、彼女の過去にあった出来事と何か関係があるのかもしれないと上条は思ったが、エネは好みや、料理。学園都市の科学技術の感想などといった、思った事や感じた事はそれこそ親に今日学校であった事を話したがる小学生みたいに素直に、愚直に言ってくるくせして、過去の出来事の話になるとまるで話術師のように巧みに話題をすり替えてしまう。

ようするにあまり過去の話をしたがるらないのだった。だから上条はもう数百年以上彼女と一緒にいるのに、エネ。「榎本貴音」の過去をあまりよく知らない。導師達から口止めされている事もあり、上条自身なるべくそのての話題に触れないようにしてきたが、なんだか『お前じゃ話す事はできない』と言われてるみたいで、酷くイライラするのだった。

(ていうか、師匠達には話したんだよな……。エネの奴……)

「むむ？　とうま、なんか怒ってる？」

「怒ってねーよ。……いや、イライラはしてるけどお前にやかんけーのねー事だよ」

ギクリとしてシラを切ろうとしたが、そもそもインデックスとは関係のない話だと思

い、開き直る事にした。

「なんか気に障ったなら謝るかも。とうま、なにキレてるの？ 思春期ちゃん？」

「……その幼児体系にだきや思春期とか聞かれたくねーよな、ホント」

「む、なんなのかなそれ。やっぱり怒ってるように見えるけど。それともあれなの、とうまは怒ってるふりして私を困らせてる？ とうまのそういう所は嫌いかも」

「あのな、元から好きでもねーくせにそんな台詞吐くなよな。いくら何でもお前にそこまでラヴコメいた素敵イベントなんぞ期待しちやいねーからさ」

「……」

「て、アレ？ ……何で上目遣いで黙ってしまわれるのですか、姫？」

超強引にギャグに持っていこうとしてもインデックスはまるで反応してくれない。おかしい、何か変だ。何でインデックスは胸の前で両手を組んで、上目遣いの目じりに涙が浮かびそうな傷ついたっぽい顔をして、あまつさえちよつと甘く舌唇を噛んでいるんだろう。何かとてつもなく嫌な予感がした為、上条は反射的にエネに助けを求めようとするが

「……」

（え、エネ……さん？）

上条は戦慄した。エネがまるで天使のような完璧な笑顔を顔に貼り付けつつ、胸の

前で両手を組んで鬼神のようなオーラを放っていたからだ

『とうま』

はい、と少女二人に名前を呼ばれたのでとりあえず返事をしてみる。

「だいつきらい」

『断罪』

エネが親指を下に向けた瞬間、上条は女の子に頭のとっぺんを丸かじりにされるとい
うレアな経験地を手に入れた。

インデックスはさっさと銭湯へ向かってしまった。エネは勝手に携帯の電源を落と
してしまった。

一方、上条は一人でトボトボ銭湯を目指していた。インデックスの後を追いかけよう
と思ったのだが、お怒りの白いシスターは上条の姿を見るなり野良猫みたいに走って逃
げてしまうのだ。

そのくせ、しばらく歩いているとまるで上条を待ってみたいにインデックスの背中
が見えてくる。後はその繰り返し。なんかホントに気まぐれな猫みたいだった。もう
片方の青い電腦少女は、音沙汰なく、携帯の電源をつけても居なくなっていた。

まあ『予定通り』だよな。と上条は追いかけるのを止めたのだった。

本来は銭湯に着いてから色々と準備をする予定だったのだが、これはこれで安全に時間稼ぎが出来るし、向こうもいつ動き出しても不思議じゃないんだし。と、上条は立ち止まって屈伸をし、アキレス腱を伸ばし、軽く体を馴らせる。

なぜここで唐突に準備運動をする必要があるのかと問われれば、その答えはただ一つ。

「……………」

上条はデパートの電光掲示板を見る。午後八時ジャスト。まだまだ人が眠る時間でもないはずなのに、なんだか辺りが夜の海みたいにひどく静まり返っている。

インデックスと歩いていた時から誰ともすれ違つてはいないが、上条は特に違和感を感じることなく片側三車線の大通りに出た。

『誰もいない』

コンビニの棚に並ぶジュースみたいにずらりと並ぶ大手デパートには誰も出入りしていない。いつも狭いと感じる歩道はやけにだだっ広く感じられ、まるで滑走路みたいな車道には車の一台も走っていない。

路上駐車してある車はそのまま乗り捨てられたように無人。まるでひどい田舎の農道でも見ているようだった。……………まあこの異常な光景も、上条にとつては慣れたものなのだ。

「ステイルが人払いの刻印を刻んでいるだけです」

ゾン、と。いきなり顔の真ん中に日本刀でも突き刺されたような、女の声。

物陰に隠れていた訳でも背後から忍び寄ってきた訳でもない。上条の行く手を遮るように、十メートルぐらい先の、滑走路のように広い三車線の車道の真ん中に立っていた。

暗がりで見えなかったとか気がつかなかったとか、そんな次元ではない。確かに一瞬前まで誰もいなかった。だが、たった一度瞬きした瞬間、そこに女は立っていたのだ。「この一帯にいる人に『何故かここには近づこうと思わない』ように集中を反らしているだけです。多くの人は建物の中でしょう。ご心配はなさらずに」

いや知ってたし。と返してやりたかった。そもそも上条はこの女の存在に『気づいていた』インデックスと歩いていたときからだろうか、敵意とも悪意とも違う、寂しいような虚しいようななんとも言えない気配が自分達を覗いていた……。真っ先に気づいたのはエネセンサーなのだが、今は放っておく。

(…………ハズレ引いたなあ)

上条としてはあの炎の魔術師がリベンジにかまけて自分を潰しに、この女がインデックスを回収に向かってくると色々と助かったのだが、そう上手くはいかないらしい。やはりどこまでいっても自分の不幸体質が災いするようだった。

「神淨の討魔、ですか——良い真名です」

「そりやあどうも。テメエは？」

「神裂火織、と申します。……できれば、もう一つの名は語りたくないのですが」

「もう一つ？」

「魔法名、ですよ」

ああ、そりや結構。上条は言った。そもそも上条は博愛主義者という訳ではないが、なるべくなら争いや面倒ごとには巻き込まれたくないタイプだ。導師の一人みたいになんてのは好きじゃないし（嫌いでもないが）話し合いで決着が付くならそれに越した事はないと思っっている。

「率直に言つて」神裂は片目を閉じて「魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいのですが」
「嫌だ」

即答した。退く理由など、どこにもなかったから。

「仕方ありません」神裂はもう片方の目も閉じて、「名乗ってから彼女を保護するまで」
ドン!!という衝撃が地震のように足元を震わせた。

まるで爆弾でも爆発したようだった。視界の隅で、青い闇に覆われたはずの夜空の向こうが夕焼けのようなオレンジ色に焼けている。どこか遠く——何百メートルも先で、巨大な炎が燃え広がっているのだ。

「……………チッ!!」

誰よりもエネの実力を知っているつもりのかせに、欠片ほどの心配も、する必要は無い。かせに、上条はほとんど反射的に炎の塊が爆発した方向へ眼を向けようとして、

瞬間、神裂火織の斬撃が襲いかかってきた。

上条と神裂の間には10メートルもの距離があった。加えて、神裂の持つ刀は二メートル以上の長さがあり、女の細腕では振り回すことはおろか鞘から引き抜くことさえ不可能に見えた

、はずだった。

なのに、次の瞬間。巨大なレーザーでも振り回したように上条の頭上スレスレの空気が引き裂かれた。上条のすぐ後ろ——斜め右後ろにある風力発電のプロペラが、まるでバターでも切り裂くように斜めに切断されてゆく。

「やめてください」

10メートル先で、声。

「私から注意をそらせば、迎える道は絶命のみです」

すでに神裂は二メートル以上ある刀を鞘に納めている。

上条は動かなかった。

「……………」

ドスン、と音を立てて上条の後ろで風力発電所のプロペラが地面に落ちた。

本当にすぐ側にプロペラの残骸が落下したというのに、それでも上条は動かなかった。

神裂は閉じていた目をもう一度開いて、

「もう一度、問います」 神裂は僅かに両の目を細め 「魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいのですが」

「いや、だから嫌だって」

上条の声には、よどみがない。

まるで、この程度の事でいちいち驚いてられないと言わんばかりの呆気らかんとした声だった。一般人にしてはあまりにも余裕に見える上条の言動に神裂は顔をいぶしかめるが、それも一瞬の事にすぎない。

「何度でも、問います」

瞬、とほんの一瞬だけ、何かのバグみたいに神裂の右手がブレて、消える。

轟!という風の唸り声と共に、恐るべき速度で何かが襲いかかってきた。

「.....」

まるで、四方八方から巨大なレーザー銃を振り回されるような錯覚。

それは、例えるなら真空刃で作り上げた巨大な竜巻。

上条当麻を台風の目にして、まとめて工事用の水平カッターで切断されるように切り裂かれた。宙を舞った握り拳ほどもある地面の欠片が右肩に当たりそうになるが、上条はそれを体を小さく右に反転させてかわす。

上条は首ではなく視線だけで辺りを見回す。

一本。二本、三本四本五本六本七本——都合七つもの直線的な『切り傷』が平たい地面を何メートルに渡って走り回っていた。様々な角度からランダムに襲う『切り傷』は、鋼鉄の扉に生爪を剥がす勢いで傷を付けている様にも見える。

チン、という刀が鞘に収まる音。

「私は、魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが」

右手を鞘の柄に触れたまま、神裂は憎悪も怒りもなく、本当にただの『声』を出した。
「……………あんだ、強いな」

上条は「不幸だ……………」と深くため息を付くと、机に向かいすぎたサラリーマンの様にコキツ、コキツ、と右手で肩周りを軽く撫でる。

神裂にはそれが、見た通り緊張しすぎて動かなくなった体をほぐす作業にしか見えなかった。

（身体能力が良い……………と言っても、やはりこの程度ですか……………当たり前ですが）

本来ならあの握り拳ぐらいの大きさの欠片が上条に直撃すると思っただが、上条はそれを避けた。

……ただ、それだけだ。本当に、普通の人間より少し身体能力が良かったと言っただけなのだ。ステイルに勝てたのも、彼が肉弾戦が不得手なのが災いしたのだろう。

神裂は、落胆した様のため息を付いた。何に對して落胆しているのかも、何で落胆しているのかも、そもそも自分が落胆している事も、気づく事無く。

「私の七天七刀が織り成す『七閃』の斬撃速度は、一瞬と呼ばれる時間に七度殺すレベルです。人はこれを瞬殺と呼びます」

あるいは必殺でも間違いではありませんが——と、神裂は続けようとして、止まった。

神裂が使う『七閃』は厳密に言えば、魔術でなければ刀をもちいた居合い切りでもない。ホンの僅かに鞘の中で刀を動かし、再び戻す。この仕草で、七本の鋼糸を操る手を隠し、気づかれること無く相手を切り刻む。まるで奇術師のように。

断つておろが、神裂は何も自分の実力を安っぽい『七閃トリック』で誤魔化しているわけではない。七天七刀は飾りではなく、様々な宗教の術式を織り交ぜる事で天の使いとも渡り合える『唯閃』を放つ事もできるし、そもそも切り刻むだけでなく、鋼糸を駆

使用する事で様々な魔方陣を作り出し、普通の魔術師ならば一撃で葬る事ができる七閃自体、十分過ぎるほど強力な物だ。そんな神裂の手に現在握られた七閃用の鋼糸は

一本。二本、三本四本五本六本——

『あと一本はどこに行つた？』

「やめろよ、余所見すんなよ」

上条の声がふいに頭に響くように聞こえて

「瞬殺されたくねえだろ？」

その直後、神裂の胸元に鬼のような衝撃が襲い掛かった。

バオオン!!

という空間を無理やり引き裂いたような音があたりに響く。

「へえ………」

「つつつ!!」

上条が放つた瞬速の一撃は、神裂の胸元に届かなかつた。届く瞬間、神裂がとつさに片手を使って受け止めていた。だが無理やり体を動かし、不安定な体制で受けた為か、神裂の手からはゴギツ、という嫌な音が響く。

神裂はそのまま握つた上条の手を捻り、地面に捻じ伏せようとするが、上条は神裂の股下に足を滑り込ませ、体制を大きく崩させる事で逆に神裂を投げ飛ばそうとする。当

然それに対抗しようと体を動かした神裂だが、まるでそれを分かっていたような上条の妨害に合い、結果、肩から地面に叩き付けられてしまう。

「がッ……はっッ!!?」

痛みに呻き声を上げる暇も無く、神裂は自分の頭を踏み砕こうとする靴の底を見た。

避けようと全力で横に飛んだ所で、神裂はありえない台詞を聞いた。

「七閃♪」

耳を疑う声と同時に、七つの圧倒的な衝撃が神裂目掛けて襲い掛かった。当然、上条は七天七刀を持っていなければ、鋼糸も無い。その見よう見まねの、と言うか合っているのは数だけの『七閃』の正体は異常な速さと力が込められた『蹴り』だ。

しかも「この技、俺にも出来ないかなー」と言う発想から、たったいま生まれた完全な『付け焼刃』だった

腕、足、鳩尾。まるで直接爆弾を撃ち込まれたような衝撃が神裂の体を貫いて、
「おおっ、……ああああああああ!!」

「っ!?!」

そこまだった。

神裂は神の子としての性質が似ている『聖人』である自分の力のリミットを外し、驚

異的な速度と力で放たれる上条の蹴りを、同じく蹴りで弾き飛ばす。

もちろんそれをよしとする上条ではないが、神裂から放たれる力を垣間見て、弾かれた力を利用して反射的に後ろへと下がった。神裂は、よろよろと、それでも常人からしてみれば驚異的な速さで立ち上がって

「手を………抜いていたのですか………?」

「お互い様だろ」

上条は何を今更。と言ったように告げる。

「アンタ、俺を程度良くボコボコにするだけで殺すつもりなんか無かったんだろ? 初めの一撃も、その次のも、完全に俺を狙ってなかった。『相手に自分との実力差を知ってもらって諦めて貰う』暗黙の『降伏勧告』だったんだろ?」

「………」

神裂は、動かない。上条の鋭いとは決して言えない、それでも全てを真つ直ぐ貫くような眼光に睨まれて『動けない』

「………何でだよ」

上条は、小さく呟いた。一瞬、上条がこれだけの実力があるのに自分が手を抜いた事を怒っているのかと神裂は思ったが、

「アンタ、そもそもすごいつまんなそうな顔してたじゃねーか。敵を殺すのをためらつ

てたじゃねーか。最初から全力で俺を殺しに来る事だつて出来たくせに、殺そうとしなかった……アンタはまだ、そこでためらつてくれるだけの常識がある人間なんだろ？」

神裂は、何度も何度も聞いてきた。魔法名を名乗る前に全てを終わらせたい、と。

ステイルⅡマグヌスと名乗ったルーンの魔術師は、そんなためらいなど微塵も見せなかった。

「……………」

神裂火織は黙り込むと同時に、顔を歪めた。

余計な考えを振り払い、必死になつてこの少年の術式を解析しようと試みるが、そもそも『魔術を使ったような痕跡もなければ、何か特別な事をしたような感覚もない』だとすればこの少年は本当にただの人間？ いや、違う。ありえない。何かがおかしい。

そもそも魔術師でも能力者でもないただの人間が学園都市の兵器も持たずに聖人である自分と戦やりあえるなど、ありえる筈が無い

「なら、分かんдалろ？ 寄つてたかつて女の子が空腹で倒れるまで追い回して、刀で背中切つて、そんな事、許されるはずないつてもう分かちまつてんだろ？」

血を吐くような言葉に、神裂は思考を遮られ、耳を傾ける事を余儀なくされる。

「知つてんのかよ？ アイツ、テメエらのせいで一年位前から記憶が無くなつちまつて

んだぞ？ 一体全体、どこまで追い詰めりやそこまでひどくなっちゃうんだよ」
返事は、無い。

上条には、分からない。不治の病の子供の為でも良い。死んでしまった恋人の為でも良い。何か『望み』があつてインデックスを狙うなら、十万三千冊の魔道書を手に入れて世界の全てを歪める『魔神』になろうと言うなら、まだ分かる。

上条自身は覚えてはいないが、

他でもない上条自身が『そうだったから』。

守りたいと思うものを守るように、そう願った他でもない自分の為に、師匠達の『この世界ではありえない修行』を重ね続ける。

今もまだ絶賛修行中で、師匠達とは比べることすら出来ないほど力の差があるが、それでも前の自分と比べれば及第点があげられる位には強くなれたと思う。

だからこそ、記憶がなくても本能で、直感で分かる。

コイツは『自分の望みでインデックスを追い回してない』

コイツは『組織』の一人なのだ。言われたから、仕事だから、命令だから。そんな一言で、たった一言だけで、一人の女の子を追い掛け回して背中を切るなんて常軌を逸している。

人質でも取られていると言うのなら分からないでも無いが、いくらその『組織』が強

力なものであるとは言え、コイツほどの実力者が、敵を切るのをためらつてくれる人間が、素直に従つていると言う事に違和感を覚える。

「何で、だよ？」

だからこそ、聞いた。

まるで人を導く導師のように。

「アンタ、メチャクチャつえーじゃねえか。そんな力があれば、少なくとも誰かを守るこゝとが出来る筈なのに、誰かを救う事が出来る筈なのに」

自分の内から沸きあがる虚しさを吐き出すように

「……何だつて、そんな事しか出来ねえんだよ……」

言つた。

悔しかった。死にももの狂いで修行して、死にももの狂いで戦つて、ようやく少しばかりの力を得られたから。

悔しかった。自分と同じように力がある人間が、女の子一人を追い詰める事にしか力を使えない事が。

悔しかった。まるで『自分の力の使い方(師匠たちの教え)』を否定されているみたいで。

沈黙に、沈黙を重ねた沈黙。それを破つたのは神裂の方だった。

「……私。だって」

神裂は、追い詰められていた。あれからお互いに一切の動きは無いくせに、あれ以上のダメージは少しももらって無いくせに、たった一つの言葉だけで、ロンドンで十本の指に入る魔術師は追い詰められていた。

「私だって、本当は彼女の背中を切るつもりは無かった。あれは彼女の修道服『歩く教会』の結果が生きていると思つたから……絶対傷つくはずが無いから斬つただけ、なのに……」

上条は、神裂の言っている言葉を一文字一句逃さぬように耳を傾け続ける。

「私だって、好きでこんな事をしてる訳ではありません」

神裂は言つた。

「けど、こうしないと彼女は生きていけないんです。……死んで、しまふんですよ」

神裂火織は、泣き出す前の子供みたいに言つた。

「私の所属する組織の名前は、あの子と同じ、イギリス清教の中にある——必要悪の教会」

血を吐くように、言つた。

「彼女は、私の同僚にして——大切な親友、なんですよ」

「どういう事か、説明しろよ」

上条は、真っ直ぐと神裂を見据えながら言った。

魔道書は静かに微笑む

“ Forget | me | not

「……と、言う訳です。あの子は、あの子は記憶を消さなければ生きていけないんですよ!!」

泣き出す前の子供のような声で必死に上条に訴える神裂。その姿は大切な親友の為に涙を流し、身を引き裂かれるような苦痛に耐えてきた彼女の必死の訴えで、普通であれば同情を禁じえない様なシリアスなワンシーンが醸し出されるのだが、

「……」

上条は呆れかえっていた。その右手を額に当て「うわあ……」という一種の哀れみを含んだ表情と、疲れきった様なため息を吐く。

何だコイツは。馬鹿なのか？ アホなのか？

インデックスの脳の八十五パーセントが十万三千冊の魔道書で埋まっている？ 完全記憶能力があるインデックスは記憶を忘れられないから残り十五パーセントで一年分の記憶しか出来ない脳が破裂する前に記憶を消す？

あまりにも馬鹿馬鹿しすぎて言葉も出なかった。

何だこいつらは。もしかして自分達は魔術師だから何でも出来る。自分達にすらインデックスが救えなかったんだから他に方法などある訳が無い。とても思っていたんだらうか。だとしたら傲慢にも、馬鹿にも、慢心にも程があると思う。

上条としてはもつとドロツドロの、思わず拳を握り締め、奥歯を噛み締めてしまう様な悲劇的な事情でもあるのかと思つたが、蓋を開けてみればこれである。

否、神裂達からしてみれば十分すぎる事情なんだろうが、まさか『外の高校や大学でも普通に習う一般常識』すら知らないとは。

無知は罪だと歴史上で誰かが言ったが、なるほどこれは笑えない。

いや違う。これは最早知識が有るとか無いとかそういう問題ではない。そもそも『十パーセントで一年分の記憶しか出来ないなら完全記憶能力者はみんな小学生にもなれず死んでしまう』という小学生でも気づきそうな違和感にすら気づいていない。

やべー、怖えー……無知つて怖えー……。いや、頭が良い奴が頭が悪い奴を馬鹿にするのは良い事じゃないし間違つてると思うけどここまで来るともうシャレにならねー……。テメエらガチで定時制高校入って常識学べよコラ。

「分かつて、頂けましたか？」

と上条が脳内で怒涛のツツコミを入れる中、神裂は声のトーンを変えずに話を続ける。どうやら上条の表情や行動を「苦惱して頭を抱えている」と思っているらしい。

「私達に、彼女を傷つける意図はありません。むしろ、私達で無ければ彼女を救う事は出来ない。引き渡してくれませんか、私が魔法名を名乗る前に」

いや、むしろあんた達のせいでインデックスが苦しんでるんだけど。

そう言いたい気持ちを抑え、何とか事情を説明しようと口を開こうとして

「それに、記憶を消してしまえば彼女はあなたの事も覚えていませんよ。今の私達を見れば分かるでしょう？あなたがどれだけ彼女を想った所で、目覚めた後の彼女には、あなたの事は『十万三千冊を狙う敵』にしか映らないはずですよ」

「.....」

止まった、わずかな違和感を捉えたからだ。

「そんな彼女を助けた所で、あなたにとって何の益にもなりませんよ」

「.....、何だよ。そりゃ」

違和感は、怒りに変わり、一瞬で爆発した。さながら、ガソリンに火を放つように。

「何だよそりゃ、ふざけんな！ あいつが覚えてるか覚えてないかなんて関係あるか！

いいか、分つかんねえようなら一つだけ教えてやる。俺はインデックスの仲間なんだ

！ 今まででもこれからもあいつの味方であり続けるって決めたんだ！ テメエらお得意

の聖書に書かれてなくなつて、これだけは絶対なんだよ!!」

「.....」

「なんか変だと思つたぜ、単にアイツが『忘れてる』だけなら、全部説明して誤解を解きや良いだけの話だろ？ 何で誤解のままにしてんだよ、何で敵として追い回してんだよ！

テメエら、何勝手に見限つてんだよ！アイツの気持ちをなんだと

「うるっせえんだよ、ド素人が!!」

上条の怒りを押しつぶすような神裂の咆哮が轟いた。

言葉遣いも何も、全てを剥ぎ取つた剥き出しの感情が上条に襲いかかつて

「黙れこの大馬鹿野郎がああああああああああああああああ!!」

それを上回る上条の圧倒的な咆哮によって打ち消された。

「な………」

「テメエらがドンだけ頑張つたかなんて知らねえ、ドンだけ苦しんだかなんて分からねえ！ でもその頑張りも苦しみも守りたいものの為だったんだなって事は分かる!!

「だつたら何でもつと強くなろうとしねえんだ！ 何で誰もが笑つて誰もが望む最^{ハッピーエンド}つ高な結末を求めようとしねえんだ!! ああ、俺も修行不足だな、テメエ程度を敵つ

て認識しちゃうんだからな!!」

上条はようやく分かった。コイツは耐えられなくなったんだろう。記憶を失い続けるインデックスの側に居つづける事が。どんなに思い出を作っても、またゼロになってしまうと言う恐怖に耐え切れなくなった。

『記憶を失わなくてもすむ方法』をずっと探し続けて、それでも叶わなかった。叶える事が出来なかった。だからこそ、敵に回った。インデックスの思い出を真つ黒に塗りつぶす事で、インデックスの地獄さいごを少しでも軽いものにするために

——— だけど

そもそも、こいつらがもう少し強ければ全てが丸く収まった話なのだ。失う痛みに耐え続けるだけの強さがあれば良かっただけの話なのだ。 インデックスに幸せな記憶を与え続け、自分たちが地獄を見続ける覚悟があれば良かっただけの話なのだ。

インデックスに『誰にも頼れずたった一人で逃げ続ける(圧倒的な孤独)』という別の地獄を見せると言う事が一番正しい選択だったなんて認めない、認めてたまるかこのクソヤロウ!

「おい、魔術師^{よわむし}」

「——— つッ!」

地獄の底から響くような上条の声に、神裂はまるで幼子のようにビクリと体を震わせ

る。

これが終わったら、全てを話そう。インデックスが記憶を失う必要なんて無いって事も、最高の結末がすぐ目の前に転がっているって事も。でもその前に、インデックスに会わせるその前に

「もうアメモエは俺の敵じゃねえ」

コイツの捻じ曲がった性根を叩きなおす必要がある

「ただの「的」だ」

そして、圧倒的な蹂躪が始まった。

最初の異変は、上条の姿がまるでテレビが故障した時に映る砂嵐のように乱れ、ずれた事だった。

次の異変は、上条の姿が目映るよりも早く自分の目の前に現れ、お腹の下辺りにポン、と左の掌を置いた事だった。

最後の異変は圧倒的な力で自分の体が吹き飛ばされた事だった。

「いっ………がッ！」

上条が放った一撃を、その勢いを、何故か『全くいなす事ができず』体をつ、の字に折り曲げさせられ、ノーバウンドのままメートルも吹き飛ばされた神裂は、ダイナマイトの爆発音に負けず劣らずの轟音を立てて風力発電の塔に激突した。

意識が揺らぐ、体に全く力が入らない。それでも何とか力を振り絞ろうと、神裂は己の体に鞭を打って体勢を立て直そうとして

(な．．．．．!?)

そして驚愕した。

あれだけの威力で、あれだけの轟音で激突した風力発電の塔には『ひび一つ入っていないなかつた』

(どう、なつて．．．．．あれだけの威力、あれだけの速さ、あれだけの一撃を受けて何の損壊も無い訳が．．．．．)

肺に溜まった空気を一気に吐き出された神裂の頭に疑問が浮かぶが、冷静に考える暇は無かつた。上条はすでに神裂の目の前に現れ、次の一撃を放とうと左足を神裂の右足へと迫らせる

「ッ!？」

とつさに横へ転がる神裂。それが失敗だったと気づいたのは、脇腹に次の一撃を食らった後だった。

ズドム!!という筋肉を強制的に押し斬るような感触が体を貫いて、神裂はその体を再び十メートルほど吹き飛ばされる。今度は街路樹に身を激突させるが、塔と同じく、樹皮の一つも剥けてはいなかつた。

「うっ、が……」

急所に上条の蹴りを直撃させてしまった神裂は、もはや立つことすら出来なかった。

——だが。

（お、かし、い……体の力が、全く入らない……）

それにしてもおかしかった。神裂は『聖人』だ。十字教における『神の子』と似た体質を持つて生まれたため、その力の一端を振るう事ができる世界で二十人といない、魔術世界における『核兵器』だ。

上条の一撃は、その力は、その速さは、もしかしなくても今の自分を上回るものだが、それにしても『もうダメージがあまりにも多すぎる』そして『自分の体に限界が来るのがあまりにも早すぎる』

いや、それ以外にも疑問は尽きない。

『何故聖人としての体質（テレズマの力）を全く無視できるのか』

『何故この少年は人間としての限界を超えて力が使えるのか』

『何故回りの無機物が傷一つ付いていないのか』

さまざまな疑問が神裂を襲うが、体の隅々まで走る激痛が思考の邪魔をする。上条はゆっくりと神裂の元に歩み寄り、まるで解説をするように口を開く。

「言っとくけど『魔術』なんかじゃねーぞ。『科学（超能力）』でもねえ。つーか、俺には

そういう『異能の力』は使えねーんだ。信じてもらえるかは分かんねーけどな」

「ッ!!」

神裂は応じず、行方不明になった一本の鋼糸をストックから足し、放つ。

七閃

「………悪いな」

上条は動じない。彼は空中に手をやると、自らの手で放たれた鋼糸を全て掴み取り、そして強引に『左手で』引きちぎった。

「こういう『奇襲』には気を付けろ。って師匠が口をすっぱくして何度も言ってるんだよ!!」

驚愕する神裂を尻目に、上条は『左手』に力を込め、手を離す。上条の側に落ちたそれはもはやワイヤーではなかった。あまりの腕力で圧縮され、銃弾のような一つの塊と なってしまっていた。

あの時、行方不明になったワイヤーも、神裂が認識できない速度で今のように強引に引きちぎったのだろう。あるいは目をつぶっていた為、単純にその瞬間を見逃したただけか。

「そ、の………力………いつ、たい………」

何の意味も無いのに、相手が答えるわけが無いのに、最早考える余裕すらないほどの

朦朧とした頭で神裂は問う。問わずにはいられなかった。この少年の言葉を信じる義理は無いが、もし「異能の力じゃない」のならこの力の正体は一体なんなのか。そして、朦朧とした頭に電撃を流し込まれたような、衝撃的な回答が帰ってきた。

「単なる『武術』だよ」

目を見開き、口をポカンと開け、上条を見る。

体を無理やりにでも動かして戦闘態勢を築かなければいけない筈なのに、今度は体どころか頭までもそれを止めてしまった。

この少年は今なんと言った？

「ただの武術だよーじゅーつー。空手、柔術、拳法……その他にも色々あんだけどな。世界中にあるありとあらゆる武術さ。さつきお前が横っ飛びに避けた時は『虚実』……まあ簡単に言えばフェイントか。お前がそちに避けるように誘導して想定していた一撃を入れたんだ。まあ『かなり特殊な鍛え方』をしてるからその恩恵もあんだだけだな」

言っている言葉すら理解出来ない。『ありえない』の一言が神裂の脳内を支配していた。

普通の人間が武術を習えば、習っていない人間と戦った場合、勝つ確率が大きく上がる事は分かる。単純に『経験』『知識』『力』が違う。

だが神裂は『聖人』なのだ。

ただ単に武術を習ったから、程度で勝てる相手ではないし、その道を極めた『達人』であつたとしても互角にやりあうのがやつとの筈だ。そもそも『人間の限界』を超える方法が無ければ聖人に打ち勝つ事は難しい。なのにこの少年は、圧倒的な差で神裂を蹂躪する。まるで『何の力も持たない普通の女の子を追い詰める』かのように。

「ザツ、と言う地面を擦る靴の音が響く。上条がまた一步、神裂の側に寄つた音だつた。
「ツ!!」

神裂が最後の力を振り絞り、全力で抜き放つた真説の『唯閃』を内した刀の鞘は、上条の鳩尾に向かつて正確に放たれる——が

「遅い」
神裂が振るうよりも一瞬早く、上条の蹴りが七天七刀を真横に蹴り飛ばす。

あまりの威力に余波を受けたただけのはずの神裂の手にかなづちで思いつき殴られたような痛みが走る。

「がッ……!!」

「俺を『殺してでも』止めたいんならせめて刀を抜くべきだつたな。刀が鞘から抜けないように調整するのに一瞬動作が遅れた。まあお前が刀を抜いたところで負ける気はないけどな」

神裂はもう一度立ち上がろうとするが、どうしても力が入らない。

まるで体の間接一つ一つに杭を打ち込まれたかのように、体が全く言う事を利用してくれない。

「ッ!?!」

次の一撃が来る……!そう考え、身構えようとしたが

「……………?」

こない。来るはずの一撃が、いつまで待っても来ない。

「……………」

何とか力を振り絞ろうとする神裂に対し、上条は相変わらず神裂の前に立っているだけだった。だが上条の体から放たれる見えない筈の圧倒的な威圧感が、全てを物語っていた。

「……………あ」

「……………逃げてみるよ」

上条は、言った。

「今からお前達がインデックスにやってきた事をそのままお前達にやってやる。一年中追い回して、見つけるたびにポコポコにして『圧倒的な敵に追い回されて、巻き込めなから誰にも頼れない』って言うあいつが見つけてきた地獄を見せてやる」

神裂は、震えた。

親に悪戯を見つかつた子供のようになり、先生に叱られる小学生のようになり、だがその身を震わせる恐怖は、上条に蹂躪される、と言う認識からではない。

自分達がインデックスに見せてきた『偽りの幸福（地獄）』を知つたからだ。

「——ッ!?!」

「逃げろよ『聖人』」

神裂は、動かない体を無理やり動かして後ずさろうとしたが、やはり体は動かない。『戦う』と言う意思は、もはや無かつた。魔術師という仕事をこなし続け、数々の修羅場をくぐつてきて、強いはずだと認識していた神裂の力は、そして精神は、粉々に砕けそうになつていた。

「それがアイツにとつて最高の幸福ハッピーエンドだつてんなら、今すぐここで証明してみろ!!」

その言葉を引き金に、神裂はガクリと下を俯き、ひとつ、またひとつと、大粒の涙をポロポロと流し始める。分かつていた筈だつた。気づいていた筈だつた。こんなものは偽りの幸福に過ぎないと。喪失する苦しみを幾ら減らした所で、幸福な出会いを与えない限り意味はないと。

記憶を無くさなくてすむ方法を見つけない限り、インデックスは苦しみ続けるだけだ。だが喪失が与える痛みは、あまりにも耐えがたいもので、あまりにもこらえ難いも

ので、いつの間にかインデックスから逃げていた。彼女が纏う不幸に巻き込まれまいとするように、逃げた。実際に追っていたのは自分達だと言うのに。

そして、彼女は孤独になった。一番側にいなければいけなかった筈の親友(自分達)からも逃げられて。

「う、ああ・・・あああああああああああああああああああああああああああああッ!!」

神裂は吼えた。それは後悔による懺悔か、それともインデックスと同じように、こらえ続けて来た何かが溢れ出たのか。

・・・どれほどの時間がたっただろう。一時間にも思えるし、一分も経ってない様にも思える。

やがて、声が嘎れるまで叫び、涙腺が嘎れるまで泣き腫らした神裂は、完全に全身の力を抜いた。

気力など、とつくの昔に無くなっていた。
「・・・・・・・・」

上条は、そんな神裂に上から手を伸ばす。

敵の攻撃は避けなければならぬのに、ある程度体力は回復しているのに、神裂はまるで亡者のような目で上条を見つめるだけだった。

そして、その手が神裂の頭上に置かれ

「やつと叫んだかこの大馬鹿野郎」

頭を撫でられたと認識するのに、数秒かかった。

「……………え」

頭を上げようとするが、上条の強い力に押さえ付けられ、うまく上げる事が出来ない。「つたく。そんだけ後悔してるなら、そんだけ溜め込むモン溜め込んでんなら、とつと吐き出せてんだ。そんな状態でアイツの事を想ったって、最高ハッピーエンドの結末を望んだって、上手く行く筈ねえだろ？」

上条は、言った。それは、導師やアイツの言葉を借りた、ただの受け売りに過ぎない。その場に、その時に適した言葉を選んで、なんて事もしないし出来ない。上条が言いたい言葉を、感情を旨く表現できない時『あ、そういえばこんな事言ってたつけ』程度に参考になっているだけの、説法とはとても言いがたい言葉の紡ぎ。

だが、今この場で神裂の耳は、心は。上条の言葉を、まるで砂漠で何日も遭難した遭難者に突然降り注いだ神の恵みスコールの様に、何日も取つていなかった水をゴクゴクと飲むように、素直に取り込んでいった。

「辛かったんだろ？ 怖かったんだろ？ だつたらその矛先をインデックスに向けちゃダメだ。アイツはもつと辛いし、もつと怖い筈だから——だから」

神裂は、見た。

上条は、自覚できたら、自分でもビックリする位に優しく微笑んでいた。

「救つてやろうぜ、今度は俺達の番ターンだ。今からお前に見せてやる。インデックスは記憶を失わなくても良いんだって事を。あいつの幸福は、親友に敵として追われ続ける、なんてくだらないモンじゃないって事を。誰もが笑つて、誰もが望む最っ高な幸福な結末なんだって事を!!」

神裂には、理解できなかつた。

上条の言葉が、ではない。

この少年だったら捻じ曲がった運命さえ変えてゆける、そんな根拠も確証もない期待に胸が溢れそうになっていた事が。

「だから、今は寝てる。体を休めろ。俺が言うのもなんだけど、インデックスが最初に目にする親友の姿がそんなボロボロじゃあアイツも辛いだろうからな」

そう言うと、今度こそ神裂の後ろ首に手刀を浴びせ、その意識を奪う。倒れ付した神裂の顔は、涙でぐしゃぐしゃになっていて、とても綺麗、とは呼べた物ではなかつたが

「.....」

笑っていた。明日への期待に、まだ見ぬ最高の結末への期待に、まるでセイントⅡ

ニコラを待ち続け、結局寝てしまった子供のようになり、笑いながら、気絶していた。

「………で？　いつまで見てる気だよエネ」

『何も無いはずの空間』に向かって声を掛けると、まるで最初からそこにいたかのようにエネが姿を現す。その左手には炎の魔術師、ステイルⅡマグヌスの襟首が握られていて、エネが歩くと平行してその身をコンクリートの地面にズルズルと引きずらせる。

どう見ても気絶していた。

「う、あーあ………やっぱり気づかれましたか………」

「あたりまえだボケ。『無機物が一切傷つかない』というか『無機物の異様な再生力』の時点でおかしいだろうが」

そう、神裂とあれだけの戦闘をおこなって、途中から周りに一切被害が出ていなかった。

物理的に考えてありえない。ではどういう事か。答えはありえないほど単純で『第三者の魔術的割り込み』に決まっている。

今この場を支配しているのはステイルの人払いではない。エネの『人払いを含めた空間支配系術式―無機物保護タイプ』だ。

なんでも『重要な建造物や書物を守りつつ戦闘を行わなければならない』為に開発した術で、『榎本貴音』のオリジナルらしい。

伯父いわく『『こちら』の魔術師ではそう簡単に再現できないとても高度なもの』だぞうだ。『風水』という職業(趣味)も理由なのか、貴音は空間支配系の術式が得意だった。上条はエネに引きずられても気絶したままの不良神父(馬鹿)を指差して言う。

「大方、そいつのルーンカードの術式の解析や応用に夢中になって『うくん、とりあえず補助術式かければあとは大丈夫だよな』ってとこか？」

「まったく、だったらもつとサポートをだな……と上条が続けようとして、気絶した神裂に何枚かお札を貼っていたエネが割り込んだ。

「違うー！ もう解析も応用術式の開発もとつくの昔に終わってますよ!! 私はご主人がどうやって人を導くのかじっくり観察を……あ」

「おい、ふざけんなテメエ！ 手が空いてんならもつと力貸せサポートしろゴルア!! つーかおまえ『速攻でケリが付いた』癖にしばらく『遊んでた』だろ!!」

エネの肩がビクリと振るえ『なななななな何の事でふか!?!』と呂律をまわす事すらできない状態におちいるが、上条はお構いなしに続ける。

「最初に舞い上がって爆発したような炎の渦。あれはコイツがやったんじゃないよ。お前がコイツの魔術を暴走させて自爆させた』んだろ? 確かお前炎系の術式も使えたよな? それの応用で割り込んで、インデックスを追い込もうと死角からコイツが術式を発動させた途端ドガアーン! ってな具合か。多分初撃でケリが付いたんじゃないの

か？」

「ギクツ」

なにが「ギクツ」だ、と上条は思う。と、いかかよつぼどの馬鹿ではない限りそういう結論にたどり着くだろう。

(恐らく) 自分自身の術式ではそう簡単には燃えないようになっていたであろうステイルの修道服は炭となり、八割以上が消え失せていて、その白い肌のほとんどが露出している。赤髪に染めた金髪は見るも無残な事に、まるでスポーツ刈りのように頭皮の根元ギリギリまでススになっていた。

おまけに(何故か) 下着である白いブリーフは一切損傷しておらず、今のステイルの状態を一言で表すと『スポーツ刈りで白ブリーフ一丁のまま胸の辺りにお札を貼り付けられて女学生に引きずられる変態』となる。

ギャグマンガなら『チーン』という効果音でも付いてきそうな勢이었다。

「はあ……で? ちゃんと『遊びの成果』は出たんだろうな?」

「え、ええ! ばっちり『パーフェクト』です! 私にかかればお茶の子さいさいですよ!」

ステイルの姿をあらためて見て色々と気がそがれた上条は、ため息交じりにエネに尋ねる。

(ご主人だつて『力の本質』を『武術』でごまかしていたくせに)とぼやいていたエネは、ホツとしたように五枚のお札を右手に広げた。その仕草はランプの手札を見やすいように展開させるのに似ていた。

『力』も『制御』も『時空』も『結界』も『調律』もばつちりです!いつでも出来ますよ!! 相手が『魔人』という事もあつて作るのにホンの少しばかり手こずりましたが……こいつらの情報を得て調整したので。間違いないはずです」

エネは自信満々の笑みで胸を張つて告げる。自分の腕に正々堂々自信を持つて答える事ができるエネのあり方が、実力が、どちらかといえば謙虚で自分の腕に自信が無い上条には羨ましかった。実はこれでもホンの少しも本来の実力を発揮してはいないのだ。いや、正確には『出来ない』のだが。

「結構な事で。んじゃ、行くか」

「はい!」

今頃一人で銭湯に入っているはずのお姫様インデックスは預けておいたお金で銭湯にある飲料や軽食などを食い尽くしている頃だろう。結果的に大遅刻した形になるわけだが、さて、どんな言い訳をしたら頭を齧られずにすむだろうか。

神裂をおぶり、風呂桶を片手で持った上条はそんな事を考えながら目的地へと向かつて行く。

幻想喰いが終わりを創る the_place_of
somebody's_death.

「………で？ 何で『ここ』なんだ？」

「仕方ないでしょ？ 一刻も早くインデックスの苦痛を取り除く為に最適な術式の形成場所が『ここ』だった………これでも学園都市全体を探索サーチしたんですから」
上条当麻は明らかに面倒臭げな、ゲツソリとした不満げな声を出す。エネも居心地の悪さに近い罪悪感を感じている為か、顔を困ったように歪ませながらも床に方膝と両手を着き、セツセと『下準備』を入念に重ねていた。ボロボロの畳に空となったビール缶がいくつも転がり、灰皿にはタバコの吸殻が山盛りにされていたその空間は、いやや完全にエネ貴音の術の支配下にあつた。

だが………

「なんだって『窓の無いビルの中』なんだか………」
「だから私に聞かないでください!!」

神裂達が上条を襲撃し、返り討ちにあつてからまだ数時間しか経っていないが、エネ曰く、今すぐにでもインデックスの呪術を解く必要があると言う。

早々早急すぎると思った上条だが

「インデックスが記憶を失う呪術の余波を受けるまで待つ……と申すのも良いし、むしろそれが一番安定しますが、それだと『この呪術を仕掛けた術者の脚本通りシナリオに事が進む』危険性があります」

「えつと……」

エネの思考の根本まで読む事ができない上条が困惑の声を上げると、エネはご丁寧に作業を止めて座ったまま上条のほうを振り返り、まるで先生のように解説をする。

「魔術師たちが何も知らなかったとしますと、こいつら『魔術』側の頂点……『必要悪の教会の長』がこの残酷な首輪システムをインデックスに掛けたと考えるべきです。……そして、インデックスに十万三千冊の魔道書を記憶させた後か前かは分かりませんが、とにかく呪術首輪を施し、手綱を握った……。分かりませんか？

『そもそもなんでそんな面倒臭い回り道をする必要』がありますか？ 自分の手元に置いておくのが一番安全なはずなのに」

そう言われて、上条はようやく気づいた。

インデックスの脳内にある十万三千冊の魔道書があるならば、世界を歪めてしまうほどの力を持った魔道書があるならば、その力を用いて自衛に徹した方が良い筈だ。『首輪』なんて面倒臭いものをつけなくても、否、例え付けたとしても手元においておくの

が一番安心できるはずだ。『敵』に持ち去られて利用されると言うリスクは、それだけでグリーン、と減る。

なのに教会はインデックスをわざわざ異国の地へと逃がしている。一年周期で回収できるとは言え、そもそも異国の地に行かせるだけのリスクを背負う必要がない。

そう考えると、色々疑問がでてくる。教会がインデックスの手綱を握った程度で安心しているのは何故だ？教会がインデックスを自分たちの手元に置いておかないのは何故だ？

教会がインデックスを本気で捕まえようとしなはいはいずれ手元に帰ってくるからだとして、わざわざリスクを背負ってまで異国の地にインデックスを追い詰める理由は何か？わざわざ『魔術』自分達と相反する『科学』側の頂点である学園都市に……
「学、園都市……?」

その単語が上条の中で疑問符を浮かべた途端、脳内に電流が走ったような気がした。「気づきました?」科学の最先端に行く学園都市などにインデックスを放てば『一年周期で記憶を消さなければいけない』などという嘘がばれてしまう可能性がありますよね。これは決定的です。いや、そもそも学園都市の外でも普通に知られているものですね」

つまり、だ。

一年周期で記憶を消さなければいけないなどと言う嘘がいずればれる事を『分かっている』教会はインデックスを野に放ち続けていた。と言う事になる。

『例え嘘がばれたとしても構わない理由』とは何だ？

「……いくつか仮説は立てられるけど、どれもこれも推測にすぎませんね。確実に言えるのは『いずれ首輪が壊されると言う事を教会は分かっている』と言う事だけです」
そして、ここからが肝になります。と、エネは一泊おいた後、布団に寝かせてあるポロポロの（原因は自分達だが）魔術師二人を見て（炎の魔術師を見て噴出しそうになるのをこらえながら）言った。

「もし仮に、インデックスが記憶を失わなくて良い。と言う事実をインデックスの親友だったその二人が知ったらどう動くと思いますか？」

質問の意味が分からなかった。そんなの助けるに決まっている。神裂はインデックスを救う為に己を見失うほどの苦痛を抱え続け、ステイルにおいてはインデックスを守る為なら例えどの誰だろうと躊躇いも無く焼き尽くす位の覚悟を持っていた。

上条は双方と戦ったからこそ、その思いの丈を知っている。『直に肌で感じた』

例え教会に反旗を翻したとしてもこの二人はインデックスにとって最高の結末を用意する為に奮闘するだろう。

「そうですね。だからこそ『最も相応しいタイミング』で助けようとするでしょう……」

具体的には『記憶を消すように言われていた三日後の午前零時』に

「いや、だったら俺達もそのタイミングで助けるべきじゃねーの?」

上条は軽口を叩くような口調で言った。エネの実力を誰よりも分かっているからこそ、自分の否定的な意見をぶつける事で解説を要求し、話を先に進める為に。

「先程も言いましたよね? 『首輪を掛けたのは教会の長』で『いずれ壊される事を前提に入れている』そして」

「そして?」

エネは懐から二枚の札を取り出す。

一枚はまるで血の様な色で呪文が何十にも書かれた札。もう一枚は中央に刀の絵が描かれていて、その周囲がまばゆく光っている札。

「そして、インデックスの呪術を解く確率が一番高いのは『教会が意図して監視に付けたこの二人』だと言う事。そしてこの二人はインデックスを助ける為に『必ず指定日の午前零時に呪術の解除を行うだろうと言う事』そしてこれら全てが『教会の脚本シナリオ通り』だとしたらどうなりますか?」

「——ッ!?!」

「考えてみれば不可思議な事だらけですよ。そもその話をすれば『なぜインデックスに十万三千冊もの魔道書を記憶させたのか』と言うのも気になります。完全記憶能力が

あるから、と言う単純な話だけではないような気がするんですよ。もつと何か教会……いや『魔術サイド全体を震撼させるような事実』が隠されてる様な気がします」

一瞬、本当に息が止まりかけた。インデックスを取り巻く環境に絶句して、では無い。普段はそこらの小学生のようなりアクションしかせず、思考も中学生並みのエネの『一瞬でそこまで看破した圧倒的な実力に舌を巻いて』だ。

一体この女学生は何者なのか？というもう何回考えたかも分からない疑問が上条の頭に浮かび上がってくるが、結局いつもの様に消化不良で消えてしまいうだろう事が伺える。今までが、ずっとそうだったように

「結論を言いますと。本当の意味で最高の結末を導くならばインデックスの呪縛を解くだけではなく『インデックスを縛り付けている教会を出し抜く』必要があると思います。いくら救ったところでそれが狐の思惑通りでは何の意味も無い、それどころか今以上に厄介な事になる可能性すらありますから。インデックスにここまでの積と枷を強いた『必要悪の教会』という者共の長がまともな人間であるとはとても思えないわけですよ」

「貴音……お前……そんなに頭良かったっけ？」

「IQ一六八のご主人には負けますけどね」

エネは人差し指と中指で挟んでいた二枚の札を放って、血の色の札を天井に。刀が描

かれた札をたたみの上に貼り付ける。

瞬間、部屋の中が異様な空気に包まれた。立っている場所も、周りの風景も、何一つ変わっていないのにここでは無い何処かズレた場所にいる様な『曖昧な感覚』が部屋を上条を、世界を支配してゆく。

「——コホン。ゆえに『あいつらが計算に入れていない日付に』インデックスを救出します。私の予想が正しければ、私の術で解呪して、もしくはご主人の右手で壊してそれで終い。なんて簡単な事にはならないはず。きつと何かあいつらなりの策があると思います。……『一応』そう簡単には首輪を壊されぬ様な仕掛けが。そしてそれを破られた上で『教会が余裕でいられる理由』がある。それを探し出す……それさえつかめば教会が何を考えているか、その全貌が少し位は見えてきます」

「そこまで言うとなエネは懐から新たな札を取り出す。描かれているのはカツ！ と開かれた一目と、一耳。」

エネはそれを部屋の中で寝ているとある人物へと投げる。まるで紙飛行機を飛ばすように滑空した札はその人物の真上でピタリと止まると、ムクリ、と起き上がるようにその身をタテに起こした。それと同時に、部屋が青白い光で包まれる。

「さて、ではそろそろ始めますか」

いつの間にかエネはその身を起こし、その右手に数枚の札を挟んでいた。上条には分

かる。その札一枚一枚に込められた、途方も無い力のうねりが。現在の上方では敵わない、榎本貴音の力の鼓動が

「行きますよ主人！私達でインデックスを地獄の底から引きずり上げて見せましょう！！」

それを合図に、まだ見ぬ敵との、インデックスをめぐる戦いが、幕を上げた。

「……ん、まずは首輪の誘発から始めるましょう——電脳『耳ノ壁、目ノ障子』」

エネは札を挟んだまま、右手を寝ているインデックスの方へ向けると、そのまま目には見えない「何か」を送る。目に見えない何かは、寝ているインデックスの真上——空中に起き上がるように浮かんでいる目と耳が書かれた札にスツ、と入り、速やかにその効果を発揮する。

パアアアアン！！ という風船が破裂したような音を響かせて札がその身を無に帰したかと思えば、次の瞬間にはインデックスが札の放っていた青白い光に包まれてその身を今まで札があつた場所へと浮かした。

エネが今行っているのは首輪の探索、ならびに術式の解明。それも、インデックスには一切の負担を掛けずに済ませ、さらに、どんな手を使おうが逆算する事は不可能、というところでもない物だった。おまけに「可能ならばこのまま情報を抜き取れるだけ抜き取った後、一気に破壊してしまいませんか。手順を踏んだら踏んだで面倒臭い事に

なりそうですからね」などと余裕な表情でエネは言っている。

これほどまでに高度な魔術となると、普通の魔術師は勿論、専門の魔術師でも出来るかどうか分からない。

「……………行けるか？ エネ……………エネ？」

「……………」

エネは、一瞬だけ目をスツ、と細めると溜息を付き、やれやれ……………、と言った風にその身を起こし、そして、上条が知る彼女にしては珍しい一言を言った。

「やはり、そう簡単には行きませんか」

エネがそういつた瞬間、バオオオオオオオオオオ!!という轟音と共に物凄い衝撃が上条とエネに向かって襲い掛かる。だがそれも、師匠達の手で鬼のように鍛えられていた上条にとってどうと言う事はない。立ち眩む事さえない。空間自体も、エネの術式で支配、補強されている為か、軋む音さえしなかった。

そして、エネの術で浮いていた筈のインデックスの体が、まるで骨も間接も無い、袋の中にゼリーが詰まっているかのような不気味な動きでゆっくりと起き上がる。

インデックスはその両目が静かに開く。その目は赤く光っていた。それは眼球の色ではない。

人間らしい光は無く、少女らしい温もりが存在しないそれは『眼球の中に浮かぶ、血

のように真つ赤な魔方陣の輝きだ』

「——警告、第三章第二節。Index—Librorum—Prohibitorum——禁書目録の『首輪』第一から第三までの全結界の貫通を確認。再生準備……失敗。『首輪』の自己再生は不可能、現状、十万三千冊の『書庫』の保護の為、侵入者の撃退を優先します」

「……予想通りって奴か？」

「いえ、予定通りです……全く『敵』は相当小細工が好きらしいですね……」
エネはどこから取り出したのかハチマキを巻いて気合を入れ直す。

「……インデックスに『歩く教会』以外の魔力が全くと言って良いほど感じられなかった理由はおそらくこれです。『完全記憶能力』の秘密について知り『首輪』を外そうとした者。もしくは『十万三千冊の魔道書』を無理やり手に入れようとした者を、文字通り『禁書目録』として口封じするための『自動迎撃術式』……それに全ての魔力を奪われていましたか」

そしてそれは同時にそれ以外の用途で不用意に魔術を使えなくするための『第二の首輪』として機能すると言う事を示している。

「——『書庫』内の十万三千冊により、防壁に傷を付けた魔術の術式を逆算……しつぷ……」

ぎこちない動きで、なのに高速で、インデックスは必死に言葉を紡ごうとしていた。

「ちよ、!?! おい、これって……!!」

「対象の動きを色んな意味で完全に止める『無限洗脳術式』——月読命ツクヨミです。……安心してください。これでもかと言うほど入念に準備を重ねたから、インデックスさんに影響は無いはずですよ……即発動させられる様な物ではないと言うのがこの術のネットワークですかね? 対象も一人が限界ですからね」

月読命(ツクヨミ)——日本神話の国生み神話に登場する二神から生まれたその月の神は、ありとあらゆる物を『読む』力があつたという……

それをヒントに生み出し、改良に改良を重ねたエネの『月読命』は、相手のありとあらゆる行動、思考、心理、魂の動きでさえも先読みし、相手よりも先にその行動に反発する魔力を割り込ませる事でエラーを誘発させると言うものだ。

簡単に言えばイス取りゲームで相手が座ろうとしている席に相手より先に座ってしまうのに近いだろう。それを連続で、何十回何百回何千回、ありとあらゆる事にそれを行う事で、相手の動きは勿論、思考、魂でさえも縛る事ができる、エネの奥義の一つ。これを応用すれば、相手に自分の思い通りの行動を取らせる事も可能となる。

だが最も恐ろしいのは、十万三千冊の魔道書を有する禁書目録の力をもつてしても対応は勿論、逆算、解析すら出来ないという事だろう。

上条はあらためて自分に懐いている少女も『あちらの世界の住人（本人は全く自覚が無いようだ）』なのだと言う事を思い知らされる……。

まあ師匠達いわく『お前も十分過ぎるほど『こっち』に浸かっている』らしいが、やはりいつまで経っても慣れる気はしない。と、いふかなるべくなら慣れたくない。

「ふっふーん♪ どうですか？ どうですか？ 凄いですか？ 凄いでしょ凄いでしょ!!」……ほめても良いんですよ」

「ドヤ顔ヤメロ！ つーかとつとどうにかしろ！ この先考えて無かった。とか言ったらぶっ飛ばすぞ teme!!」

「む、失礼ですね……。……だったら見てください！ 出来る子な私のさらなる秘策を！」

言うが早いか、エネは両の手に挟んでいた白紙の札に力を込めると自分の目の前に集め、まるで没になったページをゴミ箱に捨てようとする漫画家のようにグシャグシャに握り潰す。両の手を放しても宙に浮かんだままのそれは、なんだか不恰好な脳に見えるた。

「ご主人！ 私はこれから直接あの『首輪』の中に入って情報を抜き取れるだけ抜き取った後『内側から首輪を破壊』します！ 不完全な月読命だけでは少々不安ですから。それまでの時間稼ぎを頼みました!!」

「どうやらエネはインデックスに仕掛けられた首輪の中に入って直接的な強診ハツキングと破壊を行うつもりらしい。」

それは、学園都市の電気系能力者の行う電子信号による物や、精神系能力者のやるような精神操作ともまた違い『その機能に間接的に摂り憑いて、強引に主導権を奪い取る』という物だった。

「でもそれって……!」

だがそれは当然、精神、魂、体、さまざまなものを危険に晒すと言う事になる。最悪、エネと言う存在が『首輪』の中にあるであろう迎撃システムで消去されてしまうかもしれない。

だが

「平気ですよ」

エネは、いつも通りの笑顔で言った。

「大丈夫です。いつてきますよ主人!」

そして、エネの姿が、上条当麻の前から、消えた。

「……………」

真つ黒い稲妻で覆いつくされた暗黒の世界の中心。人では表現のしようが見つか

らない『暗黒物質ダークマター』の様な不気味な原始と分子（そう表現して良いのかどうかすら定かではない）で支配されつくされているその空間は、まるで一つの宇宙のようだった。四方八方見渡しても『それ』しかない。上下左右の感覚も無い。

普通ならば聞いただけで発狂しかねない様な音とも歌ともとれる『何か』がギシギシと脳を破壊する様に辺り一面に響き渡っている。ここは、禁書目録の少女に科せられた『首輪の世界』。エネの術で首輪の中の構成システムに合わせて自分を具現化、調整し、あいまいな状態で均衡させる事でよりリアルに認識できるようになった空間。その中でエネ貴音は電腦少女としての自分。エネに戻っていた。

常人の頭では理解できない、理解してはいけないものだらけの世界にたった一人で現れたエネは、その歪んだ世界を認識して、なおも平然としていた。

行く先などどこにも無いとも思えるその空間で、それでもエネは確信を持つかのように一歩前へと踏み出して

瞬間、エネの右腕が闇に飲まれた。

「？」

エネの右腕を肩の部分まで食いちぎって前方へと飛んだ獣のような匂いを漂わせる『それ』は、文字通り不恰好な姿をした貪欲な獣にも、童話や神話でしか見ないような凶暴な竜にも思える姿をしている。

そのグジュグジュと蠢く中途半端に液体化した腐りかけの肉みたいな体を作り上げている物質が、この世界を構成しているものだと同質だと気づくのに一瞬。餌を求める猛獣の如く、再び獣がエネに襲い掛かるのにも一瞬。

「なにするんですか？　まだ嫁入り前の体なんですよ？」

エネは残った左腕で一枚の呪符を眼前に投げつける。獣のひたい部分に当たったその呪符は、すぐさまその効力を発揮し、獣を破裂させた。ドツ、プアアアーン！という大きな水風船を割った時のような音が響く。

そして、その破裂音が終わるよりも早く、今度は何十何百何千という数え切れない位の白い閃光が、エネ目掛けて襲いかかって来た。

「弾幕ですか？　それで」

その閃光がエネの肢体を貫く前に、左手でありつただけの呪符を掴むと、自分の頭上へと放り投げた。桜吹雪のようにエネのあたりを舞う数多の呪符は、襲い来る閃光を鋭角な角度であちらこちらへ飛散させてゆく。さながら、キューで打たれたビリヤードの球が盤の角に勢い良くぶつかって跳ね返るのに似ていた。

そうしている間にも、次々と十万三千冊の魔道書で構成された侵入者撃退システムが、エネを排除せんと襲いくる。蠅の王をモチーフにした巨大な杖から放たれる、巨大な虚球の闇炎がエネを焼きつくさんと迫り、審判を司る四大天使が持つ剣が、天罰を

与えるべくその刀身から放たれる絶海不可避の斬撃を浴びせ 海の神がもつ三叉の槍が、神の子を処刑するかの様にエネに向かつて直進する。

勿論、それを黙ってみているエネではない。相反する属性と性質を持つ呪符に込められた力をレーザーのように束ね、虚球だけでなくその直線状にある杖まで貫き、絶対不可避の斬撃を呪符の力として吸い取り、拳句の果てには裁きの剣にすら呪符を放ち、本来無尽蔵なはずのエネルギーすら枯渇させ、迫りくる三叉の槍には逆に力を送り込んで制御を乗っ取り、己が術として利用する。

それだけでなく、一瞬でも隙を見つければ空間に力の楔を打ち込み、首輪の制御を乗っ取らんとする。観客も、明確な敵も味方も、いつも側にいる相方の姿も無い舞台（ステージ）で、少女はただ一人戦い続けていた。

少年と共に、たった一人の少女を地獄の底から救う。ただそれだけの為に、右腕を失った少女は、死力を振り絞って己が術を振るい続ける。

少し、また少しと、首輪の制御化が徐々にエネの支配下に置かれ——そして——

——エネの力が、内側から破裂した。

考えてみれば当然の事だった。エネはこの空間に赴く前にも常識はずれの術を何回も駆使し、首輪の中に乗り込んでからは右腕を失った状態で魔神級の術式に対応し続

け、拳句の果てにはこの首輪の制御を乗っ取ろうと首輪の内にある力を取り込み、自らの力を符に宿して放出し続けていたのだ。

口内に湧き上がる大量の力の逆流に、ガクリとその膝を付く。

「……………吐血。この体で？」

だが、それでも少女の瞳はその力を失っていない。

力を符に宿し、首輪の制御を乗っ取ろうと魔神級の術式に対応しながら空間を己が制御下においてゆく。が、その勢いはまるで限界がきたマラソン選手がなおも走ろうとする様にもみるみる弱っていき、いつしかエネの呪符の力は、首輪の防衛機能のそれを下回っていた。

そして、エネを何十という魔神級の術式が取り囲み、その力の矛先を、容赦なくエネへ向けて解き放った。この世のものとは思えないほどの閃光と、もはや音にもならない轟音が響き渡る。

首輪の中で戦い続けたエネ貴音は、最終的に何十何百という魔神級の術式に貫かれ、切り裂かれ、打ちのめされ、今やその動きを完全に止めていた。虫の息、という単語を表す状態にこれほど相応しいものはないだろう。

「……………情けないですね……………」

獣の臭いを感じたエネが倒れ伏したまま顔を上げると、目の前に最初に自分の右腕を

食いちぎった獣が立っていた。

ただ、その大きさは、最初とは尋常ではないほど桁違いだった。制限など無いと思える空間において、それでも空間そのものを満たしてしまうのではないかと思わせるほどの巨大な獣。

知る者が見れば北歐神話に伝わる『神喰らいの獣フエンリル』を脳内で想像しただろう。

獣は、そのあまりにも大きな顎を開け、餌へと喰らいつかんと下を向く。

飲み込まれるその瞬間。エネは、確かに笑っていた。

「・・・・・・・・.. ったく。エネのやつ、勝手に行つちまいやがって・・・・・・・・.. そりや上条さんは首輪の中に潜り込むなんて事出来ませんし？ こうするのが一番良いって事も分かるけど・・・・・・・・.. 分かるけどさ」

未だに訳の分からない単語を高速で連呼し続けるインデックスの側にあぐらをかい

て座っている上条当麻は、誰に言う訳でもないにも拘らず、先ほどからブツブツと不満を漏らしていた。目の前にはエネの作り出したグシャグシャの紙束がふよふよと宙に漂っている。

儀式場として固定された窓の無いビルの一室（製作者、アレイスター・クロウリー）にいるのは自分と、エネの貼った護符が効いているのかあれだけの騒ぎがあつても一向に起きる気配の無い魔術師二人（片方ハゲ）。そして、エネ・i・n・i・n・デックス（の首輪）。

エネがインデックスに科せられた首輪の中に潜つてからまだ十分も経つてはいないのだが、この少年はどうしても少女が自分を置いて行つたのが不満らしい。

勿論、エネの行動が最良に程近い線を行つている事も、自分がここにいなければいけない理由がある事も分かるのだが、なんとというか『そういうのとはまた別の所』で憤りを感じられずに入られなかった。

だが、その怒りの矛先は、最終的にはエネではなく

「……………クソツ」

自分に向けられる事になるのだ。

それから少しして、憤つた所でノドが渴くだけだと認識した上条は水でも飲もうと台所（という名の極小スペース）へと赴いて、自分の背丈の半分ぐらいしかない小さな冷蔵庫を開ける。中に入っていたのは大量の発泡酒とおつまみ。申し訳ばかりのパック

牛乳と、中途半端に消費されている調味料の数々。

「・・・・・・・・」

もうなんかツツコむのも面倒臭くなった上条は、奥のほうに一本だけあったミネラルウォーターのペットボトルを取り出す。使っていないくせに、何故か中身は三分の一ほど無くなっていた

ため息を付きながらペットボトルの蓋を開け、その口を付けて中に入っている水を一口、二口飲んだところで

ドオン!! と、何かが爆発したような音が儀式場に響いた

「ゴホッ! ゲボほっ!!」

驚いた上条は思わず口に含んでいた水を畳の上にブチマケてしまう。

何かとてつもなく嫌な予感がして、全力でインデックスへと視線を移す。

「・・・・・・・・」

少女の姿には何の変化も無く、その魔方陣が映し出された虚空なる目も変わっていない。

ただ、あれだけ魔術的な単語を連続して紡いでいたインデックスの口は、今や一言も言葉を発しなくなっていた。背筋に氷を突っ込まれた様な感覚が上条を震え上がらせて、その動きを停止させる。

「——ッ！ エネ？ おいエネ！ おい！！」

作業の邪魔になってはいけなないと、今まで呼ばなかった電腦少女のパートナーの名を脳内で連呼するが、返事は無い。

あの小憎たらしいまでに明るい声は、ホンの少しも聞こえてこない。

最悪の想像をしてしまいそうになる思考を、姐さん直伝の拳を己の額に当てる事で撃ち払う。

ドガッ！という音と共に自分の頭が体ごと後方によるめく代わりにわずかばかりの平静さを取り戻した上条に

「自動書記への攻撃の対処に成功。引き続き、侵入者の破壊を続行します」
ヨハネのペン

白い紅茶のティーカップみたいな修道服を着た少女の機械的、業務的な一言と

「——侵入者個人に対して最も有効な魔術の組み込みに成功しました。これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動。侵入者を破壊します」

バキン！という音と共に部屋の端から端まで届く巨大な黒い雷のような亀裂が現れ、その中から『何か』がこちら側を覗き込んで

ゴッ！！ と。亀裂の奥から光の柱が襲い掛かってきた。

それはもうたとえるなら直径一メートルほどのレーザー兵器に近い。太陽を溶かしたような純白の光が襲いかかって来た瞬間、上条は思わず右手を自分の顔の前に突き出

した。

じゆう、と熱した鉄板に肉を押し付けるような激突音。だが、痛みは無い。熱も無い。まるで消化ホースでぶち撒かれる水の柱を透明な壁で弾いているかのよう、光の柱は上条の右手に激突した瞬間、四方八方へと飛び散っていく。

だがそれでも『光の柱』そのものを完全に消し去ることは出来ない。しくった、と上条は思った。いくつかの例外を除き、異能の力を問答無用で消し去る上条の右手だが、実は『一度に消せる量』に制限がある。そしてこの光の柱は単純な物量だけではなく、光の一粒一粒の質さえもバラバラなのだ。

『以前それで痛い目を見た事があるからこそ』、上条は苦悶の表情を浮かべながら畳につけた両足に力を入れてその場に押し留まる。おそらくこの光の柱は元を断たない限り幾らでも無尽蔵に上条を襲い続ける。右手で抑えるのではなく、高速で移動し続けてインデックスを翻弄するべきだった。と、上条がそこまで考えたところで、視界の端にエネの術で未だに眠っている二人の魔術師が映る。

(ツ!?) ダメだ．．．．そんなことしたらあいつらまで巻き込みまう!! ただできえ弱ってるのにこんな攻撃が少しでも掠ったりしたらそれだけで命に関わっちゃう!!)

別にあの魔術師たちを助ける義理は上条には無いはずだ。恐怖に負け、自分に負け、少女の側から離れて今日の日まで騙し、襲い続けてきた魔術師を気に掛ける義理など無

いはずだ。

(………ツけんな——)

だが『そんなちつぽけな事』はお構いなしに、上条は左手で光の柱を消し続ける右手の首を巨大な砲台を固定するようにしっかりと支える。

(ふぎツけんな!! ンなもん最^{ハツ}高^ビの結末^ドなんかじゃねえじゃねえか!!)

そうだ、あの二人はたった一人の少女を助ける為に死に物狂いで頑張っていた。一人は残酷な断罪人に、一人は何よりも甘い奇術師になる覚悟を決め、手を伸ばしたいのに伸ばせない、側にいたいのにいられない自分の無力さと弱さを呪いながらインデックスを助けてきた。

結果的に、それは歪んだ妥協案でしかないものだったが、それでも間違いないたった一人の女の子の為に苦しんできた。頑張ってきた。今日まで生きてきた。

ならばこそ、彼らには見なくてはいけない。見る権利があるはずだ。

(悪いいな………)

ずっと望んでいたであろう結末を

(『見せ場だけは』全部、俺とアイツで山分けさせてもらおうぜ!!)

インデックスの記憶を奪わなくても済む、インデックスの敵に回らなくても済む。そんな誰もが笑って、誰もが望む最^{ハツ}高^ビに最^{ハツ}高^ビな幸福^ドな結末^ドをやつを!!

首輪の中の世界でエネを咀嚼し終わった神喰らいの獣は、肉塊となったであろうエネを己が中へと取り込んでいた。そもそも『彼』は十万三千冊の魔道書によつて作り出された偶像にすぎないのだが、元となった獣の性質をほぼ完全に再現されている為、見た目は完全に一つに生き物に見えた。

侵入者を無事撃退し、わずかばかりの餌にありついた獣は、その身を再び無に返そうとし、ピタリ、と、唐突に動かなくなった。

より正確に表すならば、唐突に『動けなくなった』頭の鼻先から尻尾の先まで。魔術的な意味でも物理的な意味でも『全く身動きが取れない』そして、その元から巨体だったからださがさらに巨大に、空気を入れすぎた風船みたいに膨らんで

「ほう、やつぱりこの程度が限界ですか」

ドッパアアアアアアアン!!という音と共に神喰らいの獣の体が弾けた。腹の中から出て来たのは人型の形をした一枚の呪符。

「ここでは私に掛けられた枷も解かれるようですから、こちらの『魔神』と呼ばれる存在に私の「コスパ」が良い万能術『呪符分身』がどこまで通じるか見てみたかったですわが……やはり『以前よりずっと強くなっていますね』これならもう少し改良を

加えても大丈夫ですか……?」

声の主は紛れも無い『エネ』その人だった。彼女は良いデータが取れたと言わんばかりの満足げな笑顔で宙に浮いている。

今の今まで十万三千冊の魔道書を退け続け、空間を支配しようとしていたエネは、ただ力を分け与えただけの分身デコイにすぎなかった。

「さて、目的も果たせた。データも取れた。興味があることが沢山あって、私の色んな欲をくすぐらるこの十万三千冊の空間から離れるのは少し名残惜しいですが、ご主人を待たせるわけにもいきませんしそろそろおいとまするとしましうか……おっと」
再び襲ってきた閃光の魔術を、エネはなんでもないようにヒラリとかわす。

剣、槍、杖、獣、竜。他にもさまざまなもの、形どる魔術がエネを排除しようとする力を放ち

「ほほう、まだやりますか?……あんたらが気づいているかかどうかは知りませんが」

物部は、懐から一枚の札を取り出して

「私はまだ『術符の宣言』すらしてませんよ?」

何百という魔神級の術に向かつて放つ。

——幻符「ハイフェクト・イメージング完全なる幻想喰い」

瞬間、世界の全てが消え去った。

「おおッ、っああああああああああああ!!?」

上条は両の手と足に力を込めて踏ん張っていた。インデックスとの距離はもう一メートルも無いが、このまま前に進み続けて魔方陣を破壊してしまった場合、中にいるエネも一緒に消してしまう可能性があるため、安易に動く事が出来ずにいる。

（くっ、そー、マジであの馬鹿なにやっつんだ!! 限界つて訳じゃないけど辛い！ ああもうなんて言ったら良いんだろこの感覚!! そう！ 重量挙げで自己記録一步手前のダンベルを永遠に挙げさせられている様な、つていうか！ いま何か俺の力が身体から抜けたような・・・）

踏ん張るのをやめた途端、一気に後ろに弾き飛ばされてしまうような気がするため、上条は声を荒げて必死に耐える。

あのアホこれで十万三千冊の魔道書の解析に夢中になってたらマジでどうしてくれようかと考えている上条の体が『一気に後ろへと吹き飛ばされた』壁に勢い良く激突した背中に鈍い痛みが走る。

「がッッ……!!?」

あまりにも予想外の一撃に、上条は思わず自分の右手を見る。右手にかかっていた負担は、もう無かった。それはそうだろう。上条を襲っていた光の柱そのものが『綺麗に

消え失せていたのだから』

一瞬送られて、上条はインデックスの方を向いて、そして、その目を大きく見開いた。

インデックスが立っていた場所に今あるのは、上条を襲っていたものとは比べ物にならないくらい巨大な光の柱。だがその光の柱が向くのは上条の方ではなく、文字通り真上。エネが張った結界の一部を吹き飛ばして、夜空に漂う漆黒の雲を引き裂き……ひよつとしたら宇宙まで届いてもおかしくないように思う光の柱。いや、窓の無いビルの中なのでその心配はないだろう。もし、届いていたら全力でアレイスターに土下座する。

その巨大な光の柱が少しずつ少しずつ細くなり……そして、完全に消えてなくなる。光の柱の跡から現れたのは、抱きかかえられた修道服を着た少女と……

「よう、おかえり馬鹿野郎」

うざったい位に明るい笑顔を浮かべた、生涯の上条の相棒の電腦少女。

「ご主人。ただいまです！」

禁書目録の少女の結末 Index—Librorum —Prohibitorum.

「と、まあこんな所かな？ 他に何か質問は無いよな？ 無いよな?? 最初に言ってるけどどうやってあいつの首輪を壊したかは明言できかねます。……だからそんなに睨むなって。少なくとも後遺症が出たりすることは無いよ。保障する。つーかそれを言うならお前らだって話してない事があるだろ？ お互い様だよ」

窓の無いビルの一室で、上条当麻はもう何回告げたかも分からない言葉を口にした。まったく、説明だとか解説だとかは師匠だとか教授だとかそういう人向けの仕事だと改めて認識させられる。

誰かに分かりやすく物を教えたり解説したりすると言う事は苦手だった。自称スーパープリティ電脳ガールが横にいればまた違ったのかもしれないが、彼女はインデックス救出作戦が終了した直後から、首輪に仕掛けられていた術式や、その目で見て、耳で聞いて、鼻でかいで、体で感じたと言う『十万三千冊の魔道書』の解析や応用やらで不眠不休で作業し続けている。

（時々「えへ、えへへへへへ」と言う不気味な笑い声が聞こえてくるのが凄く怖

い………」と、思っていたのは数年前までで、今ではもう慣れたものだが

まあ作業に入る前に、首輪の中であつた事や仕掛けられていた術式。告げるべきこと、告げないべき事を（彼女にしては）分かりやすく解説してくれた為、想像よりはずいぶんうまくいったと思うのだが………」

「………」

「あのさあ………」いい加減その警戒心丸出しの視線は止めてもらえませんかねえ、お前はあれですか、最近の切れやすい若者ですか？ カルシウム不足はイライラの原因になるので効率よく採取する事をお勧めします。お勧めなのは朝昼晩一杯の牛乳ですが、猫よろしくニボシという手もじつに………」

机を挟んで上条の向かいに座る炎の魔術師は、今にも炎剣を振り上げて襲い掛からんとする勢いで上条を睨みつけている。まったく、率先して質問してきたのはそっちだろうにと上条は思うが、気持ちには分からんでもない。

「だから何度も言うけど俺は本当にあの夜、お前には関与してないんだって。そりやあ目が覚めたらハゲ化してたのは不幸だし、シヨックだとは思うけどでもだからって自爆を人のせいにするのは筋違いってもんだろ」

何かがブチツ、と切れる音が聞こえ、炎の魔術師は問答無用で立ち上がって手を振り上げ炎剣を顕現させようとするが、横に座る聖人に視線でたしなめられやむなく振り上

げた手を下げて畳へと座りなおす。

どうでもいい事かもしれないが、あの夜、エネがステイルに小細工を仕掛けて自爆させた際に燃え尽きた髪は、魔術を使っても何故か全く、一ミリも戻る事はなく、現状で（ほぼ）ハゲかけているという事と、意識を取り戻した際に神裂に爆笑された（神裂としては堪えたつもりらしい）と言う事実をここに記しておく。

（それと、念の為に言っておくが、上条は決して『嘘』は付いていない。実際「上条は」あの夜、ステイルには一切関与していないのだから）

質問↓答える↓雑談↓キレる↓たしなめ↓質問・・・

もう一時間以上前からこの繰り返しだった。ステイルは話を始める前からキレかけていたし、神裂は接触してきた人物が危険か安全かを確かめる犬のようなオドオドとした視線を上条に向け続けていて、上条はいい加減この停滞した状態にうんざりしてきたのか、ゲツソリとした表情を浮かべている。

「にしてもさあ。学園都市の中で行動するならせめてゲストIDくらいは取っとけよ。いくら科学側のトップに許可を取るとは言え、事情を知らない風紀委員や警備員に見つかつたらどうするつもりだったんだか」

あんたらこの街を舐めてるだろ。という上条の視線に、ステイルは問題ないとも言いたげに鼻息をしながらそっぽを向き、神裂は

「こ、こちらにも色々事情があるのです！それに私が元所属していた魔術集団は隠れる事や周りの風景になじむ事を主としていたのでそういう魔術には長けて……いえ、そういう認識がいけないのでしようね……急いでいたとは言え、軽率でした……」
と、シヨンボリと俯いている。

はあ、と疲れたように溜息を付いた。どちらか片方だけならまだ対応のしようがあるものの、こうも反応が違うとどうも調子が狂ってしまう。

二人だけでこれなのだから、この約十五倍の人数をまとめ上げる「先生」って凄いんだな、と、上条はランドセルがこれでもかと言うほど似合う自分のクラス担任に尊敬の念を向けた。

「んじゃ、最後にもう一回確認するぞ。まず一つ目。インデックスが一年に一度記憶を消さなきゃ生きていけないってのは真つ赤な嘘だ。つーか確かお前らの話じやインデックスが十万三千冊の魔道書を頭に叩き込まれたのは確か歳が二桁に突入してからだったよな？もし人間の脳が一年で十五パーセント分の記憶しか出来ないんだから完全記憶能力者はみんな七歳ちよつとで死んじまう計算になる。こつからは科学側の分野になるんだけど、そもそも人間の脳ってやつは知識を記憶する「意味記憶」運動の慣れを司る「手続記憶」思い出を司る「エピソード記憶」ってな具合にだな、そもそも記憶しておく為の容器が違うんだよ。十万三千冊の魔道書を「意味記憶」に入れた

としてもそれが原因で「手続記憶」や「エピソード記憶」が圧迫されることは脳医学上絶対でありえねーし、そもそも人間の脳が何かを「忘れる」のは別にその記憶を「消失」した訳じゃなくて、単に「容器の中のどこにしまったか忘れてる」から取り出せないだけなんだ。文字通りな。そういう意味じゃお前も皆も完全記憶能力を持つてるって言えるな」

本当は続けて「これくらい学園都市の外の高校や大学でも普通に習う内容だぞ」と言いたい上条だったが、己の中の良心に従い、言わないでおいてあげることにした。別に恥をかかせる為に話している訳ではないのだから。

「二つ目、お前らの上司……イギリス清教の事情なんて知らねーから大幅に省くぞ。その上司はインデックス、十万三千冊の魔道書の手綱を握り続ける為に「なんの問題もなかったインデックスの脳に細工をした」……これが真相つてとこだな。んで三つ目、これが一番重要なんだけど……」

ガチャリと、上条が話している途中で部屋のドアが開く。アレイスターこだわりのオンボロアパート風の木製ドアのギイイイ……という軋む音と共に

「ただいまー!!」

禁書目録の少女のご機嫌度MAXの喜声が聞こえてきた。すぐ後ろに両手でスパーの袋を持った青年もしくは女性（エイワス）の姿も見える。

「おう、おかえりー。で、どうだった？」

「ふっふっふー♪ じゃーん！ 女性限定販売の豪華焼肉セット「Elegant」!! 私とエイちゃんできちんと確保してきたんだよ！」

「おお、ナイスだインデックス！ これで今日は焼肉パーティーが開けるぞ!!」

「焼肉パーティー!? もしかしてこれ今日全部食べていいの、全部食べていいの!!」

「おお！ 全部だ！ 全部食っちゃまえ!! つーか足りなかつたら買い足しに行く勢いで大盤振る舞いだワハハー!!」

おおおおおおおおお!! と言う歓喜の声を上げ、インデックスは自分の頭よりも大きい焼肉セットを頭上に掲げながらキラキラとした視線で上条を見上げる。

その後ろからはエイワスが呆れたような目で

「インデックス、野菜もしつかりと食べろ。私の推測だがインデックスは野菜に少しも目をくれずに肉を食い尽くそうとしそうだからな、と言うか私は苦労してここまで運んだのだから食べてもらわないと困るのだが。って、か、上条！ 一体どうした。え？ ちよつと外に出ててくださいって？ なるほど、分かりました」

と言っていたりする。

そしてそんな三人のやり取りを、二人の魔術師は呆然とするように眺めていた。

話が違う。あの子が帰ってくるなんて聞いてない。そんな魔術師二人を見て、上条は

いたずらっぽく笑う。瞬間、仕組まれた、と気づいた。

三つ目、その『首輪』を上条が破壊した為、インデックスはもう記憶を失う必要など無いと言う事。

最初は、歓喜に震えた。ずっとずっと、何があつても守りたかつた大切な人が、何に苦しむことも無く笑っている。次の瞬間、自分達を騙し続けてきた教会に対する怒り、インデックスを助けられなかつた自分に対する失望と、いとも簡単にそれをやり遂げた（ように見える）上条に対する羨望、嫉妬が心を歪ませ、こんなときにそんな事しか考えられない自分に苛立ちがつのり 最後に、今この場面でどうしていいのか全く分からず、二人の魔術師は動きも思考も止まってしまったのだ。

あ………と、そんな二人に気づいたインデックスは少しばかり表情を引き締めて二人へと近づいていく。ピクリ、と二人の魔術師は体を震わせた。今の今まで自分達はインデックスを何度も追い回し、傷つけ、そして記憶を消してきた。それが、インデックスを救う唯一の方法だと信じて。

いくら教会の差し金で、騙され続けていたとは言え、とてもではないが許される行為とは思えないし思わない。だからこそ、震える。記憶を消す必要も、敵に回る必要も無くなり、インデックスがすべてを知った今、彼女から下される判決は、絶対に覆すことが出来ない文字通り『最後の審判』なのだ。

インデックスの記憶を消し続けていた時は死ぬほど望んだ展開なのに、体が震えて動いてくれない。頭の芯まで真っ白になっていくような感覚に呑まれそうになる。

覚悟なら、とつくの昔に決めたはずだったのに、決意は、決して揺らがないと思つていたのに、ああ、自分の精神とはこんなにももろい物だったのかと思ひ知つた二人の魔術師の目の前に座る白い修道服を着た少女は残酷な判決を下した。

「・・・・・・・・えつと、は、はじめまして！ 私の名前は、インデックスつて言うんだよ！！」

は？、と呆けた風に、声とも言えない声を出す。自分達の中に溜まっていた緊張感やら動揺やらが一瞬完璧に凍りついた。

「もう何回も会つてるならはじめましてはおかしいかな・・・・・・・・」

インデックスは困つたような表情を浮かべ、下を向きながら何かをブツブツと呟いている。まるで面接官の前に立たされた新入社員のようにだった。

「で、でも私は覚えてないし・・・・・・・・、だけど私が覚えてる記憶の中でも会つてるし・・・・・・・・。う、うーん・・・・・・・・。ど、どうすれば一番良いのか分からないかも・・・・・・・・」

相手の顔色や仕草を伺いながら上目遣いで話すその様は、紛れも無く自己紹介だった。まるでこれから長い時を共にするクラスメイトに自分の事を説明するように、これ

から「友達」になる人、「友達」になりたいと思つてる人にする最初の挨拶のように「う、うゝ……と、とうま！こ、こんな感じで良いのかな？何か間違つてない？」

「あゝ？んなもん個人のさじ加減だろ。つーかお前から言い出したんだからほれ、最後まで頑張りなさい。上条さんは生暖かい目線を送りながら応援します」

「む！今の言葉からそれとなく馬鹿にしている感覚を感じ取つたんだよ！！とうまはあれなの？ひよつとして調子に乗つてゐるのかな？」

「んな事ねーつての！つーか、んな細かい事はあとと!!ほらほら、兼愛なシスターであるインデックスさんは自分で言つた事を曲げたりしませんよねー？」

ぐぬぬぬぬぬ、という威嚇寸前の子犬みたいな表情と声で上条を睨みつけていたインデックスだが、

「……だからほら、な？」

と、急に声のトーンが真剣になった上条に促され、再び魔術師たちの方へと体を向けた。

「……わ、私と——もう一度私と、友達になつてくれる？」

その言葉で、二人の魔術師は今度こそ本当に、体の芯まで完全に固まった。

「私はあなた達の事をこれっぽっちも覚えてないし、いきなり元親友だつたつて言われ

でもいまいちピンと来てないんだけど……」

でも、と、白い修道女を着た少女は言葉を区切つて。

「とうまから話を聞いて、よく考えて、悩んだの。私と、あなた達の、今までの悲しい記憶を全部清算するにはどうすれば良いのかなつて」

魔術師を見つめるインデックスの少女の瞳には、明確な光が宿っていた。有無を言わさないその輝きは、強者と評される者のみが宿す事が出来るもので、二人の魔術師にはそれがとても眩しく映る。

「それでね、決めたの。全く同じものを作ることは無理かもしれないけど、出来る限り、やれる限り、もう一度、ちゃんとやり直したいなつて——だから」

二人の魔術師と、しっかりと視線を交わして

「私と、友達になつてくれますか？」

少女は、言った。かつて自分を追い回し、傷つけ、何度も何度も記憶を奪ってきたであろう二人の魔術師に。恐怖はあつた。違和感もあつた。だけど、それでも告げた。それは、少女が持つ優しさや、今まで自分が当然だと思つていた行為で深く傷つけてしまった二人の魔術師への贖罪で、無くしてしまつた大切な物と引き換えになる物を手に入れるというとても強い決意の表れで

「……………」

だが、二人の魔術師は何も答えない。

これだけの決意を見せたインデックスの前で、迷いと痛みで顔を歪める彼らほどこまでも弱者だった。そんな二人に、上条は「はあ……」と軽くため息を付いて「俺からも少し話があるから」と、返事をまだ聞いてないと駄々をこねるインデックスを半ば強引に外へと追いやる。

「お前らあれか？」「この子にあれだけの事をしてきた自分達にそんな資格は無い」とか「助ける事も出来なかったから」とか「またこの子を危険な目に合わせてしまうかもしれないから」とか、んなどうでもいいつまねー事でインデックスの決意を無駄にする気か？」

その声は二人の魔術師の耳にこれでもかと言うほど良く聞こえた。

「ふざけやがって……俺を無視するってんならそれでも良いけどよ。これだけは答えてもらおうぞ魔術師」

上条は、息を吸って

「——テメエは、インデックスを助けたくなかったのかよ？」

魔術師の吐息が停止した。

「テメエら、ずっと待ってたんだろ？ インデックスの記憶を奪わなくても済む、イン

デックスの敵に回らなくても済む、もう一度「友達だ」って胸を張って言えるような、そんな関係に戻りたかつたんじゃねえのかよ？」

畳の上にあぐらを掻いて座り、インデックスと同じように二人の魔術師をじつと見つめる。

「ずつと主人公になりたかつたんだろ？ 絵本みてえに映画みてえに、命をかけてたつ

た一人の女の子を守る、そんな魔術師になりたかつたんだろ？」

「そうだ。でも自分たちは教会に誑かされてインデックスを傷つけ続けてきた。ずつと助けたいと思っていた少女を、助ける事ができなかつた。」

「それこそ、なんでもないかのように一人の少女を救いあげた、目の前の少年のような本場の主人公に——なれなかつた。——だから」

「だつたらそれは全然終わつてねえ!! 始まつてすらいねえ!! ちつとぐらい長いプロローグで絶望してんじゃねえよ!!」

魔術師の声が、消えた。

——まだ、終わつてない？

「考えてもみろ。インデックスに仕掛けられてた「首輪」が壊されたと知った協会が「とりあえず様子見」なんて甘い判断をすと思うか？ ありえねえ。何か策を考えてるに決まつてる」

そうだ。あの残酷なシステムを作った教会が、今の現状を良しとし続ける訳が無いのだ。

もしかしたらもう動き出してるかもしれない。今すぐじゃなくても、数カ月後でも、数年後でも、インデックスをこのままにしておく理由など無いし、もしかしたらインデックスを放っておいても余裕でいられるだけの「別の理由」がある可能性だってある。そしてそれは、彼女を苦しめるようなものでないと言う保障など、どこにも無いのだ。

「答える魔術師。お前は どうしたい」

上条は、もう自分が今どんな表情をしているのかすら分からなくなった魔術師に語りかける。

「インデックスと友達になつて、無くしたものを取り戻す為に、あいつの笑顔にする為に、どんなに惨めでも、プライドを捨てても、もう一度あいつを守る為に頑張るのか！ あいつの気持ちを押し殺してでも、傷つけても、教会に戻って裏方役に徹して陰ながらあいつを守るのか！ それとももうたつた一度成功しただけのどこの馬の骨とも知れないようなパツと出の奴に見せ場も出番も全部譲っちゃうのか!! お前ら本当にそれでいいのか!!」

その姿は、上条がずっとずっと師事を仰いできた、とある人物の説法に良く似ていると言う事を、上条は全く自覚していない。

「決めろよ魔術師。ためらう必要なんかねえ、悩む必要なんかねえ！ テメエらが思い描いてる幻想を、テメエらの口で言ってみやがれ!!」

もう上条は、自分の選択を決めているのだろう。迷ったかもしれない、悩んだかもしれない、誰かに相談したかもしれない、それでも最後にはしっかりと自分の手で決めたのだろう。そして、そんな事を繰り返して続けたのだろう。

だからこそ、揺らいでいる二人の魔術師には、嫌というほど響く。

そんな姿が、とても眩しく映る。

やがて、二人の魔術師は、どちらともなく口を開き——
それぞれの選択を、告げた。

新約聖書に描いて、人という生き物が神に食す事を許されたのは六本足で現れ、悪魔の使いとも例えられる事もある害虫「いなご」のみであった。だが、人という業の深い生き物は、意図も簡単にその禁忌を犯す。最初の人とされるアダムとイヴでさえも、

だ、その絶叫はたった一人の少女のみの手によつてもたらされるような物なのではない。

「……ほら。こつちも食べごろみたいだ」

「テ、テメエ、ステイル！ お前最初は「こんなくだらない事……」とか言つてイラついてたくせに……!! あと取つた肉をインデックスの皿に盛るのはギリ納得できるけどテメエで食うなら上条さんは徹底抗戦を」

「はい、インデックス。でも野菜もキッチンと食べてくださいね？ それと、食べすぎにも要注意です」

「神裂いいいいいい!! お前に関してはもう論外だよ論外！ 聖人の力をこんな事に使つてんじやねえよ!! (たつく、あの夜といいインデックスとの仲直りの時といいピー泣いてやがった神裂はどこに) くおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!?」

ボソボソと小声で愚痴っていた上条に、神裂が放つた音速を超える拳が迫る。バシン！ という音を立てて神裂の拳が上条の手の平と激突した。空気は勿論、ちやぶ台に乗っているホットプレートや数多の食器。拳句の果てには畳までビリビリと振動し、食事中の面々の行動が一瞬ピタリと止まる。瞬速の拳を上条に向けて放つた神裂の顔面はホンの少し赤くなっていた

(テ、テメエなに考えてやがる!! まともに決まったら顔面が見るも無残な事になってるぞゴルア! それでも大和撫子か!!)

(うるっせえんだよ、怪物が! あなたならマトモに食らったところで大したダメージになるとはとも思えないんだよおおおおおおお!!)

勿論、主に上条に非が有るであろう事は認めるが、それにしたって常人だったら間違はなく顔が陥没するであろう一撃を、何の躊躇もなく放つことは無いと思う。

全く、クラスメイトのオデコが広いアイツ(頭突き女)といい神裂といい……何故自分の周りの黒髪ロングはバイオレンスチックな奴が多いのだろうと考えるが、当然のように答えは分からない。

……あれだけ渋っていた二人が、なぜこうもアツサリともう一度インデックスの友達になることを決めたのかも、分からない。自分の言葉が原因だという事の可能性など、この少年は微塵も計算に入れてはいない。

あれからすぐに神裂は深々と、ステイルもギコチなくではあるがしつかりとインデックスにこれまでの事を謝罪し、感謝の言葉を告げ、三人とも元の鞘である『友人』に納まった。神裂はポロポロと嬉し涙を流し、ステイルはキヤラが崩壊している位の優しい笑顔を浮かべ、インデックスは面白そうにクスクスと笑う。

そして上条はそんな三人を見て多少の疎外感を覚えつつも、脱力したように、ホッと

したように、ゆっくりと微笑んだのだった。

「とうまー。さつきから何の話?」

「……. 気にしないであげるほうが良いんじゃないかな? おもに彼女の為に」

ステイルにしては珍しい同僚を全面的に守ろうとする言葉に、神裂は感謝の言葉を送ろうとするが、いつの間にかインデックスに物凄く（肩が触れるどころの騒ぎではない）接近していたステイルに気づいてその拳を放つ。

当然、上条のように身体能力が高くないステイル（スポーツ狩りハゲ）はその拳をまともに食らってしまい「ぐぶおあああああ!」という悲鳴を上げながら仰向けに倒れて気絶した。

「ふわあく……. よく寝たあ……. ん?……. な! はい!? なぜです! なぜもう宴が始まっているのですか!」

そのままステイルを寝室に引っ張っていった神裂にしばらく呆れていた上条だが、遅れてようやくやって来たエネに気づいて顔を上げる。

（おお、やつばお前寝てたのか。おはよう）

「おはようございます、じゃない! ご主人、私を放っておいて勝手に宴を始めるなどと……. それでも相方!? パートナー!? どうかインデックスの呪縛を直接的に解いたのはこの私でしょう!!」

上条としては、何度連絡しても出てくれなかったし、そもそも寝てたつぽかったから起こすのもアレかなと思つての行動だったのだが。エネは座る上条の元に駆け寄り、同じように座ると半ば押し倒す勢いで顔をグイツ、と近づけた。

彼女にしてはキツイ口調とは裏腹に、目はウルウルと潤いを纏い、自分より身長が高い上条を睨みつけるために必然的に上目使いになっている貴音は、いまいち（と言うか圧倒的に）迫力に欠ける。なんだか全く別の、なんとというか不純な感情を刺激しそうな勢いだ。

（い、いや、だつてお前さあ……）

「なんですか！ 何の理由があつて私を除け者にするんですか!!」

上条はため息を付きながら、言った。彼女はどうかやら一番肝心な事を忘れていらしい。

「お前、そもそも飲み食い出来ねえだろ」

「……………」

その時、上条はふと思いだして

（そーいやエネ。お前首輪破壊すんに喰らう者使つたら）

「はへ!? な、何故それを！」

（俺の能力だぞ？ 分からなくてどうする。おかげで首輪作れるじゃねーか。誰に使え

「と?
・
・
・
すみませんでした!」

吸血殺し編

相変わらずの日々
The Beginning of
The End.

吸血鬼。その単語について皆さんはどう語るだろう。

化け物？ 創作上の生き物？

あえて言うならブラム・ストーカー著の『ドラキュラ』の主人公だろう。

そして有名な怪でもある。

その増え方から弱点まで様々で、一般的なのは吸血。十字架、ニンニク、太陽光だろう。

流水は渡れないだけだ。そして倒し方も様々。普通の木の杭で良かったり、白木じゃなかったらダメだったり、入ったことのない建物には家人から招かれない限り入れない等。

さて、血を追い求めるだけの知性も理性も無い吸血鬼の事をなんて言うか知っているだろうか？

——食屍鬼と呼んだりするんだろな。

知性と理性を失った吸血鬼をグールと呼ぶのは全くもって構わないが、知性と理性を持った吸血鬼をあんな人の血肉を喰らう化け物と一緒にしないでほしい。というか知ったかぶって話す前に図書館に行つて文献を読んで調べてほしい。ナニ？ 外国語が読めない？ 学べ。

長々と語つてきたが結論を言うと、現在。この科学の街学園都市に吸血鬼やグールが増えているのだった。

そしてそれを良しとしない者がいた。

「・・・数が多いな」

『全くです。これでもかと言うほど数が増えていますし。何かあるんでしょうか？ 学園都市に』

暗闇で何かが光ったと思ったら、グールの何人かの体がバラバラに切り落とされる。

「いつ杀し！」

「ワイヤード。名をエクセリオン」

『……武装はBLACK CATなのによつてゐることはヘルシングですね……』

『……一応聞いておこう。何故こんなに増えた？ この街に何がある』

グールの軍隊を率いていた吸血鬼に上条はカスールを向けて尋ねた。

「はあ？ お前、俺らの性質知らねーのか？ 血の匂いに引き寄せられたに決まつてんだろ。とびきり美味そうな匂いがしたんだよ、この街からな」

「美味そうな血？」

「だが、今は止まつてる。ここ何日か途切れ途切れにするんだよ」

「そうか」

「で？ お前は俺に何の用だ？ まさか、その質問だけじゃないだろ？」

「当たり前だろ」

上条はカスールを数発撃つ。それだけで吸血鬼は消えて無くなった。

「流石。コイツは強いねえ」

『美味しい血つて……そんなに匂うものなんでしょうかね？』

「さーな。でも生きてゐる人間がおわせる匂いなんて微弱だろ？ それをこの街の外からも嗅ぎ付けてくるなんてよほど強い匂いだよ。それも、ただの血じゃない」

『……』

その日は上条達も寮に帰った。

——次の日。

美味そうな血。その正体を探しす為、上条は街を歩いてきたインデックスを連れて。

「……つて言うかき。おかしいと思うんだよな」

「……何がかな」

「インデックスはさ。この前みんなと仲直りしただろ？ だつたらさ。イギリスに戻つても良かったんじゃないの？ こんな魔術オカルトとは無縁な場所に留まるよりそっちの方が建設的だろ」

「……とうまは馬鹿だね」

「否定はしないな」

と、そこで上条は自分の言葉に対する少女の返答が少しばかり遅いのに気付き、少女の視線の先を見て。

「あー。確かに冷たくて美味そうだが、生憎買ってやれないぞ」

「む。とうま、別に私は一言たりとも暑い辛いバテたなんて言つてないよ？ まして他人のお金を使いたいと考ええた覚えも無いし、結論としてアイスを食べたいなんて思つたことない。それに私はこれでも修行中の身。お酒や煙草は元より、珈琲紅茶に果物デ

ザート氷菓子、その他もろもろ嗜好品の摂取は一切禁じられてるんだから」

「いや、そこまで全力で否定しなくても。ま、最初に言った通り買ってやれ——」

——ないぞ、と言いつ終わる前に音速で肩を掴まれた。ギリギリと万力のように締め付ける少女の指に呆れながら上条がそつちを振りかえると。

「確かに私は修行中のみであるからして一切の嗜好品の摂取は禁じられているけれど」

「じゃあダメじゃん」

「しかしあくまで修行中の身なので完全なる聖人の振る舞いを見せ得ることはまだまだ難しかったり難しくなかったり！ 従つてこの場合誤つて口の中にアイスが放り込まれる可能性もなきにしもあらずなんだよとうまー」

「ねーから。いやねーから。あと痛いから。強い強い。お前修行中ならなおさら聖人を目指す努力をしろよ。つてかイギリスに帰れよ。あつちは涼しいだろ。一年通して北の方にあるんだからな。それに加えてこつちは四季折々だ。暑い日もあれば寒い日もある。文句あるならお引きとり願えますか」

上条が氣候状態を提示した上での交渉に乗り出そうとした所で、

「なかなか素敵な交渉中なんやけどな、ちなみにその子誰なんカミヤん」

後ろから得体の知れないエセ関西弁が聞こえてきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「カミヤん。ジト目は止めよーや。ボク男からのそういうのは受け付けてへんよ」

「じゃあ眼を瞑って可愛い女の子にジト目で見られてろ」

「ふむ。面白そうやね」

青髪ピアスは上条の言う通りに目を瞑り、うーんと唸り出す。上条はそこで何かを思いついたらしく、声帯を変化させ。

「貴方の事が嫌いです。貴方は変態です！ エロスの貴公子です！ 私に金輪際近づかないでください！」

「おっほー！ そんな事言わんと言ってやー……。あれ」

「何やってんだ青髪」

「目を開けたら男のジト目！ 最悪やわ……。もしかしてここに美少女がおったりせんよな」

「しねーだろ」

上条は呆れた顔で青髪にツッコむ。本当にコイツは俺の声だけでそこに少女が居ると勘違いしたのか……。？ と上条が青髪ピアスの想像力に恐れを成していると、放っておかれたインデックスの怒りのボルテージが上がっていた。

「——食い倒れた」

それはアイスクリーム店が閉まっていたため、近くのファーストフード店でシェイクを買ったものの、席は満席だったため、相席を進められインデックスがそれに乗ったために起きた出会い。そして、先日のグールの原因でもある少女だった。

L. ガラスの要塞 The Tower of BABEL

何なんだろう、上条はそう思った。

ここはファーストフード店の二階、満員満席の禁煙席である。窓際の一角の四人掛けのテーブル、そこに上条とインデックスと（何故か）青髪ピアスが座っている。

そこまでは良いらしい。

「、食い倒れた」

何故、こんな俗っぽいお店に巫女さんがいて、あまつさえテーブルに突っ伏して謎なセリフを投げかけてくるのか。それが問題なようだった。

「……………」

「……………」

『……………ご主人』

「……………、な、何だよ」

「……………ほらカミヤん。話しかけられたらには答えてやらなっ！」

「……………そうだよそうそう。とうま、見た目で引いてはいけません。神の教えに従

い、あらゆる人に救いの手を差し伸べるのですなんだよ。アーメン」

『その巫女さんが美味そうな血です』

「ああもう分かったよ。話しかければ良いんだろ!!? おい巫女さん。食い倒れたって何で? いやまあ美味しかったからとか理由はあるんだろうけど」

「二個五十八円のハンバーガー。お徳用の無料券クーポンがたくさんあったから。とりあえず三十個ほど頼んでみたり」

「そりやお得だ。何だってそんなに食ったんだ」

「やけぐい」

「やけっ!?!」

「帰りの電車賃。四百円」

「まさか」

「全財産三百円」

「帰れない、と。・・・三百円分でも電車に乗れば良いじゃん、そうすりゃ歩く距離は百円分なんだし。それ以前に誰かに借りられないのか」

「——」。それは良い案」

「何故そこでまっすぐこっちを見る? ってかテメエ、期待の眼差し向けんじゃねえ!」

・・・まーた面倒事か。と上条が嘆息するより早く。青髪が絶叫する。

「う、ウソや。カミヤんが女の子と喋ってる……今この場で初めて出会った女の子とナチュラルルに会話してるなんてウソやーっ!!」

「ちよつと待て! 人をコミュ障みたいに言うな! 俺は別に普通なんだよっ!

巫女さん^{おまえ}もどうか残り百円調達してきつきとお家に帰りやがれください!」

「どういう事!?! カミヤん話は終わってへんで! 十六年も負け組だった男がこの二週間の内にシスターさんだの巫女さんだの属性強すぎな知り合い増やしてるってどういう事やねんな! 何? これは何の電脳^{ギョルゲ}世界ですかセンサー!」

おそらく電脳^{エネズワール}少女の世界だと思う。と上条は心の中でツッコんだ。それよりも。

「俺が十六年負け組? 笑わせるね! 俺は将来を誓い合った年上のお姉さんがいますうー!」

「はっ。何を言うтонねんカミヤん。将来を誓い合ったってあの引きこもりカミヤんが?」

「お前どこで聞いたその話」

「有名やで。大事な先輩を事故で失ったカミヤんが二年ほど学生寮に引きこもって先生を困らせたって言うな」

「ぐがあ! 知らない奴が多い学校に行ったと思っただのに……」

「学園都市なんて狭いから、すぐにウワサはこっちに来るんやでー」

そんな青髪ピアスと上条のやり取りなんてお構いなしで、巫女さんは上条に手を出して、

「百円。無理？」

「トゴでいいなら貸してやる」

「とく？」

「十日で五割。十日で百五十円を返してもらおうことになるぜ」

「……………」

巫女さんはちよつとだけ考えて、

「じゃあちようだい」

「やるか馬鹿！」

そんな言い争いしていると、少女の塾講師が迎えに来て、百円を渡して一緒に消えていった。

その後。上条とインデックスが並んで帰っていると、

「あ」

上条の隣を歩いていたインデックスが、何かに気付いたように唐突に立ち止まった。彼は少女の視線の先を追いかけ、風力発電の柱の根元に、段ボールに入った子猫が一匹みーみー鳴いているのが見えた。

「とうま、ネ——」

「ダメ」

——コ、とインデックスが続ける前に上条は割り込んだ。

「………、とうま、私はまだ何も言っていないんだよ？」

「飼うのはダメだ」

「何で何でどうしてどうしてスフィンクスを飼っちゃいけないの!?!」

「じゃあお前は！ 人間よりも速いスピードで老いる猫との別れを考えたことがあるのか！ 生き物の生死つてのは人間と同じなんだ。時間が短いだけで猫も死ぬんだよ。オモチャを買って貰えないガキみたいにギャーギャー騒ぐんじゃねえ!!」

「why don't you keep cat! Do as you're old!」

「うるっさい！ わがまま言うなっ!」

「やだっ! 飼う飼う飼う飼う飼う飼う飼う飼う飼う飼う飼うかーうーっ!!」

「じゃあ交換条件だっ! 家じゃそいつは飼えません。飼いたきやどつか別のところへ行け!! ていうか野良猫ビビって裏路地に逃げてったな」

「とうまのせいっ!」

「何だどこのエセシスター! テメー一回イギリスでシスターの何たるかを学び直して

来いっ!!」

と、インデックスは魔術を感知しどこかへ走って行ってしまった。

「さて、わざわざ人払いまで仕掛けやがって。俺がこんな右手を持つてゐることを知つてゐる奴つて事だよな?」

『ええ。ご主人の右手は人払いにも干渉しますから』

「久しぶりだね。上条当麻」

上条はゆっくりと後ろを振り返って、

「髪の毛は生えたんだな。ハゲ神父」

魔術師、ステイルⅡマグヌスのトラウマをあつさりと掘り返した。

「炎よ——巨人に苦痛の贈り物を!」

「おつちよつ何すんだよ」

「ふん、久しぶりだというのに挨拶も何し暴言を吐くからだ。僕は一切ハゲたことなんて無い。嘘偽りを並べ立てないでくれるかな」

「いやいやいや。俺はこの目で見たし、インデックスも見ただろ。お前のハゲあた——」

「——Fortis931!」

「ちよつ魔法名はなしなし! OKOK! 真面目に話を聞くから炎剣を閉まってくれ

ないかな?」

「……………端的に言くと、『三沢塾』って進学予備校の名前は知ってるかな?」

「あー……………おう」

「そこ、女の子が監禁されてるから。どうにか助け出すのが僕の役目なんだ」

「……………任務か」

「まあ資料を見て貰えれば分かると思うけどね」

上条は言われたとおり空中に浮かぶコピー用紙を見る。そこには様々な事柄が書いてあった。

「今の『三沢塾』は科学崇拜を軸にした新興宗教と化しているんだそうだ」

「はっ。超能力がサイエンス魔術にオカルト頼るのか。ま、しょうが無い話だわな」

「まあ正直、『三沢塾』がどんなカルト宗教に変質しているのが知ったことじゃないんだ。

現在はまだ潰れていることだしね」

「潰れ……………?」

「端的に言つて、『三沢塾』は乗っ取られたのさ。科学かぶれのインチキ宗教が、正真正銘、本物の魔術師——いや、チューリッヒ学派の錬金術師にね」

吸血鬼の天敵 The Deep Blood.

「錬金術師……？ それってあれか？ 原子配列そのものを組み替えるヤツか？ それとも科学的に再現可能なヤツか？」

「方法なんてどうでもいいんだ。重要なのは、その錬金術師が『三沢塾』を乗っとった理由さ。ま、一つは簡単だ。元々ある『三沢塾』って要塞をそのまま再利用したいと思っただろうね。生徒のほとんどは校長の首がすぐ替わってるって事にも気づいていないはずだよ」

けどね、とステイルは小さく息を吸って、

「錬金術師のそもそもの目的は、『三沢塾』に捕らえられていた吸血殺しなんだ」

吸血……殺し!?!

上条は背筋が凍るかと思った。そんな物が存在するとしたら吸血鬼にとつては最大級の天敵だ。交わらなければ良いと言うが、恐らくグル達の状況からしてその存在は吸血鬼を殺すためのホイホイだ。蚊取り線香・ゴキブリホイホイと似たような調子で吸血鬼を集め血を吸わせ、殺す存在なのだ。

「元々、『三沢塾』では巫女としての役割を持たせるために監禁していたらしいけど。ま、

女をダシに位の高いものを呼び出すって言うんだから巫女で間違いないとは思うけど
 っ」

「.....」

どうやら女らしい。もっと悪魔的なヤツかと思ったが、まあ妖艶な女の方が引きつけやすいのか。

「かねてから吸血殺しを狙っていた錬金術師なんだけど、一步先に『三沢塾』が吸血殺しに辿り着いたわけだ。いや、ヤツにしても面倒だったはずさ。誰にも気付かれずに吸血殺しを奪って学園都市から逃げる計画のはずが、『三沢塾』が派手に動いたおかげで全部水の泡になったんだから」

「つまりそいつは強引な手を使って『三沢塾』から手柄を奪い返したってわけだ」

「そうだね。錬金術師にしてみれば、吸血殺しの獲得は悲願だろうからね。.....いや、それを言うなら全ての魔術師の悲願か。あるいは人類全ての、かもしれないけどね」

「吸血鬼を殺すことはそんなに大層で、讃えられることなのか？」

「何だ知ってるのか。僕達の間じゃカインの末裔なんて隠語が使われているけれど」

吸血鬼。ヴァンパイア。ノーライフキング。夜の王や不死の王なんて呼ばれていたりする存在。

「吸血鬼を殺すための吸血殺しが存在する以上、『殺されるべき吸血鬼』がいなければ話にならない。まるで正義の味方のための悪者、みたいな悪循環だけどね、こればかりは絶対だ。……僕だつてありえるものなら否定したかった」

「でも、いるんだろ？ 何で今まで目撃証言とかが出なかった……」

「それを見たものは死ぬからだ」

そこでステイルはふと思いついて。

「そう言えばある男からこんな話を聞いた。吸血殺しが吸血鬼の存在を証明したというならば、君の幻想殺しは一体何を証明してくれるんだい？」

「……」

上条は考えてみることにした。エネから聞いた話では、上条当麻の右手に宿るこの力は正式名を幻想喰いという。喰らう者。その名の通り消すだけではなく、捕食し自分の力に変えてしまう特性を持つ。そして、幻想を喰らう者も殺すものもあくまで副産物に過ぎず、その本質は「基準」

これはあくまで例えだが、この世界は真つ白なキャンパスの状態が正常だとしよう。そこに子供達が好き勝手描くとキャンパスはどんどん黒くなつていく。それに向かつて白いインクをかける行為を常に行っているのが上条の右手、と言うわけだ。

さて、つまり基準が存在すると言うことは何が言える？

「世界の規律を乱す者の存在の証明……?」

「なんだいそれは」

上条が必死に考えて出した結論はステイルによってバツサリと切られてしまった。だが、基準点が必要になるといふことはそれだけ世界のルールをグチャグチャにできる子ども^{存在}がいるということだ。

「で? 結局吸血鬼がいたらどうなんだ。集めて集めて殺すのか? 法令儀式済みの銃弾を持つて? それとも銃剣か?」

「殺すよりも先にやることがあるだろう。吸血鬼って言うのは不死身だからね。人間じゃ上れない高みに登ることができない」

「な、なんだよそりゃ。そんな事のために、人間をやめれるって言うのか!? お前等魔術師は!」

「まさか。十字架からしてみれば吸血鬼は殺すべき対象さ。ただ、不死身には興味があるといった所かな」

「馬鹿を言うな。不死身なんて良いものはずがないだろうが!」

「ツ!」

上条は思わず声を荒げていた。そんなつもりは毛頭無いのに、でも何故か口は勝手に動いていた。

「不死身になろうとする人間なんてのはただの弱虫だ！ 死ぬことを恐れ、化け物に成り下がったただの弱者だ！ だからどんな創作物でもそんな化け物は人間に打倒される。人間に倒されなければならぬ！ その人間が！ どうして、自ら弱くなるうとする！ 死を恐れるんじゃないやねえ！ こんなこと、お前に言っても仕方ねーかもしれねーけどな……」

「いや、確かにね。確かに不老不死なんて存在は化け物だ。君の言うことは正しいよ上条当麻。信憑性がある。さ、じゃあそんな化け物を殺す存在を『三沢塾』から連れ出し、それに成り下がろうとする愚かな錬金術師を打倒しよう」

「おう」

「……………簡単に頷かないでほしいね。君だつて一緒に来るんだから」

……………

「マジ？」

「本当さ。単純な事実だよ。拒否権は無いと思うよ。従わなければ君の側にいる禁書目録は回収する。と言うことになるから」

「！」

「必要悪の教会が君に下した役は『首輪』の外れた禁書目録の裏切りを防ぐための『足枷』さ。だが君単体が教会の意に従わないのなら効果は期待できない。けどまあ、君が教会

にとつて『不要』なら個人的にはすごく助かる。感謝するよありがとう。効果の無い『足枷』に意味はないからね、僕も気兼ねなくあの子を回収でき——」

「マジで!? アイツ連れて帰ってくれんの!? いや、個人的には吸血鬼とかめっちゃ興味あるし錬金術とか見てみたいから行って見たけど行かなかつたらインデックスイなくなってくれるんだろ? いや、正直アイツの方が足枷で困ってたんだよ。傍若無人で人の言うことは聞かないは、すぐ噛みつくわでさ。一回連れて帰ってアイツにシスターの何たるかを教えてやってくんない?」

「すごく嬉しそうにうんうん頷く上条に、炎剣を持ったステイルが襲いかかるまで残り五秒。」

魔女狩りは炎と共に By The Holy Room

d . . .

とりあえず不満タラタラの状態だがステイルが『上に掛け合ってみる』と言ってくれたのでインデックスの再教育が行われることを願いながら、上条は個人的に『三沢塾』に向かつてみることにした。

「とうま？」

しかし、上条はここで少し後悔した。禁書目録コイッが寝静まってからでた方がよかったのでは？ と。

基本上条は一週間ほどなら不眠不休で動いても問題ない。深夜に行動した方が良い時もあるからだ。さて、何故インデックスが寝静まってから動かなかったのだろう。うるさいのは分かっていたのに、

「とうまっってばっ。」

「ん？ 何だインデックス。俺はこれから光力科学御某裁断五角研究所に行くてくる。え、ついてくる？ やめとけやめとけ。お前電子レンジすらまともに扱えない機械音痴だろ？ 超磁力大脳皮質検出機構再現能力開発機の使い方とか分かんないだろ？ そ

んなことじゃセキュリティ付きの自動ドアのオートロックに閉じ込められるぞ。そこはセキュリティレベル四だし、アイデンティフィケーション未登録者のお前が行くとお前アンチスキルに捕まって即刻ジャッジメントだぞジャッジメントですの——
「ツ!!」

と、上条が適当文字の羅列を早口でまくし立てると、インデックスは専門用語(笑)の嵐に知恵熱を出してしまった。

「じゃ、とにかく行ってくるから。晚ご飯は冷蔵庫に入ってるからチンして食べることに電子レンジ中にスプーン突っ込んで火花で遊んだり冷蔵庫のドアを開けて涼んだりしないように」

「え? あ、う 電子レンジは、苦手かも」

お前科学の街に住むなよもう。魔術ばかりの安心安全イギリスで暮らせよコラ。と言いたいのをグツとこらえて上条は出かけようとして、

気付いた。

「こら。テメエ服の中に何隠してる? より正確に言うならお腹の辺り」

「えっ?」

ギクリ、とインデックスは上条を見た。

「な、何にも隠してないよ? 天にまします我らの父に誓って、シスターさんがウソをつ

くわけないんだから」

そう言った瞬間、インデックスのお腹から『みー』という子猫の鳴き声が聞こえてきた。

「ダウトオ！ テメエの信仰心はその程度かシスターもどき！ 思いつきり誓い破ってんじゃねーか！ 何でも良いからさっさと服ん中に隠した野良猫出しやがれ！」

「む。と、とうま、この服は『歩く教会』って言うんだよ？」

「知ってるよ。ぶっ壊したのも直したのも俺だかな」

「教会は迷える子羊に無償で救いの手を差し伸べるのです。よって路頭に迷ったスフィックスは教会の手で保護しました。アーメン」

「よし、その教会もう一度俺の右手でぶっ壊してやるからちよつとそこになおれ！」

「また裸に引ん剥くつもり!？」

「教会さえ無くなつちまえば迷える子羊もいなくなんだろーがア！」

「悪魔！ とうまは悪魔なんだよ」

「なんとも言え。お前は動物を飼う難しさと辛さを分かっちゃいねえ」

そう言った上条の手には野良猫がいた。

「?!」

「^ア物体移動。対象を手元に引き寄せる能力だ。んじゃ、ちよつくら捨ててくる」

「待つんだよとうま！ いくらとうまでもそれをやったら許さないかも！」

「許されなくて結構だよ！ 計画性も甲斐性も無いくせにワガママだけ言うガキに買いつける器量は俺には無い！」

「ばかっ！ とうまのばかばかそのこは絶対飼うって決めたんだもん！」

「じゃあ選べ！ この猫捨てて学園都市で暮らすか、この猫飼うために学園都市をでていくか！」

「うっ とうまの意地悪！ 大っ嫌い！」

「勝手に嫌っとけ」

上条はドアロックと玄関の鍵両方掛けた状態で、猫を連れて外にテレポートした。

連続で空中を飛びながら、上条は影の中に猫をしまう。

「さて どこに捨てようか 後味悪いけどな」

しかし錬金術ねえ。と上条は三沢塾近くのビルの上で呟いた。

そもそも上条はエネに教わった限り、物質創造能力と行って無から何かを作る力を持つている。それが恐らく一種の錬金術だろう。イメージしやすいように最初は手を叩いてから力を使っていたものだ。

ましてや物質を変化させるだけの行為などそんなに珍しいものなのだろうか。いや、魔術世界ならかなり珍しいことなのだろう。似たような能力なら実際に学園都市にも

ある。超能力者の第二位。未現物質ダイクマターはこの世に存在しない物質を作り出すスペシャリストと言っても良い。まあ存在しない物質のみだからあまりすごいとは言えないのかも知れないが。

「しっかし、この塾。おかしなところだらけだ。不自然な空間や明らかに必要ない場所がある」

『・・・そういう風な作りにする必要がどこかにあるんでしょ』

「起きたのか。エネ」

随分寝ていたと思う。ステイルとあって少ししたらいつの間にか彼女は寝ていた。何度呼び掛けても返答が無かったので放っておいたのだが、どうやら起きたようだった。

『ええ。おめめパツチリです』

「そうか。良かった。何故ならこれから吸血殺しに会いに行くんだからな」

『え？』

「さて。幻想殺しが今行くぜ！」

『・・・まあ、頑張ってくださいな』

エネは呆れた様子でそう言った。さあ、愚か者達の舞踏会の始まりだ。

主は閉じた世界の神の如く DEUS | EX | MACH I N A .

「やつぱこういう時は上に向かうのが吉だよな」

『そりゃあ、何とかと煙は高い所が好きと言いますし。大抵の偉い人間は一番上に自分の私室を作りますからね』

「研究者は反対に地下の一番深い所だったりするけどな」

『それはご主人が潰しに行くからでしょうが……』

くだらない会話を交わしながら上条は塾の中を歩いていく。少しばかり時間をおいていたため現在時刻は既に最終^P下校時刻^Mは過ぎ^{6:30}てしまっている。

『夜。ですね』

「吸血殺しのところにはやつぱり集まっているのかね。吸血鬼共」

『さて、今のところは大丈夫なんじゃないんですか？』

「エネがそう言うなら間違いないだろうな。なんて言ったらエネだから」

『なんですかその私に対する変な信頼は。いや、嬉しくないと言うことはないんですが。珍しく、いや以前の^ご主人からしてみれば珍しく、私のことをベタ褒めしてくださいって

るので少々嬉しくて舞い上がってます。はい』

「当たり前だ。俺の中でエネは大切なパートナーなんだから」

『それにはどういう意味が?』

「・・・エネが体を取り戻し次第伝えるよ」

『えー!!? 気になりますね・・・』

「今は気にしなくて良いだろ? 大体・・・ステイル」

『あ、ハゲ神父』

「そのネタはもうやったよ」

「ん? 君がここにいると言うことは——ここはやはり日本なのか? 東洋人ばかり

だからなんだと思っていたけど、しかしなんだ? この奇妙な結界構造、見覚えのある

魔力だが」

「あ、そう。だったら——」

「——さっさと思い出せ未成年喫煙者!」

上条は恐らく錬金術師にやられたのだろう馬鹿な魔術師のおでこに、掌底を叩き込んだ。

スタイルに追いかけて回され、諸々の事情を説明したら、

「それなら最初から行くと行ってほしかった」

とスタイルに睨まれたので、

「途中で気が変わったんだよ」

と説明したら、

「お気楽だな君は」

と返されたので少し落ち込んだ上条だった。

「で？ アイツの錬金術ってなんだよ」

「良く分かっていないんだよね。恐らく偽物であろうヤツには会ったんだが」

「ふーん。言葉一つで何でも思いどーりかと思っただけだな」

「思い通り……か。嫌な言葉だね。アルスⅡマグナを思い出してしまう」

「それってたしか錬金術の最終形態みたいなもんだったよな。もしそれをアイツが極めちゃまってたらどうすんだ？」

「そんなはずは無いつ！」

「あつはい」

上条は珍しいスタイルの反応に思わずすぐに返事を返してしまった。

「……ちよつと時間を潰してる間にインデックスまで捕まっちゃまってるとみただ

な」

「何？」

「いや、一度ここに来ようとしたんだけど途中で忘れ物を思い出して寮に戻ったら寮の中にはインデックスはないわペタペタルーンは張つてあるわで『あーこりやステイルを追つてインデックスが三沢塾に行つたパターンだわ』なんて当たりをつけただけだ」

「……ヤツの目的が分かつた。禁書目録だよ」

「ん？ 錬金術師が魔道書を……あー「パートナー」ね」

「そうだ。三年前、ヤツはインデックスの先生だった」

「それで？ 自分のことを思い出してもらおうとするつて事か」

「まあもつとも、アイツには絶対あの子を救うことはできないけどね」

「ん？」

「これは簡単だ。台無しにしたのは君だ。既に救われている存在を、もう一度救うなんてできるはずが無い」

「あ……(察し)」

「ついたようだ。ご丁寧に扉が開いてる」

『三沢塾』北棟の最上階——校長室への巨大な扉は、上条達を迎え入れるように開いて

いた。

そして、上条にとつては途轍もなく馬鹿馬鹿しく、聞いているこっちがあほらしくなるような会話が魔術師二人の間で会話されていたが、

「だが、吸血鬼ならば。永遠に知識を蓄えて生き続ける吸血鬼ならば、彼女を救うことが出来る」

「はは——あつはつはつはつ!!」

もう、無理だった。一度でてしまった笑いはもう止まることを知らなかった。

「何がおかしい」

「笑う場面では無いはずだよ」

「ククク。いやごめ……クツ！ あーっおつかしい。魔術師つてのは何奴も此奴も一般常識が欠けた小学生以下の知能しか持たないのか？」

「何?」

「じゃあ質問その1。インデックスの脳が圧迫され一年の記憶しかできません。さて、その容量は?」

「当然。十五パーセントだ」

「じゃあ完全記憶能力者が一年で十五パーセントも記憶容量を使うとして、完全記憶能力者の脳が自然に圧迫されるのはいつで来る?」

「・・・・・・・・・・」

「答えは六年と半年だ。小学一年生で完全記憶能力者は死んでしまうことになる。おつかしよなー? 何だつてそれだけしか生きられないんだよ」

「つそれは、十万三千冊もの魔道書が」

「だから一般常識が欠如してんだつつの。そもそも本の知識と、読んだ思い出は入れ物が違うんだよ。燃えるゴミと燃えないゴミみたいな? そもそもこれ、外の高校ですら習う一般常識だからな? 別に学園都市が特別とかじゃねーから。まじで魔術師でできないんだから他の誰にもできないみたいな風潮今すぐ止める赤っ恥かくぞコラ。ああそうそう。これだけ言わせてくれ、インデックスを救う救わないとか言ってるけどさ。お前、一体いつの話してるわけ?」

「な、に——」

怪訝な顔で上条を見ていたアウレオルスは、上条当麻の顔を凝視した。

「そういう事さ。インデックスはとづくに救われてるんだ。君ではなく今代のパートナーによって。君にはできなかつたことを、そいつは成し遂げてしまったんだよ。ほんの一週間ほど前だつたかな」

そして、上条はそのスタイルの言葉の続きを盗つて、

「そう言えばお前の願いはインデックスがパートナーと幸せになることだつたよな。安

殺しの七並べ Dead Day Sins.

上条は可哀想な目でアウレオルスを見ていた。インデックスを傷付けようとしてもなお、大切な存在である彼女を傷付けることはできなかった。

「倒れ伏せ、侵入者共！」

ありとあらゆる重力に上条の体は押さえつけられる。立つこともままならないが、それでも無様に床にへばるつくようなマネはしない。

「は、はは、あははははは！ 簡単には殺さん、じっくり私を楽しませろ！」
「待って」

そこに、姫神秋沙が立ち塞がった。

だが、残酷だがもうアウレオルスライザードにとって彼女は必要ない存在だ。このままではマズい。と判断した上条は、右手のエネルギーを全身に伝達する——

「邪魔だ、女——」

上条の右手を基点として、全身に刺青のような紋章が広がって体の自由が取り戻せた時。

「——死ね」

(ふざ)――

体が動くようになった上条は一瞬で姫神の元へ駆けつけ、倒れゆく彼女の体を抱き留めた。

「――つけんじゃねえぞ、テメエ!!」

「な……我が黄金の錬成を、右手で打ち消しただと？　ありえん、確かに姫神秋沙の死は確定した。その右手、聖域の秘術でも内包するか！」

「そんな魔術的なものじゃねえ。科学的なものでもねえ。ただ俺の右手は、異能の力なら神の奇跡だって喰い殺せるってだけだ！」

上条はそこで一拍おいて。

「いいぜ、アウレオルスIIイザード。テメエが何でも、自分の思い通りにできるってなら――」

姫神をゆつくりと床に下ろし、そして立ち上がる。全身から怒りというオーラを放ちながら、

「――まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す……ッ!!」

「なるほど。真説その右手、私の黄金鍊成も例の外に洩れず打ち消すらしい。ならばこそ、右手で触れられぬ攻撃なら打ち消す事は不可能なのだな？ 銃をこの手に。弾丸は魔弾。用途は射出。数は一つで十二分。人間の動体視力を超える速度にて、射出を開始せよ」

「おっと」

「撃ち出された銃弾を体をひねってかわす上条。今ヤツはなんと言った？ 人間の動体視力を超える速度？ だったら動体視力を引き上げてやれば良い。」

「先の手順を量産せよ。銃の暗器銃にて連続射出の用意」

上条は避けようとはしない。否、避けれない。足元には姫神が転がっているからだ。

「馬鹿が！ 何を立ち止まって——ッ！」

「準備は万端。十の暗器銃。同時射出を開始せよ」

十の青く輝く魔弾が上条の居る場所で爆発を起こすのは同時だった。

「ふっ。当然」

「何が当然だ？ 爆発で殺さない程度に痛めつけようって算段か？」

綺麗な布がひらりと舞っている。その羽衣の名を

「でも残念。この『セイレーン』を貫ける攻撃は存在しないと思え」

『セイレーン』それは『ハーデイス』と同じ超硬度の金属オリハルコンで作られた

もの。ただし、オリハルコンの鋼線を編み込んで作られているため、布のように良くしなるし良く切れる。

「内容を変更。暗器銃による射撃を中止、刀身を持って外敵の排除の用意」

その言葉にも上条は何の興味を示さない。セイレーンの防御力を信じているからこそ狼藉だ。

余裕そうな笑みを続ける上条当麻にアウレオルスⅡイザードは何か気付いてような顔をして、

「ふむ。貴様の過ぎた自信の源は、その得体の知れない右手だったな。ならば、まずはその右腕を切断。暗器銃、その刀身を旋回射出せよ」

簡単に言って、セイレーンで刀身は防がれた。ハーデイスでも同じようなことはできないだろうが、武器交換の時間は与えられなかったため、上条はそのまま刀身を受け止めた。

地面に落ちた刀身を見たあと、上条は笑って、

「なあ。・・・何で今俺の右腕を切り落とそうとした？」

笑顔でそういう上条に一、二歩後ろに下がるアウレオルス。だが上条は止まらない、ゆっくりとアウレオルスに近づいていく。

「答えは簡単だよな。お前は俺の右手がお前の黄金鍊成にどこまで通用するかが分から

なかった、だから姫神の時のように死ねって言わなかったんだ」

「こつ、この場から消えろ！」

上条当麻は消えない。

「今すぐ立ち去れ！」

上条当麻は去らない。

「その場に生まれ！」

上条当麻は止まらない。

「直接死ね！」

上条当麻は死なない。

「ほらほらどうした。錬金術師？」

上条は笑う。馬鹿にするような笑い方でゆっくりとアウレオルスIIイザードを追い

詰めていく。

ポケットから針を出そうとして取り落とすアウレオルス。

「そいつが無けりや、ハイにもなれねえなあ？ 『雑念をかき消せ』ねえよなあ？」

ギャハハ。とまるでどこかの第一位のような笑い方で上条は笑う。

「どーした？ 言葉にしてみろよ。言葉のままに歪めてみるよ！」

「く、来るな!!」

（ありえん。我がアルスⅡマグナがその効力を失うなど！ 待て、考えるな！ そんなことを考えては……!）

もう遅い。それを考えてしまったアウレオルスⅡイザードの黄金鍊成は効力を失ってしまっていた。

「敵いつこねえよなあ？ なんせ、テメエの能力は『言葉のままに現実を歪めること』なんかにじゃなくて……」

「コイツ……化け物……!？」

『考えていることをそのまま現実にしちまう力』なんだからなあ！」

ベキリ、と。上条当麻の右腕から異質な音が聞こえてきた。それは腕中に現われていた蠅王紋をなぞるように割れた腕からしみ出すように出現した。

透明なガラスの彫刻に血を撒き散らしたように、得体の知れない透明なものがその力タチを成していく。

大きさにして二メートルを超すほどの、獰猛にして凶暴、それ以前に伝説の中でしか見ることのできないような——巨大にして強大な、ドラゴンストライク竜王の顎。

（待て これ 私の 不安 過ぎん 落ち着け 不安 消せば こんな

馬鹿げたモノ 消せるはず —— ツ!!）

「——喰い殺せ。幻想喰い」イマジンイーター

(無理 敵う はず な)

そう思った瞬間、最大限に開かれた竜王の顎が錬金術師を頭から呑み込んだ。

浸食のディーブブラッド

Devil | or | God

d.

「まいどまいど思うけど、君って割とファンタジーな生き方をしてるよね?」

ファンタジーなんだろうかと、上条は思う。

そもそも今回は右手の至る所に猫に引つかかれた程度の傷があるだけといういたつて軽傷だし、病院に来る意味が分からなかった。それでも『入院費もかからないしまあ行つとくか』なんて軽い気持ちで来ているのだった。

そして話は戻るが、ファンタジーとはどの辺りがそうなのだろうか。

「十日以内に二回も病院にお世話になる患者さんというのは例外なく看護婦さん達の間でウワサになるね? 君、もしかして看護婦さん属性なの?」

「生憎とナースに興味は無いですね。アイツのナースなら見てみたいですけど」

「君は一途なんだね。そしてもつと言いたいのはこれだ。君は面倒事というか厄介ごとに首を突つ込むクセがあるね? 学園都市に入学して、僕が“彼”から入院費を受け取つてから君は何度ここに来たか覚えてるか?」

「……さあ?」

上条は看護婦さんに包帯を巻いてもらいながら、首を傾げた。

「僕も百回以降は数えてないね？　それでも、その内の五十回があの子に会うためなんだからまあ怪我だけじゃないと覚えておくとするよ」

「……今日も、あいつに会ってきても良いですか？」

「僕は早く彼女に退院してもらいたいけどね？」

「俺もその方が良いと思います」

「……ままじや僕は初めて敗北してしまう。もし彼女が冥界にいるのなら君のその右手で早く引つ張り戻してやつてくれないかな？　死者以外は必ず直すが僕の身上だからね？　彼女の意識も早く戻ってほしいんだよ？」

「ええ。知ってますよ。冥土返し先生」
（ハブンキャンセラ）

そう言つて上条は頭を下げて診察室をでる。彼が出ていった扉を見つめながら冥土返しは呟いた。

「彼女が起きることももう一人救われる患者がいることを分かっているかな。上条くん」

*

「うっわ。厨二病患者かよ」

自分の右腕にグルグル巻かれた包帯を見ながら上条はそう呟いた。これではまるで

蛇王心眼の持ち主ではないか。

「とうま」

「やあ、上条当麻」

「……お前等」

怪訝そうな顔をして上条は呟く、それもそのはず。彼らは今邪魔をしたのだ。彼女に会いに行く邪魔を。

「何だ？ 用件なら手短かに頼むぞ」

「一応、今回の件については礼を言うつもりだったが……実際に会ってみると礼も言いたくなくなるほどに態度が悪いな君は」

「年上には敬意を払えよ十四歳」

「……ふう。で？ 君なら今回のことがどのようにして終わったのか見当はついてるだろう？」

「まあな」

上条はあの後後始末をステイルに押しつけて逃げるように寮に帰ったのだったが、事の顛末については予想できていた。

「アウレオルスⅡイザードは記憶喪失。その後お前が顔を変えてアウレオルスⅡイザードという人間を殺したって事だろ？」

「流石。見る目が違うね。じゃあそろそろ僕は次の仕事もあるし、別のところに行かせてもらおうよ」

「そうしてくれ」

「とうま、とうま。売店にマスクメロン味のポテチが売ってるんだよ！レアだから買いたいし、お金が欲しいかもー」

「止めとけ、止めとけ。どうせ学園都市製の試作品だろ？ろくなもんじゃねーつての」

「ん？ああ、そうだな。俺は全く知らなかったが。つてなにインデックス。自分で尋ねておいてその人を疑うような視線は」

「……、とうま。今回はあいさのために戦ったんだよね。私じゃなくてあいさのために」

「んなわけねーだろ。俺は最初から最後まで、自分のために戦ってたつつの。二年間のニート生活ナメんなよ」

「それはそれで嫌かも」

「で？結局言いたいことは？」

「……分かってるくせに」

「ああはいはい。だから結局『歩く教会』も教会なんですよー、つてだけの話だろ？」

インデックスと別れた上条当麻はとある病室にやってきていた。

そこでは病院服を着たツイインテールの少女が培養器に入っている。見た目は十五、六歳と行ったところだろう。上条と同年代に見える。

三年前、冥土返しが彼女に施した治療は、その当時最新鋭の肉体保存治療だ。だが、そんな物が完璧なはずもなく、彼女の肉体は一年ほど成長が止まっていたため、実際二年ほどしか肉体年齢は年を取っていない。

彼女の肉体に触れたくても触れられない上条はその手を空中で漂わせるだけ。

『……ご主人』

「——んで。なんでお前はそこにいるんだよ……!」

『ご主人……?』

「なんでお前は出てきてくれねーんだよ。なんで触れられないんだよ……。早く、早く出てこいよ馬鹿……」

『……………ごめんなさい』

「……………馬鹿」

『……………ごめん』

「だったら……早く起きて来いよっ」

『……………ごめん……なさい……っ』

——病室の外。

「……………僕は患者に必要な物を揃える医者だつてのは知つてるだろ？」

『ああ、知つてるさ。何度かお世話になつたからね』

「……………だったら彼らを救う方法を何とかしたいんだが」

『……………意識不明の重体の少女の意識が、電子の海で生きている。科学の街でも流石に良く分からない現象だ。何度言つたら分かる？』

「ふむ。君ならどうする？」

『彼女の意識が電脳世界にあるなら彼女の脳と電脳世界を繋げば良い。私ならそうする。……ここはそういう事を一般的に行つているのだから』

「……………そういう事をしないで済むように、彼らが自力で解決することを祈つてい

るよ」

絶対能力進化実験編

レディオノイズ Level 2

風が強い。

宵闇。ビルの屋上に寝そべるように身を潜める少女は目を細める。

その両手にあるのは少女には不釣り合いなライフル。いや、不釣り合い、どころではないだろう。何せライフルの全長は百八十四センチ。少女の伸長を軽く凌駕する。

メタルイーターMX。

湾岸戦争では二〇〇〇メートル先の戦車を爆破した伝説を持つ対戦車ライフル『バレットM82AI』。本来、あまりに強大なすぎる反動からフルオート機能は必要ないと言われた対戦車ライフルに、無理矢理連射機能を追加した試作モデルがこの鋼鉄破りメタルイーターだ。

チャチなヘルメットならその反動だけで粉々に砕くほど凶暴なメタルイーターだが、しかし何故か少女の華奢な体にはしっくりと馴染んでいる。衝撃というのは押さえつけるものではなく受け流すものである。少女は学習装置テストメントを用いて一四日に及ぶ情報入力くんれんの末、メタルイーターの放つ衝撃を演算し、最も効率良く受け

流す計算式を導く事に成功していた。そんな事をせずともメタルイーターを初見で完璧に撃ちこなす少女も存在するのだが

呼吸を殺す少女は、冷たいスコープ越しに六〇〇〇メートル先の『標的』を眺める。夏の夜の羽虫を集めるように光を放つコンビニから出てきたのは一五。六歳の少年だ。針金のように細い体、少女のような繊細な肌に白い髪。掴めば折れそう……という表現に偽りはないだろう。

その少年は、見る物に鋭いナイフの切っ先をイメージさせる。無理もない、書庫バンクに残された少年の公式戦の戦果は全戦全勝どころか、ただ一度の掠り傷も負った事がなく、たった一度の防御や回避を取った事すらないのだから。

少年の在り方は、相手の刃を受け止める可能性など考えず、ただ敵の肉を斬る事のみを目的とした細身にして薄刃の、極限まで刀身を研ぎ澄ました『鋭さ』そのもの。

標的の本名を少女は知らない。コードは『一方通行アクセラレータ』

一大能力開発機関『学園都市』において七人しかいない超能力者レベル5。その中でも『頂点』に立つ少年の名前だった。

(横風が強い、……照準を三クリック左へ修正)

スコープの側面についたネジを回しながら少女は口の中で呟く。

つまらなそうにコンビニ袋を揺らして帰路に着く少年——それが少女の標的だっ

た。

少女が正面から立ち向かった所で一方通行には絶対に勝てない。いや、この学園都市、下手をすれば地球上にすら一方通行に真正面から立ち向って勝てる相手などいなくてもいいかもしれない。

だが、逆に言えばそれだけだ。

真正面から勝てないなら、真正面から戦わなければ良い。

結局の所超能力なんてものは手足を動かすのと変わらない。よほど制御に不慣れな無能力者レベル0でもない限り、チカラの発動はおおよそ二つに分類できる。

一、能力者本人が『チカラを使う』と命じた時。

一、能力者本人が身の危険を感じた時。

ならば話は簡単、相手が『自分の命が狙われている』事すら気づかない内に、一撃の不意打ちで命を奪ってしまえばどんな能力者にも勝利できる。

遠距離狙撃は元々は学園都市の風紀委員ジャッジメントが暴走した能力者を捕縛するための方法だが、あちらはゴム弾で意識を刈り取るのに対して少女は鉄鋼弾で心臓を刈り取る。

(ビル風………三方向からの渦、照準を右に一クリック修正)

少女は口の中で呟きながら、さらにスコープを微調整する。

鉛弾というのは、意外と風に流されるものだ。しかもビルが乱立する場所で葉数は一

方から吹くとは限らない。様々な方向から流れてくるビル風はぶつかり合い、渦を巻き、あらゆる方向へと散っていく。

外す事は許されない。相手は最強の超能力者、初撃を外して勘付かれれば、その時点で少女の敗北は決したと言つて良い。どれだけ距離が離れていても、どこまで逃げたとしても。少女は引き金に指をかける。

そこにためらいはない。スコープの先の少年が生きた人間である事も、この引き金を引けば五〇口径の対戦車砲が時速一二〇〇キロで空を裂き、音よりも速く少年の上半身を肉片に変えてしまう事も……それらの事実を正しく理解していても、少女の顔には微塵の迷いも無い。

その華奢な肩に乗せられた指示は一つ。

最強の超能力者『一方通行』を遠距離狙撃で破壊する事のみ。

(.....)

少女の耳は風の音を聞いていた。ぶつかり合い渦を巻く風の流れが、刹那、一定の方
向へと流れていく。

時間にしてわずか二秒弱。けれど確かに複雑なビル風が安定したその瞬間。

少女は引き金を引いた。

花火工場が爆発するような轟音と共にいくつもの砲弾が空を裂く。遠距離狙撃では

考えられない事に、少女はフルオート射撃を行っていた。大の大人すらひっくり返るほどの反動を無理矢理に受け流し秒間一二発もの砲弾を、針の穴を通す正確さで射出していく。

ものの一秒で空となった弾倉を無視して少女はスコープを通して少年の末路を追っていた。風の流れは一定しているため弾が外れる事はない。放たれた一二発の弾丸は残らず少年の背中に吸い込まれ、その針金のように華奢な体が粉微塵に弾け飛ばすはずだ。

そう、本来ならそのはずだった。

刹那、少女の手にあるメタルイーターが爆発した。

少年に直撃した砲弾が跳ね返った。まるでビデオの巻き戻しのように、綺麗に弾道を逆戻りした砲弾は、剣玉みたいにお行儀良く対戦車ライフルの銃口の中へと飛び込み、そしてメタルイーターを内側から粉々に破壊したのだ。

だが、少女には飛来する弾丸を目で見て確かめるほどの身体能力はない。

彼女に分かるのは対戦車ライフルが何らかの力で破壊された事、その無数と呼べる鋭い破片が全身に突き刺さった事、メタルイーターのストックに押し当てていた右肩が『何か』に貫かれ、噛み砕かれるように切断された事。

そして、メタルイーターの狙撃を受けて、なお一方通行は無傷でいられた事。

最後に、この遠距離狙撃は失敗し、一方通行に感づかれた事。

それだけ分かれば十分だった。十分すぎた。頭から熱湯を被ったような激痛が襲いかかるが少女は気にしない。そんな暇はない。ボロボロの身体でビルの非常階段へ向かう。

狙撃に失敗した時点で少女には万に一つの勝ち目もなくなった。故にこの敗走は形を立て直す類のものではない。単純に、一秒でも一瞬でも余命を引き伸ばそうとう、単なる延命処置でしかない。

宵闇に足音は響かない。狩人は音もなく確実に瀕死の少女との距離を詰めていく。狩る側と狩られる側。一瞬にして立場の逆転した殺人劇が幕を開ける。

イマジンブレイカー Level 10 (and More)

八月二〇日、午後六時十分。

真夏の夕暮れ、補修を終えた上条当麻はぐったりと帰り道を歩いていた。たとえどんな理由があっても、この長い夏休みに一人学校補修へ行くのは精神的によろしくない、と彼は思う。

だが相方である電脳少女はそんな上条の意見を

『そんなものですか？ 小萌先生の話は面白いし聞いていて退屈しませんか？……もしかして一人で授業を受けるのが寂しいんですか？』

と、不思議そうな顔と口調で一掃した。

通常『夏休みの補修』と呼ばれるモノは夏休みの初日に行われるものだし、実際の上条のクラスも補修は十九日から二十八日にかけて行われたのだが、例の『自動書記破壊事件』とその後始末で本来受けるはずだった補修を丸々サボった上条は、今になってそのツケを支払わされているという訳である。

で、何故か。

そんな上条は、路上にポツンと立つジュースの自動販売機の前で呆然と立ち尽くして

いる。理由を説明するのは簡単だ。上条が確かに入れたはずの二千円札に自動販売機は何の反応も見せず、黙りこくつたまま微動だにしないからである。

半分以上諦めの表情でお釣りのレバーをガチャガチャと動かしてみるのが、やはりウンともスンとも言わない。そりゃあ二千円札が今時珍しいのは百も承知だが、仮にも科学の街である学園都市にある機械なんだからもう少しマトモな反応リアクションをしてくれても良いのではないだろうか。と、ここで何か視線を感じた上条が目線だけで隣を見ると、そこにはジツ、と自分を見つめる相手の姿が。『私の出番か？ 出番ですか??』という屈託のない期待の眼差しで自分を見つめる貴音に、上条はサツ、と瞬速で視線を逆方向へと動かす。

確かに上条ではこの手の機械を下手にいじった所で間違はなく警報が鳴るに決まっていた。そんな展開は読めていた。でもだからと言ってここでエネに頼って二千円札を取り戻してもらおうのもなんとなく癪に障る。

どうする……? と、頭を悩ます上条の後ろから、カツつと革靴の足音が聞こえた。

「ちよろつとー。自販機の前でボケつと突つ立ってんじやないわよ。ジュース買わないならどくどく。こちとら一刻でも早く水分補給しないとやってらんないんだから」

と、いきなり後ろから声を掛けられた。それと同時に女の子の柔らかい手が上条の腕

を掴んで横にぐいぐいと押そうとするが、女の子の手が上条の腕を掴むより前に上条はほとんど条件反射的にその身を反転させて女の子と向かい合う。そのあまりのスピードに、むしろ女の子の方がビックリしたみたいだった。

『はあ………、なんだ、ビリビリか』

「わったしっしはー、御坂美琴って名前があんのよ！ いい加減に覚えるド馬鹿!!」

少女が怒鳴った瞬間、その茶色い前髪から青白い火花がパチンと散った。瞬間、ヤッバイ！ と上条は物凄い速さで近づいてその右手を美琴の眼前にかざす。それだけで10億ボルトに達する高圧電流は槍のようにまとまる事すらなく消滅してしまう。

チッ！ と露骨に舌打ちする彼女は理解できていない。今、自分は上条という一人の少年によって「守られた」という事実気づいていない。

「………」

チラッ、と一瞬後ろを見ると、そこにいる少女は眉間にしわを寄せながらいつの間にか取り出したいくつかの呪符をシブシブと服の中へしまっている最中だった。とりあえずは矛を取めた相方を確認して、ホッとしたようにため息を吐く。

ここだけの話、貴音は御坂の事がどうしても気に入らないらしい（無理もないが）いくら御坂美琴が学園都市で七人しかいない超能力者の一人とはいえ、エネとマトモに戦闘を行った場合、確実にギッ、タギタのボツ、コボコにされてしまうだろう。

「・・・・・・・・」

「なに泣きそうな顔でこっち見てんのよ？」

美琴は両手を腰に当てて

「とにかく用がないならどけどけ。私はこの自販機にメチャクチャ用があるんだから」

「あー」

上条は美琴と自販機を交互に眺める。

目の前の少女は情状酌量の余地もなく殺人未遂な訳だが、かと言って確実にお金を飲み込むと分かっている自販機の事を教えない、なんてことは許されるのか。いや美琴のがっかりする顔が見たくないというより、その後確実に襲いかかるであろう殺人級の八つ当たりが怖い。

そしてなによりその八つ当たりによって今度こそキレたエネを止めなければならぬのが怖い。

「その自販機な、どうもお金を飲み込むっぽいぞ」

「知ってるわよ」

と、美琴は一言で答えた。逆に上条とエネのほうは美琴の意図が分からない。

『??』 呑まれるのが分かかっててお金を入れるの？・・・・・・は！ もしやこの自販機

は仮の姿で実際は賽銭箱的な役割を果たす霊装なのでは・・・・・・!!』

と、そんな思いつきりの外れな推理をするエネを尻目に

「常盤台中学内伝、おぼーちゃん式ナナム四十五度からの打撃による故障機械再生法！」
ちえいさーっ！ というふざけた叫びと共に、あろう事か美琴はスカートのまま自販機の側面に上段蹴りを叩き込んだ。

ズドン！ という轟音。次いで、自販機の中でガタゴトと何かが落下する音が響いて、取り出し口に缶ジュースが出現する。

（つーか「内伝」って事はまさか常盤台中学の「お嬢様」は皆こんな事やってるのか？ いやそんな馬鹿な……）

完全に否定できないのが恐い。少なくとも一人、彼女と全く同じ事をしそうな女性を上条は一人知っている。

『……えっと、警備員へ通報するための番号は……』

一瞬唖然としていたが次いで非常にナチュラルな動きで当然のように警備員へ通報しようとするエネを必死になだめる上条。

目の前の少女は情状酌量の余地もなく窃盗犯な訳で、エネの行いは至極当然なもの筈だが、かと言って何の躊躇いもなく中坊を警備員に付き渡すことは果たして正しいのか？ いや美琴がかわいそうだからと言うより、自分が共犯者と認識されてしまいそうで恐い。だから上条はとりあえず自分の言葉でこの不良少女を更正させてみることに

した。

「あのな。もしかしなくてもテメエらが毎日毎日よつてたかつてこんな事してつから自販機が壊れちまつたんじゃねーのかと問いかけたい！」

「いいじゃんよー。なに怒つてんのよ、別にアンタに実害あるわけじゃないでしょ？」
あつさりと失敗した。どうやら自分には教師の才能はないらしい。

「あん？　そういう何でアンタこの自販機が金食い虫だつて気づく？」

言いかけて、美琴はちよつと黙った。

「……………ひよつとして、呑まれた？」

「……………」

上条は助けを求めるようにエネへと目を配せるが、彼女は呆れたようにため息を付いただけだった。その表情は「もつと早く自分を頼つていればこんな事態にはならなかったのに」と暗に語っていた。

美琴は美琴で

「一体いくら呑まれたの!？」

と目をキラキラさせながら問いかけている。

「……………二千円」

上条が正直に言ったとたん、美琴に爆笑された。

「二千円？ ひよつとして二千円札！ うわ見たい、超見たい！ まだ絶滅してなかったんだ二千円札！ くっく、あはははははは!! そりや自販機だってバグるわよ、あつははつはつははははははは!!」

という、いわゆる「馬鹿笑い」が辺りへと響き渡る。その反応を見て上条は『うそつきーっ!』と叫んで頭を抱えた。だから二千円札なんて言いたくなかったのだ。自販機で使ったのも両替の意味が強い。

こんな事になるならエネの言うとおり、面倒くさくても「自分で一から作るべきだった」と落ち込むが、そんな事を今考えても仕方がない。

そんな上条を見てさすがにいたたまれなくなつたのか、美琴は

「あー、ごめんごめん。じゃあ笑わせてくれたお礼にこの美琴さんがその二千円札を取り返してあげよう」

美琴は自販機の正面に立ち、右手の掌をゆっくりと投入口へと突きつける。

と、ここでエネはふと疑問に思った。

『ちよつと待て。アンタ、一体どうやって金を取り返すつも——ツ!』

次の瞬間、美琴の掌から雷じみた青白い火花が飛び出て自販機に直撃した。

美琴が自販機に近づいていた事もあつてか、流石に今回は止める暇など無かつた。

ズドン! という凄まじい轟音と共に、メチャクチャ重たそうな自販機が相撲取りに

体当たりされたようにグラグラと揺れた。自販機の金具と金具の隙間からもくもくとギヤグ漫画みたいに黒い煙が噴き出てくる。

上条は青ざめた。槇本の顔は真っ白になった。

(何してくれてんの——っ！)

(ばつ馬鹿なのかな？ 常盤台のくせにバカなのかな！)

「あれー？ おつかしいわね、あんま強く撃つつもり無かったのに。あ、なんか一杯ジューズ出てきた。ねえ二千円札出てこなかったけど間違ひなく二千円以上ジューズ出てきたからこれでオツケー？ ——ってなんでいなくなってるのよ！ ちよつとー!!」

美琴が上条の方へ向き直った時、二千円札を自販機に呑まれた少年Kの姿は跡形も無く消え失せていた。持ちうる全力の脚力でその場を離れ、その時すでに自販機のスグ近くにある公園の林の中に身を潜めていたのだから当然である。

常日頃から様々な不幸を体験している上条には分かる。一秒先の未来オチが明確に見える

『ふ、ふざけるなああのビリビリ！ あいつは本当に「御坂」の血筋ですか!?!』

思わずと言った感じで叫んだエネに、上条は木々の陰に身を隠しながら何度も頷き、大いに同意しそうになって——

『やるにしてももう少し上手いやり方と言うものがあるでしょう!!』

「おい!!」

上条がツツコんだ瞬間、公園の外。はるか後方の路上で、散々溜め込んだものを吐き出すように自販機の警報が鳴り響いた。

「なあ………どうすんだこれ？」

「………」

うまい具合に不幸トラブルを避けた上条だったが、問題なんていくらでも沸いてくるものだと思ひ知らされていた。

美琴からうまく逃れた後、一度自販機に戻り、二千円札を回収後。寮近くのスーパーに寄って

「今日は豪勢にしゃぶしゃぶでもすつかー」なんて軽い気持ちで食材を大量に買い込んでしまったのがいけなかった。

何故か今日に限って野菜もお肉も質の高いものが並んでいた。

もちろん最高級のものではないし、いつもに比べたらマシ。程度のものだったが、普段は自分とエネが共に厳選を重ねた「まあこの中ではマシな方」な一品をその時に必要な分だけ買い込むのだが、今日は「あれもいいこれもいい」と、両手に握る計四つのレジ袋。

その一つ一つがパンパンになる程に買い込んでしまったのだ。

いや、これだけならば良い。そもそもこの程度の重さなど、上条にとっては一枚のちり紙と大差ないのだから。

では何が問題なのか。

エネの足元にある大きな段ボール箱に上条は目を向ける。ダンボールの中には世界一有名な炭酸飲料が2リットルのペットボトルで半ダースぶん入っていた。スープーやデパートなどでよく見かける、ありきたりなクジの景品。

上条が当てたのかと言えば当然、そうではない。そもそも不幸体質の上条が、しがないうスープーのクジ引きで、三等とはいえ「幸運にも」当たりを引ける、筈がないのである。「力」を使い、工夫を凝らせば「必然的に」出来なくもないが、そんな事はしない。「幸運にも」当たりを引いたのは、上条に憑いている目覚め、エネのほうだった。

不幸体質である上条に憑いている筈のエネだが、どうやらそれが原因で彼女の運まで

落ちるといったことは無いらしい。

ゆえに、彼女と出会ってからの上条は商店街で使えるクーポン券を引き当てたり、ジュースの自動販売機で連続で当たりを引いたりするのである。もちろん、他人からは上条が当てたように「見えるだけ」であり、本当に幸運なのはエネの方なのだが、そんな事はどうでも良いのである。

まあその「エネの幸運」が、上条にとつても「幸運」であるかと言えばまた別なわけだが。

『し、仕方ないでしょう！ これは私のクジ運が良かった恩恵であり、運命と言う一つの歯車がこの一品を私達の元に運んできた以上その恩恵をありがたく受け取るのが……』

必死に弁解の言葉を喚き散らすエネを無視して上条は考える。

もちろん、この大量の荷物、もしくはこの莫大な量の炭酸飲料のどちらかを放置して一度学生寮に戻る、と言う選択肢は無い。

再びここに戻ってくるまでの間にスキルアウトの不良どもに持ち去られるのが落ちである。

かといってこのまま纏めて持ち帰っては、明らかに不自然な格好、もしくは行動で学生寮までの道を歩くことになってしまう。

例を挙げるなら、両手でレジ袋をそのまま持ち、余ったダンボール箱を「片足で持ち上げ」もう片方の足でケンケンパをしながら学生寮まで戻る。

という方法がある。常人にはとても出来そうに無い芸当だが、上条にとっては馬鹿馬鹿しいくらい簡単なものだ。

が、もし仮にその姿を誰かに目撃された日には「なんか妙な格好で歩く怪人物」として警備員か風紀委員に通報されてしまうだろう。そうなっては不味い。

大量の荷物、人の目、迫る下校時刻……
さて、どうするべきか……

散々迷ったあげく上条がとった行動は、ダンボール箱を一旦放置して数十メートルぶんレジ袋だけ運び、その場に片方の腕に掛けていた二つのレジ袋を下ろして箱を放置した場所に戻り、こんどは箱を片方の手で持ち上げて運ぶという、比較的安全（見た目的にも）な代わりに結構な手間を食うものだった。

「たつく、修行でもないのになんだってこんな面倒くさい事を……」

『ご主人、逆転の発想ですよ。修行を重ねたおかげでこんな面倒臭い作業でも楽々と……』

路上にパンパンに膨らんだレジ袋を置き、放置したダンボール箱のある場所へ戻ろうとする途中で、路上に転がっていたテニスボールが風に煽られて地面と上条の足の隙間へ滑り込むが、その程度の「不幸」に負けるような鍛えられ方などされてはいない。

上条に思いつきり踏まれたそのテニスボールはなぜか全く歪まなかった。

上条が地面と同様に踏みつけて、もう片方の足が地面に付き、再びその足を動かすまで、一ミリも動く事はなかった。当の上条はそんな事を少しも気にしていない様子でダンボール箱を放置した場所へと戻ろうとして、

その目を大きく見開いた。

目の前にダンボール箱（2リットルペットボトル半ダース入り）を抱えた御坂美琴が立っていたからだ。

（……………は!?!）

ギョツ、として思わず一歩下がりがかけた上条だが、直後に異変に気づいて逆に足を前へと進める。

おかしい。上条は直球にそう思った。外見は衣服を含めて完璧に御坂美琴その人

なのだが、違う。

「魂の波長」が違う。「魂の波長」と言うのは文字通り、人が持つ「魂」から発せられ

ている特定の「波長」の事だ。人によって弱かったり強かったり、広かったり狭かったりするそれは、「人」であるなら持つていて当然のものだ。

幻想郷と出会う前であれば「魂」なんて概念自体半信半疑だったのだが、今となっては、少なくとも「人間」と言うカテゴリにある生物には（いくつかの例外を除き）当然のように在るもの。

と思つている。その波長自体、普通の人間には感じ取る事ができず、学園都市の最新鋭の機械を使つても計測できるか分からないオカルトチックなモノなのだが……上条には分かる。

美琴が電子線や磁力線の流れを目で追う才能スキルがあるように、上条は「魂の波長」を感じ取る事ができる。

そして、この少女から感じ取れる「魂の波長」は、御坂美琴に比べて弱く、危うい。それに……なんと言うか妙な感覚を覚えるのだった。

もちろん、魂に依存する波長な為、体の調子が崩れたり、精神が不安定になっていたりした場合、通常とは違う反応を見せるのだが、そもそも上条にはそんな繊細な部分まで感じ取る事はできない（師匠達なら出来るらしいが）。

そんな「未熟者」の上条でも分かる。

この少女は御坂美琴「ではない」極度に似てはいるが、それでもこの少女は自分や楨

本の知っている御坂美琴ではない。

「お前……誰だ？ 美琴、じゃ、ないよな？」

「……、美琴、ですか、とミサカは問い返します。ああ、お姉さまの事ですか」

お姉、さま……？

上条は謎の少女から出てきた単語を頭の中で繰り返し、コンマ数秒で一つの、一応の、結論へとたどり着いた。

「お前、御坂の血縁者なのか？ 一卵性の双子、とか」

そうでなければここまで似ているなど考えられない。

「肉体変化（メタモルフオーゼ）」の能力者なら外見上は何とかなるかもしれないが「魂の波長」まで真似る事などできない。しかしてこの少女が放つ魂の波長は御坂美琴本人と驚くほどまでに似ている。

今の上条では計測を行い違和感を感じ取ることが限界である為、それ以上のことは分からなかったが。

「そつ、か、「お姉さま」って事は妹か何か？」

「……まあ、そうなりますね。と、ミサカは一定の間を置いて答えました」

「……ずいぶんマイペースな子だな、と上条は考える。なんと言うかこういう性格の知り合いは「あっち」でも一人も出来なかった為……」

（つて、あれ？　なんだろう、誰か忘れてる様な……．．．．．なんかこういった物静かな知り合いが一人いたような……．．．．．）

ん？　あつれー？　と、首を捻つても思いにふける上条に御坂妹はため息を付く。その瞬間、ガシャン！　と言う、何かの精密機械が地面にぶつかつたらしき音が聞こえた。

何事かと下方向を見ると、そこにはなにやら大きな暗視ゴーグルらしきものが転がっている。どうやらダンボール箱と自分の体で挟むようにして持っていたらしい。

「軍用ゴーグル……．．．？」

怪訝な顔（上条自身も持っているのだが）をしてそれを見つめる上条に御坂妹は

「ミサカはお姉さまとは異なり電子線や磁力線の流れを目で追う才能が無いのでそれらを視覚化する器具デバイスが必要なのです、とミサカは懇切丁寧に説明しました」

そう説明を受けた上条は「ふーん。そっか」と素っ気無い返事を返す。別に、理解できなかつたからどうでも良い。と言う訳ではない。逆だ。「一瞬で理解出来てしまったから」素っ気無いのだ。

上条は、外より2、30年は科学技術が進んでいる学園都市に来てなお「能力開発」以外の単位で一度も赤点を取つた事がない。

常に百点満点かと言えばそうではなく、本当に分からない問題もいくつかあるのだ

が、上条はこれでも中間や期末に待ち構えているテストで、常に学年内トップテンに入るぐらいには好成绩を残す「優等生」なのだ。中学時代だが、学年一位を取った事もある。

そしてそんな理由から、能力開発ではあまり成績が良くないの上条でも普通のレベルゼロよりかは多く奨学金を貰っていたりした。

「気温と湿度が高かったので装備を外していましたが、必要性を感じるなら装着しましょう、とミサカは提案します」

御坂妹は一人でブツブツ言いながらゴーグルをおでこに引っ掛ける。

「ところで、数十メートル先にあるあなたが放置したであろうと思われるレジ袋と、その中にある数々の物品が、今まさに風紀委員と思われる女学生に落し物として回収されようとしている最中ですがよろしいのですか？」とミサカは確認を取ります」

それを早く言え!! と上条は叫ぶと踵を返して目にも止まらぬ速さで現場へと直行してゆく。

(この人……)

先ほどから一言も喋らない自分の相方の怪訝な様子にも気づく事無く。

見ていられない。そんななんとも情けない理由で上条は御坂妹に荷物を持っても

らっていた。

学生寮も近い事だし、門限とか大丈夫ならお礼になんかご馳走すつかなー。と上条は両手にレジ袋をぶら下げながら考える。

学生寮は御坂妹と出くわした場所から歩いて五分の所だったし、最悪、お茶くらいなら出す余裕はあるだろう。

上条とエネが住んでいる学生寮付近は同じ建物が並んでいるだけの殺風景な場所だが、実はビル風が同じ向きに統合された学園都市で一番の風力発電スポットだったりする。ビルとビルの感覚は二メートル強。まるで裏路地みたいな隙間に潜り込み、上条と御坂妹は本当に防犯の役に立っているのか疑問な入り口をくぐって学生寮のエレベーターへと向かう。

と、エレベーターに向かう上条の前方から清掃ロボットがやってきた。全長八十センチ、直径四十センチ程度のドラム缶にタイヤと回転モップがついたような代物だ。

ここまでなら学園都市では不思議でもなんでもない光景だが、ここからが少し違った。清掃ロボットの平たい上部に、十三、四歳ぐらいのメイドさんがちよこんと正座している。

その少女は上条を発見するなり待っていたように近寄ってきて。

「うーい、上条当麻」

『おお、土御門の妹さん！』

土御門舞夏。上条の隣人・土御門元春の義理の妹で、メイドさん学校に通っているからメイド服が制服らしい。何か嫌な事があると気分転換に女子寮から逃げてくる家出少女で、上条の弟子でもある。

一応言っておくが、別に上条がこの可愛らしいメイドさんに化け物じみた体術を教えているのかと言えばそんな訳があるはずも無い。

「今日はエアコン壊れたから泊まりに来たー。今晚は兄貴ともども騒がしくなると思うけど堪忍なー」

「おう、了解。．．．．．つーかおまえも大変だよな。家政婦学校って夏休みねーんだもん」

その点は、上条にも良く分かっているものだ。「修行時代」の自分にも、よつぼどの事が無い限り休みなど無く、毎日毎日様々な．．．．．とここまで思い出した上条の尻に何も悲しくないのに涙が浮かんできた。

「む。真のメイドさんには休息はいらなくてのがウチの校訓だからなー。土曜も日曜もないのでメイドさん見習いとしてはゲリラ的に週休二日を実行せねば倒れてしまうのだ」

「サボり癖のついたメイドさんなんてこの氷河期に需要あんのか？ 我が弟子よ」

「むしろ完成したメイドさんよりある程度未完成なメイドさんの方が需要が高いわけだがー、っと。時に上条当麻しよう。はい。ここ最近の修行成果」

どこに隠していたのか、土御門舞夏は縦十二センチ、横十センチ程度のタツパーを上条へと献上する。

中身はまだホンノリと温かく、その微熱がタツパーを受け取った上条の手の平へと伝わってくる。中身はどうやら肉じゃがのようだった。

そう、土御門舞夏は上条当麻の「料理」の弟子だった。

とはいえ、上条に料理を教える術などあるはずも無く、舞夏は上条が作った料理を真似して作っているだけである。

『おおー、どうやらまた腕を上げたようですね。このまま努力を続ければ、舞夏さんならきつと一流の従者になれるはずです!』

ちなみに、分かりやすく言うと、同じスーパード同じ材料を買って同じ料理を作っている筈なのに、舞夏はもちろん長年一緒にいるエネですらも話にならないくらい高次元な料理が出てくるのである。

上条当麻はめつたに「外食」と言うものをしないのだが、その理由がこれだ。安上がりかつとても美味しい料理が出せるのだからそもそも「外食」なんてものをする必要がないのだ。

「うむ、また腕を上げたようだな我が弟子よ。これからも精進するように……ついかいつも悪いな。ありがたく頂いとく事にするよ」

「おう、それじゃあ私はこの辺で……あとでもっと詳しく感想聞かせてな」

舞夏は満足そうな顔で上条に告げる。と、清掃ロボットの進路が上条達から逸れた。正座していた舞夏はバイバイするように大きく手を振り

「……上条当麻が言うんだつたらそれこそ毎日夕食を作りに来てあげても良い訳だが……も、もちろんそれは私の修行を効率的に進める為であつて……」
上条でも聞き取れないくらいの小声でなんかブツブツ言いながらどこかに行つてしまった。どことなく頬が赤く染まつていたような気がしない事もない。

「メイド奴隷趣味があるのですか、とミサカは少々真剣に尋ねてみます」

「真剣になるな。あいつは家政婦学校に通つていて、俺は高校生で、ただの師弟関係だ」

上条はきつぱりという。きつぱりと言うのだが……あいつの兄貴を含めずに考えても一般的にはどう映るんだろう？ 未成年略取とか呼ばれない事を切に願う上条だった。

横綱が一人乗つたらワイヤーが千切れます、という感じのオンボロエレベーターに乗つて上条と御坂妹は七階に向かう。

いつもなら入り口に入らず、外からちよつと跳ぶだけで自分の部屋の前へと到着するのだが、今日は連れがいるためそうもいかない。

キンコーン、というチャチャな電子音と共にエレベーターが七階に到着する。上条の学生寮はまんま長方形なので、エレベーターを出ると直線通路しかない。と、上条宅のドアの前にインデックスが三毛猫に手を伸ばしてじやれ付いていた。二本の手に挟まれた三毛猫はワシヤワシヤ、と撫で回されて床の上を転がっている。

「……っつか、何やってんだアイツ？おい！どうしたんだ、部屋のカギでもなくして締め出されたのか？」

上条が声を掛けると、少女は上条の方を見た。

「あ、とうまだ。ううん、三毛猫スフィンクスにノミが付いたからとつてるん——つて何！とうまが知らない女の人連れてる！」

絶叫したのはインデックスという十四、五歳の少女だ。100%偽名な女の子は、見た目は紅茶のカップみたいな白地に金刺繍の豪華な修道服に身を包んでいる。どうも、魔術世界において「禁書目録」などと呼ばれているらしいのが「人あらざるもの」の知り合いが多い上条にとっては「普通の女の子」にしか思えないし見えない。

「ミャー」

おかえりー、といった具合に鳴いた三毛猫は「スフィンクス」と言う。

別に猫の品種であるあの「スフィンクス」ではなく、正真正銘本物の三毛猫だ。

今日の朝。そう、今日の朝だ。気がついた時にはインデックスが部屋の中で三毛猫とじゃれあっていた。

捨てたはずの自分でも気づかなかったところを見ると、どうやら連れ込む際にエネが協力したらしい。

最初こそ、動物の、誰かの命を預かると言うことがどういう事かインデックスを正座させて三十分ほど説いた上条だが、それでもインデックスが決意を揺らがず、里親を探すとも言わず、はつきりと自分の口で「飼う」と告げたとき、上条はあっさりとOKを出した。

二学期になって自分が学校へと向かっている間、彼女は感覚的には一人になってしまいう訳だし、遊び相手が必要だったと言うのが一つ。

そして、何よりの理由。迷える子猫を里親を探しもせず保健所送りにしたなんて事が師匠に知れば私怨を含めて二百パーセントの確率で見ると影も無いほど再起不能になるまでぶん殴られてしまうからである。

良くも悪くも、師匠は動物が大好きだった。それはもう自らを構成するアイデンティティが崩壊してしまうほどに。

「それより聞き捨てならぬー事言つてなかつたか？ 三毛猫にノミがついてるってどう

いう事？」

うん、とインデックスはこっくり頷いて

「拾ってきた三毛猫がノミだらけ。きつととうまの布団の中とか大変なことになってると思う」

「思うじゃねーよ！ テメエ俺が学校行く前にあれほど拾ってきた三毛猫ごと風呂入つとけ、つただらろーが!! そもそも猫とか布団の中に入れてんじゃねえ!!」

うわああああああああ!! と上条は絶叫する。

『ってゆーか部屋の中はほったらかしですか、増殖した蚤の魔窟になってるでしょうね。なるほどそれで外にいたと言っわけですか。……ってちよつと待ってくださいインデックス。アンタ何をおもむろに袖から「セージ」を取り出してんの』

学園都市の能力開発では薬物使用など基本である。

薬に関する知識など歴史年表みたいに頭に入っているし、上条の頭の中には学園都市の中では絶対習わない「パラル・テクノロジ異界の知識」な薬草学の知識がエネと共に師匠達に叩き込まれている。

セージ。——シソ科の多年草で地中海地方原産。葉はサルファ葉と呼んで薬草として用い、また香辛料や観賞用として栽培されることもある。とこんな具合である。

「で、薬草なんか取り出して何すんの？ HP回復の為にモグモグ食べるの？」

えいちびー？ インデックスは首を傾げ

「とうまの不思議言語は良く分からないけど、セージには浄化作用があるんだよ。これを浸かって魔女学っぽくノミを追い払う所存です」

「いや待て。セージにそういう効果があるのは知っているがぁえて聞こう。つか嫌な予感しかしないから聞こう。どうやってノミを追い払うつもりなんだ？」

「セージに火をつけてスフィックスを煙で燻してノミを追い払う」

「流石に部屋の中で物を燃やすほど非常識じゃないもん」

「」

上条は超真剣かつ超純粋に真つ直ぐ答えるインデックスの顔を見る。インデックスの言動は始めて上条と出会ってからしばらくの日々あいだ色々なものに夢中だったエネを想起させてきて、ホンの少しだけ懐かしいようなホンワカとした感覚に包まれる。

と、そんなエネは自分の耳元で手をパタパタと振ると、

『黙っている場合ですか。このままでは今夜の夕食の「メニュー」が「三毛猫の香草蒸し」になってしまいます。私は部屋の中の蚤を駆除してきますから何とかしてインデックスをとめてください』

携帯電話から飛び出し、ドアをすり抜けて部屋の中に入っていったエネの言葉に、深

層に潜りかけた上条の意識が再び浮上してくる。

「・・・あ。そうだよそうそう、火災で一番恐いの何だか知ってるかインデックス？ 三毛猫を煙に巻いてノミなんか落としてたら一緒に猫まで死んじまうわ！」

というかその前に学生寮に常備されている火災警報機がなつてスプリンクラーでずぶ濡れになるのが落ちだと思う。

「見ていられません、とミサカはため息を付きます」

「あゝ、・・・悪い御坂妹。こんなしよーもない事につき合わせて。あ、ダンボール床において良いし、もし良かったら中にあるやつ一本やるから」

「前者には、了解しました。後者には、必要ありません。とミサカはそれぞれ返答します。ようは猫に危害を加えずに害虫を駆除する方法があれば良いのですね、とミサカはダンボール箱を通路に置いてから確認を取ります」

「・・・いや、インデックスも悪気があつてこんな真似してるわけじゃねーと思うんだ」

「むしろ悪意がない方が救いようがありません、とミサカは呆れ顔で返答します」

全くの無表情のまま御坂妹は答え、

「重ねて問いますが、ようは猫に危害を加えずに害虫を駆除する方法があれば良いのですね、とミサカは最終確認を取ります」

「そりやそうだけど、どうやって?」

「こーやって、とミサカは即答します」

御坂妹は丸まっている三毛猫に向けて掌をかざす。

瞬間、御坂妹の掌からバチンと静電気が散るような音が炸裂した。パラパラと埃を落とすように三毛猫の毛皮からノミの死骸が落ちる。全身の毛を逆立てたスフィンクスはバタバタと暴れ――七階の空からダイブする直前に上条に首根っこを掴まれた。

「特定周波数により害虫のみを殺害しました、とミサカは報告します。このタイプの虫除け機は大手量販店などで普通に市販されているので安全面も支障ないでしょう」

ミサカは一度、ドアの方を眺め。

「室内の方は、煙が出るタイプの殺虫剤を使えば簡単に駆除できるかと思えます、とミサカは助言を与えておきます」

それでは、用が済みましたら――と御坂妹は感謝の言葉も聞かずに背を向けて立ち去ってしまう。少女の後姿を視線で追っていたインデックスはやがてポツリと呟いた。

「とうま、とうま。あれこそパーフェクトクールビューティーなんだと思う」

もののついでなので、上条もポツリと呟いてみる。

「無茶を承知で注文するけど、お願いだから少しでも見習ってください」

『よし、ご主人！ 部屋の中の駆除は終わりましたよ……と、あの御坂美琴の血縁者はどこへ行きました？』

レディオノイズ Level 2 (Product_Model)

次の日も補修だった。

夕暮れの教室の真ん中に一人、ポツンと生徒が座っている様はなかなか哀愁を誘う。始めの方こそ『うわー過疎化の進んだ村の小学校かよ』とか皮肉っていた上条だが、直後に『そういうえば修行時代もこれとほぼ同じ様な感じだった』ことに気づいてうんざりとした気持ちになった。

だがその補修も今日で終わる。八月二十一日にもなつてようやく夏休みスタートかー！ という絶望的な気分にならなくもない上条だが、それでも補修から解放されるのはやっぱり嬉しい。

上条は真正面の教卓を見る。

そこには見た目十二歳、身長百三十五センチの女教師、月詠小萌が教卓から顔だけ出す形で立っている。教卓の上にテキストを置いて喋っているのだが、あれなら自分の手で持った方がはるかに読みやすいのでは？と思う上条だった。

「一九九二年にアメリカで再制定されたEPSカード実験の必須条件ですが、カード

の素材がビニール樹脂からABS樹脂に変更しています。これはカードの表面に付く指の油、指紋によって裏返したカードの種類が分かってしまうというトリックに対するモノで——つて上条ちゃん、ちゃんと聞いてるんですか？」

「……いや先生。ちゃんと聞いてるけどさー、これって『力』と何か関係あるんですか？」

上条は無能力者（レベル0）である。

精巧無比な機械で測った結果、あなたは頭の血管が千切れるまで頑張ったってスプーン一つ曲げられません。と言われているのに『力』が弱いから補修です、と言うのは何事かと上条は思う。

いや、正直言ってしまうと『限界を超える』だの『才能の壁をぶち破る』だのいった事を上条は『すでに何度も経験している（と言うかささせられている）』ので

【もしかして右手の力を受けないとんでもない能力に目覚めるかもしれない……！！】

と淡い期待はしているのだが、少なくともこの『学園都市の科学技術』では『上条当麻』を『科学的』に『能力者にする』ことは『不可能』だと思う。そもそもピンクの悪魔のような能力を持っているのだし——

——馬鹿にしているわけでも蔑んでるわけでもなく、これが上条当麻の冷静な評価

だった。

と、思考に駆られている上条に小萌先生は口をへの字に曲げて

「でもでも。力が無いからといって諦めてしまつては伸びるものも伸びないのです。ですからまずは『力』とはどういうものか、初歩の初歩から知識を学ぶ事で、自分なりの『力』の御し方が発見できるのではないかなー、と小萌先生なりにですな」

と、まあもつともらしく、上条が納得出来るように話す小萌先生だが

「先生」

「はいー?」

「いや、それで俺がキチンと学んでなくていつもダラダラと授業を受けてるだけなダメ学生だったらまだ分かりますけどね——夏休み前の期末も! その前の中間も!! 筆記だったら上条さんは学年内トップクラスの成績だったでしょうがあああああああああああああああ!!」

そう、前にも言ったが上条は学校で定期的に行われるテストで常に学年内トップ一〇に入るほどの優等生だ。『筆記だけ』ではあるが、それは能力開発も例外ではない。

『努力しない人に成功は訪れない』と言うのは分かるが、じゃあ『努力しても成功しない』場合はどうすれば良いのか?

師匠ならこう言う『努力の『仕方』が悪い』

姐さんならこう言う『得手不得手が人にはある。大切なのは実際に習得できるか出来ないかじゃなく『やるかやらないか』だ』

教授ならこう言う『調整と分析と発想が足りない。』

童師ならこう言う『まあ、臨機応変に素敵に楽しくやれば良い。諦めるも諦めないも『お前の自由だ』』

そして……

『……まあ、すぐにそれが発揮される事は無いかもしれませんが。努力し続ける

——つまり『諦めないこと』『信じ続けること』に意味があるのだと思いますよ?』

エネはニツコリと笑って、一言告げる。たったそれだけで、ぐっ……!! と上条は押し黙ってしまう。

それが今の上条当麻と言う人間を作っている重要なアイデンティティなのだから無理もないだろう。

その謳い文句は修行時代に何度も何度も言われたそれで、エネのその小さな後押しという言葉があつたからこそ、あんなに弱かった自分が、あんなに辛かった修行の数々に挑むことが出来たのだ。

あんなに恐かった数々の敵に立ち向かうことが出来たのだ。

信じ続け、諦めずに、強さを求めることが出来たのだ。

「……………」

「……、あー。そうですね、授業ね。びっくりしましたー……って、あつ！
そうそう授業です授業！ 補修です補修!! ほら上条ちゃん、テキスト百八十二ペー
ジの犯罪捜査における読心能力者サイコメトラーの思考防壁の所から読んで下さいー」
そんなこんなで今日も補修の時間が過ぎていく。

ちなみに、今日の補修のあいだ、小萌先生は何故かとってもご機嫌で、エネは何故か
とっても不機嫌だった。

そうして夏休み最後の補修が終わった。

時刻は午後六時四十分。完全下校時刻に設定された終電に乗り遅れた上条は、夕暮れ
の商店街をのんびり歩いていく。

『夜遊び防止』との事で、学園都市の終電バスは基本的に午後六時三十分なのだ。交通機
関を眠らせることで深夜の外出を控ええ付ける方針らしい。

あー、やっと終わりか、とにかく長かったなー、ちくしょー海でも行つて夏の開放感
をー、とか考えながら上条は夕暮れの帰り道を歩いてゆく。風が吹いているようには見

えないが、風力発電のプロペラがクルクル回っていた。

と、上条は思い出す。発電機のモーターはマイクロ波をあびせると回転すると言う話を――

『ご主人!』

ん? とエネの声に反応して人込みを見ると、その中に見慣れた後姿がある。常盤台中学の夏服を着た茶色い髪の子――御坂美琴だ。

ああ、もしかして彼女が無意識に放っている微弱な電磁波に反応して風力発電のプロペラが回転しているのかもしれないな。と上条は思う。

「……で、どうしろってんだよ、避けろってか? いや上条さんとしても反対す

る理由はないんですけどそこまで徹底して避ける必要……」

『ちがいます』

と、エネは上条の言葉を途中で強引に遮った。

その声が、ひどく真剣なものに変わっている事に気づいて、上条は息を飲む。本人に自覚はないだろうが、かくいう上条の表情や目つきも、エネの声を聞いた途端、一瞬で引き締まったものに変わっていた。

『今日はむしろ会いたかったくらいです。ご主人、昨日の……あいつの「妹」について尋ねてくれませんか? さりげなく、少しまだ良いです。普通に「見かけたから一

緒に帰ろうと思つて話しかけた……ところで昨日お前の妹にあつただけど……」
くらい気楽な感じで宜しく』

「なーんちやつて！ あーちよつと詩人になつちやつたわ、あはははは！」

ずびし、と美琴は理由なく上条にチョップするが、上条の身体能力は中坊のおふぎけを許すほどやわに作られていない。体を反転させて難なく避ける。

「けどアンタも夢がないわよねー。人の心を持った高度なSFコンピュータと人間の友情ドラマ、なーんて結構ロマンがあると思つたりしないのかしら。例えばメイド型戦鬪ロボとか……あ？ 何いきなり固まつてんのよ」

いや、流石にここで「限りなくそれに近い人と知り合いですか何か？」とは言えない。沈黙する上条に若干の違和感を覚えつつも、美琴は『じゃ、私こつちだから』と言つてさつさと立ち去ってしまった。

と、そんな二人の会話を、ただ静かに聴き続けている人物がいた。

目を細め、片方の手で口元を隠すようにして、あからさまに『何か考えています』と言わんばかりの格好をしたエネである。

(.....)

妹の話になった時の御坂の様子

夕空に浮かぶ飛行船

飛行船に取り付けられた大画面エキシビジョンに浮かんだ「筋ジストロフィー」とか言うものの研究施設が二週間で三件ほど相次いで撤退を表明したと言う事実

それを忌々しげな表情で見つめた御坂

学園都市が打ち上げた人工衛星

今後二十五年は誰にも追いつく事が出来ないとされているスーパーコンピューター『樹形図の設計者ツリーダイヤグラム』

『樹形図の設計者』は「天気予言」だけではなく、研究の予測演算にも使用されている
それが嫌いだと告げた御坂

そして

「なんて言われてるけど、実際そんなばかげた超高度並列演算機ア
ブソリユートシユミレーターなんて存在するのかしらね」

美琴の雰囲気がいとも通りに戻る前に放った一言。

それらを頭の中で半濁し、演算し、考え、それをもう一度半濁し……その作業を繰り返し続け、エネ貴音の脳内はたった一つの真実に限りなく近い答えを得る為の力

ギのありかを高速で見つけ出した。

「にしてもアイツ様子おかしかったよな。テンションが不安定だった事もあるけどな
つーかこう……あー……」

『不穏な空気を他人に見せないように、触れさせないように、丸ごと自分で抱え込んで
みたいな、ですか?』

そうそうそれそれ! と、様子を上手く表現する事が出来ずに唸っていた上条は叫ん
だ。まるで喉の奥で突っかかっていた魚の小骨が取れたような気分になる。

「で、何か気づいた事があったんだらう名探偵エネ君? というか一体君は何がした
かったんだい?」

と、英国一有名な探偵の助手風に尋ねる上条。

そんな上条のネタ振りを完全にスルーし、エネはいつもの調子で上条に尋ね返す。

『ご主人「筋ジストロフィー」ってどんな病気でしたっけ?』

上条が『筋ジストロフィー』の説明をすく、エネは「確かめたい事がある」とか
言つてさつさとネットの世界へ行つてしまった。もしかしたらその先で実体化(上条に
しか見えない)しているのかもしれないが、それは見ないとわからない。

最初はそれにならうつもりだったのだが『いや、良い。ご主人がいるとややこしい事
になりかねませんし、そもそも私の思い過ぎしかもしれませんし。絶対に戻りますか

ら』

——と突っぱねられた上条は、一人寂しく寮への道を歩いていると言う訳である。

——後になって思ったのだが、このとき、変な意地を張ってエネに付いて行かなくて本当に良かったと思う。

そうでなければ上条は、『幸運にも』巻き込まれずに『すんでしまった』かもしれないのだから。

エネと分かれた場所から少し道を進んだ所で、道路脇にしゃがみこんだ美琴を発見した。そこは風力発電所のプロペラの真下で、支柱の根元にはダンボール箱が置いてある。

ヤバイ、なんか嫌な予感がすると上条の脳内が警報を発した瞬間、ダンボール箱の中に黒猫が突っ込んであるのが見えた。

美琴は黒猫に餌を与えようとしているのか、菓子パンを持った手を黒猫にゆつくりと近づけているが、怯えきった黒猫はなんかゲンコツでも振り上げられているように耳を伏せて丸くなってしまっている。

先ほど分かれたばかりの、それも上条とは違う方向へと向かって行った美琴と再び遭

遇？ と、この『魂の波長を見る』能力が無かったら困惑していたかもしれない。

しやがみ込んでいる自分の足元に暗視ゴーグルを置いているその人物は、もちろん美琴ではなく

「うっす。昨日はジュースとノミの件、サンキューな『御坂妹』」

当然、『妹』の方である。

「……………、特に謝礼が目的ではありません、とミサカは返答します」

無表情の中にムツとしたものをにじませつつ、御坂妹は地面に置いていたゴーグルを額に引っ掛けた。菓子パンを持っていた手も引っ込めてしまう。

「ゴーグルを外していたのは、猫はレンズを嫌う特性を持っているという事前情報に従っただけです、とミサカは説明します。……………とここでなぜあなたはお姉さまと遺伝子単位で同じなミサカを見てもすぐにミサカだと分かるのですか、とミサカは問いかけます」

言いながら、何故か御坂妹は無表情のまま菓子パンを後ろ手に隠してしまう。今まで怯えていたくせに黒猫がみーみーと不満そうな声を上げた。

御坂妹の問いに対し、上条は、うくん、と困ったように唸る。

『俺、魂（の波長）が見えますから』とドストレートに言っても私的にはなんら問題ないし、学園都市には本当にそういった能力者がいそうなのだが、師匠達や『あちら』側の

都合などを考えると合わない方が賢明だと思う。

「いや、普通に見りゃ分かんじやねーの？　ゴーグルをさ」

もつともらしい答えを返す上条に、御坂妹は一瞬だけ間を置いて「……そうですか」と返答した。　なんというか色々素っ気無い御坂妹に上条はため息を付いて。

「でも、猫がレンズ嫌いって知ってんならわざわざゴーグル掛けなおしてどーすんだよ？　何、ひよつとして個人的に見られたくなかった訳？」

そう、無表情で動作に落ち着きが無いから分かりにくいのが、上条にはなぜか、御坂妹は人に見られて慌ててゴーグルを掛けなおしたように見えた。

「……別に、そういう訳ではありません、とミサカは答えます」

答える声は即答だったが、何故か表現は曖昧だった。　上条は『？』と首を傾げる。

その昔、動物好きな上条の師匠がにへら、という効果音が付きそうならしない笑顔で子猫を文字通り猫かわいがりしている姿を見てしまい、その直後に「勝手にプライベートを覗いた」とかいうわけの分からない理由でボッコボコにされている（恥かしさで顔を真っ赤にして固まるというかなりレアで可愛い姿を拝めたのだが）

上条としては、もしかして言動に表さないだけで実は御坂妹は今物凄くお怒りなのでは？　と内心ビクビクしてしまっていたりしたのだが、どうやらそれとは違うらしい。

「なら猫を撫でるなり菓子パン与えるなりすりや良いじゃん。猫、嫌いじゃない……」
と、ここまで言つて上条はようやく自分が失言しているという事に気がついた。

「……わりい。姉貴と同じでお前も発電能力者エレクトロマスターだったな」
御坂姉妹は双方共に『電撃使い』だ。教能力者以上のほとんどの発電能力者に言える事だが、彼らは自分の意思とは関係無しに常に体の周囲に微弱な電磁波を形成している。

つまり『発電能力者』はごく自然に動物達に嫌……避けられてしまいやすい
体質になってしまうのである。

「はい。ミサカには致命的な欠陥があります。とミサカはあなたが脳内で思い描いてい
るであろう事実を認めます」

「欠陥って、やな言い方すんなよ」

「いえ、お姉さまを含めた他の発電能力者の方はともかく、ミサカの場合はこの表現が適
切です、とミサカは説明します」

「……」

上条は考える様に僅かばかりにその瞳を細めた。昨日、帰り道で始めて会つたその時
から、御坂妹から放たれる何だか妙な空気を感じ取っていたのだが、今の御坂妹の発言
でそれがさらに強まったような気がした。もつとこう、なんだかキナ臭い感じへと。

そうだ！　こんなときは情報を整理してみよう、と上条は脳内の中に御坂妹と出会ってから得た数々の情報を広げてゆく。

美琴の妹

ミサカ

青と白のシマパン

美琴と同じ発電能力（姉は超能力者妹は異能力者）

表情や感情を表に出さない

電子線を見ることが出来る軍用ゴーグル

パーフェクトクルビュートイー

上条に見られて慌てて掛け直した軍用ゴーグル

黒猫

美琴と遺伝子単位で同じ

（おそらく）猫が好き

電撃使いが放つ微弱な電磁波

欠陥発言・・・だめだ、あと一步、何か足りない。これ以上頭を使っても無駄だと判断した上条は頭の回転を止めてはあ、とため息を付く。まるで推理ゲームで先に進む為の重要な手がかりを見逃している様な気分だった。

「と、いうわけです。餌はあなたが与えなさい。というかあなたがこの黒猫を飼いなさい、とミサカは促します。ミサカはこの欠陥だけでなく、居場所や生活環境も一般とは異なりますから、とミサカは理由を述べます」

「お、俺が？　ちよ、ちよつと待て！　お前が拾う……こ、とは出来ないかもしれないけどでも上条さん家も結構狭いんでせめて里親を探すとかじゃだめでせうか!?! つーか個人的な面でも結構訳有りな身でございましてすね」

狭い、というのは昨日インデックスが拾ってきた三毛猫が入り、上条の部屋は元からいた二人に加え銀髪シスターと三毛猫が住んでいる状況になっているため、エネが見える上条としては一人暮らし用の部屋に三人十一匹という視覚的に物凄く狭い空間に住む事を強要されている様な気分なのだ。

「訳あり、とは昨日清掃ロボットに乗っていたメイド奴隷の事ですか？　それとも銀髪の修道女の事ですか？　とミサカは交渉材料を提示してみます」

「ぶふおあ！　て、テメエいきなり何をっ……つーか昨日説明しただろうが！　あのメイドは時々料理を教わりにくる師弟関係であのシスターはただの居候だ!!　それに、それにも色々複雑な事情と言うものがあつてだな……」

「TVなどで放送されるさまじまなニュースは実は断片的な事実でしかないという認識が来ていますか？　とミサカは質問します。例えばとある場所で殺人事件が起きて

犯人が捕まって、しかし犯人に同情を禁じえないような悲劇的な事情があったとして『殺人事件が起きた事とその詳細』はニュースで伝えても『犯人の思いと苦痛』などを事細かに放送したりする事はないでしょう？ とミサカは説明しました」

「ふっぎけんな！ それって単に『事情や詳細なんて知るか』って言うてるようなもんじゃねーか!!」

やましい事など何一つ無いはずなのだが、一般的で客観的な視点で見れば、可愛らしいメイドさんを弟子に取りしよっちゅう家に上げ、白いシスターにいたっては同棲までしている（本来ならもう一人、電脳少女がそこに入るのだがディスプレイの中が大半なので省略する）上条の所業はどう映るだろう？

周りから白い目で見られる自分を想像して思わず身震いする上条。そんな上条を御坂妹は無表情なまま、ホンの僅かだがしかし確実に悪意を含めた眼差しで。ダンボールの中の黒猫は、何かに期待するようなあどけない眼差しで、それぞれジツ、と見つめ続ける。

今思えば、なんでこの時もつとよく考えなかったんだろうと思う。ヒントは全部出たはずなのに、アイツはとつくに気づいて行動を起こしていたのに

俺がもつとシツカリしていれば、御坂妹は・・・

ノイズキャンセル Level 3 (Over spec)

空の色はオレンジから紫色に変わっていた。

上条は腕の中の黒猫に目を落としながら、てくてくと大通りを歩いていく。

「なんつーかさ、何かがパターン化してきているような気がするんだよな。いやインデックスが拾ってきた三毛猫を受け入れちゃった時からなーんか嫌な予感はしてたんだけどさ、一匹拾えば二匹拾う事になって二匹拾えば三匹、四匹と増えていくような気がしてたんだよなチクシヨウ」

別に動物は嫌いではないし、むしろ好きな方だと思っている上条だが、さすがに瀬戸内海に住む某魚の名前をした動物先生みたいに動物王国を建設するつもりなどさらさら無い。今の部屋に住ませられるのも一匹が限界だ。

まあそもそも論を言えば上条の寮はペットを飼う事自体禁止されているのだが、そんな事を言ってしまうえばインデックスを同じ部屋に住まわせている時点で立派に違反行為なのでこの際気にしないことにする。

「……………」

……………あと後ろから付いてくる御坂妹が時々羨ましげに自分を見つめてくるのも

気にしない事にする。

磁場のおかげで猫に嫌われてしまいやすい体質の御坂妹は、本当はメチャクチャ撫で回したいのに黒猫の気持ちを優先して、その感情を押しさえ付けているらしい。

立派な事だと素直に思う。上条の師匠ならばそのいたいけな行為に感動して猫か御坂妹に何らかの細工をして普通に触れるようにしてしまうかもしれない。

「つてそうだ、名前！ こいつはお前の猫なんだから、責任もつてお前が決めるよ！」
「……………、ミサカの？」

「そう、お前の」

上条が腕の中の黒猫を見下ろすと、黒猫はビクビクした視線を上条に返す。そんな黒猫を落ち着かせるために優しく撫でてやる上条（と言うより腕の中にいる黒猫）を御坂妹は無表情のままジツ、と見つめて、その後ちよびつとだけ夕空を見上げ

「いぬ」

「は？」

「この黒猫には、いぬと命名します。……………猫なのにいぬ、ふふ」

何か思い出し笑いみたいになっっている御坂妹の顔がちよつと恐い。

「……………いや、だから。お願いだから生き物関連には真面目に、もつと威厳のある名前をさ」

「では徳川家康と、とミサカは再考します」

「偉すぎ！ つてか考えてるフリして何にも考えてないキャラかお前！」

「ではシュレディンガーと——」

「ふざけんな！ ものの例えとはいえ毒ガスの噴出す箱の中に猫を突っ込むような話を嬉々として話す博士の名前なんか付けてんじゃねえ！ その名前は猫にとつちや禁句だよ禁句!!」

「はあ、ハア……っ！ あ、本屋だ本屋」

「なにか用があるのですか、とミサカは尋ねます」

「まーな。別に新品ばっか売つてるところじゃなくてもあらかじめ欲しい本を注文しておけば入荷したとき連絡してくれんだぜ？ しかも当然お値段もリーズナブル」

いや別に新品でも構わないのだが、エネが夢中になつている本と言うのが二十年くらい昔の、なんとというか絵柄が特徴的なバトル漫画で、新品ではなかなか手に入りにくい品なのだった。

ゆえに、こういう古本屋の方が掘り出し物として見つかりやすかつたりする。上条が今日こに来たのも、エネが読みたがつていた漫画が入荷したという連絡を受けたからだった。

「あ、そーいや猫を抱えたまま本屋に入つても大丈夫かな？ いや大丈夫じゃないよ

なうん大丈夫じゃない」

「……果てしなく説明臭く棒読みな台詞なのですがこちらに預けるのはご遠慮ください、とミサカは先手を打ちます」

「磁場の出る体質のおかげで猫に嫌われてるからってか？ ならばその壁を乗り越えてこそ真の友情が芽生えるというもの。食らえ必殺猫爆弾！」

上条はすぐ隣にいる御坂妹に向かって黒猫をゆつくりと放り投げた。当然、猫の反射神経や運動能力を考慮すれば放っておいても華麗に着地するのは目に見えている。……見えているが、御坂妹は反射的に手を伸ばしてしまった。動物愛好家の悲しい性である。

御坂妹が何か文句を言おうとした時には、上条はもう古本屋の中に入っていた。その直後。御坂妹に訪れる決定的な異変に気づく事は、当然のように出来なかった。

冷房の利いた店内は大勢の少年少女であふれかえっている。

ここは大型チェーンの古本屋で、値段の安さもさることながら立ち読みOKを前面に押し出している。店の中にも『漫画読みてーけど買うまでじゃねーんだよなー』という人間が大半だった。

「.....」

そんな中、上条は呆然と立ち尽くしていた。

普通に予約していた本を買ってきつきと御坂妹の所に戻ろうとしていたのだが、なんか上条がレジに赴いて事情を説明しても「そんな予約は受けていない」と言われてしまったのは呆然とするしかない。

これがパソコンや携帯からのネット予約だったら電子機器の誤作動や不調という事も考えられるのである程度の許容をする事ができるが、上条はこの店舗に来て自分の手で書類を書いて本を注文したのだ。よつぼどの事がない限り手違いなんて起こるはずがないし、そもそも昨日の夜に電話をよこされたばかりなのにこの対応はどういうことだろう。

「ちよ、ちよつと待つてくださいいよ定員さん。上条当麻です上条当麻！ 上下左右の上に乗条の条、当選の当に植物の麻つて書いて上条当麻!! 予約したんですよ二週間くらい前に!!」

上条の目の前の女性定員はまだ入りたてのアルバイトなのか、身分証明の学生証を出して必死に訴える上条にわたわたと困ったようにいくつもの予約用紙に目を通し、レジカウンターに常備されているパソコンを必死に操作している。

彼女は最終的に「申し訳ありません、しばらく店内をご覧になってお待ちください」

と、涙目ながらに正規定員にSOSを求めに行った。

不幸だ、と小さく呟く。

これはもう「もう一度予約をし直すはめになる」という未来も視野に入れなくてはならないかもしれない。いや、それもそうだがエネになんて説明すれば良いのだろう。

ここだけの話、彼女は自分の表したい感情を言葉ではなく表情やオーラ示すような人間だ。しかも意識してそれをやっているのではなく、完全に無意識だ。

怒っている時は低度の物ならばその不満を隠す事無く顔面に出し、ぷくぷくと頬を膨らませるし、真剣に怒っている時は無表情のまま背後に圧倒的な力を持つ鬼神のようなオーラを漂わせる。

喜んでいる時は「えへへ」と頬を緩ませて笑い、楽しんでいる時は遊園地にはじめて来た子供のように目を万面の星でキラキラと輝かせる。

とまあこのように、エネは一言で言えばすごく「分かりやすい」性格をしている。素直、純粹、天真爛漫……。彼女から発せられる穢れを知らない子供のような雰囲気は、これらの要素が関係しているのだろう。

だからこそ容易に想像できる。昨日電話があつたその時からもう楽しみで仕方がないという表情をしていたエネが、哀しみのどん底に叩き落され、目を伏せてZUUNとしたオーラを漂わせながらも上条に心配を掛けまいと笑おうとするその健気な姿が何

の苦も無く想像できる。

これがインデックスだったら頭に齧り付かれて終わりだし、ぶつちやけ上条もそういう直接的な制裁があつた方が精神的にも肉体的にも（鍛えているので）楽なのだが、エネは「大丈夫ですよ？」と健気に笑いかけてくる為、それはもう罪悪感が半端ではないのである。自分が穢れきつたダメ人間にしか思えなくなつてきて、何かありとあらゆるものに「生きててすみません・・・」と謝罪したくなつて――

——ご主人！聞こえますかご主人！！

「は、はいいいいいいいいいいい！ い、生きててすみませんでしたああああ!!」

は？ と突如として上条の脳内に話しかけてきた天真爛漫な電腦少女の声が一瞬停止した。

同じく、突如として叫んだ上条の声が古本屋の店内に響き渡り、他の客がいつせいに上条の方を向くが、上条はそんな事を少しも気に止めずにエネへの弁解を始める。

——ちよ、ちよと待つてください。ご主人何を言つて、

「だ、大丈夫だつて！ もし予約が失敗してももう二度と手に入らない訳じゃないし、最悪今度許可証もらつて外の本屋で買つても良い！ 何だつたら何考えてるか良く分からんうちの義叔父に手に入れさせるから！ だからその笑顔という名の破壊光線で上条さんを見つめ続けるのはどうかご勘弁を——!!」

——だから何を訳の分からない事を言ってるんですか、落ち着けど阿呆！

言うが早いのか、上条の頭にハリセンで叩かれたような痛みが襲い掛かり、上条は頭を抱えて床に蟹股で座り込む。エネが何らかの術式もしくは能力を使つて脳内にダメージを与えたいらしい。まるで西遊記の孫悟空の様だと上条は思った。

——任務——『ミツシヨン』です

その言葉を認識した途端、上条の中で何かが動いた。

まるで通常通り動いている警備ロボを非常用の戦闘モードに切り替える時のように、リミッターを外すように、上条当麻という人物のマニユアルがそのギアを別のものへと変換してゆく。

——と、言つても『いつもの』ではないです。『こちら側』の事情だし、ほとんど私個人のががままですからそう身構え無くても良いですよ。

がそう言つても上条の対応は変わることは無い。ただ静かに次の言葉を待つ。これが別の人物、師匠や教授だったらもう少し別の対応をするのだが、普通は上条に『任務』を通達することの無いエネが、それでも『お願い』として『相棒』としての立場からそう告げた。

——が、事は一刻を争う。純粹で素直。天真爛漫で健気。そんな彼女が上条に『任務（死地）に赴け』と命令してくるといふ事がどういふ事か。

——『ミツシヨン』を通過する。今すぐ第七学区の古本屋と雑貨ビルの隙間の路地に赴き、ミサカ10031号を保護してくれ。

「……漫画、買ってけなくても文句言うなよ?」

その意味を理解している上条はホンの少しも迷う事無く、すぐさま本屋を飛び出した。

靴が片方脱げた。

片足だけで履いていても走るのに邪魔だと感じた少女——御坂美琴に良く似た少女は、もう片方も脱ぎ捨てて、なお走る。

暴れ狂う心臓の鼓動、不規則極まりない呼吸、明滅し混乱する思考。その一つ一つは、確実に彼女が狩られる側の人間である事を証明している。

背後に迫る影。

ほんの10mも無い距離まで接敵した白い少年は

「はっはアーンだアその逃げ腰は。愉快地にケツ振りやがって誘ってんのかア!」

その狭い直線の路地で、逃げる場所も隠れる場所もない直線の路地で、それでも丸腰のままに『狩る側』の狂熱に溺れていた。

少女が手にした学園都市製のアサルトライフル——F2000R『オモチャの兵隊トイソルジャー』の赤外線センサーにより分析、電子制御された五・五ミリの弾丸は、少年の体に当たった瞬間に四方八方に弾かれた。

おまけに弾かれた弾丸の一発が少女の肩に命中する。途端、びずつ、と肉を潰す音が響いた。

「……………ぎゃー」

少女の体がよろめく。とつさに壁へ手を突こうとしたところで足がもつれ、頭からコンクリートの汚い壁へ激突した。そのままずると地面へ崩れ落ちた所へ、

「ほらほら退屈しのぎに一丁ナゾナゾでもしてやるオカ？ さアって問題、一方通行ははたしていったいナニをやってるでしょオカア!？」

狂笑。少女が頭上を見上げれば、飛び上がった少年の足が全体重を掛けて少女の頭蓋骨を踏み潰そうとしている所だった。

「ー」

とつさに汚れた地面を転がり、振り下ろされる足を回避。そのまま頭上を見上げるようにF2000Rを構え、引き金を引く。

ほとんどゼロ距離で、それも眼球に正確に当たったにも拘らず、やはり弾丸は柔らかい眼球に触れた瞬間横合いへと弾かれる。

白い少年は瞬きすらしない。

その白濁した顔に浮かぶのは、焼け爛れたような笑み。その白い手が振り上げられる。一体どんな効果があるかも分からない手が。

「……っ!」

少女はとっさに空になったF2000Rを少年の顔へと投げつけ、同時にまだ動かす事のできる左手を振り回し、そこに『力』を集約させ、光の速度で突き進む雷撃の槍を解き放ち――

その雷撃の槍が少年に激突した途端、文字通り光の速さで跳ね返って少女の胸を貫いた。

投げ付けたアサルトライフルは、粉々に砕け散っていた。

「が……っ!?!」

ドン! と胸に木槌でも打ち込まれたかのような衝撃が走り、少女は地面を転がる。呼吸が止まり、全身の筋肉が不規則に動いた。少女は震える唇で、とっさに言葉を紡ぎだす。

「反、射……!?!」

「いや残念。そいつも合ってたんだけど俺の本質とは違うんだよねー！」

少女は何とか少年から遠ざかろうとする。だが、自分ではなつた雷撃のせいで体が全く言う事を聞かない。

「答えは——」

少年が歪んだ笑みを顔に浮かばせてナゾナゾの答えを少女に告げようとして、止まった。

この『実験』が始まって以来、はじめての出来事だった。あからさまに動きを停止した事はあつても、それはその残酷性を示す為、より相手を恐怖させる為にあえて動きを停止した訳であり、今みたいに『驚愕して』動きを停止する事は今までに一度も無かつた。

『反射』じゃないのか。じゃあ『ベクトル向き』変換か？』

彼は『実験』におけるイレギュラー要因の対処法など、知らされてはいないのだから。「はア?」、と少年は突如として割り込んできた声に答える様にその体ごと後ろを振り返って——

それと同時に、学生服を着たツンツン頭の少年が自分のすぐ真横を通り抜けて行った

「あアン?」

再び体を反転させ、先ほどの声の主であろうツンツン頭の少年を目線で追う。改めて少年の容姿を確認した彼の脳内に、ふと『不相応』という言葉が浮かびあがってきた。

この薄暗くキナ臭い路地裏にあの少年がいるのが『不相応』

この、ネジが飛んだ研究者ばかりが集っているイカレた実験に、どう見ても一般人にしか見えないあの少年が関わる事が『不相応』

この学園都市最強の超能力者である自分に少しも興味を示さず、緊張もせず、恐怖も感じていないあの様子が『不相応』

その、何もかもが『不相応』な少年は地面に仰向けに転がる少女の傍に素早くしゃがみ込むと、顔が驚愕一色で染まった少女の首と膝の裏に地面を掘るシャベルの様に両手を入れ、掬いあげる様にそのまま持ち上げて抱きかかえた。

ボロボロになった少女をいたわる様に、優しく、そつと。

そんな少年の様子を見た一方通行は先ほどまでの驚愕の表情を一瞬にして狂笑へと塗り替えた。

「ギ、ギャは、ぎやはははははッ、なんだなんだよなんですかア！　もしかして不幸な少女のピンチに颯爽と現れた英雄ですかア!?　喜べ人形！　一応、お前らみてエなのにも『助けよう』って思ってくれるような物好きがるみたいだぜエ!!」

都合良く現れる、それが当たり前前の英雄の登場。突如として沸いた、映画や漫画であ

るような超展開。面白くないはずが無かった。

(何秒持つか分かったもんじゃねエがな。まあせいぜい——)

と、新たな狩りの獲物を発見した一方通行はそこで気づいた。

少年の学生服のズボンにある小さなポケット。そのポケットから野球ボール位の丸い形をした何かが地面に転げ落ちようとしている事に。ズボンのポケットを離れ、地球が発する重力に従いゆつくりと落下していく野球ボール位の丸い球体は

地面に接触したその瞬間、大量の煙を路地裏へとばら撒いた。

「は？」

煙の色は白色。量は路地裏を埋め尽くすだけではあき足らず、表通りまでに及ぶほど。あまりにも莫大な量のその煙は、上条と少女だけではなく、白い少年も今以上の白で覆い隠してしまう。

『まるで狩人の目から逃れるみたいに』

「……ッ!？」

二拍おいてようやく少年の意図に気づいた一方通行は大急ぎで『空気』の向きを操り、周囲を取り巻く大量の煙を一瞬でなぎ払う。

が、当然のように少年と少女はそこから消え失せていた。

「あんの野郎オ……!」

冷静になってみれば当たり前の事だ。学園都市最強のレベル5。運動量、熱量、電気量。あらゆる『向き』を皮膚に触れただけで変換可能。弾丸、火炎、雷撃、核ミサイルでさえも傷を付ける事など不可能な一方通行に、真つ向勝負を挑む訳が無いのだ。

ならばどうするか——その答えが『絡め手（これ）』だ。『戦わない事』が最善なのだ。そもそもあの少年の目的は『あの少女を助ける事』であつて『一方通行を倒す事』ではないのだろう。

『実験』や、時々自分に突つかかってくる馬鹿などあくまでも『自分を倒そうとする相手』との戦闘しか行つてこなかった一方通行だからこそ、対応が遅れた。一方通行が少しでも戦法というものを学んでいた場合、こうは上手くいかなかっただろう。少年が少女の下へ駆け寄つた時点で逃げられることを警戒したはずだ。

苦虫を噛み潰したような顔をする一方通行は、そこで自分の耳に入る様々な雑音に気づいた。

（ちツッ：さっきの煙で表通りにまで騒ぎが広がりやがったか……あの三下、ここまです算に入れてやがったな……）

この程度のイレギュラーなど研究者達や学園都市の上層部がどうとでもするだろうが、だからと言って人の目が集まりつつある路地裏から堂々と出て行く訳にもいかない。面倒なことになる前にとつと退散することにした。

連れ去られたあの人形を回収するにしろしないにしろ一方通行にとつてはどうでも良い事ではなかった。『実験』に使う『人形』のストック追加などいくらでも出来るだろうし、なにより――

「だーッ、クソッ！ 消化不良すぎンぞ!!」

このどこから来るのかも分からないイライラを何かにぶつけて消さないと自分がどうにかなってしまうそうだったから。

イラついている一方通行は自分が大きな勘違いをしているという事に気づかない。

ツンツン頭の少年は『戦えなかった』のではなく『戦わなかった』のだという事に。

「ふっぎけんちくしょう・・・ッ!!」

上条が古本屋の裏にある路地裏である一方通行とか言う学園都市最強のレベル5から御坂美琴そっくりの少女を助け出してきてからもう一時間が経っていた。第七学区の路地裏にはエネの「人払い」の術が発動している為、あたりには自分とエネ、そして少女を除いて誰もいない。

エネと合流した上条は、彼女が単独で収集した情報と『実験』の詳細を聞いてこれでもかと言うほど奥歯を噛みしめる。エネは先ほどから上条が抱えて連れてきた気を失っている少女に得意の符術や能力を使って治療を施していた。

なんだこれは。確かに学園都市では「記憶術」と表して人間に薬を飲ませまくり科学的に「超能力」を開発している都市だ。外と科学技術が2, 30年進んでいる事も手伝い、この都市ではいわゆる『黒いウワサ』が絶えない。

学園都市に敵対する勢力を殺しつくして回るといふ四人一組の『秘密組織』

上層部の犬で、どんな残酷な命令でもこなすという『獵犬部隊』

学園都市最初の研究所で、こことは違う次元にあるという『虚数学区・五行機関』

統括理事長の命令を受け、裏を悠々と泳ぐ一匹の『黒き龍』

……そして

「学園都市に七人しかいない超能力者の第三位。御坂美琴のDNAを用いて造られた軍用クローン『妹達シスターズ』……そしてそのシスターズを二万体制害することで一方通行をレベル6にする『絶対能力者LEVEL6への進化シフト計画』……ねえ」
だからこそ、それはただの『ウワサ』だと思っていた。否、思いたかった。

上条は、地面に横たわってエネによる治療を受け続けているミサカ10031号を見

た。彼女がこんな大怪我を負ってしまった理由には、間違いなく自分が一枚噛んでい

る。
御坂妹（あの固体はミサカ10032号らしい）と昨日初めて出くわした時から感じていた妙な違和感。そして捨てられていた黒猫を前にしての会話で御坂妹に感じた様々不自然さ。

それだけで学園都市で行われている異常な実験に気づけというのは少々酷で悲観的かもしれないが、少なくともエネは美琴との会話で得た情報と彼女から感じた「不」の感覚。そして「筋ジストロフィー」というキーワードを元に情報を探索してあっさりと言葉にたどり着いている。一方でそれをみすみす見逃したばかりか、御坂妹とのん気な会話を交わし、あまつさえ彼女に黒猫を押し付けて一人にしてしまった上条。

無能、の一文字が脳内を駆け巡る。

少なくとも上条が美琴と会話した時に得た情報を想起し、エネが質問した「筋ジストロフィー」というキーワードに何かがあると気づけていれば10031号の実験が始まる前に彼女を助け出せていたかもしれない。

ここまでの大怪我を負わせることは無かったかもしれない。

（IQ一六八が聞いて呆れるぜ。クソツ！）

自分の観察力と推理力の無さに、上条は悔しさを体が引き裂かれるかと思った。

「筋ジストロフィー」とは「病名」のひとつだ。

その病に掛かった人は、全身の筋肉が徐々に低下していく。

走る事も、歩く事も、ベツトから起きる事も、最終的には「呼吸」という生きていく為に最低限必要な行為さえする事が出来なくなってしまう。

そんな恐ろしい病なのだが、未だに決定的な治療法は見つかっていない。(と、されている)

が「例外」はある。人間の脳が筋肉に伝える各種命令は「電気信号」となって伝えられている。つまり超能力である「発電能力」を研究し、その力を、生体電気を自在に操る力を患者に植えつけることが出来れば通常の神経とは違う法則で筋肉にを動かす事が出来る。そしてその為には——学園都市最強の発電能力者、御坂美琴のDNAからヒントを得るのが最適……が、ここで一つ疑問が残る。

そもそも超能力者を開発している学園都市には、発電能力者なんて『腐るほどいるのだ』。少なくとも、研究に困らない程度には。そして発電能力者の研究なんてしなくても筋ジストロフィーの患者を治療する方法なんて「いくらでもある」。

例えば普通の人間千人の体内にナノデバイスを打ち込んで四六時中三百六十五日電気信号を計測し続ける。そしてそのデータを元に、その時その時に応じて筋肉細胞を動かすのに最も適した生体電気を発電する機械を作り患者に埋め込むなど。何の変哲も

無い普通の人間を研究しても対策なんてゴロゴロ沸いてくる筈なのだ。

もちろん、御坂美琴にDNAマップを提供してもらい、それを研究するというのも手だが、それはつまり裏を返せば「超能力者御坂美琴のDNAマップを正規ルートで手に入れることが出来る」という事になる。

そしてこの結果に「悪意」が加わるとどうなるか

貴重な超能力者（レベルファイブ）のクローンを大量に造る事が出来る——

それは、科学者にとって一つの病気の撲滅よりもずっとずっと興味深い事なのかもしれない。

『嫌な予感がしたんですよ……くそ！』

御坂美琴のDNAを基に造られたクローン、妹達。その内、10031番目に造られたという固体「ミサカ10031号（呼びにくいので今後はミイ（31）号と呼ぶ）」に治療を施しつつ、上条以上に悔しそうに顔を歪めながら吐き捨てるようにエネは言った。

上条の知らない世界を、知らない時代を生きている彼女には、上条以上に思う所があるのかもしれない。

「これだけ肥大した組織が持っているのが善の一面だけ、というのはまずありえません……分かってはいました、しかし……！」

こめかみにしわを寄せるエネに、上条は違和感を覚えた。半人前で未熟者の上条だつて内から沸きあがる『正しいと思う感情』にのみ身を任せていると言う訳ではない。上条なりの、ちゃんとしたいくつかの『理由』があり、このふざけた実験を止めたい。という意思に拍車を掛けている。

しかし今のエネからは『信念』だとか『明確な理由』以外にも、なんとか鬼気迫るものがヒシヒシと感じられる。それは怒りや悲しみなどといった単純なもので例えられるようなものではなく、「子供」では少しも理解することが出来ないようなとても複雑なもので、エネという人物の知られざる一部分だった。

だが、それでもエネを、今の上条でも表現できるたった一言で表すのだとすれば——
何かの痛み耐えているように感じられた。

「……潰しますよ」

やがてミイ号の治療を終えたエネは、ゆっくりと立ち上がりながら言った。大量に血を失い、いくつかの骨が砕け、今にも息途絶えそうだったはずのミイ号は、エネの符術により血を補充され、能力によって骨を接がれ、驚くほどの回復ぶりを見せていた

ミイ号に施したのはあくまでも彼女なりの「緊急処置」でしかないのだが、そんな事は誰も信じないだろう。

「このふざけた実験を必ず潰します」

稀にしか見ない、稀にしか聞けない、彼女の真剣な表情、真剣な声は「禁書目録事件」の時と同じく、間違いなく彼女なりの思惑と信念がそこにあるのだという事を伝えてくる。

「命を手前勝手な理由で造り、弄ぶ。それだけでなく死ぬことを強要し、それが当然だと教え込むなど言語道断……」

彼女から感じ取れるのは怒り、悲しみ、嘆き。そして、そういつた一時の感情には決して振り回されないと、とてもとても強い意志。

それを、上条は『強い』と思った。

自分の中の正義にただ従い、やるべき事を戸惑わず行い、躊躇う事無く前に進むことが出来る。彼女が、エネこそが。あの一方通行とかいう超能力者よりもずっと

「いきますよ、ご主人！ 私達が住む領域で外道な行いをする事がどういう事か、このふざけた実験を行おうとする馬鹿共に思い知らせてくれます!!」

『最強』に相応しい。と思った。

レールガン Level 15

空の色は闇夜の海のような黒色へと変わっていた。

今宵は三日月。嘲笑う口に似た細い月の光は弱すぎる。町の中心部から離れた鉄橋は街灯もなく、眼下の川の黒と重なってそこだけ黒色に沈んでいるように見えた。

御坂美琴は一人手すりに両手を付いて、ぼんやりと遠い街の明かりを眺めていた。

少女の周りにパチパチと青白い火花が散る。

雷撃と聞くと恐ろしいイメージがあるが、彼女にとつてそれは優しい光だった。初めて力を使えるようになった夜の事は今でも忘れない。布団の中に潜つて、一晩中パチパチと小さな火花を散らしていた。それは星の瞬きに見えた。大きくなって、もつと強くなつたら、いつか星空を作ることができるかもしれない、と本気で考えていた。

そう、大きくなる前の美琴なら。

今となつては、自分には夢を見る資格も無いと美琴は思う。

「どうして、……」

……こんな事になつちやつたのかな、と。美琴は震える唇で呟いた。

もちろん決まっている。筋ジストロフィーの研究の為、という大義名分にそのかさ

れた幼い美琴が不用意にDNAマップを提供してしまったせいだ。あの白衣の男が最初から嘘を付いていたのか、それとも健全な研究が途中で変質したのかはもう分からない。

かつて、困っている人を助けたいと願った少女がいた。

しかし、そんな少女の願いは、結果として二万人もの人間を殺すことになった。

「……………たすけて」

脅え、傷つき、ボロボロになった眩きは、ただ闇に消えてゆく。

「たすけてよ……………」

決して誰にも届かない叫びが、耐え切れずに少女の口からこぼれていく。

と、その時

カツ、という足音が、聞こえた。

「……………」

美琴は、顔を上げる。

灯り一つ無く、針のように細い三日月の光だけが、ただ少女の取り巻く環境を表現しているかのような、闇吹く夜の鉄橋に

「……………おっす。何やってんだよ、お前」

その少年は、闇を引き裂くように、やってきた。

暗闇に飲み込まれる少女の叫び声を聞いて駆けつけてきた主人公のように、やってきた。

美琴は夜の鉄橋に一人、ぼんやりと立っていた。

遠くから見えた少女の姿に、上条は正直、胸が潰れるかと思った。あまりにも弱く、もろく、今にも消えてしまいそうなほど、疲れきった少女の横顔。やはり、というかなんと言うか。誰かのこういった表情は『何度見ても見慣れない』と上条は思う。

そして同時に、それで良いんだと思う事が出来た。ああいった表情に何も感じなくなってしまうたら、それこそ『終わり』だ。

「こーんな遅くまでたった一人で夜遊びするなんて上条さんは許しません！ 今すぐそこに正座してごめんなさいするならいつかのように夜通しナイトフィーバーに付き合っても良いんですがいかがでせうか？」

ふざけてるようなその声に、美琴は上条の顔を見た。

そこにいる美琴は、いつもの通り活発で、生意気で、自分勝手な御坂美琴だった。

「ふん。私がどこで何してようが勝手じゃない。私は超能力者の超電磁砲なのよ？ 夜遊びした程度で寄って来る不良なんて危険の内にも入らないわよ。つーかナイトフィーバーって何よ？ そもそもアンタになんか言われる筋合いなんてないけど」

しかし、その姿が完璧だからこそ、上条はその裏側を見たような気がした。だからこそ、こつちが先に演技を崩す訳にはいかなかった。

「んー。そりやそうなんだけどき。一人より二人、二人より三人の方が『宴会』は楽しいし『ごっこあそび』は盛り上がるし……」

「は、はあ？ アンタ一体何を言ってる——」
「だから、上条は言う。」

「お前の妹達を使ったふざけた『実験』を止めるのも、楽になるだろうからさ」

「、」

その瞬間、御坂美琴の日常は木っ端微塵に砕け散った。

おそらく自分でも顔の筋肉をどう動かしているのか分かっていないのだろう、美琴の頬が壊れたように引きつっていた。

上条の胸がズキンと痛んだ。

恐らく彼女が自分を押し殺してでも守ろうとした何かを、上条はその手で破壊した。それでも上条は前に進もうとするが

「あーあ、なんでそこまで首つつこんで来ちゃうのかなあ？」

まるでそれを遮るように、美琴は言った。

「アンタ何者よ？ 昨日私のクローンに会ったばつかでここまで辿りつくなんて探偵になれるわよ……ってか、まさかとは思うけど私の部屋に勝手に上がり込んで家捜ししたりしたんじゃないでしょうね？ もしそうだとしたら死刑よ死刑」

美琴は何の気なしに、いつものように笑いながら言った。言葉から察するに、もしかしたら『実験』に関するレポートの一つや二つ入手して隠し持っていたのかもしれない。まるで何か吹っ切れたような笑みが、上条には余計に痛々しかった。

「……ンなこと（少なくとも俺は）してねーよ」

『あいつ』はどうか分かんねーけど。と美琴に聞こえないように語尾にボソツと付け足す。

あつそ、と美琴は言う

「それで、一つだけ聞いても良いかしら？」

ほとんど強制的な美琴の明るい声。上条が反射的に『何だよ』と聞くと

「結局、実験を知って、事実を見て、あんたは私が心配だと思つたの？ 私を許せないと思つたの？」

美琴は妙に明るい声でそう言った。

まるで、糾弾しに来たのは分かっているとも言っているような、世界中のどこにも自分を心配してくれる人などいないとも言っているような――

「心配したに決まってるんだろ」

そんな美琴の声に、上条はどうとう『仮面』を脱いだ。

押しつぶすような低い声に、美琴は少しだけびっくりしたような顔をして

「で、お前は何をしてるんだ？ いや、何をしてたんだ、つてのが正確か」

上条は一拍置いて

「確か筋ジストロフィーつて病気を研究してる施設がここんとこ立って続けに撤退を表明してる、つて飛行船のニュースでやってたよな？ ほら、今日の夕方、お前と偶然鉢合させた時だよ。ま、その時は『実験』の事なんて少しも知らなかったんだけどさ……：
なあ、それつてさ——」

「……アンタの予想通りだと思っただよ？」

ゾツとするほど、感情の消えた声。

それまでの彼女を知るものならば、それだけで凍りつくような透明な声。

「あつてるわよ、それで。ま、つつつても馬鹿正直に超電磁砲ぶつ放したつて訳じゃないけどね」

美琴は歌うように続ける

「研究所の機材つて一台数億とかするでしょ。そいつを、ネットを介して私のチカラで根こそぎドカン、つてね。結果として機能できなくなった研究所は閉鎖、プロジェクト

は永久凍結……」

「しなかつたんだろ」

上条は謳うたうようにそれを止める。

「じゃなきやお前がこんなとこでくすぶつてる訳ねーもんな。大方、どれだけ研究施設を潰そうが『実験』は次から次へと他の施設に引き継がれちまう、つてとこか」

「……」

「ンでもって、人工衛星で常に監視されている学園都市このまちでそんな外道な実験を平然と行つてゐるって事は統括理事会……まあ一部だと思いたいけど、その馬鹿野郎達はこの『実験』を黙認、最悪推奨してんのかもしんねーな」

だから実験に関する決定的な証拠を掴んでいても、警備員アンチスキルに駆け込むことも、統括理事会に密告する事も出来ない。そんな事をすれば逆にこつちが捕まりかねない。

美琴は、はあ、とため息を付いて。

「アンタ、本当に何者よ。まさか学園都市の薬で体が縮んだ中高年探偵とかじゃないでしょうね」

どこの漫画だよそれ。と上条は呆れたように言った。

実際、学園都市ならそういった類の薬があるだろうから笑えた事ではないのだが。

「ええ、そうよ。きっと、お偉い研究者さんには前人未到の絶対能力者つてのがよっぽど美味しく見えるのね」

少女の声は、本当に疲れきっていた。

まるで、千年を生きて人間の闇を全て見つめてきたような、達観した絶望がそこにあった。

「.....」

そんな美琴を見て、上条はつい考えてしまう。

本当にそれだけの長い時間を生きている者が見てきた、体験してきた『闇』は、一体どれ程の物なのだろう、と。

上条も、美琴も、何も言わない。

暗闇に解けて消えてしまうようなその沈黙を破ったのはカツ、という美琴の靴が地面を踏みしめて鳴る音だった。

「どこへ行く気だ？」

『実験』は今夜も行われる」

美琴は、まるで戦地に赴くような表情で

「これは私の引き起こした問題よ。私自身の手でケリをつけてやる——!!」

そう勇みこむ美琴の前に

「……………」

上条は立ち塞がった。

「……………何よ」

「……………」

「どいて」

「いやだ」

びつくりしたような顔をする美琴に、上条はさらに言い放つ。

「俺は言ったんだ、この俺が言ったんだぜ。『知ってる』って。お前に一方通行は倒せないよ。だって、そんな事が出来りやお前は真つ先に向かつてるだろ。ちよつと怒っただけで俺にビリビリを飛ばしてきたお前が、ここまでされて黙ってるはずないだろ」

「……………」

「研究所を潰すとか、理事会に報告するとかさ。お前にしちや考えてることがどうも回りくどいとは思ってたんだ。お前は気に入らない奴がいたら正面から殴りあうタイプだろ。証拠を見つけて先生に密告するようなタマじゃねーだろうが」

上条は一拍、息を吸い。

「ま『皮膚に触れただけでありとあらゆる力のベクトルを操る事が出来る』なんて、一見誰にも勝てなさそうな能力持つてる奴が相手じゃしようがねえと思うけどさ」

それに、そんな理屈はなくても美琴には一方通行は殺せないと上条は思う。

御坂美琴は、妹達が死ぬのが許せなくて立ち上がった人間だ。

そんな彼女が、誰かが死ぬのを止めるために、別の誰かを殺すことを良しとする筈がない。

でも、と上条は

「それでも上条さんは、少しくらい相談して欲しかったなー、って思うわけですよ」

上条の言葉に、美琴は少しだけ黙り込んだ。

夜の鉄橋には、風鳴りの音すら聞こえない。

「……超電磁砲を128回殺せば、一方通行は絶対能力へと進化することが出来る」

美琴は闇の中で、ポツリと呟いた。

「けれど、超電磁砲を百二十八人も用意することは出来ない」

美琴は孤独の中で、歌うように言った。

「だから、超電磁砲の劣化コピーとして二万人の妹達を用意する」

だとしたら、と美琴は楽しい夢でも語るように下を滑らして。

「もしも、私にそれだけの価値がなかったら？」

上条は、息を呑んだ。

「128回殺しても、絶対能力になんか辿り着けない。研究者達にそう思わせることが

できたなら？」

そうやって、少女は笑っていた。

「実際『樹形図の設計者』は一方通行と超電磁砲が戦えば逃げに徹しても185手で私が死亡する、という結果を出している。けど、もつと早くに勝負が決まってしまうたら？ 最初の一手で私は敗北し、後は地を這って尻を振って無様に逃げ転がることしかできなかつたら？」

そういつて、少女は本当に楽しそうに笑っていた。

「その結果を見た研究者たちは、きつとこう思う。『樹形図の設計者』の予測演算は素晴らしいけど、それでも機械のやる事にはやっぱ間違いだつてあるんだ、つてね」

そういつて、少女はボロボロの笑みを浮かべていた。

『実験』を行う研究所をいくつ潰しても、他の研究所が『実験』を拾ってしまうのでは意味がない。彼らを止めるには、そもそも『実験』が何の利益も生まない、無意味なものだと思わせなければならぬ。

だから、美琴は一方通行と八百長の勝負を仕掛けようとした。

ハツタリでも演技でもして、とにかく研究者達に『実験』の根幹となる『演算結果シミュレーション』が間違っていると思込ませようとした。

たとえば、自分の命を犠牲にしても。

そんな美琴の決意と思いを

「馬つ鹿じゃねえの?」

上条は、たつた一言で打ち砕いた。

「そんなもん、何の意味もねーだろうが。肝心の『樹形図の設計者』でもう一度演算されちまつたら終わりだろ」

「……ああ、大丈夫。それはないわよ。『樹形図の設計者』はね、実は二週間ぐらい前に地上からの原因不明の攻撃で撃墜されているの。上はメンツを守る為に隠し通そうとしてるみたいだけどね。てか、アンタこっちは知らな——」

「それに」

美琴はホツとしたような顔で何かを言おうとしたが、上条はそれを許さない。

「もし『樹形図の設計者』が誰かに破壊されていてもう演算をする事ができねえとしても、研究者達の誰かがお前の演技に気づいちゃまえばそれでアウトだろ。つか、もつと間抜けな展開として『予測演算はどこか間違ってる』って判明してもそのまま『実験』を続行しちゃう場合だつてあると思うんですが?」

「つつ——!」

上条の的確な矛盾の論破に、美琴は小さな子供が親に悪戯がばれた時のような表情を浮かべる。

「……っーかさ」

上条は、ポツリと呟いた。

「言つたよな。知つてるつて」

それこそ、子供がした悪戯を、最初から全て知つていたと告白する、親のように。

「一応確認しとくぞ『お前、死のうとしてるんだな』」

宵闇が覆い、三日月が照らす鉄橋の中心で、上条は言つた。

ええ、と美琴は頷いた。

即答だった。上条に自分の願いを否定された直後にもかかわらず、だ。

「お前が死ぬ事で、残る一万の妹達が救われるつて、本気で信じてるんだな」

ええ、と美琴は頷いた。

苦しうに、寂しうに頷いた。

そつか、と上条は寂しうにポツリと呟いた。

そうして、美琴は一步だけ足を動かし、改めて上条と向かい合つた。

「さあ、そこをどきなさいよ。『知つてる』んでしょ？あんたの主張には一理あるけど、もうこれ以外に手はない。私はこれから一方通行の元へ行く。すでにデータを盗んで二万種の『戦場』の座標（ばしよ）は調べてある。だから、妹達が戦場で戦う前に、私が割り込んで戦いそのものを終わらせてやるわ」

だからそこをどきなさい、と美琴は言った。

「……………」

上条は歯を食いしぼる。

確かに、世の中には殴り合いで解決できない問題なんて腐るほどある。上条はそれを知っている。社会が作り出す『組織』という名の力は、たとえ上条の師匠達であつても『良い方向に変える』事は至難の業だ。

ましてや未熟者で子供の上条では話にすらならない。今までだつてそうだった。

上条は、もう一度歯を食いしぼる。

脳裏に浮かぶのは御坂妹の事だった。無償で散らばったジュースを集めてくれて、三毛猫のノミを取ってくれて、けどどこか無防備で、猫に嫌われる自分の体質を気にしている。彼女は何も悪い事をしていないのに、このままでは確実に殺されてしまう、という事実を奥歯で噛みしめて

「どかねえよ」

上条の言葉に、美琴は心底驚いたように上条の顔を見た。

「どか、ない。ですって?」

ああ、と上条は立ち塞がるように、言った。

こんな美琴を前に、あんな話を聞いて。いまさらどくことなど、できるはずがない。

上条は思い出す。路地裏でミイ号の治療を行い、カエル顔の医者がいる病院に（こっそり）預けたあとの事を。

エネは上条にこう告げていた「いますぐ御坂美琴を探してください『あいつが心配だ』と。」

その言葉を聞いた瞬間、上条は一瞬だけ固まった。

美琴が上条に電撃を浴びせるだけでこめかみにしわを寄せ、怒りが頂点に達した時は符術で撃退しようとしていたエネが

何かあるたびに美琴に説教をかまそうとしていたエネが

上条に「あの娘は好きません！」とぶりぶりと不機嫌そうに言っていたエネが、何の迷いもなくそう告げてくれた。その意味を理解した瞬間、上条は自分でもビックリするくらい笑っていた。

そうだ。考えてみればそうなのだ。本当に好かない人に対し、関わりよう、とは思わないはずだ。本当にどうでもいいと思っている人物に、説教をしてやろう、とは思わないはずだ。

上条としてもまず、いま美琴が何をしているかが気になったのだが、言った途端に反対されると思っていた。

『実験』を止める方が先決だと、そんな事は後で幾らでもできると。

実際そうだと思うし、自分たちはこれ以上の『実験』が行われるのを、妹達が殺されるのを防ぐ為に動こうとしているのでそれが最優先事項であるという事は分かるのだが、そういった理屈を理解しても、上条はそれを受け入れたくなかった。妹達と同じくらい、美琴のことも心配だったから。

感情的で、考え無し。どうしようもないくらい子供な意見をエネは肯定してくれた。もちろん、彼女は上条のように何の考えも無しに美琴のところに行けと言った訳ではない。

『御坂美琴』という人物がこの『実験』の事を知っていた場合、何をしでかそうとしているのか、安易に想像できたからこそ、彼女は上条を美琴の元へと向かわせたのだ。理由は馬鹿馬鹿しいくらい簡単で、上条のそれと同じもの。

エネも、美琴が死ぬという結末は、絶対に認められなかったから。

美琴が、妹達の為に命まで捨てようとするような人が、自分より他人の事を思う少女がボロボロに傷ついて、誰も知らないところで一人、殺されて——そんな結末だけは絶対に見たくなかったから。

だが、美琴は納得しない。

わなわな、と。怒りに唇を震わせながら

「じゃあなによ。アンタには他に方法があるって言うの？」

暗く、怒りに満ちた表情が美琴の顔に浮かぶ。

「何も出来ないくせに綺麗事や理想論で語らないで」

虫唾が走る。と、美琴は言った。それはそうだろう。例え今どれだけ力や知識があった所で上条に出来る事など限られている。

上条に様々な教えを説いた師匠達にも、それを言われた。

安易に綺麗事や理想論を吐くなど、そんなに生易しいものではないと。

「……それでも、嫌なんだ」

それをキチンと理解した上で、上条は告げた。

迷い無く、ハッキリと。それが当たり前のように言った。

美琴は一瞬、ほんの一瞬、何かびつくりしたような表情を顔に浮かべたが、その表情は、すぐに怒りの中へと消えていった。

「……話にならないわね。まさか、クローンだから死んでも構わないとか言うんじゃないでしょうね」

勿論、そんな事は欠片も思っていない上条だが、美琴の帯電から来る青白い火花は止まらない。

「私の邪魔をしようってんならこの場でアンタを打ち抜く！ 嫌ならそこをどきなさい

!!」

上条は、黙って首を横に振った。

美琴の唇の端が、歪む。

「ハッ、面白いわね。それじゃ、力づくで私を止めるって言うの？ 良いわよ、それならこつちも遠慮はしない。アンタがどんな力を持つてるかは私には分かんないけど、今回ばかりは負ける訳にはいかない。だからアンタも死ぬ気で拳を握りなさい——」

バチン、と美琴の肩の周りからひととき大きな青白い花火が散った。

「——さもなくて、本当に死ぬわよ」

溢れ出た火花はブリッジを描き、鉄橋の手すりに繋がって霧散された。

上条と美琴の距離はわずか七メートル。

上条としては瞬間的にその距離を0に出来る範囲だが、美琴にしてみれば光速の雷撃の槍をいくらでも放てる射程距離圏内。どちらにとって有利で、どちらにとって不利な間合いなのかは一目で分かる。

きつと、目の前の少女には、もう上条の言葉は届かない。

言葉が届かない以上、もう止められる方法なんて一つしかない。

「.....」

上条は、その右手を横合いへ突きつけた。

握った拳を開く。まるで右手の封印を解くような仕草。上条は、一度開いたその右手

をもう一度しっかりと握り締めて、

そして、自分の胸の前で両の腕を∞の字に組んだ。

まるで天下の宝刀を、唯一無二の鞘に納めるかのように。しっかりと握ったその右手は、左の脇の間にスッポリ収まっている。

「なに、やってんのはよアンタ……」

「……仁王立ち？」

「ッ、そういう事言ってるんじゃない!!」

美琴は激昂して

「アンタ、本当に馬鹿じゃないの！ 無抵抗そうしてたら私が出さないと思ってるの？ 私にはもう他に道なんて無い！ 無抵抗だろうと邪魔をするなら撃ち抜くわよ!! 分かってんの!?!」

「ああ、分かってる。……それでも『戦わない!』」

地獄が口を開いたような美琴の罵倒は、しかし上条の言葉にかき消された。

「フツザげんな!!」

瞬間、美琴の前髪から雷撃の槍が生み出された。

自然界で生み出される雷の最大電圧は10億ボルト。美琴のそれは雷に匹敵する。

10億ボルトもの壮絶な紫電で生み出された、青白い光の槍、空気を突き破る雷撃の

槍は空気中の酸素を分解してオゾンに組み替え、一瞬にして七メートルの距離を詰めて上条へと襲い掛かる。

ズドン！ という轟音。青白い雷撃の槍は、上条の顔のすぐ横を突き抜けた。

「闘う気があるなら拳を握れ！ 戦う気が無いなら立ち塞がるな！ 半端な気持ちで人の願いを踏みにじってんじゃないわよ!!」

バチン、という凶悪な咆哮と共に美琴の前髪から火花が炸裂する。

まるで、さっさと拳を握れと催促している様な、美琴の攻撃。

上条は、それでも拳を握らない。

「……戦えって、言ってるのよ——ッ!!」

そして、凶暴に吼える雷撃の槍が、上条の心臓へと直撃した。

「え？」

初め、目の前の光景に一番驚いたのは、上条よりも美琴の方だった。美琴は、上条の力がどんなものを分かっているか分からない。けれど、これまでのケンカでは一度だって攻撃が当たる事は無かった。その正体不明の力にこちらの攻撃を打ち消されるたびに、ドンドン美琴の攻撃はエスカレートして行って、いつしか上条はどんな攻撃だって簡単にあしらっていくような、そんな無敵の存在に見えていた。

だからこそ、美琴は雷撃の槍を撃つたのだ。

これぐらいの攻撃なら、あの少年はあっさり打ち消すはずだと。歪んではいるものの、ある意味で上条を信頼して。

「なのに……」

……、こんなの、何かの間違いだ、と。美琴は思った。

十億ボルトもの高圧電流をともに浴びれば、人間の体がどうなるかぐらい美琴だって分かっている。あの少年は砲弾に薙ぎ倒されるように地面に叩きつけられていなければおかしいはずだ。

……、それなのに。

「……」

「なんで、アンタは平気なのよ……！」

美琴の雷撃の槍は、上条の不思議な力に打ち消された訳ではない。間違はなく上条の体に直撃した。だが動かない。地面を踏みしめるその二本の足は一センチも動いてはいない。

だが倒れない。こんな事で倒れる鍛え方はされていない。

平然としている上条を見て美琴が脳内に思い浮かべたのは、何週間か前、公園で自分と激突（といっても美琴から一方的に決闘を申し込んだのだが）した白い学ランを着た不思議な男子学生だった。やはり同類なのか——とも思ったが向こうは面識などなさそうだったし、なにより目の前に立ちはだかるこの少年の力は、何かもつとイレギュラー的な存在に見えた。

「お前が毎晩駆けずり回って一方通行をぶつ倒す手段を探してたつてんなら、今からあいつを本気でぶちのめすつもりで戦いに行くから邪魔するなつてんなら、もつと迷ったかもしんねえよ」

少年は、懐かしそうに橋の下にある河川敷に視線を移して

「なあ、覚えてるか？いつか、この下にある河川敷でケンカした時の事……ははっ、なんだかずいぶん昔の事みたいに見えるけど、つい数週間前のことなんだよなあ……」

「……………」

「……………正直さあ」

上条は、少しだけうつむきながら

「お前が本気の本気で俺と試合する事を望んでるってんなら、ちよつと位相手してやってもいっかなあ……とも思ってたんだ。気乗りはしないし、嫌だけど、それでもお前が真剣に相手をしてほしい、ってんならな」

「つ!! なら——」

でもな、と。上条は区切って

「少なくとも『今の』お前とは戦えない。一方通行の所へは『行かせない』。少なくとも、最初から全部を諦めて死のうとしているような、それで全てが解決すると思ってるような子供おこちやまと戦うことは出来ない」

な……、と美琴は思わず絶句した。

「アンタ、やつぱり私を馬鹿にしてるの!?! 私のどこが子供だつていうのよ!!」

「子供だろうが!!」

突然大声で怒鳴った上条に、美琴はそれこそ親に叱られた子供のようにビクリと肩を震わせた。

「……お前だつて気づいてんじやねーのか? こんな方法じゃ、誰も救われないつて。例え、お前が死んで、一万人の妹達の命が助けられたとして、そんな方法で助けられて残された妹達がお前に感謝するとも思ってるのか? お前が助けたかった妹

達つてのは、そんなにちっぽけなもんじゃねえだろ！」

「うるさい！ もう黙って戦いなさいよ！ 私はアンタが思ってるような善人じゃない！ 十億ドルトもの雷撃の槍を浴びて、一体どうしてそんな事にも気づけないのよ！」
美琴は威嚇するように、さらに雷撃の槍を放つ。だが、やはり上条は組んだ手を解かない。直進した雷撃の槍は、真っ直ぐ上条の胸に直撃する。

それでも、上条は倒れない。どれだけ攻撃を食らっても、上条は絶対に倒れない。

……気づくのはテメエの方だ、と上条の口が動いた。

美琴は訝しげに眉を顰めたが

「妹達はどうする気だ？」

え？ と美琴は思わず呟いた。

「お前が死んで、その後の事はちゃんと考えてあるんだろうなって言ってるんだ。……今もそうだけど、学園都市の研究者たちが超能力者のクローンをもともな人間として扱ってくれると思うか？ 普通の生活を送れる様にしてくれると思うか？ 今よりもつとヤバイ実験に付き合わされたりする可能性だってあるんだぞ」

「——ツ!!？」

美琴はそれこそ頭を雷を打たれたような気がした。そうだ。普通に考えればすぐにも思いつくような事だ。妹達にここまでの実験を強いた研究者たちが、今更、妹達に

普通の学生と同じ様な生活をさせるだけの博愛あふれるような行為など、行つてくれる訳がない。

妹達はクローンだ。ただでさえ国際法に違反している存在であるのに、加えて超能力者である御坂美琴のクローンとなれば、どのような結末を辿るかなど、想像に難しくない。最悪、証拠隠滅の為に全員殺処分にされてしまうかもしれない。そうなったら、どうする？ 泣き叫ぶ事すら出来ない妹達すら助けてくれるようなヒーローが登場するのに賭けるのか？

「——ッ!?!」

そうだ。美琴の行おうとしている事は、結局そういうことなのだ。責任を放棄し、自分だけ逃げてしまうような、人の都合を考えず、自分の主張のみを無理やり押し通すような、我侷で自分勝手な子供同然の行いなのだ。

「本当に妹達の事を考えるなら、死んでほしくないって願つてゐるってんなら……」
あ、う……と美琴は混乱するように上条を見た。その目は、まるで道に迷つた小さな子供のように揺らいでいた。

かつて、誰にも聞かれないように『たすけて』と呟いた少女がいた。

その少年は、少女の叫びに答えるように現れた。

でも、自分にはそんな資格すらないと思つていた。

自分のせいで、もう一万以上の妹達を殺された。

だから、今更そんな優しい言葉をかけてもらえない資格などないと思っていた。仮に、誰もが笑って、誰もが望む、そんな幸せな世界があったとして。そこに自分の居場所なんかはないと思っていた。

だが仮に

「妹達の事を誰よりも考えられるお前が、あいつらのそばにいなきやいけねえはずだろうが！」

その世界に少女がいなければ少女が生きていなければ、妹達は『決して救えない』としたら

「………よ」

それ以外に妹達を救う方法が残されていないとしたら

「………つてのよ」

妹達に残っているのは残酷な終わりバットエンドだけだとしたら――

「じゃあ、どうしろつてのよ!!」

ついに耐え切れなくなったかのように、美琴は叫んだ。

美琴の体から周囲にあふれる紫電の火花の音色が、重く鋭く変化していく。まるで得体の知れない兵器が起動したように、音階がどんどん上がっていく。

「……」

「計画を！ 今！ すぐに！ 中止に追い込む!! 妹達も殺させず、私も死なない。それしか他に方法がないってんなら、あの子達を救えないってんなら……!」

どうしろっていうのよ、と。美琴は叫んだ。

理屈は分かる。

理由も分かる。

でもだからと言ってどうしろというのか。皆で笑って、皆で一緒に、元の居場所へと帰る。

そんな夢のような世界を作り出すことなど、美琴には出来ない。

「頼れば良いだろ」

上条の言葉に、美琴は心底びっくりしたように息を呑んだようだった。

「友達や先生、後輩や先輩。親御さんに……恋人、はまだいねえか。そういう人たちに頼って良いんだよ。力だけじゃねえ。知恵を借りても良いし、支えになってもらっても良い。……お前は危険な事に自分の大切な人達を巻き込めない、って思ってるんだろ、その判断も決して間違いないんじゃないかと思っけど……」

上条は、ゆっくりと語りかけるように

「一人じゃ解決できない問題があるなら、頼って良いんだよ。どうしようもないくらい

辛いなら、誰かに泣きついて良いんだよ。お前が死ぬ事が、いなくなる事が、辛いつて思ってくれる人は、なんの理由もなく立ち上がってくれる人は、お前が考えてるよりずっと多いと思う」

「や、めて……」

少年の言っている事が、かけてくれる言葉が、美琴の凍りついた涙腺を、まるで温かい太陽の光を浴びせるかのように溶かしていく。

だが美琴は必死に堪える。

「俺だってそうさ。お前の味方で良かったな、って思ってる。……だから泣くなよ、と。いつの間にか近づいてきていた上条が、その手が、美琴の頭を優しくなでて。」

今度こそ、とうに枯れ果てたと思っていた涙腺から、錆付いた涙がこぼれ落ちた。

自分には、もう誰かに頼る事が出来る資格なんてない。そう思っていた美琴の幻想は、完膚なきまでにぶち壊された。

アクセラレータ Level 15 (Extend)

御坂妹がたどり着いたのは列車の操車場だった。

路線バスで言うなら車庫に当たる。沢山の電車を整理したり、終電を走り終えた列車を置いていく場所だ。学校の校庭くらいの広さの大地には路線と同じ様な砂利が一面に敷き詰められ、一〇本以上のレールが平行にズラリと並んでいる。

線路の先には港の貸し倉庫みたいな、大きなシャッターのついた車庫が並んでいて、操車場の外周をぐるりと取り囲むように、貨物列車に使う金属コンテナが大量に置いてあった。まるで積み木のように何段にも重ねられたコンテナの高さは三階建ての建物に匹敵するほどで、乱雑に山積みされたコンテナのおかげで操車場の周りはさながら立体迷路のように入り組んでいた。コンテナが山ならば、その中にある操車場は盆地のようなものだろう。

操車場に人気は無い。終電が完全下校時刻という学園都市では、操車場からも早々に人気が無くなる。作業用の電灯も落とされ周囲には民家も無い状態なので光も無い。そこは二百三十万もの人間が住む大都市にも拘らず、夜空を見上げると普段は見えない星の瞬きまで見えるほどの闇に包まれていた。

そんな無人の闇の中心に、それは立っていた。

学園都市最強の能力者、一方通行。

周囲の闇と同化するその姿を見て、御坂妹は自分がまるで操車場という、一方通行の巨大な臍物の中に放り込まれたような、そんな感覚を覚えた。

黒い闇の中、白い少年は笑う。

まるで目玉を熱湯の中に放り込んでグツグツ煮たような、そんな不気味な色の白色が。

「時刻は八時二十五分ってトコかア。ンじゃ、オマエが次の『実験』のダミー人形ターゲットって事で構わねエンだな？」

引き裂かれる笑みの口から、白い闇が吹き出したような一方通行の声。

しかし、御坂妹は眉一つ動かさず

「はい、ミサカの検体番号は一〇〇三二二号です、とミサカは返答します。ですがその前に実験関係者かどうか、念の為に符丁パスを確かめるのが妥当では？ 『あんな事』があった後ですし、とミサカは助言します」

「・・・チツ」

『あんな事』ねエ、と一方通行は吐き捨てた。

『あんな事』とは勿論、数時間前の実験でミサカ一〇〇三二二号がとある少年に強奪された

件についてだろう。あの人形が今どこで何をしているのか、一方通行には分からない。あのツツツ頭の少年が病院に運んだのかもしれないし、結構な大怪我をおつていたから（負わせたのは他でもない一方通行なのだが）その途中で息絶えてしまったのかもしれない。はたまた上の連中に回収されたか、それとも少年ごと抹殺されたのか。

いずれにせよ分かるのは、あの程度のアクシデントでは実験は止まらないと言うことだ。まあこれは『本物の第三位（御坂美琴）』が実験に絡んできた時からすでに分かっていた事なのだが。

「まあ、俺が強くなる為の『実験』に付き合わせてる身で言えた義理じゃねえンだけどき、平然としてるよなア。ちつとは何か考えたりしねエのか、この状況で」

「何か、という曖昧な表現では分かりかねます。とミサカは返答します『実験』開始まで後三分二十秒ですが、準備は整っているのですか、とミサカは確認を取ります」

一方通行はわずかに目を細める。うんざりしたような顔で、口の中で囁んでいたガムを横合いに吐き捨て――

「おう、いつでもいいぜ」

危うく、そのガムを飲み込むところだった。

突如として操車場に響いた年若い男性のものと思われる声は、とうぜん一方通行のものではない。

だが、その声に、音程に、暗く深い闇が支配する操車場にふと射した一筋の閃光のように響いたその声の主に、一方通行は、御坂妹は、覚えがあった。

すぐさま声がした方へと視線を向ける。

操車場の外周付近——山積みとなったコンテナの隙間の辺りに、誰かが立っていた。

そこには、『実験』と何の関係もない一般人が立っていた。

上条当麻が、立っていた。

今一度言うが、一般人に『実験』に介入されたときのマニュアルというものを一方通行は知らない。

が、つい先ほど自分の獲物を横取りされているという事実から来る怒りはまだ少し収まっていないようで

「……よオ。またきやがったかコソドロ風情。で？ 今度はそいつをお持ち帰り、つてか？ はっ！ どうせ何体でも「追加」されるだろオから俺としちゃアオでもいいンだけどさア。こうも毎回E.X.Pけいけんち獲得の邪魔されちゃア流石にただで返すつて訳にもいかなくなってくるンだけだよオ。お前そこんとこ分かってンのかア？」

一方通行は凶悪な笑みを浮かべて上条の方に歩み寄ろうとするが、御坂妹がそれより早く、上条をかばう様に一方通行の前に出てそれを止めた。

「お待ちください。本『実験』に一般人と思われる人物が介入した場合、被験者ならびに妹達は一旦、すみやかにその場を離れる事が第一項とされています、とミサカは戦略における撤退を促します」

今まで見た事がないくらい力強く、さもすれば「命令」と表現できかねない勢いで目の前に立ち塞がる御坂妹を見て、一方通行はわずかに感心したような声を上げた。

一方通行に一万回以上殺害されてきた『実験』の最中。文句も、泣き言も、憎まれ言の一つも言わなかった筈の人形が、初めて……否。超電磁砲の時を含めるなら二度目かもしれないが、ともかく、何かに恐怖するかのように自分の前へと立ち塞がった。

思えばこの前の『実験』の際、黒猫を抱えた御坂妹は路地裏から出てきた自分を見て、ゾツとしたような表情を浮かべていたし、もしかしたら彼女達は自分の命はともかく、無関係な人間が巻き込まれるのは許せないのかもしれない。

一方通行は面白くなさそうに舌打ちをすると。

「分かった分かった分かりましたよ。おい三下ア。そういう訳らしいから今回は見逃してヤンよ。おいおい、ついてンなア。この一方通行を前にして二回も生きながらえるなんてお前どんだけ幸運ってやつに恵まれてんだア？」

興ざめた、と言う顔を浮かべ、くるりと身を翻した一方通行を見て、御坂妹は安堵したように息を吐いた。

はずだった。

「わりの、御坂妹。そりやだめだ。——だって、俺はお前を助ける為にそいつをぶつ飛ばしに来たんだからな」

静かな、だが確かに、まるでダイナマイトが爆発したかのような衝撃がその場を支配する。

まるで信じられないものでも見るかのように、一方通行と御坂妹は上条の顔を見た。少し間を開いて先に口が動いたのは一方通行の方だった。

「オマエ、ナニサマ？ 人がせつかく見逃してやるつつてンによオ。つウか誰に牙？ いてつか分かって口開いてンだろうなア、オイ。学園都市でも七人しかいない超能力者、さらにその中でも唯一無二の突き抜けた頂点つて呼ばれてるこの俺をブツトバス？ オマエ、何なンだよ。カミサマ気取りですか、笑えねえ」

低い、静かな声に混じって静電気のような殺気が周囲の空気へ漏れていく。夜の闇の全てが何億もの眼球となって上条を睨みつけるような、絶大なる殺気。

それを、少年は平然と受け流していた。それどころか「こんなものか」と言わんばかりの、ある意味で失望したような視線すら向けていた。

「……………、へエ。オマエ、面白エな——」

一方通行の赤い瞳が凍る。

『最強』と『無敵』は違う。『無敵』が戦う前から勝負が決まっているのに対し、『最強』は実際に戦って初めて始めて強さが分かるものだ。

つまり逆に言えば

一方通行の最強は、試しにケンカを売ってみよう、と思われる程度のものでしか――

「――オマエ、本当に面白いわ」

一方通行の視界は、その標的は、改めて上条へと定められた。『実験』の事などさておき、とにかく上条の視線を潰す方が100倍先決だといわんばかりに。

白い少年の瞳に、赤い狂熱が宿る。

その笑みが薄く広く――まるで溶けたチーズが左右に伸びるように引き裂かれていく。

「.....」

それでも、上条はたったの一步も下がらない。

それどころかその足を前へと突き進める。

「な、にを――」

御坂妹はギョツとした。

あの少年は、これから一方通行と戦おうとしている。あんな、たった一人で笑顔のままに軍隊と敵対して潰し回れるような人間を相手に、何の武器も持たずに。

あの少年は、御坂妹に言った。お前を殺させないために、こいつをぶつ飛ばしにきたと、そう言った。

つまり、あの少年が戦場へとやって来た理由は。

あの少年が、命を懸けて戦おうとする理由は。

「———— やっているんですか、とミサカは問いかけます」

御坂妹は震える声で呟いた。

この『実験』で命に価値のない御坂妹がいくら死のうが知ったことではない。

だが、『実験』と全く関係ない、量産する事も出来ない 世界にただ一人の一般人オリジナルが『実験』のせいで傷つくなんて事は——

(なん、ですか……これは、と——)

御坂妹の中で、何かがじくりと痛んだ。

御坂妹はどれだけ考えても、その痛みのも正体が分からない。

(——ミサカは、自分の心理状態に疑問を、抱きます)

御坂妹は思考を切り替え、また一步自分に、そして一方通行へと近づいていく上条を止めるために言葉を紡ぐ。

「何をやっているのですか、とミサカは再度問いかけます。いくらでも替えを作る事の出来る模造品のために、替えの利かないあなたは一体何をしようとしているのですか、とミサカは再三にわたって問いかけます」

論理に矛盾はない。口調に乱れはない。まるで定規で測つたような、仕掛け通りに動いているだけのような台詞に、御坂妹は自分の心理状態は正常値だ、と結論づける。

にも拘らず、心臓は恐ろしく早い鼓動を刻んでいた。呼吸は信じられないほど浅く、何度吸つても酸素を取り込めない。

あの少年が『実験場』に入ってくる事を、御坂妹は止めたい。

あの少年が一方通行と激突してしまう事を、御坂妹は阻止したい。

「ミサカは必要な機材と薬品があればボタン一つでいくらでも自動生産できるんです、とミサカは説明します。作り物の体に、借り物の心。単価にして十八万円、在庫にして九千九百六十八も余りあるものの為に『実験』全体を中断するなど——」

だが、いくら御坂妹が言葉を紡いでも少年は止まらない。もうこうなれば強行な手段に出るしかない、と御坂妹は左手を振り上げ、そこから強能力者級（一千万ボルト）の電撃を放とうとして——

ガシツ、と少年の右手にその手を掴まれた。

その途端、左手に集中していたはずの力が、跡形もなく虚空へと消える。

「……うるせえよ」

動揺する御坂妹に、少年はポツリと呟いた。

な、に？ と御坂妹が聞き返すと、上条は御坂妹の胸倉を掴み上げて自分の元へ引き

寄せて

「うるせえんだよ、お前は。そんなもん、関係ねえんだよ。作り物の体とか、借り物の心とか。必要な機材と薬品があればボタン一つでいくらでも自動生産できるとか、単価十八万円とか。そんなもん、知った事じゃねえ！ そんな事はどうだって良いんだよ！」

少年は、烈火のような怒りを、夜空に向かって吼える様に叫んでいた。

それでいて、少年の声は、冷たい雨に打たれたように、痛々しかった。

「もしも……もしも俺が、お前と同じ誰かのクローンだったら、何万體失ったところで補充できる程度の存在だったら、お前は今みたいに止めなかつたのか？」

「——ッ!？」

御坂妹は、なぜか言葉に詰まった。御坂妹はボタン一つでいくらでも自動生産でき

る存在だ。一人欠けたら一人補充して、二万人欠けたら二万人補充すればすむ、たったそれだけの存在な筈だ。

そのはず、なのに

自分に当てはめた論理に矛盾は一つも無いはずなのに、同じ境遇だったとしても、そ

れを他人にまで当てはめる事は出来なかった。

「あ、う……」

「それと同じだよ。くっだらねえ。何が作り物の体だ何が借り物の心だ何がボタン一つでいくらでも自動生産できるだ、ふっざけんじやねえ！ そんな小っせえ事情なんかどうでも良い!!」

少年は、御坂妹の目を、ジッと見つめる。

「例えどんな境遇で生まれようが、例え誰かのクローンだろうが、DNA単位で同じ存在だろうが、そんなもん理由にすらならねえんだよ」

まるでその中にいる、御坂妹と繋がっている九千九百六十九の妹達に呼びかけるように

に
「——お前は、お前達は、ひとりひとりが世界でたった一人しかいないんだよ！ 何だってそんな簡単な事も分つかんねえんだよ！」

血を吐くように叫ぶ少年の言葉は、御坂妹に届いた。

別に少年の言葉が、世界で一番正しい物だと認識した訳ではない。

御坂妹は、やっぱり自分の命なんていくら失っても問題ない、と思っっている。

それでも、そんなちっぽけな存在でも、失いたくないと叫んでくれる人が、確かに存在した。

あの少年が、どれほどの力を持っているかなんて、御坂妹は分からない。

「今からお前を助けてやる。お前は黙ってそこで見てろ」

だが、その生き方は、他の何者よりも『強い』と思う事ができた。

同刻——操車場の隅。一番高く詰まれたコンテナの頂上に、エネはいた。

「うん、御坂妹達の方は何とかかなりそうですね。それにしてもご主人の言霊は何の力も無いのに確実に人の心を、その芯を無意識の内に捉えますねー」

エネは感心したように頷いた。上条がまだ小さい頃から一緒にいるエネは、上条の『強さ』と言うものを、多分、『こつち』でも『むこう』でも、誰よりも良く知っている。恐らく、学園都市最強の能力者である一方通行と普通にぶつかっても、負ける事はまず無いだろう。

そう、『普通に』ぶつかり合ったら——

「さて、ここからが本番ですよ——ご主人」

「——さてと。この辺りで良いか」

上条は周囲の状況を見る。

辺り一面、周囲100メートルにわたって広がるのは砂利と鋼鉄レールの敷き詰められた大地。隠れる場所のない平面に立つのは、上条当麻と一方通行のみ。そこに御坂妹の姿は無かった。

一方通行とぶつかり合った場合、上条はともかく、御坂妹まで巻き込んでしまう可能性がある為、場所を変えたのだ。「サシで勝負したい」という上条の提案を、一方通行は笑いながら受け入れてくれた。ありがたい、と上条は思った。ここで一方通行が提案を受け入れずに襲い掛かってきた場合、まず確実に乱入しようとする御坂妹を気絶させなければならなかっただろうから。

先ほどの場所から三百メートルほど離れた場所に、二人は向かい合って立っている。

お互いの距離は十メートル。全力で駆ければ、三歩か四歩で詰められる程度の距離しかない。

「さてと、久しぶり——かな?」

「あア? なんの話してんだお前」

「あれ? 覚えてない? ガキの頃よく遊んだんだけどな……俺だよ俺。上条当麻」

「だから誰だよ」

まさか、本当に覚えてねーの!? お前まさか記憶を消されたんじゃない! などと慌てている上条を尻目に一方通行は呆れたように

「上条ねエ。で？　どうかしたんですかア。三下」

「三下って………だったら思い出させてやるよ。白夜」

上条は呼吸を止め

全身のバネを縮めるように、わずかに身を低く沈め

「は？　何でオマエがその名を知って——」

「お、——オおおっ！」

「はア!!」

アスリートの選手のような速さで、まるで爆発するように、一方通行目掛けて駆け出す。

一方通行は迫りくる壁に恐怖するように

ダンツ、と。

一方通行は、まるで後ろに飛ぶように、足の裏で強く砂利を蹴った。

ゴツ!!と。

瞬間、一方通行の足元の砂利が、地雷でも踏んだかのように爆発した。四方八方へと飛び散る大量の砂利は、言うならば至近距離で放たれる散弾銃を連想させた。

「………ッ！」

上条が両腕で顔を庇った瞬間、ドン!という鈍い轟音と共に大小10を越す小石が上

条の全身を叩いた。あまりの衝撃に上条の足が地面からふわりと離れる。と思った瞬間、上条の体が勢いよく後ろへと吹き飛ばされた。ゴロゴロと転がる上条は、何メートルも後方へ吹き飛ばされてようやく止まる事ができた。

「……………遅つせエなア」

上条は立ち上がることも忘れてぼんやりと声のした方を見ると

「全つ然、足りてねエ。お前、そんな速度じゃ100年遅せエつつつてんだよオ！」

一方通行が地を踏みつける

その衝撃の向きを変換し、一方通行の足元に寝かされていた鋼鉄のレールが一本、バネに弾かれるように直立した。一方通行は裏拳で目の前のクモの巣でも払うように、直立したレールを殴り飛ばす

まるで聞き分けのない子供を軽く叩くような仕草

にも拘らず、ゴオン!!と教会の鐘のような轟音が操車場に響き渡った。くの字に折れ曲がった鋼鉄のレールが、まるで砲弾のような勢いで上条の元へと一直線に飛んでくる。

「チッ！」

上条は地面を転がり、跳ね飛ばぶようにその場を離れる。直後、ひしゃげた鋼鉄の塊がついさつきまで上条の寝ていた地面に聖剣のように突き立つ。

間一髪避けられた——ように見えるかもしれないが、実際は重要何100キロという鋼の塊が地面に直撃した瞬間に辺りへ大量の砂利を巻き上げた為、上条はその莫大な余波を纏めて食らう事になる。

「がっ………!」

地面を転がる上条へ、一方通行はさらに2発、3発と鋼鉄のレールを飛ばしてきた。宙を舞う鋼の砲弾は、拳銃の弾と同じく人に避けられるものではない。直撃すれば確実に死に、例えぎりぎり避けた所で巻き上げられる大量の砂利が散弾の雨となつて少しずつ着実にダメージを重ねて死へ追い詰める。

そんな中で上条に出来るのは、地面を転がり続ける事だけだった。砲弾が地に突き刺さる事で巻き上げられる砂利の方向を読み、それと同じ方向へ自ら跳ぶことで少しでもダメージを軽減する……それぐらいの事しか出来ない。

「はッ!」

そんな上条に対して、一方通行は笑っていた

「ははッ!あははははッ!!アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

悪魔のような、子供のような、狂気的笑みを、浮かべていた。

*

上条が一方通行とぶつかり始めたのと同時刻、御坂美琴は一人、鉄橋に座り込んでいた。

「……、ばっかみたい」

美琴は一人、暗闇の中で呟いた。

彼女は上条を止めたかった。せめて、上条と一緒に『実験場』へ向かいたかった。

だが、上条はダメだと言った。

上条が見つけた実験を止める方法。の肝は、上条が『一人で』一方通行を倒すこと、だ。その現場に超能力者の美琴がいて、なおかつ上条の味方をする『一方通行を超能力者を含む複数人で倒しただけ』と言う結果しか得られないから

御坂妹を助けたければ、ここは俺に任せてくれ、と少年は言った。

絶対に、御坂妹を連れて帰ってくるから、と少年は約束した。

美琴は少年の消えた鉄橋の先を見た。理屈では分かる。美琴が『実験場』へいったところで何も出来ない。それどころか、少年がようやく手に入れた『解決法』を壊してしまふ可能性すら出てくる。だから、美琴はここで待つべきだ。そんな事は分かっている。理屈の上なら誰でも分かる。

だけど、理屈以外の何かが、理解しにくかった。

美琴は、ギツと奥歯を噛みしめて

「……んな事が、できるとでも思ってたんの、アンタは！」

結局、美琴は上条の後を追っていった。放っておく事など、できるはずがなかった。

*

(……なんだコイツ?)

上条と一方通行が激突してから、およそ三分と少しが経過しようとしていた。今上条と一方通行を取り囲んでいるのは、一方通行の圧倒的な力によってトラップのカードで作ったピラミッドが崩壊するかのよう崩れた、一つ一トンはあるコンテナと、その衝撃によって周囲に巻き上げられた砂煙だ。

いや、これは砂煙ではない。どうやらコンテナの中身は小麦粉か何かだったらしい。霧のように白い粉末の白煙が、うっすらと周囲の視界を奪っている。

「……………」

だが、そんな白く薄いカーテンが取り囲む中においても、上条のその鋭く、射るような視線は、まっすぐに一方通行を射抜いていた。

(なんなんだ、気に入らねえな)

一方通行の脳内を支配するのは、疑問。そして不快感。

一方通行が「格下」の相手からケンカを売られるのは珍しい事ではない。『自分なら一方通行『学園都市最強』を倒せる』とか『一方通行『ベクトル変換』の能力には穴がある』とか、そういう馬鹿な思考を持つてしまった三下の襲撃が、今までだつて数え切れないぐらいあつたし、今日も上条が乱入してきた夕方の実験前に『スキルアウト』の馬鹿共に絡まれている。

そういう馬鹿共は手足の一本でもハジ（叩き折れ）ば、おのれの愚かさを理解し、表情も後悔と恐怖、そして絶望に塗りつぶされるのが落ちだった。例外なく、そうだった。が、今日の前にいる少年には、どれだけダメージを与えても、身の毛もよだつような攻撃をしても、全く効果が見られない。

（……コイツ、自分が最弱だつて事、理解出来てねエのか……?）

一方通行には分からない。なぜ上条がまだ立ち上がつてこれるのか。『最弱』である少年が、なぜ『最強』である自分に立ち向かえるのか。

（いいぜエ。そんなに死にてエなら望み通り愉快な死体オブジエに変えてやんよ）

まるで、わざわざ自らの居場所をアピールするかのように一方通行は

「ふん。どうやらコンテナの中身は小麦粉だつたみてエだが。今日はイイ感じに無風状態だし、こりゃあひよつとすつと危険な状態かもしんねエなア？」

？ と上条は訝しげに相手の出方を窺ったが、そんな暇もなく一方通行は靴の裏で地面を叩く。すると、なぜか一方通行のすぐ傍にあったコンテナの一つが、まるでスーパーボールを地面に叩きつけた時のように宙を跳んだ。

「ゲ」

上条は一方通行が何をしようとしているのかを悟り、体を動かしてこの粉末が覆い尽くす巨大な空間から逃げる。

走って走って、走り続けて。

宙を舞ったコンテナが、別のコンテナに激突する直前、一方通行の声が上条の背中に突き刺さった。

「なあ、オマエ。粉塵爆発って言葉ぐれエ、聞いたことあるよなあ」

直後、あらゆる音が消し飛ばされた。

小麦粉の粉末が撒き散らされた半径三十メートルもの空間そのものが、巨大な爆弾と化したのだ。まるで空気中に気化したガソリンに火がつくように、辺り一面の空間が爆発して炎と熱風を撒き散らす。

その時、上条は小麦粉のカーテンから脱出していた為、大したダメージは負わずにすんだ。強いて言うなら空気中の酸素を燃料にする粉塵爆破の影響で周囲の気圧が下がり、その影響で内臓をぎりぎり絞りに上げられた事ぐらいだろう。

「・・・・・・・・」

上条は炎の海のせいで昼間のように明るくなった操車場で、後ろを、自分が逃げてきたコンテナ置き場を振り返る。

一方通行が歩いてくる。

自ら作り出した紅蓮の煉獄の中を、一方通行は平然と歩いてくる。

「・・・・・・・・おいテメエ。まさかコレを狙ってたんじゃないよなア」

「？」

「チツ。な訳ねエか・・・・・・・・なんだかんだ言つて俺は人間だしよオ、酸素吸つて二酸化炭素吐き出すつっつー定義はそこらの三下と大差ねエンだわ。だから空気中の酸素を根こそぎ奪われちまった場合、かなり苦しい状況になつちまう・・・・・・・・あ——ア。死ぬかと思つた。喜べ、オマエひよつとして世界初じゃねエのか。一方通行を死ぬかもしれねエトコまで追い詰めるだなんてさア」

本当に世間話みたいに、声は歌つた。

「くつくつ。こりゃ核を撃つても大丈夫つてキャツチコピーはアウトかなア？ま、酸素ボンベでも持つてくりや良いんだが。なア、確かヘアスプレーサイズのボンベつて合つたよなア。あれつていくらぐらいするか分つかんねエ？」

「確か千円以上はしなかつたと思うぜ。ダースで購入するんなら少しは安くなんじゃ

ねえの?」

「……丁寧にもオ」

が、それは上条も同じだった。

「……で? 身構えてどうすんの、オマエ?」

ふう、と息を吐き、再び身構えようとする上条に、一方通行は小首をかしげた。

「死に物狂いで努力しても一步も近づけねエ、かと言つて近づいた所でオマエになにができるつてんだ?」

一方通行は業火の中で涼しげに両手を広げ

「俺の体に触れたモノは例外なく『向き』を操られる。それって人の血の『流れ』すら例外じゃねエんだぜ? さつきから馬鹿の一つ覚えみてエに拳ぶん回してるけどよオ。つまりオマエが不用意に俺の体に触れたら最期、お前は全身の血管と内臓を根こそぎ爆破して果てるつて意味なただけだよア。そこントコ正しく理解してたのか?」

「……」

一方通行の解説に、上条は絶望するかのように顔を下に向ける。

「ま、つつつてもそんなに気にする事じゃねエんだぜ。実際、お前は結構頑張ったと思うしな。この一方通行にケンカ売つて、今こうして呼吸してる事そのものが奇跡なんだよ。それ以上を望むつてのは贅沢つてモンじゃねエの?」

この殺し合いの最中、涼しげに笑っている。

「まったく。元のポテンシャルが低いのが幸いたよなア、そんな弱っちインじゃ逆に『反射』が上手く働かねエ。ホント、お前は俺の弱点をついてたんだ。なまじ下手に強い風紀委員やハイテク兵器を持ち出す警備委員だったら、恐らく最初の一撃を『反射』して終わりだからなア」

炎の海の中で、ぱちぱちと一方通行は拍手した。

心の底から、相手を労うような声で

「オマエは頑張ったよ。オマエは本当に頑張った。

——だからイイ加減

楽になれ」

炎の中で、一方通行の体が低く沈む。

業！と炎の海すら蹴散らして、白い少年は砲弾のように上条へ向かって駆け出した。両者の距離は何十メートルとあったのに、そんなものは、ものの2、3歩でゼロまで縮められた。

まるで水面を跳ねる飛び石のような動きで、一方通行は上条の懐へと潜り込む。

右の苦手、左の毒手。

触れただけであらゆる『向き』を交換するその手は、同時にあらゆる生物に死を与え、暗黒の手だ。例えば皮膚に触れただけで毛細血管から血の流れを、体表面から生態電

気の流れを、片っ端から『逆流』させれば人間の心臓はそれだけで内側から弾け飛ぶのだから。

一方通行の両手が合わせられる。

まるで手錠に繋がれたように手首を合わせた両の双拳そうしようが、上条の顔面目掛けて勢い良く突き出される。

魂を握りつぶす両の手が、上条の眼前へと迫り、その時になってようやく顔を上げた上条は

「この時を、待ってたんだ」

空を裂く重たい発砲音が聞こえ、

三日月のように裂けた口で笑い、

その右手で、ぐしやり、と。一方通行の顔面を殴り飛ばした。

「あ、あああ!?!」

「——さて、『準備運動』おーわりっつと」

一方通行が操車場で起こした粉塵爆発の爆炎を見て、駆けつけた御坂美琴、ならびに御坂妹は、口をポカン、と開けてそれを見ていた。

「いぶあ?」

「敗因①自分の持つてる『力』の理解力不足」

「おぶう?!」

「敗因②その『力』の過信」

「かはっ!?!」

「敗因③『力』が失われた、使えなくなった、効果が無い敵に当たった場合の対策……
おーい、聞いてる?」

これは、夢か何かなんだろうかと思ひ、美琴は自分のほっぺを思いつきり抓ってみるが、痛いだけで目が覚める事は無い。

身の毛もよだつような『実験』が行われるはずだった場所で、まるで友達か何かに話し掛けるような口調と気楽さで、上条は一方通行の顔面を右手一本でボコボコにしていた。

「ちつくしよ、何だ? オマエ何なんだよその変な動きは! ウナギじゃねエンだからウネウネウネウネ逃げてンじゃねエ!」

せめて顔面に突き刺さる拳を逆に捕らえてやろうとする一方通行だが、それこそ穴を出入りする蛇のように滑らかな動きをする上条の手はそれを許さない。

ありとあらゆる力の向き（ベクトル）を操る為、触ればそれだけで血液や生態電気の流れを逆流させて人を殺すことができる一方通行を前に、上条はとある修行を想起していた。

『相手から触れられたら即死亡ゲームオーバー』と言う条件の元に行われた修行を。

「ぶばああ?！」

まるでギャグマンガか何かのように上条から、それこそ一方的に顔面をボコボコされている一方通行だが、当の上条本人は『まだ少しも力を使つてはいない』

もつと正確に言う『容赦』はしてないが『手加減』をしている。

(つたく、面倒臭えなあ……)

マルチスキル Level 10 (Error)

—上条と一方通行が激突する数刻前—

「で？ それで何とかなんのかよ」

「ええ。おそらく『コレ』が一番上手く事を収められるでしょうから」

いや分かる。途中までは上条も分かっているし、納得も出来る。

『超能力者の第三位、御坂美琴のクローンを、学園都市最強の能力者である一方通行が二万回殺害すればレベル6に進化シフトする』

樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）によつて導き出されたこの結果が正しいものである事を前提に、この『実験』が行われているならば、無能力者レベル0である上条が超能力者（レベル5）である一方通行を倒せば……つまり、一方通行は学園都市最強の能力者でもなんでもないと、研究者達に思い込ませる事ができれば、実験は止まる。そもその前提が間違っていた。と思い込ませる事ができれば、この殺人劇に幕を下ろすことができる——

と、ここまでは分かるのだが……

「やれやれ……主人も鈍いですねえ」

エネは呆れたような、自慢する時にするようなドヤ（ひじょうにムカつく）顔を浮かべ

「良いですか？ この『作戦』の肝は『無能力者が超能力者を倒す事』つまりは『一方通行が『最強』の能力者などではない事の証明』ですよ？」

「んなこと分かって」

「いや、分かってない。エネはそう言いたそうに首を軽く振って、上条の目の前に立てた二本の指をバツ、と突き出す。

「この『作戦』が失敗してしまうかもしれない要因は二つ。一つ目は一方通行が演技をしていた、と研究者達に思われてしまった場合。いくら一方通行が『最強』の能力者だとしても『手加減をしていた』と思われては意味が無い。だからこそ『本気を出させた上で叩き潰さなくてはいけない』」

一つ目の条件を言うと、エネは立てた指を一つ折り曲げる。

「二つ目はご主人が特別な能力を持つている人間だと研究者達に思われた場合。学園都市の能力判定ではご主人の力は決して量れません。．．．それでも摩訶不思議なチカラを使った場合、ご主人が最強の能力者を破って当たり前の人間だと思われてしまう」

「んな事分かってるよ。だからこそいつも通り力は使わない．．．『枷を着けたまま

にしとけ』ってんだろ？」

上条は、何も無いはずの自分の右腕——その二の腕部分を凝視する。そこには普通の人間には決して見えない腕輪がはめられていた。白銀の月のように光り輝く特別製の枷であるそれは、上条の師匠達が作ったものだ。

修行中は勿論、その枷を外す必要性を、力を使うだけの必要性を見出したとき以外、外さないようにと言われ続けてきた。これがはめられているあいだ、上条は修行で得た様々な術や力を振るう事が出来ず、力や素早さは大幅に下がってしまったという、まさに強すぎる力を持つものがその強大な力を制御する為にはめる枷だった。

勿論、力を使うべき時にはそれを外す。

実際、上条は七月の終わり頃に、神裂火織という聖人に襲撃されているが、その時も身につけていた枷を解き放ち、それを迎撃。返り討ちに行っている。

「ええ。だからこそ、そこに念を押します……具体的に言うなら、一方通行が最強でないことの証明〓ご主人が無能力者だということの証明を持ってそれを成すと言う……ええと、何ていいましたか……『ヘンテコなカラス』？」

とぼけたよう言うエネに上条は呆れて

「それを言うなら『ヘンペルのカラス』だ……対偶論法……「AならばB」を証明するときに、対偶である「BでないならAでない」〓「AならばB」を使うこと、だ

ろ」

つまり、上条は無能力者Ⅱそれに倒された一方通行は最強ではない。と言う対偶論である。

そうそうそれそれ！ と、理解しているのかしていないのかエネは領いて。

「耐久訓練など嫌と言うほど受けましたよね？ 軽いものではないですか」

エネは軽く、簡単に言うが、それはつまり……

「良い事を思いつきました。ご主人、一方通行に五分間ボコボコにされてください」

(確かに一時的とは言え一方的にボコボコにされりやあ(勿論演技なのだが)俺が無能力者だつて事の証明にはなるかもしれないけどさあ……)

上条は何かを哀れむように閉じた目を開いて

「おぶっ！…ごぶあ!! バツ、ブアアあああ!!」

『さつきまでボコボコにしていた奴さいやくから逆にボコボコにされている』つて状況を作るためとは言え……なんんか可哀想になつてきたなあ……)

言いようの無い罪悪感を覚えながら、ボコボコに(しているのは他でもない上条なのだ)されてる一方通行を見た。

一方通行の攻撃をヒラリと蝶のように避けては、蜂のような鋭い一撃を入れる。右手一本、右手一本だ。たったそれだけで、上条は一方通行という最強(さいやく)を

圧倒する。枷をはめられているとかそんな事は関係ない。

何十週も何百週もクリアしたゲームのセーブデータが消えても、プレイヤーの腕は決して衰えないように、上条は力を制限されていても余りある、圧倒的な経験の差で今の状況を作っている。

それは、最早殺し合いはおろか勝負や試合という綺麗なものなどではなかった。圧倒的な力を持つ大人が、か弱い子供を、それこそ一方的にボコボコにしているような、完璧な弱い者いじめだった。

そして、その事実が一方通行には一番良く分かるからこそ、耐えられない。

学園都市で最強というプライドが、現実には揺れてギンギンと音を立てる。ズキズキと。鼻を潰すような未知の痛みが、一方通行の集中をさらに削ぎ落とす。

「クソ。クソオオ！ クソオオオオオオオオオオ!! 何でだ!! 何だって最強の、学園都市の頂点に立っているオレが、オマエみたいな三下に・・・!! お前の能力は何だ!! 一体どんなスゲーエ力を持ってやが——」

上条が小刻みに与えたダメージが蓄積し、一方通行の膝からカクン、と力が抜けた瞬間。

ゴツ!!と。上条の、それまでに無い本気の一撃が、一方通行の顔面に突き刺さった。例えるなら、ゴルフクラブで思いつきボールを打つような一撃。腰の回転を使い重心

を載せた必殺の一撃は、一方通行の体をなぎ倒し、ごろごろと地面の上へと転がした。

「はっ……ハア……!?」

「大した力なんて、持ってねえよ」

一方通行は上半身を起こし、前を見る。そこにゆらりと近づくと近づく上条当麻の姿を確認して――

そして、固まった。上条の顔は、怒りではなく、虚しさと悲しさで染まっていた。

その事に、上条は気づいていない。

「なんか勘違いしてるみたいだから言うけどさ。俺、大した力なんて持ってないぜ？もう数え切れないぐらい『負け』てるし、師匠からは『未熟者』って呼ばれるし、できる事なんてたかが知れてる……もしお前が俺の事を『強い』って感じるならそれはお前が『弱い』からだ」

一方通行は、手だけを使ってズルズルと後ろへと下がる。

「俺の師匠がいつも言ってる。強さの定義の一つは、そいつが一番自慢できる『力』を失った時『他に何が残っているか』だってな」

上条は、ゆっくりと一方通行を追い詰めていく。

「自分の能力が、力が、知恵が通じない相手と戦う時、初めてそいつの真価は試されるって」

そうだ、言ってしまったえば一方通行を含めた学園都市の能力者達の超能力は、一発芸に近しいものだ。一人につき能力は一つ。中には例外もいるかもしれないが、能力という『根本』は変わりようが無い。

ならばその一発芸を封じられたら？

学園都市に何らかの『異変』が起こり、全ての能力者の能力が使えなくなったら？

「お前の『能力』が、他と比べて『ちよつと便利』ってだけだろ。『お前が強い』んじゃない」

そんなもの、強さとは言わない。

最強？無敵？笑わせるな。上条は、そう言いたげな表情の中に、虚しさ悲しさ以外に

「なあ……」

『憐れみ』を加えて、一方通行を見た。

「弱すぎだろ、お前」

まるで、罪を犯してしまった自分の友人を見るかのように、寂しそうに。

嫌だ、と一方通行は首を横に振った。一方通行には『負ける』という事がどんなものか分からない。生まれてこの方、一度も負けたことの無い一方通行には『負ける』という事にたいする耐性が一切ない。当たり前だ、今の今まで『負けるかもしれない』と思

う事すらなかった人間なのだから。

しかし、それでも上条は止まらない。

その前髪が夜風になぶられ、まるで墓場に咲く名もなき花のように揺れていた。

(……風?)

風

「く」

一方通行は笑う。上条は思わず立ち止まった。何か得体の知れない危機を感じ取ったのか、一方通行はそう思ったが気にしない。気づいた所でもう遅い。

「くか」

一方通行の力は、触れたモノの『向き』を変えらるというもの。運動量、熱量、電気量、それがどんな力であるかは問わず、ただ『向き』があるものならば全ての力を自在に操ることができる、ただそれだけの力。上条が言っていたように

「くかき」

「——ツ!?!主人、マズ——!!」

ならば、同様に。この手が、大気に流れる風の『向き』を掴み取れば。

世界中にくまなく流れる、巨大な風の動きその全てを手中に収めることが可能——

——ツ!!

「くかきけこかきくけききこかきくこくけけけきくかくけけこかくけきかこけききくくききかきくこくけくかくかきくこけくけくききききかか——ツ!!」

一方通行は見えない月を掴むように、頭上へ手を伸ばす。

轟!!と音を立てて風の流れが渦を巻く。

一瞬前から目の前の少年は何か焦ったような顔をしていたが、今さら気づいた所でもう遅い。すでに一方通行の頭上には、まるで地球に穴が開いたような巨大な大気の渦が、球形を取って砲弾のように待機している。

バチバチと辺りの砂利が舞い上がり、直径数十メートルに及ぶ巨大な破壊の渦が歓喜の産声を上げる。

一方通行は笑いながら、殺せと叫んだ。世界の大気をまとめあげた破壊の鉄球は風を切り、風速一二〇メートル——自動車すら簡単に舞い上げるほどの烈風の槍と化して、見えざる巨人の手はいとも容易く少年の体を吹き飛ばした。



風が死に、音が死に、大地が死んだ。

一方通行は己が作り上げた惨状を見渡す。操車場の地面を覆っていた砂利は風の塊に舞い上げられ、所々は土の地面が見え隠れしていた。

風速一二〇メートルもの風で吹き飛ばされた少年は、文字通りどこかへ吹き飛ばされてしまったようだが、そんな事は気に留めるような事ではない。砂利の上を転がっているのが自由落下で地面に激突しているようが、コンテナや風力発電のプロペラに激突しているようが、風速一二〇メートルで何かに激突するのは、交通事故で自動車にノーブレーキで撥ね飛ばされるのと大差ない。

生きているかどうかも分からないような虫の息である事はまず間違いない。

「……ふん」

とつさに考え付いた事とはいえ、想像以上の威力だった。

だが、これはまだ未完成だろう。自動的な『反射』と違い、『向き』を自分の意思で変更させる場合は当然『元の向き』と『変更する向き』を考慮しなければならない。

風——大気の流れとは、カオス理論が絡む複雑な計算を必要とする。『樹形図の設計者』でも使わない限り完全な予測など出来ない。

人間一人の頭で、世界中の大気の流れを計算できたとは思えない。今のはせいぜい、学園都市の中の風をそこそこ操った程度だろう。

だが、それにしてもこの威力。もはや絶対能力など必要ない。より完璧に、より正確に風の流れを計算できれば、それこそ世界を滅ぼす事さえ可能な力を手に入れられる。

世界はこの手の中にあつた。

その感動が、一方通行の全身を駆け巡つた。

自分が敗北の縁まで追い詰められたからこそ、その勝利の感覚は、胸が詰まるほど生々しく伝わってきた。

改めて確信する。一方通行を止められるものなど、この世のどこにも存在しない。核爆弾だろうが正体不明の右手だろうが、そんなものはなんの障害にもならない。

「く、——」

一方通行はついに笑い出した。

「何だ何だよ何ですかアそのザマは！ 結局デカい口叩くだけで大した事ねエなア！ おら、もう一発かましてやるからとつとと出てこい三下ア!!」

一方通行は夜空を抱くように両手広げて頭上へ吼える。

「空気を圧縮、圧縮、圧縮ねエ。はん、そうか。イイぜエ、愉快なこと思いついた。おら、立てよ最弱。オマエにやまだまだ付き合ってもらわなきや割に合わねエンだつつの！」

だが、上条は現れない。

無数の鋼鉄のレールが砂利の上へ十字架のように突き立つ景色の中、暴風と狂笑だけが墓地に流れる死風のように吹き抜けていた。

美琴は途中から御坂妹と共に上条の戦いを見ていた。

何度も何度も一方通行との間に割っていこうと考えた。

だが、それは上条の『計画』の失敗を意味している。結局、美琴は今の今まで傷つき、ポロポロになっていく上条の姿を黙って見ている事しかできなかった。

けれど、もう限界だ。これ以上あの少年を一人で戦わせては、本当に死なせてしまう事になる。美琴は御坂妹に吹き飛ばされてしまった上条の搜索を頼むと、その瞬間、一方通行の前へと現れた。

「止まちなさい、一方通行！」

美琴は何十メートルも離れた場所から、その手を突き出した。握り締めた手の親指にはすでにコインが乗せられている。美琴の全身から紫電が溢れる。後は親指を軽く弾くだけで、美琴の異名となった超電磁砲は音速の三倍もの速度で打ち出される事になる。

だが、一方通行は超電磁砲のことなど見向きもしない。

やれるものならやってみろと言わんばかりに、さらに暴風が力を増す。

攻撃すればした分だけダメージは跳ね返る。強力な一撃を浴びせれば浴びせるだけ、その衝撃は舞い戻る。

「……………」

美琴の指が震えた。超電磁砲など返されれば、美琴の体は音速の三倍で粉微塵にされる。超電磁砲と一方通行が戦えば、185手で御坂美琴は惨殺される。冷たい機械が打ち出した決して変える事のできない演算結果が、美琴の心臓へ氷の破片のように突き刺さる。

それでも、美琴は顔を上げる。

敵が勝てる相手だから、誰かを守りたいのではない。誰かを守りたいから、勝てない敵とも戦うのだから。

「……………、ごめん」

美琴は最後に上条に謝った。

上条の計画では『無能力者が超能力者に勝たなければ』研究者を騙す事は出来ない。美琴が手を出してしまった時点で、その計画は必ず失敗してしまう。美琴が手を出さなければ、実験を止められず、美琴が手を出せば上条の計画は失敗してしまう。仮に美琴が犠牲になってこの実験を止めた所で、妹達が普通の生活を送れるようになるとは思え

ない。

それでも、美琴は黙ってみていることなどできなかつた。

「だから、ごめん——」

勝手かもしれないけどさ、と美琴は歌うように謝った。

「——それでも私は、きつとアンタに生きて欲しいんだと思う」

美琴は、決して勝てない敵へと右手を突き出し——そして、

「痛つてて……あの野郎、こんな土壇場であんな大技を……」

上条は一方通行と激突した場所から九〇メートルほど離れた場所、崩れたコンテナの山の中に埋まっていた。

いくら風速一二〇メートルもの強風に浚われたとはいえ、ここまで距離を離すことなど不可能なのだが、上条は巨大な風の手が自分を捉えるその一瞬間、自らの足で地面を蹴つて宙を跳んでいた。

風の流れに逆らわず、あえてその方向へ跳ぶ事でダメージを最小限に抑える。着地場所にコンテナの山があつたのは予想外だが、師匠達によって徹底的に『受身』の練習をさせられている上条にとってはなんの障害にもならない。さて、とつと一方通行の

場所へと戻らなければ——と、吹き飛ばされてきた方向の空を見上げると。

そこには直径二十メートルほどの白色の太陽があった。うっ!?!と、上条は思わず戸惑う。

あれは恐らく、一方通行が風の『向き』を操り、圧縮し、空気中の『原子』を『陽イオン』と『電子』に強引に分解し、作り出した高電離気体だ。

ディーゼルエンジンなどはコレを利用した内燃機関で、あまりの圧縮率で凝縮された町中の空気は、摂氏一万度を超える高熱の塊と化す。

(おいおいどうすんだよこれ!?)

上条はこの時になって初めて真剣に慌て始めた。

妨害する術はある。あるが、それにははめている枷をとき、力を解放しなければならぬ。そんな事をしてはせつかくエネが立てた『作戦』を台無しにしてしまう事になる。エネに頼むのも無理だ。偶然にも何らかの力が働いて高電離気体が消滅しました——なんてあまりにも不自然すぎる現象では研究者たちは納得しないだろう。御坂美琴に頼んで高電離気体を分解させてもらうというのは勿論論外だ。

万事休すか——!?!と、上条が歯噛みして、それでもこの場を切り抜けられないよりはマシだと、枷を外すようエネに脳内で話しかけようとしたところで——
 ザツ、と砂利を踏みしめる足音がした。

「あ」

宿す力は、異能力者レベル2程度。オリジナルの百分の一ほどの実力しかなく、機械によつて生み出された、一体十八万円のちっぽけな命。

だが、それは希望だった。

「——頼みがある」

このふざけた実験を止めるための、最後の希望だった。

ミサカ一〇〇三一号。とある少年からミイ号と呼ばれているその個体は、とある病院の個室でその声を聞いた。

とある少年の完璧とも言える処置と、とあるカエル顔の医者への天才的な治療によつて、数時間前まで生と死の間際をさまよつていた筈のミイ号は、今や普通に歩けるまですぐに回復していた。

しかし当然のよう万全の体調ではない。走ればそれだけで全身が悲鳴を上げるし、安静にしていなければ再び倒れてしまうかもしれない。

だけど、それでもミイ号は自分の体にムチを打つて個室を出る。病院から抜け出す。少年の言葉は理不尽なぐらいまっすぐで、その目はどこまでも最高の結末が待っていることを信じていた。

「.....」

ミイ号も、御坂妹も、他の妹達も、自分の命になんの価値も見出せない。ボタン一つで作り出せる肉の体に、プログラム通りに注入される無の心。単価十八万円の命など、壊れた所でいくらでも替えが利くと本気で信じている。

けれど、嫌だな、とミイ号は思ってしまった。

あの少年は、ミイ号のために一方通行から、あの絶体絶命の状況からミイ号を救い出した。

妹達全員を助ける為に一方通行に戦いを挑んだ。

確かに自分の命には何の価値もないけど、そんなちっぽけなものが失われたぐらいで哀しむ人が出てくるなんて事を知ってしまったら、もう死ぬ事などできなかつた。

そして、例えこのちっぽけな存在でも、誰かの『夢』を守れるのならば、それはとても素晴らしい事だと、そう思うことができたから

やるべき事があつた。守るべきものを見つけた。

『お前にやって欲しい事がある。お前にしか出来ない事がある』
 (その言葉の意味は分かりかねますが)

ミイ号は、ゆっくりとその四肢に力を込め

(何故だか、その言葉はとても響きました、とミイは素直な感想を述べます)

きつと、そういつてくれる誰かがいるから。ミイ号は、まだ立ち上がる事ができた。

美琴が絶望するように頭上を見上げ中、轟！と言う風の唸りと共に、いきなり一方通行の頭上に浮かぶ球体の高電離気体の形が崩れた。

「な・・・？」

美琴と一方通行は思わず頭上を見上げた。あの高電離気体は街中を流れる風を一点に凝縮させることで作り出されたものだ。その風の流れが、一瞬だが確実に揺らいだ。そのせいで空気の圧縮率に誤差が生じて高電離気体が揺らいだのだ。

風の計算を誤ったか、と一方通行は新たに計算式を組みなおす。単純な「反射」と異なり『操作』には『変更前の向き』と『変更後の向き』の両方を計算しなければならぬので面倒臭い。

とはいえ、一方通行はわずか十秒足らずで膨大な計算式を完全に修復する。これくらい、脳を開発された彼には問題にもならない。教育方法に能力開発を取り入れる学園都市にとって、学園都市最強の能力者とはつまり学園都市最高の優等生のことなのだから。

だが。

完璧な頭脳に組み上げられたはずの計算式から逃れるように、街中の風の流れがいきなり動きを変えた。ただの偶然ではなく、まるで風そのものが意思を持って計算式の隙間をかいくぐるように。

頭上で圧縮されていた空気の塊が拡散し、高電離気体が空気に溶けるように消えていく。

（何だア？ 何が起こってんだ！ 俺の計算式に狂いはねエ、大体今のウナギみてエ名不規則な動きはどう考えても自然風じゃねエぞ！）

まさか間が悪く、本物の風使いが街のどこかで力でも使っているのか。いや、不規則な風の流れは街の隅々にまで及んでいる。一方通行の能力と計算式の上を行く処理能力を持つ風使いがいるとすれば、そいつは間違いなく超能力者に認定できる。だが、一方通行の知る七人の中に、そんな能力者は存在しない。

一体何が……、と焦る一方通行はそこでカラカラという乾いた音を聞いた。
風力発電のプロペラが回る音を。

（待、て。聞いた事あんど。たしか発電機のモーターってなア特殊な電磁波を浴びせつと回転するって話が……ッ！）

一方通行は美琴の方を見るが、彼女が能力を使っている様な様子はない。

そもそも町全体の風を制御できるほどの風力発電のプロペラを操れたとして、一方通

行の計算式を確実に乱すような統率性など——『脳内でネットワークでも構成しているような』——

とそこまで考えた一方通行が気づくのが先か、

がさり、と一方通行の背後で何か物音がしたのが先か。

「……」

一方通行は恐る恐る振り返る。

そこに、信じられない光景が広がっていた。風速一二〇メートルもの暴風に吹き飛ばされてどこかへ吹っ飛んでいったはずの少年が、今夜の実験で殺しているはずだったはずの御坂妹が、一方通行の敵として、立っていた。

「……ありがとな、御坂妹。『あれ』は俺じゃあ無理だった。ははっ、情っさけないな。あれだけカッコ付けといて、結局お前らの手を借りちまった」

上条は、御坂妹の頭をポンポンと撫でると、御坂妹は少しだけ顔を赤らめ、くすぐったそうに首を振った。

この状況で、あれだけのダメージを負った（と、一方通行は思っている）後で、こんな気楽な会話をしている少年に、一方通行の喉が、理性が、砂漠のように干上がった。

さて、と。上条は呟いて

「覚悟は、良いな？」

獯猛な獣のような笑みを浮かべて一方通行の元へと歩いていく。

「面白エよ、オマエ——」

一方通行は叫び

「最っ高に面白エぞ!!」

そうして、夜空に吼えるように絶叫した一方通行は、上条当麻を撃破する為に拳を握って駆け出した。

例の、地面を蹴る足の力の『向き』を変換した、砲弾じみた速度であつという間に距離を縮めてくる。ありがたい、と上条は思った。そろそろ決着をつけないと、流石に研究者たちが無事でいられる自分に不信を抱く危険性がある。もしここで一方通行が上条を近づけさせないような攻撃をしてきた場合、かなり厄介なことになっていたかもしれないのだから。

上条は拳を握る、視線を上げる。一方通行は弾丸のような速さでまっすぐに上条当麻の懐へと飛び込んできていた。

右の苦手、左の毒手。

共に触れただけで人を殺す一方通行の両の手が、上条の顔面へと襲いかかる。

瞬間、時間が止まった。

上条は一方通行の左手を右手で、そして——『右手を左手で受け止めて

いた』

一方通行の心臓が凍ったように止まる。今まで上条が自分を殴ってきたのは、いつも右手だった。だからこそ、右手以外の場所は自分の能力を無効化する事は出来ないと考え、まず左手で右手を封じ、次に右手で確実に止めを刺す。

二重の必殺で、確実に上条を人間爆弾のように内側から破裂させてやろうと考えていた。

——が、待っていたのはあまりにも理不尽な力と

「歯を食いしばれよ、最強——」

一方通行を押さえる左手を離し、上条は笑う。

「俺の最弱は、ちつとばつか響くぞ」

あまりにも最っ高すぎる結末だった。

瞬間。上条当麻の左の拳が、一方通行の顔面へと突き刺さった。

即座に右の手を離す。

その華奢な白い体が勢い良く砂利の敷かれた地面へ叩きつけられ、乱暴に手足を投げ出しながら、ゴロゴロと転がっていった。

オンリーワン ID Not Found

ミイ号が目を覚ますと、そこは病室だった。昨日の夜、こつそり抜け出したはずの病院の一室に寝かされていた

。麻酔が効いているせいか、唇の辺りにおかしな感触を感じながらも、ミイ号は目だけを動かして辺りを見渡した。今はどうやら朝方を少し過ぎた頃らしい。ただ弱い冷房の音だけが静寂の病室に響き渡る。当然といえば当然なのだが、着替えも、お見舞いの果物も置かれてはいない。あたりまえだ。自分はクローンなのだから。病室にあるものといえばベッドの横のイスに座っている上条当麻ぐらいだし。

「!?」

「お、目え覚めたか。よかつたあ」

上条は安心したような声を上げる。対称的に、ミイ号は思わず飛び上がりそうになるが、麻酔の効いた体はピクリとも動かなかつた。

そしてさらに、上条はミイ号の手を左手で優しく握っていた。

「すみません、非常にどうでもよく、いえどうでもよくは無いのですがなんと言うかその、なぜいわゆる異性との対人コミュニケーションによる快感を得るための電子遊具に

出てくるような展開になっているのでしょいか、とミサカは冷静かつ分かりやすい例えで質問します」

ミイ号の慌てたような言葉に上条は首を傾げ。

「いや、なんか座ってたらお前が手を握ってきたからさ。払いのけちゃうのも悪いかなー、と思つて手を握ってただけどその分なら問題なさそうだな」

ぱつ、と。それこそ何の気無しにミイ号の手を握っていた手を放してしまう上条に、ミイ号はむっ、とした表情を浮かべる。

あれ、なんかまずったか？と、不安になる上条だが、伝えなければならぬ事があるという事実がそれを打ち消した。

「あ、そうそう『実験』の事だけど」

「一方通行の敗北と共に中止に向かう事が決定したようですねとミサカは把握します」

「いや、その事じゃなく」

「御坂の体はお姉さまの体細胞から作り出されたクローンであり、そこへさらに様々な薬品を投与する事で急速に成長を促した個体であるため、ただでさえ寿命の短い体細胞クローンがさらに短命になっているという件ですね？とミサカは納得します」

「……ああ、だかr」

「そういう訳で学園都市の中や外の研究機関を頼り、急速な成長を促すホルモン balan

スを整え、細胞核の分裂を調整する事である程度の寿命を回復させることになったようですね。とミサカは」

「ええい！ 人の台詞をとるんじゃありません！ お前はあれですか、効率厨ですか!? テレビゲームとかで操作だけ確認してシナリオとかスキップしまっタイプ!？」

ああ、そういうえば御坂妹たちは脳内でネットワーク的なものを繋いで情報とかを共有してるんだっけ。と上条は頭を抱えながらため息をつく。確かに便利だとは思いますが、コレではプライベートも何もあつたものではないだろう。上条とエネも脳内で会話がでるが、それだつて一定の制限を掛け合つてお互いの機密を保護している。今後はそういったネットワーク的な部分も『調整』されると良いなあ。と思いながら上条は立ち上がった。

「んじゃあ俺、そろそろ行くわ。待たせちまつてる奴もいるし」

「……あの、もう行つてしまうのでしょうか、とミサカは」

「大丈夫」上条当麻は振り返らず

「きつとまた会えるさ」

「……そうですか。と言つて、マイ号は目を閉じた。

それが良い。特別な約束や何かを残しては、もう二度と会えないような気分になる。

すぐに会えるならば、本当にそう信じているならば、いつものように何でもない風に

別れた方が『もっともらしい』

物語はここで終わった訳ではない。いつか今日の日が何でもない思い出になるぐらい、これから先も続いていくのだから。

目を閉じた暗闇の中、ドアが閉まる音が聞こえた。薬によつて作られた眠気が襲いかかってくる。それでも、いつの日か再開できるその時を夢見て、ミイ号は笑っていた。

「あ、き、奇遇ね」

上条が病院の敷地を出ると、そこには御坂美琴がいた。その顔には疲労の色が強く現れていたが、それでも彼女は笑っていた。

「ほい、あの子達のお見舞いのついでだけど、アンタにもおすそ分け。それ、デパ地下でなんか高そうなクッキーだったから買ってみたんだけど……ま、そこそこ美味しいんじゃないかしら？ 後で感想聞かせなさいよ、まずかつたら二度とあそこの店は使わない事にするから」

俺は毒見かよ、と上条は思いながら

「でもクッキーというなら手製がベストですな」

「……アンタ、私にどんなキャラ期待してんのよ」

「いやいや。あえて不器用なキャラが不器用なりに頑張ってみたボロボロクッキーって

いうのがね、わっかんねーかなあ？」

「だからナニ期待してんのよアンタは！」

上条と美琴はぎやあぎやあ騒ぎながらいつもの時間を過ごした。いつもの時間にいつもの世界が立っている事が、上条は嬉しかった。

「あ、そうそう。あいつらのこれからの事なんだけど……」

上条は昨日の夜に御坂妹から教えてもらった事を話した。妹達シスターズは自分の体質を治すために他の研究機関の世話になる事、そしていつかまた、また上条の元に戻ってくると約束した事。

「そっか」

美琴は、それだけ言った。

何か大切なモノを見守るように目を細めて、けれどどこか翳りのある瞳を浮かべて。

美琴は、確かに「実験」を止める事ができた。

そして、一万人近い妹達の命を救う事ができた。

しかし、それ以外の妹達の命を救う事はできなかった。

「げんや」

上条は眩くと、美琴は黙って上条の顔を見た。

まるで知らない街に取り残された子供のような瞳を、上条は見ていられなかった。

「お前がDNAマップを提供しなければ、そもそも妹達は生まれてくる事もできなかったんだ。あの『実験』は確かに色々間違ってたけどさ、妹達が生まれてきた事だけは、きつとお前は誇るべきなんだと思う」

美琴はしばらく黙っていた。

やがて、ポツリと泣き出しそうな子供みtainな声で、言った。

「……私のせいで、一万人以上の妹達が殺されちゃったの？」

それでもだよ、と上条は答えた。苦しい事に苦しいと言って、辛い事に辛いと思つて。そんな、誰にでも出来る当たり前の事だつて、生まれてこなければ絶対にできない事なんだから。

「だから、妹達はきつとお前の事を恨んでない。あの『実験』では色々と歪んだ所があつたけど、それでも自分が生まれてきた事だけは、きつとお前に感謝してたと思う」

——かつて、エネや師匠達と出会う前の上条が、例えばどんな不幸にさいなまれようが、どんな困難に立ちほだかられようが、それを父親と母親のせいにはしなかった、所為にしたくなかつたように——

上条の言葉に、美琴は息を呑んだ。

そんな彼女の顔を見て、上条は小さく笑いかける。

「だからお前は笑つて良いんだよ。妹達は絶対に、お前がたった一人で塞ぎ込む事なん

か期待してないから。お前が守りたかった妹達つてのは、自分の痛みを他人に押し付けた満足するような、そんなちっぽけな連中じゃねーんだろ？」

*

「……で、何さつきからふてくされてんだよエネ」

美琴と分かれた後、ようやくといった感じで上条はため息を付いた。

視線の先には、何か面白くなさそうな顔で頬をハムスターみたいに膨らませるエネがいる。

「別に、ふてくされてません」

ずっと前から思っていたが、エネは考え方や頭の回転は凄く大人っぽいのにその容姿や言動、思考回路的な部分で、物凄く子供っぽくなってしまっている気がする。

エネはその足で上条のふくらはぎ辺りをゲシゲシと蹴るが、あまり、というか全然痛くない。なんと言うか本当に構ってほしい子供みたいだった。

「何か言いたい事があるなら言ってほしいんでせうが？」

「特にない……ないですが、その、ずいぶんとあの御坂姉妹達と仲が良くなったものだなと思っただけです」

は？ と聞き取れなかった上条は聞き返すが、エネは、なんでもない！ と、まるで意地になった子供のようになんだ。

少しびっくりしたような上条の顔を見て、エネはかげりのある顔で、ごめん。と謝った。

「その、今回も今回も今回も」主人一人に戦わせてしまっていた事に気づきまして。なんとというか、その、色々と不安になってしまつて……」

少し、恐かつたんです。とエネは告白した。

確かに今回の件は、エネが気づかなければ上条はかわる事すらなかったかもしれないものだ。『実験』をとめるための作戦も、その作戦を成功させるための条件も、エネが考え、提案したものだ。それは間違いない。

だが、一方通行を倒して実験を止める作戦を成功させたのは、他ならぬ上条だ。妹達に言葉を叩きつけ、生きようと思わせる事に成功したのは上条だ。

エネは、それが、それ以外の方法で『実験』を止める術があったのに何もしなかった。上条のサポートすらできなかった。上条が一方通行に負けるなど、欠片ほども思つてはいなかったが、それでも上条を容赦なく戦場に送り出したのに、自分は戦いにおいて何の助力もできなかったという事実が、エネの肩にのしかかってくる。

「はあ？ 何そんなちつぽけなこと気にしてんだお前」

なんでもないように言う上条に、エネは息を呑んだ。

「お前が御坂の不信さに気づいて行動を起こしたから、こんなに早く『実験』を止める事ができたんだろ？むしろ、あいつの驕りや暗さにほとんど気づいてなかった俺の方が責められるだろ普通」

それに上条は知っている。エネ貴音の事情を知っている。

彼女は、否、上条も含め『あちら側』に住んでいるものは『こちら側』では表立って力を使つてはならないという決まりを知っている。禁書目録争奪戦の時でさえ、エネは大した術式を使つてはいないのだ。（上条はエネと共に『首輪』の中に入っていないため、エネがとあるスペルを宣言した事を知らない。自分の力を引き出されたのは分かっていたが）

確かにエネが能力を使えばもっと楽に、上条達だけでなく、一方通行さえも傷つかずに事を収める事ができたかもしれないが、それとこれとは別の問題である。

「お前の事だから『力があるのに何もしなかった』『最良の展開にする力があるのに何も出来なかった』って思つてんのかも知らないけどさ。それが最良の展開、なんかじゃなくたって俺も御坂もミイ号も御坂妹も、それからお前も、ちゃんと帰つてこれたんだから何の問題もないじゃんか。お前があいつらを助けようって言つてくれなかったら、力を貸してくれなかったら『何一つ失う事なく皆で笑つて一緒に帰る』って言う俺の夢は

叶わなかったんだからさ」

一人なんかじゃなかった。エネがいたから戦えた、俺は、俺達は一緒に戦ってた。だからほら、と上条は笑ってエネに手を差し伸べる。

「帰ろうぜ、貴音」

「……ええ！ とエネは上条の手を取って子供のように笑った。

「と、その前に。あいつ俺のこと思い出してるかな……」

『……どうでしょうね』

イヤホン越しに少女の声が聞こえてくる。あまりにも長い時間『お出かけ』していたため、当分出てくることはできなさそうだが。

上条はエネが入ったスマートフォンを片手にある病室を訪れた。ノックをして、中の人が返事をする前に扉を開ける。

「よっす」

「……返事ぐらい待てませんかねエ？」

病室の中では、頭に包帯を巻いた白髪赤目のアルビノ少年が窓際からこちらを睨んでいた。

「よう。白夜、体調はどうだ？ あと、思い出してくれた？」

「——上条、オマエ。ケンカ売ってんのか？ 高く買うぞ」

「いやだなー。上条さんは友情の確認をしに来たんですよ？」

「友情もへつたくれもねーだろ。人の顔面殴り飛ばしておいて」

「あーするしか『実験』を止める手段が無かったからだ」

「……そもそも俺は一人も殺してねーよ。殺したらテメエの馬鹿みてーな拳が飛んでくるんだかなア」

「え？ 殺してねーの？ じゃあ一〇〇三〇人の妹達は？」

「今はこの病院で看護婦をしている。最近オマエに連絡付かなかったからな。そう、上条、オマエ、アレイスターに連絡とって生きている妹達の間も——」

「『必要無い』」

「アア？」

「アレイスターからのメールで『アンダーライン滞空回線アンダーラインで見えていたから対策済みだ』と」

「相変わらずお前の叔父さんは手回しが早いな。……そういや、あいつは？」

「……アイツ？」

「ツインテールのあいつだよ」

「……こつちだよ」

「……？」

白夜は上条の言葉に怪訝そうな顔をしながらも、ついてあるく。

「ほら」

「……コイツは」

「おつ。やっとパーツがそろったね？」

「ゲコ太先生？」

「さあ。その子を助けようか」

ゲコ太先生が言うには、電腦少女を肉体に送り込めさえすれば貴音は目覚めるという。

「……マジ、で!？」

「そうだよ？ それには君のチカラが必要だ。鈴科白夜くん」

「あ？」

「彼女の意識を彼女の脳細胞に送り込むことはできるかい？」

「はっ。要するにお前はこう言いたいわけだ。電子機器の信号を肉体脳波の信号のベクトルに合わせると」

「でき、るのか？」

「俺を誰だと思つてやがる。さつさとあの馬鹿女の意識が入つた端末よこしやがれ」

「お、おう」

培養器の中の液体が流れ、数年ぶりに貴音の体の上条の手が触れる。だが、邪魔だとかさされ病室の隅でいじけ始めた。

「いいのかい？」

「アイツはすぐ立ち直る。コイツさえ起きればな。おい、良いか榎本」

『もちです！』

白夜がエネそのもののベクトルを操り脳波の信号に置き換えていく。

「慌てるな。大丈夫だア、俺はなんて言つたつて学園都市第一位だからア！」

『お、おとおお!!』

数十秒後。貴音の頭から白夜の手が離れる。

「ハアツ・・・ハアツ。やるべき事はやつたぞゲコ太」

「うん。そのようだね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・う、ううん・・・・・・・・・つ、ついに戻つたんですか？」

筋肉や骨格の衰えがあるのか、貴音は上手く体を動かせていない。だが、そこに肉体を取り戻した少女の姿があつた。

「た、かね・・・」

「おはようございませす！」

「さ。邪魔者は退散しようか」

「アア」

御使墮し編

現実世界のパラレルワールド

不幸な少年。こと上条当麻は、海岸にいた。

上条達の住んでいる超能力開発期間『学園都市』は東京西部に存在する。よって、陸に位置する学園都市の住人にとって、海ほど縁の遠いものはないものだ（まあ水産学校などに行くと水族館じみた海水プールなんでももあるのだが）。

そして、学園都市では機密保持と各種作業員による生徒の拉致サンブルの危険性さいしゆなどを考慮して、極力学生を街の外へ出す事を好まない。

許可をもらうには三枚の申請書にサインをして、血液中に極小ナノマシンの機械を注入して、さらには保証人まで用意しなくてはならない、のだが。

（けど、来ちゃったんだよな、海）

上条は自分の右の二の腕をさする。無痛注射針モスキートニードルの痕は、触った程度では分からない。

今回のケースは異例だった。普通は学生が申請書を書いて『外に出してください』と先生にお願いするのだが、上条は過保護な義伯父から『外行つてろバカ』と命令されたのである。

先日的一件。第一位を無能力者が倒したのだ。

夏休みで生徒間の交流も少ないのに、その情報ウツサはあつという間に街中に広まった。それで上条当麻の地位が飛躍的に向上したかというところ、そうではなくて。

そっかー、あの無能力レベルバカをやっつければ学園都市最強の称号がもらえるんだー、という意見の元、腕に覚えがある不良さんが達が大々的な人間狩りサブイブルゲームを始めてしまったのだ（とはいっても異能力者以上の者だけ、武装無能力者スエキルアウトは裏の彼に幾度となく出会っている）、上条当麻には手を出さない）

そんな理由で上条当麻はあきれ顔で海にいた。晴天の夏・ビーチとくれば健全な男子なら何を思い浮かべるであろうか。

無論　ビキニ水着だと思う。だが我らが主人公は観点が人とずれている。

「海か。海つつつたら焼きそば、かき氷、貸し出し用ボート、イ〇娘……」

「……つまりご主人は海の家が好きなんですネ」

こんな風に、もちろんきれいな海にはそれなりに人がいる。もちろん小学生から大人まで、クラゲが大量発生して——なんていうフラグもなく、平和なものである。

そんな中上条は隣に立つ少女。貴音を見る。この間まで画面越しにしか見ることのできなかつたその姿を水着で見るのは新鮮である。綺麗な白い肌（胸はAAだが）。そのかわい顔でナンパの恰好的である。

上条の中でこうやってジロジロと眺める事はイコール『攻撃』という方程式（水着のため夏限定）が建っているのだが、どうしても見てしまう。

「・・・ご主人」

「ん？」

「やはりご主人は私の肢体からだに夢中なんですね」

「おう」

素直に返事しながらも、攻撃が飛んでこない事を上条は幸せに思っていたりする。そんなやりとりが彼等は深い関係なのだということを暗示しているのだろう。

「・・・ご主人？」

「何かね」

「そんなに見られると恥ずかしいですよ・・・」

「いいじゃん。減るもんじゃあるまいし」

「恥ずかしいんですってばっ！」

優しく押すようなその動き普通ならおっと。危ないなく。なんて光景が繰り広げられるのだが、上条の体は数十メートルほど地面を離れて飛び、そのまま水に落ちた。

「・・・たかね。とうまが吹っ飛んだんだよ」

「え?! あ!! ご主人っ！」

色んな人の注目を集めた上条だが、水面から顔を出すと両手を後ろに向け、そこから勢いよく水を撃ちだした。

「とうああくああぬええええ!!」

「ひいひい! 人間魚雷がこつちに来ます!」

「回天の事かな? 大丈夫。あれはどうまだから」

「だからいろいろと問題なんですよう!」

大量の砂を巻きあげて、上条が着弾する。

「お前は力加減を間違えるなッ!」

「ごめんなさい!」

八月二八日、天気超晴れ。

おにいちゃん、という女の子のミルキーボイスで高校生・上条当麻は目が覚めた。

「.....、何だ。今のトリハダボイス」

上条は七割方覚めていた頭を覚醒させながら、身体を起こす。右手からわき出た水球に顔をつっ込み完全に覚醒する。

女の子の声は、ドアの向こうから聞こえてきたみたいだった。

起こした視界には六畳一間の和室。床はボロボロの畳張りで、天井には古めかしい四角い電灯カバーのついた蛍光灯、油っぽい汚れのついた押入れの襖に家のトイレにでも使われていそうな簡単なカギのついた木のドア。エアコン代わりの扇風機はプラスチックのボディが黄色く変色していて、ちよつと鼻を動かすと潮の香りがした。

「あー。そっか。外にいたんだよな・・・」

基本和室のその部屋の、海岸側に取り付けられた唯一の洋風スペース。そのカーテンを開け放ち、上条は外を眺める。少し明るくなつた外に映えるように輝く海が見える。

その空気をこれでもかというほど吸い込むと、上条は窓から飛び降り海岸へ着地する。

「まだ誰もいないな」

「当たり前ですよ。こう言つてはなんです、朝ですし」

上条と同様に二階から飛び降りてきた貴音はニコリと笑う。

「そう言えばさっきの媚声はなんだ？」

「さあ？ ですがご主人・・・空気が何か変です。今回の相手は相当かもしれません・・・」

「！」

「急にバトルものになるな」

真剣なまなざしで今にも死亡フラグを吐きそうな貴音を手刀で黙らせる。

「痛いですご主人!」

まあ最も、こんな事で倒れるように鍛えられているわけではない貴音である。上条も手加減していたのも相まって、かなりの音がしたのに気絶どころかたんこぶ一つできていなかった。

「朝飯にするかー」

貴音の発言を完全に無視し、上条はわだつみに戻っていく。

「あー! 待つて下さい待つて!」

「あーはいはい。待たねえ待たねえ」

「オイ。何があった」

和室の大広間に入った上条の第一声である。

「ん? どうした当麻。何かおかしいか?」

「何がじゃねーよ何がじゃ! . . . ちよつと待つてくれ」

上条の事を不思議そうに見つめてくる少女に右手で触れる。だが、変化は一向に起き

なかった。

「……ん、んー？」

「どうした当麻。母さんがそんなに気になるか？」

「……オイロリコン。屋上へ行こうぜ……久々に……キレちまったぜ……」

「貴音さーん。ちよつと黙ってて下さるかな？」

見た目インデックスの上条詩菜から上条は手を離す。とりあえずこの状況は放置のまま、朝食はすんだ。

海。海岸にパラソルを立てた上条は周りを見る。見事に「上条当麻」と「榎本貴音」以外の恰好がチグハグになっている。いや『上条刀夜』も変わっていない。

「一体全体……何が起きている……？」

なるべくインデックス音髪ピアスを直視しないようにしながら上条は頭を抱えていた。上条の完璧な記憶力という名の辞書から引き出される結論。朝のおにちゃんは御坂美琴乙姫のものだ。

「『異変』……かなあ？」

「……どうでしょうか……。まあこれほど大規模なものですからね……。私達で言う『異変』ですね」

その時、上条のケータイが鳴る。

「おふああ?!」

「ぶつwwちよwwご主人ww何ですか今のww」

「うっせーなー!」

ぶつきらぼうになりながらも電話に出る上条。

「はい? 一体誰・・・」

『上条オ! 何がどうなつてやがんだア!!』

「・・・白夜さん? あーた、なんでこの事件の事知つてんの?」

『しらねエよ! お前どこにいんだ! 学生寮か、ホテルか!? 盛つてンなア!』

「勝手に盛り上がるんじゃねエ! 外だよ外。海の家わだつみ」

『・・・ハア!? 十秒で行く待つてろ』

「・・・ハア!? お前出国審査は・・・」

一方的に通話は切られた。そして、十秒後。上条の目の前に鉄製の円柱が突き刺さる。

「おうわっ!」

「待たせたな」

「スネーク!」

「乗るな、乗るな！　貴音。お前は乗らなくていい！　それと白夜！　お前はいつから桃白白になった！」

「伊達に第一位やってねエ！」

「おおっ！」

「い・ば・る・なアアアアアアア!!」

上条は一息つくと白夜に向かって言った。

「白夜。アレを見てみろ」

「・・・えエエええええええええええ!!!!?」

「そこで鈴科が目にしたものは!!」

「・・・まあ茶番は置いて、コイツを見てくれ、どう思う?」

「・・・ああ」

「・・・凄く・・・大きいです・・・」

「・・・あア?」

「どこを見とんじや我エ!!」

「きゃー!　ご主人が起こつたー!」

「・・・相変わらず・・・か」

上条の股間を凝視していた貴音は全速力で逃げる。そして、上条に追う意思が無いの

が分かると、全速力で戻ってきた。

「・・・で、この状況なんだよ」

「『異変』」

「・・・またお得意の異変かよ・・・。どうするか具体的な策はあるんだろうな？」

パラパラとしか人がいないビーチを見まわしながら白夜は言う。

「それが何もなくてさー」

「あア!？」

「うにゃーっ！ カミやーん、やっと見つけたんだぜーい！」

海岸に響いたその声に上条と貴音は過剰に反応する。

「その声はっ！」

「シスコン軍曹土御門元春!!」

「変なあだ名をつけないでほしいぜい。ツインテール馬鹿」

「なっ！ ツインテールは悪くねエだろ！」

上条の言われているツインテールは誰もが知る髪型のことである。初めこそツインテールはそこまでだった上条だが、榎本貴音がツインテールと言うこともあり、今では万人のツインテールを愛している。（別にツインテールをしている人が好きなのではなく、彼が好きなのはあくまで髪型のみ）

「ふ……フフ……いいだろう！ お前らが納得するようにツインテールの素晴らしさを語ってやろう」

「とうよりカミヤん、一個確認するけど……お前はオレが『土御門元春』に見えてるぜよ？」

「ああ!! 土御門君。まさか君俺のツインテール講義を聞きたくないからと逃げに……」
「となると、いや、まさかにや……」

上条が鬼の形相で土御門を睨むが、土御門は一人でブツブツ言った後。

「ま、いいか。とにかくカミヤん、ここから逃げよう。ここは危ない。何が危ないって、もうすぐ怒りに我を失ったねーちゃんが来襲してくるあたりが激ヤバぜよっ！」

「は？ ねーちゃんが……来襲？ おい、まさかまだ何かあんのかよ」

「いいから隣人の言う事は聞くんだけい！」

「それはこの『異変』の関係あることか？」

「……それだけい！ ねーちゃんはカミヤんが魔術を使って『入れ替わり』を引き起こした犯人だと思ってるんだぜよっ！」

「はあ？ ってゆーかお前姉貴居たの……？」

と、上条が訳が分からず首をかしげた瞬間に、

「見つけました、上条当麻……ッ！」

「……で？ 何？ 土御門君。君もしかして魔術師なの？」

「そーゆー事。俺も『必要悪ネセサリの教会ウス』の一員だつて事だぜい」

あつさり。あまりにもあつさり。土御門は言った。

「なるほどねエ……。それで土御門の身体から異質な力を感じたのか……」

「んにや？ もしかしてカミヤんは気付いていたのかにやー？」

「気づいちゃいなかったよ。そもそも魔術自体半信半疑……。禁書目録に会うまで知らなかったんだから。……でも、ただの人間には放てないオーラっつーか空気が違うのは感じられたぜ？」

「おいちよつと待て。話についていけねエ。何だ？ 魔術つて」

「MP消費して体力回復できる奴ですよ」

「……なるほど」

「改めて問いますが、暴露しても良かったのですか、土御門」

「別に。とつくに上層部には知られるからにやー。知つて泳がされてる状態だぜい。今は掌で踊つて様子見つてトコですたい」

土御門は青いレンズの向こうで目を細めて

「ま、つまりオレが握つてる情報は緊急で口を封じるような価値はないつてこつた。……確かに、虚数学区・五行機関は正体を知った所で手に負えない。悪い

「が仕事とはいえ、いや仕事だからこそ割り切るぞ。ここは一度退くべきだぜい、これ以上は深入りだ。あれだけではアレイスターに対抗する有功打にはなりえない。まったく、学園都市も厄介な闇を抱えてるもんだぜい」

「ん？ 何？ 土御門君キミはあの馬鹿に恨みでもあるのかい？」

「まーありそうですよね……。あんなテンションの人には……」

土御門は上条と貴音のその言葉に眉をひそめて

「オイ待てカミヤん。お前はまさかアレイスターを知っているのか!？」

「知ってるも何も……」

「この間の禁書目録事件の時も窓のないビルの中でお世話になりましたけど?」

「………一体どういう関係だ」

「知り合いだよ知り合い。しいて言うなら友達」

「は?」

時間が止まる土御門と神裂。白夜は全くリアクションを起こす事はなかった。

「ま、こつちの話は置いておくとして」

土御門はあっけなく言い捨てると

「今はそつちをどうにかしようぜい。入れ替わりだよ入れ替わり。カミヤんも何か気付いてんだろ」

「ああ。一応な、まず最初にコイツが何らかの『原因』で起きた『異変』だつて事。それとこの『異変』は世界規模で起きてるつて事ぐらいだな」

あともう一つ厄介なのが地上に……。と上条は言いかけてやめた。言つても分かつてもらえないと思つたからだ。

「実は俺もそこそこですたい。分かつてんのは『入れ替わり』が『本題』じゃない事。この『入れ替わり』は単なる『副作用』にすぎないつて事ぐらいかにやー」

「えー？　じゃあ何？　この異変。まだ何かあるの？」

「土御門、カバラの樹を知らない者に理を解しているのかと問うのは酷です」

「分かつてるぜい。けど、だとすると神裂の仮説は間違つてゐるつてことになるにやーん？」

土御門は笑つて次のセリフを言おうとして

「セフィロトの樹つつー生命の樹の事か？　エデンにある」

「・・・理解してるのか？」

真剣な顔つきになった。

「理解してるつても、そこからへんの人が興味本位でインターネットで調べたぐらいだよ。えーと確か、セフィロトの樹つていうのは・・・身分階級の表だったか？　魂の位を十

段階評価したピラミッド・・・『神様絶対主義』つてやつだ」

「人の数も神の数ももつぱら最初つから決まつてるから、人は人。神は神。つていう考え方でしたっけ」

その後二人が、こつちの地上は天界の事何も理解してねエよな。と領き合っていたのを土御門が聞き逃さなかった。

「ちよつと待てカミヤん。どういう事だ今の言葉。それは全世界の魔術師を敵に回す発言ぜよ」

訂正しろ。という土御門の言葉に上条が

「だってよ。どうあがいても神の位にあがれなかつたつて諦めた奴らが考えた持論だけ？ 一回も神の国に行つたこともなければ主に会つた事もない奴が作つた創造論フィクションを信じてる奴らが神だの何だも言つてもね」

「カミヤん。やめろー！」

「あー分かつたわかつた。んで、エンゼルフォールつてのは一体どんな『魔術』なんだ？」
 「そうですね。現在、世界規模でとある魔術が展開されています。英国図書館の事件簿にも記載されない未知の現象で、詳しい術式・構成も不明。我々は起きた現象の特徴から、便宜的にその魔術を『御使墮し』名付けました」

「たか。」

上条は苛立つように急かすように神裂に先をせかす。

「だから何だよ。セフィロトの樹はどこへ行ったんだよ」

『御使墮し』というものは、文字通り、天の位にいる天使を強制的に人の位へと墮とすもの、元より満杯の盃のごとき人の位の中へ、さらに一滴の雫を注ぐように天使が落ちてきたのですから——と、どうかしたのですか?」

上条はあごに手を当て、いかにも何か考えてますと言った雰囲気です。「それであの……とか、「そもそも俺は?」とか言っていたりした。

「……まあつまりですね。コイツが発動した中心にご主人がいたって話ですよ?」
「ん? ああ。そういう事になるにやー」

「つつうかよオ。魔術だの何だの言ってるが、要するにこいつを発動させた奴がいて、そいつが作った魔法陣があつて、そのどちらかを壊せばいいって事なんでしょう?」

「ええ。そういうことです」

「じゃあご主人。儀式場探しちゃってください!」

「ああ? めんどくせエ」

「そんなこと言わずに〜」

「そもそも、探査だとか搜索だとかそういう類の物はお前の本分だろうが!」

上条達言い争いを始める。いつもの事だったので白夜は気にしないが、土御門は二人の会話から何か情報を聞き出そうとしていた。

「……とにかく！俺は俺の気が向くまで動かねエ！だから土御門君も帰った帰った」
「白夜さんももう大丈夫でしょう？」

「……ああ。何かよくわからねエが。どうせ最後には動くんだろ？なら安心だ」

そう言つて向きを操り飛んで行つた白夜を見送つた貴音は、上条の後を追つてわだつみの方へ歩いて行つた。

「……どうします？ 土御門」

「うむ。今までの経験からカミヤんは動くと思うけど……今回に限つてカミヤん何か怪しいにゃー」

「そうですか……」

魔術世界のヘクスサクペクト

夏の夜は、午後八時になってようやく訪れた。

海の家の一階、丸テーブルを囲むように上条一家はそこにいた。とは言っても、メンツはヘンテコ入れ替わりメンバーではあるが。

このヘンテコなメンツに『上条の友人』として、ごく自然に神裂火織がテーブルに就いていた。もつとも、周りから見ると『むさ苦しい赤髪外国人のヤロウの友達スタイル』『マグヌス』に見えるらしいが。

帰れと言ったのになぜここにいるのか、と上条は思ったが、騒ぎが上条を中心に起きている以上、神裂は上条の身辺警護もしたらしい。

ちなみにこの場に土御門はいない。消波ブロックの陰にでも隠れてフナムシと戯れているかもしれない。世間的には『問題アリの男アイドル』に見えるからだ。人の山に囲まれて身動きが取れなくなるのはプロのスパイたる土御門の望む所ではないらしい。

そんなこんなで、テーブルを囲むのは（表面上は）カタギの人ばかり。とつとつと晩御飯を食べたいのだが、何故か店員さんの姿が見当たらない。

話題もないので、上条は貴音の膝を枕に寝ようとする。

「コラ当麻！ 何羨ましい事しようとしてるんだ！ いくら恋人同士だからと言ってだな！ そんな見せつけるような行為は慎みたまえ」

「うっさい。だったら話題作ってみろよ親父」

「わ、私は構いませんから。大丈夫なので」

「私が構うんだよ！ とうま！」

「……………」

父に従妹にインデックスに……やいやい言われた上条の、堪忍袋の緒が切れたのは明白だった。

ブチイという無理やり紐を引き千切ったような音が部屋に響く。

完全にキレた上条のこめかみの血管が破れ、血が垂れている。

「黙ろうか？ こんな話題にすんじゃねエ。黙ってる」

そう言う上条はこてんと眠った。

——夢の中。というものは現実中存在する。科学や魔術では説明がつかない人体の神秘……。そんな夢の中で自由に動ける人間が持つ夢の事を『明晰夢』という。

『トーマ』

『んあ？ どうした貴音』

『こうして会うのは久しぶりね』

『ああ。〃素〃のお前に会うのもな』

『とりあえず整理しましょう。何でこんな事になったのか』

『簡単だ。誰かが〃異変〃を起こしたんだ』

『そんな簡単な話じゃない。向こうとこっちじゃ勝手が違う。いつも通りH A ☆ N A ☆

S H I ☆ A ☆ I (物理) で何とかできるレベルじゃないわ』

『じゃあなんだつつうんだよ』

『じゃあ質問。どうしてこの異変を起こした奴は、中途半端な状態で固定したの？ 天

使を地上に降ろしたの？』

『は？ だからえーと……。なんでだ？』

『簡単な話。この異変は誰かが人為的に起こしたんじゃない。たまたま偶然に起きただ

けって事』

『ハア!? この世界中に干渉できるほどの大魔術がか?!』

『トーマ、あんたホントに馬鹿になるね……こういう時こそその頭で理解しなさいよ……』

『よく言われるよ！ 発想力が足りないって！ で、結局結論はー！』

『たまには自分の頭で考えればー？』

上条はぐぬぬ。と唸ると、とりあえず情報を整理する事にする。

入れ替わり

本題

副作用

異変

世界が対象

例外は上条

偶然

儀式場

術者

天使

地上の天界論

幻想殺し

魔術

(ダメだ。何か足りない気がする……。こういう時は師匠の言葉を思い出せ！)

『いいか当麻。何事も諦めない事が肝心だ』

(これじゃない)

『気楽に気楽に』

(これでもないこれでもない)

『肩の力を抜い……(だアアア！ 応援とかいらねええええ!!)』

『……当麻。例えお前が直接関わっていないなくても、お前が原因で起きる事件もある。それに責任を持つとは言わないが、分かっているよ』

(……これだア！)

上条は貴音の方を振り返る。

『分かったの?』

『ああ。要するに貴音、お前は「どこかに誰かが無意識に作り出した儀式場が、勝手に発動した」ってコトだろ?』

『簡単に言えばそう言う事ね。それが私が言った「偶然起きた異変」の正体よ』

『うっはー。しかもお前の理論と土御門達の意見を合わせると……。恐らく術者は——』

『……うん……』

『『まず間違いなく上条刀夜だな』よ』

そう言つて二人は結論を出す。

「……あらあら。貴音ちゃん当麻さんを膝に乗つけたまま寝ちゃつたのね。二人とも可愛いわ」

「うらやま……、けしからん！　もっと純粋なお付き合いを当麻にはしてほしかったのに！」

……夕食も終わり。上条は一人、考え事をしていた。

電気は付いているが、上条以外誰もいない。恐らく二階でランプでもやっているのだろう。

点けっ放しのテレビでは夜のニュースをやっている。まあ夜のニュースなんて昼のニュースとほとんど変わりが無いものなので上条は聞き流していた。

「………、うむ」

今日一日で得た『御使墮し』の事を整理してみる。

まず、『御使墮し』という魔術が発動した。

それは莫大な力を持つ『天使』を手に入れるための術式らしい。

副作用として、世界中のみんなの『中身』と『外見』の『入れ替わり』が起こった。

その効果範囲は世界中を覆い尽くすほどのものだった。

『御使墮し』は未完成の仮発動状態で、今なら異変を解決できるかもしれない。

けれど、『御使墮し』が完成してしまっただらもう直せないと考えていい。

『御使墮し』を止めるには、術者を倒すか儀式場を壊せばいいらしい。

歪みの中心は上条当麻にあり、どうも上条は『術者』と間違われているらしい。

そのせいで上条は事情を知る一握りの魔術師達に命を狙われるかもしれない。

よって、上条は『御使墮し』が完成する前に『真犯人』を見つけ出し、術者を倒すなり儀式場の魔法陣を壊すなりしなければならぬ。

「……………、アハハ」

上条は事態を重くは見えていない。かと言って軽く考えているわけでもない。線引きが済んでいないだけだったりする。

——その無防備な少年を、『視線の主』はじつと見ていた。

その『視線の主』は海の家『わだつみ』の床下に隠れていた。海の家というのは砂と湿気の侵入を防ぐため、床下の高さは七〇センチぐらいある。神社や何かの床下を思い浮かべてもらえばいい。

床板と床板の間にできたわずかな隙間穴から、『視線の主』は少年を見た。

「……………エンゼルさま、エンゼルさま。お聞かせください」

不健康なほど痩せぎすの中年男の口から漏れたのは、声変わり前の小学生のような高い声だった。暗闇の中で響く中世的な声色には、どろりとした凶器がまとわりつく。

がりがり、と。わずかに聞こえるのは木の板を釘でひっかくような音。

実際に、その『視線の主』は切羽詰まっていた。彼にしても好きでこんな場所に身を隠しているわけではない。本当は昔の仲間のもとを訪ねるつもりだったのだが、思いの外警察が素早く動いたために身動きが取れなくなってしまったのだ。

「エンゼルさま。どうすれば警察の目を逃れて無事に仲間の元へ辿り着けますか？」

「エンゼルさま。それでは今回もイケニエを捧げれば助けてくれるんですね？」

「エンゼルさま、エンゼルさま。それでは、イケニエはあの少年でどうでしょう？」

刻まれる文字は『YES』の三文字。『視線の主』の顔が曇った。また人を殺すのか、嫌だな。やりたくないな。けど、仕方がないか。エンゼルさまがそう言うんだから。私のせいではないんだし。

「エンゼルさま。それでは、私は今日もエンゼルさまを信じます」

そう言って、『視線の主』は奇妙な形をしたナイフを太く短い舌で舐めた。

『視線の主』脱獄死刑囚・火野神作は床下を走る太い電気ケーブルへとナイフを突き立てた。

ブツンと、いきなり全ての電気が消えた。

停電？ と上条は暗闇の中で眉をひそめた。海の家は入口が大きく開放されているため、月明かりのせいで真つ暗闇というほどでもなかったが。

上条はそのうち目が慣れるだろ、と思つて一息つこうとして、がさり、と。

上条の足の下、床板の底から、木の板を引つ搔くような音が聞こえた。

思わずクセで上条が飛び退いた瞬間、

ガスン!! と、三日月のようなナイフの刃が、足元の床板を貫通して突き出てきた。

「・・・ヒュ〜」

上条が思わず口笛を吹く。偶然とはいえ回避できたことに安堵した。さきほどまで上条の腰があつた辺りから刃物が飛び出している。

（・・・青龍刀）

刃は前後に軽く揺さぶられ、やがて床板の下へとゆっくり沈んでいく。

三日月刃によってわずかに空けられた床板の奥にまるでカギ穴から部屋の奥を覗き込むように。闇のそこから、じつとりと。血走つたような、泥の腐つたような、狂つたような、眼球が。

「おおう」

上条はその目に少し気圧されて数歩下がるその瞬間、後追いするようにナイフの刃が上条の足元すれすれの床板から飛び出した。

（しっけえ!）

ナイフの刃が再び床下に潜り、更なる一撃の狙いを定める。

床板からの攻撃をかわすためテーブルに飛び乗ろうと歩こうとした所で、

床板が大きく爆ぜ割れて、床下から飛び出してきた腕が上条の足首を掴み取った。

「へブツ！」

顔面から床板に落ちた上条は、本気でキレると、自らの影に左手を突っ込みりボルバー式の装飾銃を取り出す。

「舐めてんじゃねエー！」

無慈悲なる発砲音がわだつみに響く。撃たれた銃弾は上条の足首を掴む手に当たると同時に、小さな爆弾のように爆発した。

「ぎ、びいー。ぎがあ!!」

床下からの咆哮と共に、上条の足首を掴んでいた手が床下へと逃げ込んだ。がさがさと床下を移動して距離をとろうとしているのが、床板を擦るような音で感じ取れる。

「逃がすかっ」

上条は装飾銃のストッパーを外しシリンダーから特殊弾を全て抜け落とすと、通常弾を詰め込み素早くストッパーをかけ直した。

時間にして半秒。

何の躊躇もなく上条の左手に握られた装飾銃から数度にわたって銃弾が撃ち出され、

床板を突き破って何か柔らかいものを抉るような、本来人が聞くべきではない音がする。

「・・・・・・・・」

対象の沈黙を理由に上条は少し視線を外し何気なく海岸の方を向き、何かに気付き発砲する。

それは一五〇メートルを真つ直ぐ飛び、金属にぶつかって弾かれた。

「・・・・・・・・やっぱり何かいるか・・・・・・・・」

視線を外していたその瞬間。上条の視界の端で、床板が爆発するように大きく弾け飛んだ。まるで海面を跳ねるイルカのような動きで、黒い影が飛び出してきた。

床の上をごろごろ転がり、起き上がったその影は、痩せぎすの中年男だった。

一目で内臓がボロボロだと分かるような不健康な肌。汗と泥、血と油によって汚れたベージュの作業服。右の手には鉄の爪のような三日月ナイフ。左の手は焼け爛れ骨が見えている。

その唇から赤い血の筋が垂れていた。

「ぎゅっ、ガぁー!!」

手負いの獣は、三日月ナイフを振り上げて上条へ襲いかからんとする。半身の体勢の上条だが、左手は幸いにも相手の方。ナイフが届くよりも先にこちらの銃弾の方が圧倒

的に速い。

「失せろ。体中穴だらけになりたくなけりや、俺の前からとつと消えろ！」

まさに怒号。激しい怒りが今まさに火野神作へと物理的な牙となつて襲いかかろうとしてくる。

今までの上条の行動で、撃つと言つたら撃つ事を悟つたのだろう。火野は一目散にわだつみから出て行つた。

「……ふう。めんどくせエなア……」

上条は半ば棄てるような自然な動作で装飾銃を投げる、とソレは影に吸い込まれていった。

そして彼は影から大型のオートマチックの装飾銃を引つ張りだす。

「……さて？ 誰だお前は」

海岸の砂を踏みしめながら上条は問う。さきほど上条の銃弾をバールで弾いた金髪の少女に。

「彼女はどうかやら敵ではないようです」

「……神裂」

「ロシア成教の『殲滅白書』のメンバーだそうで、名をミーシャークロイツェフと言う

そうです」

「はっ。イギリス清教が『魔女狩り』ならロシア成教は『幽霊狩り』か？」

笑えねエ。と上条は言う。そして上条は依然右手の装飾銃を下ろさないまま目の前の少女に言った。

「まず始めに言つとくぞ。俺は『御使墮し』を起こしてはない」

「問一。それを証明する手段はあるか」

「だったら魔術でも何でもぶつけてみる。俺の右手はそう言った類の物全部一切合財消しちまうんだから」

「・・・問二。一体どういう事か」

少し間を開け、ミーシャは身の内の疑問を表すようにわずかに首を傾げ、再度問うた。「一応、我がイギリス清教必要悪の教会の公式見解ぐらいなら解答できますが」

そう言つて、神裂はミーシャに説明を始めた。上条は魔術知識がなく、『御使墮し』を起こせるとは思えない事。超能力者が魔術を使うと肉体に負荷がかかるはずだが、それが見当たらない事。上条が『御使墮し』の影響を受けないのは、おそらくあらゆるカルトを触れただけで打ち消す事のできる右手『幻想殺し』の作用によるものだという事など。

ミーシャは一つ一つの項目をチェックしていくように、ふんふんと何度も小さく頷いた。それから最後に、じろりと上条の方へ——正確には、彼の右手に視線を向ける。

「どうやら、説明の中にあつた『幻想殺し』というフレーズが引つかかっているらしい。数価。四〇・九・三〇・七。合わせて八六」

ミーシャの背後で海水が水の柱のようにそびえたつ。彼女は水を操れるようだ。

「照応。水よ、蛇となりて剣のように突き刺せMEMテトラメドゥザイン」

続けてミーシャが口を動かすと、水の柱がまるで蛇のように鎌首をもたげた。ヒュドらやヤマタノオロチのように枝分かれした何本もの水の蛇。上条が装飾銃をしまうよりも早く、槍と化した水流が勢いよく襲い掛かった。

海岸の砂を巻き上げながら上条の周囲へ突き刺さる水槍。

そのうちの一本が迷う事なく上条の顔面の真ん中へと向かつてきた。

（今回のこれは幻想殺しの証明……。余計な事はしなくてよし）

上条が右手をかざしてガードすると、水槍は水風船のように弾けて四方へ飛び散った。まるで見えない盾に保護されるかのように、上条には一滴の水も当たらない。

ミーシャは注意深く床に飛び散った水を観察しつつ、

「正当。イギリス清教の見解と今の実験結果には符合するものがある。この解を容疑撤回の証明手段として認める。少年、誤った解のために刃を向けた事をここに謝罪する」

「あ、ああ……。」（今の水槍……。もしかして……。！）

「問三。しかしあなたが犯人でないならば、『御使墮し』は誰が実行したものなのか。騒

動の中心点は確かに確かにここのはずなのだが、犯人に心当たりはあるか」

「それがさっぱりですたい。こつちも今調査中なんだにやー・・・」

「・・・なあ、土御門。お守りつてき、効果あるの？」

「お守り。の定義は分らんが、一つ一つに絶対意味はあるぜよ。それこそ守護の力を持ったお守りだつて存在するぐらいだからにやー。それがどうかしたんだぜい？」

「いや、もしかしたらだけど・・・。儀式場の場所、分かつたかも・・・」

上条が頭を抱えながらそう言うと、神裂が驚いたような顔をする。恐らく土御門も驚いているだろうが顔には出さなかつた。

「問四。一体それはどこか」

「その前に根拠はなんだ？ 脈絡無く話されても信憑性に欠けるぜい」

「神裂なら見たんじゃないか？ 家の父さんのお土産オカルトグッズを」

「ええ・・・確かエジプト土産の。フンコログシでしたね。あれは」

「食卓に何てもん出してんだ馬鹿・・・」

「それがどうしたんだにやー？」

「言つたよな。お土産にも意味がある。だつたらそんなもんがゴロゴロある家は？ そんなもんがあつたらどうなる」

「問五。お土産ならどこの家にもあると思われるが」

「うーん。家の場合は異常だからな・・・何だっけ風水？」

「ええ。部屋の家具の配置などで巨大な魔法陣を組み上げる。れっきとした魔術ですね」

「起きたのか。貴音」

「バツチリです」

「それなら土御門さんの得意分野だぜい！」

「見に行つて見ようぜ。俺の父さんが作り出した偶然ダイアマモンド原石の儀式場を」

上条はそう言うのと、踵を返してわだつみに戻つていく。

「？ 見に行くのではないのですか？」

「カギがねエと入れねエだろ？」

「カギならここにありませんよ？」

貴音が右手で持つカギを確認した上条は片手で器用にスマホを操作する。

上条がスマホをしまおうと同時、土御門の携帯が鳴る。

「・・・？ 地図？」

「家の地図だ。見に行つて来てくれ。素人オレなんかより玄人あんな等が見た方が速いだろ」

「・・・ねーちゃん」

「分かりました」

そう言うと、神裂は土御門を小脇に抱えると、ピョンピョンと飛んで行った。それを見届けた上条は、貴音を連れて部屋に戻った。

戦闘世界のディティクティブ

翌日。

爽快感溢れる夏の早朝。目の下にドス黒いくまを作ってキーボードを叩く上条を見つめて貴音はうつすらと目を覚ました。

「おはようございまふござい主人。あー！ 夜通しパソコンですかー!? ダメですよそんなの。身体に悪いんですからー!」

確かにパソコンのディスプレイが放つブルーライトは目に悪い。夜更かしをすれば体内の器官の調子を狂わせる。

ともかくにもくまができていただけなので上条自身はいたって健康体だ。

休息がてら貴音の膝枕で昼寝しようとする上条。

だが。

何も難敵は御使墮しに限ったものではない。

「おにーちゃんおにーさんおにーさまあんちゃんあにじゃあにきあにぎみあにうえあいうえお! 夜明けの目覚ましフライングボディアタック!! グフツ!」

突然襲来した(心底楽しそうな)美琴の全体重を乗せた重力落下を少女の胸の中心を

蹴りあげ防いだ上条はもう一度寝ようとする。(美琴は腹の上)

「何アンタは一番そーゆーのに引つ掛からない人にやろうとしてるんですか・・・」

「奇抜なプロレス技による目覚まし機能は妹として標準装備なのであります隊長!」

「いい加減にしないとご主人になわとびで縛られて体育倉庫に置き去りにされますよ」

と、そこに騒ぎを聞きつけたインデックス役がドカドカ部屋へやってきて、

「あーっ!　とうまがいかにも楽しそうな朝の演出を!　私も私もとうまにやるやる

!」

「ちよ、な——待ちなさいこの巨漢!　あなたのボディプレスは洒落では済みません

!」

「何で!　何でたかねは私の事だけ仲間外れにするの!?!　私だつてやりたいそれやりた

いって言うか絶対やるつて今決めた!」

跳んで、寝転がる上条にボディプレスをくらわそうとした居候シスターだったが、上

条の危機感知センサーの迅速な行動(脇腹回し蹴り)によつてベッドへ飛ばされた。

「あいたあ!　とーま!!」

「わりい。しつこくやってくるから強気で行くこうと思つたらお前だつたわ。ゴメン」

「流石ですご主人・・・。綺麗な身のこなし!」

「・・・さて?　朝つばらから人にボディプレスとかいう奇怪な技をかけようとし

た償いを受ける準備はオーケー？ さあ、現実^{リアル}筋肉バスター見せてやるよ!!」
そんなこんなで『二日目』もドタバタでスタート。

お昼前。上条達の客室に神裂土御門ミーシャの三人が集う。

「・・・で？ どうだったよ」

「まず間違いないぜい・・・と言いたところだが、残念。見れてないんだぜい」

「は？ なんで」

「アレを見てみろ」

土御門が指したテレビを見る上条。そこには火野神作が立て籠もったという民家の上空写真が報道されていた――。

「――つて家じゃねエカツ!!」

「そーゆー事だぜい。街中で見つかったあいつが忍び込み、ただいま包囲網が敷かれてるんだにやー。迂闊に手出しができない状況ですたい」

「まったく・・・やっこさん。ホント面倒なことしてくれましたね・・・。こっちは適当な事できないってのに・・・」

「エネつちの言うとおり。こっちは一刻一秒を争う可能性があるんだ。カミヤん。ここから二〇分はかかるぜよ？ 早急な判断が必要だぜい」

「お前らはピョンピョン跳べるか？」

貴音と一緒に首をかしげる上条に土御門は頭に疑問符を浮かべて。

「ピョンピョン？」

「神裂はできるだろ。確か聖人なんだろう？」

「ピョンピョンつてまさか」

「御名答でしょうね。屋根の上を伝つて最短距離を走ります」

「にゃー。あいつらバケもんだぜい！」

土御門が神裂に抱えられながら言った言葉である。ミーシャは神裂の後を走るようにして着いてきている。

「ええ。あの身体能力は長年の積み重ねのようですね」

土御門を小脇に抱えた神裂は最小限の蹴りで跳躍するように屋根から屋根へ渡っている。それでも上条と貴音には追い付けていなかった。

上条と貴音はまるでそこは舗装された競技場の上ですと言わんばかりのトップスピードで屋根の上を疾走している。時たま在三、四階建の建物は跳躍をしノンブレイキで越えて行く。

とっさの事なのに数歩で歩数を合わせて最適な手順で最短距離を抜ける。並の人間

ができる芸当ではなかった。

暫く、圧倒的に車より速いスピードで包囲網の外ギリギリまで到着した上条と貴音は路地裏に降りた。

遅れて他の三人も到着する。

「しかし、半径六〇〇メートルの大包囲網とは、また大袈裟ですね。警官隊で維持できないような規模なら、半径をもっと縮めれば良いのに。何故そんな無理を通すのでしょうか？」

対して上条の答えは明白だった。あまりにも冷静にあたりまえのことのように言った。

「発砲許可が下りてんだろ。民間人に流れ弾が当たらないように気を配ってんだよ」

「もつとも情報規制もされてます。まあ脳漿炸裂の映像なんか撮られたら政治家さんは困っちゃいますからねー」

「………あんたら本当に何者ぜよ」

さて、と上条は言った。

「家まで行きますか」

「おい。カミヤんどこへ行く気だ。そっちは大通り……」

「どこって、家だよ」

「包囲網だぞ!? どうやって行く気だ!」

「普通に行けばいいだろ」

上条は本当に軽く言つてのけた。警察の包囲網のテープに普通に歩いて行く上条と貴音。邪魔なテープをスルリとくぐつたのに誰も気づかない。それどころか上条と貴音はグングン包囲網の中を歩いて行く。まるで、そこにあるのが当たり前前の空気のように。

「・・・カミヤん・・・。お前は何者ぜよ」

「グズグズしている暇はありません。行きますよ土御門」

そう言つて土御門達は民家の間のコンクリート塀の上を走りだした。

土御門は民家から民家へ移動しながらさも当然のように、いや、誰にも見つからずに、そもそも誰もいないように見せながら包囲網の中を進むあの二人の事を考えていた。

（カミヤん・・・。高校に入つてからの付き合いだか・・・お前は一体何者ぜよ・・・。！）

有害世界のエンゼルフオール

空動という移動方があった。これはステルスなんて次元などでは無い。目の前にいるのに決して相手に見つからず、不変無き空気のように当たり前にそこにいる。

それが上条と貴音が生み出した究極の移動方だった。師匠達から習った数多の歩術。その全てを応用し、自らの気配全てを空気に変える歩術を会得していた。

その力は、上条達の師匠達すら誰にも気取られず半殺しにできるほどだ。

「……ついたな」

「……案外早かったですね」

それじゃあ、と。上条達は一瞬で家の中に入っていた。隙間風が家のスキマから中に吹き込むように自然に。これも風動という移動方だ。音を立てず迅速に行動する、空動を速くしたものだ。

「……さア。Show timeだ」

数分後、上条当麻の実家から出てきた火野神作が捕らえられた。捕らえられた火野はうわ言のように家を指さしながら、「悪魔だ……悪魔がいる……」と言っていたそう

だ。

「さて、土御門君。警官隊が慌ただしくしている間に何とかしちやおうぜ」
「任せとくぜい」

そう土御門が言ったのを見届けると、上条と貴音は邪魔にならないように外で待機をする。

「・・・カミヤん。すごいぜいコイツは」

「凄いつて？」

「いやーまさに鉋石ですたい。それも粗削りだが完璧な。壊すのが勿体ない位にやー」

「いや、壊せよ？　つてか壊せるの？」

「・・・まあ。大丈夫だと思うが」

その時、ひよっこりとミーシャが顔を出して言った。

「問一。この儀式場を造ったのは誰か」

「そりや大工さんとかじゃねエの？」

「ご主人。違いますよ・・・術者の話をしているんです」

「・・・入れ替わってないのは誰か・・・だよな？　・・・俺の父親だよ」

「カミヤん。それマジかにやー?」

「自分の父親見間違うか?」

嘲笑気味に言う上条に土御門は唾然とした。

「自分の父親の事だろう! 何故そんなにあっけらかんとしていられる!」

「さてね、それはアイツを聞いたから・・・?」

上条がふとミーシャの方を見ると、少女は冷たく息を吐いて。

「解答一、自己解答。標的を特定完了、残るは解の証明のみ。……私見一、とてもつまらない解だった」

言うや否や、少女は全速力でどこかへ掛け出していた。

「あ、おいちよ!」

上条はミーシャを呼びとめようとするが無駄だった。少女の姿は既に見えない。と言っても徒歩なのでそう遠くへは行っていないはずだが。

「カミヤん。ねーちゃんと海の家に戻れ。ここは俺に任せとくんだけい」

「……神裂。悪い、おいて行くかも」

「……構いません。急いで」

「貴音」

「はいな!」

上条の背中に両手を置いた少女の姿が異形に歪む。少女の姿が上条の背中に生える大きな六枚の半透明の翼になった。

「よつとー!」

軽い掛け声で地面を蹴った上条の身体は、まるで電磁加速したりニアモーターカーのように一瞬で遠くに消えた。

「・・・それでは、土御門。よろしくお願いします」

「任せておいて欲しいぜい! ・・・カミヤンまるで天使ぜよ!」

それは一つの弾丸だった。

ほんの数秒でわだつみまで戻ってきた上条は文字通り着弾した。砂浜を抉り、海面を割り、上条の身体は着地した。

「エネ」

「はいな」

大きな翼となっていたエネが貴音に戻る。

「ご主人」

「ん・・・ああ」

上条刀夜は夕暮れ染まる浜辺を歩いていった。

その顔には疲れが見えている。体中もびっしりだった。きつと突然消えた上条を捜すためにそこら中を走り回ったんだろう。くたくたになりながらも、それでも足を止める事を許さずに、刀夜は疲労のたまった足を引きずるように浜辺を歩いていった。

それは魔術師何かに見えない。もちろん戦闘のプロには到底見えない。

「父さん？ どうしたんだよ。そんなにやつれて」

心底疲れ切ったような刀夜の顔は、振り返った瞬間。安心したような、嬉しそうな、そんな表情に変わった。

それはもちろん。何も知らない一般人の顔だった。

迷子になった子どもをやつと見つける事が出来た父親の、優しい顔でしかなかった。

「当麻!!」

上条刀夜は、たつぷり五秒かけてから、ようやく怒りの表情を作った。

「今までどこに行つていたんだ！ 出かけるなら出かけると私達に言わないか！ 母さんだつて心配しているんだぞ、大体お前は夏バテだから海の家で休んでいると言つていたじゃないか、もう大丈夫なのか、どこか痛んだり吐き気がしたりはしてないだろうか？」

だが、怒りの言葉など一秒も待たない間に上条を労わる言葉に変わっていく。

当たり前だ。

刀夜は、上条の事が嫌いだから怒っている訳ではない。父親は、子どもの事が心配だから叱っているのだから。

だが、その子供である上条は残酷な答えを向けた。

「いっぺんに質問するな。答えにくいから。捲し立てたって望んだ答えは返って来ないぜ？」

冷めた目で、まるで赤の他人を見るような目で見るという行為によって。

「えーと最初が何だっけ？ どこに行つてたか、だっけ。実家だよ実家。家を見に行つてたの。何てつたつて幼児園以来だろ？ 見てみたくてな」

「……そうか」

「ちなみに置手紙しといたんだけど……？ 読んでらっしゃらない？」

「……ああ。すまん」

「そっか。伝わって無かったかー。余計な心配かけちゃったな。夏バテはもう大丈夫だ。しかしゴミとか結構落ちてんだなこっちは塵一つないってのに」

上条のその発言に刀夜は「流石学園都市。外の世界に出てくるとそんな感想を抱くか」と全く別方向の感想を抱いていた。

「でもさ。頼むから魔法使いの真似事だけは止めてくれよ。な？」

その言葉を聞いた途端。糸が切れたように、刀夜の表情が消えた。

それは魔術師として身の危険を感じた表情ではない。実の息子にやましい所を見られた父親のような、そんな顔だった。

「・・・そうか、バレてしまったか。さて、何から話そうか・・・」

「何からでもいいぜ。黙って聞いておくから」

カンに障ったら口出しさせてもらうからな。と付け加えた上条に刀夜は少し苦笑する。

「あんな方法で願いを叶えようとは・・・馬鹿な事だとは、私自身も思っていたのだがな」

そして刀夜は言った。

「なあ、当麻。お前は幼稚園を卒園するとすぐに学園都市に送られてしまったから覚えていないかもしれないが」刀夜は、何かを思い出すように、「お前がこちらにいた頃、周りの人達からお前が何と呼ばれていたか、覚えているかい？」

「・・・疫病神、だろ？」

刀夜は己の舌を噛み切るような表情になった。

実の息子に、その言葉を告げられなければならなかった事を、死ぬほど後悔したような顔で。

「・・・分かるかい、当麻。お前は確かに生まれ持ち『不幸』な人間だった。だからそんな呼び方をされたんだらう。だが分かるかい、当麻。それは何も子供達の悪意ないイタズラだけではなかったんだ」

刀夜は歯を食いしばり

「大の大人までもが、そんな名でお前を呼んだんだ。理由などない。原因などない。お前は、ただ『不幸』だからというだけで、そんな名で呼ばれていたんだ」

上条は苦虫を噛み潰したような顔をする。

刀夜から表情が消える。

楽しいわけでも、嬉しいわけでもなく。ただ、何も無い。

「当麻が側にやってくると周りまで『不幸』になる。そんな俗話を信じて、子どもたちはお前の顔を見るだけで石を投げた。大人達もそれを止めなかった。当麻の体にできた傷を見ても、悲しむどころか逆に嘲笑った。何でもっとひどい傷を負わせないのかと、急ぎ立てるように」

上条は、無表情に言葉を紡ぐ刀夜の感情を読む事はしない。

その仮面の裏に隠れる、押し殺す事も出来ないほどの渦巻く激情。それだけは、決して我が子には見せたくないという、気持ちの表れだと思う。だからこそ上条は裏を見る事はしなかった。

「当麻が側から離れると、『不幸』もあつちに行く。そんな俗話を信じて、子供達はお前を遠ざけた。その話は大人までもが信じた。覚えているかい、当麻。お前は一度、借金を抱えた男に追いかけて回されて包丁で刺された事もある。話を聞きつけたテレビ局の人間が、霊能番組とかこつけて、誰の許可も取らずにお前の顔をカメラに映して化け物のように取り扱った事もあるんだぞ」

オレンジ色に染まる世界は、地獄で燃える豪炎に似ていた。

炎の中で、一人の男はただ凍えるような表情でいる事しかできなかった。

「私がお前を学園都市へ送ったのもそれが理由だ。恐かったんだよ。『幸運』だの『不幸』だの、じゃない。そんなものを信じる人間が、さも当然のようにお前の暴力を振るう現実が」

刀夜は顔色一つ変えずに慟哭して、

「恐かったんだ。あの迷信が、いつか本当に当麻を殺してしまいそうで、だからこそ、そんな迷信のない世界にお前を送りたかった」

だからこそ、刀夜は家族の絆さえ断ち切った。

たとえば家族と一緒にいられなくても、それでも我が子を守りたかったから。

「しかし、あの科学の最先端でさえ、お前はやはり『不幸な人間』として扱われてきた。お前から届いた手紙を読むだけで分かったよ、以前のような陰湿な暴力はなかったよう

だが」

刀夜は笑みを浮かべたまま、

「私はそれでは満足できなかった。お前の『不幸』そのものを打ち殺したかった。だが、常識的にも、科学の最先端手法を用いても、それは叶わぬ願いだった」

それでも、たとえ叶わぬ願いと分かっている。

上条刀夜は、決して諦めたくはなかったから。

「残された道は一つしかない。私はオカルトに手を染める事にした」

上条刀夜は、そこで言葉を断ち切った。

そして上条は口を開いた。

「言いたい事はそれだけかバカ親父」

刀夜が驚いたような顔をする。だが上条は止まらない。

「ああ、確かに俺は不幸さ」

上条は冷たい声で言った

「これまで生きてきた中で何度怪我をしたかも分からない。それこそ五体満足じゃなくなった時もあったさ。そりゃクラスメイトを一行に並べて比べてみりゃ、こんな不幸な人生を送ってるのは俺だけだろうさ」

けどな、と上条は続けて。

「俺がたった一度でも、後悔してるなんて言ったか？　こんな『不幸』な人生は送りたくなかったなんて言ったかよ！　冗談じゃねエ、確かに俺の人生は『不幸』の連続だ。だから？　それが何だっつてんだ！　その程度で、この俺が後悔するとも思っただのか!?」

そうだ。

学園都市に入った初日。初めて会った魔術師達マジックに追われていた男の甥ニヤスになったのは上条当麻だ。

それと。

裏で暗躍する間に無能力者に崇められ、信仰までされるようになったもの、上条当麻だ。

それに。

学園都市が見捨てかけた少年の側にいて救ったのも、上条当麻だ。

そして。

禁書目録となり追われる身となった少女を救い、その追手の二人と和解させたのも、上条当麻だ。

例えそれが誰かに巻き込まれたものでも、きつかけはほんの偶然が重なった『不幸』によるものだったとしても、その一点だけは誇るべきだ。もしこの右手が無かったらと思

うと上条は恐怖する。もし上条が『幸運』にもこれらの事件に巻き込まれなかった時の事を考えると。

「確かに俺が『不幸』じゃなければ、もつと平穏な世界に生きていられたと思う。あんた達の前で厄病神なんて呼ばれる事もなかったはずだ」

上条は、自分の父親を睨みつけて、

「けど、そんなもんが『幸運』なのか？ 自分がのうのうと暮らしている陰で別の誰かが苦しんで、助けを求めて、そんな事も気づかず！ ただふらふらと生きている事のことか『幸運』だっていうんだ!?!」

刀夜は、驚いたように上条を見た。

上条は言う。

「惨めつたらしい『幸運』なんざ押し付けんじゃねエ！ こんなにも素晴らしい『不幸』を俺から奪うな！ この道は、俺が歩く。これまで通でもこれ去からも、決して後悔未しないために！」

だから邪魔をするな。

『幸運』なんて欲しくない。すぐ側でみんなが苦しんでる事にも気付けずに、ただ一人のうのうと生き続けるぐらいなら、『不幸』に苦しむ人々にいくらでも巻き込まれてやる。

だからこそ、上条は言う。

「『不幸』だなんて見下してんじゃねえ！俺は今、世界で一番『幸せ』なんだ！」
おそらく笑みを浮かべて。

獯猛で、野蛮で、荒々しく、上品さの欠片もない、

けれど、確かに最高に最強な笑みを浮かべて、上条当麻は宣言した。

「――、」

刀夜は、

上条刀夜は、言葉も出ない。

オレンジ色に染まる世界で、ただ波の音を聞きながら、刀夜は笑っていた。笑って、笑って、笑って笑って笑って薄く引き延ばしたように笑って。

はっ、――と。

その時、初めて本当に、上条刀夜は小さく笑っていた。

「何だ、お前」

気の抜けたような声で

「最初から、幸せだったのか。当麻」

いや、と上条は句切って。

「もちろん最初から『幸せ』な訳ないだろ。そもそも最初から幸せな奴なんてどこにいる。『幸せ』の価値なんて人それぞれ違うんだ。俺はもちろん一人じゃ潰れていたさ。」

あつという間に、自分の不幸に巻き込まれる人を想つて。だけどな、今の俺には『幸せ』をくれる、『不幸』を分け合える相棒がいる。もう俺は『不幸』じゃない」

刀夜は、何か大きな荷が下りたという表情を浮かべて、

「馬鹿だな、私は。それじゃまったく逆効果だ。私はみすみす、自分の子供から幸せを奪おうとしていたのか」

安堵から来る自嘲だった。

「といつても、何ができた訳でもないがな。まったく、私も馬鹿だ。あんな『おみやげ』を収集した程度で何かが変わるはずもないって、オカルトなんぞになんの力もないって、分かつていたはずなのに」

「……」

上条は憐みの眼で刀夜を見る。

刀夜は、そんな息子の様子に気付かない。

「大体、みやげ屋に置いてある家内安全やら学業成就やらといった民芸品お守りを買い漁った程度で治る『不幸』なら、お前が誇るはずもない。もう出張先から変なみやげを買って帰るのはやめにするよ。菓子の方がまだ母さんも喜ぶ」

「そうだな。そうしろよ」

上条はそう言った後、続けた。

「でもな、お守りにもちゃんとお効果はあるんだぜ？　じゃないとそうやって売る意味がないからな。特別な場所で買ったきちんとしたものなら、しっかりと願いを叶えてくれる。といつても小さな願いだけだな」

「そうか……。よく知っているな。当麻」

「ああ」

上条の耳に届いた砂を踏む音。

ゆつくりと近づいてくるソレからヒシヒシと伝わる殺気。本気で殺す気で放たれているものだが、上条は動じない。

「ミーシャークロイツェフ」

顔を上げた上条はスゲエ……。とつぶやいた。

無言のままに上条の顔を睨み、邪魔をしたら殺すと暗に言っている。

殺意。

純粋なソレだけで形作られた見えない何かが上条を襲うが上条はサラリと受け流す。

「人間にできる目じゃねえよ、それ。何だよお前人形か？」

ミーシャの眼。硝子や水晶の珠にしか見えない二つの眼球を指して、上条は言う。

冷徹な目。否、感情などとうの昔に捨てたようなそんな目で睨まれて、上条は少し汗が出る。

(うつわー。コイツはちよつとヤバいかも……)

突然、あらゆる方向から神裂の怒鳴り声が飛んできた。

「そこから離れなさい、上条当麻!!」

風を切り裂く高音が続いて、見えない斬撃が砂を走り上条とミーシャの間を一閃した。横一線に巻き上げられた地面が砂の壁を作り出す。今まさに釘抜きを構えようとしていたミーシャの気が一瞬それで、その間に神裂が間に割って入った。

と、殺気立つ神裂の隣には、いつ戻ったのか土御門も立っている。

「ご苦労さん、カミヤん。アンタは本当によくやった。ケリは着けたんだろ。だったら下がりな、後はオレらパトルの仕事だぜい」

どんな手法を使ったか知らないが、案外近くで見っていたのか。

「……まさかとは思うけど……ミーシャが?」

「カミヤん流石鋭いぜい。そう、この魔術は御使墮しと呼ばれている。つまりアレは……」

「必然的に……天使ってワケか!」

瞬間、ミーシャの両目がカッと見開いた。

血を揺るがす轟音と共に、

オレンジに染まる夕空が、一瞬で星空の散らばる夜空へと切り替わった。

「うわ……」

上条は思わず頭上を見上げた。刀夜の息が凍る。

夜。まるで電灯のスイッチを切ったように、いきなり夕暮れが夜へ切り替わった。頭上には禍々しいほど巨大な蒼い満月。だが、おかしい。今の月齢では、月は半月のはずだ。

「オイオイオイ。天体制御?! マジか……」

今、この地球の生命をミーシャが握っている事になる。それだけ天体制御は恐ろしいものだ。

「自身の属性強化のための『夜』ですか。月を主軸と置く所を見ると……ああ、なるほど。水の象徴にして青を司り、月の守護者にして後方を加護する者。旧約においては墮落都市ゴモラを火の矢の雨で焼き払い、新約においては聖母に神の子の受胎を告知した者」

貴音のその解説を聞きながら上条は素直に感心する。初めは神なんて、と馬鹿にしてたクセに、今ではその知識が頭を埋め尽くしている少女に苦笑すらもしてしまふ。

「——その名は『神の力』。常に神の左手に侍る双翼の大天使、ですか」

神上の伴侶の者の声に、神に仕える者は答えない。

まるで見えない殻を砕くように、見えない皮を脱ぐように。

そうして。ソレは覚醒した。

天使は特に動かない。

神裂は上条や刀夜の盾になる位置に立ち塞がりつつ、腰の刀へと手を伸ばす。

「エンゼルとは善悪なき力。神の意志に従い人を救えば天の使いと崇められ、地に墮ちて泥に染まれば悪魔と恐れられる」

神裂は忌々しそうに、

「まるで旧約の神話そのままですね。そうまでして元の位階に戻りたいのですか、『神の力』」

上条は一回舌打ちをすると

「神裂！ そいつを任せられるか!?!」

「?」 上条当麻。その意図は「

「そいつを止めるのに、術者を倒すか儀式場を壊す必要があるんだろ!?! だったら俺が何とかしてみよう。神裂は足止めを頼めるか!?!」

「分かりました。やってみます」

「信じてるからな！ 行くぞ父さん」

上条は刀夜の背中を押しながら、わだつみの方へ向って走る。

「当麻。ちよつと待ってくれ、あれはなんだ。何かの撮影か!」

走りながら聞いてくる刀夜に上条は簡潔に言った。

「あんたが買って帰った民芸品で起きた事態だよ! とにかく。コイツを止めなきやいけないんだ!!」

単一世界のラストウィザード

海の家に戻ってきた上条は緊迫した顔をやめようとしなない。

『神の力』も、それが放つ『一掃』も、その気になれば世界のどこへ逃げたつて一瞬で上条達を殺す事ができる。あれは、それぐらいかけ離れた相手なのだ。事情を良く呑み込めてない刀夜は、肩で荒い息をしながら、

「と、当麻！ 少し待ってくれ、休ませてくれないか。あれは何なんだ、今ここでは何が起きている？ 一緒にいた男はテレビで見た事があるような気もするし、これは映画か何かの撮影なのか？」

「質問は一個にしろよ。いいぜ、休憩ついでに教えてやる。あれは天使だよ。天の使いと書いて天使。今ここと言うか全世界で御使墮しつていうオカルトがアンタが買ってきたお土産で作られた回路によつて発動したんだ。ちなみにこれは撮影なんかじゃない。科学とは全く別の異能の力さ」

その時、ふと上条の視界におかしなものが映った。床に置かれた丸いテーブルの陰に隠れるように、誰かがうつ伏せに倒れている。

御坂美琴だった。

「な……おい。ちよつと待て、大丈夫か？ 何があつた!？」

上条は思わず走り寄って声をかけたが、反応が無い。

一瞬、『一掃』の可能性を考えたが、鼻につく、微かな異臭——と、その正体に気付いて上条はその可能性を捨てる。

CHC13。クロロホルムだ。

「く……あ……」

別に吸い込んでも平気だが、慣れるまでに時間がかかるため吸い込んだ化学物質が脳に入り込んだのだろう。一瞬上条の意識がぐらりと揺らいだ。かなり大量なのだが、ころうじて意識が落ちるのだけは免れる。

「おい、当麻。どうしたんだ、おい！」

刀夜の心配そうな声を受けて、上条は片手を振って大丈夫だと答える。しかし、誰がこんな事をしたのかだ。クロロホルムはトリハロメタンの中で最も有害なもので、発ガン性さえ確認している。美琴が自分からこんなモノを吸い込むはずがない。

（誰だ……？ 砂浜に来る前にミーシャがやったのか……？）

CHC13は極めて揮発性が高く、放置しておけば数分で気化してしまうはずだ。つまり、美琴を眠らせた相手はまだ近くにいるかもしれない。

（……近づけさせたくないのなら……、人払いすればいいのに……何故それをしな

かった？ 魔術が使えない人物……（？）上条はふと思いついて「土御門！」
「流石カミヤン。一発で俺に辿り着くとはな」

突然。部屋の入り口から声がした。

上条は振り返る。刀夜も振り返って、そこにいる人物にギョツとした。

土御門元春。

刀夜には彼がテレビで見るアイドルにでも見えるのだろう。突然現れた男に目を白黒させている。

「ああ、そこらに倒れてんのは俺がやった。下手に一般人を巻き込む訳にもいかんな」

土御門の声は、いつもと違っていた。

日常の中にいたはずの土御門の姿に、亀裂が走るような気がした。

「カミヤンなら分かってんだろ。この魔術が起きた原因を」

「ああ。『魔術が100%確実に引き起こされる方法』が偶然に生み出されたんだろ？」

サラリと答えた上条に、土御門は感嘆の息をつき。

「本当に何者だ。全くの素人と思っていたんだがな。その通りだ。あそこはタクティカルサークル戦術魔法陣オリジナルサークルや創作魔法陣さえ存在した。あれは決して発動しちやいけないものだ」

「——結局。今回の異変も単に運が悪かったってだけか」

上条は自嘲気味にそう言った。

「土御門。お前に聞く。止める方法はお前の中にあるのか？」

「あるぜ？ この場にいる誰かさんが犠牲になつてくれればな」

上条は軽く笑う。そして土御門を強く睨みつけると、

「させると思つてんのか？ そんな事」

「それ以外に止める方法が無かつたとしても？」

「それでも止めるさ。誰かが犠牲にならなきゃいけない残酷な解決法なんて、そのふざけた幻想を喰い殺す!!」

そっか、と土御門は笑った。

一瞬だが、その表情は確かに子どものように笑っているように、見えた。

「それではこうしよう、カミヤん」

笑みは一瞬で消える。

両者の距離は三メートル強。完全に互いの間合いの中での土御門は極めて気軽そうに、

「二〇秒。耐える事ができたら、誉めてやる」

ドン!!という壮絶な土御門の足音。

土御門は一瞬で三メートルの距離を詰める。だが、その足音は床を踏みつける音では

ない。

足。

上条当麻の足の親指を踏み潰す、壮絶な反則技の足音。

「ガッ……あー！」

足に釘を打ち込むような壮絶な激痛に上条は自身の身体を大きくのけぞらせ……
微笑む。

そして、踏まれていない方の足で思いつ切り、土御門の股間を蹴りあげた。

そのまま床に手を着き、バク宙するように一回転。その際、踏まれていた足で土御門の顎を蹴りあげる。

「く……」

急所への攻撃と脳を上下に揺さぶられ、少し判断が手薄になった土御門の頭頂部に上条のかかと落としが落ちる。それは頭蓋骨を砕くような衝撃を土御門に与えた。

しかし、土御門は止まらない。

その右手がようやく動く。大きく外側へ向かう土御門の拳が上条の側頭部へ向かう。ボクシングで言うならフック。水平にカーブする軌道で、上条のこめかみを狙う必殺必中の拳闘技。

上条はとっさに己の手で側頭部を守るようにガードして、

その拳が空振りした。

(は?)

一秒にも満たない空白だが、上条は困惑した。鼻と鼻がぶつかるほどの近距離で、拳を外すも何もない。なのに、何故この近距離で土御門は拳を外したんだろう。

そうか、外れたのではなく外したのか。

その答えは一秒も待たずにやってきた。上条の側頭部を通り越した土御門の拳が、回り込むように上条の側頭部へ向かったのだ。ちょうど、首に手を回して抱き締めるのよう

に。
後頭部。

空手やボクシングでさえ、後遺症の残る危険があるとして反則技認定している急所へ。

ベキイ!! という嫌な音。

「.....ガッ」

その瞬間、一撃で上条の全身から力が消し飛んだ。その体が真下に沈むように崩れ落ちる。土御門は思わず二、三步下がっていた。

だが、上条はそのチャンスを活かす事はできない。

変な態勢で受けた上条の後頭部からは血が出ていた。もう力もなく、床に倒れてしま

う。二本の腕が支える事も出来ずに上条の体を床に叩き落とす。

頭蓋骨が砕かれていた。

その破片が脳に突き刺さり、上条の脳を壊していた。一度傷ついた脳はもう二度と元に戻らない。例えそんな状況になっても誰も動かなかつた。貴音が、刀夜を抑えていたのだ。戦いの邪魔はするな、と。

そんな事を言っても上条は一目でもはや戦える状況でないのが分かる。土御門も自分の右拳を見つめて震えている。それを見た貴音は、素直にああ、突発的に親しい人を殺した奴はこんな顔をするんだろうな。と思っていた。

「・・・三秒すら、保たんか」

土御門は、倒れている上条を見下ろして言った。

これが、上条と土御門の差。

「聞こえているか？ カミヤん。今のオレには何も無い。本当に何も無いんだ。元々あった魔術の才能はとつくの昔に枯れ果てたし、付け焼刃の超能力なんざチャチな無能力止まり。学園都市に潜入するためとはいえ、土御門さんは魔術師としてはもう終わってた。もう戦える状態ではなかつたんだ」

だけど、と土御門は言った。

「——それでも、敵は待つてくれなかつた」

だから、と土御門は告げた。

「——そうして、オレは何が何でも勝たなければならなかった」

その静かな言葉の中に、貴音は薄ら寒い冷気のようなものを感じた。

生まれ持った才能はもはやどこにもない。努力をした所で何一つ報われない。それでも勝たねばならないという獄炎のような執念こそが、土御門の力。煉獄のような戦場で拳を熱し、地獄のような死闘で拳を打ち鍛え、数多の傷と共に手に入れたのが死突殺断の反則絶技。

反則である事など大前提。

土御門元春は、法則に反してでも勝利を掴みたかったのだから。

そうまでして土御門が勝利を掴みたかった理由は何か。

そんなものは、いちいち本人の口から聞かなくたって分かる。

土御門には守りたいものがあつた。

たとえ泥を這つてでも。血をすすつてでも。誰を騙しても何を裏切つても、それでも守りたい何かがあつたに違いない。だからこそ、土御門はどんな汚れ仕事もためらわな
い。絶対に。

「勝てたのか、カミヤん」聞き分けのない子どもを諭すように「それでも勝てたと思えるか？プロとか素人とか、そんな小さな事ではなく。この土御門元春という人間に、ぬる

ま湯に浸かり続けた高校生・上条当麻で太刀打ちできたと思ってるのかよオマエは？」

上条は何も答えない。

貴音すらも黙っている。

「寝ている、素人が」

吐き捨てるような土御門の言葉。

すでに敗北した上条をまたいで、土御門は刀夜に向って一歩。

「……何のつもりだ？」

貴音は部屋の入口に立ち塞がり、刀夜を廊下に出した。

「まだ、勝負はついていませんよ。それともなんですか？ 不戦勝でもしますか？」

「……何を……?!」

土御門は慌てて振り返る。貴音が見ているのが自分でない事に気がついたのだ。振り返るとそこには、ゆらりと立ち上がる上条の姿があった。

「……な……」

「そう言えばさつきから好き放題言ってくれましたよね。ぬるま湯に浸かっているのだの、なんなの。でもね。死線ならご主人の方がくぐって来ているとだけ言っておきましようか。大丈夫ですか？ ご主人」

「……ああ。少しばかり頭痛がするけど問題ねエ。いやー土御門。避けるのに失敗した

とだけ言っとくぜ。滑稽だろ？ 打ち所が悪くて頭蓋骨砕けたんだしな」

ケラケラと笑いながら言う上条に、幽霊でも見たかのような土御門は、

「カミヤんどうやって・・・」

「人とは体の作りが少々違うんでね。本当に好き勝手言ってくれたよな・・・。犠牲なんか出させねえよ。この俺が、この世に生き続ける限りなッ」

「へえ、ようやく良い眼になったな。それでこそその対等だ。いいぜ、認める。これより上条当麻は土御門元春の『敵』だ」

余裕の表情でそういう土御門と対象に、ハイライトの消えた金色の瞳で上条は、

「お前は俺の『的』だよ。土御門君」

その瞬間。上条の姿が大きくぶれ、消える。そこで土御門は風のウワサを思い出した。

（そう言えば——ッ。ねーちゃんが禁書目録の時に邪魔した少年に倒されたって・・・。ねーちゃんが頑なに認めなかったから信じる奴は少なかったが・・・まさか!!）

後ろに現れた気配を感じた土御門が振り返ろうとした瞬間。眼前に上条の掌があった。その手は土御門の胸板を突き飛ばすように押すと、床に叩きつけた。

そして、倒れた土御門の心臓と水月と鳩尾。その三か所に合計二回。拳が一瞬で叩き込まれた。

「氣絶しなかつた事誉めてやるよ、土御門」

「・・・手を抜いていたのか、カミヤん」

「なるべく級友を傷つけたくはなかつたんでね。貴音君。頼んでおいた物はできたかね？」

上条がそう問うと、貴音が嬉しそうに近寄つて来た。

「もつちろんです！ はいはいはいご主人！ コレですよコレ」

そう言つてどこからともなく貴音がとりだしたのは、綺麗な白銀の腕輪だった。

「・・・何をやる気だ・・・？」

「貴音。説明の前に土御門の治癒を頼めるか？」

「任せておいてください！」

貴音が上条が与えた痛み・傷の治癒にかかったと同時に、上条は刀夜を息一つで氣絶させた。

「?!」

「ちよつと！ 動かないで！」

その動きに土御門は驚く。上条がした事はいたつて単純だった。特殊な業によつて、刀夜の意識を刈り取つた。ただそれだけだった。

「土御門。儀式場の事。任せてもいいか？」

「……カミヤん?」

「俺は神裂を手伝ってくる」

そう言つて上条は、海の家から飛び出して行つた。

「カミヤん!」

「もう治りましたけど、貴方にはご主人が託した仕事があります」

貴音は上条の後を追おうとする土御門を平手で叩くと、左腕に白銀の腕輪をはめた。

「……? これは、何だぜい?」

「超能力。科学の異能の回路を断つ枷、です。ご主人か私にしかこの世界では作れません。これをもう土御門。あなたに差し上げます。それで守りたい者を守ってください」

「ちよ、ちよつと待ってくれ。状況がつかめないんだが」

「あー。その枷を付けている間は、アンタは最強の陰陽術師に戻るつつう事ですよ!

分かりました!」

「り、理解したんだぜい!」

貴音の勢いに押された土御門はする必要もないのに敬礼をする。

「……本当にいいのか。こんなものもらつちまつて」

「それはご主人に聞いてください。ご主人が土御門さんの為に作つたんですから。寝ずにかつこいいデザインをパソコンで調べて」

「にやー……。感謝するぜいカミヤん」

そう言うのと、土御門は立ち上がる。

「場ヲ区切ル事。紙ノ吹雪ヲ用イ現世ノ穢レ祓工清メ禊ヲ通シ場ヲ制定」

土御門は懐からフィルムケースを取り出すと、フタを開けて中身をばら撒いた。

一センチ四方の四角い紙片が大量に舞い上がる。

「界ヲ結ブ事。四方ヲ固メ四封ヲ配シ至宝ヲ得ン」

周囲の空気が凍る。

空気が変わった。うだるような熱帯夜から深い森の奥の泉のようなものに。

「折紙ヲ重ネ降り神トシ式ノ寄ル辺ト為ス」

土御門は構わず、さらに何かを呟きながら四つのフィルムケースを取り出す。

亀、虎、鳥、龍。小さな動物の折紙が入ったフィルムケースを部屋の四方へと放り投

げ、

「四獣ニ命ヲ。北ノ黒式、西ノ白式、

南ノ赤式、東ノ青式」

土御門の言葉に対応するように、四方の壁が淡く光り始めた。

黒、白、赤、青。折紙の色に合わせて四つのフィルムケースを中心に壁が輝いている。

「式打ツ場ヲ進呈。凶ツ式ヲ招キ喚ビ場ニ安置」

天才だ、と貴音は思う。

自分も風水は会得しているが、土御門の歳でこの領域には辿り着けなかったと思う。
 「——ダンガンにはとびつきりきょうぼうな丑ノ刻ニテ釘打ツ凶巫女、ふざけたぐらいのもの其二使役スル類ノ式ヲ」

貴音も詠う。楽しそうに。自らの魔力もこの異変を止めるために。
 神上だけにおいしい所は持つて行かせまいと。

「——ビストルにはけつかい人形ニ代ワリテ此ノ界ヲ、
トリガーにはテメエのてを鎚ニ代ワリテ我ノ拳ヲ打タン」
ダンガンにはシキガミを釘ニ代ワテ式神ヲ打ち、

それでも祈る。ご主人様である、上条当麻の安全を願つて。

「神裂イ！ 退けエー！」

「上条当麻!？」

上条は右手を握つて跳躍する。その高さ約十メートル。海上に浮かぶミーシャより高く、距離を考えれば申し分ない高さだ。

「上条当麻！ 無謀です！ やめなさい！」

「黙つてろ！ この神対聖人のカード。ちよつと切らせてもらうぜ？」

そう言うが早いか、一閃。上条が振るつた右手が当たるはずのない『神の力』の水翼を砕いた。

「まあ、焦るわけじゃないよな。俺は十字教徒じゃないし、ましてや宗教なんかには属してない。まあ神を殺す手なんてイマジンプレイカー禁止イレギュラー手持ってる時点で、そっちにはある程度の覚悟はできてたんだらうけど……。神裂、今から起こる事全部。見逃して頂戴ね！」

そう言った上条の右手。正確には甲の部分にルーンのような紋様が浮き出る。

そして手の甲から肩口にかけて、波打つように紋様が浮かび上がってくる。

「スperl! 幻符「マスタブラス幻想の煉獄」!!」

そう唱えた上条の右手が炎を纏い、それが巨大な炎の柱となつて『神の力』に直撃する。

「よしっやったか!？」

『……人はそれをフラグというんですよ!』

水翼が、上条を貫かんと迫る。

一本が五〇メートルから七〇メートルまで届く巨大な水翼の剣山が、上条の進路を塞ぐ。ここは空中、跳んだ肉体は止まれない。それは何人にも越えられぬ壁に見えた。

「悪いが、オレは負けた事が無いんでね」

プラスチックのような何かが砕ける音。それが響いたのは上条の右手からだつた。それは、カニやエビなどの甲殻類が、古い皮を脱ぎ棄てた時のような見た目だつた。上条の右手の皮膚がはがれ落ちていく、そして姿を現したのは一つの大きな竜の顎だつ

た。

「喰らい消す!!」

眼前に迫るソレを喰らう竜の顎。上条はそうして進路を作ると、瞬時に右手を元に戻し拳を握った。

——だがその瞬間。全方位からの水翼で、上条のいた場所が見えなくなった。

「?! 上条当麻!!」

「——j g f d x」

神の力が嬉しそうに笑う。が、その直後首をかしげる。

「——つは。この程度で俺を殺したって思ってたや、いけねエゼ?」

一つの塊になっていた水翼が全て砕け、上条当麻が姿を見せる。その体は重力に逆らい、神の力へと跳んでいく。

「——いいぜ! お前が天に戻るためだけに一掃を使うっていうんなら・・・まずはそのふざけた幻想をオルソラア!」

最後まで言わせるよ! とか叫びながら上条が吹っ飛んでいく。水翼が横薙ぎに振るわれたのだ。

「——上条当麻。貴方も無茶をします。あれは神の力の一端。そうやすやすと勝てる相手ではありません!」

神裂は重心を落とし、七天七刀へ手を伸ばす。
神を裂く者と、神に仕える者の勝負が始まろうとしていた。

大分離れた砂浜が見える崖。

上条はそこにアニメのように背中を預けて埋もれていた。

「……大分飛ばされたか……？ あーめんどくさい。何だつてこんな演技何か……
そもそもあいつが言いだしただんだろうが……！」

それは、昨日の夜の事。

土御門達を見送った後の出来事である。

「ミーシャさん。お宅、我々に何か隠して居るでしょう？」

「解一。何の事かわかりません」

「とぼけなさんな。天使ガブリエルさん」

「?!」

飛び退くように距離をとり、L字バールを構える。

「おっと、敵対する意思はないぜ？」

「……」

「そう疑るな。一度会ってんだぜ？ ……幻想殺しなんて変な自己紹介したから分かる

なくなってるのか?」

上条は一呼吸おいて

「イマジネイター幻想喰い。上条当麻だよ」

「!!」—— gy 苛 rh g v a (・・・なるほど、貴方だったか。魔神ジヨジヨ)」

少女の口から出たのは異界の言葉、だが上条はその意味を正しく理解しているらしく。

「あーやつぱりそつちが浸透してる?」

「じょうじょう上条当麻 w w w」

「ちよつと待つてろ。シメてくる」

腹を抱えて笑う貴音の関節を、本来曲がらない方向へ曲げながら上条はいつも通り友達に話しかけるような口調で言った。

「なあ。どうだ。地上は」

「(無理やり下ろされた事で気分が悪い。少し苛立っていた。許してほしい)」

「まあ父さんも悪気はないようだし。本当に偶然で起きたんなら、ヤバイ事だよ」

「(先ほどあなたも私を騙した)」

「あ? あれの事? 嫌だってああししないと物理的に殺されるだろ」

「(そのつもりだった。しかし、貴方ならこの事件簡単に解決できるのでは)」

「無理無理。変に行動しちまうとどこかで犠牲を出しちまう。最低限の干渉しかできねーよ」

「(嘘つき)」

「うぐっ」

「(そもそも貴方はここのところ一人の犠牲も出さずに幾多の事件と関わっている。その事から貴方の言動は全て嘘となる。嘘の理由は)」

「面倒だからに決まってる」

「ごしゅ……じん……っ！ 折れてる！ 折れてますから!!」

「大丈夫治る治る」

「いやー!!」

「(………本当に、大丈夫なのか？ かなり心配だが……)」

「じゃあやめておこう」

「にやー！ はずれてるうう！ 脱臼のレベルじゃないですよコイツあ!!」

上条の手が離れてなお苦しむ貴音。見た目以上に酷い事になっているに違いない。

「(これからどうするか?)」

「………特に何も」

「(なら、一つ頼みごとをしてもいいか?)」

「は？ 言っとくけど俺は台本通りに事を進める事なんて——」

「嘘はいい。真面目な話だ。私は悪者になる。それを止めてくれ」

「ハア!? どういうつもりだよ」

「(・・・つまりだ。私にあの魔術師二人のどちらかの前でそげぶをかましてほしい)」「んだ？ その略称」

「(叫んでいるだろう？ そのふざけた幻想をぶち殺す。と)」

上条は乱暴に頭をかくと、

「分かったやってやる。その代わり、俺はいつでも直感勝負だからな！」

「(本気で戦い合え、という事でいいのか?)」

「好きに捉えとけ」

「——あんな事言うんじゃなかったあああああ！」

上条は頭を抱える。崖から脱出したとはいえ、問題はたくさんあった。

「天使の本気ってどのくらいだよ・・・」

『ご主人！ こちらから一方的になるんですが、残り十秒です！ テンカウントの後、そげぶですー！』

「………テンカウントね」

上条は砂浜を蹴って飛び出した。

ほんの数秒で、神の力は見えてきた。上条は一気に跳躍すると右手をグーからパーにした。

「——いいぜ！ お前が天に戻るためだけに一掃を使うっていうんなら……まずはそのふざけた幻想をぶち殺す!!」

右手の文様が巨大化したと同時に、神の力の顔面を上条の右手が捕らえる。それと同じタイミングで儀式場が破壊された。

「——終わった。か」

日常世界のマイベトレイヤー

上条当麻は憂鬱だった。

閉め切った病室の中で、ほぼ軟禁状態にされていたのだ。イライラが募る。

「出せよ！ いい加減出せよ！ 何で閉じ込められなきゃいけないんだよ!!」

「仕方ないですよご主人。伯父さん心配症ですから。天使とぶつかった事、怒ってるんですよ」

「貴音く。何とかしてくれ!」

「まあまあ。今日中に退院できるでしょ。ほら、お見舞いが来たみたいですよ」

上条は病室の扉の方を見る。

「ひつさしぶりだにやーっ! カミヤん、元気にしてたぜよ?」

「・・・よお、土御門。初めは元気だったんだけどよ・・・」

「あー。カミヤんが鬱状態ぜよ。まあ一週間も軟禁されてたらそりや、参るよな!」

ケラケラと楽しそうに笑う土御門に、上条は枕を投げつけて。

「そこに座れ土御門! 俺の軟禁生活聞かせてやらあ!」

「おとと。聞いてやってもいいが。その前に報告だにやー、カミヤん」

「報告？」

上条は思わず首をかしげる。

「今回の異変がどう解決したか、ですな？ 意外と大事なんですよ、これが」

「……カミヤん。どちら様だにやー？」

「え？ いや、海の家の時いだろ。榎本貴音だよ」

「どもです」

「……どーゆー関係だにやー？」

「ん？ えーと」

「恋人。ですかね」

「長い間お前が入院してたからあったのは三年ぶりぐらいだけだな」

「……カミヤん」

「？」

土御門は親の敵でも見たような顔になった後、

「これは夏休み明けに期待だぜい。ボッコボコにしてもらうんだにやー！」

報告も何もあつたもんじやない。土御門はメモ用紙をこちらに放り投げ、涙ながらに全速力で逃げて行つた。貴音はそのメモ帳を拾い上げ読む事にする。

「えーとなになに？ カミヤんに、今回の事は適当にでつちあげると伝える。カミヤん

の実家を爆破四散させた事を（軽く）謝る。入れ替わっていた人間の記憶は戻るとい
事を伝える」

上条はその中の一単語が気になった。

「おい、ちよつと待て。あいつ実家ぶつ壊しやがったのか？」

「儀式場じつじょうの中にはたくさんのおみやげおみやげがあつたでしょ？ だから家自体を破壊しないと
ダメだつたんですよ」

「両親そろつて家なき子かよつ！ 絶対あの家ローン払い終わつてねえぞ!!」

「まあ、大丈夫なんじゃないですか？ 私達にあまり関係ないですし」

「そういうものなのか・・・？」

その時、上条の携帯が特徴的な着信音を鳴らす。

「!・これは・・・」

「アンダーライン滞空回線からですね」

上条は携帯を手に取り、通話に出る。

『やあ、上条当麻。今更だが一ついいかい？』

「ん？ なんだよアレイスター」

『樹形図の設計者。壊したの君達きみたちが禁書目録の救出をした時なんだ。直してもらえるか
?』

「……貴音」

「……まさかそんな事になっていようとは……思いませんでした、直しに行きますか」

「ハア……めんどくせエ……」

上条は貴音を連れて病室を出る。

「……どこから跳ぶ？」

「窓の無いビルが安定でしょう。あそこなら本気で蹴つても崩れません」

「ほんじゃまあ、そうしますか」

病院の廊下で看護師さんとすれ違ったら挨拶をしながら入口を目指す二人。

「何で行く？ やっぱ足か？」

「この病院に止めてあるのってなんでしたっけ？」

「バイクがハーレー。車が日産のGTRだな」

「うーん……。普通ですね。超電動リニア二輪とか置いてないんですか？」

「家の方には置いてあるだろ。さすがに外出先に常駐させるのには向いてないよ」

上条がそう言うと、貴音はどこか納得したような、

「……それじゃ、GTRで行きましょう」

「……はいよ。ほんじゃ、行きませう」

上条は駐車場に止めてある一台の車のカギを開ける。黒のGT-Rである。

「貴音。乗りな」

「はいな！」

貴音が乗り込んだのを確認して、上条は窓のないビルへ、車を走らせた。

——窓のないビル屋上。

「・・・それじゃあ、飛びますか」

「私はスマホの中にいますので！」

「はいはい」

貴音がエネとなりスマホに入ったのを確認した上条は、屈伸を始める。（意識を失った彼女の体は影の中に収納してある）

そして、窓のないビルを蹴ってジャンプした。

ズズン・・・と、その衝撃で学園都市の窓のないビルが少し低くなったような気がしたが気にしない。

ものの数秒で宇宙まで飛び出した上条は、片手で爆発を起こし体勢を整える。

「・・・貴音。もう出てくるか？」

『もうちよつと。もうちよつと』

『・・・ハア』

水中を泳ぐような感じで、樹形図の設計者の残骸レムナントに向う。

『見た目的にそんなに散らばってなさそうだな。四十枚でいけるか?』

『一応五十枚でいつときましよう』

『りよーかい』

上条はどこからともなくお札を取り出すと、それをばら撒き樹形図の設計者を囲む。

『貴音。いいかげん出てこい』

『・・・ハア。求めてますねーご主人』

『求めているとかじゃなくてさ。元に戻すのにはお前の力も必要だろうが』

『ですよ。分かってましたけど』

ブツブツ言いながら影から出てくる貴音。

『さて、ほんじやまあ。やりますか』

『待ってました!』

『行くぞ。修復「エレメントハンター」』

上条がそう唱えると、お札が輝き樹形図の設計者が破壊される前の状態に戻る。

『・・・一応通信機器や内部コンピュータの調子も見ておくか』

『・・・ですね』

中に入り込んだ二人は、内部の点検を始める。といつても電子が専門なので。貴音にまかせつきりな上条だった。

「……アレイスター。一応直ったぞ。何か依頼を出してくれ。こつちで最終調整をする」

——統括理事会。

「……ふむ。流石上条君と言ったところか」

「本当に地上で直すより速く直して見せましたねえ」

「……自慢の甥ですね。アレイスター」

「……ああ。本当に立派だ……上条当麻……！」

「おい。聞こえてんのか？ アレイスター!? 誰でもいいや。誰か樹形図こっの設計者ちに依頼をだせつつうの！」

「ご主人。通信機器の損傷なし、超高度並列演算機の方も異常はありませんでした」

「……そうか？ んじゃ、そう言う事だから。これより地球に帰還するぜ」

上条は宇宙空間にルーンの巨大バージョンを作り出す。

貴音がスマホに入ったのを確認すると、上条はそのルーンを蹴って数秒で地上に戻る。

ズズン……と、本日二度目の窓のビルが地面に沈む事案が起きる。

「……到着つと」

「……相変わらず人外離れた動きできますね」

「……なんだ？ 貴音も出来るだろ？」

「私は連続無酸素運動をできませんので」

「……俺も三十分が限度だぞ？」

「……私は一分も無理です」

え!? そうなの!?! と驚く上条を放って、貴音は下を見る。

「あ……。ご主人！ Rが！ 不敗神話のR—32がつー！」

「はいはい。イニDネタはいいから……。って、ヤベ。警備員じゃん！」

「ご主人……。どうします？」

「あいつらの眼が全部逸れた瞬間。突っ込む」

「……。彼らは今車に夢中に……。って何手榴弾投げてんですかあんたーツ!？」

「よし行くぞー！」

「ちよまつご主人！」

窓のないビルの壁を重力そのままに降りて行く上条と貴音。

地面まであと数メートルの所で手榴弾が爆発した。

「な、なんだ!？」

「貴音!」

「はいな!」

助手席側から運転席まで跳び込んだ上条は、スロットルを回しエンジンをかけアクセルを踏み込む。貴音が飛び込んだと同時に、アクセルONでドアを閉めた。

「うおっ! ご主人。逃げれるんですか?」

「逃げる!」

「ですよね」

逃亡に気付いた警備員が追いかけてくる。

「……そもそも、駐車禁止で追いかけるんですか?」

「逃げるからだな。まあ、あの場で払う金なんかないし、レッカー代なんか馬鹿にならねエからな。逃げるが勝ちさ」

「改造車で良かったですね。ナンバープレートすら着いてませんよケケケ」

「それも追いかけられる原因だろーな」

「赤信号。どうしますか?」

「捕まるか?」

「嫌ですよ?」

「・・・だよな！」

上条の運転する32は止まらない。交差点の為、交差車線からどんどん車がやってくるが、上条は気にしない。

アクセル踏みっぱなしでハンドル操作だけでケツを振り、車かわし直進する。

「・・・よし」

「今の危ない運転のおかげで警備員テンパってますね」

「このまま逃亡だ！」

「どこまで!？」

「地下駐車場まで! あそこに逃げれば・・・」

「車が収納できますからね! 影に!」

「そーゆー事。つて前からぶつけに来たア!？」

「ええ!？」

慌てて回避する上条だったが、少しバランスが崩れる。

「あぶねエ・・・」

「ロスサントス警察ですか!? いつの間にか私達はGTAの世界に来たのでしょうか・・・!」

「・・・!」

「んな事があつてたまるか!」

上条達の乗る32が、急にぶれる。そして、真下に落ちるように消えて行った。

「……………消えた!？」

「どこへ行った!？」

—— 地下道。

「……………あぶねエ……………」

「一種の絶叫系ですよマジで」

「……………しかし……………影抜け標準装備のこの車だからこそ入れた地下道ってワケだな」
小さな明かりしかない地下道を走りながら上条はカーナビの特殊機能を付ける。

「このままいけば家の近くの……………ああ、あそこに出れるのか」

「……………おおっ! いいですね!」

—— こんな一コマも、彼らにとっては日常の一部である。

夏休み最終日編

始まりの夜 Good Bye Yesterday.

鼻血が出た。

深夜。上条はおもむろに鼻を押さえる。スマホの中で私に興奮したんですかー？なんて言っているエネをスマホごと風呂の淵に避難させ、上条はバスタブから出る。

(あー。バスタブの中にもティッシュいるかなー)

と、考えながら暗い部屋の中で正確にティッシュの箱を手を取った。

そして、頭を冷やす目的でベランダへ出る。丸めたティッシュを鼻に詰めて・・・

「……………わっしょいっ!」

……………一枚無駄にした。

「……………大丈夫ですか? ご主人」

「ああ。何とかな」

「……………何してるのかな、とうま、たかね」

「ご主人が夏の暑さで鼻血を出したので、頭を冷やしているんです」

「……………分かってるよ、分かってるよとうま。とうまはそんなことする人じゃないもんね」

「とか何とか言いつつ信じてねエだろその目」

「そうですよご主人。私の体に興奮したって言えばいいんですよ?」

「言うかボケエ!!」

「しー。とうま、今何時だと思ってるのかな?」

「非常識ですよ」

「あのかなあ・・・」

「ほら、そんなにうるさくするからあそこ歩いてる白い人もこっち見てるよ」

「あー、そりゃ悪いことしたな。知ってる人だったら今度謝っておこう」

白い人、というのは、服が白いのだと思っていた。この学生の町、白髪なんてなかない。

ただ、学園都市第一位はどうも違うようで。今まさに下を歩いているのはその人だった。

「・・・白夜じゃねエか」

「はくや? あれ、その後ろの裸の女の子は?」

「は? 女の子が裸って何だよ」

「ほら、後ろ。裸に布巻いただけの子が何か言ってるでしょ?」

「どれだよ・・・」

インデックスには見えているらしいが、もう少し明るい場所に出てくれないと見えな
いな。と上条は思う。

「どうして無視するのかな、ってミサカはミサカは憤慨してみたり」

「……あー？」

見えなくても分かる。

一度聴いたら忘れられないあの独特の話し方は。

「打ち止めか」
ラストオーダー

「らすとおーだー？」

「御坂妹の姉で、妹みたいな容姿の奴だよ」

「ふーん？ 何で知ってるの？」

「そこはほら、企業秘密って奴だよ。……ってマジで裸じゃねーかよ」

「どうするの？」

「補導だな。行くぞ貴音巡查インデックス巡查！」

「「いえーい」」

上条達が外へ出ると、いまだにミサカはミサカはと聞こえてくる。

おそらく白夜は音を反射しているのだろう。

見た感じなんかかわいそうだった。とりあえず。の精神で上条が二人の所へ向かお

うとした時に、白夜が打ち止めの方を振り返った。

深夜。誰もいな道の為、離れた所にいた上条達にも会話が聞こえてきた。

「——いやーなんと言うかここまで完全完璧無反応だとむしろ清々しいというかでも悪意を持つて無視しているにしては歩いているペースとか普通っぽいしこれはもしかして究極の天然さんなのかなーってミサカはミサカは首を傾げてみたり」

「………、くっだらねエ」

「ブックサ言ってる間にどんどん距離が開いていくんだけどミサカの事は見えてないの妖精さん扱いなのほらミサカはここにいるよー、ってミサカはミサカは自己の存在を激しくアピールしているのに存在全否定？」

「………」

「おーい、だからミサカはここにいるんだって——あれ、ひよつとしてなかった事にされてる？　ってミサカの首をミサカらしく傾げて………む？　今、何回ミサカって言ったっけ、ってミサカはミサカは思考の泥沼にはまってみる」

「待て………、ミサカだと？」

「おおつ、ようやくミサカの存在が認められたよわーい、ってミサカはミサカは自画自賛してみたり。我思う故に我ありなんて言葉は嘘っぱちだねやっぱり主観だけでなく客観で何者かに存在を認めてもらわない限り自己なんてありえないね、ってミサカはミサ

力は間違つた知つたかぶり知識でコギトⅡエルゴⅡスムを全否定してみる」

「ちよつと待てコラ今すぐ黙れ。オマエのその頭から被つてる毛布取つ払つて顔見せてみる」

「つて、え? えと、えつと、えーつとまさかこんな往来で女性に衣服を脱げというのは些か大胆が過ぎるというか要求として無茶があるというか——つて、あのー、ミサカはミサカは尋ねてみるけど。ほんき?」

「………」

「わあ黙つた。本気と書いてマジと読む目だよこの人つてやめて毛布を引つ張らないで。この下はちよつと色々まずいんだからつてミサカはミサカは言つてるのにぎやああ!」

「……」。あア? 何だこりやあ、——つてか何だアそりやあ!」

大声を上げる白夜。その片手に毛布を持って。

「はい、その人。おとなしくしてねー」

「動かない、動かないでねー」

「少女を往来で脱がすような人は逮捕ですよー」

「早く毛布も返してあげるんだよ」

「………あア?」

「早く毛布返して、ってミサカはミサカはギャラリーが増えたことに危機感を抱いてみる」

「・・・・・・・・ホラ」

白夜の手から打ち止め打ち止めの頭へと毛布は投げ返される。

「・・・・・・・・で？ 何の用だア？」

「誰かさんが裸の女の子を従えながらウチのベランダを凝視してたら怪しいと思うに決まってるだろ？」

「・・・・・・・・ハア。めんどくせエ」

「・・・・・・・・初めまして、打ち止め」

「あれ、何でミサカの名前を知ってるのでもよくよく顔を見てみたらこの人ははヒーローさんそれでもミサカの事を知ってるのは・・・・・・・・、ってミサカはミサカは混乱してみたり」

「はは。俺は上条当麻ってんだ。それでこっちがインデックス。そしてこっちが榎本貴音よろしくな」

「よろしくなんだよ」

「よろしくです！」

「よろしくー、ってあれ一方通行は？ ってミサカはミサカは一方通行がいつの間にか

いなくなつてすることに驚いてみたり」

「あ? つと、もうあんなどこにいやがる。ちよつと連れ戻してくる」

そう言つて上条は一方通行の元へ駆け寄る。

「おい、どこ行くんだよ」

「どこつてオマエ、アホ? 今何時だと思つてやがる。帰ンだよ」

「何で?」

「ハア?」

「何で帰んの?」

「. 何か変なモンでも食つたか?」

「はいはい言い訳はしなくていい。お前は毛布一枚の女の子を引き連れ、さらに道端で脱がせた。これは犯罪だ。この時間警備員や風紀委員なんてそうそう動かない。だからそれまで俺が話を聞く。 つまり、今日は俺ん家でお泊まり会だ! つて言つてなかつたつけ?」

「今更だが、オマエ本当に頭大丈夫なのかよ」

——上条家。

なんだかんだで、今は全員リビングに居た。

全員とは、もちろん 上条、インデックス、貴音、打ち止め、白夜のことだ。

「………何で俺は……」

「どうせ帰つても寝るだけだったんだろ？ しかも脱がせた女の子と二人で。ふいー危ない危ない」

「ぶつ殺すぞ」

「おー怖い」

「あれー、ミサカネットワークに今のこと自慢したいのに能力が出せないや、つてミサカはミサカは割と危機的状况なのに呑気に言ってみたり」

「つまりそういうことだ、白夜」

「………チツ」

「あ、そういうえば自己紹介してもらってないんだよ。あなたの」

「そうだったそうだった」

「えーと、ミサカの検体番号は二〇〇〇一号で、『妹達』の最終ロットとして製造されたんだけど、つてミサカはミサカは事情の説明を始めるけど。コードもまんま『打ち止め』で本来は『実験』に使用されるはずだったんだけど、つてミサカはミサカは愚痴ってみたり。ところがどっこい見ての通り『実験』が途中で終わっちゃったからミサカはまだ体の調整が終わってないのね、つてミサカはミサカはさらに説明を続けたり。製造途中

で培養器から放り出されちゃって何だかチンマリしちやってるの、ってミサカはミサカは……聞いてる？」

「……ケツ」

「俺は長い話が苦手だね」

「ご飯でも作りましょーかー？」

「?? ……んーと、とりあえずよろしくね、打ち止め!」

「おっと全員聞いてなかったのね、ってミサカはミサカは憤慨してみたり!」

「何を言うか、ちゃんと聞いてたさ。な、インデックス? ほら、やってやれ」

「えーと、ミサカの検体番号は二〇〇〇一号で、『妹達』の最終ロットとして製造されたんだけど、ってミサカはミサカは事情の説明を始めるけど。コードもまんま『打ち止め』で本来は『実験』に使用されるはずだったんだけど、ってミサカはミサカは愚痴つてみたり。ところがどっこい見ての通り『実験』が途中で終わっちゃったからミサカはまだ体の調整が終わってないのね、ってミサカはミサカはさらに説明を続けたり。製造途中で培養器から放り出されちゃって何だかチンマリしちやってるの、ってミサカはミサカは……聞いてる？」

「す、すごい……。完璧なんだけどなんか棒読みじゃないかな、ってミサカはミサカは……」

「で?」

「………本当に理解してるのか疑問に思ってみたり——い?」

「それで俺にどおしろってんだ」

「アナタは『実験』のカナメであるはずなので研究者さんとの?がりもあると思うから、できうる事なら研究者さんとコンタクトを取ってもらいたいかな、ってミサカはミサカは考えてる訳。今のミサカは肉体も人格も製造途中の不安定な状態なので、希望を言うならもう一回培養器に入れてもらって『完成』させて欲しい訳なの、ってミサカはミサカは両手を合わせて小首を傾げて可愛らしくお願いしてみるんだけど」

「他ア当たれ」

「いえーい即答速攻大否定、ってミサカはミサカはヤケクソ気味に叫んでみたり。でも他に行くアテもないのでミサカはミサカは諦められないんだから」

「………、何なんだコイツは………。この頭のおかしいヤツにでも頼めよ」

「え、でも俺研究者とか変なのしか知り合いにいないぜ?」

「居ンのかよ」

上条の頭の中にあるのは『近所に住んでる親戚並みの仲』のネジが飛んだ科学者一族。

「というかよ」

「あん？」

「打ち止めは途中で放り出されたんじゃないやなくて、それで完成だとかいう事はない訳？」

「どうして、ってミサカはミサカは尋ねてみる」

「だって『実験』はあの樹形図の設計者の演算の元で行われてたんだろ？ だったら打ち止めみたいな二〇〇〇一号——つまり予備を作る必要はないんじゃないか？ それに予備が一つだけってのもおかしい。あの時点で一万近く残ってたのに予備はいらないだろ」

「ふむ……そう言われるとそうなんだけどじゃあ何でミサカが作られたのかって話になるわけで、ってミサカはミサカは疑問を感じてみたり」

「それは……司令塔的な何かじゃないですか？ 例えば二万のミサカが実験を拒否して研究者に反逆しそうになったらそれを止めるための命令を出せるヤツが必要でしょ？」

「じゃあミサカがちんまりとしちやってるのは？」

「それは……、何ででしょう？」

今、自慢げに語ってたのに、貴音は突然上条の方を振り返る。ものすごい救難信号を受け取った上条はため息交じりに、

「……その話が本当なら、その司令塔が反抗できるレベルで強かったら意味ないだろ」

「つまりそれはミサカがちんちくりんで弱っちいって言うてるのかな、ってミサカはミサカは地団駄を踏んでみたり！」

「何だこのミサカ。めんどくせエ……」

「ま、自己紹介も終わつたんだし、寝るか。俺も明日はちよつと忙しいからな」

「……上条待て。俺もだど？」

「お前も研究者に連絡取つたりで忙しくなるだろ？」

「オイコラもう一回言ってみろ」

「おやすみー」

「おやすみー、ってミサカはミサカは一方通行の優しさに感動しつつ布団に入ってみたり」

「おやすみー、ってインデックスはインデックスは今まで無視され続けてきたことにちよつと怒りを覚えつつでも別に今の会話覚えてるからいつかって無理やり納得してみたり」

「……明日の夜は外食にしよう」

「わーいとうま大好きー、おやすみ」

「……クソがああああ！」

「「「うっさい」」」

- 「……………壁のシミにすんぞコラ」
- 「……………懐かしいネタだな。オイ」
- 「……………起きてンのかよ」
- 「……………もう寝る」
- 「……………修学旅行の夜と行こうぜ」
- 「……………やだよ」
- 「……………お前好きな奴いるウ」
- 「……………お前完全に無理してるだろ」
- 「……………無理してません」
- 「……………寝ろ」
- 「……………うわーいるわー。修学旅行で喋る気分じゃない奴いるわ」
- 「……………寝ろ」
- 「……………寝てください」
- 「……………うるさい」
- 「……………邪魔ーつてミサカはミサカはくムニヤムニヤ」
- 「……………へこむぞ」

とある化学の狂科学者

早朝。上条は朝食の買い出しに外へ出ていた。

「……コンビニのパンで良いかな……」

「……本当にコンビニに行くんだろオナ？」

「……いんや。あいつ等に内緒で研究所で打ち止めについて聞こうかと……って白夜
！」

「ン。俺にも内緒だったのか」

「……いや、まあ……そうなんだけど……」

上条は若干焦りながら言う。

その時、上条のスマホが着信音を立てる。

「……鳴ってるぞ」

「おう。ウゲツ……はい。もしもし」

『よオ、上条当麻ア！ さっきの話だがなア。こっちに来てくれや。じいさんが説明してくれるとよ』

「……ああ。そう？ んじゃ今から向かうわ」

『おう。待ってるぜエ』

「………というわけで、俺は研究所に向かいます」

「チツ。俺も行く」

「………死ぬなよ？」

「ああ？」

——学園都市某研究所。

「は？ セキュリティ頑丈すぎンだろ」

「いいから。壊すなよ。ゲストコード00000。オリジナルコードImaginea
ter」

上条が天井に向ってそう言うと、セキュリティが解除され、進路が開いた。

「……んだよゲストコードって」

「お前はゲストなの。俺は元から登録してあるから」

「……ふーん」

迷わず研究所の一室に入る上条。続いて入った白夜は全く異世界に来た気分になつた。

「おう！ 当麻！ よく来たな！」

「当麻君いらっしやい」

「よく来たねえ上条君」

「当麻お兄ちゃんいらっしやい」

「おう。元気そうだなお前ら」

「か、上条・・・コイツらは・・・」

「ん? 『木原』だけど?」

「おつ! よオクソガキ。久しぶりだな」

「何でお前とコイツらが知り合いなんだよ!!」

「まア・・・、オレの伯父があのアレイスターだしねエ」

「当麻お兄ちゃん聞いて聞いて!」

「悪いな円周。今日は用事があるんだ。幻生」

「ほ? この老いぼれに何か用かの?」

「とぼけんなよ悪知恵ジジイ。そもそも絶対能力進化実験の首謀者お前だろ」

「ほっほっほっ。バレておったか」

「テメエツ」

「白夜。やめろ」

「上条!」

「いいから、コイツは根は良い奴だ。ただ上辺が超嫌なヤツ、クルルみたいな奴なだけ」
「・・・そう、なのか？」

「数多。白夜と遊んでやってくれ。完成したんだろ？」

「・・・ああ。さあ行くゾクソガキ！」

「はっ!!? 待てよ木原くん！」

木原数多に連れられて行った白夜を見届けた上条は幻生に向き直る。

「さて? 打ち止めの調整施設。どこにある？」

「・・・妹達の司令塔か。上条君の所におるのかい？」

「ああ。まだ寝てるんじゃないか? 教えてくれ。アイツの調整が必要だろ？」

「・・・教えてもいいが。その代わり・・・」

「代わり・・・？」

「JKの写真を・・・」

「黙れ変態ジジイ！」

「酷いのう。老い耄れの唯一の楽しみを」

「他に楽しみ見つけろよ! 何だったらゲートボールでもしてこい！」

「そこまで老いぼれとるつもりはないよ」

「黙れこの百歳越え」

「もう教えんよお?」

「分かったよ。その代わりこれからは無条件で提供してもらえるように映像にしてやるよ」

「おほっ」

「さあ早く教えろ」

「よし。ここだ」

タブレットに地図が示される。それを上条は記憶する。

「ありがとな。数多に白夜を返してもらってくる」

「・・・それと、小耳にはさんだ話だがね」

「?」

「・・・妹達最終信号にウイルスが打ち込まれている。らしい」

「マジか?」

「あくまでらしい。だがね」

「そうか、と上条は言う」と研究室を後にする。

「忙しそうだねエ。あいつ」

「ライフライン。あれは学園都市の真の最強だ。アレイスターは頑なに隠そうとしているみたいだがね」

「『木原』にとつての抑止力でもあるわよねえ。加群？」

「うむ。アイツは我々を統率したからな・・・力で」

「上条はこんな時なんていうんだろう？」

「こら円周。言われたでしょう？　そう言う考え方をしたらダメだつて」

「でも、当麻お兄ちゃん限定で良いつて言ったもん」

「へー」

——上条家。

「とうま？　どこ行つてたの？」

「コンビニ」

「コーヒー買ってきた」

「ふーん」

——

——

——朝食後。

「・・・さて、今日の予定を発表します」

「いえーい」

「まず、インデックスとエネは自宅警備！」

「イエッサー！」

「了解なんだよ！」

「絶対油断すんなよ。特にエネ」

「大丈夫です。今日は家に誰も入れませんし防御結界張っておきます！」

「よろしい。白夜、お前は地図の研究所に行って打ち止めの頭の中を見てくれ。もしか

したら恐ろしいウイルスがあるかも知れん」

「ああ」

「あつたらどうしよう。ってミサカはミサカは」

「もしあつた時の為に感染前に戻すようなデータも送ってもらえるらしい」

「でも、そうしたらミサカの記憶は？」

「ネットワークにバックアップでも取っておけ」

「なるほどってミサカはミサカ」

「ほんじゃま、行ってくる」

「おう」

白夜は打ち止めを抱えてビルの上をピョンピョン跳ねて行った。

「んじや、俺もどつかでかけてくるわ」

「当て無しですか」

「まあなー」

そう言つて外へ出た上条だったが、予想よりも早く予定ができる事になる。

「おつ。カミヤん」

「土御門？ どうしたんだよ」

「いま、カミヤんの部屋を訪ねようと思つてたんだにやー」

「ん？ 何か事件か？」

「いや、そう言うワケでは無いんだが・・・」

「んだよ。早く言え」

「カミヤんがこの前作つてもらつた枷なんだがにやー」

「・・・壊れでもしたか？」

「いや、違うんだぜい。魔術の方を完全に封じるバージョンを作つてほしいんだが」

「良いけど・・・両方着けたら両方封じちまうし、着け直すのめんどいだろ」

「・・・そこは何とかならないかにやー？」

「わがままな依頼は嫌いじゃないぜ。任せとき」

「カミヤん頼りになるぜい。そうだ！ 依頼料代わりに今日の昼食おごるぜい」

「お？ マジ？ んじゃ時間潰しながら行こうぜ」

そう言つて二人はファミレスに向かつて歩き出した。

——白夜サイド

「・・・ねえ。あなたがミサカ達を助けたのはやっぱりヒーローさんのおかげ？」

「ア？ 上条の？ まあ直接的じゃねエがな。オレの気まぐれだ」

「・・・ヒーローさんの事思い出したんだ」

「上条を思い出した？」

「うん。一度超能力者量産計画の時にできた初期のミサカネットワークに記録があつてね。その時のヒーローさんは二十代位に見えたの・・・。今高校生なのにおかしいよねーつてミサカはミサカは」

「・・・そうか（・・・小学生だろ・・・？ 二十代に見えるか？）」

白夜が首をかしげながらもビルからビルへと飛び移る。

もうそろそろ研究所が見えてくるころだろうか。

とあるお嬢の超電磁砲 Doubt | L o v e r s .

御坂美琴は困っていた。

コンビニで立ち読みをしようと思っていたら、常盤台の理事長の孫。海原光貴に捕まって、立ち読みにいけない状態なのだ。

「あー、けど、でも、誘ってくれるのは嬉しいんだけど私にも用事があるというか……」
「では早く行きませんか？ ご一緒しますよ」

「うー、あー、確かに用事はあるのだけどなんというか……」

「……」海原はわずかに眉をひそめ、「もしかして、自分と一緒にでは行きづらい場所ですか」

「そ、そうよそれ！」美琴はポンと手を打ち、「い、今から（えーつと）そう、ちよこつとデパートの下着売り場まで出かけようかと思つて、ほら、男の子には辛い場所でしょう？」

「ご一緒しますよ」

寸分の狂いもなく、キラキラ光る笑顔で海原は即答。

素で突破されたーっ!? と美琴は心の中で頭を抱えた。

（うう、どうしようどうしよう。あ、そうだ他の男と待ち合わせしている事にしよう。さすがにそれならご一緒できまい。よし、ベタな手段だけどテキトーな男にくつついて『ごめん待ったー?』と何とかアドリブで演技してみるべし！ 巻き込んだヤツには迷惑かけそうだけどジュースの一本ぐらい奢ってやるわよ！）

美琴は『恋人役』となるべき男性を探すべく視線を左右に走らせた。が、今日は八月三十一日。住人の八割が学生である学園都市にとつて今日一日は『家に引きこもつて残った宿題と格闘する日』である。

つまり、見渡す限り誰もいない。

うわもーこれ絶望的だわー、と美琴が心の中で頭を抱えたその瞬間、まるで神様からの贈り物のように通りの角から三人の少年が現れた。

正直、邪魔。

それが上条の感想である。土御門とファミレスに行く途中。青髪ピアスに出遭ったのだった。

「うおあー、もう夏休みも今日で最後ですよカミヤんつつちー。あー結局今年も空から女の子が降ってきたり雨の日の段ボールの中に猫耳少女が収まっていたり玄関開けたらいつの間に決まっつたのかも分からへん可愛い許婚が待つたりせんかった

な。っていうか何やねんこのイベント数の少ない夏休みは、小説やったら『その高校生は夏休みを過ごした。』の一行で全部スルーやないかい」

この後ろ向きなエセ関西弁は青髪ピアスの言葉である。

「青ピ、だからと言って野郎と一緒にいても何にも変わらんのぜい」

「いやカミヤんとつつちーが一緒に歩いてたら、デルタフォースの一員であるボクも混ざらんとあかんやろ？」

「そんな所で変な協力を持つんじゃないよ」

「そもそもオレは、カミヤンには奢るけど青ピには奢らんぜよ」

「酷ない!? つつちー」

「そもそも金の為についてきたのか? お前は・・・」

上条がため息交じりにそう言うと、

「そもそもだな。ラブコメとか言ってるけど具体的にどんな子が希望なんだよ。あんまり狭いと思つからないぞ?」

「はっ、何を言うてんねんカミヤんは。ボクあ落下型ヒロインのみならず、義姉義妹義母義娘双子未亡人先輩後輩同級生女教師幼なじみお嬢様金髪黒髪茶髪金髪ロングヘアセミロングショートヘアボブ縦ロールストレートツイントールポニーテールお下げ三つ

編み二つ縛りウエーブくせつ毛アホ毛セーラーブレザー体操服柔道着弓道着保母さん看護婦さんメイドさん婦警さん巫女さんシスターさん軍人さん秘書さんロリシヨタツンデレチアガールスチユワーデスウエイトレス白ゴス黒ゴスチャイナドレス病弱アルビノ電波系妄想癖二重人格女王様お姫様ニーソックスガーターベルト男装の麗人メガネ目隠し眼帯包帯スクール水着ワンピース水着ビキニ水着スリングショツト水着バカ水着人外幽霊獣耳娘まであらゆる女性を迎え入れる包容力を持つてるんよ?」

「二個明らかに女性じゃねーのが混じってんだろ」

上条が呆れながら何とか答えると、土御門がニヤニヤ笑いながら、

「けっどー、カミヤんはどんなのがストライクゾーンなんだにやー?」

「………、元氣な先輩。我儘&俺より馬鹿じゃないとダメ」

「カミヤンより馬鹿な人なんてごまんといえるんだにやー。元氣&我儘って難しいぜよ!？」

「狭いと見つからないとか行っておいて、カミヤんが狭いやん」

「む。しかし『先輩』と来たか。逆に年下キャラはピンと来ないのかにやー? なんだかんだ言っても基本はやっぱり妹だぜい」

と、リアル義妹のいる土御門は力強く頷いたが、逆に上条と青髪ピアスは辛そうな視線を向けた。友人代表として上条は言う。

「あのな、これは友人としてお前ら義兄妹の関係を良好にするためにあえて忠告するが」
「ど、どうしたつていうんだぜい？」

「お前の義妹はな、誰にでもお兄ちゃんと言う女だ」

何だとコラア!! と、土御門が両手を振り上げて激怒する。

「そ、そんなはずないぜよ！ オレの妹がいつどこで誰にどういった理由でオレ以外の男にお兄ちゃんなどと呼んだというんだにやーっ！」

「そやねー。一昨日駅前のデパ地下のレストランでご飯おごったらありがたうお兄ちゃんつて言われたでー」

「っつーか昨日、その表通りで出会い頭にこんにちはお兄ちゃんつて言われたぞ」

土御門の奥歯の辺りで何かを噛み潰すような音が聞こえた。

「殺す。っつーか人の妹と勝手にコンタクト取つてんじやねーぜよ!!」

かくして、怒りに満ちた兄の拳が上条達へ襲いかかる。

「は!?! どこで誰に会おうが俺達の勝手だろ！」

「せやでつっちー！」

「うるさいんだぜい！ そもそもカミヤんに関しては師匠呼びだろう！」

「その辺の気まぐれは舞夏に言えー!!」

「人の妹を呼び捨てにするんじや無いぜい！」

「理不尽っ!」

御坂美琴はその三人組を見るなり、たつぷり一〇分間も凍り付いてしまった。その間、彼らはハリウッド映画終了一五分前みたいな最後の戦いを繰り広げていた。

御坂の意識が解凍されたのは、土御門の攻撃で上条が常盤台の寮の外壁を突き破った時だった。

「・・・あ」

(うっそ。壊しちゃった!?)

「・・・っテツメエ。土御門! 殺す気かつ!」

「殺す気だぜいカミヤン。この際青ピはどうでもいい。今のオレの最大の『敵』はカミヤンだぜい」

「ふざけんな!!」

瓦礫の中から飛び出した上条は車道にまで飛び出す。土御門もそれに続き車道に飛び出す。車がない事を幸いに、二人はそこで戦い始める。

「・・・いやー。何か知らんけどハブられてもーたわ。こっちの寮の方も野次馬化してきてるし。ボクあ逃げる事にするか」

青ピが逃げ出したのに気付かず、土御門の一撃が上条のクロスさせた腕の中心に当たる。重たいものが落ちたような音がするが、上条の体は数メートル後ろに吹っ飛ばされ

ただけだった。

「土御門。提案だ」

「何だぜい」

「……今さつき壊した壁の弁償するのやだから逃げてもいい？」

「……賛成だぜい！」

急に息を合わせた二人。全速力で逃げだす。

それと入れ替わりに寮から出て来た寮監が御坂に、

「御坂。白井と一緒にあいつ等を追いかける。まったく夏休み最後だからってはしやぎ

おって……」

「あ……はいっ！ 行くわよ黒子！」

「ハイですよ！」

白井と一緒に追跡を始める御坂。結果的に逃げれる事になったので、上条達に感謝である。

「お姉様。彼らの居場所わかりますの？」

「え？ いや……悪いけど……」

できれば門限までこうして追いかけておきたい御坂。なので言葉を濁す。

「そうですか。私も顔はよく覚えておりませんの。にしても……足速いですわね……」

もう見えませんの」

「そうね!」

——その頃。

上条と土御門は、案外常盤台の近くにいた。

「……しかし、カミヤン。よくこんな場所知ってるな」

「ああ。使われてない元カラオケ店。防音はバッチリだな……」

「灯台下暗しっていう分。見つけ辛いぜよ」

「……だな」

逃げたふりをして近くにいる。これは上条の戦法でもあったりする。と言っても最近は何もする必要がなくなつたため、こういった手は使わないのだが。

「……土御門。ちよつと悪いな。昼にまたどこかで集合な」

「……ん? 何か用事か?」

「……ちよつとな」

さあ、上条当麻を狙う愚かな魔術師の掃除を始めよう。

とある異郷の幻想喰い

常盤台から離れた場所。お昼前だからだろうか、ファーストフード店などに沢山の人が集まっていた。

「……くつ。どこに……」

「……さて、誰をお探しかな？ 魔術師さん」

海原光貴は驚いて頭上を見上げる。表通りのビルの途中。室外機に腰かけた少年がいた。

「……何の事でしょうか？」

「ははっ。とぼけんよ」

フードを目深に被っているため、顔は見えない。

しかし、海原が自分だと確信したのは、周りに誰もいなかったからだ。

「いきなりなんですか？」

室外に腰かけていたフードの少年は異常だった。降りて来た時に分かったが、ロングコートだった。この夏の暑い日に黒のロングコート、馬鹿としか言いようがない。

目深にかぶったフードも黒。これではさうとう熱いに決まっている。

「いきなり？　ここ最近、いや。この間までずうつと人の事つけてたくせによく言うぜ」
「……まさか」

「俺が誰か何かこの際どうでもいいんだ。邪魔だから消えてもらおうぜ？」

そう言つて少年がとりだしたのはリボルバータイプの銃。派手な装飾はなにもされておらず。いたつて普通のモデルだった。

「……こんな街中で撃つ気ですか？　風紀委員や警備員に捕まりますよ」

「……心配なく」

少年が一発目の引き金を引いたのと、海原が黒いナイフを天にかざしたのは同時だった。

少年が持っていた銃がバラバラになった。継ぎ目からバラバラに。

「ほらな。魔術師じゃん」

少年はバラバラに崩れ落ちたはずの銃を拾い上げると、綺麗に元の形に戻した。

「!？」

「銃つてのは元々点検用にある程度分解できるんだ。やろうと思えばこのぐらいは出来るんでね」

そして、銃を数発撃つた。

街中に響いた発砲音に気付かない馬鹿はいなかった。全員何かに脅え、少年の持つ物

に気付いた者は逃げて行く。

「二つ言っておきます。先程の自分の攻撃、人体にも影響あるんですよ?」

「・・・ヘエ? だから? お前は顔を正確に狙えるのか?」

「っ!」

言われて海原は気付く、彼はロングコート＋フードの格好。つまり皮膚が露出しているのは顔しかないという事だ。

「・・・貴方も酷い手を使いますね。上条当麻」

「・・・俺はお前が邪魔なだけ。今の俺には名前もないし性別もない。そうだなイレイザーとでも呼んでくれ」

二人とも睨みあったまま動かない。だが、少年の方が素早く動いて、路地裏に消えた。慌てて追いかけると、そこには工事中のビルがあり、少年はそこにいた。

「お前の持つてるそのナイフ。黒曜石でできてるだろ。つまり、だ。それはトラウイスカルパンテクウトリの槍ってワケだ。アステカの魔術師さん?」

「ふっ・・・やはりあなたは危険だ」

「・・・やっぱり。狙いは俺か? いや、俺の仲間全員か」

「簡単に言つてのけますが、あなたは自分がどれだけ危険な事をしてしまった理解していませんか?」

「あ?」

「あなたはただでさえ『禁書目録』を——、一〇万三〇〇〇冊もの魔道書を占有している。そのうえ、イギリス清教の魔術師や常盤台の超能力者、吸血鬼に対する切り札など、多種多様な人材を仲間に取りき入れているらしいじゃないですか」

魔術師は自嘲するように告げた。

「魔術世界と科学世界は本来、相容れないはずのもの。なのに、あなたはその両方に精通してしまっています。もはや『上条勢力』という一つの団体ができつつあると言っても良い。自分のいるような『組織』ではね、そういった新しい勢力が世界のパワーバランスを崩してしまう事を極端に恐れているんです」

組織。

それは学園都市か、教会世界か、魔術結社か、どこぞの経済大国か。

「だから自分はここへ送り込まれた。と言っても、最初から『海原光貴』となつて誰かに危害を加えようという訳じゃない。ここへやってきたのは一月前の事だし、入れ替わったのはほんの一週間前の事です。最初はただの監視だった。あなた方『上条勢力』がパワーバランスに影響ない存在だと分かれば、問題ナシと報告するだけで済む話だったんです」

魔術師は歯を食いしばった。

その眼は、少年の顔面を射抜くように彼を睨みつけている

「けれど、あなたは危険すぎたんですよ！　こちらに入る断片的な情報から推測するに、あなたはこの夏休みだけでいくつかの『組織』を壊滅してしまつたらしいじゃないですか！　その上、あなたの『力』は金や圧力などで操作・制御・交渉できるような類のものではない。全部あなた一人の感情による独断独裁独善だ！　こんな不安定で巨大な力を、『上』の連中が危険視しないと思えますか!？」

「お前達の狙いは……」

「ええ。自分の目的は『上条当麻』個人ではなく『上条勢力』全員です。あなた一人が死んだ所で、もはやこの『勢力』の仲の繋がりは消えませんかからね」

知り合いに『化ける』理由はそこにあるのだろう。

上条の良く知る人間の『顔』で、できる限りの悪さをして、信用をなくす。そして用済みになったら、別の知り合いの『顔』へ入れ替わり、同じ事を繰り返すそうやって『勢力』を内側からじわじわと腐敗させていく。

その途中で『偽者』の存在が浮かび上がっても問題ない。今度は『誰が偽物か分からない』という疑心暗鬼によって仲間の輪を引き裂く事ができるのだから。

内部腐敗。

それは古くより数多くの王朝を破綻に導いた工作手段だ。一見して堅牢なはずの制

度があつという間に腐敗したり、聡明な王がある日突然暴君へと変貌した裏には、見えざる密偵達の活躍がある。そのあまりに鮮やかで残酷な手並みから、国によつては狐や悪魔など、迷信じみた例えで表現されるほどである。

「できうる限りあなたは最後に回したかつたのですが、致し方ありません。『海原光貴』はもう素性が割れてしまいました。今度はあなたの顔をいただくとしましようか、ね！」

言つて、魔術師が『槍』を振るう。

それを受け止めたのは一つの式神だつた。

「!? な、何だそれ・・・」

「カミヤんに頼まれたから、悪役を演じてみたんだが。上手く出来てたかにやー?」

「っ！ 土御門元春！ 何故ここに！」

「言つたろ？ カミヤんに頼まれたんだぜい。ここ一月自分とその周りを嗅ぎ回つていた奴が御坂美琴に近づいたから、事情を聞き出してくれつてな」

「だが、声は！」

土御門は笑つて、フードの襟元を見せる。

「学園都市製のボイスチャンネルだ。その性能は肉声とほぼ変わらない。それに加えて小型だからいざとなつたら。ちびっこ探偵のものまねも可能だぜい」

「くっそ……本当に……何ですか。上条当麻……なぜあなたは……」

「……御坂が好きなんだろう？ オマエ」

「……は？」

魔術師は思わず変な声が出た。伏せていた顔を再び上げるとそこには土御門の顔を半分ほど剥した上条がいた。

「なっ……あつ……！」

「いやードツキリ大成功つてな。二重騙しで消しておしまい。そう思ったんだけど……事情を変えよう。オマエ、御坂が好きなんだろう？ ニセモノさんよ」

「……ですか」

魔術師は、口の中で何かを呟いた。

上条が眉をひそめる前に、彼はもう一度言う。

「ニセモノじゃ、ダメなんですか」 噛み締めるように、「ニセモノは、平和を望んじやいけないんですか。ニセモノには、御坂さんを守りたいと思う事も許されません」

「あ……？」

「ええそうですよ。自分だってこんな真似はしたくなかった。『海原』だってね、傷つけたくはなかったんです。だって、それが一番幸せじゃないですか。誰も傷つかない方がいいに決まってるじゃないですか。自分は、この街が好きだったんです。一月前、ここ

に來た時からずっと。たとえここの住人になれなくなつて、御坂さんの住んでいるこの世界が、大好きでした」

でもね、と魔術師は続ける。

「やるしかなかったんですよ。結果が出てしまったから。上条勢力は危険だと『上』が判断してしまつたから。ねえ、分かりますか？ 自分がどんな気持ちで『海原』と入れ替わつたのか。自分がどんな想いで、御坂さんのいるこの世界に傷をつけたか」

魔術師は、歪んだ顔に激情の表情を乗せて、

「分かるはずがない！ あなたが全部壊したんだ！ あなたがもつと穩便でいてくれたら、問題ナシつて報告させてくれたら、それで静かに引き下がれたのに！ 自分は海原を襲う事も御坂さんを騙す事もしなくて済んだのに！ 確かに、今の自分はあなた達の『敵』です。でもそうなつてしまつたのは誰のせいだ!?」

「……『上』のせいだろうか」

本当に平淡に上条は言つた。

「……何を……」

「何だ？ じゃあ逆に聞かせてもらおうぞ？ お前達は俺が潰しに行くような事をしてい

る『組織』なのか？」

「……は……」

「結局お前達が怯えてんのは見えもしない巨大な力だつってんだ。上条勢力？ ンだよそりや。勢力なんて大きなもんじゃない。俺の仲間は貴音だけだ」

「……………後の、御坂さん達はなんだというんですか……………」

「……………良く言つて『友達』。悪く言つて……………」

そこで上条は口の端を異常につり上げて、引き裂けるように笑う。

「——『捨て駒』かな？」

「あなたつて人はツツ!!」

「おう。怒れ怒れ！ もしかしてお前らは勘違いしてないか？ 俺が善人だとも思つてんのか？ 俺がやつてんのは全部俺の我儘だつうの。だから俺は友達を平気で傷つけられるんだぜ？」

「ハツ!! 覚悟してください!!」

「デメエみたいなあまつちよろい奴に俺は倒せない。まだ誰かを想う心があるなら、俺の前に立たない方がいいぜ？」

そう言つた上条は垂直に上げた左手から銃弾を撃ち出した。

「!? ——透明な銃?!? それも学園都市製ですか」

「いんや、これは異郷製だ。ちなみに土御門の声は俺のものまねな。結構似てるだろ？」

さて、と上条は言つて

「お前に大義名分をやろう」

「は？」

「目的を果たそうとしたけど邪魔が入って失敗したっていう大義名分をな！」

上条がそう言うと同時に、工事中のビルのあちこちが爆発し鉄骨が降り注ぐ。

「自分からっ!!? あなたは一体何を」

「お前の幻想・・・喰い殺させてもらうぜ」

崩れ落ちてくる鉄骨。上条は避けようともせず真つ直ぐに魔術師へ向かって走る。

そこまでの距離じゃないため、数歩で距離を詰めた上条は魔術師の顔面を殴りつけた。

「さて、このまま死ぬか？」

「・・・自殺願望でもあるんですか？」

「ないよ。ま、人間死ぬ時は死ぬさ。ただ、それは今じゃない」

その一帯に響く轟音。空を裂く不思議な音も響く。

気がつくとも上条達の真上の鉄骨が溶けてなくなり、周りにのみ突き刺さった。

が、魔術師は倒れた鉄骨と鉄骨の隙間に片手をはさまれているようだった。と言っても、鉄骨に押し潰されているのではなく、元から空いている隙間に手を突っ込んだような感じだ。超重量級の手錠をはめているような状態に近い。

「自分は、負けたんですか」

「さあな。それは偶然だし、お前はピンピンしてるしな」

上条は頭を搔いてそう言ったが、魔術師は首を横に振った。理由はどうあれ、今の魔術師は身動きが取れない。この状態で戦闘を続けても逆転はできない。

「負けました、か」魔術師は、小さく笑って「なら、自分はここで止まれたって事ですかね。御坂さんも、その他の誰も、殺さずに済んだって、そう言う事なんですかね」

「さあな。学園都市の闇は深い。お前も落ちる事になるかもよ」

「……守ってもらえますか、彼女を」

彼は問う。

「いつでも、どこでも、誰からも、何度でも。このような事になるたびに、まるで都合のいいヒーローのように駆けつけて彼女を守ってくれると、約束してくれますか」

それが、彼が願いつつも決して叶えられない望み。

本当は自分がやりたかった夢を、他の何者かに明け渡すという重み。

そうして。

「俺はヒーローじゃないし、この手は二本しかない。だけど、アイツが俺のこの手が届く範囲。学園都市の中ぐらいでなら助けてやれるかもな」

そう告げると、首を縦に振った。

まったく最低な返事だ、と魔術師は倒れたまま苦笑してつぶやいた。

とある御坂の最終信号

——とある研究所。

「おーい。白夜くん？　いないのかーい？」

上条が白夜が打ち止めを連れて来たはずの研究所を訪ねたが、人影はおろか電気すらついていなかった。

「仕方ない……電話してみるか」

スマホを取り出し友達のお気に入りに入りにいる番号にかける。

「……あ、白夜か？　今どこに」

『ナイスタイミングだ上条オ！』

「ん？　どうした白夜」

『打ち止めが連れ去られた！』

「は？」

『ユーカイだよ！　誘拐！』

「いや、分かるんだけどさ。何で？」

『……アイツがコンピに行きたいって言うから言っ……』

「行つて？」

『新発売のコーヒーがあつたんで、興奮してたら。いつの間にかいなくなつてたんですウ』

「・・・何やつてんだか。コンビニのトイレとか、周辺の公園とかは？」

『既に搜索済み。俺がお前に頼みたいのは、アイツの搜索だ！ お前なら得意だろ！』

「無茶言つてくれるなコンチクショウ！ ちよつと待つとけ、一〇秒だ」

『いにさしごろなはくと！』

掟破りの高速数かぞえを行う白夜。そんな友達に上条は、

「はえーよ！ でもできたわ」突っ込みつつ、「・・・よつしや。探索かけるぞ・・・」

『おう』

「・・・移動してるな。速い。車だ」

『ああ？ バスか？』

「・・・路線図にはない動きだ。自家用車、もしくはタクシーだろう」

『・・・そうか』

「場所は・・・あ？ そこは研究所の近くだぜ・・・？」

『研究所オ？』

「どうやら、緊迫した状況らしいな」

『あ？』

「・・・とりあえず白夜。量産型能力者の研究所・・・妹達の培養施設に向かってくれ
『あ？ どうしたんだよ』

「これは俺の仮説だが、もしも打ち止めを誘拐した奴が『何か』を企んでいたとしたら、
とてもマズイ・・・一刻も早くウィルスの正体を知る必要がある」

『だったら、アイツを連れ戻せば良いんじゃない？』

「・・・目的すら分かってないんだ。もし運が悪ければ打ち止めが死ぬ可能性がある」
『・・・着いたぜエ』

「ワオ。俺が話した瞬間向かってくれた。白夜くんマジ最高。んじゃ、こっちはこっち
で打ち止めを追ってみる」

『任せた』

上条と白夜。二人は別々の場所で同じ目的に向って走り出す。

白夜は上条に言われた通り、研究所に到着した。

「よオ。誰かいるか」

「あら、一方通行。お帰りなさい。ドアは壊さずともあなたのIDはあと九〇日ほどは
有効だから安心なさい」

「壊した後で言うな」

白夜は机に座る女性。芳川桔梗にそう告げると、

「妹達の最終信号。打ち止めにウイルスが打ち込まれてるってのは本当か？」

「！ どこ情報か定かではないけど凄いわね。その通りよ」

「内容は？」

「端的に言つて、人間に対する無差別な攻撃という所かしらね」

「・・・待て待て。あいつ等が全員そうなるとしたら・・・」

「あなたが想像している通りよ一方通行」

「・・・学園都市の終わりつてどこの話じゃねエぞ・・・。ソレ・・・」

白夜は、乱暴に携帯を取り出すと通話履歴から上条にかける。

『はい。こちら上条当麻』

「大変な事が分かったぜ」

『ん？ 何だ？』

「打ち止めに打ち込まれたウイルスは、人間に対する無差別な攻撃。それが全妹達にミサカネットワークを通じて送られるらしい」

『二万体の能力者の一斉蜂起？ 笑えない冗談だなオイ。で？ どうすりや止められるんだ』

「俺の手元に天井ほんにん夫の手掛かりと打ち止めのウイルス感染前データがある」

どっちを選ぶか、『壊す』か『守る』か。そう続けようとした白夜の声をさえぎり、『データを持つて外に出ろ白夜！ 場所が割れた。凍結された量産型妹達の研究所！ 地図で送る。こっちはちよつと忙しくなりそうだ!!』

「……分かった」

白夜はデータの入った封筒を掴むと、そのまま研究所を後にする。

「……迷い無かったわね、彼。電話の相手の言葉を信じてるみたいね」

——街中。

そこは夕方だというのに警備員や風紀委員といった人間で覆い尽くされていた。

（んだよこりや！ クソツ、貴音はどこにいる！）

上条はここに来るまでの間で何度も彼女に呼び掛けているが、答える気配はない。

「一体……何があつたんだ……？ すいません。何があつたんですか？」

「ん？ ああ。能力者の暴動らしいよ。学生寮を破壊した後、何かを追いかけるようにこの辺りまで傷跡が残っているだつて」

「……そう、ですか……」

上条は顎に手を当てて目をつむり、眼を『開く』。

！』

「……なるほど、変な道具をつけるイコール『才能がない人間が補うための能力』ってことか」

『そう言う事です！』

「……ま、安心したよ」

上条はそう言つて笑うと、研究所に向つて走り出す。

——研究所付近

上条は研究所に辿り着いた。が、白夜はおろか打ち止めの姿も見えない。

「学園都市の検問を打ち止め裸の少女を連れて突破できるわけないし……」

貴音、インデックス。グッジョブ。と上条は心の中で親指を立てると考える。

「……まあ、大体裏だよな」

研究所の裏に回つた上条は、スポーツカーを見つけた。

（おつ。白夜もいたいた……。ん？ アイツ汗をかいてる。あれは緊張から来る汗か

な……。つてのんきな事考えてる場合じゃねえよ。反射使えてないだろ、アイツ！）

「……残りコード数は五万九八〇二。いける」

白夜がボソリと呟く。上条は思わず首をかしげた。コード。上条も聞き覚えのある

単語だった。

ふと、上条の思考は強制的に遮られた。

「邪魔を……す、るな」

運転席のドアに挟まれた男が声を発した。そして聞こえてきた金属音。

（白夜に向かつて何やってんだか。あ。いや、そうか。白夜は今反射を切っているんだっけか）

「く……っ!?」

「邪魔を、するな」

白夜が予想以上に焦った顔をしたのを見た上条は、イタズラに笑って。

「よいしょおーっ!」

天井オジサン亜雄の頭に華麗な飛び蹴りをお見舞いした。

華麗に着地を決めた上条は、白夜の方を見た。文字通り、目が点になっていた。

天井は完全に意識を失っていた。

「あー、悪いいな。ムチャクチャ地味な倒し方で。つか揃いも揃って何で俺の存在に気づかないんだか」

「——Error. Break code No000001 to No3570

81. 不正な処理により上位命令文は中断されました。通常記述に従い検体番号二〇

〇〇一号は再覚醒します」

「……それより何でオマエは一字一句同じセリフなんだよ」

「あん？」

「何でもねエよ」

あ、そう。と上条が言おうとした瞬間。上条の額に銃弾が突き刺さった。視界の端で天井が拳銃を構えてフラフラと立ち上がる。

「……やってくれた……。お前さえいなければ……。全て上手く行っていたのに!!」

「……そう思うのも無理はないと思うがな、でもどつちにしろ、お前の負けだ」

「オマエはチェスや将棋で言う詰チエックメイトみにハマったんだ!」

「う、うああああああああああああああああああ!!!」

「うるせエ」

そう言つて白夜が天井を蹴ると、一〇メートルほどノーバウンドで飛んで行った。

「……おい。上条、ホントに大丈夫か？」

「おう。一応大丈夫だけだな……。後遺症とか残らなかつたら良いんだけど」

「……早く病院に行こうぜ？ 連れてってやるからよオ」

「……あ、ああ」

「オイ、芳川。打ち止めを頼む。上条は俺が病院に……。!」

「必要ないわ」

「は!?! 上条がヤバいんだぞ!?!」

「はい。それを聞いてミスカが駆けつけました」

「ミスカ・・・? 一号か?」

「ノー! ミスカは美咲です!」

「ああ。美咲か。頼めるか、上条を」

「お任せ下さい。とミスカは」

妹達が数人で上条を車に乗せる。

「ミスカが運転します。急いで病院に」

「一方通行は?」

「天井をブツ飛ばす」

「そいつは殺してほしいですね。とミスカは」

「殺れ。白夜・・・」

「上条・・・!?!」

「ソイツは、許せねエ奴なんだろ? だったら眼をつむってやる。好きにしろ」

「・・・早く行け」

「イエッサー」

上条を乗せたミサカ救急車は病院へ向かって走り出した。

「一方通行？ あなたのする事って？」

「アイツを殺す。だが、殺すのは俺じゃねエ・・・『上』だ」
「？」

芳川が首を傾げた途端。ゆっくりと起き上がっていた天井の体が、銃弾で穴だらけになった。

「うわ・・・」

「・・・見たことあんだろ。これが学園都市の裏側だな・・・」

白夜はそれを見届けると、上条の携帯を拾い上げる。

「・・・よオ、榎本貴音。元気やってるか」

『何でアンタがご主人の携帯に？ なんて事は聞きませんが、元気に思えます？』

「焦りと動揺。それと激しい動悸が電話越しに伝わってくるな」

『それなら結構。で？ 何です？』

「上条が撃たれた。正面から」

『ぬあんですと!?! こんな事してる場合じゃないですよ!』

「今どこにいますよ」

『外です。外！ 裏口ルートを通ってです』

「何してンだよ」

『人助けって奴です。もう終わりましたのでこれからマツハで帰ります！ あのいつものカエル病院ですよね!』

「ああ」

『ほら、行きますよインデックス!』

『とうまが大変なんだね！ 急ごうたかね!』

「……本当に早く帰って来いよ」

——病院。

手術室前の廊下に置いてあるベンチにインデックス・白夜・貴音の三人は並んで座っていた。

「……びやくや……とうまは無事かな……?」

「アイツを信じるしかないだろ。アイツは殺しても死なないようなゾンビヤロウなんだ。しかも今回の執刀医はあの冥土帰しだ。大丈夫だ。こんな所で死ぬ訳がねエ!」

「……そう……だね。信じるしかないんだよ」

「……ご主人。無茶しやがって……。おっと、ボケてしまった」

手術が一段落したのか、扉が開き冥土帰しが出てくる。

「うん？ まだいたのかい？」

「帰れる訳ねエだろ」

「とうまは!?! どうなんですか？」

「ご主人は？」

「・・・前頭葉に刺さった頭蓋骨の破片を取り除くのに苦労したよ。言語機能と計算脳力——この二つには少なからず影響が出るね」

「計算能力・・・」

「とうまは・・・もう喋れないの？」

「まあ、問題ないだろうさ。どうにもならない事をどうにかするのが僕の信条でね。〃二万ものクローン体を使った並列演算ネットワーク〃 そいつを使ってあの少年の脳の欠損部分を補わさせてもらうよ？ なに、電子体の意識を脳波に戻すのではなく、あくまで欠損機能の代用だからね、それほど難しい事でもないよ？」

「なにそれ」

「・・・アレか」

「面目ないです・・・」

「ま、すぐ起きると思うよ？ 彼は」

次に上条の眼が覚めたのはいつもの病室だった。

「あ、見慣れた天井だ」

「寝起きでボケれる余裕があるか・・・流石だな。上条」

「おっ白夜。おはよう」

上条はふと自分の首に手をやって

「何これ・・・。チョーカー？」

「オマエ拳銃で頭を撃たれたろ？ その時の碎けた頭蓋骨の所為で言語機能と計算機能が使えなくなっちゃったんだと。だから、ミサカネットワークに演算補助を頼むらしい・・・あと、充電式だからなあ」

「そうか。あれからどれぐらいたった？」

「まだ一日も立ってねえ。九月一日の朝三時だ」

「あと数時間で登校か・・・」

「カバンはここにあるぜ？ バツチリ宿題も入れてンじゃねえか」

「ありがとう・・・。貴音達は？」

「シスターは死角になるが病室のベンチ。榎本は家にカバンと制服を取りに行ってる」

「何でお前は持つてきてやらなかったんだよ・・・」

「女子の制服は触りたくないんでね」

「あ、そう。これは・・・?」

上条は自分のベッドのテーブルに置かれた赤い液体を指す。

「ああそれ? 冥土帰しに榎本が頼んで作らせたものだ。何かは知らんが絶対飲めつてよ」

「・・・おう」

スープ皿から直飲みする上条。それを横目に白夜は帰ってきていた貴音に尋ねる。

「なア。何だよアレ」

「ご主人の力の源。パワードリンクみたいなものです。まあ、バレたらインデックスの傍には居られないでしょうけど。私も、ご主人も」

「・・・シスターの?」

「美味い! もういらない!」

飲み干した上条の第一声である。それを聞いた貴音は半分呆れながら、

「それ飲まないのご主人ダメなんですよ!?! 今度からどんな手を使っても飲んでもらいますからね!」

「うええ・・・」

「・・・ま、頑張れ」

虚数学区・五行機関編

舞台裏の表側

学園都市の窓のないビル。

ドアも窓も廊下も階段もない、建物として機能しないビル。大能力^{レベル}の一つである空間移動^{テレポート}を使わない限りは出入りもできない密室の中心には、巨大なガラスの円筒器が鎮座していた。

直径四メートル、全長一〇メートルを越す強化ガラスの円筒の中には赤い液体が満たされている。広大な部屋の四方の壁は全て機械類で埋め尽くされ、そこから伸びる数万ものコードやチューブが床を這い、中央の円筒に接続されていた。

窓のないその部屋はいつも闇に包まれていた。ただし、円筒を遠巻きに取り囲む機械類のランプやモニタの光が、まるで夜空の星々のように瞬いている。

赤い液体に満たされた円筒の中には、緑色の手術衣を着た人間が逆さで浮かんでいた。

学園都市統括理事長、『人間』アレイスター。

それは男にも女にも見え、大人にも子供にも見え、成人にも囚人にも見える。その『人

間』は自分の生命活動を全て機械に預ける事で、計算上ではおよそ一七〇〇年もの寿命を手に入れていた。脳を含め前身はほぼ仮死状態に近く、思考の大半も機械によつて補助している。

(……、さて。そろそろか)

アレイスターがそう思った瞬間、タイミングを合わせたかのように円筒の正面に、唐突に二つの人影が現れた。一人は小柄の空間移動能力者の少女、そしてもう一人は彼女にエスコートされるように手を繋いだ大男だ。

空間移動能力者は一言も発さなのまま会釈すると、再び虚空へ消える。

闇の中には大男だけが取り残された。

その大男は短い金髪をツンツンに尖らせ、青いサンングラスで目線を隠した少年だった。アロハシャツにハーフパンツという、こんな場所にはそぐわない格好をしている。

土御門元春。イギリス清教の情報をリークする学園都市の手駒だ。

「警備が甘すぎるぞ。遊んでいるのか」

スパイである土御門は、雇い主であるアレイスターに向かって苛立った口調で言った。スパイであるものの、土御門はアレイスターの従属的な部下ではないのだ。

土御門の口調は突き放すような響きがあり、普段の彼を知るものなら驚きに身をすくめていただろう。自分の不満を隠そうとしない土御門に、アレイスターは淡く笑って、

「構わぬよ。侵入者の所在はこちらでも追跡している。これを使わぬ手はない。若干ルートを変更するだけで。プラン二〇八二から二三七七までを短縮もでき——」

「言っておくが」

土御門は遮るように言った。バン、と手の中のレポートをガラスの円筒へ押しつける。クリップで留められた隠し撮りの写真には侵入者の女の姿が映っている。

「シエリー・クロムウエル。こいつは流れの魔術師ではなく、イギリス清教『必要悪の教会』の人間だ。アウレオルスの時のようにはいかないぞ」

土御門はまるで無理な禁煙でもしているかのような苛立った様子で、

「イギリス清教だって人の作る組織である以上は一枚岩ではない。いや、構成の特性上、十字教の中でもあれほど複雑に分岐した国教は他にない。お前とて分かっているだろうが」

「隣人を愛する者同士が互いにいがみ合うとは、随分と素敵な職場だな」

「まったくだ」土御門は息を吐いて、「しかし、それ故にイギリス清教にも様々な派閥と考えがある。学園都市協力派だけとは限らないぞ。中には全世界を英国の植民地にして全ての国旗のデザインを一つに統一したいと考えるヤツまでいる始末だ。お前がウチのお姫様と結んだ『協定』にしても、どこまで役に立つかは分からん」

イギリス清教と学園都市のトップ同士が決めた『協定』さえ疑問視する者もいる。知

識の宝庫たるインデックスが学園都市内部にいる事が、既に情報漏洩の危機をはらむに違いないと（まあ実際科学の生徒の頭の中にコピーされている訳だが）。もちろん、『必要悪の教会』とは別枠の『騎士団』達が実際にインデックスのセキュリティが外れている事までは掴んでいないとは思うのだが。

「オレも教会に潜ればある程度の人心を操作する事もできる。だがな、それにも限度つてものがあるんだ。派閥や勢力が異なる所までは手を伸ばせない。伸ばせたとしても、どこかでこちらが意図的に操作した情報は歪曲してしまう」

彼は一度そこで言葉を切ってから、

「大体、アウレオルスの時でさえ散々あちこちに手を回していただろうが。魔術師は同じ魔術師が裁かなければならない。この法則はオレよりもお前の方が分かっているはずだ。学園都市は『科学』を、教会は『神秘』を、それぞれの技術を独占する事でアドバンテージが生まれている。その中で学園都市の面子が魔術師を潰してみろ。せつかく死守してきた門外不出の独占技術がそこから漏れるかもしれないと思われただけで立派な亀裂の出来上がりだ」

上条当麻という少年は、この一ヶ月強で何人かの魔術師と戦ってきた。しかし、ステイルや神裂は教会と事前の取り引きがあったし、アウレオルスや闇咲などは教会所属ではない流れの魔術師なので、それほど波風は立たなかった。

だが、今回は意味の重さが違う。学園都市に侵入してきたのは『イギリス清教独自の術式』を抱えた魔術師で、しかも取り引きもない。これが一派閥の意向なのかシエリーの独断かは判断できないが、仮に彼女の判断だとしても、勝手に倒すのはまずい。

シエリー・クロムウエルは王立芸術院でも最も寓意画の組み立てと解説に優れた人間だ。寓意画とは絵画の中に魔道書の内容を隠した暗号絵画の事で、例えば洋上に浮かぶ船の上から見た、夕暮れに水平線へ沈んでいく太陽の絵画があったとする。普通の人が見れば何気ない一枚の風景画に過ぎないが、この中の海水は『塩』を、太陽は『黄金』を意味し、これらを組み合わせると『黄金と塩を使えば、海の中を魚のように泳ぐ事ができる魔術の方法を示している』という情報を取り出せる。

他にも絵具のカラーや厚み、夕暮れという時間帯、船の上という場所……絵画の中にある些細な要素の全てが何らかの意味を持つ暗号として機能するので、何百年経ってから寓意画の読解に誤りがあったと判明するパターンも多い。真の意味で寓意画のスペシャリストになるのは、それぐらい難しいのだ。

インデックスが知識の収集・保管を担当するなら、シエリーは暗号技術によってその知識を封印・開封する専門家である。彼女が他勢力の手に落ちれば、イギリス清教が守り続けてきた複雑怪奇な暗号の解説法が丸ごと相手側に伝わってしまう事になる。

下手にシエリーを倒せばイギリス清教と学園都市の間に亀裂が走る。シエリーを送

り込んだ派閥が学園都市を嫌っているのだとすれば、そこを狙って亀裂を押し広げようとすするだろう。

だが、土御門はその先を敢えて言葉に出さない。

というよりも、出せない。その一文は口に出すのもためらわれ、胸の中に広がっていく。

——最悪、科学世界と教会世界の戦争となるかもしれない。

土御門はアレイスターを睨みながら、

「まあ、今回の件でもよほど間抜けな選択をしない限り、この火種が燃え上がる事はないだろう。だが、火種を消すために水面下で人死にが起きるかもしれない。お前は何を考えている？ 本腰を入れて警備に力を入れれば、いくらでも侵入を阻止できたくせに」舌打ちして、「とにかく、オレはシェリーを討つぞ。魔術師の手で魔術師を討てば、少しは波も小さくなる。それからスパイはこれで廃業だ。ここまで派手に動けば必ず目をつけられるからな。まったく、心理的な死角に潜ってこそそのスパイだというのに、四六時中監視されて仕事が——」

「君は手を出さなくて良い」

遮るようなアレイスターの一言に、土御門は一瞬凍りついた。

何を言っているのか、理解できなかった。

「君は手を出さなくて良いと告げた」

「……本気で言ってるのか？」

土御門は、相手の正気を疑うように言った。

「可能性は、決してゼロではないんだぞ。水面下での工作戦なんてビルからビルへ綱渡りするようなものだ、手を間違えれば戦争が起きるかもしれないというのに！」

大量破壊兵器の設計図が他国に漏れれば、それだけで戦争の火種として正当化される。学園都市内で教会の魔術師を捕獲するとは、つまりそういう意味なのだ。

確かによほどの事がない限り、全面戦争にはならないだろう。しかし、逆に言えばよほどの事があれば戦争が起きてしまうのだ。それも国家と国家の戦争ではない、国境の壁すら越えた『科学』と『教会』、二つの世界の大戦だ。

学園都市を代表する『科学』と教会を代表する『オカルト』の間に圧倒的な戦力差はない。それはつまり、実際に戦争が起きれば泥沼のように長引いてしまうのだ。

「アレイスター、お前は何を考えている？ 上条当麻に魔術師をぶつけるのがそんなに魅力的か。あの右手は確かに魔術に対するジョーカーだが、それでもアレだけで教会全体の破壊などできるはずもないだろう！」

「プラン二〇八二から二三七七までを短縮もできる。理由はそれだけだが？」

アレイスターの言葉に、土御門の息が詰まる。

プラン。『計画』というよりは『手順』といった所か。アレイスターがこの単語を口にする場合、該当するものは一つしかない。

「虚数学区・五行機関の制御法か」

土御門は忌々しげに呟いた。虚数学区・五行機関。学園都市ができた当初の『始まりの研究所』と呼ばれているが、今ではどこにあるのか、本当にあるのかも分からないと言われる幻のような存在。ウワサでは現在の工学でも再現不可能な『架空技術』を抱え、また学園都市の裏側からその全権を掌握しているとさえ考えられている。

『外』の教会や魔術師はこのビルを指していると思っ**て**いるようだが、違**う**。実際はそんなものではないし、本当の事を『外』に教える訳にも**い**かない。

言えるはずがない。学園都市に対して絶大な影響力を持つ『ソレ』が、誰にも制御できず何のため**にある**のかも分からないまま潜**んで**いるなどと。

学園都市を治めるアレイスターとしてはあらゆるものを利用してでも五行機関の御し方を掴まなければ**なら**ない。いや、アレイスターはおそらく御し方自体はすでに掴んでいる。ただし、それを**実行**するための材料が、キーが足りないのだ。

『手順』というのは鈴科白夜が行った絶対能力進化実験を思い浮かべると分かりやすい。あれと同じく、一定の順序で事件・問題を起こしてキーを作り上げていく。

「お前、本当に戦争を未然に回避する自身があるのだろうか？」

「その自信は君が持つべきだろう。舞台裏を跳び回るのは君の役割だ。なに、君の努力次第では水面下の工作戦にしても死者を出さずに済むかもしれないぞ」

始業式

カツンツ。と早朝の誰もいない通学路に音が響く。

その音の正体は、少年が使っている現代的なデザインの杖から発せられたものだった。

「つつかよ。何だってこんなもんつけて歩かなきゃならないの?」

「ご主人がバツタバツタ転ぶからじゃないですか」

「仕方ないだろ。三半規管が上手く機能しないんだから」

「だからこそその杖ですよ。我慢我慢」

上条は隣を歩く少女を軽く小突く。

貴音は上条と同じ学校に通っているのです、制服はセーラー服である。

上条は首をかしげる少女に似合ってる、と一言だけ言うと、全力で走りだした。

「ちよ。ご主人っ！ 走るなんて馬鹿ですか!!」

「うるさい！ こちとら走ってないとやってらんないんだよっ！」

学校まであと少し、別に遅刻をするわけでもないのに上条達は全力で走っていた。

学校に着いた上条は開いてない校門を乗り越え、中に入る。貴音の場合、乗り越えるというよりは飛んで。の方が正しいが。

「………さて、学校すら開いてない訳ですが」

「……全く。病院から登校なんて初めてですよ。それにまた抜け出す形ですし」

「いや、だってあの先生しつこく診断するんだぜ？」

「今回に限ってはご主人の治癒力が大幅に落ちていたんですからしようがないでしょう！　ま、私の見立てではその脳の欠損。九月中に治りますよ」

「ふーん。そう」

「冷たいっ！　と叫ぶ貴音を放って、上条は学校へと向かう。今日早く来たのは理由がちやんとあつての事だ。

「貴音。見えるか？」

「いつも通り……ですね。本当にご主人は見えないんですか？」

「ああ。俺はこの学園都市全ての能力を消してる訳じゃないから……。まだピースは揃ってないんだよ」

「はあ……」

「で？　何が見える」

「簡単に言えばもう一つの学園都市、ですね。干渉はできませんがそこに確かにありま

す」

「流石電腦少女。見えないWiFiを掌握するだけあるな」

「褒めてるんですか？ それ」

「褒めてる褒めてる」

上条達が早く街に出たのは、誰にも見られずAIM拡散力場の確認をするためだ。

数刻前、上条の元へアレイスターから指令が来たのだ。榎本貴音がAIM拡散力場にアクセスするようにと。

AIM拡散力場は本来能力者が無意識に放つ磁場のようなものだ。だから見る事はできないし、意識的に触った事を感じる事はできない。

だが、上条の隣にいる少女エネは違う。上条とは違い学園都市の全ての能力を掌握する『多種能力』の持ち主に加え、日々電腦少女としてインターネットを駆けまわったりしている為か、時にAIM拡散力場を目視したりしている。

流石に干渉まではできないらしいが……。

「これで任務達成か？」

「……そうみたいですね」

「いつもに増して楽だな……。何か裏がありそうだけ」

「勘ぐり過ぎな気もしますが……。あながち外れじゃない気がしますね」

それから二人は学校に初めの一人が登校してくるまで、なんとなくで勉強をした。

(A M 0 8 : 0 0)

少しずつ生徒が登校し始めた頃。上条は教室に、貴音は職員室に向かう。

「そう言えばちよつと復習です当麻。『A I M 拡散力場』とは何ですか？」

「A n I n v o u n t a r y M o v e m e n t の略。意味は『無自覚』。能力者が自然に発する力のフィールドだろ？」

「その通りです」

「何だよ復習って……」

上条は呆れ気味に教室のドアを開け、席に着く。数名が注目するがすぐに自分達の話に突入した……と見せかけて全員上条の方を向いた。

「上条！ お前どうしたんだよ首の！」

「首？ ああ。チョーカーか……。ちよつといつもの不幸だね」

「大丈夫なの？」

「おう。心配すんな」

上条は今日から貴音と授業を受けられることにわくわくしていたのだが、そう言え
ば、と、ふと別のことに気付いて

「んー？ どしたんカミヤん。まさかここまで来て夏の宿題全部ウチに忘れてもうたー、なんて愉快に不幸な事実気がついたとか？」

「あ、なに？ 上条ひよつとして宿題忘れてんの？」

「えつと、上条君。本当に宿題忘れちゃったの？」

「うおおやったーっ！ 俺達だけじゃねえ！ 仲間は他にもいたーっ！」

「バンザーイ！ 先生の注目浴びんのはどうせ不幸な上条だけだから、これで僕らのダメージは軽減されるかも！ バンザーイ!!」

いろめき立つクラスメイト達に上条は愉快的奴らだ。と上条は笑う。

「はいはい、それじゃさっさとホームルーム始めますよー。始業式まで時間が押しちやつてるのでテキパキ進めちゃいますからねー」

そう言いつつ入って来た小萌先生は少し停止すると、そつと口を開く。

「み、みなさーん？ 席についてくださいねー？」

「「「はい」「」」」

小萌先生が来た事で、みんな席に次々と着いていく。

「あれ？ 先生、土御門は？」

「お休みの連絡は受けてませんー。もしかしたらお寝坊さんかもしれませんー」

上条の問いに、小萌先生は首をかしげながら答えた。

「えー、出席を取る前にクラスのみんなにビッグニュースですー。なんと今日から転入生追加ですー」

おや？ とクラスの面々の注目が小萌先生に向く。

「ちなみにその子達は女の子ですー。おめでどう野郎どもー、残念でした子猫ちゃん達ー」

おおおお!! とクラスの面々がいろめき立つ。

そんな中、上条は一人、窓の外を眺めていた。完全に我関せずと言った調子だ。何故か、言い知れぬ嫌な予感の襲われたからだ。

ありえない。不幸な不幸な上条当麻の日常において、ごく普通に美少女転校生がやってくるなんて事はまずありえない。

(……、何か。とんでもないオチがついた方がいい気がする)

一人目は我々が電腦少女、榎本貴音で決定だが。

二人目はどうだろう。小萌先生繋がりなら姫神秋沙辺りが怪しいが、世界は広いのだ。年齢詐称した御坂美琴や神裂火織が突撃してきたり、二万體以上の妹達が押しかけてきて一気に生徒総数が一〇倍以上に膨れ上がったり、羽を隠した天使が降臨してくる場合もあるかもしれない。

「い、いけない！ それはちよつと楽しそうだとか思った自分がいけない！」

「上条ちゃん？ なに頭を抱えてぶつぶつ言ってるんですかー？」

小萌先生はちよつと首を傾げた後、

「とりあえず顔見せだけですー。詳しい自己紹介とかは始業式が終わった後にしますからねー。さあ転入生ちゃん達、どーぞー」

小萌先生がそんな事を言うのと、教室の入り口の引き戸がガラガラと音を立てて開かれた。

一体どんなヤツがやってくるんだ、と上条が視線を向けると、

「私。姫神秋沙、よろしく」

(あ、姫神か・・・)

「初めまして、ニコニコ動画から転校してきました！ 榎本貴音です。よろしく仲良くしてくださいー！」

「.....ぷっ」

「「あはははははははははは」」

「なんやねんそれ！ 君面白いわあー！」

『『笑うな』』

上条、小萌、姫神を覗くクラスメイト全員に螺子がぶつ刺さる。

『『人の冗談を笑うなんて、人として最低ですよあなた達！』』

次の瞬間には全員の体から螺子は消えてなくなっていた。

「・・・あーあ」

ある程度長い始業式も終わり、上条は教室でホームルームを聞いていた。

新学期の諸注意など、学校によつて違うものの大半の事はどの学校も共通なのであまり気にする事ではない。

宿題も集められ、姫神・貴音の詳しい自己紹介も済んだ所で上条はふと気付く。

（あれ、今日まで大きなイベントが起きてない・・・！ 暇だ）

それが当たり前前の人間が送る日常というものだが、この少年の観点は人と少しずつれている。

さて、帰るか。と上条が席を立つと、転校生と言うことで囲まれていた貴音がトコトコと向かってきていた。

「一緒に帰りませんか？ マイマスタご主人様」

「・・・帰つてどうする気だ？」

「どこか遊びに行きましよう！」

「んー。そうだな」

「・・・カミヤん。リア充はどうなるか知つとるな？」

青髪ピアス筆頭に、クラスの男子が拳を鳴らす。だが、負けじと貴音も殺気を放とうとするが、上条がそれを止めるように貴音の胸の前に手を出し、自ら立ち上がった。

「お？ カミヤん。やる気か？」

「そーいやこの前。俺、聞かれたんだよなー」

「？」

クラスの半数が上条の言葉に首をかしげる。

「あなたの隣にいたイケメンの青い髪の子は誰ですか？ って」

「なっー！」

それを聞いた青髪が、上条の両肩を勢い良く掴む。そして前後左右に振りながら怒鳴り散らすような勢いでまくしたてる。

「一体どんな子や！ 野郎とかやったらすまさんでカミヤん！」

「ああああああ、安心しろろろろよ青ピいいいい。かかか、可愛らしい女の子だったよおおお。なな、何かお礼がしたいいいいいとか一目惚れれれとかいい言ってたあなあ・・・」

「どこやカミヤん！ 今すぐ言うんや!!」

「だだだ、第七学区のセセセブンスミストオオ。ままま、毎日四時から五時に待ってててるらしいいい」

「今すぐ行くで僕のマイエンジエエル!!」

青ピが全速力で教室を出て行ったのを見た上条は、一仕事終えたサラリーマンのよう
にため息をついた。

「・・・上条本当かよ。青ピに一目惚れした子がいるなんて」

「本当だぜ? なんか青ピが助けたみたいだな。お礼がしたいって言ってた。顔しか知
らないって言ってたから青ピの写真見せたけどハズレじゃなかったぜ」

「・・・敵が増えるかもしれない。覚悟しておくぞ皆」

「おう」

変な所で一致団結するよなこのクラスは、と思いつつも青ピ・・・いや、少女の恋を
応援する上条であった。

アフタースクール

上条と貴音が学校の外へ出ると、見慣れた少女が見慣れぬの少女と一緒にいるのを見た。

「・・・何してんだインデックス？」

「あ、とうま。聞いて、友達」

「は？ ナニ？ 人の高校に勝手に来て、相変わらずあなたは顔が大きいですね？」

「黙ってるよ貴音・・・。友達って・・・どちらさま？ その制服霧ヶ丘女学院の物だろ？ 何？ お前姫神と一緒に転校してきたの？」

「あ、えつと・・・」

「ひようかつて言うんだよ！」

「ひようか？」

評価・氷菓、上条の中で『ヒョウカ』という単語がグルグル回る。

「あ、あの私。風斬氷華、です」

「あ、そう。俺は上条当麻」

「榎本貴音です」

「んで？ どこへ飯食いに行く？ もう予定変更だ。今日一日は外で遊びます」

「え？ 家でご飯食べないの？」

「このまま遊ぶんだから、帰って集合とか面倒臭いだろ？ だから食べに行きます」

「わーい！ そうだ、ひようかも一緒に行こう？」

「え・・・いいの？」

「断る理由なんかないよ。ねえ、どうもたかねもいいよね」

「だな」

「ですね」

二人が一秒すら待たずに即答すると、風斬は少し驚いたような顔になった。

「えっと・・・ありが、とう」

「んー。一日遊ぶんならちよつと金があるか。悪い、ちよつとコンビニで金下ろしてくるから、ここで待ってる」

彼はそれだけ言うと、学校のすぐ近くにあるコンビニへ向かい、入り口の側にあるATMを操作する。

学園都市の生徒はもれなく奨学金制度に加入される。月に一度、まるで給料日のようにお金が振り込まれるのだ。

一見するとかかなり便利な制度に聞こえるが、実は能力開発の人体実験の契約料、と受

け取る事もできる。名門であればあるほど、レベルが高ければ高いほど奨学金の額も高くなり、それだけ重要な研究に関わっている、という訳だ。

『特別な待遇を受けている』少年を除けば。

書庫では無能力者。平凡な高校に通っているはず上条だが、下手するとあの一方通行より多く奨学金を受け取っていたりする。

(……ま、表向き人体実験つつつても聞くほど物騒な話じゃねえけどな)

彼は適当に考えながら、お金を財布に入れつつコンビ二を出る。

と、不意に横合いから声がかかった。

「おいおいちよつとー、その少年。無用心じゃんよー」

「……ゲツ。黄泉川」

「……なんだ。風紀委員のクソガキじゃん。それでも一応注意しとく、ATMの近くで財布を見せながら無防備に歩くんじゃないの。奪ってくださいと言ってるようなもんじゃん」

「は？ 心配されることじゃねーよ」

「用心するに越した事はないじゃん」

「いやー。俺から財布取ろうとする馬鹿なスキルアウトはここらにはいませんからね」

「それでも次からは気をつけるんだぞ」

「はいはい……」

上条は呆れながらそう言うと、インデックス達の方へ戻ろうと歩を進める。その時、服のすそをチヨイチヨイと引っ張られた。

「ん？ 姫神か。転入おめでどう」

「別に祝われる事じゃない」

「だよなー。あ、そうだ。姫神は『風斬氷華』って知ってるか？」

「名前は。霧ヶ丘でも見た事がある」

「名前は……って事は実際には見た事ないってことか」

「……そう。誰も彼女を知らない。名前だけなら、いつもテストの上位ランクとして発表されているのに」

「他に情報は？」

「先生に一度教えてもらった、風斬氷華は『カウンターストップ正体不明』と呼ばれていると。いわく、風斬氷華は虚数学区・五行機関の正体を知るための鍵だと」

上条は眉をひそめた。

虚数学区・五行機関。今はどこにあるのか誰も分からないとされる、学園都市最初の研究機関。そして現在の最新技術でも再現できない多くの『架空技術』を有していると言われ、ウワサでは学園都市の運営を影から掌握しているとされる、この街の深い暗部

だ。

確かにそこにあるはずなのに、誰もそれがどこにあるか分からない謎の機関。

「先生の話では、風斬氷華には彼女個人の能力を調べるための研究室特別クラスがあるという話だった。個人のために研究室を用意するなんて滅多にないから。実はそれは『正体不明』ではなく、虚数学区・五行機関の正体を探るための研究室だって」

「虚数学区・五行機関の正体……。誰もどこにあるか知らない。か……。か……。か」
上条がそう呟いた時、グワツ。と世界が歪むような感覚に襲われる。

「何だ？ 今の」

「どうかした？ 上条君」

「は？ 今何か感じなかったか？」

「ううん。何も」

「とうまー!!」

遠くからインデックスの声が聞こえる。上条はどうした！ とちよつと大声で問いかける。

「たかねが！ たかねが！」

「はっ！」

全力で、ほぼ数歩でインデックス達の所へ帰った上条は信じたくない光景を見た。貴

音が、いつもディスプレイの向こう（たまにそのまま出てくるが）で見るエネの姿でうわ言のように何かを言っている。

「貴音！ エネ!! おい。どうした!」

「—— 一から二〇までの結^{セキユリテイ}界の解除を確認。第三段階^{フェイズスリー}に移行。掌握開始——」

「インデックス! 何があった」

「えっと。たかねがひょうかと話してて、ひょうかをバシバシつて叩いたら急に姿が変わって……。どうなってるの?」

「……。ちつくしよう!」

上条は乱暴にスマホを取り出すと、スマホに学習装置と呼ばれる人の頭に機械のプログラムなどデータ化されたものを人工的にいれこめる機械を接続し、片方を首のチョーカーにぶっ挿す。

そして、上条の頭の中にスマホにインストールされたモバイルエネから、現在の貴音の状態が流れ込んでくる。

「……………は? AIM拡散力場に自動アクセス? 主導権移行中? ……って事はまさか——っ!」

上条は背中に悪寒を覚え、未だにブツブツ言っている貴音を右手で掴むと、風斬に向かつて怒鳴るように、

「風斬！ お前、何ともないか!？」

「え、う、うん」

（・・・じゃあ風斬と貴音の状態は関係ないのか・・・？ いや、まさか・・・）

可能性を捨て切れず上条が唸る。インデックスは自分が何をしていたか分からず、オロオロしていた。

「――全てのプロセス終了を確認……。固体名『榎本貴音』とその主『上条当麻』を、我が主と認めます。よろしくお願いします。マイマスター」

「……………はい?」

そう言い終わると、貴音の目にハイライトが戻る。

「……………ご主人? どうしたんですか、そんな変な顔をして」

「違和感はないか? 何か体に異常とか」

「ありませんよ? ただしいて言うなら……」

「しいて言うなら?」

「今ならご主人以外なら誰でも勝てる気がする……」

「いやいつも通りだろ」

上条は何となく、さっきの事は忘れよう。などと考え、三人を連れお食事に向かった。

放課後 Break_Time.

「おー。とうま、これがウワサの地下世界なんだね」

「地下街な、地下街。まあ確かに地上から土を掘り返して造られてるから『地下世界』でも間違いないやねエけど・・・、これだけ明るいところのビルの中の気もするな」

「はしゃぐインデックスに上条は自分の意見も織り交ぜながらツツコミを入れる。」

「学園都市には地下街が多い。駅を中心として、各デパートの地下を繋げ、迷路のように展開されている。」

「とりあえずメシでも食いますか。インデックス、なんか希望とかあるか？ あー、高いトコと行列ができるトコは禁止な」

「そんな所行かなくてもいいよ。安くて美味しくて量が多くてあまり人に知られていないお店がいい」

「・・・・・・、それはそれで探すのが難しそうだけだな」

「あるんでしょうかね・・・・。この街にそんな店・・・・」

「貴音がポツリとつぶやくが、上条がふと思いつく。」

「ほぼ食い放題の店なら知ってる」

「ほんと!？」

と、いう事で移動する事になった。

「——普通のお店だよ?」

「ところがどっこい。二分で巨大料理三杯食えたらそのお客と連れれの客の料理がタダというお店です」

「インデックス。遠慮せずに高速で食ってやってくださいね!」

「任せてほしいかも!」

上条達は店に入るとまずインデックス以外の三人の料理を頼む。

「えーと。ご注文は以上でよろしいでしょうか?」

「・・・大食いチャレンジ。やらせて下さい」

「やるんだよ!」

インデックスがそう言って箸を握る。奥の調理人達も燃え始めたようだ。それもそのはずこのシスターさんがもし完食できたら、料理がタダなのだ。

「それでは」

上条達は別テーブルでその様子を食べながら見ていた。インデックスのテーブルに置かれた大きなどんぶり。あれはまさかインデックス用に作られたのではないだろうかといったような大きさだ。

「始めっ！」

いただきます。とも言わなかった。インデックスはおあずけされた犬のように全力で消費していく。三〇秒も立たないうちに一杯食べ終わった。

「うわー。アレ本当にシスターかよ……」

「グリモアの管理を任されているだけありますね。ただの腹ペコキャラじゃないって訳ですね……」

「すごいね……、インデックスちゃん」

「結局、インデックスにあれだけの料理を食べさせたかったって訳でしょ？ ご主人」

「ああ。あれだけ食べればインデックスも満足するだろ」

「ごちそうさまなんだよ！」

一分四十五秒。一五秒もの余裕を残してインデックスは食べ終わった。食べるのに三〇秒だから、おそらく一五秒は食器交換の時間だろう。

「……うわー。暴食って確か七つの大罪じゃなかったでしたっけ」

「どうみてもアイツには適用されてないだろ」

上条は呆れながらそう言う、しかもインデックス社お代わりを要求している始末だ。時間制限が無かったら彼女はどこまで食べられるのだろうか。

「……よし、せめて俺達の分は払って帰ろう」

「……ですな」

「あ、あのお客様。決まりですので」

「いいいぜ、そんな事が決まってるっていうんなら……その幻想をプライドごとぶち殺す!!」

上条と貴音は口をそろえてレジカウンターにお金を置いてインデックスを連れて店を出る。

「ふう。食った食った」

「結構食べましたねー。ご主人一応ですけど」

そう言つて貴音が指し出すのは赤黒い液体が入ったペットボトル。

上条は渋々受け取つて舌打ちを一回して口に含む。

「とうま。何飲んでるの?」

「人道的に飲んじやいけないもの」

「そんなものとうまに飲ませてるの!?! たかね」

「そうしないとご主人が死ぬと言つたらどうします?」

「……許すかも」

「よろしい」

完全に風斬を置いてきぼりなのだが上条達はそれでも風斬がいる事は忘れていない。

それなりに気にしているし、話しかけてもいる。

「ご主人。遊ぶと言っても限られますけど、何をするんですか？」

「そうだな・・・地下街だからゲームセンターとかが主流なんじゃないか？ カラオケと

かボーリングとか、アウトドアはあまりないだろ」

「^{地下}二十二学区ではどうか分かりませんがね」

貴音の言葉に上条は苦笑する。そして、インデックスと風斬が止まっているのを発見した。

「おい。どうしたインデックス」

「ご主人。テレパスです」

「・・・なるほどね」

上条は貴音からテレパスの内容を聞かせてもらった。要約すると危険なテロリストがいるから逃げろ。らしい。まあ気付かれないように、がネックらしいが。

「・・・遊びは終わりみたいだな。インデックス」

「・・・て、テロリスト？ なんか怖いんだよ」

「・・・大丈夫。だと思いたいですか・・・！」

「貴音。感じたか？」

「ええ。西洋の術式ですね」

「相手はどうやら魔術師のようだな．．．」

上条がポツリと呟いた瞬間。

『——見いつつけた』

それは女の声だった。

ただし、何も無いはずの壁から聞こえた。

上条と貴音は最初からそこを見ていた。壁に張り付いた掌サイズの泥の塊、その中心に埋め込まれたようにある玩具のような人の目。

泥の表面がさざ波のように揺れ、その振動が音を作り出す。

『うふ。うふふ。うふうふうふ。禁書目録に、幻想殺しに、虚数学区の鍵。どれがいいかしら。どれでもいいのかしら。くふふ、迷っちゃう。よりどりみどりで困っちゃうわあ』

「．．．．．狙いは俺たちかよ．．．」

上条のその声が届いていたのかは分からない、だがその声は『——ま、全部ぶつ殺しちまえば手つ取り早えか』

場末の酒場でも聞かれないような粗暴な声色へと切り替わる。

上条はその泥に包まれた眼球を、射抜くように睨みつける。それと並行してインデックスは切り捨てる。

「土より出でる人の虚像——そのカバラの術式、アレンジの仕方がウチとよく似てるね。ユダヤの守護神たるゴーレムを無理矢理に英国の守護天使に置き換えている辺りなんか、特に」

「俺も全く同意見だよインデックス。という事は、コイツがテロリストって訳だ」

『うふ』と、泥は笑う。『テロリスト？ テロリスト！ うふふ。テロリストってというのはこういう真似をする人達を指すのかしら？』

水風船を割った時のように、音を立てて泥と眼球は弾け、壁の中に溶けて消えた。瞬間。

地下街全体が大きく揺れた。

「おおっ」

まるで嵐に放り出された小船のような振動だが、上条は楽しそうに声を漏らす。視界の端では、転びそうになったインデックスが風斬の腕の中にすっぽりと収まっている。

さらにもう一度、砲弾が直撃したような揺れが地下街を襲う。爆心地は遠いが、その余波が一瞬で地下全体に広がっている感じだ。

そのせいで亀裂が入ったのか、天井から粉塵のようなものが落ちてくる。

蛍光灯が二、三度ちらつき、全ての証明が同時に消えた。数秒遅れて、非常灯の赤い光が薄暗く周囲を照らし始める。

これだけ大きな攻撃をしたからだろう。警備員達が隔壁を下ろし始めた。そう、俺達は閉じ込められたのだ。まあ他にも逃げ遅れた人はいるが、

『さあ、パーティを始めましょう——』

ぐちゃりと潰れた泥から、女の声が聞こえた。すでに壊れた『眼球』の最後の断末魔、ひび割れたスピーカーを動かすように。

『——土の被った泥臭え墓穴の中で、存分に鳴きやがれ』

さらに一度、一際大きな振動が地下街を揺らした。

そんな事があつた後、暫く上条はじつとしていた。何をするわけでもない。ただ壁に寄りかかりボーっとしてただけだった。おもむろに見せかけタバコを取り出し、火をつける。

「……、向こうはこっちの顔を確かめてから襲ってきたみたいだし、迎え撃つしかなさそうだな。インデックス、風斬とどこかに隠れてろ」

「とうまこそ、ひようかと一緒に隠れてて。敵が魔術師なら、これは私の仕事なんだから」

「あ、そう？ んじゃ任せるわ」

「……え？ と、とうま？ こうそこは、危ないぞ。てきな感じで止めるんじゃ……」

「だってお前一度言い出したら聞かないじゃん。自分の都合を通すことに必死でさ、守られてる事に気付けない子供だし？ 一度痛い目に遭つていた方がいいかなって。ほら、親の加護がなくなった子供がどうなってるかっての俺、見てみたいし」

インデックスは何故か泣きそうな顔になった後、

「どうまでも手伝ってー！ 私一人じゃむーりー！」

駄々をこね始めた。

「おい。隠れてろって言ったのはどこの誰だよ」

「言っでないもん」

「言ったし、やっぱりお前一人じゃダメじゃん。ほら、経験豊富なお兄さんに任せなさい」

「い」

「……………ご主人」

「あ？」

貴音に呼ばれ、上条が振り返った時、手近な曲がり角から足音が聞こえた。

「……………二人？」

「ですね」

「……………どうま？ たかね？」

「……………あ、あの……………何だかよく分からないんだけど……………私が、

手伝わってという方向は……ない、の？」

「ないね」

「ないです」

上条は『眼』を開こうかと一瞬迷ったが、あまり人に見られていいものでもないので、止める事にした。一番知られたら厄介な奴が来そうだからだ。

インデックスに抱えられている三毛猫が、鳴きながら何かから逃げようとしていた。そして曲がり角の向こうから、女の声が飛んできた。

「あら？　猫の鳴き声が聞こえますわね」

「黒子。アンタ動物に興味無いんじゃないか？」

「かくいうお姉様は興味がありましたよね」

「べ、別に私は……」

「あらあ。わたくし、知っていますのよ。お姉様には寮の裏手にたむろつてる猫達にご飯をあげる日課がある事を。しかし体から発せられる微弱な電磁波のせいでもいつも一匹残らず逃げられて、猫缶片手に一人ポツンと佇む羽目になっている事も！」

「何故それを……!?　つてか黒子！　アンタまたストーキングして……」

曲がり角から現れた二人の少女は、上条達四人の姿を発見して足を止めた。言うまで

もなく、彼女達——御坂美琴と白井黒子は敵ではない。

「ちよつとその人！ 見た所高校生に見えますけど、喫煙はいけませんわよ！」

「……黒子。何もこんな時にまで……」

美琴が呆れ呆れそう言うが、黒子の指さす先の人間を見て驚愕する。

「アンタ……何して……！」

「ん？ ああ御坂か。ちよつとな」

「ちよつとじゃありませんの。身体を壊しますからやめて下さいまし！」

「初めて会った時も同じような事言つてたよな。黒子？」

「……？」

知り合いのような口調で話しかけられた黒子は少し暗い中で必死に顔を見定めようとして——、顔を歓喜に染めた。

「当麻お兄様ですの!! こんな所で何をしていらつしやつたのですの？」

「は？ ちよ、黒子？」

「ほら、始業式だけだったろ？ だからちよつと外食してから遊ぼうかと」

「大きくなりましたねー。黒子ちゃん」

「貴音お姉様まで！ ああ、お二人に逢えて黒子感激ですのっ！」

キャー、とかそんな効果音がつきそうな勢いで黒子は話す。と、美琴が耐えきれなく

なつたように黒子の肩を掴んで、

「ちよつと、どういう事か説明してよね？」

「あ、すみませんのお姉様。……では、改めて紹介させていただきませう。高校生の上条当麻さんと榎本貴音さん。私にとって当麻お兄様と貴音お姉様は、私が風紀委員に入るきつかけをくれた人ですの」

「ジャツジメントに？」

「ええ。あの頃から当麻お兄様は面倒事に巻き込まれやすい体質だったらしく、幾度となくそりやあもう幾度となくですの。この黒子を助けて下さいましたの」

「……あの頃は面倒を避けるために風紀委員やつてたからな……」

「それですの！ 私がやつとの思いで風紀委員に入ったというのに、当麻お兄様も貴音お姉様も居ませんでしたの！ 三人で「ジャツジメントだ！」が私の夢でしたの……」

「まあ今も腕章と免許は持つてるけど……。結局はなんだ、遊園地と水族館に一緒に行つたぐらいか？」

「花火大会も誘つて一緒に行きましたよ？」

「ああん。覚えててくださつて黒子感激ですの！」

「何？ あんた等、そんなに前から知り合いなわけ……？」

「おい。ここでビリビリはやめろよ御坂。洒落にならねエから」

「……、ひよっとしてですけどお姉様？ お姉様が言う “あの馬鹿”とは、当麻お兄様の事でしたの!」

「え、ええそうよ！ コイツが私の事ガキとか言うから……!」

「当たり前だろうーが。お前は子供だ。頭がどれだけ良くたつて人生の経験値はそこにあるからな」

「……、あ、それと。もうビリビリできませんよ？ あなたのAIM拡散力場は掌握したので!」

「……、あー！ あん時のメイド少女!」

「誰がメイド少女ですか！ 良いですか？ これは罰ゲームでしかたなく呼んでただけでしょね！ 今ではそっちの呼び方の方が妙にしっくりきてしまつてると、そう言う訳なんですよ！ ねエ？ ご主人!」

なにおう！ やりますか？ と二人が睨みあう。が、上条達は知った事ではない。

「さて、どうする？ 俺達は閉じ込められたんだろ?」

「その前に質問なんだよとうま。たかねと言いつ合つてああの品の無い人は誰？ クールビューティーに似てるけど、別人だよね?」

「んーまあな。何だろう姉?」

「双子の……ですかね」

「また厄介事ですか？」

「ん、まあな」

黒子はため息を一つつくくと上条の前に立ち、顔を指さして言った。

「いいですよの当麻お兄様。もしまた首を突っ込むのであれば、絶対に腕章をつけて下さいましー」

「あーはいはい。一般人は巻き込まれるな。って事ですねー」

「どうも？ まさか本当にやるつもり？」

「当たり前だったの」

上条はそう言いながら『影』から取り出した腕章を右腕に付け、もう一つを貴音に投げる。

「貴音。それ着けとけ」

「……分かりました！」

「ちよつ、まだ話は終わってないわよ！」

「黒子。御坂とインデックスと風斬を頼む」

「ええ。終わり次第向こうの方のみんなも救出しますの」

黒子が御坂・インデックス・風斬の肩に触れ、消える。どうやら三人同時テレポートができるらしい。

「成長してんだな。アイツも」

「目指す背中がここですからねエ・・・」

上条の背中をバシバシ叩く貴音。その時上条が口を開く。

「貴音、お前もう気付いてんだろ。自分の体の変化に」

「ええ、もちろんです。幸か不幸か分かりませんが、もう学園都市は私の手中です！」

「あ、そう」

「あ、でも安心してください！ ご主人の為にしか使いませんので」

「お前ホント下僕属性強いよな。猫っぽいのに」

「悪いんですか？ 従順な下僕で。猫もデレればこんなものですよ」

「・・・デレ期が長すぎんだろ」

上条は呆れながらそう言うのと、貴音を引き連れて走り出した。

閉鎖化 Battle City.

血の臭いがする。

バリケードのこちら側でこの臭い。恐らく警備員はそれほど役には立っていないの
だろう。

「あちゃー、これじゃあ予定していた作戦が使えねーな」

「よし、分かりました。プランBで行きましょう。……プランBは何ですか？」

「あ？　ねーよそんなもん」

「……強行ですか」

「それしかねーだろ」

上条は右手にはめた腕章を外すと、黒いジャケットに黒いネクタイという。葬式の時
に着るような喪服にも見えなくもない服装に着替える。そして、大きな軍用ゴーグルを
かけた。

「さて、掃除を始めようか」

「ですね。汚物は消毒です」

上条と貴音はバリケードへと一歩近づく。そして、警備員の目に止まらぬ内に、バリ

ケードの中へ飛び込んで言った。

後ろから気付いた者が制止の声をかけるが、もう黙っておいて欲しかった。

「うふ。こんにちは。うふふ。うふふうふ」

「こんにちははマドモワゼル。さて、早速で悪いのですがあなたには消えてもらいます」「あら、コイツらと一緒にでは無いのね。一体あなたはなんなのかしら？」

誰が来ても問題ないと言った調子で女性は呟く。それを聞いた上条は、軽く地面を蹴って飛ぶと、ほぼ亜音速に近い速度で右手を振り切った。

衝撃と音は遅れてやってくる。

女性の盾になるよう立っていた土くれの巨人はもう跡形もなく吹っ飛んでいた。

「な……」

「俺はこの街を住み処にする黒き龍……。あいにく、お前に名乗る名前は持ち合わせていない」

「お前ではなくて、シエリー＝クロムウエルよ。覚えておきなさい」

「一応聞いておこう。何をしようとしている」

「戦争を起こすんだよ。その火種が欲しいの。だからできるだけ多くの人間に、私がイギリス清教の手駒だって事を知ってもらわないと、ね？ —— エリス」

シエリーがそう言うのと、崩したはずのがれきが集まり、ゴーレムを形成する。そして、

手首のスナップを利かせオイルパステルをくるりと回す。

その様子を見た貴音は、

「『学園都市』の中で、『魔術』そんなものを使おうとした貴女が間違っていたって事を教えてあげます」

そう言うとき貴音は親指を下に向ける。そうした瞬間。シエリーの体中に赤い裂き傷ができる。

「これは……能力者の魔術拒絶反応……!」

「別に能力開発を受けていないはずなのに何故? とお思いでしょうが、ネタばらしをするとき、あなたの身体の中に一部のA I M拡散力場を送り込んでいます。私が止めない限り、あなたは常にダメージを負い続けるという訳です」

シエリーは地面に何かを慌てて書くと、エリスを爆発させた。

「……こんなもので攻撃ですか?」

「馬鹿。逃げられたんだよ」

「ウゲ」

「さ、追いかけるぞ。ソナーは得意だろ?」

「……誰に言ってるか分かっています?」

「もちろん」

貴音は数歩前に出ると、着ていたスーツを脱ぎ捨てる。いや、殻を脱いだ。と言った方が適切だ。隣には青いジャージを着たエネが浮いている。

「学園都市に充満せしA I M拡散力場よ、今すぐ私の為に働きやがれ！」

「オイオイ……」

「……まだ地下にいるようですね……。地上に向かったって事はないですかね？」

「そう……だな……。上条当麻として、アイツと向き合うか……」

上条はその足を、シエリーが出てくるであろう場所へ向けて歩きだした。

が、その時上条の携帯が鳴る。

「んだよこんな時に……。小萌先生？」

もしもし？ と不機嫌を隠さずに上条はヘッドセットの通話ボタンを押す。

『あつ！ 上条ちゃんですか！ やったやった、ようやくつながったですー。上条ちゃん、今までどこにいたんですかー？』

「事件のあった地下街ですー。それも敵さんのど真ん前ですよー？」

『む、それは私の真似ですかー？ つと、姫神ちゃんが一度そっちに電話をかけたはずなんですけど、電波の調子が悪かったそうなのですよー？ ってちよつと待ってください敵

さんのど真ん前ってどういう事ですかー!？」

「上条ちゃんの問題児さんなので問題なしですー」

『何で私の真似をするんですかーっ!』

「すみません小萌先生。ちよつと面白くつて。で? なにか用つすか?」

『そうでしたそうでした。ちよつと大事な話があるのですよ』

「なんすか」

『カザキリヒヨウカさんについてなんですけどー』

「風斬が? なんすか? 端的に頼みますよ?」

『あー、もしかしたらカザキリヒヨウカさんは人間じゃないかもしれません』

「それはアイツがA I M拡散力場の集合体だっという意味ですか?」

『はい?』

「ウチの貴音がね、アイツに触れた瞬間。突然A I M拡散力場への干渉権と主導権を握ったんつすよ。それを俺達の中で仮説を立てて、プログラム“エネ”の中にそれができる何かがインストールされたと考えたんです。だから、アイツは。風斬氷華は科学の使者なんじゃないかって思った次第です」

『………本当に上条ちゃんは頭が良いですね。手が掛からないのは良い事ですが、もうちよつと先生を頼ってほしいです』

「……時がきたら、全力で頼ります」

上条はそう言うのと、隔壁の前までたどり着く。おそらくシエリーは上条当麻じゃない二人。インデックスと風斬を狙いに行ったと考えられる。

「……………邪魔だな」

「人の波も相当ですよ？」

そう。隔壁の周りには出たがって群がる人が。

「どうします？ ご主人」

「ぶち破つても出るさ」

上条のその言葉を聞いた周りが少し不思議そうな顔をする。そして、警備員の一人が近づいてきた。が、上条は捕まる前に実行することにした。ニメートルほど跳躍すると、握りしめた拳を隔壁に叩きつける。すると、轟音を立てて隔壁がぶっ飛んだ。

「え……………」

誰が発したかは分からないが、驚愕の声も漏れる。上条と貴音はそんな事は気にせず、外へと飛び出して行った。

「……………いや、マジあいつらどこ行ったんだよ。黒子！ お前はあいつ等をどこへレポートさせたア!!」

「叫んだって黒子さんは——」

「当麻お兄様呼びまして？」

「来た……」

「なあ、御坂とインデックスと風斬。あいつらどこへテレポートさせた？」
「確かこの辺りですの」

黒子が地図を取り出して上条達に場所を教える。

「移動している可能性もありますの」

「……だよなー。でもなー……ありがとな黒子。とりあえずこれ俺のメアドと
電話番号。教えてなかったよな」

「感激ですのっ!! 私これで三回はイケますわ!」

「ごしゅじーん! 行きますよー?」

「はいはい。今行くよ。んじや黒子。変態さんもほどほどにな」

黒子に教えてもらい、場所が分かった上条達は最短距離で道無き道を駆けだした。

終止符 | B e a s t | B o d y , H u m a n | H e a r t .

薄暗い地下とは異なり、地上は真つ白に目が眩むほどの炎天下だった。

そんな街中に、インデックスと御坂美琴と風斬氷華はポツンと残されていた。白井黒子は今も地下に閉じ込められた学生達を運び出している。

上条達が無事に出てこない以上、帰るのは薄情だし、かと言って彼女達の間にも共通の話題もない。さんさんと太陽光の降り注ぐ青空の下に、何か妙な沈黙が下りていた。

(あーもう。黒子の奴め……)

美琴はここにはいない後輩に心の中で恨み言を告げる。地下街の隔壁ぐらいなら超電磁砲で破壊することも可能だが、それをするとテロリストとやらが外へ逃げる危険性もあるので踏みきれないのだ。

暑さに耐えられないとでも言うように、インデックスの腕の中で三毛猫が暴れた。

その瞬間。ちょうど後ろの地面から、巨大な土塊の塊が飛び出してきた。

「い、ゴレム!?!」

「な——っ。何なのよこれ——っ?!」

「ひいつ」

インデックスがその正体に驚いた瞬間。ゴーレムはその拳を振るう。確実に獲物を仕留めるために。その速度に一瞬インデックスも対応が遅れる。美琴もあまりの事に反応ができないでいる。

そして、その拳が振り切られた時、生肉をコンクリートで押し潰すような、鈍い音が辺りに響いた。

インデックスはその目を見開き、美琴は急な嗚咽に苦しんだ。

その二人が見ているのは一人の少女。

「——やっぱり、単純な速度だけなら私の方が上ですかね」

にこやかに笑う少女だが、その右手は血が流れ骨が折れ、肘から先が使い物にならないようになっていた。

「た、かね……?」

「ちよつと風斬氷華さん。手伝ってくれませんか? あなた“使い”なんですから」

「え……? なに、を……?」

「あれ? もしかして知りませんか? 私は残酷なのではつきり言いますが、あなた人間じゃないですよ?」

「え……?」

「たかね！　いくら私でもそれは許せないんですよ」

「驚くのも無理はないでしょうけど、あなたはA I M拡散力場が生み出した科学の使
いってところですかね」

「あ……」

「もしかして記憶。あるんですか？　まあどうでもいいですが。でもこれだけは言つと
きます。例えあなたが何であれ、あなたは風斬氷華。私達の友達に変わりはありません」

「つ……分かりました！　私に出来る事があれば……！」

「じゃ、ご主人が到着するまで、コイツの相手よろしくです」

貴音はそう言つて笑うと、ゴーレムが振るつた左手で吹き飛ばされた。そのせいで
ゴーレムの右手も吹っ飛んでいたが、すぐに再生していた。

「た、たかね!？」

「やれる事。やってみます!？」

——街中。

「だーっ！　エネの奴どこへ行ったア!!」

上条はビルの上を走っていた。ビルからビルへと飛び移りながらノンストップで走っていく。がどこにいるか見当が付いている訳でもなく、当てもなく走っているだけなのである。

「闇雲に探して見つかるか——っ!!」

その場所に轟音が響いた。小惑星が激突したような威力で、エリスの身体が吹き飛ばぶ。

「ひょうか……?」

「インデックスちゃん。逃げて、全部思い出したから。大丈夫だから」

エリスはゆつくりと立ち上がると、大きく吠えた。そもそも土の人形に声帯があるのかは不明だが、それはまさに地の底から響くようなものだった。

「化け物の相手は私がするから」

えーと、どうしたらいい? と、若干の混濁状態の美琴だった。いきなり出て来た巨大な土の塊が意志をもったように殴りつけて来た。もうこの時点で美琴の思考回路は停止しかけていた。

「ちよ、ちよつと。私に何かできる事ない?」

「……………そこらへんのがれきで超電磁砲。撃てます?」

笑顔でそう聞く風斬。対して美琴は大きく頷くと、磁力で大きな電動石を捜しだす。

「私は……………っ! 友達を助けます!!」

「私だつて……………! アンタを倒す事ぐらいは……………!」

——暫くして、エリスの猛攻は少し収まった。

が、それはインデックス達の勝利を意味しているのではない。むしろほぼ惨敗だ。

「くっ……………もう駄目……………疲れた……………」

「私は……………まだ……………」

「あーもう。自動制御に変わったから何もできないっ!!」

そしてゆっくりと、とどめを指すように、エリスの拳が振るわれる。

何かを砕くような、低い地鳴りのような音が響く。

「え……………?」

「あ……………」

「……………はー。見つけるのに苦労はしなかったな。轟音のおかげで見つけやすかったぜ」

エリスの上半身が吹き飛んでいた。それに連なるように下半身も崩れている。軽い

調子で話す声は粉塵の中から聞こえてくる。

「・・・・・・・・まさか・・・・。とうま!?!」

「おう。インデックス。そこにいるのか？ 上条さんは元気ですよー」

煙の中から出て来た上条は少しだけボロボロだった。

「とうま！ 何したの!」

「シエリーllクロムウエルつつうイギリス清教の魔術師と戦ってきた。アイツ、相当科学こつちに恨みがあるみたいだったぜ」

「あ、あの・・・・彼女が・・・・」

「ん？ エネか？ 大丈夫だろ。あいつなら・・・・・・・・とつくに回復してどつかで高みの見物でもしてるんじゃないか？」

「いやー。流石にご主人の目はごまかせませんね」

上条が見ていたビルから少女が下りてくる。

「え。あ、アンタ・・・・さつきボロボロに・・・・!」

「チツチツチツ。私を舐めてもらつちやあ困りますよつ!」

「・・・・・・・・馬鹿かお前は・・・・。あれ？ 風斬は?」

「あれ？ ひよーか!?!」

インデックスがトテテと捜しに行ったのを、美琴が追いかける。何だかんだで仲良

くなつたようだ。

「……ご主人」

「ん？ なんだよ」

「……もう分かつてるんでしょ？ 彼女がどこにいるか」

「当たり前だろ。さて、行くか」

上条は何かを確認してからいくつもある廃ビルの一つへと入っていく。

ビルはすでに窓も内装も取り払われ、灰色のコンクリートが剥き出しにされていた。取り壊す手順でもあるのか、赤いチョークのようなもので壁や床に専門用語による指示みたいな文字が書き込まれている。

上条はそんなものには目もくれず、ビルの外壁から登っていく。数歩窓枠を蹴るだけで、上条は屋上までたどり着く。

少女。風斬氷華はそこにいた。

落下防止の足場の端に座って。

「よっ。風斬」

「……」

「さつきさ。エネに無理言つてAIM拡散力場の世界を見せてもらつただけだよ。ありや辛いな。ま、俺達が体験した夏に比べればしよぼいけどな」

「・・・何を言ってるんですか」

「一つだけ言える事はお前は俺達の友達だつて事」

「違います。体験した夏つて所です」

「何？ 気になるの？ 俺達の終わらない夏」

「終わらない・・・夏」

「そんな事は置いとこうぜ！ な、お前のお話はまだ終わつてねエから」

その上条の言葉の後、エネがインデックスを抱えてやって来た。

「ほらほら、仲直り・・・つておかしいか。友達なんだからさ。元気出せよ」

上条はインデックスと風斬の距離をほぼゼロにする。

二人は抱き合い勢いに負けて転ぶ。

上条はそんな様子を見て小さく笑うと、何もしゃべらなくなつた。

表舞台の裏側

「だーっ！ チョーカーの事忘れてたア!!」

「だーから充電は大事なんですよ。複雑な演算をご主人の場合必要としませんから、そこまで問題じゃありませんけど、それでも。ご主人は今回二回も電極の電池を無駄遣いするような事をしたんですからね！」

「……あー。俺と一緒にって検査を受けた人に言われたくないですよ」
「……じゃあ何も言いません！」

ふい。と明後日の方向を向いた貴音に上条は少し笑うと、

「そう言えば、何で幻想殺しの側に風斬は現れたんだ？」

「……さあ？」

上条は窓の外を眺める。ここからでは見えないが、その方角には窓の無いビルが建っている。

*

*

「これで満足か？」

ドアも窓も廊下も階段もエレベーターも通風孔すら存在しないビルの一室で、土御門元春は空中に浮かぶ映像から目を離して吐き捨てるように言った。

巨大なガラスの円筒の中で逆さに浮かぶアレイスターは、うつすらと笑っている。

返事はない。その嫌な静寂に、かえって土御門はせっつかすように言葉を絞り出す。

「かくして人間は駒のように操られ、また一つ虚数学区・五行機関を掌握するための鍵の完成に近づいた、という訳だ。正直、オレにはお前が化け物に見えるぞ」

虚数学区・五行機関

「まさかその正体がA I M拡散力場そのものだなんて誰も思わぬだろう。学園都市住む二〇〇万人もの学生の周囲に発生する力が虚数学区を作っているなどと」

A I M拡散力場によって作られる五行機関は、街に能力者がいる限り必ず作られてしまふものだ。

五行機関は有害か無害か、それすらも分かっていない。

それは原子力のような巨大な力の塊ではない。そんなものが街に溢れていれば、誰だつて異常に気がつくだろう。五行機関の正体はあくまでA I M拡散力場であり、機械を使つて計測しなければ分からない程度のもなのだ。

ただし、五行機関は減圧下における〇度の水のように不安定な存在でもある。

減圧下、つまり気圧の低い状態では、凝固点が下がるため水は〇度になつても凍らない。しかし、その水を棒や何かでかき回すと、減圧下の水は途端に凍りついてしまう。

五行機関も同じ。普段は機械で計測しないと分からない程度の力だが、一定の衝撃を加える事でその力は爆発的に増してしまう。

そこで問題なのは、その『一定の衝撃』がどの程度の物なのか分からないという点だ。迂闊に指で突いただけで大爆発を起こすかもしれないし、案外気にするほどのものでもないのかもしれない。

また、『爆発的に力が増してしまう』とは言っているものの、それもあくまで『予想』にすぎない。どういう種類でいかなる程度のものかも分からないのだ。学園都市が地図から消えるかもしれないし、実は怯えるほどのものでもないのかもしれない。

どこまで踏み込んで良いのかも判別できず、何が起こるかも分からない。従つて、学園都市は不用意に五行機関を叩く事もできないのだ。

ならばこそ、滅ぼさずに制御するという方法が考えられた。

そのための、鍵こそが――。

「風斬氷華、という訳か。まったく、あくまで虚数学区の一部とはいえ、あんなものへ人為的に自我を植えつけて実体化の手助けをするなど、正気の沙汰とは思えない」

幻想殺し、という右手を持つ少年がいる。

その存在は、虚数学区にとつて唯一の脅威とも言える。

そして、その脅威は自我を生む。

食欲や睡眠欲のように、生命体の本能が生み出す欲求は『生きるための』『死を遠ざけるための』『シグナルとして生み出される。つまり、生死を知らない者には最初から本能や自我といったものは芽生えない。

ならば、逆に。

幻想殺しという死を教え込めば、心持たぬ幻想は自我を持つようになる。

と、それまで黙っていたアレイスターの口が開いた。

「これも虚数学区を御するための方策だ。『何をやるか分からない』無自我状態よりも、敢えて思考能力を与えた方が行動を予測できるし、上手く立ち回れば交渉や脅迫なども行える」

「生み出される心がお前の予想範囲内の善人なら問題ないがな。それがとんでもない悪

人になつたらどうするつもりだったんだ」

「善人よりも悪人の方が御しやすい。両者の間にある違いなど、取り引きに使うカードの種類が異なる程度のものだろう」

くそつたれが、と土御門は口の中で毒づいた。そもそも、アレイスターの人間に関する取り扱いは常人のそれとは大きく異なる。

「そこまでして、虚数学区を掌握することに意味があるのか」土御門は、やがて問い質した。「確かに虚数学区は学園都市の脅威だ。だが、脅威とは内側だけにあるものではないぞ。今回、お前が黙認した一件によつて、世界は緩やかに狂い始めた。理由はどうあれ、イギリス清教の正規メンバーを警備員の手を借りて撃退したのだ。聖ジョージ大聖堂の面々はこれを黙って見過ごすとは思えない。まさか、お前はこの街一つで世界中の魔術師達に勝てるなどとは思っていないだろうな」

土御門の脅迫めいた声に、アレイスターは笑みを崩さない。

「魔術師どもなど、あれさえ掌握できれば取るに足らん相手だよ」

「あれ、だど？」

アレイスターの言葉に土御門は眉をひそめる。

虚数学区・五行機関は確かに学園都市の中ではどこが安全で何が危険かも分からないほどの不気味な存在だ。だが、それは逆に言えば学園都市内部限定という事だ。AIM

拡散力場は、能力者の周囲にしか展開できないのだから。

そこまで考えて、ふと土御門は背筋に嫌な感覚が走り抜けた。

(待て、よ………)

もう一度、彼はA I M拡散力場の集合体、虚数学区・五行機関について考える。

それは赤外線や高周波のように、そこにいるのに見る事も聞く事も出来ず、

人間とは別位相に存在する、ある種の力の集合体によつて構成される生命体。

土御門元春は知っている。

その存在を、魔術用語で述べるとどんな言葉になるのかを。

(まさか、天使)

いや、虚数学区の住人——例えば風斬氷華が『天使』と表現されるなら、彼女達が住んでいるとされる『街』とは、つまり………。

「アレイスター………お前はまさか、人工的に天界を作り上げるつもりか!？」
「さてね」

対して、アレイスターはつまらなそうに一言答えるのみ。

人工的に天界を作り上げる………いや、あくまで科学的な力のみで作られるなら、それは天界や魔界などという既存の言葉では呼べない。カバラにも仏教にも十字教に

も神道にもヒンドゥーにも表記されていない、まったく新しい『界』を生み出す事となる。

そして、『界』の完成は、あらゆる魔術の破滅を意味している。

例えば地球上の浮力や揚力の基準値が大きく変化したとする。

この状態で幼稚園児が画用紙に描いた設計図通りに飛行機を作ったとしても、それは最初から飛ばないだろう。が、キチンとした専門家が描いた設計図に従って飛行機を作っても、それはやはり飛ばない。しかも、なまじ滑走路の上は走ってしまうから、いざ離陸しようとした所で姿勢を崩して爆破してしまう。

新たな『界』の出現による魔術環境の激変は、それを意味している。魔術師が魔術を使おうとすれば体が爆発し、魔術によつて支えられている神殿や聖堂などは柱を失つて自ら崩れて行くだろう。

これはそんな宗教にも当てはまる。

考えてみれば良い。あらゆる宗教・魔術は一定のルールに従って実行される。もちろん、ルールは一つではない。仏教には仏教のルールが、十字教には十字教のルールがある。世界はたくさん色彩が重なり合つて描かれる巨大なキャンパスのようなものなのだ。

あらゆる宗教は何らかのルールに従っている事だけは変わらない。

そこへ、すでにルールが固まっている所へ、新たに『界』を突っ込んだらどうなるか。これまで安定していたルールはかき乱され、何をやっても魔術師は自分の暴発に巻き込まれる。

どんなに素晴らしいヴァイオリンの演奏家でも、楽器そのものの調律が滅茶苦茶なら、まともな演奏などできっこない。ルールをかき乱すとは、そういう意味だ。

今の所は虚数学区の鍵は未完成のようだが、それが完成すればあらゆる魔術師は学園都市の中で魔術を使う事ができなくなるだろう。

学園都市は世界の縮図。

能力開発を世界規模に発展させ、あらゆる人々が能力に目覚めた時、世界はA I M拡散力場で覆われる。街の中限定で展開されていた虚数学区は、そのまま全世界を埋め尽くす。

いや、

準備は、とうの昔に完成している。

上条の手によって救われた二万体系の人工能力者達『妹達』は、治療目的で世界中に点在する学園都市の協力機関に送られている。何故わざわざ『外』で体の調整を行う必要があったのか土御門には疑問だったが、その答えはここにあったのだ。

鈴木白夜を使ったあの馬鹿げた『実験』の真意は、絶対能力進^{レベル6}化計^{シフト}画などではない。世

界中に配置すべき人造能力者の量産にこそあったのだ。いかにも自然に街の『外』へ送るために、敢えて一度量産能力者計画を潰し、さらには隠れ蓑であるはずの絶対能力進化実験を潰して、二度の偽装を得て妹達は全世界へ蔓延した。

その目論見は成功と見て良いだろう。現にイギリス清教を始めとする教会諸勢力は妹達が『外』へ配布された事に気付いていない。いや、気付いていたとしてもその重大性までには至っていない。せいぜいが、学園都市の内輪の問題の後始末ぐらいにしか考えていないはずだ。

世界残土を囲うように、虚数学区のアンテナたる能力者は配備された。

あとは未完成の虚数学区を完全に制御し、新たな『界』として起動すれば。

『界』の出現によって、全ての魔術師は己の力の暴走によって自滅し、

そして能力者にとっては、A I M 拡散力場は何の妨害にもならない。

そうなれば、科学世界と魔術世界の戦争の結果など目に見えている。いや、それはそもそも戦争にもならない。両手をあげた敵達の頭を一人ずつ順番に撃ち抜いていくようなものだ。

(いや………)

そこまで考えて、土御門は首を横に振った。

本当にこれが、アレイスターの最終的な目的なのか？　そうかもしれないし、そうではないのかもしれない。この人間ならこの程度はほんの下準備だと笑うような気もするし、存外何も考えていないという可能性もある。

分からない。

男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも囚人にも見えるアレイスターは、人間としてのあらゆる可能性を内包している。それ故に、アレイスターの考えなど予測もつかない。人類が考えうる限り全ての意見を持つていと言つても過言ではなさそうだ。

土御門は戦慄しながらも、なかば負け犬が吼えるように吐き捨てる。

「ふん。これがイギリス清教に知れば即座に開戦だな。今にして少し思う、オレはシエリー・クロムウエルに同情すると。お前の言動を吟味する限り、ヤツのポジションは単なる悪役ではない。れっきとした、自分の世界を守るために立ち上がったもう一人の主演だろうさ」

「馬鹿馬鹿しい妄想を膨らませるな。私は別に教会世界を敵に回すつもりは毛頭ない。そもそも君の考えにある人造天界を作るには、まずオリジナルの天界を知らねばならない。それはオカルトの領分だろう。科学にいる私には専門外だ」

「ぬかせ。お前以上に詳しい人間がこの屋にいるか。そうだろうか？」

土御門は、唇の端を歪めて、

「魔術師・アレイスター・クロウリー」

かつて、二〇世紀には歴史上最大の魔術師が存在した。

彼は世界で最も優秀な魔術師であると同時、世界で最も魔術を侮辱した魔術師であるとも呼ばれていた。

その彼が、長い歴史の中でどの魔術師も行わなかった魔術に対する世界最大の侮蔑とは、

極めた魔術を全て捨てて、一から科学を極めようとした事だった。

魔術師として頂点に立っていたアレイスターが何を思つて全てを捨てたのかは誰にも分からない。だがそれは魔術世界にとつて最大の屈辱だった。名実共に世界一の魔術師が、魔術を捨てて科学に頼ろうとしたのだ。それはつまり、勝手にアレイスターが魔術文化代表を名乗つて誰の許可も取らずに科学文化へ白旗をあげてしまったようなものだ。

故に、アレイスター・クロウリーは全世界の魔術師を敵に回した。それは魔女狩り専門のイギリス清教のみならず、少しでも魔術を知った者なら例外なく、という意味だ。

なのにステイルがアレイスターと顔を合わせていてもその正体を看破できなかったのには訳がある。イギリス清教は長年かけて集めてきた『アレイスター・クロウリー』の情報を中心に追跡を続けている訳だが、この情報は全てアレイスターが意図的に掴ませ

た誤情報なのである。元の情報が狂っている以上、それと照らし合わせてアレイスターを魔術的、あるいは科学的に調べた所で一致する点などあるはずもない。結果として彼は同姓同名の別人もしくは偽名という事になっていた。

そこまでやる技量と度胸に土御門は舌を巻く。土御門なら例え可能であつてもそんな危険な橋を渡ろうとは思えないだろう。それが端的に両者の力量差を示していると言つても良い。

「丸つきり負け惜しみになるがな、お前に一つだけ忠告してやる。アレイスター」

「ふむ。聞こうか」

「お前はハードラックという言葉の意味を知っているか」

「『不幸』だろうか?」

「『地獄のような不幸に何度遭遇しても、それを常に乗り越えていく強運』という裏返しの意味も持つ」土御門は、わずかに笑つて、「オレにはお前が考えている事など分からないし、おそらく説明を受けても理解できないだろう。だが、あの幻想殺しを利用するというなら覚悟しろ。生半可な信念ぐらいで立ち向かえば、たとえどんな関係であろうと、あの右手はお前の世界を喰い殺すぞ」

彼が告げると、ちょうどタイミングを計つたように空間移動能力者が部屋に入つてきた。

土御門は踵を返して彼女の方へ歩いていこうとする。が、その背中に声がかけられた。

「一つ。情報を与えてやろう」

「……なんだ」

「皆が虚数学区・五行機関と呼んでいるAIM拡散力場の集合体だな。私は別の呼び方をしているのだよ」

「……」

『人』によって生み出された人類の敵……『人造エネミー』と」

「……記憶の片隅にでも置いといてやる」

「そうしてくれ」

三〇センチ以上も背の低い少女にエスコートされ、土御門はビルから出ていく。

誰もいなくなった部屋の中、逆さに浮かぶ男は一人呟いた。

「ふむ。私の信じる世界など、とうの昔に喰われているさ」

天草式十字清教編

学園都市 Science | Worship.

どこにでもいる平凡な高校生、上条当麻は路地裏にいた。

薄い風が彼の髪をなびかせ、道の向こうへと抜けていく。そこで上条はポロポロで正座している男三人と、無傷で正座をしている男二人を見下ろしていた。

「……………で？ そいつらは新しいメンバーかなにかか？ いきなりケンカ吹っかけてくるとは御挨拶だな」

「す、すみません上条さん。俺達の教育が足りてませんつしたね。ホラ謝れ！」

「はあ？ 何でこんな奴に謝らなくちやいけないんっすか！ ナワバリに入つて来たのはコイツが先っすよ!？」

「良いから謝れ！ すみません上条さん」

「いや、お前らは怒ってねーよ。俺が怒ってんのはお前等だ」

「まだ負けた訳じゃねエつつてんだろウニ頭!!」

「ああ？」

「あ、上条さん。後はこっちに任せてくれませんかね……？ コイツらマジで指ツメさ

せるぐらいの事はさせますんで……

「は？　ちよつと待って下さいよ！　何でこんなウニに頭下げてんすか！　俺あんたが頭下げるのなんか見たくないっすよ！」

「じゃあお前も謝れ！」

「それは嫌っす！」

「じゃあ死ぬ」

上条による粛清が行われた。意識はあるが動けない状態にした上でのオーバーキル攻撃。これでこのスキルアウトも懲りただろう。

「本当に勘弁してくれよ？　俺も暇じゃないんでね」

「マジですいませんでした。上条さん」

「……………」

黙って頭を下げるスキルアウトもいる。上条の姿が消えた後、彼らは顔を合わせる。

「いや、マジかつこよくないっすか上条さん！」

「マジでな。迷惑かけたのは謝るけどコイツらのおかげで上条さんに会えたしな！」

「あ、アニキ達……………。何であんな奴の事……………」

「本当にお前等しらねーんだな。あの人裏の世界じゃ有名な人だぜ？　と言つても、顔と名前が一致してるのは一度でもあつた事ある人間だけって言われてるがな……………」

*

上条はようやく学生寮まで帰って来た。途中で合流した買い物帰りの貴音に質問攻めにされながら帰って来たので、もうヘトヘトだったりする。

と、学生寮の入口に差し掛かった所で、不意に頭上から女の子の声が聞こえてきた。

「あー。しっ、しししっしっ、上条当麻だ上条当麻」

ん？ と上条が顔を上げると、七階通路にある金属の手すりから、土御門舞夏が上半身を乗り出して右手を振っていた。いつも通り清掃ロボットのの上に正座した状態であるため、ものすごくバランスが危うく見える。左手はモップを握り、それで床を突いている。どうも、前進しようとしている清掃ロボットの動きをそれで封じているらしい。

「よ、よよ用事あったの急用があったの。どうかししよーは携帯電話の電源を切つてるだろー」

「？」

言われてポケットの中のスマホを取り出すと、確かに電源は切れている。受信履歴を見ると、土御門舞夏からばんばんメールが送られてきていた。

そういうえば舞夏の声は間延びしたものだったが、少しその顔が青ざめているようにも見える。

上条は首を傾げたが、急ぎのようなのだらうと、地面を蹴り七階まで跳ぶ。

舞夏がいる手すりに立つと、廊下に降りる。同様にして貴音も登つて来た。

「緊急事態だ緊急事態だぞ。銀髪シスターが何者かにさらわれちゃったー」

「は？」

上条は思わず声を出した。舞夏は白く青くなつた顔で、

「だから誘拐だよ人さらい。通報したら人質殺すつて言われてたから何もできなかったの。ごめんなーしししょー」

銀髪シスターと言うのはインデックスだろう。上条は少し考えると、

「んで？ 何か証拠とか脅迫状とかないか？」

「去り際に、誘拐犯が封筒を渡してきたのー。そこに色々書いてあつて……」

ダイレクトメールに使われるような、横に細長い封筒を舞夏は手渡してきた。彼女の声は、多少以上に震えていた。単なる恐怖だけでなく、自分が何もできなかった事に対して負い目があるのだろう。

上条は一度だけ封筒に目を落としてから、

「それで、その馬鹿野郎はどんな感じのヤツだった？」

舞夏はちよつと考えるように頭上を見上げてから、

「うーん。まず身長が一八〇センチを超えててなー、白人さんっぽかつたぞ。でも日本語は上手だったし、見た目だけでどこの国の人かまでは分からなかつた」

「ふんふん」

「それで神父さんみたいな格好でな」

「ふん？」

「神父のくせに香水臭くて、肩まである髪が真っ赤に染まって、両手の十本指には銀の指輪がごてごて付いてて、右目の下にバーコードの刺青が入ってて、くわえ煙草で耳にはピアスが満載だった」

「……………、おい。すつごく見覚えあるぞ、その腐れイギリス神父」

舞夏は『?』と首を傾げる。上条は改めて封筒を調べた。中には一枚の便箋が入っている。

そこには、定規を使って描いたようなシャープペンの字で、

『上条当麻 彼女の命が惜しくば 今夜七時に 学園都市の外にある 廃劇場『薄明座』跡地まで 一人でやってこい』

と書かれていた。

「……………。今時、定規で筆跡隠しかよ」

今日び、定規で筆跡を隠した程度で身元が割れないと本気で考えているのだろうか。CDの表面をレーザー光で読み取る技術を応用した、個人差のある細かい『指先の震え』を文字の溝から調べる確定方法もあるし、何より学園都市には読心能力者なども珍しく

ない。

本人は真面目にやっているつもりだろうが、ここまで来ると狙って笑いを取ってのかと上条は少し呆れてしまう。

(ナニ考えてんだか。一足遅い夏休みでももらって遊びに来たのかあの馬鹿)

上条が封筒を降ると、中からさらに折り畳まれた紙切れが出てきた。広げてみると、それは学園都市の外出許可証と関連書類だった。すでに必要事項は記入済みだ。一体どこでこんなの手に入れたんだろう、と上条は首をひねる。確かにこれがあれば堂々と正面から学園都市の外へ出れるが、入手するには一定のステップを踏まなければならないはずなのに……。

「荷物置きましたよご主人」

「……一人、ね。エネ、スマホに入れ。今からアイツの所に行つて一発ぶん殴る」
「電動自動二輪で行きましょうよ!」

「いや、技術漏洩を嫌がる学園都市が技術の塊を通す訳がないだろ? だから普通ので行くぞ」

「カワサキのZ-2にしましょうよ!」

「なんで?」

「ヨシムラ管の音が聞きたいです!」

「あー。はいはい」

舞夏に大丈夫だ。と声をかけて上条と貴音は七階から下の二輪置き場に飛び降りた。

学園都市 式 Science | Worship. II

廃劇場『薄明座』の跡地は学園都市からほんの三キロほど離れた場所にある。

潰れてから三週間も経っていないからか、建物には傷んだような場所は見当たらない。内装の調度品が片付けられているためガランとしていて、掃除もしていないのでそこかしこにはほこりが積もっているが、まだ『廃墟』という感じはしなかつた。きちんと掃除をして調度品を再び持ち込めば、すぐさま活気を吹き返しそうな印象すらある。

イメージするなら『冬眠している建物』という感じだろう。もしかすると、取り壊さないで次の買い手を探している状態なのかもしれない。

インデックスとスタイルは何もない舞台の上にあった。舞台・観客席をワンセットとした、体育館ほどの広さを持つ大ホールには窓がなく、照明器具も取り外されているため、光源は開け放たれた五つの出入り口から差し込む夕暮れの光しかない。

薄夕闇に落ちる舞台の上で、インデックスは女の子座りをしていた。
むっすー、と。彼女はほっぺたを膨らませて、

「卑怯者」

「返す言葉はないし、必要もないかな」

ステイル・マグヌスは少女の敵意ある視線に一瞬だけ怯みかけたが、決してそれは表に出さない。くわえ煙草の先に点いた火が、暗闇の中でゆつくりと上下する。白い煙は揺らいで流れ、『禁煙』と書かれた壁際の表示板を撫でては消えていく。

「大体状況は分かっただろうと思う。もう一度説明が必要か、とは問わないよ。君の記憶力を考えれば、二度繰り返すことに意味などないだろうからね」

「……イギリス清教の、正式な勅命」

インデックスはここに連れて来られてから受けた説明を、もう一度思い出す。

誰にも解読できないはずの『法の書』を解読できる人間が現れたという事。

その者の名はオルソラ・アクイナスという事。

『法の書』を解読すれば、十字教のパワーバランスを崩す『天使の術式』を手に入れられるかもしれない事。

その『法の書』とオルソラが、日本へやってきた折に何者かにさらわれた事。

犯人は天草式十字清教らしき事。

ローマ清教の人間が、『法の書』とオルソラの救出を目的に活動を始めている事。

そして元・天草式トップであり現在はイギリス清教に所属している神裂火織との連絡が取れなくなり、不穏な動きが予測される事。

イギリス清教は表向きローマ正教に協力するという形で本件に関わるが、最優先事項

は神裂火織が余計な真似をする前に問題を片付けるのだという事。

「その正式な『お仕事』に、一般人のとうまを巻き込む訳？」

「実は僕も何で巻き込まなくちやいけないのか少し疑問でね。まあ、上のご指名というヤツさ」ステイルは煙草の端をゆらゆら揺らし、「その上、これでも僕達は難しい立場にいてね。学園都市所属の上条当麻へストレートに協力を求めると、『科学サイドが魔術サイドの問題に首を突っ込んだ』とみなされかねない。あくまで学園都市内部で起きた問題なら『自衛』と言えば苦しい言い訳にはなつただろうけど、今回は違う。彼が首を突っ込むためには、それ相応の動機付けが必要となつた訳だ」

そのための、誘拐。

つまり、上条は『法の書』やオルソラなどは関係なく、あくまで『さらわれたインデックスを助けるために』学園都市の外に出てくる事になる。そこで『たまたま』天草式の間人と出会つてしまい、仲間であるインデックスを助けるためにやむなく戦う羽目になつた。というのが大義名分となる。

当然ながらインデックスは魔術サイドの間人だが、現在、学園都市とイギリス清教の間でいくつかの取り決めがされていて、彼女の身柄は一時的に学園都市が預かる事になつている。学園都市に住む上条当麻が、そこに預けられたインデックスを助けてもおかしい。

「大体話は分かったけど、やっぱり納得はできないかも」

「そうかい？」

「うん。こんな回りくどい事しなくたって、とうまは『助けて』って言ったら助けに来てくれるもん。どんなに危ない場所でも絶対来てくれるから、逆に頼みづらいんだけど」

「……………、そうかい」

ステイルは小さく笑った。

幼い娘が好きな男の子の話をしてきた時の父親のように、小さく笑った。

「それで、これからどうするの？ 『法の書』とオルソラⅡアクイナスは天草式の手に落ちてるんだよね。だったら、天草式の本拠期まで行くっていうの？」

少女の声に真剣見が宿る。それは、上条当麻が関わる以上、彼の危険を少しでも軽減させるために情報を集めておきたいという気持ちによるものだろうか。

「いや、状況は少し変わってる」ステイルは辛そうに煙を吐いて、「ついでに1分前に、ローマ正教と逃走中の天草式が激突したらしい。オルソラ救出戦だね」

インデックスは目を細める。

通信用に使っているのは煙草の煙だろう。何度か細い煙に魔力がまとわりつくのをインデックスは見ているし、そのたびに白煙は風もないのに不自然な揺れ方をした。狼煙は洋の東西を問わずあらゆる地域・時代で使われてきた遠隔通信手段であり、彼女の

頭の中にも狼煙を使った古今東西の術式がいくつも収められている。

「それで成功したなら、私がここにいる必要はないはずなんだけど」

「その通りだ。が、明確に失敗した訳でもないよ。双方共に死者は出なかったが、どうも乱戦になったらしい。『法の書』の方は知らないが、オルソラはその隙を突いて逃げ出したそうだ」

「? ローマ正教の方にも戻っていないの?」

「そういう事になるね。現在行方不明だから、再び天草式の手に落ちる危険性もある」

「……、それはまづいかも」

人質が抵抗すれば暴力で黙らせるのが誘拐犯というものだ。まして『逃亡』した後にもう一度捕まったとなれば、反抗心を削ぐために何をされるか分かったものではない。

そうなると、こんな所でじっとしている暇はない。今もローマ正教と天草式は逃げたオルソラの搜索・争奪戦を繰り広げているはずだ。

「できれば上条当麻にも急いで欲しいものだが、今さら書き置きの内容を変更する事もできないしね。ローマ正教側からの協力者が来る前に彼とは合流したかったが……」

ステイルが言った時、開けっ放しだった大ホールの出入り口の一つに、人影が現れた。
「……残念ながら、僕達も彼を待たずして動き始めなきゃならないみたいだ」

その人影は、ローマ正教側の協力者だった。

学園都市 参 Science | Worship. III

「なんか最近、結構街の外に出てるよな。……できればのんびり見物してみた
いもんだけど」

上条は学園都市の『外』——外壁沿いの道のコンビニに寄りながら呟いていた。外
壁の高さは五メートル以上と高く、幅も三メートルと厚い。

(しかしまあ、大覇星祭の準備期間中は警備が甘くなるな)

上条はガラス壁越しに遠く離れた出入り口をチラリと振り返る。二三〇万もの人間
が参加する大覇星祭はその準備のスケールも大きく、街の外からもたくさん業者が出
入りする。普段は警備の厳しい学園都市だが、今だけは甘くせざるを得ない状況なの
だ。上条は外出用の書類を持っているのだが、そのチェックもいつもよりぞんざいだっ
たような気がする。

そんなこんなで、アイスを買って食べながら、上条は視線を落とす。

時計を見ると、午後六時過ぎ。約束の時間までまだ一時間近くある。

問題の『薄明座』の場所は、先程買い物がてら寄ったコンビニの地図を立ち読みして
きた所だった。

「私も食べたいですよーご主人」

「今俺は一人なんだ。黙っててくれエネ」

文句を言う少女を放つて、上条は駐車場に止まる一台のバイクにまたがった。大型のバイク。詳しい車種は分からないがハーレーの仲間だろう。

アクセルを回し、駐車場を出る所で、上条はふと近くにあるバス停を見た。

停留所は小さく、ベンチが二つと雨除けの屋根がついているだけだった。ただし老朽化が進んでいるのか、プラスチック製の屋根は所々がバキバキと割れていた。

と、その停留所に誰かいる事に気づいた。

外国人らしい。上条と同じくらい身の身長少女だ。彼女は時刻表のついた停留所の看板を、超至近距離から食い入るように眺めている。そのままピタリと動きが止まっている所を見ると、読み方が分からないのかもしれない。

服装は何を考えているのか、この猛暑の中で真っ黒な修道服だった。当然、長袖長スカートである。よく見ると、服の肩口やスカートの膝上二〇センチの高さで横一線するように銀色のファスナーがついていて、袖やスカートは着脱式になっているらしいが、彼女は馬鹿みたいなフル装備だった。両手は白色の薄い手袋に覆われ、髪も見えなかつた。インデックスがつけているようなフードの他に、頭全体を覆い隠すようなウインブルが完全に髪を隠していたのだ。布一枚で簡単に髪を隠せるという事は、おそらく

シヨートカットなのだろう。

上条は彼女の様子を横目で見ながら、

（む、シスターさんだ。．．．まさかインテックスの知り合いのジェノサイド修道女とかじゃあるまいな）

世界中のシスターさんが猛抗議してきそうな偏見だが、上条はこの夏休みだけでもステイルだの土御門だのといった面々にとんでもない目に遭わされている。上条としては、ヘンテコな修道服を着た女の子には警戒せよという感じなのだが、

「あの一．．．．．」

シスターさんの方から話しかけられた。とてつもなく丁寧な日本語で語り始める。

「恐れ入りますが学園都市に向かうためには、このバスに乗ればよいのでございませうか？」

丁寧な上にヘンテコだった。

上条はバイクから半分降りて、改めてシスターさんの方を振り返った。顔以外の全部の肌を隠しているシスターさんだが、逆に盛り上がった胸やくびれた腰が浮いている（というか見ようによってはわざと強調させているようにも感じる）、奇妙な人だった。

「いや、学園都市行きのバスはねえよ」

「はい？」

「だから、学園都市は『外』との交通機関を切断しちまってるの。つまりバスも電車も通ってない。乗り入れ契約してるタクシーなら入れるけど、自家用車の方が安上がりだぞ」

「そうでございますか。それであなた様はバイクで学園都市から出てきたのでございませぬ」

「なんなら乗っけてつてやろうか？　すぐそこだし」

「いえ、それは悪いのですよ」

「いや、悪くねーし。すぐそこだし。って、シスターさんは学園都市に行きたいんだよね？」

「はい、はい」

「えっと、だったら街が発行してる許可証はちゃんと持つてんのか？」

「許可証、でございますか？」

案の定きよんとした顔だった。学園都市のゲートを通るには、街が発行する許可証がある。理由はわざわざ説明するまでもないだろう。

そう伝えると、シスターさんは困ったように頬に手を当てて、

「その許可証というのは、どこでもらえばよろしいのでございませうか？」

「……………、悪い。一般の人はどんな努力をしても発行してもらえないぞ。街の生徒

の肉親とか、商品・資材の搬入のための業者とかなら可能性はあるけど、それでも審査はあるし」

「はあ。それでは、もう諦めるしかないのをごさいますね」

「なあ。お前はもうして学園都市に行きたいんだ？」

「はあ、とシスターさんはちよつと首を傾げて、

「実は私、追われているのをごさいます」

と言った。

上条は、周りの温度が少し下がるのを感じた。

「追われ……?」マタ?

「はい。ちよつとしたいごさがあります、ただいま絶賛逃亡中なのでごさいます。学園都市は教会諸勢力の手が及ばない所だとお聞きしているので、できればそこへ逃げ込みたかったのでごさいます」

「ふむ。良かったな。声かけたのが俺で、何とか入れるかもしれねーぞ」

「それは、どういう」

「……あ、よう。元気に逆さしてるか? おう上条さんです。あのさ、急遽だけどシスターさん一人学園都市に入れてもらえる? え? ダメ? ハア……」

「やはり?」

「とりあえずイギリス清教の知り合いの所に連れていくわ。後ろにまたがりな」
我ながら名案だと思った。

脅迫状には一人で来いって書かれてた気もするけど。

学園都市 肆 Science | Worship. IV

ステイルとインデックスは薄明座の大ホールから出て、元はチケット売り場だったらしきロビー跡地を歩いていた。

彼らの少し前を、漆黒の修道服を着た少女が先導していた。

その名を、アニエーゼⅡサンクティスと紹介した。

「状況はもうメチャクチャ。情報も錯綜しちまってオルソラはどこへいったのやら、って感じですか。『法の書』の方も確保したって情報は上まで上がってきやしませんし、こつちもヤバめな感じですよ」

この場に日本人はいないのだが、アニエーゼは流暢な日本語で言った。

「一応、さらわれちまったオルソラを輸送してた天草式への奇襲は成功って事になんてすけどね。ウチの誰かがオルソラを救出したはいいものの、そいつが本隊に合流する前にまた天草式にかつさらわれちまったんです。それで彼女を再び取り戻すと、さらに天草式の別働隊にかつさらわれて……ってな感じの繰り返し。策敵の包囲網を広げ過ぎたのが仇になりましたね。総合的な人数が多くても、一部隊一部隊の人数が少なくなつちまったもんで、そこを付け込まれました。そんなこんなで何度も何度も

何度も奪還・強奪を繰り返してゐる内に、いつの間にか追つかけてたはずのオルソラがどつかに消えちまつてたつて訳なのですよ」

アニーゼの敬語は粗雑さと丁寧さが同居していた。仕事中に実地で学んだとしたら、彼女は日本の刑事や探偵などと会話する内に言葉を覚えたのかもしれない。

と、そんな事を考えていたステイルに、アニーゼはくるりと振り返る。短いスカートのがひらりと舞つて、白い太股が實際大きく露になる。

「何か？ ああ、すいませんね。英国語クイーンズもできるんですが、どうしてもイタリヤ語のなまりが残つちまうのですよ。普通ならあんま気にしないんですけど、相手がイギリス人の場合だけは例外という事でお願ひいたしやす。言葉は現地の方には敵いませんからね」

ステイルは特に気にした様子もなく口元の煙草を揺らしながら、

「いや、別に気にしていいないよ。何ならこちらがイタリヤ語に合せても構わないけど」

「それはやめてください。イギリスなまりの母国語なんて聞いちまつたら吹き出しちまつて仕事になりません。こういうのは、共通の外国語である日本語を使うのがいいですよ。お互いに言葉遣いを変ならケンカにならないですから」

ばかばか、とアニーゼの厚底サンダルが馬の足みたいな音を出す。

確かに一理あるのだが、彼女はこの国の住人ジャパニーズには何語で話しかけるつもりなんだろうか、とステイルはいらぬ心配をした。そもそも現地の人に使えないのならその国の言葉

を覚える必要などどこにあるのか疑問だが。

インデックスはさっきから黙ったまま、一言も声を発しようとはしない。

むつすーと。ご機嫌斜めにつき沈黙中、という少女の顔をステイルはチラリと見て、それから再びアニーゼの方へと視線を戻す。

「それで、お宅から『法の書』とオルソラIIアクイナスを拝借したっていう天草式だけど、君達にとつてそれほど驚異的な勢力なのかな」

「そりゃ言外に『ローマ正教は世界最大宗教のくせに』って言ってますね。いや実際、返す言葉はありませんよ。数や武装ならこちらが上なんですけどね、連中は地の利を生かして引っかけ回しやがるのですよ。日本はヤツらの庭ですから。数字の上で不利なはずの相手に手傷を負わされるつてのは結構頭にきちまうんですがね。悔しいですが、ヤツらは強いです」

「…….」となると、簡単には屈しないって訳か」

ステイルの声はわずかに苦い。

『武力を見せつけて言葉でねじ伏せる』というのが最速かつ平和的な解決法だと思つたが、相手が交渉に応じない程度の戦力を持つとなれば、後は泥沼の戦いを行うしかない。

天草式との戦闘が長引けば長引くだけ、神裂が横から首を突っ込んでくる危険性は高

まる。こうなったら半端な容赦は全て捨て、彼女に勘付かれる前に電撃戦で天草式を一気に撃破した方が、話はスムーズに進むかもしれない。

ローマ正教の目的は『法の書』及びオルソラ・アクィナスの救出であつて、天草式の殲滅ではない。目的のものさえ戻れば、ローマ正教はそこであつさり手を引くだろう。

後はいかにして、天草式の戦意を失わせるかだ。

「僕は日本の十字教史には疎いから良く分からないんだけど、天草式の連中はどんな術式を使うかわかるかな。それによつて、探索や防御のための陣や符を用意できるかもしれない」

ステイルは今まで元・天草式の神裂と行動を共にしていたが、彼女の術式を分析しようという気にはなれなかった。何せ相手は世界で二〇人もいない『聖人』だ。仮に解析できたところで常人である彼に利用できるものではない。どんな人間でも、長さが五〇センチしかない定規で太陽と地球の距離を測ろうとは思わないだろう。

神父に質問されたアニーゼも困つたように、

「実は……こつちも正確には天草式の術式は解析できちゃいません。ザビエルの耶蘇会が元になつてんならヤツらもローマ正教の傍流という事になるんですけど、もはや匂いも残つちやいません。チャイニーズやジャパニーズなどの東洋系の影響力が強すぎるんです」

それを聞いても、ステイルは特にアニーゼを責めたりはしない。昨日の今日ぶつかっただけで仏教や神道が混ざっている事を掴めただけでも、まあ上々の分析力と言えるかもしれない。

ステイルはアニーゼからインデックスへ意見を求めるように、視線を移す。こういう場面では、軽く常人の一万倍以上もの知識量を誇る彼女の独壇場だ。

純白のシスターはさも当然と言った口ぶりで、

「天草式の特徴は『隠密性』だよ。母体が隠れキリシタンだからね。十字教を仏教や神道によって徹底的に隠して、儀式と術式を挨拶や食事や仕事や作法の中に隠して、天草式なんてものは初めから存在しなかったように全ての痕跡を隠し通すの。だから天草式はあからさまな呪文や魔法陣を使わない。お皿やお茶碗、お鍋や包丁、お風呂やお布団、鼻歌やハミング……こうした一見どこにもある物を使って魔術を行うんだよ。多分、プロの魔術師でさえ天草式の儀式場を覗いた所で正体は分からないと思うよ。だって、普通の台所とかお風呂場にしか見えないはずだもん」

ステイルは口の端の煙草をゆっくり上下させ、

「となると、偶像のスペシャリストといった所かな。ふむ、近接格闘戦より遠距離狙撃戦の方が得意そうだね。グレゴリオの聖歌隊のような大規模なものでない事を祈りたいけど」

「ううん。天草式は鎖国時にも諸外国の文化を積極的に取り入れていて、洋の東西問わず様々な剣術を融合させた独自の格闘術も身に付けているの。彼らは日本刀からトウヴアイハンダーまで何でも振り回せると思う」

「……、文武両道か、面倒な連中だ」

ステイルは忌々しげに吐き捨てた。ちなみにいつの間にか会話の輪の外に追いやられたアニエーゼは爪先でロビーの床を軽く蹴つていじけ虫になっている。床を蹴るたびにいちいち短いスカートがひらひらと揺れた。ぱかんぱかん、と少し間の抜けた足音が響く。

煙草を啜えた神父はアニエーゼの方を振り返り、

「それで、『法の書』及びオルソラIIアクィナスの搜索範囲はどこまでなのかな。僕達ものんびりしていられないだろう。どこを捜せば良い？」

「あ、はい。搜索はこちらで行ってんで大丈夫です」

話題の中心に戻ってこれで、アニエーゼは少し慌てたように姿勢を正し、

「人海戦術はウチの専売特許でね、今も二五〇人体制でやっています。今さら一人二人増えた所で何も変わりやしませんし、命令系統が違うんでかえって混乱しちまう恐れもありますんでね」

「……? それなら、どうして僕達はここに呼び出された？」

ステイルがわずかに眉をひそめると、アニエーゼは口の端を吊り上げて笑い、

「簡単ですよ。ウチらに調べらんないトコを調べて欲しいんです」

「例えば？ 日本にイギリス清教が直接管理する教会などない。僕達に断らなければ探
索できない場所など、せいぜいイギリス大使館ぐらいのものかな」

「いいえ、学園都市ですよ」アニエーゼはパタパタと片手を振って、「場所柄を考えれば、
ありえん話じゃないでしょ。オルソラが学園都市に逃げ込んだまえば、天草式は彼女を
追えません。いや、追いつらい、ぐらいですかね。だからあなた達には学園都市へ連絡
を入れて欲しいんですよ。ウチらローマ正教は学園都市との繋がりが無いんで面倒で
すし」

「確かに……しかし、それなら前もって教えてもらえると助かったかな。ちよつ
と昔の僕に良く言つて聞かせてやりたい気分だよ」

インデックスが学園都市に預けられている事から分かる通り、学園都市とイギリス清
教は細かい糸で繋がっている。せいぜい国交のようなものが『ある』か『ない』かぐら
いの意味しか持たないが、全く『ない』ローマ正教よりは一応『ある』イギリス清教が
連絡を入れた方が波風は立たないだろう。

「………けれど、だとすれば面倒な所へ駆け込まれたもんだ」

「あくまで可能性の話なんで。我らがオルソラ嬢に、そんぐらいの分別がつく心の余裕

があんのを祈りましょう。で、連絡つつか確認にはどんぐらいの時間かかります?」「ああ、電話一本……とはいかないか。一度、聖ジョージ大聖堂の方へ連絡を入れて、そこから中継して学園都市へラインを繋がないてはならないから……緊急と言っても七分から一〇分はかかるかもしれないね。ちなみに学園都市への侵入許可となるとさらに面倒になる。技術的に忍び込むのは可能なんだが、役所的に考えるとそれは避けたいところだしね」

「とりあえず確認だけいでいで、もちつと早くしてもらえつと助かりま——」

言いかけた所で、不意にアニメーゼの動きが止まった。

彼女の視線を追うと、ロビーの先には建物の出入り口がある。ガラスでできた両開きのドアが五つも並んだ、大きな入場口だ。

「何だ? 一体どうし——」

ステイルは問い質そうとした所で、やはり彼の動きが止まる。

「?」

最後にインデックスが二人の視線を目で追い駆けた。

ガラスの入場口のさらに向こうには、元は駐車場に使われていた、アスファルトの広場がある。建物の大きさに反して、極端に小さな空間だった。今では固められた地面の隙間からたくましい雑草が伸びている以外は何もないはずのだが——何もないはず

の駐車場跡地に、何かがあった。

というより、誰かがいた。

「あ、とうまだ」

インデックスは見慣れた少年の名を告げて、

「お、るそらⅡアクイナス？」

アニエーゼは、少年のバイクにまたがっている漆黒のシスターの名前を言った。

名を呼ばれた彼らは、まだ薄明座の中にいる魔術師達の存在に気づいていないようだった。

学園都市 伍 Science | Worship V

上条はバイクから降りて、薄明座跡地の敷地へと足を踏み入れる。

建物は遠目に見ても巨大な事が分かるのに、正面にある駐車場は職員専用かと思うほど極端に小さかった。駅の近くだし、すぐ隣に立体駐車場があるからだろう。一応、二メートル程度の高さの金属板と鉄パイプで敷地は完全に囲まれているのだが、作業員が行き来するための出入り口が強引に広げられていた。

(さつてと、連中は中かな。外は暑いし)

上条は薄明座の入場口へと目を向ける。両開きのガラスのドアが五つも並んだ大きな出入り口だ。板や何か塞いである様子もない。廃墟というより休業中みたいな感じだ。

と、そんな事を考えている上条の前で、五つ並んだドアの一つが手前に開いた。

「おっ？」

上条は思わず声を出した。

中から出てきた三人の男女の内、二人は見覚えがある。インデックスとステイルだ。最後の一人——インデックスより幼そうな外国人の少女だけ、上条は見覚えがな

い。着ている服は、バス停で出会ったシスターさんと同じ黒い修道服だ。ただし、この少女はフアスナーを外してスカート部分のオプシオンを切り取っているのか、極端なミニスカート状態になっている。足元へ視線を移すと、なんと靴底が三〇センチもある木のサンダルを履いていた。

と、インデックスは上条の顔を見るなり、

「とうま、そのシスターさんとはどこで会ったの?」

「……、バス停だよ。で? ステイル。俺がここに呼ばれた訳は? わざわざ手の込んだ誘拐ごっこまでかましてな!」

叫ぶ上条に、ステイルは面倒臭そうな顔で、

「ああなんだ。狂言だっていうのはバレていたんだね。君をここへ呼んだのは人捜しを手伝って欲しかったからだよ。インデックスはそのための囷に使っただけだ。ちなみに現場責任者はこちら。ローマ正教のシスター——」

ステイルが適当に煙草の端で指すと、厚底サンダルのシスター少女が『ど、どーもです』と頭を下げた。日本人はしよっちゅう頭を下げる、という事前情報は知っていたのだろうか、動きが大袈裟すぎてホテルマンみたいに見える。ステイルのセリフが途中で切れたのは上条が手刀を叩きこんだからである。

と、自己責任とはいえ、少女の名前も知らない結末に至るのはしやくなので、上条は

自己紹介をする事にした。

「Ciao, carino incontrarLa. Kamiyo Tom

a. Lei? (こんにちは、初めまして。上条当麻です。貴女は?)」

「え、あ。アニーゼさんクティスです・・・」

「・・・あれ? もしかして日本語できる系? ま、いいか」

自己完結しかけた上条に詰め寄るようにインデックスが声をかける。

「とうま、イタリア語できたの?」

「まあ、一応世界各国の言語をナマリなしには喋れるかな・・・。で? 人捜して誰だよ。あいにく一人なもんでスキルは大幅にかけますぜ」

「ああ、大丈夫大丈夫。君の隣にいるシスターをこつちに引き渡してくれば良いだけだから」

はい? と上条は目を点にする。

「だから、君の隣にいるシスターが行方不明の捜し人だよ。名前はオルソラアキナス。はいお疲れ様。いやあ良く頑張ってくれたね。上条当麻、君はもう帰って良いよ」
「・・・、悪い。そりゃ無理だ。オルソラ・・・だっけ? アイツは今学園都市の保護下にある。例え同郷の仲間だったとしても完全な安全が確認できるまで引き渡しはできねーよ」

『え!? どうま!?』と叫ぶ少女を無視して上条は真つ黒シスターお姉さん改めオルソラ
「アクイナスの方へ振り返って、

「……そういや、お前誰かに追われてるって言うたけど、この『人捜し』と関係してたのか? 安心しろ。俺は一度口にした事は貫き通すから」

上条が声をかけると、オルソラは何故かビクンと体を震わせた。それは抑えようとして失敗したような、小さな震えだった。

上条は誰にも見えない角度で唇の端を吊り上げると、息を吐くように一つ笑った。

『いやいや。そうそう簡単に引き渡されては困るよなあ?』

不意に、野太い男の大声が聞こえた。

声は不自然にも、上条の真上から飛んできた。上条達が夕空を見上げると、七メートルほどの高さで、ソフトボールぐらいの大きさの紙風船がふわふわと浮いていた。

紙風船の薄い紙がひとりでにピリピリと振動し、先程の男が声を作り出す。

『オルソラ! アクイナス。それはお前が一番良く分かっているはずよ。お前はローマ正教に戻るよりも、我らと共にあった方が有意義な暮らしを送る事ができるとよ』

瞬間。

鋭い音と共に、上条とオルソラを遮るように地面から一本の剣の刀身が飛び出た。頭

上に意識を誘導させられていた彼等にとってはまさに死角からの不意打ちに近かったが、上条は違う。

「何かいるなとは思ったが、敵さんでしたかー」

と、軽い口調で刀身を根元から折り曲げた。

さらに二本、オルソラを囲むように、地面から剣が飛び出す。

飛び出した剣は、サメの背びれが海面を引き裂くように、地面を一直線に滑った。三本の剣がそれぞれ突つ切ると、地面はオルソラを中心とした、一辺二メートルの正三角形に切り抜かれる。

「あ————ッ?」

重力の消える感覚にオルソラが恐怖というよりは戸惑いに近い声をあげる。だが、それが明確な悲鳴になるより早く、正三角形に切り抜かれたアスファルトごと、オルソラの体が暗い地下へと落下していく。

「天草式!!」

アニエーゼが叫んで手を伸ばそうとしたが、もう遅い。オルソラの体は暗い闇の底へと飲み込まれてしまっている。上条は慌てて穴の縁へ走り、忌々しそうに舌打ちする。

「下水道かよ………ッ!」

頭上の紙風船は熱を帯びた、しかし要点を忘れない声で、

『ローマ正教の指揮官さえ追つていけば、オルソラ・アクイナスがどこへ逃げようが誰に捕まろうが、いずれはここまで連れて来られると踏んでいたのよ。まったく地下を辿つて待ち構えていた甲斐があつたというものよなあ!!』

上条は状況が全く掴めない。

下水道に潜んでいたのは誰なのか。いきなりオルソラをさらつた理由は何なのか。

しかし、これだけは分かる。

連中は、いきなり問答無用で刃物を使って人間を奪つた。それも話を聞く限り、突発的なものではなく、事前に計画を立てて、ずっとずっとひたすらにチャンスを待ち続けて。

「おいこらあー!」

上条は正三角形に切り抜かれた穴の中を覗く。暗いので遠近感が掴みづらいが、それほど高くはないと感じられた。彼は飛び降りようと穴へ向かつて、

「待つて! 駄目だよ、とうま!!」

インデックスが思わず叫んだ瞬間。

闇の中から、何十もの刃の光が閃いた。

夕日のわずかな光を照り返すのか、オレンジ色の光がキラキラヌラヌラと下水道の中で蠢いた。刀身の光を浴びて、地下に潜む者達の輪郭だけがうつつすらと浮かび上がる。

その時、夕日よりも強い光源が穴の大きさに下水道を照らした。

とてつもない吸引音と共に、周囲の酸素が減っていく。原因は、穴の真上でまるでハンドボールでも投げるかのような状態で浮いた上条の右手に生まれた巨大な球炎だった。

ドッパア!! と、下水道の中に炎の津波が生まれる。その莫大な光量の中に降り立った上条は、周りを見渡して。

「チツ。逃げられたか」

当たり前といえば当たり前だ。体育会などで使う大玉サイズの炎球を持った少年が突っ込んできたら誰でも逃げるだろう。

上条は、下水道から計算して十メートルほど跳躍すると、紙風船を右手で潰す。

「オイ。テメエ一から十まで説明する気あんだらうな?」

「説明は、僕の方が求めたいぐらいだね」

ステイルⅡマグヌスは踏みにじるように答えた。

ローマ正教 The Roman Catholic Church

陽は沈み、夜が訪れた。

だが、その到来は静かなものではない。黒い修道服を着たアニエーゼは、同じ色の修道服を着たシスター達にイタリア語で指示を叫んで、あちこちを指差して命令を出している。また、手の中にある小さな本に羽ペンを使い、ものすごい速度で何かを書き込んでいた。デンワみたいなものだよ、とインデックスは言った。あの本に文字を書くこと、別の所にある本に同じ文字が浮き出るらしい。『それは電話というよりメールだろ』と指摘した上条は柔らかいパンチをもらった。

漆黒の集団——おそらくはローマ正教の正規シスター達——は、オルソラを連れ去った者達が切り取った正三角形の穴から下水道へと飛び降りていった。そして別の集団が地図を広げ、羽ペンに赤いインクをつけて次々とラインを引いていく。逃走ルートの特定か、検問や包囲網などの特定かは、上条には関係がない。

バタバタと慌ただしい夜の中で、上条とインデックスとステイルの三人は少し離れた所にポツンと固まっていた。

「あのー、そもそもなんでご主人やインテックスさんはここに呼び出されたんですか？何かをするとしても、実質働いているのはローマ正教の人達だけです。私達は完全に蚊帳の外ですし、ここにいる意味あるんでしょうか？」

ふわりと現れた少女に、ステイルは驚く事も放棄して、

「……いや。そろそろ僕達の増援も到着してなくちゃならない頃なんだけどね。何をやっているんだ、騎士団の連中は」ステイルは苦そうに煙草の煙を吐いて、「それから、この件には僕達の力は必須だよ。いや、正確に言うなら彼女の力だけだね」

「魔道書……図書館」

「そう。魔道書絡みなんだよ。今回の件は。それも『法の書』の原典と来た」

割と自己完結っぽく言うステイルに代わって、インテックスが簡単に話をまとめて説明した。

どうやら『法の書』という、世界の誰にも解読できない暗号で書かれた魔道書があるらしい。魔道書の内容はとても貴重なもので、解読すれば絶大な力をする事ができるらしい。そして、今まで誰にも解読できなかったはずの魔道書について、今になって解読方法を編み出した少女が現れたとか。

そんな折、魔道書『法の書』と、それを解読できるオルソラ・アクイナスという少女が、天草式十字清教の手によってローマ正教からさらわれてしまった。

(天草式十字清教ねえ……)

「誰にも解読できない、ねえ。インデックスとか他の解読専門の魔術師でもダメなんですか?」

「無理だよ。一応やってみたけど、あれは普通の暗号とは違うっぽいかも」

「それってどんな暗号なんだ? あれか、全部絵文字とか」

「うーん。数字があるけど……。あとは良く分からない記号ばかりで……」

「……良く分からない記号?」

「……それプラス数字?」

「……それって、計算式じゃねーの?」ないですか?」

「へ? でも、これ一部だよ……。後書いてあるのも暗号ばかりで」

「どんな本だ? 検索して自分で解読して見る」

「駄目だよとうま! 『法の書』に書かれた術式はあまりに強大すぎて、それが使われれば十字教が支配する今の世界が終わりを告げるとまで言われるいわくつきの魔道書。真偽なんていちいち確かめちゃだめ! 封が守られるのならそのままにしておいた方が良いんだから。だって一説には人の理を超えた天使の術式すら意のままに操れるとまで言われているんだから!」

その言葉に、上条は啞然とする。

「てん、し……だつて？」

「うん？ 宗教を信じない君には少し奇抜すぎて想像がつかないかな」

ステイルは嘲るように言ったが、違う。

「ですが、誰も『法の書』を解読した事がないっていうなら、本物かどうかは定かではないと」

「うん。でも『法の書』に関してはずきつとクロだよ、たかね。あれを執筆するために筆を尽くした魔術師っていうのがもう伝説級なの。それこそ新約聖書に登場してもおかしくないレベルのね。彼が活躍したのはほんの七〇年ぐらい前なんだけど、その七〇年で数千年を超える魔術師の歴史は塗り替えられてしまったと言つても過言じゃない。現在いる魔術師の二割は彼の亜流だし、何らかの影響を受けている程度なら五割に届くかもしれないほどの実力者だったの」

インデックスの言葉は真剣で、上条は下手に言葉を挟む事もできない。

『法の書』は本物だと思う。もしくは、ウワサ以上の代物であっても私は驚かないよ」

「へえ……」

「その『彼』というのは？」

「エドワード・アレクサンダー。またの名をクロウリー。今はイギリスの片田舎の墓の中で眠っている」ステイルは新しい煙草に火を点けて、「一言で言えば、最悪の人間だつ

たと記録されているね。ある魔術実験では守護天使エイウスと接触する器として共に世界旅行に出かけていた妻の体を旅先で使っているし、娘のリリスが死んだ時も顔色一つ変えずに magical の理論構築を行っていたそうさ。しかも、その実験では娘と同年ぐらいの少女達を犠牲にしていたらしい。……。一応、それらの功績として別世界——天界や魔界などと呼ばれる『層の異なる重なつた界』の新定義を見出し、それまでの魔術様式を一新したんだがね」

風向きが変わつたのに併せて、ステイルは立ち位置を変えた。インデックスへ煙を向かわせたくないらしいが、そのとぼちり思い切り上条の方へ流れてくる。上条は気に入った感じもない様子で、ステイルを横目で見た。

「まあ、それだけ善悪好悪大小様々な逸話が多い魔術師としても知られているのさ。『法の書』もそうさ。奴は自分の進む道に迷うと、『法の書』を使った書物占いを行い、その内容を元に道を選んでた。つまりは世界最高の魔術師の分岐点を——近代西洋魔術史全体の舵を取っていた魔道書つてわけだ、『法の書』には何らかのいわくがあると踏んだ方が賢明だろう？」

自分で自分の言葉に嫌気が差したのか、ステイルは舌打ちする。

上条と貴音は共通して、一つのある単語が気になっているようだった。

「ちよつと待て、『法の書』を書いた彼の名前が何だつて？」

「聞いてなかったの？　とうま。いい？　エドワード・アレクサンダー。一般的に売られている写本にはアレキスター・クロウリーって記されていたりするけどね」

「アレキスター……？」

「クロウリー……？」

「まったく。今そんな事を考えても仕方がないだろう。馬鹿だな、君は」

「エイワス……？」

「何がそんなに気になってるの？　とうま、たかね」

「……い、いや。気にするなインデックス。もう、大丈夫だから」

ローマ正教 式 The Roman Catholic Church. II

指示出しがようやく終わったのか、アニーゼが短いスカートを揺らして上条達の元へと歩いてきた。パカパカと、異様に高い厚底サンダルが馬の蹄のような足音を鳴らす。

上条はインデックスより年下のこの少女に内心でちよつとたじろいだ。どうも魔術側の人間には年功序列は通じないらしいのはイギリス清教やロシア成教の不思議シスター達を見ていれば何となく分かる（まあ、ミーシャは外・見・だ・け・だったが）。その上、相手は先程まで直接で何十人、通信では何百人もの人間に何やら外国語で格好良さそうに指示を飛ばしていた人物だ（もつとも上条はその内容をほぼ完璧に理解していた為、現在情報を何となく掴んでいるのだが）。

「あ、え、つと。こ、これから状況の説明を始めちまいたいんですのだけどそちらの準備は整っていますですでござりますか？」

「……………」

強烈な日本語だった。

何だよそれは、と上条は思う。

いくら個性といつてもそれはないだろう。

何やらカチコチに固まったローマ正教のシスターはフラフラとおぼつかない姿勢で、顔を真っ赤にしている。なるほど、外国人に対するファーストトークの緊張は万国共通だったのか、と上条が妙に納得して心の中でちよつと頷いたりしていると、続けてアニーゼは、

「ど、どうも本場の日本人の方に自分の拙い日本語を話すのは、き、緊張してしまつて。あ、他の言語は使えますか。アバル語とかペルペル語とか、お互いの文化圏とは離れてゐるトコが好ましくんですけど」

「? ? ? ? (韓国語なら話せるが、いけるか?) 那个?, 中文。(あと、中国語も) Deutsch, ist auch, aber wie steht, sd amit ziemlich gut? (ドイツ語もまあまあできるけどどうだ?)」

「ちよつ、とうま。コロコロ言語を変えないでほしいかも!」

「Oh, a fact is even if say, index. (んな事言つたつてよ、インデックス) ? ? ? ? ? ? ? ? (相手にどの言語が通じるかなんて) Разве я не знаю егo? (俺には分からないんだぜ?)」

「うーにゃー! とーまー!」

「我々！ よれよれ！ 世界はダーク！」

「(・ω・)」(／・ω・)／にやー！」

「(・ω・)」(／・ω・)／にやー！」

「(・ω・)」(／・ω・)／にやー！」

Let's (・ω・)／にやー！」

ノリノリで歌いだした貴音を腹パンで黙らせ、上条はにつこりと笑顔で続きを促す。

「では改めて、こつから今の状況と、今後の我々の行動についてお話しするとしまひやあ!?」

言葉が終わる前に、ふらつく足もお構いなしで無理に背を伸ばし続けたアニエーゼは後ろへバランスを大きく崩した。『わっ、わっ！』と宙を泳ぐ彼女の手が、ワラをも掴む理論で上条の手をがっしりとキャッチする。

「おっ！」

手を掴まれた上条は足を素早くずらすと、腕に力を入れ倒れるのを阻止する。そのままた勢いよく掴まれた手を引くと、起き上がりこぼし見たいにアニエーゼの体が元通りになる。

「大丈夫か？」

「ええ、大丈夫です。すみません、どうも緊張すると体のバランスがおかしくなっちゃまう

ようで」

「少しづつ落ちてきてきたのか、アニエーゼの体はコチコチに固まっているが、口ぶりからは緊張の色が削げていく。」

「ええ、では今から『法の書』、オルソラⅡアクイナス、及び天草式の動向と、我々の今後の行動について説明しちまいたいと思います」

「お願いしますデス！」

「現状、『オルソラⅡアクイナス』は確実に天草式の手にあります。『法の書』の方も十中八九間違いないでしょう。今回の件に出張つてゐる天草式の数は、推定でおよそ五〇人弱。下水道を利用して移動してゐるみたいなんです、今は地上へ上がっちゃまつてゐる可能性もあるんすよ」

「つまり、何も分かんないって事かな？」

「アニエーゼに寄りかかられたインデックスが、少し苦そうに言う。」

「はい。我々はそこに残存してゐる魔力の痕跡から天草式の動向を追つてますが、これが上手くいきやしません。流星は隠密性特化型宗教派・天草式十字清教つてトコですかね」

「隠密型？」

「コソコソするのが得意つて訳か」

「並行して別働隊に辺りへ包囲網を敷かせてますが、こつちの方が早くヒットしそうです」

「……なあ、一ついいか」

「なんです？」

「天草式十字清教つてもしかして、元は隠れキリシタンとかそういうの？」

「そうだけど、それがどうかしたの？　とうま」

「いや、だったらその包囲網も意味無いかも知れないなって」

「？」

「大日本沿海與地全図。——伊能忠敬ですね」

貴音のその言葉にインテックスとステイルが何かを思い出す。

「で？　その渦に向かうんですか？　ご主人」

「そうしようかと思うんだけど……なあ。包囲網つてどのくらいの広さなんだ？」

「ここを中心として半径一〇キロってトコです」

「だとしたら……あそこか」

……と、その前に。上条が辿り着いた推理の結果を、全員に話しておく必要がある。

ローマ正教 参 The Roman Catholic
Church. III

——その夜。

準備の時間の間、仮眠を取れとステイルに言われた上条だったが、彼は薄明座の屋上にいた。

その背中に声がかかる。

「ご主人」

「……ん、貴音か。どうした？」

「いえ、本当にあのローマ正教に協力するのかな。と思ひまして」

「はははっ。そんなバカな。俺は学園都市の人間として保護下のあいつを助けるだけ
さ」

「でつですよ。でも、何ですか？」

「本当に分からねーの？」

「……はい。お恥ずかしながら」

少し顔を赤らめる貴音に、上条はお前そんなキャラじゃねーだろ。見たいなツツコミ

を入れる。

「じゃあ聞くが、何でオルソラは味方であるはずのローマ正教に戻ろうとせず、学園都市に逃げ込もうとしたんだ？」

「……えーと、安全だからじゃないですか？」

「ああ。その可能性もあるな。だがな、俺達が到着した時、ステイルにアニーゼは言っていたんだ。学園都市と繋がりが無いから捜しにくい。つて」

「？」

「天草式は追おうと思えば追える場所だろうが、ローマ正教は違う。天草式十字清教と違って隠密性にも優れていないからな。人払いの術式ぐらいは使えても、学園都市のゲートをくぐる事はできないだろうさ」

「……じゃあ！」

「そーゆー事。オルソラの目的はローマ正教から逃げる事さ。その仲介役にでもなったんじゃないの？ 天草式は」

「……なるほど」

納得したように頷く貴音を見て上条は少し笑う。

「なあ貴音。ちよつと相談なんだが」

「？ 何ですか？」

「空つて飛べると思う？」

「……………。ご主人、いつからそんなメルヘン思考に…………」

「誰が翼で空を飛ぶって言ったよ」

「でも、『飛んだら』駄目ですよ？」

「分かつてるよ。だから物理的に飛ぶんだ」

「は？」

「ほら、この前の海の時。俺両手から水撃ち出して移動したじゃん？ あれの応用でさ、

手から炎を出したらさ。飛べるんじゃない？」

「……………馬鹿ですか。馬鹿なんでしょうね。ご主人ですから。確かに炎を撃ち出せば飛べるでしょうが、それはロケットや飛行機と同じ原理、細かい調整をしないと上に上がってしまったり、徐々に落ちたりでホバリングは難しいですよ」

「んー。だよなー」

「分かつてたんですか……………。……………それじゃあそんなご主人に救済処置です」

「ん？ は、え!?!……………手袋と、指輪……………」

「着けといてください。いずれ役に立ちますから」

「お、おう」

「あ、あー！ 右手の中指ですよ！」

「あ、わ、悪い」

着け直す上条。そのリングはなぜかとても喜んでいるように見える。リングには真ん中に大きな石と、周りに六つの小さな石がついていた。とても綺麗な装飾が施してあって、センターストーンの奥には何かの紋章が見える。

「VONGOLA・・・？ イタリア語で『あさり貝』・・・だったよな。FAMILIA・・・ファミリー？」

「深く考えたら負けですよご主人」

「27？」

手袋の甲の部分に編み込まれた27に上条は疑問を持つ。

「いいですから、体が覚えてますから」

「・・・悪いな」

「いえいえ」

——午後一一時二七分。

『パラレルスウィーツパーク』の職員用出入口に近い金網フェンスの辺りまで上条、貴音、インデックス、ステイルの四人はやってきた。

まだ戦場にも入っていないのに、上条は静電気を帯びた空気のようなものをピリピリと肌で感じていた。フェンスの向こうに広がる闇のどこかから誰に覗かれているのか分からないのだ。実際には園内の限られた場所に敵が潜んでいるだけなのだろうが、もうこの施設全部が巨大な敵の胃袋のように見えてしまう。

「おー。夜の遊園地って学校と同じくらいテンションあがりますねー」

「心霊現象とかだな。まあもつとも学園都市じゃそんな事はできないがな」

「ちよつと緊張感が足りないかも」

「まあまあ。なあステイル」

「何だ？」

「お前は、本当に時間内に全部の仕事を片付けられると思うか？ ポイントの破壊と、

『法の書』の探索、オルソラの救出。その全部だ」

上条の問いにステイルは少し黙った。インデックスも緊張した顔で二人を交互に見ている。

「……………正直、厳しいだろうね」ステイルわずかに間を空けて答えた。「ただでさえ園内のどこに『法の書』やオルソラが保管されているかも分かっているんだ。それに、実はローマ正教には伝えていない情報が一つある」

「神裂関係か？」

「その通り。事件発生直後にイギリス国内にいたはずの神裂火織が消えた。おそらくかつての部下……いや、仲間を思つての行動だろう。天草式決定的なダメージを与えようとすれば、あの聖人が襲ってくるかもしれない」

「ほうう」

上条は気楽そうに感嘆の声を上げる。なぜなら上条は一度神裂に勝っているからだ。

「だから全ての仕事を成功させようなんて思うな。ただでさえ破綻気味の計画で、さらに危険要素が満載なんだ。最悪『法の書』が解読されるのだけは防ぐように立ち回るんだ」

「んだつたら最優先はオルソラで良いよな？」

「僕は別に構わないさ。解読者がいなければ『法の書』は宝の持ち腐れだ。『法の書』の知識自体はその子の頭の中に入っているんだし、原点にも興味はない。それに『法の書』の持ち主はローマ正教なんだから紛失してもイギリス清教はどこも痛まない」

「私はそれでいいと思うよ。ていうか、とうまはダメつて言つても勝手に突っ走つちゃうに決まつてるもん。ただでさえ人数少ないんだからみんなでまとまらないとね」

インデックスとステイル、イギリス清教の魔術師達は特に悩みもしないで答えた。

おそらくプロとしての事情もあるのに、何も事情を知らない素人の意見を聞いて。

「分かった。ありがとう」

上条がそう言うと、二人はやや面食らったような顔をした。元々表情豊かなインデックスはまだ普通だが、ステイルは見方によって滑稽にも映る。

チツ、とステイルは舌打ちして、

「突撃前に気を削ぐような気持ちの悪い真似はするな。一一時三〇分には陽動が始まるんだ。それに合わせて内部へ侵入するんだから、そろそろ——」

「とうま、中に入ったら気を緩めちゃダメだよ？　ちゃんと私の後ろに隠れてて、私の言う通りに動かなきゃ危ないんだからね」

「ん？　大丈夫大丈夫。襲い掛かってきた奴全員ぶつ飛ばすから」

「それがダメなんだって！」

上条とインデックスは意見の不一致によって睨みあう。

「——そろそろ進入するんだから、気を引き締めて欲しいんだけどね。本当に」

会話の輪から外されたステイルが平坦な声で言った瞬間、

遠く離れた一般用出入り口の方が爆発が起きた。

「おっぱじめやがったか」

「すっごー」

「爆炎って感じだな」

上条は時計を確認してから金属フェンスを飛び越える。

「ほら、行くぞ」

「イエツサー」

「あ、こら待つんだよとうま！」

「やれやれ」

暗い園内を上条はスイスイと歩いていく。本来の観覧コースではないため普段見ない景色だが、上条はものの数秒で観覧コースへ突入する。

「そんじやまー、広いトコに出たんだし、貴音さんよろしく！」

「ほいきたぐ主人！」

貴音の袖口から大量の護符が飛び出してくる。そしてそれが勝手に地面に魔法陣を作り上げる。

「ほんじやまー。いっちょ探索を・・・」

貴音が一枚、指で挟んで構えた瞬間。ガン、という金属音が聞こえた。

お？ と彼らが音の所した方——自分の頭上を何気なく見上げた瞬間、

そこに、ジェラート専門店の屋根から飛びかかってきた四人の少年少女が宙を舞っていた。

彼らの手には、それぞれ西洋剣らしきものが握られている。

「はっ」

軽く笑った上条の視界の端にインデックスが映る。別に気にした様子もなく上条が宙に掲げた右手に二メートル級の日本刀が握られる。その日本刀は地面を擦るようにふるわれる。

全ての西洋剣の剣先を弾き持ち手のバランスを空中で崩す。

少年少女達が地面に降り立つ。少年が一人、少女が三人。全員上条と同じ年ぐらいだった。服装も奇抜な修道服などではなく、普通に、街を歩いているような格好だ。しかし、だからこそ逆に手に握られた西洋剣の禍々しい輝きが強烈な違和感となっている。

ステイルは忌々しげな声で、

「ハンドアンドハーフソード、バスタードソード、ボアスピアソード、ドレスソード。まったく、この国の人間は本当に西洋圏ほくたちの文化がお好きだな！」

「だな」

上条は楽しそうに笑う。クルクルと日本刀を器用に回すと自らの影に刺して、そのまま影にしまった。

ステイルはルーンのカードをばら撒き、炎剣を引き抜きながら、
「君にやる。死にたくなければ肌身離さず持っているろ！」

懐から取り出した何かを、上条に向かって投げつけた。彼が慌てて受け取ると、それ

は銀でできた十字架のネックレスだった。

「これは……………」

……………何に使うものなんだ？ と聞こうと顔を上げた瞬間、上条の眼前にデツキブラシぐらいの長さの細身の両刃剣（ドレスソードというらしい）の切っ先が天草式の少女によつて無言で、轟!! と突き出された。

「おっ」

上条は軽く後ろに跳んで避ける。が、続いて少女が踏み込む。そして横薙ぎの一撃が放たれる。が、上条はその踏み込みの足を払った。

「主人！」

貴音の叫び声が聞こえた瞬間、真下の少女のドレスソードが草刈り機のように振るわれた。上条は先程足払いたため、体幹が整っていなかった。そのせいもあって、上条の足が足首から先が切り裂かれる。

「とうま!!」

後ろに倒れた上条は側転とバク転を組み合わせたような動きで距離を取る。その際、血の流れが足の軌跡を描いていたが、地面に着いた時には靴も足も元通りになっていた。

「[?:]」

驚愕のような空気がその場を支配する。

上条が顔を上げるとステイルが蜃気楼を残して消えていた。

(逃げた………?) 「おいおい? 人任せかよ」

「背中、預けて良いですか?」主人

「全員潰すぞ」

「イエッサー」

その言葉を聞いたのか、天草式の刺客が構える。どうやら今の優先順位はインデック
スより上条らしい。

「さて、遊ぼうか」

そう言つて上条が取り出したのは二丁の装飾銃。はだけた制服から見える胸と同様。
XIIIの文字が刻まれていた。

『『不吉』を………』

「届けに来ましたよっ!」

それを合図に貴音が護符をばら撒く、その一つ一つがすでに発動していて——
「殺れ」

——四方八方に光の柱が突き立った。

「!!!」
「!!!」

「余所見たア。余裕だなア、オイ」

それを見逃すはずのない上条の攻撃で、全員沈む。

そして、上条と貴音。お互い振り向きざまにハイタツチをする。

「よし。ほんじゃまあ。オルソラを捜すか」

「ですねー」

死ぬ気の炎 The Blood of VONGOL

A

オルソラの搜索を再開する上条と貴音。

と、上条達が観覧コースの曲がり角を曲がった所で真横から何者かに体当たりされた。

「!?」

店の陰からの完全な不意打ちだった。上条のバランスが崩れる。彼はとっさに足を引き、転ぶのを阻止する。

「おろろ?」

体当たりしてきたのは、オルソラIIアクイナスだった。

何故か両腕を真っ白なガムテープで拘束され、口にも同じテープを張り付けた状態で、

「むぐー。むがむぐむむぐむーむーむぐぐむむぐむまむむむぐーむーむーむー」

「あー? むぐむぐ言って分かるか! しっかり喋りやがれっ!」

「口塞がつてる相手に容赦無いですねー」

「大丈夫かー?」

上条は彼女の口を塞いでいるお札らしきものを右手の人差指でなぞった。関節とはいえ唇を触られたオルソラはびっくりした顔になったが、直後にお札らしきものが自然に剥がれたのを見てその一〇倍ぐらい驚いていた。

「あ、あの。あなた様はバス停でお会いした方でございますよね。でも、何で」

「言つたる? お前は今学園都市の保護下にあるつて。とりあえず危険な場所から出
ねーと」

「えーと、つまり?」

「助けに来たって言ってるんですよ。あ、そう言えばご主人」

「んだよ」

「ケルト十字、下さい」

「は? いや別にいいけど……」

上条はポケットから取り出した十字架を右手で貴音に放る。

「おとと。さて、こんなものご主人に渡すとどうなるか教えてあげます」

「は? おい貴音、何する気だよ」

「はいはい。オルソラさーん。動かないでくださいねー」

「勝手に着けたら怒るだろ……。それイギリス清教の物だぜ……。って嬉しいの?」

「・・・はい」

上条はモコモコした己の両手を見つめて。

「これ、本当に意味あるの？」

「ありますあります。その手袋は大事です」

「あ、そう」

そして、上条が外を覗こうとした時、

ゴン!! という鈍い音を聞いた。

店の向かい——円形の観覧コースの方からだ、と上条は思った。が、慌てて飛び上がる前に、視界に何か映った。ヒュン、と夜空に何かが舞ったのだ。

それは人間に見えた。

赤い髪の、黒い服を着た神父に見えた。

「す、て・・・いる!?!」

上条が言い終わる前に、ステイルⅡマグヌスは勢い良く地面へ落下した。今まで彼の姿を隠していた背の低い植え込みの木を押しつぶすように、背中から地面へ激突する。彼の衣服は所々が鋭い刃物で切り裂かれ、その肌から血がにじんでいた。

「おいおい。ブザマだなステイル」

「く、そ。上条、当麻か。何をやっている、早く逃げろ!!」

「おっ？」

上条が声を上げた時、彼が背中を預けている店の、二つ横の壁が生き物のように大きく盛り上がった。

「おおう！」

上条が驚きと喜びの混じった声を上げる。まるでシャツが海面を突き破ってジャンプするように、店の壁を木つ端微塵に砕いて何者かが飛び出してきた。人影の背後で支えを失った建物が崩れていく。ガラガラと、人の腕ほどもある太さの建築木材がすぐ近くに降り注ごうが、その人物は少しも動じない。あまつさえ笑みすら浮かべていた。

体は細く長身なのに、相撲取りが来ていそうなほどサイズの合わない大きなTシャツとジーンズを履いた二〇代中盤の男だった。Tシャツの柄は白地の上に、右胸辺りを中心に赤いクロスが走っている。ジェルか何かを使って意図的に毛先を尖らせた髪型をしていて、何より特徴的なのはその髪の色か。圧倒的に黒い。わざわざ黒の髪染めで染め直したであろう髪は、クワガタみたいに妙な光沢すら放っている。

どう考えても現代社会にマッチしない大剣を、その男は片手で軽々と握っていた。

「くつく。なあにをやつとんのよイギリス清教の神父様。おら、英国紳士の誇りはどこ行つた？ この建宮齋字に見せてみる。いかんよなあ、そんなんじやあ女の一人も守れんぞ」

チツ、とステイルは忌々しそうに舌打ちしてルーンのカードを取り出す。

彼は目の前の危機である大剣の男、建宮齋字など見ていない。その先——壊れた店舗の向こうの観覧コースで身構えている、一人の白いシスターの行く末を最重要視している。

「やっぱ、大切なんだな」

「余計な事は、考えるな」ステイルは血でも吐きそうな声で「……よし、オルソラIIアクイナスは確保、できているね。相変わらず、その悪運は幸か不幸か判別しにくいものだ。……とにかく、後は隙を作つて逃げるぞ。無理にあれを倒さずとも、逃げ切れば僕達の勝ちだ」

「それでなあ、何だつてこんな所でお前と鉢合わせにやらんのよ？ 何度も説明したはずなんだがなあ。オルソラIIアクイナス。我々は貴女に危害を加えるつもりはない」

説明している本人が、対して説得力を求めていないような薄っぺらな声だった。

言外に、オルソラを逃がしてしまった自分の部下に失望するような色すらある。

オルソラは、壊れた店を、傷ついたステイルを、そして建宮のフランベルジェを見て、「確かに、あなた様のお言葉は希望に満ちていたと存じ上げてございますが。私は武器を振り回しながら訴える平和など信じられないのでございますよ」

「残念だなあ。ローマ正教などに戻つても仕方がないだろうによ」

建宮はまるで肩の調子を確かめるように大剣を握った右手を軽く振りまわした。

「……………」

上条はオルソラを庇うように、無言で彼女の前に立つ。

今ここで使用できる武器は二つ。先程の日本刀といつもの二丁拳銃のみ。そしていつでも使える物として、己の肉体を上げておこう。

建宮は最初に上条の顔を、次に彼の足元に転がっているドレスソードを見て、

「武術の構えもなければ零装もなし、衣服に隠された魔術的記号などもなし。本当の意味で丸腰、と。ふん素人とは剣を合わせるつもりはなかったんだが……………そうもいかんようじゃねえの。お前さん、その剣は浦上から奪ったもんか？」

「は？…んだこの剣。邪魔だな」

建宮の視線を追った上条は自分の足元に転がるドレスソードを見つけ遠くに蹴り飛ばす。

「後、テメエの部下ならあつちで寝てんぞ。一撃で仕留めたから死んじやいねーだろうけどよ」

「……………、死ななきや良いって訳じゃねえのよ。ナメてんのかテメエは」
建宮の口調から、ふざけたような色が消える。

上条はその様子に、建宮の人間性を見た気がした。相手はただの化け物ではなく、自

分の仲間の身を思つて怒れる人間なのだ。

「ナメちやいねーよ。それと、テメエがまだそこで誰かのために戦えるような人間なら、剣を引いてくんねえか。俺はできるだけアンタみたいな奴とは戦いたくない」

「そうしたいのは山々何だがなあ、こつちにも事情があるのよ。確かに我らの主敵はローマ正教だが、そこに繋がりを持つてゐるならイギリス清教とて見逃せんよなあ。ついでに、そんな連中にオルソラを渡す訳にもいかんのよ。という訳で、すでにお前さんも攻撃対象という訳よ。もつとも今すぐこの場で膝をついて降参するというなら余計な血を見る必要もねえんだけどよ」

建宮は笑いながら、しかし残念そうに言った。

対して上条は少し闘志を失つた目で、

「そうしても良いんだが、お前等にもローマ正教にもオルソラを渡す訳にはいかねーんだ。こいつは今、学園都市の保護下にゐるんだからな」

「交渉決裂という事で良いんだな？」

「はつ。ふざけてんじやねーぞテメエは、上条当麻なめんなコラー！」

「何て目えしやがるんだ。そんな目で睨まれちまつたら哀しくなつちまうじやねえの。いやいや本当に哀しいねえ。やるべき事は分かつちやゐるんだが、こういう真つ直ぐな反応されるとそれだけでお前さんを殺したくないって気持ちが生えちまうのよ」

建宮は波状の大剣・フランベルジュを軽く揺らして、

「けどまあ、やるってんなら仕方がある。今日がお前さんの命日だ」

言葉と同時。

爆音を上条は聞いた。ただ建宮の靴底が地面を蹴る音が、すでに爆発のエネルギーすら帯びている。上条が（見た目）身構える前に、相手はもう最初の一步を踏みこんでいる。刃が届くまであと一步。

ズガン!! そこに爆発音が響く。

小さな火薬の破裂音だ。音の発信源は建宮の後ろ。オルソラの側にいたはずの貴音が、オートマティックの装飾銃の引き金を引いていた。

しかし、撃ち出された銃弾は建宮には当たらず、上条当麻の額に真っ直ぐ吸い込まれていった。オルソラもステイルも、遠くで見えていたインデックスも、その光景に驚きを隠せない。

そして、上条は意識落ちする直前。貴音のある一言をキツチリと聞きとった。

「——ご主人。死ぬ気でやれ」

「……クツ。ハハハハハッ！ いやまさか、外すとは驚いたのな。撃たれたかと思っただが、下手くそなのか？」

我慢できないといった様子で笑う建宮。ステイルももう半ば上条の事は諦めた様子で、力を振り絞ろうとしている。それは、今こちらに駆け寄ってきているインデックスの為だ。

「ヘタクソ？ 誰がですか。私はちゃんと狙った的に当てましたよ」

「は？ じゃあ最初から殺す気で？」

「ふふっ。イツツ死ぬ気タイム！」

貴音がそう言つて笑うと。上条の体がガバツと起き上がる。

「復活!!」

「な!?!」

「死ぬ気でお前を倒す！」

上条の瞳は金色に、銃弾を受けた頭部からは大きな炎が上がっていた（パンツ一丁ではない）。

「闘気^{オーラ}……」

上条は小さく構えを取った。

——上条は倒れた後。意識の中を彷徨っていた。

「おい。起きろよ俺。早く起きろ。このままじゃ、ステイルは、インデックスは、オルソラがどうなると思ってるんだよ!!」

『お前はもうどうしたいんだ?』

「は?」

『最愛の貴音に撃たれたんだぞ? どうすんだ? もう立つても意味無いと思うが?』
「うっせー! お前も俺なら分かってんだろ! 俺がどうしたいかなんて!」

『んじやあ言ってみろよ』

「貴音が言ってた。死ぬ気でやれ……って。だから死ぬ気でアイツを倒す!」
『よしっ。行ってこい』

「私が撃ち込んだのは特殊弾。ご主人の枷を強制的に外す物です。枷が外れたご主人は強いですよ」

「だがよ、お前さん。見てくれが変わっただけじゃ俺は倒せんよ」

建宮がフランベルジェを横一線に振るう。上条は左手を首まで持ってきて防御する。

無駄だ。と建宮は思う。剣をただの洋服で防御できるわけがない。防御できそうな物と言えば手袋だが、どう見ても毛糸だった。

が、

ガキン、と音がして刃が止まる。建宮が驚いて、剣先を見てみると上条の左手にはめられた黒い何かが攻撃を防いでいた。

その黒い何かはグローブだった。全体的には黒と白で統一されており、黒い指抜きグローブの下に白い手袋をはめているようにも見える。

指の関節部分が膝や肘を守るプロテクターのように、少し太くなっていて、本来ゴムなどで留められる手首は、大きな金属で固められている。

そして一番の特徴はなんといっても甲に付けられた大きなクリスタルだろう。四つの鉤爪で固定されているように見えるソレは、中に上条が貴音から受け取った指輪と同じ紋章が描かれていた。それに加え、クリスタルを囲む金属板には、何か（おそらくイ

タリア語) が書かれている。

「!、いつの間に!」

「最初からしていたぞ」

上条の平坦な声がある場に響く。感情の起伏が乏しい、そんな雰囲気だ。彼は拳を握り、建宮の懐深くへと勢い良く踏み込む。

その時。フツ、と建宮斎字の姿が消えた。

目の前にいたはずの建宮が、ほんの一メートルほど後方へ下がっている。上条が止めた横薙ぎの剣も、何故かすでに真上に構えられている。

上条はそれに対処するため冷静に白羽取りをする。

剣を両手で受け止めた上条は、すきだらけの腹部を蹴り飛ばされ、そのまま店に突っ込む。

インデックスもようやく到着し、上条に駆け寄ろうとする。

が、上条の頭部にあった炎が大きく燃え上がったため、二、三步後退りする事となる。

「闘気が………弾けた!」

「Xグロープの使い方。思い出したようですね」

「死ぬ気の炎は闘気じゃない」

「じゃあ何だというのな? まさか本物の炎な訳あるまい」

ボウツ！ と、建宮の眼前に炎を纏った上条の右拳が突き出される。これを何とかわす建宮だったが、頬に尋常じやない熱を感じた。

「熱い!! 闘気が熱を帯びている!?!」

「死ぬ気の炎と闘気ではエネルギーの密度が違いますからね。限られた人間の目に見えるだけの闘気と違って、死ぬ気の炎はそれ自体が破壊力をもった超圧縮エネルギーです」

「それに………魔力を感じるんだよ」

「あー。確か魔力ってエネルギーでしたもんね。確かにご主人は右手が邪魔をして魔術は使えません……ですが、ああして誰もが持つ死ぬ気なら操れます!」

「そのグローブ………焼きゴテか!」

「それだけじゃない」

フツ。と上条の姿が消える。その場の全員驚いたような顔をするが、一番驚いたのは建宮だろう。目の前の少年が突然消えたのだから。

「(っ)だ」

「ツ！ 後ろ?!」

振り向きざまに振るわれる大剣。それを上条は右手のグローブで受け止める。そして、炎を纏った左手を建宮の腹部に叩き込む。

バオオン!!

という空間を無理矢理引き裂いたような音が辺りに響く。建宮は耐衝撃用の術式を張っていたため、そこまで深刻なダメージという訳でもないが、肺の中の空気を全て吐き出し、血も吐いて地面に倒れ込む。

もつと恐ろしいのは、それを左手で行った上条当麻の方だ。

「俺の死ぬ気は絶望からじゃない。希望から生まれる」

イギリス清教 Anglican Church.

争いは終わった。

それは建宮という司令塔を失った事で天草式の統率が一気に崩れたからか、と上条は考える。遠くから聞こえる物音がピタリと止んだ所からも、ピリピリと張り詰めた気配がなくなっていく所からも、上条は理解していた。

建宮齋字は拘束され、少し離れた所に座らされていて、彼の手足、胸板、背中、額にルーンのカードが張り付けてあった。今の姿勢が崩れると、即座に体が火ダルマになるらしい。

そして（上条と貴音は見えていないが）ステイルはオルソラを連れてアニエーゼ達の元へと行ってしまったため、今は上条と貴音とインデックスと建宮の三人しかない。で、

「どうま、どうま！ 大丈夫、怪我とかなない？ どこか痛むところとかは!?」

「大丈夫だ。心配するな」

未だ頭部の死ぬ気の炎が消えていない上条の周りを、インデックスが心配そうにクルクルと回っていた。

「……静かですね。あれだけ多くの人が暴れてたとは思えないですよ」

「ああ。そうだな」

貴音の意見に賛成するように上条は頷く。

「おい」

と、その時、不意に離れた所に座らされている建宮齋字が上条に声をかけてきた。妙に焦った音色を秘めていた。

建宮はそんな三人を睨みつけながら、

「くそ。お前さんよ、悪いがこいつを解いちゃくれんかな？ いや、無理を言ってるのは分かってんのよ。けどな、このまま彼女を放っておけるはずもないんでな」

「彼女？ ……別に放してやっても良いが、お前が良い奴だつて証拠はあるのか？」

「なあオイ、一個だけ聞かせろや。お前さん、まさか本当にローマ正教へ彼女を引き渡す気か。その後彼女がどういう扱いを受けるか分かってんだらうな」

「駄目だよ、とうま」むしろ、インデックスの方が冷静な声で、「この人は今、言葉を武器に戦つてただけなの。だから耳を貸しちや駄目。大体、敵がこつちに正直に話をして一体何の得になるっていうの？」

「殺されんのよ、彼女はな」

インデックスの言葉に被せるように、建宮齋字は言う。

「いいか、先に結論だけを伝えとくのよ。彼女をローマ正教に引き渡すな。ローマ正教の本当の目的は、彼女を殺す事なのよな」

「……なるほどな。そういう事か。やつばあいつ等『裏』があつたんだな」

「とうま?! その人の言葉に耳を傾けちゃ駄目だよ! 大体、今まで一緒にいたローマ正教が……」

「インデックス。お前は黙つてろ。おかしいと思つてたんだ最初から、アイツは追われていたのに、味方であるはずのローマ正教に戻ろうとせず学園都市に来ようとした。そこで気付くよな。両陣営から逃げたんだって」

「……なるほど。天草式の面々には迷惑をかけられないと、まるでどこかの純白シスターですね」

「誰の事かな?」

「……つて、ちよつと待て。オルソラは? どこへ行つた」

「え? ステイルが連れて……」

その時、どこか遠くで悲鳴が炸裂した。

いや、悲鳴などという生ぬるいものではない。

絶叫。咆哮。号叫。敢えて例えるなら、女の叫び声だった。しかしそれが本当に人間

が出したもののなか、それすらも上条には自信が持てなかつた。甲高い轟音はガラスや黒板を引つ掻くような物理的に人間の身をすくませるものであり、それなのに大音響の中には人間の生々しい感情が存分に込められていた。恐怖。拒絶。絶望。苦痛。泥水を吸い込んだスポンジを手で握り潰すように、人間にあるまじき絶音の中から人間的すぎる感情が染み出してくるのが分かる。

インデックスは上条の顔を見る。上条はインデックスの顔を見ていない。

「オルソラ？」

「もう一度、念のために聞きやならんようだが……お前さん、彼女をローマ正教に預けるだなんて言つたのか？　彼女はローマ正教じゃなくてお前さんを信用してたんじゃねえのよな？」

「そうだな。俺は学園都市の人間だ。アイツは今、俺が守つてる学園都市の保護下にあるつて何度も何度も言つてきた。それなのにこのざまか……。フハハハハ！」

「ご主人」

「オイ天草式。お前等も手伝え。あの少女達を——」

そこまで言つて、カツンという足音が聞こえてきた。上条は建宮から視線を外す。足音のした方を振り返ると、暗闇を割つて出てくるように、二人の黒いシスターがやってきた。ローマ正教の者達だろう。背の高いのと低いのに分かれていて、背の高い女性は

ちよつとした丸テーブルほどの大きさを超す馬車に使うような木の車輪を担いでいて、背の低い少女は腰に巻いたベルトに皮の袋を四つほどぶら下げている。袋の中に硬貨でも詰まっているのか、歩きたびにジャラジャラと音が鳴る。袋の大きさはソフトボールほどで、あれにぎつしり硬貨が詰まっているとすると砲丸投げの鉄球ぐらいの重さはあるだろう。

背の高いほうのシスターは袂から皮張りの古い手帳のようなものを取り出してペー
ジをめくり、何かを確認するように頷いてから上条の方へ来た。写真でも張つてあるの
かもしれない。

「外部協力者の御方ですね。あなた達が捕らえた異端の首謀者の身柄を預かりに参上
しました。神の敵は……そちらですか？」

「いや、アイツは神の敵じゃねーよ。ま、俺と貴音は神の教えに背く者だけだな
？」

上条の言葉の理解ができなかったのか、インデックスが首を傾げる。

「まあいいや。今からオルソラに会えるか？」

「残念ですが、ご辞退願います。シスター・オルソラの身柄は無事に保護できたとはい
え、敵戦力の実態が明らかでない今はまだ安全とは言い難いのが現状です。こういった
場合、我々の規則に従い人員の安全を最優先させていただきます。彼女をローマ内に確

保したのち、改めて招待状を送りましょう」

完璧な答え。

それを聞いた上条は、

「ん。あ、そう。じゃあいいや。勝手に会いに行くから。何、ちよつと顔を合わせて最後の挨拶するだけさ」

「しかし、規則では……」

「はいはい。規則規則うるさいよ」

上条は背の高いシスターの肩を掴んで、ぐいつ、と横へとける。

「……」

背の高いシスターは心配症の人間を見て呆れるように肩の力を抜いた。背に預けている巨大な車輪を、ごん、と自分の手前に盾のように置く。

と、インデックスの顔が急に緊張を帯びて、

「駄目だよ、とうま——ッ!？」

彼女が叫び終える前に、

木製の車輪が、勢い良く爆発した。

「ん？」

その音で振り向いた上条の方にだけまるで散弾銃のように、数百という鋭い破片が恐

ろしい速度で襲いかかってきた。彼は冷静に横に振るつた右手で炎の壁を作る。が、それを超えて無数の破片が上条の手足や腹に直撃した。その威力に上条が浮きかけるが、何とかして留まる。

「……………いてーじゃねーか」

そう言つて顔を上げた上条は、その体に刺さつていた木片が全て地面に落ち、血もすでに止まつていた。

「し、シスター・ルチア。あの、えと、よ、よろしいんですかあ、これつて？ 確か……シスター・アニエーゼはゲストとの不注意な接触は避けるようにつて……」

「黙りなさい、シスター・アンジェレネ。くそ、だから異教の徒などは我らの懐などへ潜らせずに、もつと早く追い払つておくべきだったのに、アニエーゼのヤツ。放つておけなんて樂觀的な命令など聞いていたからこんな羽目に……」

上条はその様子をニマニマと眺める。不敵に唇の端を吊り上げて、まるで次に言う言葉が分かつてるように。

「悲鳴などいちいち変に勘ぐつたりしななければこちらの仕事も増えずに済むのに……………。くそ、どうして、どうして私がこんな、異教の者の、爛れた手で、肩を、肩を、肩を。シスター・アンジェレネ！ 石鹼は、いえ洗剤はどこですか！ ひどすぎます、最悪の気分です。この私に話しかけるなら一言申してくれませんか。泥除け

のエプロンでも着なければ耐えられません」

「グローブしてるでしようが」

そう上条は言うのと、綺麗な透き通るようなオレンジ色をした炎を両手に灯す。さらに、そこら中の影から犬、猫、カラス、虫。数百種にも及ぶ使い魔が湧き出してくる。

「確かに、魔力の無いご主人は魔術を使えません。ですが、私なら可能ですよ〜?」

ニヤニヤと笑い、その体を宙に浮かせた青いジャージの少女エネは楽しそうに見える。

その時、遠くから甲高い笛のような音が聞こえてきた。背の高いシスターは忌々しげに黒い夜空を見上げて、

「退却命令ですか。シスター・アンジェレネ!!」

「は、はい!」

二人揃って。いや、背の低いシスターが背の高いシスターの後を追うようにして暗闇の向こうへと消えていく。

「これで分かったらうよ」

建宮斎字は夜空を見上げながら、苦虫を噛み潰したような声で、

「あれが、十字教内最大宗派・ローマ正教の裏のやり方よ」

打ち合わせ

「なるほどね。道理でアニエーゼⅡサンクティスを見た途端に彼女が茫然自失としていた訳だ。僕達をローマ正教の主力隊から切り離したのも、始めから見下されていたからかもしれないね。ふん……イギリス清教がいると命令系統が乱れる。か、言ってくれるね」

テーマパーク『パラレルスウィーツパーク』を出た所で、ステイルはのんびりと言った。彼もオルソラの悲鳴を聞いていたはずだが、それでも引き返してアニエーゼにその事を問いかけたりはしなかったらしい。事情を知らなければ、ましてそれがイギリス清教とローマ正教という二つの組織間の外交問題になるかもしてないとなれば軽率な行動には移れないのは分かるが、それを聞いた後その前から機嫌が悪かった上条はステイルの胸ぐらをつかみ上げ、

「オイ。何で勝手にオルソラを引き渡した！ 言っただろ、相手の安全が完全に確保されるまでオルソラは学園都市の保護下だつてよ！」

あれから上条はアニエーゼの元へと飛んだが、彼女達はすでに撤退した後でそこには誰もいなかった。建宮を追撃してくる刺客も現れない。彼の仲間の大人数が捕まった

事で、もう天草式は壊滅したものと判断されているのかもしれない。

あれだけの大人数が最初から存在しなかったかのような手際の良すぎる撤退をした事を上条は称賛していた。

「その男が言っている事が全て事実だったとしても、オルソラⅡアクイナスはすぐには殺されないだろうね。ヤツらにはヤツらなりの事情がある。．．．だから上条当麻、今この瞬間にどこかに駆け出そうとするのはやめろ。君が出張ると余計にややこしくなる」

「はあ？ ふざけんな。外交問題が恐くて何もできねエ奴は口出しすんじゃないよ」
「．．．．．事情って何ですか」

「ローマ正教は世界最大の宗派なんだよ、たかね。その大多数はオカルトなんて知らないとはいえ、二十万人以上の信徒を抱え、教皇と一四一人もの枢機卿が管理し、一三ヶ国に教会を持つほど肥大しちゃってるの。大きくなるのは良い事だけど、大きくなりすぎると困った問題が生まれちゃったりもするかも」

「．．．．．派閥、か」

「あー。分かりました。むやみに殺せないですものね。オルソラには罪無いですし」

「そうだな。だからあいつ等はローマ正教で魔女裁判のような事でもするんだろ」

「良く分かってるじゃないか」

「俺と貴音も、神の教えに背く者。だからな」

「「？」」

上条のその言葉にインデックス、ステイル、建宮の三人が首を傾げる。が、上条は気にした様子もなく、

「あいつらが今、どこにいるか。お前達は分かっているのか？」

「大体予測はついてるけどね。知ってどうする気だい？」

「分かっているだろ？」

「気持ちに分かるがね」ステイルは、悠々と煙を吐き、「少しは気を静めたらどうだ。この街に集まっているだけで、彼女達は二五〇人近くいるという話だったろう？ 君の拳はそれらを全て薙ぎ払えるほど便利な代物なのかい？」

「アホか。そんな便利なものちやうで」

「なにゆえ関西弁？」

「……確かに俺の幻想殺しだけじゃあ、そないな大勢の人間相手に戦われへんやろうな。せやけどな、俺の武器が右手だけだと思わんといてや」

「だから何で関西弁？」

貴音が冷静に突っ込みを入れる。入れられている上条の目は闘志に燃えている。それも、まるで新しいゲームで遊ぶ子供のような無邪気な闘志が――。

「だけど、良く考えるんだな上条当麻。これはローマ正教内で起きた事件を彼らのルーで裁いてるに過ぎないんだ。外部へ何の影響もない以上、下手に僕達イギリス清教が文句を言えば、それを内政干渉と取られてイギリスとローマの間に大きな亀裂が走る可能性すら考えられる。……残念だが諦めるんだね、上条当麻。それとも君は戦争を起こしてでも彼女を助ける気かい？」

「嫌われ役には慣れてる」

「それと、イギリス清教にしても、ローマ正教にしても、所属している全ての人間が僕達みたいな戦闘要員だと思わない事だね。むしろ、そのほとんどは君と同じような人間なんだ。学校へ行つて、友達と過ごして、帰りにハンバーガーでも食べて、それが世界の全部だと思ってる人々さ。その陰で魔術師が暗躍している事も知らないし、魔術的な戦争が起きないような様々な組織が色々な取引を行っている事にも気づいていない、まさに善良で無力な小羊達だ」

「だから？」

上条の声は予想以上に平坦だった。そんな事は分かりきっている。と、言った風に。「それでここで問題なんだけど、君は彼らを巻き込めるのかい？ 真実を何も知らないままイギリス清教やローマ正教に所属しているだけの人々を戦争に巻き込んで、略奪して、虐殺して、そこまで奪いに奪つてもオルソラ・アキナス一人を守りたいと思え

るのか」

「……………お前は前提条件から間違ってるぞ、ステイル」

「なに……………?」

「俺はイギリス清教の看板なんか背負ってない。今回に限っては学園都市っていう後ろ盾も一回地面に置いてやる。良いか、これは俺が、俺個人があのアニエーゼ達に仕掛けるケンカだ。そんな大したもんじゃねえつつつてんだよ大馬鹿野郎が」

上条はステイルの目を射抜く。覚悟を纏ったその眼光で。

「だから、お前らは安心して帰れ。建宮だっけ? 一緒に来るか? 天草式の面々ぐらいいなら守ってやれっぞ?」

「……………いや、遠慮しとくよの。天草式としては、狙う時は移動中が一番なのよ」
「あつそ。行くぞ貴音」

「イエツサー」

「まあ、せめてイギリス清教にオルソラIIアクイナスを助けるだけの正当な理由があるなら話も変わったかもしれないが、今の僕達にはここが限界だよ」

「何だよ、負け惜しみか?」

「ああ。それと上条当麻。一つだけ聞いておきたい事があるんだ」

「んだよ」

「前に僕が君にやった十字架。今、君は持っていないようだが、どこへやったのかな？」
「ん？ 貴音にパスして……」

「今はオルソラの首にかかっています。私が着けましたから」

「ほんと何でそんな事したんだよ」

「いや、十字架ってシスターさんの首にあるものじゃないですかー。だから」

「理由になって無くない？」

上条と貴音は暗闇の中に消えていく。文字通り姿が消えたのだが、誰も気にはしなかった。

突撃！

——夜の教会はできあがってもいないため不気味な雰囲気醸し出している。

中では、オルソラが二〇〇人もシスター達に囲まれ、さらにその教会には強力な結界が張ってあった。逃亡もできない。そんな状況でもオルソラはこれ以上の幸せなど両手で抱えきれないと考えていた。

それでも、彼女の幸福はまだ止まらない。

何故ならば、次の瞬間。

バン!! と何かの碎ける音と共に、教会を包んでいた結界が消し飛ばされたからだ。

アニエーゼは思わずオルソラから視線を外していた。

外さざるを得ないような事態が進行していた。

「こわ、れた……? まさか、おい! あの扉にかけられたアエギディウスの加護の再確認! それから周囲の策敵! くそ、一体どこの組織だつてんですか。あれはどう考えても個人で破壊レベルの結界じゃあない。敵の集団はどっから攻撃を仕掛け

てやがるんですか………ツ!!」

矢継ぎ早に下される命令。

しかし、そのうちの一つが実行されるより早く、望んだ答えはやってくる。

「どーんっ!!」

少女の何故か覇気に欠けるような可愛らしい掛け声と共に、扉が勢い良く開かれる。入ってきた少女は楽しそうに笑う。後ろからゆつくりと入ってきた少年は呆れた風に、

「テンション高いなア。オイ」

「フフフ」

オルソラを取り囲んでいた二〇〇人以上ものシスター達が、一斉に、しかし音もなく、ギョロリを眼球を動かしてその二人を睨みつける。ただでさえ何百人という人数は数の暴力となるし、まして彼女達は皆、普通の人間ではないのだ。それに恐怖を感じないはずがない。彼らがごくごく普通の平凡な少年少女に過ぎないのなら、怖くないはずがない。

しかし、

それでも、彼らは怯まずに、一步。

オルソラIIアクイナスを助け出すために、暗闇に塗り潰された教会へと踏み込んだ。その金色の瞳に好奇心の闘志を抱いて。

その頭部に覚悟の炎を灯して。

上条の姿を認識したのか、嘲るような笑い声が聞こえてきた。

上条がそちらを見ると、彼が知らないアニーゼⅡサンクティスが立っていた。

「そーいやあ、おかしいとは思ってたんですがね」くすくすと、少女は笑みをこぼし、「魔術師でもないただのド素人が、どうしてゲスト扱いで戦場へ駆り出されていたのか。……理屈は分かりやしません、結界に対して絶対の力を持つ『何か』があると、そういう訳ですか」

「はっ」

「あらまあ、どうしちまつたんですか？ 忘れ物ですか、お駄賃が欲しいとか？ あーあー、そこに転がつてるモノに未練があんなら裸に剥いちまつても構いやしませんよ」

「殴って良いですか？」

「我慢しろよ……貴音」

「殴る？ 何を!? この状況見て分かんないんですか？ 一体どっちが上でどっちが下か。まさかとは思いますが、私とあなたがおんなじ舞台に立ってるだなんて思っちゃありませんよね？ さあ、この人数相手にあなたがどういう選択を取るべきか、他ならぬあなた自身の口で言ってもらいましょうか」

「……なあ。何か勘違いしてないか？」

「? なんですか?」

「確かに人数差では俺達はお前らには勝てないだろうな。だけどき……たとえばここで水平に銃を撃つたとする。するとどうなるか分かるか?」

「は?」

「必ずお前らの誰かに当たるんだ」

上条は楽しそうに言う。それを聞いたアニエーゼが二、三步後ろに下がる。

「な、何を言ってる」

「分からねーか? オルソラは地面に寝転がっていて、エネは今天井付近で浮いてる。この状況で銃をぶつ放せば、俺はどこに撃つてもお前らを倒せるって訳だ」

そう上条が言った瞬間。すでに上条の両手には装飾銃が握られていた。

「は、はは。まさかあなた。人殺しの罪を背負う気ですか? ……コイツを助けるためだけに」

「安心しろよ。痛みはないから」

ズガン!! と、空気を引き裂き銃弾が射出される。それは文字通り開戦の狼煙な訳で、そしてそれはアニエーゼの右太腿を撃ち抜いていた。

「あ……ガア……ッ!!」

「シスター・アニエーゼ!!」

シスターの数人が叫ぶが上条は容赦しない。さらに数発発砲し、周りのシスターの肩や膝、関節部位を的確に撃ち行動不能にする。

「ホラ。どこに撃つても誰かに当たるだろ？」

ニツコリと、上条は笑顔で言った。その顔を見たアニーゼは息が詰まる。それもそのはず、上条はその笑顔とは裏腹に、全身からまるで猫が毛を逆立てるように殺気を放出していたからだ。

「こ、殺されるっ?! コイツ・・・頭のネジが絶対吹っ飛んでる！」

「酷い言われようだな。見て分かんねーか？ 俺は誰も殺してねーよ。その代わり死ぬより辛い目に遭ってもらうかもしれないねーけどな！」

上条はそう言うのと二丁拳銃を天井に放る。それと同時に炎を噴出しオルソラまで一気に近づくと、彼は彼女を抱えて空を飛ぶ。

天井では、投げられた二丁拳銃を受け取った貴音がバカスカ銃を撃っていた。

「言つとくがこれは俺、上条当麻と」

「私、榎本貴音が」

「あんた等に個人的に売り込んだ勝手なケンカだから、その辺よく分かっておくように！」

二人は宣言する。だが、それに割りこむように唐突に、何者かの声が飛んできた。

「まったく、勝手に始めないで欲しいね。せっかく結界の穴から上手く侵入できたというのに。せめて十分にルーンを配置する時間ぐらいは用意させておいてもらいたかったんだけど」

「は……?」

アニーゼが呆けたような顔で振り返った瞬間。轟!! と炎が酸素を吸い込む音と共に、完成途中の教会を支配していた暗闇が、オレンジ色の爆発によって一気に薙ぎ払われた。

教会の奥、ちょうど上条のやや後ろ。

説教壇の背後にある壁には、二階ぐらいの高さの位置にステンドグラスを嵌める予定の窓がぼっかりと穴を空けている。おそらくは外壁工事のための足場を伝ってやって来たのだろう、その窓枠に足をかけ、炎の剣を手にしたイギリス清教に神父が立っている。

「だったら、もうちょっと待ってからでも良かったんじゃないの? ステイル」

「ふん。後の始末は僕ら魔術師が着ける気でしたから素人には引込んでいてもらう予定だったんだけどね。あれだけのウソ説得ウソ説明が全部台無しだ」

「イギ、リス清教? 馬鹿な……これはローマ正教内だけの問題なんですよ!

あなたが関わるというなら、それは内政干渉とみなされちまうのが分かんないんですか

!?

「ああ、残念ながらそれは適応されない」

ステイルはつまらなそうに煙を吐いて、

「オルソラ^{II}アクイナスの胸を見る。そこにイギリス清教の十字架が掛けられているのが分かるな？　そう、その素人が不用意に預けてしまった十字架さ」

にやにやと、いたぶるようにステイルは笑って、

「それを誰かに預けてもらう行為は、そのままイギリス清教の庇護を得る——つまり洗礼を受けて僕達の一員になる事を意味している。その十字はウチの最大主教が直々に用意した一品さ。僕の手でオルソラの首に掛けるとの命も下っている。……僕の中では優先順位の低い指示だったから途中からは後回しにして、そっちの男に渡してしまったがね。その素人が君達に捕まった際『イギリス清教という巨大組織の下にいる人間』だと思わせておけば少しは何らかの保険になるんじゃないかなと考えた訳だが……何がどう転がったのか、今ではちゃんとオルソラの首にある。つまり、今のオルソラ^{II}アクイナスはローマ正教ではなく、僕達イギリス清教のメンバーであるという訳さ」

「そっか、それで……」

上条は自分の左手を眺めていう。何かあったのだろうか。

アニーゼは、顔を真っ赤にして口をばくばくと動かした後、

「そ、そんな詭弁が通じるとでも思ってますか!？」

「思っちゃいないね。きちんとイギリス清教の教会の中で、イギリス清教の神父の手で、イギリス清教の様式に則って行われたものでもないし」

ステイルは煙草を揺らし、

「だが、今のオルソラがとてもデリケートな位置に立っているのに間違いはないだろう？　ローマ正教徒のくせにイギリス清教の十字架を受け、しかもそれをやったのは科学サイドの学園都市の人間なんだ。彼女が今、どこの勢力に所属していると判断すべきか、ここは時間をかけて審議すべきだと僕は思う。君達ローマ正教の一存のみで審問にかけるというなら、イギリス清教はこれを黙って見過ごす訳にはいかないんだよ」

すとんと。窓から飛んだステイルは、説教壇の前へと静かに着地する。

そして炎の剣の切っ先を、遠く離れたアニーゼの顔へ突きつけた。

「それに何より、よくもあの子に刃を向けてくれたものだ」ステイルは歯を剥き出しにし、「この僕が、それを見過ごすほど甘く優しい人格をしているとでも思っていたのか？」

「チイツ！　二人が三人に増えたところで、何が……!？」

彼女は憎々しげな声をあげたが、やはりそれも別の人間の声によって遮られてしま

う。

「三人で済むとか思ってたんじゃないのよ」

「!?!」

野太い男の声にアエーゼが振り返った瞬間、今度は横合い壁が爆弾で吹き飛ばされたように砕け散った。もうもうと立ち込める砂煙の中から、大剣を握る大男が歩いてくる。

「お前もか、建宮」

多角宗教融合型十字教術式・天草式十字清教の現・教皇代理。

その後ろには、別の建物に監禁されていたはずの天草式の面々が揃っている。その数は五〇程度、おそらくは監禁されていた全員だ。

「俺が戦わなきゃいかん理由は、わざわざ問うまでもないよなあ?」

「お前、奇襲を仕掛けるなら移動中が最適だつて言ってたつたつた?」

「そういう風に言つときゃ納得して帰つてくれると思つてたんだがよお。せつかくイギリス清教の連中と話し合つて、お前さんが動く前に決着をつける手はずを整えようとしていたのに。そもそも最初から向かいに行くとかお前さん、想像以上の馬鹿だよな。ま、見ていて楽しい馬鹿は嫌いじゃねえが」

建宮は呆れたように答えた。

最後に、カツンと足音を鳴らして、教会の入り口から聞きなれた白い少女の声か飛んできた。

「まったく、いつまでたつてもとうまはどうまなんだからね」

「現れて唐突に悪口かよ。インデックス」

「こうなつちやつたら仕方がないね。——助けよう、とうま。オルソラⅡアクイナスを、私達の手で」

「なーんだ。全員助ける気満々でしたかー。悪いですねー。二人とも天井に張り付いて」

「あつはつはつはー!」

そんな彼らを見て、アニエーゼⅡサンクティスは爆発した。殺せ、というただ一言の命令の下、闇に染まる数百ものシスター達が跳ねるように襲いかかってくる。

最後の戦いの火蓋は切って落とされた。

不条理なお話に決着をつけるために集まった者達の、最後の戦いが。

天草式十字清教 AMAKUSA Style Rem
ix of Church.

オルソラ教会は七つの聖堂で構成されている。

十字教における七つの秘儀をそれぞれの聖堂が担当する。聖堂の大きさは均一ではなく、使用頻度は重要度によって、建物のサイズや金のかけ方も変わってくる。ちなみにオルソラ達のいた場所は結婚にまつわる『婚姻聖堂』で、一番収入が大きくなる予定なので建物も巨大だ。

上条はその教会の天井に貴音と一緒に足を着けていた。オルソラを抱きかかえ、まるで重力が逆にあるように。

「なあ貴音」

「なんです？ ご主人」

「あれ、持ってない？」

「あれ？ ですか」

「学園都市製小型核弾頭だよ。手榴弾型の」

「持ってますけど」

「ピン引っこ抜いて床に落とせ」

「……………過激ですねエ」

貴音が上条の言葉通りに、どこからか現れた手榴弾のピンに指をかけた時、ステイルはすでにインデックスを小脇に抱えて走り出していた。建宮も天草式の面々を押しだす形で反転。アニーエーゼも避難指示を出す、二〇〇人が一斉に動ける訳もなく。

音もなく空気が酸素が消し飛んだ。

と言つても、外にあつた足場がパラパラと宙を舞い。シスター達がゴロゴロと地面を転がっている所を見ると、そこまで強いものではなかったのかもしれない。幸いにも、嫌どうやったのかは知らないが『婚姻聖堂』は無事だった。

「……………それ普通の手榴弾じゃね？」

「威力的にそうですね。私、このオルソラ教会全てが吹き飛ぶと思つてましたもん」

「残念だ」

心底残念そうにため息をついた上条の所へ、炎の塊が飛んでくる。

それを上条はひらりとかわして、実行犯を見る。

「まったく、僕達まで消し飛ばすつもりとは……………。君はあの子を傷付けて良いと思つてるのか？」

「大丈夫。そいつが着てるのは歩く教会だけ？ まったくもつて無問題だよ」

「そう言う事を言ってるんじゃない！」

「あーうるさいうるさい」

上条はエネとしてフワフワ浮いている少女にオルソラを預けると、その頭部の炎を両の拳に灯す。そしてそれが大きく燃え上がった。

「俺の死ぬ気は、覚悟の炎だ!!」

「オルソラの事は任せてくださいご主人！」

「ああ。頼む！」

そう言った上条の元へ何十という魔術が飛んでくる。一度ヒラリとかわした上条は、さらにもう一度放つ準備に入っているのを目撃する。

「ハイー！」

彼は躊躇なく右の掌を相手に、左の掌を自分に向ける構えを取る。それは空中で静止することを意味していた。が、それを見たエネは満足げに微笑む。彼女は確認したのだ。上条の頭部と両手の炎がノッキングするように不規則に燃え上がっているのを。

空中で静止した上条の元へ、数十という魔術攻撃が今一度向かってくる。それはもの見事に上条がいた地点で煙をあげ、上条の体を覆い隠した。

「とうまー！」

「はっ！ 馬鹿ですね．．．．．。避けなければ当たり前に当たるとてんですよ」

アニーエーゼが勝ち誇ったような声をあげる。そう、誰もが見ても一番の危険因子は上条当麻だ。その彼に従っている貴音も、彼の指令なしにはむやみに行動は出来ない。

だが、

「……そうだな。だから、好都合なんだ。……死ぬ気の零地点突破 改」

少しだけ静かな夜空から、少年の声は響く。さきほどよりも大きく、強く、炎は燃え上がる。その両手のグローブの甲にはX……いや、ローマ数字の十が現れていた。が、それは変形するように元の留め具に戻った。

「なっ!？」

「一体……何を……」

味方であるステイルも説明を求めているような口ぶりだった。先程まで、やはり彼は素人だ。などと呆れていたのに、今では啞え煙草を落としている。

「魔力と死ぬ気つてとても良く似ているんですよ。それは超能力にしても同じ。全部人や地球の『生命のエネルギー』です。あれは本来相手の死ぬ気の炎を自分の炎に変える業ですが……ま、こういう例外もあるでしょう」

「すでに発動した魔術を自分の力に変換だと……ッ! くつ、どこまで例外な人間なんだ上条当麻」

「魔道書にも載ってないんだよ! そんな事。多分誰も考えなかったんだと思うけど」

「そうですね。確かに誰も考えそうにはないですね。でも、ご主人は思い付いたんです。相手の力も自分の力に変えてしまおうっていう。己が右手を参考にして」

「行くぞ」

そして、本格的な戦闘が始まった。あちこちに散らばるアニエーゼ部隊と、それぞれの場所で作戦する天草式、ステイル、インデックス。エネはオルソラを守るようにどこかへ身を隠している。

上条は八メートルほど上空から、斜め下にいるシスター達に向かって急降下する。単純な打撃だが、高速で行われたのが原因か。一撃で膝を着けさせる。

上条の戦法は基本一撃必殺だ。圧倒的攻撃力で敵を一撃粉砕する。だが、相手の器量が分からないままでは大きすぎると、相手を完全に殺す事になる。なので初撃は大抵弱めの攻撃だが、今回はそれだけで倒せる相手だったようだ。

「シスターって言っても所詮女子。貴音みたいには強くないか」

上条はつまらなさそうにため息をつく、グローブの炎だけを消す。

その時、イタリア語で何かが聞こえてきた。

「攻撃を……重視？ 防御を……軽視？ 玉砕覚悟で主の敵を殲滅!」

上条はとつさに両の手に再び炎を灯すと、一気に飛び出した。金色の瞳で辺りを見渡し、貴音が隠れている『終油聖堂』に飛び込み、インデックス達に声をかける。

「こつちだ!!」

インデックス、ステイル、建宮の三人はかろうじて聖堂の中へと飛び込む。上条が即座に扉を閉めると同時、厚さ五センチを超す黒樫の板が、無数の刃に次々と貫通された。「とりあえず、全員無事みたいだな」

「ですね」

「………で、どうするよ。これから」

その問いに答える者はいなかった。今まで危ういバランスを保ってきた戦局は一気に傾いてしまった事に、この場の誰もが気付いていた。

「あの、インデックスさん」

「何かなたかね」

「法の書の原典の一部でも良いです。暗号書き記してくれませんか?」

「どうする気だ」

「解説するんです」

ステイルの問いに、貴音は迷う事なく答えた。だが、ステイルは激高するように

「それでは、この子が『法の書』の中身を記憶してしまう。そうなれば今以上に大勢の魔術師が彼女の身柄を狙って襲ってくる羽目になるんだ!」

「心配してくれるの? ありがとうステイル」

「私ですか？」

オルソラの言葉に上条と貴音は首を振る。

「誰も解読できなかつたんだ。魔術師はな」

「書けたよ」

「どれどれ？」

法の書

貴音は法の書の原典を読みながら上条に問う。

「ご主人。『法の書』における主要三神格とは何でしたっけ」

「ヌイト、ハデイト、ラールホールクイト」

「では、第二章第七節でハデイトに触れている部分を引用してください」

「これ必要か？ 私は魔術師であり祓魔師である。私は車輪の軸であり円環内の立方体である」

「何か分かりませんか？」

「魔術師とは『幻想』を生み出す者のこと。祓魔師、まあエクソシストか。は『幻想』を破壊する者のこと。そして、その後の文章は『物事や人々の中心』という意味合いを持つてるな。……あ、これ俺の右手のことか」

「その通りです。『イマジナブレイカー幻想殺し』とは、ここで言う『祓魔師』。ハデイトの力の一部です。そしてもう一つ『人々の中心』つまりは人々が周りに集まるといふこと——」

「ちよっと待ってくれ。それじゃあまるで上条当麻が法の書における主神みたいじゃないか」

「その可能性が浮上しているんです」

「その理論で行くと、ハデイートの配偶神たるヌイトは貴音だな」

「はっ!? えっ!? ご主人!？」

「………血の伴侶”なんだろ?」

「……なるほど」

上条に耳打ちされ、貴音は納得したように頷いた。

「じゃあ第3の神格・ラ＝ホール＝クイト」

「彼は莫大な力を持ち、ハデイートとヌイトが結ばれることによって生まれる——」

「……なんか嫌だな」

「……ですね」

「………十字教が崩壊するってそういう事だったんだね」

「……? インデックス。君は一体」

「とうまの右手。それで神様を殺しちやおうって、そう書いてあるんだよ。法の書には」

「なんだと?」

「インデックス、ナイス。その理論で行くとハデイートとヌイトは俺の父さんと母さんだな。そして俺がラ＝ホール＝クイトになる」

「………とうま、本当に。神殺しをするつもり?」

「そんな馬鹿な。まあ本当に神様なんてものが存在するとしたら、あつてこの手で殴つてやりたいとは思うけどね」

「・・・一応聞いておくよ。なんでだ？ 君は不幸の元に生まれたようなものじゃないか。神様を殺して、幸運になろうと思うことはないのか？」

「んー・・・。基本的に俺他人に興味がないからさ。別に見ず知らずの人がどうなるうがどうでもいいんだよ。でも、俺の目の前で不幸になられるのは嫌だね。不幸は俺が背負うものだからさ。だからさ、俺は他人の不幸を奪う。幸運を押しつけることはしたくないな」

「なるほど。欲が全くないわけでもないんだな。安心したよ上条当麻」

「なんか変な所で安心されてねーか？」

少し場の空気が緩みみんなが微笑ましく笑う。

が、そんな中険しい表情をした少女が居た。

「ご主人がハデイト。私がヌイトだとして、ラールホールクイトは？ ご主人がハデイトとして目覚めたのは今から数百年前。そんな中一度もラールホールクイトの存在は確認できていない・・・。いや、まあ。子どもがいんだから仕方がないですが・・・。いや、待てよ待って待ってください三段活用。誰か一人。子どもがいたような・・・、ご主人から生まれた、恐るべき子どもが・・・。あーっ

！ 長い間当麻の記憶が戻ってないから何にも分からん！ まあ封印した私も悪いんだけど……。誰だっけ……。」

「なあ貴音。法の書が今は全く役に立たないものだと分かった所でだな。そろそろ別の方法をとった方が良くないじゃないだろうか？」

「……。例えば？ どんな？」

「アレだ。虚数学区・五行機関」

「でもあれは学園都市内限定のもので……。」

「気付いたか。アンテナは既に配備されてるんだよ。あとはそこに流してやれば良い」

「……ご主人。あなたも悪ですねえ」

「いやいや」

「……何をやろうとしてるかぐらい説明してくれるかな？」

「学園都市の超能力者が無意識に発するのがAIM拡散力場。それが学園都市に充滿し、集合体となり、虚数学区・五行機関を造り上げている。そしてその虚数学区は、赤外線や高周波のように、そこにいるのに見える事も聞く事も出来ず、人間とは別位相に存在する、ある種の力の集合体によって構成される生命体です。さて、君達も良く知る物だと思いますが、さて一体なんでしょう？」

「「「「？」」」」」

皆がそろって首を傾げるが、上条は大して気にした様子もなく。

「さ、そろそろこつちが攻撃を仕掛けねエとな。インデックスこれ着けとけ」

「ん？ 分かったかも」

いそいそと、インデックスは上条から渡された腕輪をはめる。

「これは……!!?」

「分かったみたいだな。それは魔力を誰かから分けてもらう補助機みたいなものだ。それを着けてる間しか使えないのが弱点だけど。まあ、この教会内に魔人を解き放つとしようぜ」

そう言いながら上条は、扉の前に立つ。未だにグサグサと風穴が開けられているその扉に開いた右手のひらを向け、左手は背中側に水平になるまで持ち上げる。そこから純度の低い炎。柔の炎を放つ。

そして、右手は純度の高い剛の炎を溜め放つため、右手が輝いている。

「柔の炎で支え……剛の炎を……放つ!!!」

ドウ!! という音と共に、衝撃波が生まれる。上条の右手から放たれた剛の炎は扉の向こうのシスター達を吹き飛ばし、道を作る。

が、その剛の炎の衝撃で、上条自身の体が後方に吹っ飛んで壁に人型を作っていた。

「おうわ!! 大丈夫ですかご主人！」

「いってー！ イテテテテ。柔の炎と剛の炎のバランスがこんなに難しいとは……」

「とうま！」

「行け！ ステイル！ 天草式！ インデックス！ 俺は大丈夫だ!!」

「分かった。行くよインデックス」

「分かったんだよ！」

激突!

それから一〇分たった。

貴音は上条の後ろをトコトコとついて戦場を駆け抜ける。オルソラの周りにはどんな物理・魔法攻撃も通さない結界を張ったようだ。

「それで? ご主人、さっきの技。物に出来そうですか?」

「んあ? X BURNERだろ? 慣らす時間がない気がするんだよな」

「そう、ですか」

「そつちこそ、大丈夫なのかよ」

「ええ。もうちよつとですけど。順調です」

「そうか」

上条達は歩いた後に手榴弾をばら撒いているため、地面が抉れていく。

彼は『婚姻聖堂』の扉を開ける。ゆつくりと開いていたら、貴音がドロップキックで勢いよく跳ね開ける。

「どう考えたってあれだけの人数を相手にしちまいながら、自由に敷地内を移動できるとは思えないんですけどね」

大理石の柱に悠々と背を預けるアニエーゼに、上条は同様に気楽そうにしながら笑つて、

「まあ。ちよつとばつかり、最終兵器があるからな」

「兵器？」

「貴音」

「後三分」

「二分三〇秒にしろ」

「はい」

上条の命令にしか聞こえない指示に、貴音は意気揚々と答えた。それを見届けた上条はアニエーゼに向き直り言った。

「悪いがテメーラの信じる神様は、今からこの場所限定でぶち殺す」

「はっ。面白いですよあんた。だったら私がその希望を打ち砕いてやりましょう！」

アニエーゼは銀の杖を構え言う。それは細い柱の上に天使がロダンの『考える人』のようにうづくまつているデザインのもので、六つの翼がカゴのように天使を包み込んでいる。

その様子を、インデックスが教会の外から開け放たれた扉越しに見ていた。彼女の周りにはシスターはいるが、全く相手にしていない。それもそのはず、今の彼女は一〇万

三〇〇〇冊の魔道書をフルに使って戦える魔神に近い存在だ。

「どうま………」

アニーゼが詠唱を行い、軽く杖を振る。

カツン、と杖の先が横合いに遭った大理石の柱に軽くぶつかる音が鳴る。

「何してんの?」

上条は明らかに間合いの外で振るわれた一撃に内心で眉をひそめていたが、

ゴン!! と。

次の瞬間、上条の側頭部に強烈な衝撃が走った。

「おっふー!」

何か重たい金属で頭を殴られた。そう表現するのが一番正しい。が、上条はそんな生半可なことで倒れるような鍛え方はされていない。

「どうやら、その杖を傷付けると連動して指定した場所に同じ攻撃が加わるみたいだな」

「ほう。見抜いちまいますか」

「ご主人。準備完了です!」

「ほんじゃまあ、始めますか!」

上条は一枚の護符を取り出すと、上に投げる。すると、宙に浮いた状態の護符が巨大な魔法陣を創り上げた。

「なんだ？」

『あ、あー。あー天草式やステイル。インデックスに伝達。今から魔術を使うな。絶対だからな』

「分かったよのな」

「ふん。いいだろう」

「分かったんだよ！」

「よっしゃー！ エネ、やっちゃまえ！！」

「イエス！ 私の^マご主人様^イ！！」

貴音が右手を上にかかげる。そして、口を開く、

「形成。一万八〇〇〇・二九〇を媒体にアンテナ展開！ AIM拡散力場、充満。……」

「一〇〇%完了。『界』出現！！」

バチィツ。と、電気が空中を走るような音がオルソラ教会の敷地のあちこちで鳴る。そして、上条がエネの方を見ると、少女は簡単に言えば天使に変身していた。

炎のように燃える髪、水のように透き通った肌、光のように輝く瞳、電気のように迸る翼、他にも所々に超能力の要素が垣間見れる。

「エ……ネ……？ 大丈夫……いや、お前は虚数学区か……？！」

『はい。私のAIM拡散力場の集合体。虚数学区・五行機関の総意体です初めましてm

Yマスター』

上条の問いに、滑らかな声が聞こえてくる。それは貴音の声帯を通さずに話しているようだった。

「総意体って……何か呼称とかない訳？」

『存在しません。私は今まで誰にも認知されませんでした。故、意思を持つこの私について名前など存在しません』

「そうか。んじやお前から“エイム”な」

『はい！ マスター』

そこまで言った瞬間。耐えきれなくなったように、教会の柱が悲鳴を上げ壊れていく。

「な!? な、何なんですかこいつは！」

『『法の書』の実行さ。と言っても全世界じゃない。このオルソラ教会のみで十字教は破壊される！』

「な………なんで！」

「簡単な答え合わせだ。十字教はすでに出来上がってる。例えば宗派は違えど十字教は全てルールに従って動いている。そのルールを根底から覆す新たな科学の『界』の出現。それによる魔術は崩壊し、今このオルソラ教会では魔術は使えない。いやーよほど魔術

に恨みがある奴なんだろうな。アレクサンダーっていうのは」

ケラケラと笑う上条の目の前に、アニメーゼと分断するように支えを失った屋根が落ちてくる。

『マスター。大丈夫ですか？』

「ああ、大丈夫大丈夫」

「とう……ま……ま」

「インデックス！ ここは危険だ！」

「おい、イギリス清教！ 一体何が起こってるよの！ 魔術を使った向こうが自分の魔術で暴走していやがるのよな！」

「説明は僕が求めたいぐらいだね。一体何が起きているのかは」

（もし、今当麻が言った事が本当だとして。あそこにいるたかねが科学の『天使』に近いものなら、いや。もしそのものなら……たかねが仕えるとうまって……）インデックスは驚いたように目を見開く、「全く新しい神……？」

「あ、歩く教会が！」

インデックスが気付いて慌てる。彼女が着ている白い修道服『歩く教会』が効力を失い、魔術的要素を持つ布が繊維に戻ろうとしていた。

「あ、あわわわ！ あわわわわわ！」

「くっ。上条当麻！ さっさと終わらせろ！」

「わかったよ。さあ、これでローマ正教おまえらの幻想は終わりだ！ アニエーゼ！ サンクティス！ テメエのみじめな幻想を……跡形もなく喰い殺す！」

上条の左足がアニエーゼの足元に滑り込み、上条の固く握られた拳が振るわれる。

防御のために構えられた天使の杖がその一撃で、粉々に割れる。そのまま寸止めで止められた拳から起きた拳圧の衝撃が、アニエーゼの体を七メートルほどノーバウンドで吹き飛ばした。

アニエーゼは、そのまま気を失っていた。

それで、全ては終わる。『法の書』に記されし術を行使し、すでに崩れまくっていた勢力均衡はもう形も残らなかった。

戦いは終わる。

たった一人の少年の拳が、言葉が、二〇〇人を超す敵勢の心をねじ伏せた事だ。

行動終了 The Page is Shut

思ったより上条の体には疲労が溜まっていたらしい。

半ば腰が抜けるような勢いで大理石の床に腰を下ろした上条はふと、エイムの方を見る。するとそこには、いつも通り微笑む貴音の姿があった。

「ん。エイムは？」

「学園都市に戻ってますよ。彼女はまだ世界中に充満できるほどの意志を持っていませんからね。私が補助してあげれば、いつでもどこでもアンテナを通して『界』を出現させれますけど。彼女自身の意志ではそれは不可能なので」

「なるほどね。そうか」

そんな上条の元に、インデックスが何かを叫びながら駆け寄ってくる。

「とうま、とうま。大丈夫なの!？」

「大丈夫じゃねーのはそっちじゃねーか？ インデックス。歩く教会がほつれてる」

「とうまのせいだからね！ っていうかさっきの何!？」

『法の書』に書いてあっただろ。十字教が支配するこの世が終わるっていうヤツ。局所的にこのオルソラ教会の敷地内だけで発現させたんだ」

「どうやって!？」

「そう言えば問題出したよなスタイル。答えられ「にやー。カミヤーんっお久しぶりだぜーいー!」

「ん？ 土御門。何やってんの？」

「何やってんのはこっちのセリフですたい」

「あ……そう。あつ！ ちよまつ!」

そう言った上条の体中から血が流れ出す。インテックスが心配するが、貴音が冷静に

「土御門さん。話は後で、病室で聞きます。とりあえず、ご主人を病院に!」

「お。種明かし、期待しているぜい」

—————
病院

「また、この病室か。つくづく縁があるな」

「……あ、起きましたか。ご主人」

「おう。おはよう貴音」

「……そうですね。とりあえず、土御門さんが来る前に現状の報告です」

「………続けて?」

「オルソラ! アクイナス、及び天草式本体はイギリス清教の傘下に入るそうで、多分ローマ正教避けですね」

「なるほどな。内政干渉にならないようにってトコか」

「そうですね。その役割が大きいと思いますよ。ところでご主人——」

貴音の次の言葉を聞く前に、夜明け時だというのに病室のドアがズバーン!! とノックもなしに勢い良く叩き開けられた。

そこにいるのは土御門。大量に汗をかいているが、

「カミヤん。色々聞きたい事があるんだが、まず始めだにやー」

「なんだよ」

「青髪に彼女ができているのはどういう事だアアアア!!」

「今更かよ! 二日ぐらい前から学校中で話題だったぞ!」

「信じられると思うのか! この目で見るまでは信じられなかったぜよ! あんな、あんな可愛い女の子連れてデレデレしてる青髪を見た瞬間、殺意の波動に目覚めたぜよ」

「あ、そう。俺はそんなに気にならなかったけどな——」

「当たり前だぜい! カミヤんには貴音つちつて言う可愛い彼女がいるんだからな!

俺は……俺は……舞夏ですら俺じゃなくてカミヤん命なんだぜい!」

「はあ？ 何言ってるんだ？」

「いや、それはこっちのセリフですご主人」

「いつもいつもだぜい。最近良く泊まりに来るから、怪しいと思って台所に盗聴器仕掛けて聞いてみたらカミヤんの為に料理を作ってたんだぜい！」

「いや、それは俺があいつの料理の師匠だからで」

「いんやあれは恋する乙女の独り言だぜい！ だから土御門さんは悔しいぜよ！ 大事な、大事な義妹いもむとをつ！」

上条は何故か情緒不安定な土御門に呆れたような視線を向ける。

「んで？ 聞きたい事の他は？」

「それは、貴音つちにだぜい」

「え？ 私ですか？」

「そうだぜい。あれはなんだ？ 魔術的に作られた教会、シスター服、霊装が崩れていった。あれは何だぜい」

「あれは………」

『あれは、新たな「界」の発現に伴う十字教のルールの崩壊……』

「誰だぜい！」

土御門が病室のそこら中をグルグル見渡しながら言う。すると、貴音の隣にひっそり

と立つように、少女が現れる。姿は、先程見たエネと一緒にの為……。

「エイム。お前出て来れるのか？」

『はい。ですが、媒体である榎本貴音様の近くであり、なおかつ学園都市の中でしかこうして出現はできません』

「へー。この人がエイムさんですか」

「だ、誰なんだ？」

「学園都市のA I M拡散力場の集合体。虚数学区・五行機関の総意体。って言ってたぞ」

「つまり………天使？」

『魔術用語で言えばそうなります。ですが私はそう言った類の言葉で表現できるものではないと思われます。なぜなら私は、十字教とはまったく違う「科学」によって生み出されたものですから』

「アレイスターⅡクロウリーの目的………」

「ん？ 土御門もあつた事あるのか、あのバカに」

「相変わらず、人の事をどこでも馬鹿扱いしてくれるな当麻」

「アレイスター！」

「よ、アレイスター。通信機からこんにちははってか？」

ホログラムのように透けた体のアレイスターがいつも通り逆さまで病室に浮かぶ。

「ふむ。相変わらず成長が早い。もうプランの終わりが見えてしまっている。つまらないな」

「アレイスター」

「ん。土御門か。どうした」

「どうしたもこうしたもないだろう。プランの核になる虚数学区の掌握はもうすんでいるというのか!？」

「そんなはずがないだろう。その少女二人はどうせ上条当麻に従うんだからな。私の思い通りに行くはずがないさ」

「カミヤん」

「んー。俺は俺のやりたいようにするだけだ。使われる時は使われてやるよ。ただの駒ではないけどな」

「……好きにしろ」

そう言つてアレイスターはホログラムごと消えた。

「カミヤん。悪いな」

「気にするな。魔術に対して最も有効なカードを持ったのは俺と貴音だからな。いいんだよ」

『それではマスター。私はこれで』

「おう。了解」

「じゃあご主人。私達も検診受けて帰りますよ」

「はいはい」

「俺もおさらばさせてもらうぜい」

土御門に続いて、上条、貴音が出た病室の窓からは、宇宙にまで伸びるエレベーターが見えていた。

日常編

短編集

上条当麻の憂鬱

「あーウザい」

上条当麻の学校での一言である。

それを聞いた土御門元春と青髪ピアスがニヤニヤとして、

「何や、カミヤん。どうしたん？」

「相談なら乗ってやるぜい？」

「あー？ ここのところ誰かにつけられてるんだよ。まるでストーカーみたいに」

「んなら撃退すれば良いんちゃうん？ カミヤん強いんやし」

「いや、それがシルエツト的に女の子の感じがしてよー」

「誰だか特定はできてるのかにやー？」

「全く、しそんな奴は考えられるが、アイツには電話番号とメールアドレスを教えるからしつこい位連絡してくるだけで済みそうなんだが……」

「それはそれで憂鬱になるやろ、カミヤん……」

「安易に拳を振るえないってのがな……。なにも俺は誰だつて殴るサイコパスじゃねーし」

「犯罪係数オーバー三〇〇。セーフティを解除します。つてね」

「貴音」

「貴音つちも見たのか？ P S Y C H O — P A S S」

「普通にハマりますよね。あれ」

意気揚々と土御門と話し始め、貴音の影響力だろう。上条の机の辺りに人だからができ始める。

「うっとおしい」

「いや、マジで憂鬱やな、カミヤん」

「ああ」

息を吐きつつ肯定する上条。何とかしないとな。

上条当麻の溜息

今日も……………か……………。

学校からの帰り道。上条は思わず頭を抱えた。理由は上条の後方一〇メートルほど

のところ、ビルの角に張り付くようにしてこちらを見ている影がある。

（暗殺者か何かか？ いや、でも気配を全然消せていないし……。だが、こつちが振り向こうとすると一瞬で身を隠す身のこなし……。ただのストーカーじゃないつてのが、おかげで撒くために必死だよ、インデックスの事もあるし容易に学生寮の部屋を知られる訳にはいかねーからな……。せめて誰か分かれば）

上条は呆れてものも言えない。というか自分をストーカーするとは飛んだモノ好きだな。と彼は思ったりもするが、そんな事を言うのと貴音がものすごく怒るので口にはしないでおく。

（本当に誰だよ……。普通に生活させろよ。あーそう考えると腹が立ってきた。次のビル角に仕掛けてやる）

上条はそう言うのとビルの角に数秒で何かを取りつけて、すぐにそのまま歩き出す。

狙い通り、と言ったところだろう。上条がセンサーを仕掛けたビル角が、爆発した。

「かかったな。さあ、誰なんだ？」

結構格好つけて路地を覗く上条だが、誰もいない。

「あれ？」（予想と違う……）

「あつぶねーですの。こそこそ調べても撒かれるんでしたら、最初から普通に聞けばよかったですわね。そもそも今は一人のようすし……ぐふふ」

「あ、なるほどね」

上条はその声の主を見て納得した、先程土御門達に話した犯人像。あながち推理は間違っていないかつたのだった。

「当麻お兄様、ごきげんよう。できれば寮室を教えてくださいだきたいですの」

「黒子……」

自他共に認める変態テレポーター。白井黒子がそこにいた。

「その派手な紫パンツはいかがと思うぞ？」

「色っぼいのですの？」

「いや、どちらかというとなは綿のパンツの方が好きだな」

「なっ。なんだってー!!」

「……ここまで驚く事かよ。流石にキャラ物は苦手だけどな。シルクのあの感触

が苦手なんだよ」

「……これからは綿のパンツにしますの」

「なにゆえ？」

「お兄様は気にする必要ありませんの」

「あ、そう。つてお前、怪我してんじゃねーの!? まさか、俺の爆弾で」

「あ、これは気にしないでくださいまし、わたくしが悪いので」

「いや、病院までは連れてってやるよ」

「いいですよ！」

黒子は上条自身を突っ張るように言うと、目にハートマークを宿し、勢いよく振り向いた。

「それで、お兄様とお姉様の愛の巣はどこですか?! 今すぐ私もそこに行つて……」
「住所ならここだ。いつでも来いとはいわねーが、シスターさんが同居している事だけは伝えとくぞ」

「分かりましたの」

（あれ、案外普通だ……。それにしても、普通に愛らしいツインテールだな……）

「あ、あの。お兄様? どうしましたの?」

「ん? 何でもねーよ」

「あ、でも。ツインテールを」

「あ、悪い悪い。クセでな」

「乙女の大切な髪を……! と言いたるところですが、お兄様ですし、許しますの」

「ありがとな、それじゃあな。黒子」

「ええ。また今度。ですよ！」

黒子と別れた上条は、自分の寮に向かつて歩き出した。

上条当麻の消失

「ご主人。大丈夫ですか？」

壁にめり込んだ上条に声をかける貴音。今、上条達は実験場を借りて、X BURN ERの練習をしていた。

『おい。上条、お茶が入った。休憩にしねーか』

「あー。今行くよ」

「しかし、あの技はなんだ？ 超能力とはまた違うようだし」

「あれはX BURNERですよ。死ぬ気の炎っていう高エネルギーを前方に撃ち出すモノで」

「はー」

「ほー。なあ上条。それってまだバランスが取れてないんだろ？」

「ん？ ああ。柔の炎と剛の炎のバランスが悪いんだよ」

「それはどっちも剛炎じゃダメなのか？」

「両方に攻撃してどうすんですか」

「それもそうか……」

何かを考えるように黙り込んでしまう数多。上条は呆れ気味にため息をつく。

「それは炎圧を揃えるだけで良いのかの？」

「ん？ まあそうなるな」

「最高炎圧はどのくらいか？」

「最高炎圧？ 測った事ないな」

「よっしゃ。測定するから思いつ切り撃ってみろ」

「あ、ああ」

「その前にご主人」

「あ、悪い悪い」

上条は、周囲に良く分からない機類がついた部屋の中心にいた。

『よし。上条、やってみろ』

「……了解」

返事をした彼は、右手を後ろに、左手を前に構える。

『四発ぐらいを目安に。炎圧を最高まで上げてくれ』

「分かった」

最初の一発目。前方の壁破壊。後方の壁に激突。二発目。後方には飛ばなかったが、壁を破壊（二度目）。

三発目。全力撃ち、手元が狂い地面へ。その勢いで壁を貫通。空中に浮いた状態となった。

（あーあー。何だつてこんな事に、ま、足場がないと撃てないしな。X BURNERは）

「撃てばいいじゃないですか。あるのは柔と剛の炎だけ、地も宙も変わりませんよ？」

「………だな。X BURNER エアー!!」

空中で逆さまの状態だった上条は、そのまま隣の部屋の計測機に剛炎を直撃させた。が、その反動で。今まで以上に強く壁にめり込んでいた。

「あー。ご主人の馬鹿野郎」

「いやいや、今のは貴音ちゃんが悪いと思うぜ？」

「ですかね」

「当麻お兄ちゃんが大変な事に」

「大丈夫だから落ち着きなさい円周」

——暫くして、

「止めろ！　いくらお前が吸血鬼でも容赦しねーぞ！」

慌てて飛び起きる上条。その体からは汗が噴き出ている。

「大丈夫ですかー？　ご主人？」

「ハアツ、ハアツ。スカーレット妹に無理やり犯される夢を見た……………」

「逆レですか。まあ悪魔の妹ですからねー」

「おい。できたぞ、上条当麻」

「なにがつか」

「おお！　できましたか！」

そういつて貴音がトレイを持つてくる。それに乗っていたのは、ヘッドフォンと何かのケースだった。

「何これHPとCヘッドホンLコンタクトレンズ？　どうやって使うんだよ」

「じゃあ使い方を説明するから。分かったら実験室で試してみてくれ」

……………実験室

上条は死ぬ気の炎を頭部と両手に灯す。

「コンタクトとヘッドフォンは？」

「着けてますよ。バツチリ」

「見てろ。貴音、お前が見たがっていた完璧なX BURNERを見せてやる」

上条はそのまま炎を噴射し、宙に浮く。そして、受けた説明を思い出す。

『(説明するぞ上条。まずコンタクトはヘッドフォンと音声で連動させてある。コンタクトの情報は耳からも入るはずだ)』

『(耳からも・・・??)』

『(次にディスプレイの見方だが、上のスロットルバーが右手の炎。下のスロットルバーが左手の炎の出力を表している。剛の炎は赤く、柔の炎は緑色に。バーに表示されるはずだ)』

(・・・よし。正常に作動してる)

『(そして、X BURNERだが、「オペレーションX」のかけ声で自動的にコンタクトが発射誘導プログラムを開始する。画面がX BURNER用に切り替わり、両手の位置で動くターゲットが出現し、上下のスロットルバーから中心に向けて出力のバランスラインが伸びる。安定したX BURNERを撃つには、ターゲットを中心に合わせて左右の出力を全く同じにすること。つまり両メーターから伸びるラインを一直線にすることだ)』

「それじゃあ私は行つてきます」

「行つてこい」

「オペレーションX」

『了解しましたご主人！ X BURNER発射シークエンスを開始します！』

「いきなり空中でか」

『ライトバーナー柔の炎。十五万 ファイアンマゴルテージ F Vで固定。レフトバーナー柔から剛に変換し

つつ、炎エネルギーをグローブクリスタル内に充填』

「的は……あれにするか」

『ターゲットロック。ライトバーナー炎圧再上昇。十八万……十九万……二十万FV

!!』

上条はゆっくり左手を水平に肘が伸びるようにして構える。

『レフトバーナー炎圧上昇……十九万……二十万FV!! ゲージシンメトリー!! 発

射スタンバイ!!』

「おっしや！ X BURNER!!!」

放たれた炎の柱は、実験場の壁を突き破り、消滅させた。

「強い……」。やはり、彼は強すぎるようだな」

「当麻お兄ちゃんはやっぱりすごい」

榎本貴音の陰謀

貴音はビルの上で唸っていた。

「あの黒子^{アマ}……良い子なんですけどねエ。変態さんなのが残念です。おしおきが必要ですかね……」

彼女は口の端を吊り上げて不敵に笑うと、スウと消えた。

常盤台中学女子寮……

「お姉様〜!」

「寄るなツツ!!」

寮内での能力の行使は厳禁。なので、室内に原始的な張り手の音が鳴る。
「い、痛いのです……」

「自業自得よバカたれ」

その時、常盤台のインターフォンが鳴る。

「? 珍しいわね。常盤台に訪ねてくる奴がいるなんて」

「ですわね」

『あ、どうも。白井さんいらつしやいますか?』

「ど、どちら様ですの?」

『勝手に……お邪魔させてもらいますね』

声は突然後ろに移動した。美琴と黒子が慌てて振り向くが、一瞬で美琴は気絶させられ、黒子は目の前が真つ暗になった。

——暫くして、

「はっ! これはどういう事ですの!」

「あらあら。起きて一番のセリフがそれ? もつと言う事あるんじゃないの? ねエ、

空間移動の風紀委員サン」

「あなた、誰ですの。お姉様は!」

「隣の部屋。耐電・耐衝撃壁に囲まれてる。そう簡単に脱出は出来ない」

「なら……ツ!」(飛べない!)

「残念ながらこの部屋に流れてるこの音楽があなたの集中力を削ってる。移動はできま

せんよ?」

「くっ……何が望みですの」

「イマジンプレイカー幻想殺しから手を引け、ヤツに関わるな」

ジャンプ

「・・・イヤ、ですの」

「あらそう」

ドス!! と鈍い音がして、黒子の片足に黒子の鉄針が貫いていた。

「逆らうごとにダーツするわよ」

「絶対にお兄様の事は諦めませんの!!」

「残念ね」

さらにもう一つ。二の腕に刺さる。

「うーん。次はどこに当たるかな？」

「絶対に嫌ですのツ!!」

「ガキかっつての」

先ほどとは別の、もう片方の足に刺さる。

「あつぐう・・・」

「いい加減諦めたらー? 幻想殺しに付きまとわれるとこちらが迷惑する」

「絶対に・・・イーツですの!」

「そう、残念ね」

「——こつちも、残念だぜ」

「!？」

「まさか!」

「二掌魂威……双槍!!」

ズドン!! と、響く鈍い音。魂にまで響いていそうなその一撃を喰らった相手はふわりと消える。

「よっ。黒子」

「当麻お兄様!」

「つたく、御坂と全く反応が違うな。何故こうも違うのか」

「悪かったわね……。アンタの顔見たら電撃放たないと気が済まないのよ」

「助けに行かない方が良かったかなあ」

「私にあそこで過ごせと!」

「ほんじゃなく御坂・黒子」

「ちよっ待ちなさいよッ!」

「それではまたですの。当麻お兄様」

上条は二人に背を向けて歩きだす。美琴がその背中を追いかけるが、路地裏を曲がった所で見失う。戻ってきた美琴は黒子を病院に連れていった。

「さて? 何であんな事したんだ?」

「だって、ご主人の事チヨロチヨロつけ回してて、ご主人が迷惑していたので。お仕置きを……」

「まあ忠告自体は正しいと思うが、もうすんなよ」

「分かりました！」

EX1. ハロウィンで的一幕 This_is_Halloween.

「ごっしゆじーん。どうですか？」

上条当麻の前でクルクルと回って見せる榎本貴音。その服装は可愛らしい魔女のようだった。

「何故に香霖堂魔理沙？」

「何でって今日はハロウィンですよ。ハロウィーン！」

「ああ。ケルト人の一年と、夏の終わりの祭りだろ」

「え？ キリスト教のお祭りじゃないんですか？」

「良く勘違いする人が多いけどな。元々は秋の収穫を祝い、悪霊などを追い出す宗教的な意味合いのある行事だから。ケルト人は死霊が家族を訪ねてくるって信じていたから——」

「んもう！ そんなことはどうでもいいんですよ！ ご主人もしましょう？ 仮装」

「んで？ 誰を訪ねるんだよ。いや、まあしないけど」

「何故ですか！ ハロウィンと言ったら仮装。常識、常識ですよ!!？」

「どこの常識だよ」

「仮装ですよ。仮装！ 早く！ 早く！ 早く早く！！」

「落ち着けよ。……しよすがねエなア」

上条の姿が黒い霧に包まれて変わる。現われたのは金髪の少女だった。

「あ、フランちゃん」

「私にとつては姿形など何の意味もなさない。六十年前にもそう言っただろう？」

「まあ、そうですけど」

「……で？ どうするんだ」

「もちろん街に繰り出しますよ！」

「いいだろう」

少女二人は街に繰り出した。片方は男だが。

暫く街を歩いていたら二人の前に、カボチャを抱えた小さな風紀委員が現われた。

「貴音お姉様、可愛らしいですよ」

「ありがとう。黒子ちゃん」

「私に言葉は無しか。風紀委員」

「……？ ……？ ……！ ……？ ……？ 当麻、お兄様……？」

「随分熟考していたな」

「当麻お兄様なんですよの!？」

「ああ。仮装だ」

「仮装つてレベルじゃねーですよ。変身つてレベルですよ」

「ところで黒子ちゃんは今ももう側ですか？ あげる側ですか？」

「今町中の子供達に配って回っていますの」

「じゃあ私達にもくださいな」

「あげませんの」

黒子は大きなカボチャのカゴに入ったお菓子を隠すように体を回す。

「では、お菓子をくれない人にはどうするか、分かってますよね・・・？」

「まさか、イタズラですよの!？」

「何故目を輝かせる」

「ええ、そうです。遠慮はしませんですよ!!」

キャー。などと言ってじゃれ合う二人を上条は呆れながら見ていた。

(夏終わり、菓子かイタズラ、百合の花。・・・)

くっだらねエ。と上条は付け加えて彼女は歩き出す。

「あれ。君、誰？」

と、声をかけられた。

「私は神成。それ以上でもそれ以下でもない」

「かみじょう……ちゃん？」

「その響きはあまり好きではない。私の担任を思い出す」

「あ、そう……。お菓子、いる？」

「求めてはいない。それに私は高校生だ。そんな物につられる私ではない」

「あら、そう」

（風紀委員。子ども全員に聞いて回っているのか）

「固法先輩。その方は私のお兄様ですの」

「白井さん……。ん？ ちよつと待って、お兄様？」

「ああ。私の名前は上条当麻。これでも高校一年生の16歳だ」

「それ、仮装ですよ」

「か、仮装?! これが!?!」

「私にとつて姿形など何の意味もない」

そういつた上条の体は元の上条当麻の体に戻った。

「ちなみに先ほど言った俺の担任は月詠小萌先生だ。会って見たら意外と面白いぞ」

上条当麻はもう一度姿をフランドールに戻す。

「さて、どうやら私の姿は子どもに見えるようだ。ならば都合の良い。ハロウィンだ。色々させてもらおう」

上条はそう言うのと、フランドールから同身長で上条当麻の体が変わる。

「それじゃあ行くかうか」

上条は闇の中から様々なアイテムを取り出した。メガネ、ベルト、くつ、スケートボード。その全てを身につけた。

「それじゃあ行ってくる」

「わお。ダイテクティブ装備」

貴音の言葉を無視してシヨタ条は、スケートボードのスイッチを押して高速度で発進した。

街中を走るリアルコナン君に興味の目が集まる。

（さて、どうする・・・・・・？　どんな仮装してるのか、会いに行ってみるか！）

シヨタ条を乗せたスケートボードは町の奥へ消えていった。

ケース1

「アア？　なんだ、オマエ」

「よう。びやくや」

「……まさか、上条か？」

「おう。子供になってハロウィン回ってる」

「仮装しろよ」

「似合ってるぞ、ドラキュラ」

「ミサカはー？　ってミサカはミサカはヒーローさんに自慢してくる」

「おう。小さな悪魔ちゃんだな」

「へへー」

「そんじや。俺はこれからもだれがどんな仮装してるか見にやなんのでな」

上条はスケートボードで走り出した。

「まるで小さくなった名探偵だな」

「コナン君みたいってミサカはミサカはry」

ケース2

「おっ。ようビリビリ」

「誰がビリビリよツ!! . . . あれ? アイツは?」

「ここだビリビリ」

「. . . アンタ。小さくなってる。APTX4869飲んだの!」

「仮装だバカ。御坂、オマエのその仮装は何だ?」

「え? エーと、シスターズ. . .」

「なるほど、常盤台生は派手な仮装は不可能だもんな。ありがとう」

「え、ちよつと待ちなさいよ!!」

ハチャメチャなハロウインをこの後も過ごした上条であった。

EX2. 猫の日

——上条家

「ご主人様♪ 今日は何の日か分かるかにや?」

「・・・あー・・・。猫の日か」

「正解ですよ!」

「何か・・・どこぞの『知ってる事だけ知ってる委員長の怪異』裏の顔みたいだな」

「にや!? にや、にやにを言うんですか! 馬鹿ご主人!」

「なんで怒ってんだよ・・・ワケ分かんねーよ」

ふとそこで上条は思いついて。

「いいかエネ。今から俺が言う文章を復唱しろそのキャラで!」

「あ、はい」

「斜メ漆拾漆度ノ並ビデ泣ク泣クイナ、クナナハン漆臺難ナク竝ベテ長眺メ?」

「えと、にやにやめにやにやじゆうにやにやどのにやらびでにやくにやくいにやにやくにやにやはんになやだいにやんにやくにやらべてにやがにやがめにやにやがめ」

（可愛い。めつき可愛い。お持ち帰りしたい。あ、ここ家じゃん）

凄いどうでもいい事を脳内議論し始めた上条。

(この場合ベツトにお持ち帰りか? いや、家の中だしお持ち帰りという表現方法は間違っている。というか家のエネが可愛すぎてヤバイ。まだ言ってるんだけど。にやーにやー言ってるんだけど。おいお前等満場一致でエネが可愛いよな!?)

((いえー))

(あー。俺は)

(俺は何だ言ってみろ!)

(八九寺が可愛いと思います!)

((ざわっ))

(・・・八九寺? あの八九寺真宵だというのか!?)

(だったら俺は斧乃木ちゃんを選ばぜ!)

(分かってないな。こなただ。こなたこそ正妻)

(分かってないのは貴様だ! 忍が一番可愛いだろ!)

(いや、フランだな)

(俺はロリカードを選ばぜ)

(マジかッ!!)

(・・・だったら俺はかがみんだ)

（かがみんに賛成!!）

（な!? 賛成ありなのか!? だったら俺は八九寺に賛成!）

（忍だな!）

（・・・おい）

（こなた可愛いだろ! 何言ってるんだ!）

（斧乃木ちゃんが一番だっつの!!）

（お前等・・・）

（（幼女!!!）（）

（（童女!!!）（）

（（少女!!!）（）

（静かにしろやああああああ!!）

「?!」

「・・・ハア。・・・ハア」

「ど、どうかしたんですか? ご、ご主人」

「あんにやる共・・・。いやまあ全部自分なだけどさ。良かった。エネが戦場ヶ原みた
いな奴じゃなくて」

「へ? ツンデレ娘? いや、アレはツンツン娘ですね。が、どうかしたんですか?」

「どうもしないさ。俺の脳内が大変な事になってるだけだから」

「な、何が起きてるんですか？」

「第三次世界大戦
幼童少女論争だ」

「・・・つまり？」

「忍野忍・斧乃木余接・八九寺真宵。この三人の中で誰が一番可愛いかという論争だ」

「何をしとるかーッ!!」

「グフツ!!」

今日も上条家は平和です。

（後日談。というか、今回のオチ。

結局。エネちゃん可愛い。に議論はまとまった。理由はエネの風呂場突撃だった。

完全にアクシデントなのだが、彼女は風呂場に入ってきた。

「・・・た、貴音」

「・・・あー。まあ脱いでしたので・・・お邪魔します」

「ん。どーぞ」

「動じてませんね」

「慣れかな」

「・・・慣れですか」

「ああ」

何というか、男の性だろう。事で論争は終わったのだった。

現金な奴かもしれないが、俺はエネを（性的に）食べる

EX3. バック・トゥ・ザ・フューチャー in 学園都市

とある日の夜。上条家の電話が鳴る。

「・・・はい？」

『やあ上条君。起きてるかい？』

「・・・起きてなかったら電話に出れないだろうが」

『ハハハッ。それもそうか。話を元に戻すが、上条君。今から〇〇に来れるかい？』

「何するんだ？」

『世紀の大発明さ！ それじゃあすぐ来るんだよ。待つてるからね』

そうやって切れた電話を上条は恨めしげに見つめていた。

「あれ。ご主人どこか行くんですか？」

「博士ドクが来いってさ」

「どこですか？」

「〇〇だと」

「あそこって・・・駐車場ですよね？」

「行ってみるしかねーだろ」

少年少女移動中・・・

上条達の乗るバイクが駐車場に停車する。

「こんな時間だしな。車止まってねーや」

「逆にそれであのバン目立ってますし」

「・・・あれ、ドク的車だな」

「・・・おつ。アインシュタイン！　ねえ、ドクはどこです？」

「犬に聞いても意味ねーだろ」

上条達が無かを探す前に、前方の車の後部ハッチが開いていく。そしてドライアイスのように白い煙が流れ出してきた。

その煙の中から車が降りてくる。

「なんだ？　なんだ？」

「改造された・・・車でしょいか」

「DMC-12・・・デロリアンか」

「古い車ですねえ」

貴音がそんな感想を漏らしたとき、ガルウィングが開いて上条達の言う博士。エメツトト木原トブラウンが出てきた。

「上条君。待つてたよ！」

「ええ、待たせてすいません。と、いうか。今度は何ですか？」

「前々回が『反重力装置（取り付け先が無くて断念）』。前回が『核融合装置（これも取り付け先が無かった）』でしたっけ。またつまらないモノじゃないでしょうね」

「何を言うか！ これは一世一代の大発明だぞ！」

「一世一代の大発明？」

地味に上条達の興味は高くなっていく。

「で？ この車は？」

「まあ何も言わずに見てろ」

「お、おう」

上条は業務用カメラ型のビデオカメラを構えてドクを撮る。

「こんばんは。私はエメツトト木原トブラウン博士。今は〇〇〇〇年10月26日午前1時18分。第一回テスト」

「テスト？」

「静かに、貴音」

「さあ、アインシュタイン。中へ入れ」

ドクはそう言い、アインシュタインをDMC-12の座席に座らせる。

「シートベルトを」

「・・・？」（この車、何が起るんです？）

（黙ってみておこうぜ。何か今までより面白そうだ）

（・・・面白いが行動理由の快樂主義者が・・・）

上条がブラウン博士とアインシュタイン。両方撮れる位置に移動すると、アインシュタインの首下げられたストップウォッチを博士が自分の付けているのと同じに見える。

「この時計はコントロールの時計と一致している」

「オーケー。確認した」

「よし。いい旅を」

そう言つてブラウン博士はこれまた改造が施された、ごついリモコンを取り出した。

「閉めるぞ」

「・・・それはリモコンか？」

「・・・行くぞ」

「オツケー」

ブラウン博士の手元の操作でDMC-12は動き出す。

「え。実物大車ラジコンですか？」

「黙ってる」

遠くまで行つたDMC-12の進行方向上に上条達は移動する。

「計算通りに行けば、時速140キロになるとぶつたまげる事が起きる」

そう言つたブラウン博士は手元のリモコンを操作し、DMC-12が加速し出す。

が、前輪が固定されているのか後輪だけが回転し、煙が出始める。

数歩横に避けた貴音を、上条達が疑問の目で見る。貴音は申し訳なさそうに戻つてき

た。

ブラウン博士はリモコンに付けられた、マイル表示のメーターが65マイルを指した

辺りで前輪の固定を解除した。

ぐんぐん加速するDMC-12は上条達に向かって走ってくる。

「……どこへ行く」

もう一度逃げようとした貴音を上条が止める。

「なんで止めるんですか！」

「面白そうだから」

メーターが88マイルを表示したとき、DMC-12の車体に変化が起った。外部に取り付けられた板状の部品から光が迸り、車体の前方に集中。

上条達の目の前で、炎のタイヤ痕を残し、忽然と消えてしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

上条と貴音、ブラウン博士は思わず後ろを振り返る。

「・・・・・・・・どうだ！ やったぞ！ ピツタリ140キロだ!!」

「そんな・・・馬鹿な・・・！」

「あれだけの質量物体が消えた？」

「次元超越の時刻は正確に午前1時20分0秒」

「酷エ・・・アインシュタインが消滅した」

「落ち着け。消滅ではない。アインシュタインも車も無事に存在している！」

「「ハッ！」」

「『どの時代に？』と尋ねてくれ。我が愛犬は世界初のタイムトラベラーだ！ 私は彼

を未来へ送ったのだ」

「「は」

「未来と行ってもわずか1分先だ。1時21分0秒にあの車はここに戻ってくる」

上条達はその言葉を聞いたとき、目を丸くして。そしてブラウン博士に詰め寄った。
「待って、ドク」

「まさか、DMC-12を・・・デロリアンをタイムマシンに改造したのか!」

「どうせ作るならカッコイイ方が良い。デロリアンのボディは粒子分散を・・・」
そこまで言った所でアラーム音が鳴った。

「おい、まさか」

「「危ない!」」

彼らが避けた途端。彼らが丁度いた場所に車が出現した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

停止した車体に近寄るブラウン博士の、数歩後方についていく上条達。

そんな中、車の後方から白い煙が吹き出した。

「「ー」」

「・・・・・・・・・・」

煙を吹いた車体に遠慮無く近づき、ドアに触れたブラウン博士は慌てて手を離した。

「あ、熱いのか?」

「氷のようだ」

ドアノブを足で開けるブラウン博士。ガルウィングが開く。

「おお。無事だったか」

「・・・確認無かったのかよ」

「実験に失敗はつきものとよく言いますが・・・」

「この博士が失敗したとこ見た事ねエ!!」

「見ろ。きつちり一分遅れてるぞ」

「・・・無事だ」

シートベルトを外されたアインシュタインはバンの中に戻っていく。

「彼は今の旅を意識していない。時間は過ぎていないのだ！ だから時計は一分遅れ」

「一分を飛び越え、ここにいろつて訳か」

「おいで、操作を教えよう」

「え、教えていいんですか」

DMC112の運転席に乗ったブラウン博士は上条達に説明を始める。

手順1 タイムサーキット 時計盤のスイッチを入れる。

手順2 目標時間を入力する。(目標時間は自由)キリストの誕生日でも、未来でも行

ける

「はあ。ぶったまげた車ですね」

「これだよこれ。〃次元転移装置〃これが時間旅行タイムトラベルを可能にする」

「ほうう」

「燃料は？ ガソリンですか？」

「ガソリンじゃ無理だ。プルトニウムだ」

「・・・じゃあこの車は核燃料で？」

「違う違う。車の動力は電気だ。1. 2. 1ジゴワットの電流を得るのに核反応を」

「・・・プルトニウムは店じゃ買えないぞ」

「いくら学園都市でも・・・」

「ノノノッ。スキルアウトだよ。パチンコの部品で作った、インチキ爆弾と交換した」

「酷エ」

その後燃料を交換した上条達の前にスキルアウトが現われた。

「大変だ。奴らが仕返しに来た」

「いや、そりゃ来るだろ」

「マシンガン持ってますよ」

「逃げる!!」

慌ててDMC-12の影に隠れた上条達の目の前で、ハイエースに乗ったスキルアウト

トの手でブラウン博士が撃たれた。

「テメェ!!」

「バツ!」

上条に向けられたマシンガンの銃弾を思わず避けた上条はバンの向こうに回る。が、もちろん回り込まれてしまった。

「.....?」

撃たれるはずの銃弾は撃ち出されなかった。

(弾詰まりか!)

「ご主人!」

「おう!」

貴音が乗っていたDMC-12に上条も飛び乗った。

「逃げるぞ!」

「でもどこへ!」

「家にだよ!」

「ドクは!」

「死んでも良いのか!」

「良くないです!」

「よし逃げよう！」

アクセルが踏み込まれ、上条達の乗るDMC-12は発進した。

ハイエースとカーチェイスするDMC-12は道路に出る。高速に乗った上条達の車を追って、ハイエースと警備員の特殊車両まで来ていた。

「ツハツ！ 150キロ出して見ろ」

「逃げ切つてやります！」

ぐんぐん加速するDMC-12。上条がギアチェンジした瞬間、タイムサーキットが入り、時刻表示が光っていた。

「はっはー！ ついて来れまい！」

「いえー……。ご主人」

「あ？ あ」

「今？」

「140キロ♪」

「不幸だあああああああ!!!」

高速道路で上条達の姿は車と共に忽然と消えた。

EX4. バック・トウ・ザ・フューチャー in 学園都市

II

2065年10月26日午後1時18分

三度の破裂音と共に、DMC-12が出現する。そこに高速道路はちゃんとあった。

・・・のだが、崩れ落ちかけていた。

「ちよっ!」

ブレーキを踏み込みハンドルを切る上条。数十センチ横スライドして、DMC-12は停止した。

「……………貴音」

「何ですか」

「ドクは成功してたよな」

「ええ」

「だったらここは未来だったのか?」

「恐らく」

「未来の学園都市はこんなになってんのかよ……………」

上条達の目に映るのは一昔前の怪獣映画やSF映画で見た事ある、崩壊した街だ。

一番被害が大きく見えるのがエンデュミオンだ。途中から折れ、地面に落ち学園都市の被害、大部分の原因になっている。

統括理事会のある『窓のないビル』でさえも演算型・衝撃拡散性複合素材ごと破壊されている。

「一体……何が起きたって言うんだよ……」

「さ、さあ……」

「ほ、本当にいた……」

そんな声の上条達の耳に届いた。

振り返るとそこには、少しボロボロの制服を着て、二の腕に腕章を付けた少女がいた。
「風紀委員!？」
ジャッジメント

「あ……、これですか？ これはこの街で拾って着けてるんです。ご紹介が遅れました。私小鳥優香と言います」

「小鳥……さん？ どうしてあなたはこんな街に」

そう貴音が尋ねると、少女。優香は説明を始めた。

「ここに学園都市という街があったのは今から四十年前になります。今はもう誰も寄りつかないいわく付きの街になっています。それでもこうやって近づく人はいますけど、

それは観光目的であつたり、撮影目的であつたり。絶対に、研究目的で訪れる人はいません。何故ならここが潰されたのが龍の怒りをかつたからだと言われているからです。

——学園都市の最暗部から全てを見通すと言われた黒皇龍。その龍が愛したという少女が実験に使用され息絶えました。怒り狂つた黒皇龍は最暗部からその猛威を振るい。全てを壊し、全てを喰らい尽くしました。その瞳に悲しみと怒りをためて、その腕に少女の亡骸を抱いて。

学園都市は滅びました。龍の怒りをかつた事で、中から喰い殺されました。それは無残に喰い殺されました。そして黒皇龍は戻っていきました。学園都市の最暗部に。少女の亡骸と共に——

これが、外の世界にまで伝わっている四十年前の出来事です。そしてそんな事があつたこの街跡地の今日、この時間。貴方達が来る事が予言されていました。上条・・・当麻さんですよね？」

「お、おう」

「二十年前、二十年後の今日。ここに上条当麻と榎本貴音という男女がいる。その彼らに渡してくれ。と言う事で手紙を預かっているんです。はい」

「あ、ど、どうも」

「サインもらえますか？」

「あ、はいはい」

「いやー。努めて五年ですけどびっくりしましたよ。賭けには負けちゃいましたけど」

「来ない方にかけてたのか」

「・・・で？ 中身は？ どんな文が書いてあるんですか？」

「えーつと・・・宛先上条当麻・・・差出人・・・幻想喰い？」

「それなんて名前なんでしょうね」

「いや、これは・・・」

上条はその手紙を乱暴に開封し、中を読む。

『親愛なる上条当麻。お前の力を貸して欲しい。俺の持論からして、このとある世界にはパラレルワールドは存在しない。いくつも分岐した世界なんか存在しない。だから、この残酷な未来を変えてくれ。それがお前への願いだ。「俺」と「俺」が会おうがタイムパラドックスは起きない。だが、来ない方が良い。朽ちる事無く腐る事無く、俺の腕の中で死に絶える「彼女」の姿はお前も見たくはないだろう？ だから、今すぐその街に隠し置いたプルトニウムを使って2020年に行ってくれ。そこで、あいつ等を・・・やってくれ。あの研究所を潰せ。俺の・・・いや、俺達の貴音が死なないように。殺し

てくれ……頼む』

「……………」

「……ご主人？」

「……貴音。お前は、この地図の場所に行つてプルトニウムを取つてきてくれ」

「あ、あるんですか!?!」

「あるらしい。行つてくれ」

「は、はいな!」

「……届けてくれてありがとうな。俺はこのクソツタレた世界を変える」

「過去は変えられないんですよ?」

「そうだな。だが、未来は変えられる。この車はそれが出来る!」

貴音が跳びだしたと同時に。上条も別の場所へ飛び出した。

「行つちやつた……。ま、任務完了つてトコでしょう。風紀委員^{ジャツジメン}、か……この腕章、

そんな意味を持つんだ……。つて待つて。なんで彼ら四十年前に滅んだ学園都市の組織を知つてるの? ……学者さんかな?」

窓のないビル跡地。地下。

「……………」が
お前の……学園都市^{住み}の最暗部^処か?」

「・・・・・・・・何で来た・・・・・・・・」

上条が話しかけた先にいたのは、「上条当麻」だった。だが、眼は腐ったように黒く濁り、髪は生気を失って白く脱色し、手足は動いていないかのように細くなっていた。

だがその右手だけは今もなお、決して動く事のない少女の頭をなで続けていた。

「どうしても、分からなくてな。何で会わせたくないのに、会って見ろよ。なんて聞こえる挑発的な書き方をしたのか知りたくてな。・・・・・・・・なるほど。これは酷いな。こんなに綺麗なのに、死んでるのかよ・・・・・・・・エネ」

「・・・・・・・・ああ。もう、話す事も、ふざける事も、出来ない・・・・・・・・あの笑顔を見る事すら出来ないんだ・・・・・・・・なあ、お前ならどうする。これをお前は防ぐ力を持つてる。過去を変えるのが悪い事って言うんだったら未来を変えてくれ。この、ふざけた結末みらいを・・・・・・・・」

「任せろよ。ここはカゲロウの操る世界じゃねえ。変えてみせるさ。生かせてみせるさ。エネをな」

「・・・・・・・・ああ」

「——私が、どうかしたんですかー？」

「?!」

その場に響いた声に上条は振り返り、「上条」は跳ね上がるように顔を上げた。

「よっ、エネ」

「なんでエネ呼びなんですか、ご主人。何かあったんですか？」

「たかね・・・貴音だ・・・」

「おわっ！ 何ですかこの人！」

「俺だ」

「ご主人？・・・未来の？ って私！? ご主人大変です！ タイムハラドツグズがタ

イムパラパラ——」

「くっ、あははははは!!」

「何が面白いですか!!」

「いや、言えてないのが」

「貴音だ・・・。何もかも皆懐かしい・・・」

「ヤマトですね。もしかして・・・四十年前死んだのはやっぱり私だったんですね・・・

「ご主人はどうするんですか？」

聞かれた上条は引き裂けるほど口角を釣り上げて。

「潰すさ。俺の・・・いや、俺達」の貴音をこうしておいて俺が黙ってる理由はねエ。危ない芽は摘んで置くに限んしろ」

「ですね！」

「もう行くんだろ？」

「ああ」

「だったら、貴音。お願いがある」

「・・・何ですか？ “ご主人”」

「ツ・・・。抱きしめて、頭をなでてくれないか・・・」

「・・・良いですよ」

貴音は “上条” の膝から “貴音” を上条に渡し、その体を抱きしめ、頭をなでた。

「よく頑張りました。もう、この未来はおしまいです」

「・・・最後だ。よく覚えとけ。俺はこの世界を高校生で去る！ お前が出来なかった

事をやってやる。記憶だって取り戻してみせるさ」

「・・・ やれるモノならな。俺が無理だったんだぞ」

「お前が無理でも俺は出来るさ。俺には貴音がいるんだぜ？」

「いたんだよなあ。俺にも」

「・・・ さ、貴音。行こうぜ」

「了解です。ではサラダバー！」

「じゃな」

上条と貴音はDMC-12に乗り込む。

「行き先は2020年10月26日午後1時18分！」

「目的は榎本貴音の生存フラグ建て！」

「行くぜ！」

十分加速したDMC-12は時空を超え過去の学園都市へと飛んだ。

III EX5. バック・トゥ・ザ・フューチャー in 学園都市

2020年10月26日午後1時18分。

三度の破裂音に続いて道路の真ん中にDMC-12が出現した。

そこはお昼の学園都市。何人かの学生が振り返ってその車の事を見ていた。

「・・・あー昼にしたのは間違いだったかな」

「いえいえ。お昼にしないと暗闇の中では何も見えません」

「まあそれもそうか」

DMC-12は上条達を乗せたまま、暫く街を走っていた。

「あー。ご主人」

「何だ？」

「そこ右です」

「早く言え!!」

ブレーキングドリフトで上条は交差点を右に曲がる。

「・・・ふう。警備員とかに目をつけられてないといいけど」

「それ、フラグって言うんじゃないですか？」

「はっはっはっ。んなバカな・・・」

上条は力なく笑う。

そんなこんなで暫く走り、一つの研究所の少し離れた所にDMC-12は歩道に寄せられて止まる。

「・・・ここだな。じゃあ解除よろしく」

「任せてください！」

そう言った貴音の体から意識が抜け落ち、上条が支える。貴音は現在電腦少女エネになり、この研究所のコンピュータ系をジャックしているのだ。

「・・・完了です！」

「よっしや。んじゃ、爆弾設置とサーバデータ破壊は任せた」

「ちよっ！ 頼むこと多くないですか!？」

「安心しろ。人間は全部こつちが受け持つ」

そう言つて上条は研究所の中に飛び込んでいった。

研究所の中は混乱状態だった。

「何だ!? 何が起きている!!」

「襲撃者です!」

「何だ?!」 どのどいつだ!!」

「ここのコイツだよ。．．．しかしよお、マルチスキル多種能力の研究は禁止されてるはずだぜ? 違

反研究者」

「こ、黒皇龍!!」

「は、はは。アハハハハ!! ま、まさか目標からこつちに来てくれるとは」

「?」

「キサマがここにいるという事は、あの電腦少女もここにいるんだろう? は。今はキ

ミに感謝するよ。黒皇龍」

「なるほどな。やつぱりエネの多種能力が狙いか」

「彼女は今どこにいるんだい? ああいわなくてもいい。君を殺せば出てくるだろう?」

「ま、そうかもな。だが、できもしないことは言うものじゃないぜ?」

上条は楽しそうに笑いながら手の中でジャツカルを回す。

「俺の貴音を実験材料にしようとした時点で、お前達の未来は『死』しかないんだよ。諦めろ」

「諦められるか．．．。見せてやる!!」

素早く傍にあつたボタンを叩き潰す勢いで押す研究員。少しして壁が破壊されて、中性的な顔立ちの子供が飛び込んできた。

「・・・へえ。本元の少女の管理者か」

「おい？ 誰に断つて俺の貴音をそんな呼び方してんだよ」

「ボクはボクのルールで生きてるよ」

「ああそうかい。で？ 俺の目の前にレプリカとして現われたって事は、それなりの覚悟は出来てるんだらうな？」

「出来てると思う？ 黒皇龍さん」

「勝手に出来てるってことにしてやるからかかって来いよ」

「いいよ。やってやるよ」

と、そこで上条が

「ところで、オマエ。男？ 女？」

「ツ！・・・まさか分からないの？」

「あつはつはつ。中性的な顔立ちっつーか女の子の顔じゃん。どっちなのさ」

「見ての通りだよ」

「どっちだよ」

「ボクは女だよ!!」

「うん、知ってるwww」

(コイツ・・・ウザい・・・)

神々の義眼で全て見通す上条は要らぬ質問をする。準備が整った所で少女の方が飛びだした。

「見せてあげるよ！」

「おっ。空間移動」

「はあッ!!」

「だが遅い」

テレポートからの突きを風歩でかわす上条。

「フハハハハッ！ 貴音と手合わせし続けてきた俺に、劣化番で敵うと思うな！」

「・・・コイツ・・・。殺してえ・・・」

「こら、女の子が汚い言葉使っちゃダメだぞ♪」

「キモいわあああああああああああああ!!!」

「だろうな」

「ウゼえ！」

丁度その時、上条のヘッドセットにエネからの通信が入る。

『ご主人！ こっちはいつでもOKですっ！』

「・・・・・・・・どうやらゲーム終了のようだ」

「・・・・・・・・は？」

「学園都市製小型核弾頭を喰らいなっ!!」

上条の姿が消えた瞬間。研究所が核爆発で消し飛んだ。

そこから少し離れた場所。カバーが掛けられた車の傍に上条と貴音が現われた。

「・・・・・・・・うっはー。大爆発ですねえ！」

「さて、この時代の黒皇龍が来る前に帰ろうぜ」

「ですっねっ！」

DMC-12に乗り込む二人。来た時間に時間をセットして、時空を越えて消えていった。

*

〇〇〇〇年10月26日午前1時30分

三度の破裂音と同時。DMC—12が道路上に出現した。

「……帰って来れたのか？」

「……みたい……ですネ」

「……まさか今までの事全部夢だとかないよな？」

「流石にそれは……ないでしょう」

あの駐車場にDMC—12を走らせる上条。入れ違いでスキルアウトのバンと過去のDMC—12が駐車場を出ていった。

「……あつぶねー。この時間かよ」

「ギリギリ見つきりませんでしたね……」

「あ……ドック!!」

ドリフトターンでブレーキをかけてDMC—12から飛びだした二人は、地面に転がるブラウン博士の体に近づく。

「お、おい。無事か？ ドク？」

「……ご愁傷です」

「勝手に殺すなよ」

「生きてるのかよっ!!」

「当たり前だ。私を誰だと思ってる？」

「天才科学者エメットⅡ木原Ⅱブラウン博士」

「その通り！」

ブラウン博士の無事を確認した二人はそのままDMC—12で学生寮まで送ってもらう。

「三十年後に行くなら一つ忠告」

「何だ？」

「再突入の時、少し衝撃があるぜ」

「了解した」

夜の街に莫大な光量を撒き散らしてDMC—12は消えた。

「ハア。とんだ一日でしたね」

「まあまあ楽しめたさ」

——次の日。

学生寮前で土御門と上条・貴音は話していた。

「それで、最近どうなんだ」

「ん？ 何が」

「レディリー||タングルロードだ。一応イギリス清教こちらのでも怪しい事はしないという事で契約はしているんだが、いかんせん心配でな」

「安心してくださいい土御門。今のところ年相応の女の子になってきてますから」

「ほう。やはり貴音つちは侮れんな」

「もちろんです」

と、そこで後方で強い風が吹いた。

「「？」」

どこかで聞いたような破裂音と共に出現した車が、不自然な形で自転車を数台倒しながら突っ込んできた。

「あ・・・あれは」

「何だ？」

勢い良くガルウイングが開き、まったく似合っていない派手な服を着た見慣れた顔が現われた。

「上条君、私と一緒に来てくれ」

「・・・どこへ？」

「未来へ帰る」

「・・・なあドク。そのゴミどうするんだ？」

「燃料だよ」

ブラウン博士はそう言うと、M.R. FUSIONと書かれたパーツを開閉し、中に近くのゴミ箱から取り出した生ゴミを入れていく。

「燃料？」

「さあ、早く。乗った乗った」

「あー。行くぞ、貴音」

「り、了解です」

乗り込んだ上条はスマホの中に「彼女」がいる事を確認する。

「まさか一日も経たない間に乗る事になるとはなあ。・・・ところでドク。八十八マイルまで加速するにはこの道じゃムリだぜ？」

上条のその言葉に、色々とスイッチ類をいじっていたブラウン博士は。

「道か。これから行く先に、道なんて必要ない」

『『はっ。』』

ブラウン博士がスイッチを操作すると、DMC-12の車軸が九十度曲がり、車体が宙に浮く。

「空飛ぶデロリアン？」

そのまま八十八マイルまで加速して、消えた。
「……………一体どうなってんだにやー?」

映画 とある魔術の禁書目録 エンデュミオンの奇蹟編 宇宙エレベーター

上条と貴音は、インデックスを連れて街を歩いていた。

「あれから三年か……」

「長いもんですね」

「ほほう……宇宙エレベーター……」

インデックスは、街を飛ぶ飛行船や電光掲示板に表示された単語に興味を持つ。

『いよいよ完成が間近に迫った宇宙エレベーター「エンデュミオン」！ 記念式典は九月に開催される予定です。今回はエンデュミオン完成までの軌跡を……』

「ねーねーとうま、たかね。エンデュミオンってなむぐつ」

立ち止まった貴音の背中にインデックスが突っ込む。

「たかね!! 急に立ち止まったら危ないんだよ!？」

「そんな事よりインデックスさん？ あなた、完全記憶能力あるのに何言ってるんですか？」

「？ 何が？」

貴音はビシィツ、ととある方向を指した、そこには天へと貫く高い塔がそびえ立っている。

「あれですよ。あれ！　あれが宇宙エレベーターですっ!!」

「あれあれあれー!?　あんなのあつた〜!?」

「ありましたよっ！　科学が絡むと本当に駄目ですね！　風斬の時も、ローマ正教の時も、堂々とあつたでしょうがーッ!!」

「ほえ〜つちんぶんかんぶんだよ〜」

「まあ、発表は最近なんだけどな。学園都市じゃなきや実現不可能とまで言われててだな」

「うんうん。で、つまり宇宙エレベーターって何?」

「ロケットとかシャトルとか使わないで、直接宇宙まで上がれるようにしたものですね」

「おおお………！　科学サイドはバベルの塔まで現実の物にしようというんだね………！」

「んじやあ最後には引っこ抜かれるのか?」

上条が冗談交じりに返したが、インデックスの意識はもう違う場所へ移っていた。上条の後方に出来た人混みから聞こえる歌声に。

「………?」

「・・・行つてみるか」

「ですな」

「わ——っ。見えないよー!」

「はいはい。ちよつとすみませんね」

「ほら、インデックス、こつちから見えるぞ」

「・・・!!」

人混みの向こうでは少女がキーボードを弾きながら歌っていた。地面に置かれた看板から名前は「ARISA」である事が分かる。

その歌声に、インデックスは目を輝かせていた。

———ところは変わってファミレス。

「・・・八八の奇蹟? ああ、あつたねそんなの」

「三年前です! オリオン号の事故でスペースプレーン計画は凍結されて、宇宙エレベーターの建設が始まったんですって」

ドリンクバーのコーナーで話しているのは常盤台の超電磁砲こと御坂美琴と、白井黒子と同じ風紀委員で頭に付けた花の紙飾りが特徴的な初春飾利。初春の方が嬉しそう

に宇宙エレベーターの事を語っている。

「世界初の宇宙エレベーター！ この学園都市に建設するのは赤道直下の何十倍も困難なんです。それをものともせず遂に完成が迫ったエンデュミオン！ ステキですよね」

「そ、そうね……」

自分達の席に戻った美琴もその勢いに押されていた。この場以後輩である白井黒子はいない。先日の怪我で入院しているからだったりする。

「佐天さん。それ、何聞いているの？」

「これは『ARRISA』っていうネットとか路上ライブとかで活動しているアーティストで、今すごい人気なんですよー」

「『ARRISA』っていうえば以前ネット沸かせた伝説の『ENE』と師弟だ。とか姉妹だとか色々ウワサされていますね」

「あー。『ENE』は私も好きだったなー。こつちまで元気になるぐらい元気な人だったからねー。会った事ないけど」

「……まあ、その『ARRISA』ですけど、試しにダウンロードしてみたら良い曲ばっかりでハマっちゃって……」

「へえ……」

「この人ですわね」

初春がパソコンの画面に少女を映して、美琴がイヤホンで歌を聞いて、少女は気付く。「あれっ、この子……」。やっぱりあの子だ。そんなにも有名なんだ？」

「え！」

「あの子」って?! 知ってるんですか御坂さん!？」

「わっ」

「いや〜ちよつと色々あったというか……」

「色々ってなんですか!？」

美琴に詰め寄る佐天をほほえましく見ていた初春だったが、その顔がだんだん曇る。その原因は、ファミレスの窓に張り付いた少女。黒子だったりする。

「こんなところでああにをなさっているんですのっ?! お姉様っ!!!」

「げっ」

車椅子ごと空間移動した黒子は、机の上に現れる。

「白井さん……、入院してるハズじゃ……」

「このような事があるからおちおち入院もしてられませんのよっ!! 半日早く許可出たので皆様を驚かせようと思つたら……まさかこつちが驚かされる方だとは思つてもみませんでしたの!! かくなるうえは……。私もお姉様と急・接・近!!」

再度空間移動した黒子は美琴と佐天の間に現れると美琴にすり寄り始めた。

「お姉様〜!!」

「だあああ! 来るな〜!!」

最後にそのファミレスから電撃が迸ったのは余談だろう。

再度、ところは戻って路上。

演奏が終わった少女は立ち上がり、お礼を言った。そこから歓声が上がる。

パラパラと人が散っていく中。インデックスは拍手を止める事がない。

「すごいすごいすごい! とーつても素敵だったんだよー!」

「えへへ。ありがとう……。あれ?」

「よっ。〃久しぶり〃になるのか。この時空では」

「六九万八二七二年、四か月と十五日三時間四分五十秒ぶりですねえ」

「当麻くん! エネさん!」

「し、知り合いなの?」

「ああ。三年前くらいにな。俺じゃなくて最初に会ったのは貴音だけ。な?」

の舞姫〃」

〃閃光

「うあああああああ！ その、そのトラウマネームを出すなアアアアアアア」

ゴロゴロ。とものすごいスピードで地面を転がる貴音。『ああ、これはベッドで悶え苦しむフラグだな』などと思いつながら上条は、ARISAに顔を向けて、

「インデックス、彼女は鳴護アリサ。今はシンガーソングライターでもやってるのか？」

「うん。そうだよ」

「よろしくね！ アリサ！」

「うん。よろしく！」

「ご主人………。本気で怒りますよ………。？」

「あれー？ 『ゲームでアンタが勝ったら、アンタの事ご主人って呼んで何でも言う事聞いてあげるわよっ！』って言ったのはどこの誰だったかなー？ そうだったよな？」

「閃光の舞姫エネ」さん？」

「うっがああああああ!! やめてえええ！ 心の傷を抉らないでえええ!!」

「たかね。大丈夫？」

「エネさん！ 大丈夫ですか!？」

「見ないで。恥ずかしい」

「パンツ見えてるぞ」

「見せてます」

「誰に」

「ご主人に」

「あつそ」

うずくまつてブツブツ言う貴音を放つて話は始まつた。

「そもそもたかねとアリサはどこで出会つたのかな？」

「えつとね。エネさんが元々有名人だった事は知つてるかな？」

「知らないんだよ」

「貴音はな。この間まで、と言つても今年の冬まで『ENE』つてHハンドルネームNで動画投稿してたりしてたんだよ。それがものすごい人気でな。二年前だったかな。アリサに会つたのは」

「うん。ビデオカメラを持って街を歩いてたから声をかけたの。当たつてすごく嬉しかったの覚えてるなあ〜」

「こつちとしては素の自分を知られるの嫌でしたけどね」

「クカカ。随分イタイ娘演じてたもんな。そりや身元特定とかマジ勘弁だろ？」

クツクツと笑う上条を貴音がポカポカと殴る。

「コホンツ。まあとにかく。凄いつてのが伝わる歌でしたね」

「どうすごいか表現してやれよ」

「何でそんなに腹立つ言い回しなんですかア!!」

ケラケラと笑って彼は受け流す。周りの視線を全くと言っていいほど気にしないそのやりとりは、少女の頬を緩ませるのに時間はかけなかった。

「ふふふ。あはは。全く変わってないね。二人とも」

「え? いや、貴音(ご)主人」と違って俺(私)はしっかり成長してるぞ? (してますし)」

全く同じタイミングで口を開く二人に、インデックスまでもが笑いだす。上条と貴音は顔を見合わせて首を傾げた。

「あはは。………二人はもう、レベルは上がったの?」

「いんや、相変わらざるの無能力者」

「それでも毎日楽しいですけどね」

「二人は本当にすごいよ………。パーソナル・リアリティ私なんて、力がないから………」

「だったらつければいい。能力を。自分だけの現実をさ」

「簡単には言わないで。私に唯一できたのが歌う事なの。何もできない私に」

「おっぱいついてるかー!」

「きやあ!?!」

貴音が、アリサの胸を両手でわしづかみにしてモミ倒す。

「な、ななな！」

「ちっぽけな事で悩んでますねエ。せつかく宇宙エレベーターができたんです。宇宙に行ってみたらどうですか。自分の悩みなんか世界の広さに比べたらちっぽけですよー」

「で、でも」

「でもイモもなーい！ 良いですか!? 人間諦めたらそこで楽しい人生終了なんです！ 何かにチャレンジし続ける限り、確かに人間は輝きます。ですが、辛い現実から目を背けてるだけじゃ、本物のスターにはなれないですよ!？」

「アホか、馬鹿」

「なんと！ 二度も悪口！」

「まあ俺も貴音の意見を否定する気はねーよ。人間に限界はないって知ってる俺は、勝手に自分に限界をつけて、諦めてる奴が大嫌いだからな」

「……本当に、妙に説得力があるね。当麻さんとエネさんの言葉は」

「そのエネさん呼びやめてくれない？」

「じゃあ貴音ちゃんで」

「うっ……ご主人」

「嬉しいんだろ？ 喜んでけよ」

「うっしやあ！ どりやあ！」

「？ とうま、私おなかすいたかも」

「平和な思考してんなー。ほんじゃ、さっきの事は忘れて、一日遊ぶか」

「あいさー！」

「ふふっ。わーい」

「……………え？ それでいいんですか？」

と、その時。携帯のバイブが鳴る。上条が自分のかと思つて、貴音に目を向けるが貴音は首を横に振るだけ。その時アリサが、

「で、出ても良いかな？」

「どうぞどうぞ」

「どうぞー！」

「はい鳴護です！ ……はい！ ……はい！ ……はい！ 本当ですか!? ありがとう
うございます!! ……はい！ ……はい！ ……はい！ わかりました！」

通話を切つたアリサは安堵するような溜息をつく。その様子に、上条、貴音、インデックスの三人は首を傾げる。が、次の言葉で答えは出てきた。

「……………わたし！ オーディション受かつちやつた！ デビュー……………でき
ちやうんだつて！」

「ん？ え？ お？ それってあれか。アイドルとかそういうデビューか!? タレントとかそういうのか!」

「テレビに出るんですか!?! 何ちゃんですか!」

「テレビ? アリサ、カナミンと同じになるの!?! 凄いよ!」

「いや、カナミンはなんか違うだろ」

「実在しませんしね」

「これは絶対お祝いしなきゃだよ! とうま! たかね! お昼まだだよね!?! アリサ

も一緒に食べに行こう!」

「えっ! で、でもそんな悪いよ!」

「いいよね? とうま?」

「いいの?」 と言った風の上条の方を見てくるアリサに、上条はニコリと笑って、

「構わないぜ。今さら何人増えたところで変わらないだろうし」

——暫くして、上条達はファミレスにいた。

「ん? オーディションってあのエンデュミオンに関係したやつなのか?」

「うん! キャンペーンに使うイメージソングにわたしの歌が選ばれたの!」

「へー! 知ってるよ! 宇宙エレベーターだよね!」

箸を置き、口の中の物を飲み込んでから話すインデックス。礼儀作法がしっかりして

いるのは、貴音が叩きこんだからである。

「教えたの私達ですけどね」

「……………。……………つてことはアリサは宇宙に行くんだね？」

「うん……………まだわかんないけど、オープンングセレモニーでライブしたりするから、もしかしたら行つちやうかも！」

「すごい！　アリサの思いが神様に届いたんだよきつと！」

「うん！」

「は、はは。神様、ねえ……………」

上条と貴音。二人とも溜息をつく。

「わたしね、なんかわりと運がいいみたいなの。こんなチャンスめつたにないなつて……………恵まれてる方だなつて思う……………」

「それは、違うんじゃないか？」

「え？」

「チャンスだとか成功とかいうのはつ、怖がらずに場所に立つて！　やりたいつて願つて！　めいっばい努力をした奴にしかつ！」

ところは移動してバッティングセンターのバッターボックスでフルスイングする上条。そのバットは華麗に球を打ち返した。

「訪れないんだからなッ!!」

「ナイスホームラン!」

「説得力はないかな?」

「なにゆえ! ま、俺は筋金入りの不幸だからな。おまえは実力で選ばれたんだ。それは誇って良いトコだと思っぜ」

「当麻くん……。あ、次来るよ!」

「なぬっ!」



「あーっ! こんなに楽しかったのって久しぶりかな! ほんとありがどう付き合ってくれて……」

「ううん!」

「良いんだよ。感謝されるような事は何もしてないから」

「荷物持ちっつていう男子の仕事もキツチリやっってますしね」

「そもそも軽いし」

「そう言えば歌詞がない曲が一個あったよな。あれはまだ作りかけなのか？」
「うん。まだ途中」

「当麻くん。貴音ちゃん。インデックスちゃん。今日は本当にありがとう！ デビューライブ決まったら必ず知らせるね！」

「ああ」

「ええ！」

「楽しみにしてるよ！」

「うん！」

その時、近くにあった噴水から少女が出てくるが、三人とも気付かない。

「ウンディーネ。杯の象徴。万物より抽出されしものよ」

「………ツ！」

「ん？」

「あ」

「え？」

彼らが気付いた時には、背後に巨大な水柱ができていた。それは渦巻くようにして天に昇っていて、まるで竜巻を見ているような気さえする。

「おっ」

「魔術………」

「な、何?！」

「いつの間に人払いが……?！」

そんな上条達の元へ、しなる鞭のような動きで渦を巻いた水が横薙ぎに振るわれる。が、上条は右手を振るうだけで、そこから先をただの水に戻した。戻された水は地面に落ちる。

「気をつけてとうま! 水のエレメントを使役する術式だよ!」

「知ってるよ。一度触れた幻想異能は忘れねエ」

水。地。風。三人の少女がそれぞれ出てくる。

「誰だよ、テメエらは」

「マリーベート! 足止めして!」

「下がってろよ。二人とも!」

水の魔術師が、水で針を作り。それを飛ばしてくる。

ある程度かわした上条だったが、地の魔術師が上条の片足をがれきで加えこむ。

が、上条は笑って、

「固定してくれてありがとよ」

先程かわした水の針が風の魔術師によって、風に乗って戻ってくる。それは全て、オレンジ炎によってかき消える。

「コンタクトは必要ねーな。X BURNER!!」

放たれた剛炎は、水の魔術師を飲み込んで遠くのビルに穴をあける。

本来、バランスがしつかりとれていないと後方に飛ばされる危険な技だが、今回は片足が地面に固定されていたので、その心配はなかった。

「さて、何者だてめエら」

右手を使わず純粹な力技だけで足を抜きとる上条。その目の前に炎が吹く。

「! この術式!」

「ステイル!! マグヌス!!」

「——なぜ勝手に動いた? 僕の命令を待てと言ったハズだ」

「し、ししよー」

「おい、ステイル。何だこれは!」

「..... Fortis931!!」

「魔法名?! 本気か!」

上条の方へステイルの炎が向かう。それは全て上条に直撃した。

「何を呆けている...アレを確保しろ!」

「[・]」

三魔術師が何かに気付いたようにアリサとインデックスの元へ向かう。その時、ステイルの体を急な脱力感が襲う。

「[・]」

「[・]」

「[・]」

死ぬ気の零地点突破 改

ノッキングするような炎は、そのサイン。ステイルの炎を魔術を、吸収し己の力に変える上条。

「エネー！」

「任せてください！ 主人！」

「くっ！ 魔女狩りの王！！」

「ふっ。行くぞ！」

上条は無造作にイノケンティウス手を伸ばす。ステイルも疑問に思う。吸われる!? と勘繰って勢いよくイノケンティウスが襲い掛かってくるが、上条は依然変わらぬ変わりつつある点として、上条の両手のグローブの甲留め具が変化し、ローマ数字の一に変わっていた。

ブワツ、とその場に水蒸気が立ち込める。まるで水が蒸発したような、そんな雰囲気だった。

「……………吸われていないのか……？　イノケンティウス！」

……反応はない。炎の巨人の代わりにそこにあつたのは、氷の塊だった。

「なっああ!?!」

「死ぬ気の零地点突破　初代エディション」

氷の向こうで笑う上条の両手からは、冷気が出ていた。

「超圧縮エネルギー　“死ぬ気の炎”を発生源ごと凍らせる事ができる。死ぬ気の境地。

『死ぬ気の零地点突破　初代エディション』それを溶かせるのは死ぬ気の炎だけです」

「中にイノケンティウスは閉じ込めてある。もうその魔術は使えないぞ」

「……………ふっ。油断したな」

「あ？　なっ!?!」

上条が左右を見渡して気付いたのは、上条がいた石の屋根を支える柱に炎が灯った事。そして、それが石の柱を落としてきた事だった。

「君の幻想殺しは炎は消せても質量は消せない」

「……………考えたな。だけど、赤点だ」

上条はそのまま地面を踏みしめると、アッパーカットの要領で右手を突き上げる。故意に寸止めされたように見えたそれは、空気を叩き潰し大質量の拳圧を生み出した。まともに直撃した石の柱は砂レベルまで粉碎された。

「さてと、お客さんだぜ？ ステイル」

「!?」

上条がそういうと、ステイルの後ろの石の柱に六本足の乗り物が出現する。その機体からワイヤーが伸び、ステイル付近の地面を破壊する。

「くっ。．．．．．なんだ．．．．．?」

その後も、周囲のビルの壁を走り、数台同じような機体が現れる。

「他にもいるぞー!」

その機体は到着と同時に、円盤状の何かを射出しばら撒く。そして、メインの機体（最初に現れたもの）がワイヤーを射出する。

「!!! かわせつ!!」

そのワイヤーは、円盤に突き刺さると同時、起爆し爆発を起こした。

「うっはー。過激ですなエ」

感心する貴音の横で上条は呆れる。そして、拡声器でも通したような声で、

『．．．我々は学園都市統括理事会に認可を得た民事解決用緩衝部隊である。これより特別介入を開始する』

そこから戦闘が始まったが、関係ないと思い込んでいる上条達は気楽そうだった。

「どっするっ!」

「正直帰りたいです」

「だよな〜」

それでも頭部の死ぬ気の炎が消えていないのは、上条が何かを感じ取っているからだろうか。

と、通りに逃げだしたステイルに向かったワイヤーが、ブツリと切られる。理由は至極簡単。近くのビルの上にもう一人の魔術師、神裂火織の『七閃』だった。

「……………!! 神裂!」

「ステイル! これ以上騒ぎが大きくなると面倒です。撤収を!!」

それを見つけた六本足が、神埼の元へ跳ぶ。ワイヤー同士の戦いが始まったが、どちらも無傷だった。

「……………やりますね」

神裂はそういうと、ビルから飛び降りる。ほとんど音なく着地して、ステイルを呼ぶ。「メアリエ、ジェーン、マリーベート。行くぞ!」

「はい!」

「なあ、ステイル。なんで魔術の連中がアリスを狙うんだ?」

「……………その娘は不和を招く黄金の林檎だ。いずれ僕達魔術サイドと科学サイドの間で戦争を引き起こしかねないってことさ。もちろん、君達二人も同様にね」

「戦争。ねえ」

ステイルが走り去った方を見ながらにやりと笑う上条。その背後に六本足が下りてくる。

「お?」

「なんです?」

その操縦席らしき部分が開かれ、黒髪の少女が出てくる。

「あんた等、統括理事会に認可を得たつつつたよな。俺、そんな話聞いた事ないんだけど?」

「……………我々は学園都市内の秩序を維持すべく、特殊活動に従事している」

「だんまりか」

「……………警告する。あの娘に関わるな。これ以上気安く関われば……………貴様は死ぬ」

「……………あいにく、そういう体質じゃないんでね」

ARISAとENE

——上条家。

第七学区にそびえるタワーマンション「アルコバレーノ」一階のロビー入口の屋根に虹がかかっているのが特徴。その最上階のスイートルーム。それは最上階の敷地をまるまる使い、「二〇LDK」バス・トイレ別を実現している。そのスイートルームを「所有」しているのが、現在少女三人に囲まれている少年。上条当麻である。

「なあ、インデックスさん？」

「何かな、とうま」

「その捨て猫拾ってきたから飼っても良い？　みたいな目で俺を見ないでくれる？　アリサ、人間だから。匿う分には問題ないから」

「そうですね。ところでアリサには心当たりはないんですか？　さっきの連中」

「ううん……………何も……………。そもそもあの人達なんだったの？　水や炎を操つて……………」

「フフン。それはね——魔術……………」

言いかけたインデックスの口を貴音が塞ぐ。

「まじゅ……?」

「エスパ―系の能力者だったのかね。いやー科学じゃ割りきれない力ってあるよな」

「当麻くんも信じてるの!？」

「え? 信じてるって……?」

「えつと、不思議な……科学じゃよく分からない力のこと。そんなものもあるのか
なつて……」

「あるよ? とうまの右手!」

貴音の拘束を脱出したインデックスが言う。

「当麻くんの……右手?」

「ん、ああ。俺のはここの開発なんかじゃなくて、生まれた時からなんだけどな。幻想殺
しっていつてそれが異能の力なら、戦略級の超電磁砲だろうが、奇蹟を起こす神の力で
あつても問答無用で打ち消しちゃう能力なんだよ」

「……アリスはそれを信じているんですか?」

「……実は、わたしもそうなんだ」

「……!？」

「まさか、アリスちゃんもご主人と同じような力を——ッ」

「黙ってるろ」

「ふぎや!」

「わたしが歌を歌う時だけ……、なんか計測できない力みたいなのがあるらしくて。今も桐ヶ丘で定期的に検査を受けてるんだけど。結局……よくわかってなくて。……もしかしたらみんながわたしの歌を聞いてくれるのって、その力のせいじゃないのかなっ……て……」

「それって『天性の才能』って事か?」

「!?!」

「確かにアリサの歌声には何かしらのチカラがあるのかもしれないな。だったら、俺はもうアリサの歌を聞かなくていいのか?」

「え……?」

「右手が邪魔してアリサの歌が届かない俺は、その歌を聞かなくていいのか?」

「い、嫌だよ!?!」

「だろ? だから前向きに考えようぜ? アリサはその才能があつたから仕方なく歌を歌ってるのか? 違うだろ? 歌いたかつたら、その力が手に入ったと考えればいいんだよ」

「でも」

「ここはそういうのが専門の街だ。生まれた時からそんな力を持つてる奴は数えられるほどしかいない。超能力者の七人のうち六人が後天的なんだぜ？」

「え、えと。そうだよ！ アリサの歌は本物だよ！」

「……………ありがとう」

彼女はスフィックスをだっこして、ベランダに出る。最上階は周りに同等の高さの建物はなく、あつたとしても三階、もしくは四階下の高さだ。そのため綺麗な夜景が見える。

「……………でも、それならどうしてあの人達に襲われたんだろう。……………ごめん。巻き込んだじゃったよね……………」

「……………」

「……………わたしね、歌でみんなを幸せにしたかったの。歌っていればわたしも幸せになれる気がした……………。でも、それでもし誰かが傷つくなら、もう……………」

「ねえ。まさかオーディション合格したのに辞退しよう思っただけですよね？」

「……………!! だって……………歌いたって私のワガママだよ。そのせいで周りの人に何かあつたら……………」

「……………だから、諦めるんですか？ 逃げて、自分の夢を殺すんですか。言いなさい！ 本当はどうしたいんですか！」

「……………つ。…歌いたいよ！ だって……………私にはそれしかないんだもん」

アリサの瞳からポロポロと大粒の涙が零れ落ちる。それを見た貴音は微笑んで、

「なら……………歌いなさいよ」

「！」

「やりたい事があつて、やれる力があるならやらなきゃダメです。ですから一緒に考えましょう。安全に歌える方法を」

「……………うん！」

「ならアリサはしばらくここにいればいいんだよー!!」

「ああ。そうだな」

「魔術師は人目があれば手出しできないから！」

「まじゆ……………?」

「敵です。敵」

「ここは広いんだ、部屋も洋室五部屋、和室五部屋あるからな。キッチンもそれなりの大きさだ。ここなら何人増えても大丈夫だつづの。この上条さんに任せときなさい！」

——学園都市某所。マンションの一室。

「——はい。・・・敵は分類不能な能力を使っていました」

『能力ねえ……。今時能力なんていくらでも生み出せるのでしょうか？ 特にこの街では』

「・・・今回の敵は相当に珍しい」

「あらあら『希土^{アースバレット}拡張』・・・レアアースを自在に操るあなたの能力も、十分に珍しいと思うけど？ シヤットアウラ」

「単に少ないという意味でも珍しさではありません。あなたのおっしやる通り鳴護アリスは襲われた。一体何者なのですか？」

『あら、知らないで戦えない？』

「・・・ところで、この回線は本当に安全なのですか？ ノイズを感じるのですが」

「ノイズ？ ！ ああ、そうだったわね」

『どう？ ノイズはなくなった？』

「・・・はい」

「じゃあ、引き続きあの子の警護よろしくね」

「・・・はい」

次の日——

上条達^が通う学校。

「えーか、カミヤん！ アイドルを応援する醍醐味つちゅーんは青田買にあるんや。特にこのご時世ARISAちゃんみたい突然火がついて、あつという間にメジャーになつてしまふんや。ほんま一瞬たりとも氣イ抜けへん世界なんやで〜？」

「ふ〜ん。なに？ 彼女にフられでもしたの？」

「何を言うてんねんカミヤん。僕らは超ラブラブなんやで〜？ 顔かと思つたら話して見て超ビックリ。趣味まであつてもうラブラブ。僕は幸せもんやで、あの時カミヤんが教えてくれへんかつたら、やつと会えた．．．．！ て泣きながら僕に抱きついてくるあの子は見れへんかつたしな」

くねくねする青髪に、土御門が拳を握りしめて、

「カミヤん。俺はモーレッツにこいつに腹が立つてるにやー」

「．．．さいですか．．．」

「はいはい。席について下さーい。授業を始めるのですよ〜」

——その夜

上条家お風呂

「．．．だからね。とうまはいーつも私のこと子供あつかいするんだよー！」

「それはインデックスちゃんが一番可愛いからじゃないかな？」

「えっ何？ 聞こえなかったよ！」

「・・・インデックスちゃんと当麻くんってき。どーゆー関係なの？」

「どうもかたかねがご飯を作って、私が食べるんだよー！」

「へ・・・へえ」

「・・・あと、私が困った時は必ず助けしてくれるかな！ ああ見えて実は結構すごいんだよ！ とうまは」

「うん。それは知ってる。そっか・・・不思議な二人だね・・・でもちよつとステキかな・・・！」

何かに気付いたアリサは湯船を飛び出す。

「アリサ!？」

慌ててインデックスも追いかけると、机に向って何かを書いているアリサがいた。

「どうしたの？」

「歌詞！ 思いついたから・・・」

「へー！ そーやって歌作るんだね！ 見せて見せて！」

「だめ！ はずかしいから〜！」

「え——つ、ずるいよ〜」

上条が洗淨、アリスがふき取り、インデックスが歩いて柵に片付けをする。貴音は今エネとなり、上条が頼んだ調べ物をしているところだ。

「マジか！　そうか、護衛がてら一緒にいきますか。と言つてもそのまま貴音を連れていく訳にはいかなからな……」

「なんで？」

「言つたろ？　アイツは有名人なんだ。青い髪じゃないって言つてもバレる時はバレる。そういつた仕事の人の場合は余計にな。だからこそ、もう一人ぐらい誰か欲しいところだな。誰かいらないか？　頼れそうで一緒に行つてくれる奴」

「……頼れる人か……」

——次の日。

アリスは街中で、壁に背中を預けていた。その隣で上条はイヤホンをした状態でエネと話していた。

『だから、こういう状態なんですよ』

『ほう……。何が原因とか分かるか？』

『それがさっぱりでして、写真とかはあるんですけど……』

「異能。だと思うか？」

『九〇%』

「よし」

「あはは．．．．．」

「やつほ、久しぶり」

アリサと上条にとつての待ち人がようやく来るが、上条自身気付いていない。

「こんにちは」

「こっ．．．．．こんにちは」

「ごめんごめん。あなたに会うって話したら、みんなどうしても会いたっていうから。特にこの娘があなたの大ファンなの」

現れたのは、美琴・黒子・初春・佐天の四人。美琴が佐天を紹介するが、緊張でガチガチになっている

「そんなわけでこんな大人数になっちゃったけど大丈夫かな？」

「じゃあ．．．今日は皆さんは私のマネージャーってことで」

「『くっ。ハハハ!! マネージャーww。ビリビリがー!? ww あっはっはっはww
w』」

「あ!? あ、アンタ! 何してんのよこんな所で!」

「なに？ なにって護衛だよ護衛」

「は？ え？ じゃアリサが言ってたもう一人ってアンタア!？」

「そのアスカみたいな喋り方やめてくらい？」

『みつともないですよ鳴神娘』

「あんたらねエ……特にそのスマホの少女！ アンタスマホごとバンさせてやろうか!？」

『勘弁つですわね!』

———ところは変わって

「………え？ オービット・ポータルって三年前のあのオリオン号の事故を起こした会社なの?」

「はい。社運をかけたスペースプレーンが落ちた事で倒産状態だったんですが、直後に買収されて奇跡の復活! 今回のエンデュミオンを実現に導いたんですよ。ちなみに社長は女の子なんですすよ確か一〇歳ぐらいだったかと」

「えっ! じゃあ当時は七歳ってこと!？」

そんな話をする美琴達の横で佐天はアリサと楽しそうに話している。

「そんなのただのお飾りじゃありませんの? 大体『ゴスロリ美少女社長』なんて盛り過

ぎて胡散臭いすわ」

「そんなあゝ。『包帯ツインテール車いす』ほどじゃないですよ?」

「初春ウゝ?」

「混じれないな」

『すねゝ』

「で、ここからは都市伝説なんですけど。彼女は実は宣伝用ホログラフィーとかロボツトじゃないかっていう話があるんですよ」

「はっ。マユツバですわねゝ」

「あながち嘘じゃないかもですよ! 思いませんか? なんかお人形さんっぽいつていうか」

その時、美琴が一つの“人形”を見つける。

その人形は立ち上がると、アリサに向かって、

「・・・あなたの歌、好きよ。こんなに気に入ったのはジェニー・リンド以来かしら。・・・
がんばってね」

それだけ言うと、どこかへ去って行った。

「・・・今の」

「えー~~~~っ!」

初春の言葉に上条、貴音以外の全員が驚く。

「エネ、ジェニー・リンドって」

『古臭いですねエ。二百年ぐらい前じゃなかったでしたっけ?』

「詳しい事は俺もしらねーよ」

上条は黒子に、スマホを差し出すと、

「じゃあ俺は周辺警護に出かけてくるわ。エネをよろしく」

「分かりましたの!」

「スマホに名前付けてんの?」

「どうとも思え」

そういうと上条は、暗闇の中へ消えていった。

『(主)人……?』

イベントが始まり、美琴・初春・佐天の三名もなぜか衣装を着てステージにいた。そして、上条が同時刻地下に到着した瞬間。ステージ、いやビル全体の電気が落ちる。

「!?!」

「照明が……」

「……!?!」

「なにになに？」

「停電？」

「どーなってるの？」

「やだあ」

「………！」

——地下。

「貴様！　なにが目的でこんな所にもぐりこんだ!？」

シャットアウラという名前の少女が、男か女か分からない（おそらく男）と対峙していた。

「………！」

「鳴護アリサは我々黒鴉部隊の庇護下にある！　干渉するなら………全力で排除する!!」

その声を合図に、肉弾戦が繰り広げられる。一度は優勢に見えたシャットアウラだが、男の攻撃で時に尻をつけてしまう。そして追撃が迫った瞬間。

「うつほほーいつ！　つとー！」

強烈なドロップキックで、男が吹っ飛んで行った。

「………!!?」

「ハイハイピッチャービビってるウ？」

「……………!! 貴様……何故……」

『クロウ7からクロウリーダーへ!』

「なんだ!!」

『Dブロック基部に爆弾を発見! それも複数個です!』

「爆弾!?! すぐに退避しろ! 他のユニットは鳴護アリサを誘導しろ!」

「爆弾? 過激だなア。あんた等」

男が迫って来るが、上条は物怖じすることなく、本気でぶん殴り、吹き飛ばす。だが、次の瞬間、男は取り出したスイッチを押してしまった。

「……………!!! 待つ……」

基部が破壊されたビルはバランスを崩す。それによりイベント会場にも被害が及ぶ。

(爆発……………!?) 「黒子! みんなを外へ!」

「初春! 佐天さん行きますわよ!」

「わっ!」

黒子が消えた後、上からステージに落ちてきた鉄骨を、美琴の電撃で防ぐ。

が、

「! ぜ……………全部はムリ……! 間に合わない!」

「!」

「なるほど、こうなることを見越して、ご主人は私をここへ置いたんでしょかねー？」
その声は何よりも透き通って聞こえた。爆発や崩壊音が全て止み、ありとあらゆる構造物がゆっくり淡く光って、瓦礫なども空中で停止していた。

「な、何………が………?」

「全く、欠陥工事は訴えなくてはいけませんね。いくらぐらい分捕れるでしょうか」

全員がその姿を目撃する。両手を腰に当て、短い青いツインテールをユラユラ揺らし、足の先がノイズのように欠けた青いジャージの少女の姿を。

「ENE………?!」

「おんどりやー! 邪魔ですよー! ホラホラ退かないと瓦礫落としますよー?」

ヌハハハツ! と笑うエネに皆、目を見開く。それもそのはず、少女は有名人だったのだ。学園都市で誰も知らない人はいないとまで言われた超有名人。どのテレビ番組にも出演せず、出るのは動画の中のみ、一体どれだけの番組が彼女の出演を希望したかもわからない。

「お姉様!」

「黒子………!」

「皆さ………ん………? え、ENE?」

瓦礫はどどん人がいない所へと落ちていく。これだけの量の物質を一つ一つ別々に動かすという事は、超能力者に分類されても良いほどの腕なのだ。美琴は、その様子を感心するように見ていた。憧れを見つけた、当時の黒子のように。

「ENEさんが助けてくれた!」

「いてくれたことが奇蹟だ!」

「ENEさんがいなかったら……!」

「ありがとう!!」

「?……ッ! う、うう……。あわわわ」

急に自分のしたことに気付いたエネは、慌てて地面に降り、アリサの後ろに隠れる。

「エネちゃん?」

「ちよつと匿つて。マズイ、です。ご主人に怒られます」

「あ、あはは」

——地下。

シャットアウラが目覚めると。目の前には少年が座っていた。先程現れた少年、上条当麻だった。

「ん、起きたか」

「あ、ああ」

「上の状況分かるか？」

「……ちよつと待つてろ」

どこかに連絡を取り始めたシャットアウラ。

「そうか。鳴護アリサは無事なんだな。……死傷者は？ ……ゼロ!? ……」

わかった。私は自分で脱出する」

「さっきの爆発で、上の連中は無事だつて？」

「ああ。全員無事だ。観客も、鳴護アリサも、……私の黒鴉部隊もな」

「そっか。まさに「奇蹟」つてやつだな」

その言葉を聞いた瞬間。シャットアウラによつて上条は首を壁に打ち付けられる。

「私の前で「その言葉」を口にするな!!」

「ッ!？」

「偶然の結果がたまたまその方向に向いただけだ。あるのは量子力学的な偶然の偏差と「見えざる手」を求める人の欲望だけ、人は怠惰で愚かだ。本当に必要なのは「秩序」だ」

「あんた。ふざけてんじゃねーよ」

「何だと？」

「奇蹟は存在する。しかもそれは偶然じゃなく、な!!」

「キ、サマ………」

「『人が努力し必然的に掴む大きな成功』それが奇蹟ってやつだ!! 確かに人は怠惰かもしれない! けど、人が起こした『奇蹟』を否定するって事は、その人の生を、努力を踏み躪るって事なんだぞ!」

「くっ………」

「意見は絶対にかみ合わないみたいだな」

——その後

『第七学区内シヨツピングモールでの爆発事故のニュースです。シヨツピングモール地
下の施設でなんらかの爆発があり、アンチスキル警備員・ジャッジメント風紀委員の協力のもと原因の調査が進めら
れています。事故当時歌手のARISAさんのライブイベントが行われており……、
およそ一五〇人が会場にいましたが、一人の死傷者もなく……』

「奇蹟じゃん!」

「!」

「奇蹟?」

「奇蹟でしょ! あれは絶対。ENEとARISAのコラボが見れたんだぜ!」

「ARRISAさまさま——！」

「まさに奇蹟ね！」

その言葉を聞いたアリサは複雑な気持ちになるが、すぐにそれも晴れる、足元で膝を抱えて魂が抜けている貴音のおかげで。

「うっわ。恥ずかしい。何あのみんなの歓喜の視線。嫌ですよあれが見たくないからテレビ出演は断って来たつてのに……」

「……アリサ、貴音」

「！ 当麻くん」

「ご主人」

「……大丈夫か？」

「……奇蹟ねえ」

「なんか、ヘンだよね……。本当に奇蹟なら、そもそもあんな事故は起こらないんじゃないかって」

「いやいやあれが起きて、何の被害も出なかったことが奇蹟なんですよ。おもに私のおかげですけどっ！」

「貴音……」

「あはは。そうだね。今回の事は、奇蹟でも何でもないのかな」

「いや、奇蹟は起きたんだ。いや、貴音が起こしたんだろ？　奇蹟」

「ええ」

「え？」

「俺はさ。これは俺の見方なんだけど、俺は奇蹟を誰かの努力の上に成し得るものって思ってる。だから、努力した人は報われるべきだし、偶然のせいにして努力した人をほめないのは良くないと思うけど、それでも。俺達は『奇蹟』って言葉を信じたいんだと思う」

「当麻くん……。……。ありがとう。私……。わたしががんばるね……。見ててくれる？」

「……。ああ！」

——そして

『いよいよ明後日はエンデュミオンの完成披露式典ですね』

『はい！　当日は我がオービット・ポータル社の総力をあげて、皆様に奇蹟とはいかなるものかお見せできると思っています』

『『奇蹟の歌声』……。平凡だけど実行性が伴えばこれだけ強いコピーはないわ。そう思わ

ない?」

「……いえ。私は奇跡など信じていませんので」

「……本当につまらない子ねえ。オリオン号と共に地に落ちるハズだったオービット・ポータルの命脈を保ったのは「八八の奇蹟」のイメーヅよ。ある意味『奇蹟』は我が社最大の売り物なのよ」

「……オリオン号の事件は決して『奇蹟』などではありません!」

「八八人全員が助かってるのに? あれが『奇蹟』でなくて何?」

「……!」

「まあ……、私が買ったのはあなたの「戦闘力」 信仰までよこせとは言わないわ……
フフフ」

「……ッ。失礼します」

シャツトアウラが去った後、レデイリーはエンデュミオンの模型を触る。

「フフフ……、これで……、全ての準備が整ったわ……。私の希望……私の夢が……
ようやく叶う……」

鳴護アリサ

「いよいよだね！　アリサ！」

「うん！　インデックスちゃん達が助けてくれたおかげだよ！　今日は私がおごるからなんでも食べて！」

「ほんと!?　ウエイトレスさ——ん！」

「……はーい！」

「……いやー。カミやんの同棲相手が増えたとは聞いていたが……、よりによってあの子とは、さすがカミやんぜよ」

夜の公園で、上条・貴音・土御門の三人は話していた。

「あの子……」

「……つてことは土御門。お前は知ってるんだな？　アリサが狙われる理由」

「相変わらず裏で暗躍しているんですね……」

「あの子は「聖人」……、もしくはそれと同等の力を持っているとみなされているからです」

「神裂。おま、暗闇から突然出てくるなよ．．．！」

「吃驚するでしょうが．．．！」

「．．．．．。暫定で第九位、完全に覚醒すれば私を上回る力を持つ可能性も」

「アリサが聖人．．．？」

「ま、あくまで推論。証明も何もされていないけどにやー」

「ちよ、ちよつと待つて下さい。学園都市で能力開発を受けた生徒が魔術を使ったら．．．、土御門みたいに全身から血が吹き出してしまうのでは？」

「そーなるハズなんだけどにやー」

「今回はそのようなことは起こりませんでした。なぜか．．それは私にもわかりません。だからこそ監視対象になったと言えます」

「．．．．．」

「土御門、あなたの見解は？」

「どーだかにやー。そもそも「聖人」の定義もあいまいだし。ねーちんが色々細かく隅から隅までズズズイーつと調べさせてくれればにやー？」

「!? じよ冗談じゃありません！」

「まあ、それがなんであれ。学園都市はあの手の資質や能力を解剖学的に解明して将来的には利用したいらしいぜよ。特にあのロリっ子社長はそのプロジェクトの協力者ら

し。」

「あの子は良いツインテールだったな」

「考えてみ、カミヤん貴音っち。科学の力でねーちんみたいなのが切った貼ったで作れる事になったらどーなるか」

「……………!! 最悪ですね」

「どういう意味です」

「でもって魔術サイドはそれを見過ごすつもりはないというわけだにやー。科学の総本山で聖なる神の子の写し見が大量に生まれるなんて、あちらさんには我慢ならぬだろーからにやー」

「必要悪の教会からは一刻も早く彼女を聖人だと証明し、確保せよ。との命令です」

「……………!!」

「そうかそれで。あの公園での一幕はそういう事だったのね。科学と魔術のアリサを巡る綱引き」

———とところは戻ってファミレス。

「はい。これ！」

「？」

「あの歌の歌詞だよ！ 一緒に歌おうって約束したでしょ」

「わあ——！ 一杯おめでどうだねアリサ！ かんぱ——い！」

「えへへ、ありがとう！ 乾杯！」

インデックスが口にした飲み物が不自然に凍ったことによつて、インデックスの口が塞がる。

「……!!？」

「……インデックスちゃん!？」

「まあ二人三脚を？」

「しかも御坂さんとだなんて！」

「ええ！ どうしてもくと頼まれてしまつて断る訳にも……」

話をしていた少女三人の目の前で、ファミレスのガラスが割れる。

「!？」

「な……何事ですの!？」

三人の少女が飛び出してきた後に店内から転がり出てきたのは、白いシスターだった。

「ふ……も……っ!!」

「ひええっ!!」

「ぶいもい！ もいもいもいもい！」

「・・・え？ なんですって？」

——公園

「・・・ん？ インデックス？ どうした？ ・・・！！? アリサが!？」

「ご主人！」

「ああ。悪い土御門。ちよつと行つてくる！」

「了解だぜい」

エネウイングが装着された上条は銃弾より速く飛び出した。

「アリサの居場所は分かるか!？」

『任せてくださいご主人。・・・いました！ 高速道路に！ ステイヌと魔女三人と一緒に』

「了解！」

空気を叩き潰し、今一度上条は加速する。

——高速

「ししよお、車の中で煙草は駄目なのです。背が伸びなくなるのですよお」

「かまわないよ。もう十分伸びたからね」

「違うのですー！ 私がですのー！」

その瞬間。高速道路のど真ん中、ステイル達が乗る車の十メートル先に何か落ちてきた。

「うわっ！」

「メアリエ！ 避けるー！」

「がつてんですー！」

なんとかそれを避けたステイル達だったが、ステイルは見た。落ちてきたのは兵器でも機体でもなく。生身の人間……上条当麻である事を。

「なッ!!」

「ステエエエエエエイル!!!」

ボゴオ!! と高速の地面を破壊して大きな翼が持ち上がる。

「し、しししししよお！ あれなんですか！」

「神ッき。学園都市の、科学のな」

「待ちやがれエッ!!」

バゴオンッ!! と、無理やり空間を引き裂き空気を叩き潰す普段聞く事ない異常な音。その音が響いた瞬間には上条の体は車の屋根に乗っていた。

「上条……当麻……」

「よう、ステイル。アリサは返してもらおうぜ？」

「くっ」

「無駄無駄。この距離じゃむやみに魔術は使えなッ……おうわ！」

ステイルのそこまで力のない足払いと、車の急ハンドルで上条の体が投げ出されるが、そこはトンネル。好都合だと言わんばかりに、壁を蹴り。さらに加速する。

「オンドウルルラギツタンデイスカー!!!」

『もう何言ってるかわかりませんよご主人？』

上条はエネウイングをしまい。さらに加速する。そして天井付近でこう一言。

「オペレーションX」

『了解しましたご主人。X BURNER 発射シークエンスを開始します！』

速攻でゲージを合わせると、上条は天井を蹴った。

「X BURNER エアー!!」

ステイル達の車を超え、その眼の前の地面を抉る。そこに落ちた車が横転し、停止した。

「さて、ステイル君？ アリサを返してもらおうか？ それとも今ここで、オルソラ教会の再現をしても良いんだぜ？」

「あいにく先程新たな命令が下ったんでね。「あれ」が何か分かるか？」

「……宇宙エレベーター「エンデュミオン」だろ？」

「違う。シユメールのジグラット、バベルの塔、万里の長城、ギゼーのピラミッド……合理性を超えた規模を持った建築物は——例え純粹に科学的に作られていても存在した時点で魔術的意味合いを帯びてしまうのさ。問題なのはそこに「聖人」を組み込んで……超規模魔術装置にしようとした人間がいることだ」

「レデイリーⅡタングルロード。だな？」

上条がそういつた瞬間。どこからともなく現れた黒鴉部隊の六本足がアリサを掴む。

「シャットアウラⅡセクウエンツィア!!」

『来るなっ!!』

「アリサちゃんを離しなさいっ! シャットアウラ!!」

『関係などないくせに……何故お前は邪魔をする!!』

その言葉の後に、円盤が飛び出してくる。

(まずい!)「逃げろ。上条当麻!」

ステイルがそういつた瞬間。上条の左隣りで金属音がする。見ると、ワイヤーが円盤に刺さっていた。

そしてそれは空気を吸い込むと一気に爆発した。

その後には上条の姿はなく、あつたのは燃え尽きようとする紙だけだった。

約束の地エンデュミオン

オービット・ポータル社。

「やっぱり、あなた達は引き合つてしまうのね。……三年前のあの日、オリオン号に乗っていたのは乗員乗客八八人。そして事故の直後生存者八八人が確認された。つまり「全員無事救出」誰もがこれを「奇蹟」と言つたわ。でも本当は一人だけ死亡者がいた——
——……オリオン号の機長ダイダロスⅡセクウエンツィア」

「……………」

「……そう、あなたの父親。でもその事実が確認された時にはもう手遅れ、世界は「奇蹟」に湧き——八九人目の存在は隠蔽され……そして「奇蹟」だけが残つた。八八人しかいないはずの機体に突如として現れ「奇蹟」を演出した少女——……それがこの娘よ」

「あなたはあくまで奇蹟だと言い張るのか」

「だって本当は誰も助かるはずなかつたのよ。あの事故は」

「！ まさか……」

「地上じゃ無理でも宇宙なら上手くいくと思つたのよ。なのにあなたの父親以外はみんな

な助かるなんて、これが奇蹟でなくて何？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！」

「まあ思わぬ副産物ができたのだから、ある意味成功と言えるのかしらね」

「おまえ・・・・なの・・・・？ おまえのせいで・・・・父は・・・・っ」

シャツトアウラは後ろ越しからナイフを取り出すと、レイリーの心臓を的確に突き指す。

「・・・・・・・・っ。こいつは・・・・こいつは・・・・なんなんだ・・・・」

その時、天井から男と女が下りてくる。そして、少女の笑い声が部屋に響いた。

慌てて振り返ると、そこで刺されたはずのレイリーが、起き上がったのだ。

それと同時に、襲い掛かってきた男の顔にシャツトアウラは見覚えがあった。ナイフを弾き飛ばされ、女の方に羽交い絞めにされる。

「ナイフで刺されるのは一六回目・・・・相変わらず痛くて苦しいわ・・・・」

「・・・・・・・・、化け物め・・・・！」

「・・・・あらそう？ あなた達だつてたいがいだと思うけど。あなたは生かしておいてあげる。本当の奇蹟が起きる瞬間をとくどご覧なさいな」

「・・・・貴様が何者でも何を企んでいても、絶対に潰してやる・・・・絶対にだ！！」

「・・・・期待しているわ」

そして、シャットアウトは女の方に羽交い絞めにされたままどこかへ連れて行かれた。た。

「さて……、あとはあなたね」

「——……」

「お・は・よ。あなたにお願いがあるの。鳴護アリサさん——……」

——次の日。

上条当麻と榎本貴音は行方不明になっていた。

「とうまがどこに行ったか短髪は知らないの？」

「アンタが知らないのに私が知ってると思う？ 私は昨日アイツに会ってもいないのよ」

「……はあ。全く仕方がない彼は」

「どうせ宇宙にでも行ってるんだにやー」

「……私も行くわよ」

「……とうまを怒りに行かなくちゃ」

「地下のリニアトンネルや資材搬入路はどうなってるじゃん？」

「すべて侵入ハッキングされ封鎖されています」

「……と、いうことは……今使えるのはこの橋のみ……か」

——エンデュミオンでは、ちょうどアリサのライブが始まった。

「……宇宙……。生と死……。有限と無限……。全てが交差する空間では地上とは違う法則が働く……。人々の熱狂は神々の宴に捧げる供物。その息吹がエンデュミオンの永久の呪いを打ち破る!!」

「うっは。無茶苦茶な巨大な魔法陣。一体何の為かなんて想像つかないぐらい恐ろしい力ですねえ」

「誰!？」

「私ですか？ 私は榎本貴音。学園都市裏書庫の科学レベル天使」
「れっ……。レベル7？」

その頃。地上では警備員がロボット兵器と戦っていた。

「応援は!？」

「まだしばらくかかるそうです！」

(どうする……!? 無茶を承知で突入するか……!?)

その時、何かが出現する音と同時に、車椅子に乗った少女とその背もたれに足をかけた少女が現れる。

「———つたく。勝手に置き去りにするとか———……どつかピントかズレてんのよね！ あいつのやる事って!!」

美琴の代名詞。超電磁砲が放たれる。それは余裕でロボット兵器を粉碎した。

「ありがとね。黒子」

「お姉様……!!」

「……ねえ黒子。頼みがあるの。あんたはここを守って」

「! お姉様、まさか……」

「あんたにしか頼めないの。だからお願い！」

「お姉様！」

「頼んだわよ!!」

———中継ステーション

「……下は大騒ぎみたいね」

「ですね」

「・・・でももう間に合わないわ」

「それはどうかな」

「！」

二人の少女が振り向く。そこにいたのはシャツトアウラだった。

「・・・バカな子！ 来てしまったの？」

その問いかけに答えたのは一発の銃弾だった。

「・・・言っただはずだ。絶対に許さないと!!」

球切れになるまで銃が乱射される。レデイリーの体のあちこちに穴があくが、少女は暫くすると話し出す。

「・・・・・・・・・・。そう・・・、もう千年は生きてかしらね・・・。オリオン号の実験も結局失敗・・・でも思わぬ副産物が生まれたわ・・・それがアリサよ。あの奇跡の力で・・・私は死ぬことができる!!」

「・・・・・・・・・・」

「さあ一緒に終わりましたよう!! この星も・・・何もかも! みんな道連れにしてあげるわ!!」

「させるかッ!!」

今一度銃を構えるシャットアウラだが、先日の爆発事件の時のあの男が、また邪魔をしに来た。

戦闘に入る双方だったが、突如銃声が響く。

そして、その場に平坦な声が響いた。

「どっちもガキですね」

「……は？」

「……ご主人。レディリーⅡタングルロードの方頼みます」

「はいはい」

その声はどこからともなく現れた少年、上条当麻はレディリーの頭にチョップをす
る。

「いたっ！」

「不死身って言っても、やっぱり痛覚はあるよな」

「ほらほら、お父さんの仇、とりたいんでしよう!？」

ドゴオツ!! と轟音が響き、シャットアウラの体が吹き飛んで二十メートルほどノー
バウンドで転がっていく。

「さて、こっちはこっちでゆっくり話そうか。レディリーⅡタングルロード」

「何なのよ。あなた、邪魔しないで!!」

「自殺しようとする奴を止めない奴がどこにいる?」

「うるさい! 私はもう十分生きたっ!!」

上条は無言でレディリーの口を右手で塞ぐと、何かを紡ぐように呪文を唱える。そして、右手を離れたとき、その手に乗っていたのはレディリーにとって忌まわしい記憶の果実だった。

「アンブロシア……か……。これが原因か」

「そ、それ……」

「お前の中の不老不死の原因だ」

「なら!!」

慌てるようにシャツトアウラの銃に手を伸ばすレディリーの腰をおさえつける上条。

「なんで! なんで!!」

「お前は確かに長生きしたのかも知れねエ。千年以上もな。だけどそれはただの生の積み重ね。経験を積み重ねてきたにすぎねえだろうが。そんなのは生きているうちには入らない。お前はまだ何も知らない子供だよ」

「じゃあ! どうしろっていうのよ!」

「それはお前が決める事だ。そうじゃないと意味がない。だけど俺から言えることが一

つだけある」

「・・・なによ」

「お前の長い長い悪夢は終わった。前を向けばお前の『人生』が始まるぞ」

「・・・」

「どうだ？ 生きたいと思うか？」

「・・・その代わり、あなたが面倒みなさい・・・」

「ん？」

「あなたがその気にさせたんだから！ あなたが私の人生の責任もつてよね!!」

「・・・マジですか？」

——貴音の場合。

「ねえあんた。つだけ答えなさい。あんたはお父さんが好きだったの？」

「・・・お前の答える義理はない！」

「・・・あなたの父親は「奇蹟」が好きそうなのにね」

「私の前で「その言葉」を口にするな!!」

銃が撃たれるが、貴音は避けようともしない。

「私を殺したいのなら、銀の弾頭シルバールレットじゃないと無理ですよ」貴音は、にっこりと笑つて、「私やご主人はね。『奇蹟』は誰かの努力の上に出来る大きな成功だと思つています。

三年前の事故のあの日、あなたの父親は『奇蹟』を起こしたんです」

「違う！ 『奇蹟』なんてものじゃない！ 父さんは……」

「周りがみんなもう駄目だつて諦めてる中で、あなたの父親はたった一人でも頑張つて、みんなを助けたんです。 アンタを助けたんですよッ！」

「それをあいつ等が……」

「アンタがその、親父さんが起こした奇蹟を否定するつて事は、アンタ自身が親父さんを否定するつて事です！ アンタは、逃げてんのよ。自分の父親が死んだつていう現実から逃げて、三年前の『奇蹟』を否定し続けて……。それがアンタ自身がもう一度父親を殺してゐるつて事に何で気付かないのよ!!」

「黙れ黙れ黙れ！」

「うっさい。黙るのはあんたの方だよ大馬鹿者が」

「これ以上、私の邪魔をするなら貴様も容赦しないぞ！」

「娘に殺されるつて哀しいでしょうねエ、お父さん。あんたはいつまでそうやるの？もしかして自分では止まれないんですか。そうですか」

銃弾を体に受けながら貴音は踏み込む。

「そのみじめな幻想・・・私がぶち殺して上げますよツツ!!」
原始的な暴力の音がその場に響いた。

「———どうする? このエンデュミオン」

「そうですね・・・。レデイリーはどうしたいですか? あなたの悪夢の象徴ですけど」
「残しておいても良いんじゃない? みんな宇宙に興味あるみたいだし」

「だよな。だけど、魔術師が狙ってくるかもな。魔術的な意味をもった巨大な構造物って危ないんだろ?」

「じゃあ聞くけど。万里の長城に魔術師が行く?」

「いかないな」

「観光地ですし」

「それにここは学園都市。魔術師がほいほい入って来れる所じゃないわ」
上条と貴音は顔を見合わせてイギリス清教の二人を思い浮かべる。

「さて、これからどうするか」

「とおおおおおまあああああああ!!」

「ゲッ! インデックス!!」

「悪タイプ威力八〇の技!!」

「かみくだく!?!」

上条の頭にインデックスが飛び付き、その頭にかみつく。

「ギャアアアアアア!! 何!?! なんだよっ! なんですか!!」

「とうま、また一人で先走ったね!」

「私もいたんですが」

「たかねとうまはもう一緒にカウントだよっ! とうまはどうしてこう誰かに頼ろうとはしないのかな!?! 私も魔術の専門家だよ! 今回の敵は……レディリー!! タングルロード!! あなたのせい!!」

「ま、待つて待つて。私はもうこの魔術を発動させる気はないわよ……!」

「インデックス。もう終わったんだ」

「……終わったの?」

「終わったんです」

「……結局。当麻はいつも通り一人で突っ走って、終わらせたんだね」

「まーな」

エピソード エンデュミオンの奇蹟

地上に帰ってきた上条は、アリサ、シャットアウラ、レデイリーの検査の間。病室で待っていた。

「それで？ カミヤんは今回の事で一体何本フラグを立てたんだにやー？」

「フラグ？ 何の事だよ。それよりアリサとかは大丈夫なんだろうな？」

「問題ないぜよ。貴音つちとインデックスの手によつて、アリサとシャットアウラの完全分離に成功したらしい。シャットアウラに音楽を聴く力は戻っているし、アリサに聖人としての力はもうない。仮に誰かに追われる事があつたら、それは熱狂的なファンだろうさ」

「うん。それはそれで心配だな……とりあえず、もう魔術師に狙われる事はないんだな」

「ああ。それと、レデイリーⅡタングルロードだが、彼女は必要悪の教会が預かることになった。まったく、オルソラやら天草式やら……アニエーゼ部隊もそのうち必要悪の教会の傘下になつたりしてにやー」

「ありえない話じゃないな」

「そうだカミヤん。レディリーはカミヤんが保護者のようなものなんだろう？ 彼女の安全が確認されるまでうちが預かるんだが……」そこで土御門は、急に真顔になって、「いつかカミヤんちに裸リボンのレディリーが届くかもだぜい」

「いやいや。普通に引き渡せよ」

「元々学園都市の人間だから住むのに苦労はしないと思うぜい」

「そうか」

「それじゃあ邪魔ものは退散するとするぜい」

土御門が去った後、エネがするりとスマホから出てくる。

「終わりましたね。エンデュミオン」

「あの宇宙そらまでのびる高き塔が、学園都市の象徴になればいいな」

「それでね。とうまはいつも無茶をして、大怪我して帰ってくるんだよ？」

「そうなんだ……でも、そういうところがカッコいいよね」

「えええ!? そ、それって……」

廊下の方から声がする。聞きなれた声だ。その会話の後、病室のドアがノックされる。

「どうぞー」

扉が開くと見慣れた修道服のインデックスと、今回の事件の中心の少女。鳴護アリス

が立っていた。

「よう。インデックス、アリサ。おはよう？」

「とうまー！」

「当麻くん！」

少女達と暫く雑談をした後、上条はアリサが学生寮に戻る時に一緒についていくと言いだしたインデックスを見送って、貴音と二人きりになった。

「こーやって二人きりになるのも久しぶりだな」

「ですね。そう言えばご主人。原作CPは何が一番だと思えます？」

「ん〜？」

「上インですか？ 上黒ですか？ 上アリですか？ 上秋ですか？ 上オテイですか？」

「？」

「おい。貴音。何でそこに上琴が入ってねえんだ？」

「は？ ご主人。あんなわがままでツンツンな思いが主人公に伝わると思ってるんですか？ 上琴はあつたとしても、絶対出来る事はないですよッ！」

「ほう。いいぜ、そのふざけた幻想をぶち殺す!!」

「へ（o）へ いいぜ！」

—△

てめえが何でも

思い通りに出来るってんなら

(^o^)

三 シュツ

三

(^o^)

まずはそのふざけた幻想をぶち殺

す!!

「ゆ、由緒正しきそげぶポーズツツ!! だが俺は負けられねえんだよ貴音。死ぬ気で
前に認めさせてやるぜ! 上琴の存在をなツツ!!」

「やるっていうんですか? ご主人。いいでしょう。」

上琴? みつくみくにしてやんよ

(・ ω ・) || つ || つ

(つ) ≡ つ || つ

／ (ババババ

／ ?)

┌

「お前さつきからAA使い過ぎだよ」

「だったらご主人も使ったらどうですか？」

「無理だね」

「それじゃあ……」

「互いの意見が合致するまで」

「バトルと行きますかツツ!!!」

上条達の長い長い夜は始まったばかりである。

「インデックスちゃんは何でこっちに来たの？」

「アリスの家を知っておくためなんだよ！ いつでも遊びに来れるようにね！」

「……そう、だね。私も遊びに行くよ！」

大覇星祭編

大三者から見た準備期間

Parent's View

Point.

大覇星祭。

九月十九日から二五日の七日間にわたって学園都市で催される行事で、簡単に言えば大規模な運動会だ。その内容は、街に存在する全ての学校が合同で体育祭を行う、というものなのだが、何しろここは東京西部を占める超能力開発機関で、総人口二三〇万人弱、そのうちの八割が学生だというのだから、行事のスケールは半端ではない。

今日は開催日の十九日。

平日の早朝であるにも拘らず、すでに街の中は大覇星祭参加者の父兄達で溢れ返っている。学園都市の統括理事会が外部見学者対策の一環として一般車の乗り入れを禁止していただければ、街中で無意味な渋滞が何十キロと伸びていた事だろう。こういう時は歩いた方が早いし、対応策として、学園都市では列車や地下鉄などの臨時便を増やすと共に、無人で走る自律バスなども用意している。あまり過密ダイヤに運転手の数が足り

ないというのだから驚きだ。

どこもかしこもラッシュアワーの駅のホームのような有様だが、それほど大覇星祭という一大イベントの人気は高い。

年に数回だけ学園都市が一般公開される特別な日であり、しかも内容といえば映画に出てくるような超能力を扱う者同士がしのぎを削り合うというもの。競技種目がごく普通の体育祭とはいえ、『テレビなんかじゃ有名だけど、実際に見た事はない』という身近な不思議『超能力』に触れられるというのは、学園都市の園の人間からすれば相当の刺激と魅力を誇るようだ。

と。

そんな近未来な街を、二人組の男女が歩いていた。

「おおつ、母さん母さん。やはり何度来ても圧倒されるなあ、学園都市つてのというのは。子供の頃にクレヨンで描いた世界がそのまま広がっているような気がするよ。これでチューブの中を走る列車とか、空飛ぶスケボーなんかがあると完璧なんだが……」

そう言ったのは上条刀夜。とある少年の父親である。地味なスラックスに、袖を肩まで捲り上げたワイシャツ。贈り物らしき実用性に欠けるセンスのネクタイは緩めてあり、履き潰した革靴の底がペタンペタンと情けない音を立てている。

その刀夜に対して、

「あらあら。私の思い描く近未来にはまだ届いていない気がするのだけど。だって巨大宇宙戦艦や人型兵器が連合とか帝国とかに分かれて戦ったり赤や青のカラフルなビームが飛んだり宇宙空間なのにピキウンピキウン音が鳴ったり shouldn't でしょう？ あと蛍光灯みたいなサーベルも見てみたいのに」

答えたのは、上条詩菜。とある少年の母親である。刀夜に比べて二回りぐらい若く見え、服装も並んで歩くには違和感を覚えさせる。絹か何か、薄く滑らかな生地で繊細に作られた、足首まである長いワンピース。その上からゆるりと羽織ったカーディガン。弁当でも入っているのか、腕には籐のバスケットの取っ手を通してある。頭に乗った鍔広の帽子もあいまって、やたら上流階級な匂いを漂わせている。

二人は夫婦というより、貴族の令嬢と雇われの運転手のように見えた。彼らは現在自分達の息子も参加する開会式の会場へと、のんびり足を運んでいる。

「母さん、それが『近』未来と呼ばれるのはまだまだまずと先の時代だろう。高熱源ブレードぐらいならこの街にはありそうだが……まあ、物騒な話はやめにしよう」
こういう雰囲気は良いものだ。壊すのは無粋というものだろう」

空を見上げれば、ポンポンと白い煙だけの花火が上がっている。所々に飛んでいるヘリコプターはマスコミのものか。大覇星祭は一般的にも開放され、テレビ局の中継も許可されている。競技場には解説席が設けられ、街のあちこちには野外スタジオが臨時で

建てられている。その視聴率はワールドカップに匹敵するほどなのだから、彼らも必死なのだろう、と企業人の刀夜は適当に考えた。

その時、そんな夫婦の前を、何者かが横切った。

ドラム缶のような自立警備ロボットのの上に、メイド服を着た少女がちよこんと座っている。彼女は野球場の売り子のように、お腹の所で支えたトレイを、首の後ろに回した紐で固定しながら、

「あー、あー。メイド弁当、学園都市名物メイド弁当はいらんかねー。繚乱家政女学校のメイド弁当、より正確にはメイド見習い弁当はいらんかねー」

あまりの売り文句に唾然としている二人の前で、メイドを乗せた自立警備ロボットはスーっと音もなく右から左へ走り去っていく。しかもメイド弁当と謳っている割には、中身は純和風の弁当を揃えているように見えた。

詩菜は、あらあら、とほっぺたに片手を当てて、

「………学園都市って色々な学校があるのよねえ」

刀夜も歩きながら、消えていくメイド（より正確には見習い）少女に目をやり、

「まあ世界中のあらゆる教育機関を凝縮させたような場所だからね。世界各国の家政学の技術知識だってあるんだろうさ。しかしメイドが街を歩いていても違和感のない風景つてのも恐ろしいものだな——つと、うわっ!？」

集中を欠いていた刀夜は、うっかり誰かと衝突した。

「きやつ！ つて、すみませんぶつかっちゃって」

告げたのは、見た目大学生ぐらいの女性だった。淡い灰色のワイシャツに、薄い生地のできた漆黒の細長いパンツ。デザインはシンプルだが、一目で高級ブランドの匂いを感じさせる一品で、この格好なら社長室の椅子に座っていてもおかしくない印象すらある。が、衣服に反して中身に堅い雰囲気はなく、むしろ不良少女が無理矢理着ているような印象があった。いつもだらけたスーツのまま社運をかけた取り引きに向かう刀夜とは対照的な女性だ。

刀夜とぶつかった彼女は、友好的な笑みを浮かべると、

「いや、これだけ広いと迷ってしまいますよね。あー、失礼ですけど、常盤台中学ってどの辺にあるかご存知ですか？」

「はあ。．．．．．あ、ちよつと待つてください」

刀夜はゴソゴソとパンフレットを取り出す。学園都市は広大で参加する学校の数も半端ではないため、ちよつとした海外旅行用のガイドブックのような厚みがある。彼は地図で探すのを諦め、巻末の地名リストを目で追い駆け、

「とき、とき．．．．．ないなあ。常盤台中学というのは、名前がリストに載っていないね。正式なパンフレットに紹介文が全くないという事は、もしかして一般開放され

ていないのでは？」

「うわっ！ ホントですか。じゃあ美琴のヤツはどこにいるのよーっ！ せつかく大学に休学届け出してここまで来たっていうのに！」

みこと、というのは妹の名前だろうか？ と刀夜はガイドブックを読みながら適当に考えていたが、不意に女性がズズイと接近してきた。刀夜に肩をぶつけるように、彼の広げているページを覗きこむ。

「と、と、とき、とき、とき——うわっ！ ホントにないよギャーどうしよう!!」

特に待ち合わせ場所を決めていなかったのか（開会式前では、携帯電話も電源を切つてある可能性が高いだろう）女性は切羽詰まった叫びを上げる。無防備な彼女のほっぺたが、刀夜の無精ヒゲの生えた頬とぶつかりそうになった。女性の柔らかい髪の毛がわずかに刀夜の耳をくすぐる。その柔らかい髪から、ほのかに甘い匂いがした。

刀夜が慌てて顔を逸らすと、

「あらあら、刀夜さん。またですか？」

「か、母さん？ ま、またとは何かな？」

刀夜は慎重に聞き返すと、詩菜は片手を頬に当てて、心の底から哀しそうなため息をついた。しかもその顔からやたら陰影が強調され始めているような気がする。

「もう、刀夜さんったら。道端で女性とぶつかってお知り合いになり、その後の無自覚な

行動で良い雰囲気になるだなんて。これで何度目かしら。数える方が馬鹿らしいのかしら。あらあら、あらいやだ。そんなに私を怒らせて、刀夜さんったらマゾなのかしら？」

詩菜の顔は千円札や五千円札に描かれた肖像画もびっくりの迫力を見せているが、刀夜の隣にいる女性は詩菜の変化など全く気づかず、彼の腕をぐいぐい引つ張りながら『ねえ。運営委員のテントとかつてどこにあるかわかります？ ねえねえ』などと言っている。刀夜としては、『母さんこわーっ！ だ、だけど、だけど母さんの軽い嫉妬もちよつと可愛らしいしこははどう動くべきか!』と、現状をダハスベキカ享受すべきか悩んでいた所で、

「あら。あれは当麻さんじゃありません？」

詩菜の興味がよそに逸れた事を知り、刀夜は密かに脱力する。『た、助かった。でも私は何でちよつとがっかりしているんだらう?』と、心の中で首をひねりつつ、刀夜は詩菜の視線を目で追いかける。隣の女性はまだパンフレットを見ながら刀夜の腕を引つ張っていたが。

視線の先には人混みがある。それを作っている大部分は、やはり体操服を着た学生達だ。一口に体操服と言っても学校によって様々な違いがあるようだが、彼らは皆、赤か白のハチマキを頭に巻いていた。

そんな人混みの向こうに、見知った我が子の黒いツンツン頭が見える。彼は大覇星祭の参加者であるため、当然ながら半袖短パンの体操服だ。その隣には、彼とは違つてラニングに短パンの本格的な陸上競技用ユニフォームを着た女の子がいた。ふと刀夜が広げているパンフレットから顔を上げた女性が、肩まである茶色い髪の少女を指さし、『あつ。あれがウチの美琴です。良かった良かった。大学が忙しくてろくに集合場所とか話し合つてなかつたから』とか説明を始めていた。

間に雑踏を挟んでいるため、向こう側にいる子供達は親の姿に気付いていないようだ。

しかし、相当の大声で話し合っているらしく、言葉だけは鮮明に届いてくる。

「なあ、それいつもスカートの下に履いてる短パンだろ？ 恥ずかしくない訳？」

「はあ？ 何がよ」

「いや、確かにスカートの下にはいてる時はパンツを隠す鉄壁の防壁だろうけど、逆にスカートがなくなつたらエロスの対象だぜ？」

「何、アンタそんな事考えてる訳？」

「いんや、俺は年下にも年上にも興味はないんでね」

「……あ、そう。ねえねえ、結局アンタつて赤組と白組のどっちなの？」

「あ？ 教える義理ないだろ。しいて言うなら無罪の色」

「へ？ 無罪？」

「白だよ白。白組」

「あ、そ、そう」

「お前は？ 赤？」

「そうよ!!? 悪い!!?」

「なにキレてんだよ。カルシウム足りてないんじゃないの？ まあ敵同士って訳だ。頑張れよ五本指の常盤台中学さん」

「し、勝負よ！」

「ならねーだろ。見ての通り、弱小高校と毎年上位に食い込む常盤台。どっちが勝つかなんて初めから分かりきってるだろ」

「……知らないの？ 今回の大覇星祭、直接対決があるらしいのよね……」

「は？」

「上位三校の代表選手が、指名した学校の選手が、指名した生徒と戦うっていうルールがあるの。最終日、アンタを指名してやるから！ 勝ったら見てなさい。罰ゲーム、受けさせてやるわ！」

「へえ。オレに勝つ気か。いいぜ。負けたら何でも言う事聞いてやるよ」

「言ったわね。……何でも、ね。ようし」

「どうせ勝てもしない癖に希望ばかり大きいな。その代わり、お前も負けたらちゃん」と罰ゲームだからな」

「なつ。そ、それって、つまり、な、何でも言う事を……」

「揺らぐか？ 御坂美琴。お前がたつた今ここで放った大口にはそれぐらいの自身しか無かったのかよ」

「……良いわよ。やってやろうじゃない。後で泣き見るんじゃないわよアンター！」
「そっかそっか。そのセリフが出てきた時点ですでに負け犬ムードがプンプンするぜエ

——!!

何だとビリビリイ!! と電撃混じりでぎやあぎやあ騒ぐ二人組を、父兄達は固まったまま見送る。どうやら彼らの思い描く子供達の理想像とはギャップがあったらしい。

上条詩菜はほつぺたに片手を当てて、

「あらあら。……言葉を巧みに操り、年端もいかない女の子にあんな無茶な要求を通させてしまうとは、一体どこのどなたに似てしまったのかしら。あらいやだ、母さん学生時代を思い出しちゃいそう」

上条刀夜はズドン、とショックを受けた顔で、

「そ、そんな。女子中学生に対して勝つたら罰ゲームで何でも言う事を聞かせるだなんて、一体どんなご命令を飛ばす気なんだ当麻ーっ!!」

彼の隣にいた女性は、『こいつらの影響なのか。ま、後で美琴には話を聞くとして。若いっていうか青いわねー……』という顔で溜息をつくど、片手をおでこに当てた。

そんなこんなで、七日間にわたる学園都市総合体育祭『大覇星祭』が始まる。

炎天下の中での開始合図
Commence Host
t i l l i t i e s .

午前一〇時三〇分。

ようやく開会式が終わった。

「あつっ……」

平凡なる高校生・上条当麻が立っているのは、サッカースタジアムだ。特に部活動に力を入れている体育学校付属の施設らしい。合成樹脂の人工芝も溶けてしまいそうなほどの厳しい残暑の中、様々な体操服を着た男女は行進で出口をくぐると、あとは三々五々に散っていく。

上条はそんな生徒達を置いて、さっさと競技場。自分達の高校に向かって駆け出した。

「最初の種目は棒倒しか……」

インデックスは小萌先生に預けてあるので心配はないが、上条は自身の高校の校庭の前で、貴音と合流した。

「なあ、あいつ等準備中に馬鹿騒ぎばかりやってたよな？　大丈夫か？」

「やる気なーいとか言つてらどうしてやりましょうかね」

上条と貴音は、水撒きがされている校庭の端を通り、選手控えエリアへと意気揚々と乗り込み、クラスメイト達の輪の中へ入る。

そして、こういったお祭り騒ぎがいかに好きそうな青髪ピアスがこちらへ振り返り、

「うっだー………やる気なあーいーいー………」

上条と貴音は何もない地面で盛大に転がった。

地面に突っ伏したままよくよく周りを見てみると、他のクラスメイト達も大体そんな感じだ。つまり、全員が日射病の一步手前みたいな顔をしている。

「ちよ、ちよつと待つてくください皆さん。何故に一番最初の競技が始まる前からすでに最終日に訪れるであろうテンションに移行してるんですか!？」

貴音がぶるぶると震えながら問い質すと、青髪ピアスがガバツと振り返り、

「あん？ つつかこつちは前日の夜に大騒ぎし過ぎて一睡もできんかったつーの！ しかも開会式前にも、どんな戦術で攻めこみや他の学校に勝てるかいうてクラス全員でメモまくつて残り少ない体力をゼロまですり減らしちまったわい!!」

「自業自得じゃねエエですかアアアアア!!」

「こりや、負けそうだな」

上条は自分から体力を減らしに行く貴音を抑えながら頭をかく。

「にやー。でもカミヤン、テンションダウンは致し方ない事ですたい。何せ開会式で待っていたのは十五連続校長先生のお話コンボ。さらに怒涛の喜び電報五〇連発。むしろカミヤンはよく耐えたと褒めてやるぜーい……」

土御門も青髪と同様にテンションダウン状態だった。それを見た貴音は、さらに肩を落とし。膝まで着いた。

「た、体力馬鹿の青ピさんや土御門さんですらこの有様……!? いやまだだ。対戦相手も同じようにぐったりしてれば勝機は……ッ!!」

貴音は最後の望みにすがるが、

「駄目だにやー貴音っち。何か相手は私立のエリートスポーツ校らしいつすよ?」

うにやあああ!! と貴音は完全に地面に突つ伏す。上条はそんな貴音を呆れ気味に見つめていたが、いたって冷静に

「こりや、相手にもナメられてそうだな」

「な、何なの。この無気力感は一!」

「よ、吹寄。みんな前日までの馬鹿騒ぎで体力を使つたんだと。俺と貴音はそうでもないんだけどな? いや、たった今貴音はやる気を失つたみたいだな」

吹寄制理。どうやら彼女は大覇星祭の運営委員らしい。その証拠に薄手のパーカー

を体操服の上からはおつていた。

「上条当麻。キサマはやる気はあるのか？」

「あつたとしても無理だろ。まあ、あるけども。吹寄も見ろよ。この学校全体の無気力感。やる気の無さが充満してますぜ」

上条はチームワークが全くない生徒達をぐるりと見渡すと、吹寄に向き直り、な？と同意を求める。

吹寄は満足がいけないのか、他クラスにまで叱咤激励に行き始めた。

上条はため息をつくど、選手入場口近くにある体育館の壁に寄りかかる。すると、ふとどこからか男女が言い争う声が聞こえてきた。ちようど体育館の陰に隠れる形で、誰かが話し合っているらしい。

「……………そんなことは……………絶対に、……………ですよーっ！」

「……………馬鹿馬鹿しい……………に決まって……………ですか」

上条はそのまま体育館の壁にピタリとくっつき、端から首だけ出して様子を窺う。

日当たりの悪い体育館裏手にいたのは、上条のクラスの担任の月詠小萌だった。さきほどインデックスを預けたばかりなので、そのチアガールのような衣装も特に気にもならない。

それよりも、彼女と向き合ってる男性の先生が気になった。この暑い中しつかりと

スーツを着込んでいた。相手の学校かな？ と上条は思う。

小萌先生と男の先生は言い争っていた。

というより、嘲る男の先生に、小萌先生が食い下がっているような構図だ。

「だから！ ウチの設備や授業内容に不備があるのは認めるのです！ でもそれは私達のせいであつて、生徒さん達には何の日もないんですよーっ！」

小萌先生は両手を振り回しながらそんな事を叫んでいるが、男の先生は気に留めず、「はん。設備の不足はお宅の生徒の質が低いせいでしょう？ 結果を残せば統括理事会

から追加資金が下りるはずなのですから。くつくつ。もつとも、落ちこぼればかりを排出する学校では申請も通らないでしょうが。ああ、聞きましたよ先生。あなたの所は一学期の期末能力測定もひどかったそうじゃないですか。まったく、失敗作を抱え込むと色々苦勞しますねえ」

「せ、生徒さんには成功も失敗もないのですーっ！ あるのはそれぞれの個性だけなのですよ！ 皆さんは一生涯懸命頑張っているっていうのに！ それを……それを、自分達の都合で切り捨てるなんてーっ!!」

「それが己の力量不足を隠す言い訳ですか。はっはっはっ。なかなか夢のある意見ですが、私は現実でそれを打ち壊して見せましょうかね？ 私の担当教育したエリートクラスで、お宅の落ちこぼれ達を完膚なきまでに撃破して差し上げますよ。うん、ここで行

う競技は『棒倒し』でしたか。いや、くれぐれも怪我人が出ないように、準備運動は入念に行っておく事を、対戦校の代表としてご忠告させていただきますよ?」

「なっ……」

「あなたには前回の学会で恥をかかされましたからねえ。借りは返させていただきますよ? 全世界に放映される競技場でね。一応手加減はするつもりですが、そちらの愚図な失敗作どもがあまりにも弱すぎた場合はどうなってしまうのかは、こちらにも分かりませんねえ」

はっはっはー、と笑いながら立ち去って行く男の先生。

対戦相手の学校だったか、と上条は大雑把な感想を抱いた。正直、無能力者の上条としては、今更すぎる言葉だったので、大して気にも止めなかったが。

「……、違いますよね」

その時。ポツリと、小萌先生は言った。

たった一人で。誰に言うでもなく。俯いたまま、ぷるぷると震える声で。

「みんなは、落ちこぼれなんかじゃありませんよね……?」

ただでさえ小さな肩を、より小さくするように。

今の罵倒は、全て自分のせいで見んなに降りかかったものだと告げるように。彼女はそつと空を見上げ、何かをこらえるように、じつと動きを止めていた。

「――、」
上条はちよつとだけ黙る。

そして振り返る。

そこには彼のクラスメイト達が無言で立っていた。

上条当麻は、彼らに確認を取るために言う。

「はいはい皆さーん。話は聞きましたね？ ついさつきまで、やる気がないだの、体力が尽きただのと、各々勝手に喚いていましたが……」

上条は片目を閉じて、

「――もう一度だけ聞く。テメエら、本当にやる気がねえのか？」

御坂美琴は学生用応援席にいた。

敵情視察という名目で、美琴は上条当麻の実力を探りに来たのだ。

（アイツ今までずっと、私に対して力抜いてきてるの知ってるんだから。さあ、見せても

らうわよアンタが一体・・・どれ・・・だけ強・・・いのか？)

上条達の対戦相手はスポーツ重視のエリート校らしく、簡単な柔軟体操にも専門的な匂いを感じさせる。が、美琴の言葉が詰まったのはそちらではない。パンフレットを見る限り、彼の学校は進学校でも何でもなく、本当に個性のない『極めて一般的な学校』だ、と思っていたが、

そこに、本物の猛者達がいた。

はい・・・・・・？ と美琴は思わず自分の目を疑ってしまふ。

その集団は妙な威圧感を放っているくせに、野次や騒ぎの一つも起こしていない。むしろ無言のまま、上条当麻を中心にして、校庭へ横一列に並ぶ。棒倒しというか、戦国時代辺りの合戦の一手前といった感じだった。テレビカメラによる緊張感がどうのという次元ではない。もはや自軍と敵軍以外は何も目に入っていないに決まっている。

ドゴゴガガガガガ、と彼らの周りから妙な効果音が鳴り響く。

三ヶタ単位の能力の余波がぶつかり合って空気を震わせる音だ。

(へ、へえ・・・。そ、そんな脅しには乗らないから。さあ見せてみなさい。その力を！)

顔を引きつらせる美琴の前で棒倒し開始のアナウンスが入り、テンションの落差に恐れをなした敵軍の元へと、上条当麻が一步前に出た。

少しずつ上条は前に出る。他の自軍は動こうとしない。相手も思わず疑問に思うが、三分の一ほど進んだ上条に、能力が飛んでくる。上条はそれを横に振り抜いた右手でかき消すと。

ダン!! と、足で地面を踏みならし腹の底からありつたけの声で言った。

「ガンダムファイトオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「レディイイイイイ!!」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

そして、砂煙を上げて上条達ツフモノたちが敵軍に襲いかかっていった。

本来、棒倒しに参加する人間は、自然と二つのグループに分けられる。

一つは自軍の棒を立てて、それを支える役。

そしてもう一つは、相手の棒を引きずり倒す役。

上条達は圧倒的に後者の方が多かった。というか、支える人間は一人で十分だった。エィムを体に宿した貴音一人が、巨大な棒を悠々と能力で支えていた。

先陣を切った上条は仲間が到着するまでの間、挑発をし逃げ回っていた。

「ほらほら、当ててみるよ。ノーコン野郎ども! 宝の持ち腐れのヘナチヨコ能力者が

!!」

そんな事やっていた上条の肩を叩いて並走する者が一人。

青髪ピアスだった

「行きますよーカミヤん。お高くとまった腐れエリート集団が放つ、あの二枚目オーラ。お笑い専門のわたくしめが見事木っ端微塵に打ち砕いて見せましょう！ わはははははーっ!!」

最初の上条の気迫に押されたのか、敵陣営は遠距離攻撃しかしてこない。その能力を迎撃組が撃ち漏らした分、爆圧の弾丸が襲ってくるが、青髪ピアスは笑いながらバレーリーナみたいにクルクル回転しつつ、前段を余裕で回避していく。

両陣営、激突までおよそ一〇メートル。上条は先制攻撃の用意をする。

「カミヤん。行けっ」

「はいよー」

上条は先頭集団の中から空中に飛び出すと、右手に電気を帯びた火球を生み出した。

「カッ消えろ!!」

それを某バトル漫画のように、敵陣営に叩き落とし、進路を作り出す上条。何一〇本と立っている棒倒しの棒に飛びつきだす影もあつた。

貴音の方は若干暇ではあつたが。

が、数一〇人が、上条達の突撃をかわして自軍の方に向かっていくのが、空中にいた

上条には見えた。

「あいつ等っ！」

貴音に能力が効くかどうかそれは上条にも分からない。だが、こちらとしては一本も倒される訳にはいかないのだ。ハイパー化する時間も惜しかった上条は、そのまま両手から炎を逆噴射して、数一〇人に追いつく。

「よオお前ら。相手は俺がするぜ？」

そう上条が言った時、大量の能力が飛んでくる。が、上条は余裕の表情で全てかわし、数一〇人の前方に飛び込んだ。

「行かせねーよ」

上条の目線の先では二本、敵陣のポールが倒れていく。

その上条にも大量の能力が襲い掛かってくるが、彼は全ての能力を反射した。

自分の能力を食らった数名は倒れるが、まだたくさん残っている。

「悪いな。この大覇星祭期間中。俺の枷を取っ払っていいってお許しが出たんだ。遠慮なくいかせてもらおうぜ!!」

結果を言うと、上条達は競技に勝った。

正面からスポーツとして争っても上条と、貴音さえいけば勝てるに決まっている、というのが彼らの答えだったが、ここは相手のペースを崩す電撃戦に出たのだ。

統括理事会から、能力の制限が解除された上条と貴音は、そのチカラを要所所で使っていた。特に貴音は、超能力者相当の念動能力テレキネシスを使っていたのだが、『上』からのお咎めはない。

擦り傷だらけの猛者達は、その手で勝利をもぎ取った事も怪我の事も全く気に留めずに選手用出口から校庭の外に出る。と、小萌先生が何か訴えていたが、多くは語らないのが美徳だとばかりに生徒達は三々五々と散っていく。上条も選手控えエリアから出て、次の会場をゆっくり目指し始める。

すると、青髪ピアスが駆け寄ってきた。

「なーあカミヤん。何であれで無能力者なん？ どう見ても超能力者なんやけど」

「知ってるか？ 青ピ、計測器は計測不能な時でも無能力と表記するんだぜ？」

「なるほどな、カミヤんのそれは計測不能っちゆうことか」

「そーゆー事かもな」

「あー、そんな事言いに来たんとちゃうんやわ。カミヤん。さつき全員で決まった事なんやけど、ウチの学校あんな風にどこからでもナメられとるみたいでな？ せやからカ

ミヤんと貴音つちに暴れてもらおうと思とんやけど。どやろ」

「あー。別にかまわねーよ。この大覇星祭期間中は俺の枷も外していいって言われてるから。好きに暴れられるしな」

「ありがたいわー。ほな、また頼むでーカミヤんつ」

走り去っていく青ピの後ろ姿を見る上条。『待っててねー』とか言っている辺り、彼女にでも会いに行くのだろう。

「他校に彼女がいると複雑だろうねー」

「こういう時は敵対しちゃいますからね」

「貴音か。どうした？」

「いや〜聞いて下さいます？　なんか記者が私の事探してるみたいで」

「超能力者がいない学校であれだけの事やらかしたらそりや注目されるわな」

「ご主人も気をつけた方がいいですよ？」

「なんで？」

「上位五校。つまり五本指、強豪校の代表選手が一名。全校、全生徒の中から一人選んでバトルマッチができるんですよ」

「御坂から聞いたよ。で？」

「上位五校といえ、常盤台と長点上機ですよ？　その代表といえ、誰だか分かっていますか？」

「だれだよ。御坂か」

「常盤台。といえば超能力者の御坂美琴嬢ですね。長点上機は、今年は必ず彼が出てきます」

「誰だよ」

「超能力者第一位の一方通行ですよ」

「白夜が？ 出てくるって……まさか」

「そう、一〇〇%ご主人を指名してくるでしょうね」

「おいおいおい。ふざけんなよ。御坂は指名してくるって言ってるし……。白夜まで!」

「あと、一応なんですけど」

「何?」

「超能力者第七位の人も、出てくるかもしれませんが。そこは、分からないので」

「俺には関係ないだろ?」

「一種の筋肉馬鹿、いえ、根性馬鹿らしいです」

「……なに? 俺の身体能力を『スゲー根性だな! 手合わせしようぜ!』とか言い出す訳?」

「その辺は全く分かりませんが……」

貴音は少し首を傾げると、何かに気付いたように目を開く。上条が『どうした?』と聞くが貴音は耳を澄ませている。

「ご主人。今何が行われてます?」

「そうだな。目立って行われているのは常盤台の借り物競走だな」

「常盤台の、ですか?」

「そうそう。注目選手はやっぱり御坂らしいな」

「ですか。ご主人危ないっ!!」

「おわっ!」

グイッと上条の体が、貴音の方へ引つ張られる。それぐらいで倒れる上条ではないので、すぐさま体勢を整える。すると、そこには睨みあう少女達がいた。

「危ないですねえ。鳴神娘。私の目の前でご主人をかつさらおうなんて甘い考えはよしとくくださいます?」

「あのねえ、こっちは競技でやってんの。借り物競走なのよ?」

「ルールには第三者の所有物である場合、その人物に了承を取った上で、競技場へ向かう事って書いてありますけど?」

「だったら取ればいいんですよ!? ほら、あんたらどっちかついてきて!」

「へ? どれどれ」

二人が美琴の持つ紙を覗きこむとそこには、『第一種目で競技を行った高等学生』と書いてあった。

「確かに『棒倒し』は第一種目だけどき。どうする?」

「ご主人なら間に合います。私が許可しますんで、全力で走って来てください」

「ほんじゃ御坂、本気で行くからな」

「え!? ちよつと何!?!」

「ご主人。〳〵学校の競技場らしいです」

「じゃあその入り口までな」

「ちよつと! 下ろしなさいよ!!」

「大丈夫だつて、速いから」

上条はそう言うのと、美琴を抱えた（所謂お姫様抱っこ）まま、跳び上がった。

「え、ええ!?!」

「舌噛むかもよ?」

ドンツ! と、上条の足がビルの壁を捉え、ビルからビルの壁を蹴りながらジグザグに跳んでいく。だが、地上を走るよりは数倍速いだろう。

「ちよつ! 待ちなさい! 降ろして!」

「フハハーツ! もう着いたから大丈夫だぜ」

ズザザザ！ と、上条の両足がアスファルトを捉える。どうやら競技場内を見る限り、まだ帰還者はいないようだ。

「……………どうやらまだ一位を取るチャンスはあるみたいだなア！」
「ほら行くわよッ！」

上条は高反発素材材の靴底で地面を蹴り、猛加速した美琴に引つ張られて競技場に突入し、ゴールテープを切った。

先ほど、上条達が棒倒しを行った競技場とは別次元だった。スポーツ工学系の大学が所有している物らしく、オリンピックの屋外競技に使われそうな出で立ちだった。

待機していた運営委員の高校生が、美琴にマラソンのゴール直後のように大きめのスポーツタオルを頭から被せた。ドリンクの手渡しや小型の酸素吸入用ポンベの使用などもテキパキしているし、それは実用本位だけでなく、カメラに映る事を考慮した動きのようにも見える。

この後は表彰式と簡単なインタビューがあるはずだ。後続の選手達が到着するまでは、別の所で待機といった感じか。

「おお。場違い感が半端ないほどぴっちりした競技場ですなあ」

と、美琴の世話を終えた運営委員の高校生が、上条の顔をジロジロと見てきた。何だ、と上条は少し身構えたが、その時運営委員は小声で言った。

「……上条当麻。一応、『借り物』の指定は間違っていないみたいだけど、よっぽど女の子と縁があるようね貴様は！」

「お、その声は吹寄か。貴音も一緒だったんだけどな。俺に行けつて来たのあいっだから。俺に女縁はないぜ」

「……………」

吹寄は呆れたように、何か競技記録らしきものをボールペンでクリップボードに書き込み始めた。

吹寄がこれ以上上条と話す気はないらしい事を雰囲気で掴んだ彼は、特に疲労感もないので、静かに競技場から退散しようとする。

「ちよつと、アンタ待ちなさいよ」

「んだよ、御坂。もういいだろ？」

「よくないわよ。汗とかかいてないの？」

「お前はオカンか。汗なんかかく訳ないだろ？ あれぐらい余裕だから、気にすんな。ほんじゃドロンという訳で」

タツ。と軽い足音と同時に、上条の体はものすごい勢いで競技場出口に消えていった。美琴は少しため息をつくど、どこからともなく取り出したメモ帳に何かを書きなぐっていた。

魔術師と能力者の競技場 “Stab | Sword.”

競技場から貴音と別れた場所までは結構な距離がある。

なので、上条は直接次の競技場に向かう事にする。

現在、上条がいるのは学園都市に数多く存在するビルの上である。そこを、車顔負けのスピードで上条は疾走していた。

下では沢山の人が歩いているが、上条は気にも留めなかった。チラリと見知った神父がいたように見えたが気にしない。と、その時貴音から上条にお話が聞こえてきた。

「(ご主人。今大丈夫ですか?)」

「絶賛移動中ですが何でせうか?」

「(どうやらこの街に魔術師がいるそうなんです)」

「へえ。だからステイルがいたのか。何か問題があるなら『界』出現させればいいじゃないか」

「(そう、思ったんですけどね。流石に学園都市という広大な敷地内。しかも大覇星祭中に行ってしまうと、マズイらしいんですよ)」

「で? そいつらは何しに来てるの?」

てるにすぎないんだぜい』

「あーそうか。で？ 無理ってどういう事だよ」

『相手はプロの運び屋なんですたい。それに、今ステイルは上条当麻の知り合いだから、個人的に遊びに来ているって事になってるんだにやー』

「はっ。集団で押し寄せても良かったんだぜ？ そんなときや貴音と一緒に全魔術師『界』で消し飛ばすから」

『物騒な考えだぜいカミヤン。でもある意味それは普通の戦争での核以上の兵器となる。抑止力にはびったりかもにやー。そんな事は置いといてだ、カミヤン。お前は どうするんだ？』

「さあな。偶然にも、その相手と出会ってしまったて関わるざる負えなくなったら考えるや」

「(ご)主人。それなら私も何もしなくていいですか？」

「動かなくていいよ。もし万が一、やつこさんと関わってしまったら首を突っ込むしかないけどね。だって、邪魔だもの」

「(分かりました！)」

「それと、土御門。さっきの話を蒸し返すんだけど。建宮ぐらいなら連れてきても良かったんじゃないか？ あいつなら俺の知り合いでいいだろ」

『そこまで頭が回らなかった。とだけ言っておくぜい』

上条は周りにある魔術、思念波の類全てを幻想喰いで喰い殺すと、競技場に走り続けた。

次の競技は大玉転がし。

上条当麻と同年の生徒達は、すでに競技場の中に入場していた。

上条達が出す空気は第一種目と同じ戦闘の覇気。大玉がまるで今か今かと発進を待つ戦車のようにも見えてくる。

上条は、先ほどの土御門との会話などどうの向こうに消えていて、目の前の大玉転がしに全精力をつぎ込もうとしていた。

試合が始まり、上条はクラスの皆と一緒に大玉を押す。ゴロゴロとそれなりのスピードで転がって行く大玉からは、敵軍は見えないが、上条は気にしない。

結果から言うと悲惨だった。勝負の結果ではなく、上条自身の話だ。彼は初めに味方の大玉に轢かれ、戻ろうとした所を敵軍に吹き飛ばされ、切れて能力ぶつ放した所で退

場になりかけ、無能力者がインチキじゃないかと一度勝敗にうんぬんかんぬんだったが、なんとか勝利を収めた。

大玉転がしが終わり、競技場から退場した後。上条は貴音と土御門と話をしていた。「ですからね。ご主人。万が一の時のために説明しておきますけど。今回取り引きが行われるのは、『刺突杭剣』。距離に関係なく、切っ先を向けられただけで、聖人を一撃で葬るらしいです」

「へえ。なあ土御門。そのスタブなんちゃらの写真とかないの？」

「あるぜい。これだにやー」

土御門が見せてくれた携帯の画像をじっくり見て、上条は頭を抱えた。

「なあ、お前等のお偉いさんはそれを剣って言ってるのか？」

「ああ。公式見解という奴だぜい」

「オレにはどう見ても、十字架にしか見えないんだけどな」

「……カミヤん。今何て言った」

「その画像の白い奴。十字架にしか見えないって言ってるんだよ」

「……ふむ。それが本当なら全く違った……」

ブツブツ言いながら土御門はどこかへ電話をかけ始めた。そんな土御門に上条はため息をついた。

「で？ その運び屋さん。もしくはそのラスボスさんを見つけ次第ぶん殴りやいのね」

「その通りなんだが………。カミヤんは物騒ぜよ」

「大丈夫大丈夫。もし腹が立つたらジャツカルとハーデイス持ち出すかそれなりの力でぶん殴るだけだから大丈夫」

「大丈夫じゃないですよ。ご主人。ご主人のそれなりはビルをも砕きます」

「いやいや、大丈夫だって」

「じゃあご主人。一回蚊を潰して見てください」

「蚊を？ 握り潰せは良いのか？」

ズドンツとかいう変な音で空気が握りつぶされた。

「……それがご主人のそれなりでしょ？」

「ん？ ああ」

「相手が死ぬのでやめてください」

「ちえっ。はいはい、分かりましたよ」

上条は握った手をひらひらと開いて、歩き出す。それに貴音がひよこひよこことついていった。

そして、上条達は途中で吹寄に捕まった。

「ねえ、上条。榎本さん。大覇星祭ってつまんない？」

「いや、楽しいよ？」

「・・・どうもあなた達は浮ついているというか、別の事が気になつていようような感じがある！」

「・・・相手が弱い、張り合いがないって意味合いでなら確かに大覇星祭はつまらない。これでもかかってほど子供のお遊戯にしか見えないからな」

そう言った上条は余所見をしていた為、誰かとぶつかってしまった。周りも混んでいるのですみませんと言って立ち去ろうとそちらを向いた所で、固まった。

露出狂か？　と行つても失礼じゃないようなはだけた作業服を着た外国人らしき女性だった。

その女性は流暢な日本語で。

「ああーつと。ごめんねごめんね、こんな人混みはあんまり慣れてなくて。どこか痛い所とかないかしら」

「大丈夫です。人一倍頑丈なもんで」

「それじゃあ」

そう言つて女性は握手をするように手を差し出して来る。

「ぶつかってしまっただお詫びに、ね。日本じゃ頭を下げるみたいだけど、こちらではこういうやりの方が一般的ね」

「へえ……」

「あら。キスのほうがいい?」

「いえ、握手でいいです。一応俺、彼女がいる身なんで」

と、上条は差し出された手を、同じく右手で握り返して、

バギン!! と。

何かが砕けるような、奇妙な音が響いた。

「は?」

という声を出したのは、上条でも貴音でもお姉さんでもなく、それを見ていた吹寄理だ。当事者の二人は、それぞれ何が起きたのか理解しているため、そんな声は出さない。

上条当麻は自分の右手に宿る能力について思い出している最中だし、塗装業者のお姉さんは、何を破壊されたのかを確認している最中だ。

「つとつとつと」

お姉さんはムリに苦笑いを浮かべようとし、それすらも失敗して、

「そろそろ、こつちもお仕事に戻らなくつちやならないから。行っても良いかしら?」

言うだけ言うと、上条達の返事も待たずに立ち去ってしまった。上条はその背中を眺めて。

「……………面白くなってきた、かな」

上条はそのまま吹寄に別れを告げると、路地裏で行動に移る。携帯電話を取り出し、土御門に発信する。

『どうもー。カミヤん、インデックスは巻き込まなつてというのが最新の命令だぜい。こっちは今オリアアナが取り引きに使いそうな警備の薄いスポットを割り出してるんだけど、第七学区は意外にポイントが多い。だから一応は、インデックスが近づかないように気をつけてもらえると——』

「いや、それよりも。それらしき人物を見つけたぜ。なんだっけ刺突杭剣だっけか」

「オリアナ―トムソンらしき人間を発見したって言うてんです」

『カミヤん。お前今どこにいる』

「一財銀行の前だけど」

そこで待つてろ、とだけ声が聞こえ、携帯電話がいきなり切れた。上条は軽く舌打ちをすると、貴音に。

「……………お前ここで待つてろ。俺はあのピッチを追う」

「了解です！」

上条が追いつくと、女性はどうかやら誰かと話しているようだった。

「……まず、後ろにいる坊やを撒かないといけないわね」

そう聞こえた瞬間。おそらく運び屋のオリアナ||トムソンがいきなり角を曲がった。

(……気付いてたか)

尾行より鬼ごっこの方が上条は得意だ。なぜなら、見つかつても追い付けば結果的によいのだから。

上条はその場で高く跳び上がると、ビルの壁を走って行く。ビルの輪郭に従うように、直角の交差点の頭上を曲がる。思ったより遠くにいたので、上条はとある少女とした鬼ごっこを思い出した。

「さあオリアナ||トムソン」

その声は道に良く響いた。オリアナの耳にも届いている。道行く人は何事かと頭上を見上げて、壁に立つ少年に目を丸くする。

「鬼に捕まったら、ゲームオーバー死デスゲームの鬼ごっこを始めようか！」

上条はそういうと、壁を蹴って斜めに向かい側のビルの壁へ、それを繰り返して、あつという間に追いついた。

「(ごっしゅじーん。今どこですか?)」

その脳内少女の声に上条は少し笑う。ほぼ真下のオリアナは路地裏に入ってしまった。

(あそこは……)「G-4に來い」

「了解です!」

上条は道に降りると、自分も路地裏に入っていく。

路地裏を進むと、入り組んだ道の向こうに貴音が立っていた。

「オリアナは?」

「土御門さんが追っています。目の前で飛び出してきたので、全力疾走で追い駆けてますよ」

「あとは専門家に任せるか……?」

「……いえ、どうせ見失うでしょう。でしたらいつそのこと。こちらの手札全てを使いましょうよ」

「……んじゃエネ。頼むぞ」

「了解です!」

「お前らも、さっきの金髪。探して來い!」

「「「「イエッサ——!!! Foooooooooooooooooooooooo!!!」」」」

上条の影から大量の『何か』が飛び出していった。

そして、案の定土御門とスタイルは。オリアナの時間稼ぎにまんまと引つ掛かり、見失っていた。

『追跡封じ』ルートディスターブのオリアナ||トムソン、か。．．．．．ふざけやがってッ!!」

その時、土御門の携帯電話が鳴る。上条からだった。

「なんだ、カミヤん」

『どうやら撒かれてるみたいだな。オリアナが余裕そうに歩いてる。周りにお前等の姿もない。俺がちよっかい出させてもらうぜ?』

「——は? 待てカミヤん! お前どこにッツ!!」

通話は一方的に切られた。土御門は慌てて上条のGPSを確認するが、すでに使い物にならなくなっていた。

(さてさて、上手く撒けたかしら．．．．．)

オリアナ||トムソンはチラチラと後ろを振り返りながら、表の道を歩いていた。すると。

「見つけたで。見つけましたぜオリアナはん」

「!?!」

慌ててオリアナはキョロキョロするが、周りに追手らしき人物はいない。

「滑稽やな。そつちにはおらへんで」

声のした方向を見てみると、一羽のカラスが。オリアナの方を向いていた。

「カラス……?」

「うんうん。もうすぐマスターが来るから、楽しみにしといてや」

「おしゃべりが過ぎるぞ」

「……すんませんねえ、マスター」

カラスはそういうと、マスターと呼んだ少年の影に隠れていった。

「あら、あなたの使い魔かしら?」

「その通り。運び屋オリアナトムソン。オレの暇つぶしに付き合ってくれよ」

「ふふっ」

「あ、それとお前が仕掛けた単語帳みたいな一ページ。すでに破壊済みだから」

心かみじょうとうま無き悪魔は裂けたような口の端を不敵につり上げて、猟奇的に、狂氣的に笑っていた。

それにつられてオリアナも笑う。その場を一瞬にして人払いが覆う。

結果は見えた戦いが始まった。

戦いの結末は勝利か否か Being_Unsettled.

上条当麻とオリアナ||トムソンは人がいなくなった道路で向かい合っていた。

片方は拳を握り、もう片方は握った手の中に単語帳を持って。

オリアナが単語帳の一ページを啜えた瞬間、戦いは始まった。

が、上条は動かない。何かしたかという表情でそこに立っていた。

「相手をなめるなんて、よく貴音にも言われるんだけどさ。体質のせいかな。どう見てもザコにしか見えないんだわ」

「あら、自分が強いからって相手を見下しちや駄目だぞ？」

「安心しろ。見下してるんじゃない。退屈なんだ。張り合いのある相手がいなくて、な」

上条はそう言うのと、頭部に炎を灯す。そして、手袋をグローブに変えると、オリアナを右手で指さして。

「お前には枷をつけたまま戦ってやるよ。聖人戦の時は、武術を使ったけど、よく考えたら単なる身体能力戦でも勝てたかもな」

上条は笑って、

「オペレーションX」

上条の攻撃が放たれた。

地を削り、迫るそれをオリアナは走ることでもかわした。互いの戦闘スタイルを崩す戦い方だ。

オリアナは相手に死角を作らない事を得意としている。だが上条の幻想喰いは死角を作るチカラだ。それに加え、上条が手に入れてきた数多のスキル。

目の前にいるのが本当人間なのか、オリアナは疑問に思う。

いくら自問自答しても答えが出ない。直接聞くしかないのか、と思いオリアナは声を出す。

「あなた、人間なの!?!」

「一応な。ただ、この力は学園都市生じゃないし。うまれたときから天然素材でもない。全て俺の努力の上にある物だ。……霊丸!」

そう言って繰り出されるのは指先に溜められた死ぬ気の炎。業名は別アニメだが上条は気にしない。

オリアナも負けじと魔術を発動させる。

「動いたら死ぬわよ!」

「それ、動けって言うてるようなもんだぞ!」

上条は有言実行した。真空刃の壁をスルスルと通り抜け、当たっていないように見える。

(かわしている!?) いや、違う……。ダメージが全く入っていない! どんだけ堅い皮膚してるのよ)

「いるか? ナッツ」

「ガウツ」

上条が問いかけて出てきたのは、たてがみが炎の小さなライオン。

「ナッツ。形態変化。モードX」
カンレオ・フォルマ イクス

上条がそう言うと、指にはめられていたボンゴリングが、指に付けるような大きさのガントレットに変化し、そこからチェーンで小指にあまり装飾のされていないリングがはめられる。

「大空のリング。Ver. X」

それと同時に、上条がはめていたグローブの形状もかなり変わっていた。

全体的に赤を基調とした金属製のものでできていて、炎のアクセントやXの文字が目を引き、手の甲のクリスタルは、VONGOLA FAMILIAの文字が入ったXで留められている。

少し視線を落とせば、右太ももにも大型の金属アクセサリーがついている。

「行くぞ」

オリアナは身構えたが、上条はその場から姿を消した。高速移動を開始したのだ。所々に炎の残留が見える。様々な方向に飛んでいるのだろう。

「くっ！」

オリアナはその中で、煌々と光る光が高速で移動しているのを見つける。

（あれかっ！）

「X BURNER エアー」

「くっ！」

ギリギリで回避したオリアナは魔術を発動させる。当たるかどうかじゃない。当たたら終わるのだから。

（アイツ、何か隠してるな？ おそらく一定以上のダメージを持った者を強制的にダウンさせるとかそういった魔術でも持ってんだらうな）

上条は冷静に状況分析をしながら、ニタリと笑う。

（さつきからアイツは二度同じ手を使ってこない。単語帳のページを破り捨てている事からもそれは証明できる。そして、同じ手を使ってこないと言う事は、その攻撃の直後に全く同じ場所に同じ攻撃が来る事は無いってことだ）

上条は両手の炎を消すと、地面に降り立ち次の攻撃に移る。

影から取り出したハーデイスの銃口が、火を噴いた。

「なっ!」(実弾!?)

「殺意を教わった。間違った感情で人を殺してはならないと、何のために引き金を引くのかも教わった。だが今これだけはいえる。あんたらがいると大覇星祭は成功しない!」

さらに続けて二発。上条は発砲するが、魔術で受け止められたりする。

(あと、三発……。三発撃たせれば勝機は見える……。!)

「さて、終わりだ」

銃声は一発。だが飛んできた銃弾は三発だった。

(早撃ち! でもこれで弾切れのはず!)

単語帳のページを口で破ったオリアナが魔術を発動させたと同時に見たのは、明らかに人間が使う物では無い大型の自動拳銃だった。

放たれた銃弾はオリアナの魔術をいとも容易く破壊した。

「十三ミリ炸裂徹甲弾。とても人間にや扱えない代モンだぜ」

その名はジャツカル。とある吸血鬼が使っていた専用銃である。その特別製から、上条はとある筋でそれを重宝している。

「カミヤん!」

「土御門!？」

上条がそう叫んだ瞬間。オリアナは笑つてとある魔術を発動させた。カキン、とグラスとグラスの縁をぶつけたような、澄んだ音が響く。

瞬間。

土御門元春の体がくの字に折れ曲がった。脇腹を片手で押さえる彼は、ガチガチと震えてオリアナを睨み付けている。

「やっぱりあなたは怪我を負っているのね。大事なお友達が大変な事になるわよ?」

「なん……だ……だ……ッ!？」

上条は取り引きの事などとうに頭の中から消えていた。土御門をやられたという感情だけが彼の思考を埋め尽くしていた。

「許さねえ……! 絶対に、一発ぶん殴るッ!」

「良いわよ。来なさい。遊んであげる」

上条は息を吐くようにして駆け出すと、魔術を発動させる前に決着をつけようとする。

「気が早いわねえ。早漏の童貞クンは嫌われるぞ?」

「行動の速遅とソレは関係ないだろ?」

単語帳が唇に到達する前に、上条の体がオリアナの懐に飛び込んだ。

「喰らえッ!!」

オリアナは絶句したまま、眼前を見る。

同時。ゼロ距離で、少年の右拳が発射された。

「ボゴオツ! と、例えるならソレは、剛田武が放つものだ。」

「めり混みパンチッ!」

真正面から放たれたソレは、そのまま軌道を変えると、オリアナの首から上をアスファルトに埋め込んだ。

「………めりいクリスマス!!」

めり込み具合が気に入らなかったのか、上条は両足の全体重でオリアナの顎辺りを押し込む。

「………よし。土御門をどうにかしないとな」

緊張の糸の上の休憩時間 Resumption of

Hostilities.

「ペテロの十字架!?!」

「なんですか。それ」

ステイルがつぶやいた言葉に、身を乗り出す上条と、首をかしげる貴音。昏倒術式から回復した土御門も合わせて、四人はオープンカフェにいた。

「ペテロは人名・・・ですよね?」

「その通り。十二使徒の一人で、主から天国の鍵を預かったものだと言われている。しかし、ここで重要なのはそっちの神話ではなく、別の伝承だよ」

「別の?」

「ペテロさんの遺産である広大な土地に、教皇領バチカンがあるんだにやー」

「それで? 何が問題なんです」

「どーやってローマ教皇領を作ったか、つてとこ。ペテロさんの遺産である広大な土地に、ローマ正教は何をやったのかという部分ですたい」

「はい?」

「墓を建てたんだよ。ペテロの遺体を埋めて、十字架を立ててよ」

貴音はへ？ といった。クローチエティエトロ使徒十字がなんなのか、彼女自身よく分かっていないが、

何かいわく付きの物なのだろうと、勝手に予想する。

「分からないのか？ 貴音。ローマ教皇領は広大な空間に使徒十字を立てたところから始まったんだ。つまり、逆がいえる」

「使徒十字を建てた場所はもれなくローマ正教の支配下に置かれる」

「そう。それはこの学園都市であつても例外じゃない」

「自分で言っておいてなんですけど、マジですか！」

貴音は驚く。そして慌てる。．．．と、そこで気付いた。

「待ってください。その、ローマ正教の支配下に置かれるとどうなるんですか？」

「何やってもローマ正教にとつて都合が良くなるように、幸運や不幸のバランスがねじ曲げられてしまうんだ」

貴音の疑問に土御門が答える。十万三千冊の魔道書の原点を頭に所有する上条は、その正体と危険性を即座に辞書を引いて調べている。

「つまりあいつ等の目的は、この学園都市をローマ正教の庇護下に入れることか」

「ぬぁんですとお!?!」

「ま、今思えば無駄なんだぜい。今日の前にいるカミヤんと貴音っち、お二人さんには魔

術は効かない。例え世界を歪める神の術式であつてもだろう?」

「ん?」

「まあ・・・」

土御門はやれやれとため息をついて。

「一度発動した変わった空気は元に戻すのに時間がかかるよな? それと同じで、カミヤんの幻想殺しで、刺さった十字架を壊したとしても、待っている結末は放射線の除去作業よりも長いだろうぜい」

「タイムリーつつうか。大変なんだろうな」

「それに、カミヤんが貴音つちに触れてしまえば学園都市はもう元通りに戻るぜい」

「・・・ん?」

ステイルは話が見えないのか土御門に説明を求めるまなざしを向ける。

「貴音つちが使える『界』の出現。に伴う“彼女”に魔術は効かないんだろう?」

「ええ。直接的なもので無くても、彼女は人間じゃありませんから。魔術は効きませんよ。」

「つまり、カミヤんが魔術を受けてもなお正常であること、貴音つちに触れること、『界』が出現すること。この三段階が揃えば、学園都市は再び元通りになるだろうぜい。いちいち放射能で例えて悪いが、『界』の出現は、放射能汚染土と空気を丸ごと一瞬にして入

れ替えるようなものだからにやー」

貴音は目をパチクリさせて。

「つまり・・・どういう事ですか？」

「あいつ等がやってることは最終的に無駄になるから放っておこうって意味だけい」

「ちよつと待つんだ土御門。上から命令が出ているんだ。このまま野放しにするわけには」

「んー。確かにそうだにやー。ここで俺達が引いたら向こうも怪しむだろうし、何か理由付けて他にも安全を確保しておきたいにやー」

「使用条件が分かるまで待機って事で、俺達は家族と合流せねばならんだ」

「アデュー！ つです」

*

*

「ご主人！ 満席ですよ満席！」

キヤー。とテンションが上がっている少女。貴音は刀夜達の姿を見つけると、跳ねるように走って行く。

「おう当麻。こつちこつち」

「あらあら。そんな大きな声を出してはいけませんよ」

貴音が行っているんだから場所はもう分かっているよ。と上条は思いながらも窓際に座る彼の両親に近づいていく。

「いや、毎年毎年思うんだが、大覇星祭っていうのはすごいな。とにかく場所取りがハードだ。こちらでも子供に混じって一緒に競技しているような気分にはさせられる」

「そりゃいいや。外の学校は同じグラウンドでやるから、親はずつと日陰とかにいれるんだろ？ 子供からしてみれば不公平以外のなにものでもないだろうーからな」

「親と一緒に炎天下の中、子供を見るために慌てていると思うと少し気分は楽ですよね」
上条と貴音は嫌みのように言ったが、刀夜は笑って。

「そうだなあ。父さんも子どもの頃は日陰ですつと座っている両親や先生を恨んだもの
」

「……どうま、どうま。もしかして私のこと見えてない？」

「うおっ！　なんでチアガールの格好してるんだ？　インデックス」

「こもえがとうまを応援するために貸してくれたの」

「あ、そう」

上条は理由が分かるととたんに興味をなくしたのか、席に着く。席順は通路側から上条・貴音・詩菜である。向かいは刀夜とインデックスが座っている。

ふと、上条は店内を見渡して向かいのテーブルに座る美琴を見つけると、わざと聞かせるような声で『触らぬ神に祟りなし、だな』と言ってテーブルに向き直った。

「ちよつとアンタ！　なんで私のことだけ検索件数ゼロ状態なのよ！」

「ああ。いや、流れるにこんなもんかと」

「こつ、こんなもんじゃないわよ！　流れっていうならアンタの周りに自然な流れなんてあるもんか！　そもそも、いつもアンタの側にくっついてるそいつ等はどこに住んでる誰なのよ!？」

むむ？　と指を指されたインデックスが顔を上げた。貴音もめんどくさそうに顔を上げる。

「誰ってそりゃオマエ——」

上条は何気なく言いかけて、ふと口を閉じた。男子寮に居候と同棲相手がいるのはいかななものかと思うので、彼が挽回用の答えの文字列を作り上げようとしたところで。

「そうだぞ当麻。言われてみればその子は誰なんだ？ 泊まりがけで海へ行つたときにも一緒についてきていたが、海の家では父さん達の質問も上手くはぐらかされていたし」

「う、海つて！ と、とととと泊まりがけで海つてアンターっ!」

うるさいのは貴音だけで十分だったの。と上条はうざそうに顔を歪めると、ポツリと言った。

「かくゆう短髪だつて、どこに住んでる誰なの？ とうまのガールフレンドかなんか？」
「えっ!? い、いや、別に私はこんなのと何かあるわけじゃ……」

「とうまの学校の応援にも来てたよね。確か『ぼうたおしー』の時」
「ちがつ、ちよ、黙りなさいアンタ!!」

インデックスの言葉に、上条と貴音は『あー、それで借り物競走の時……』と納得していた。

インデックスはインデックスで興味がないのか、テーブルの上にある詩菜のお弁当をそわそわした目で眺めながら。

「とうま、たかね。私はいいい加減にお腹がすいたかも。今日はたかね、お弁当作ってこなかったの?」

「あら。今日は、という事は、いつもはどうなのかしらね。当麻さん」

「だから、インデックスは貴音の所に居候してるんだって」

「あら、そうなの？」

「ええ。私と一緒に住んでますよ？」

嘘は言っていない。と、二人して心の中でガクブル震える上条と貴音だったが、同時にバレたらマズいな。と思っていた。

「まあ、とりあえずご飯を食べるとしようか。当麻、そちらのお二人にはありがとうって言うておくように。わざわざ当麻が来るまで何も食べずに待っていてくれたんだぞ」

「うえ。マジかあ。俺さっきたい焼き食ったとこだわ」

「おいしかったですよ。たい焼き」

「当麻さん？」

「母上？ あなたはこの大覇星祭の中、いい匂いが充満する屋台の間を我慢して通れとおっしゃるので!？」

「思わず財布のひもが緩むに決まっていますよ!？」

「とうま!？ 私にはだめって言うておいて、自分では食べるのかな!？」

「うるせえインデックス！ オマエは食べる量が常人と違いすぎんだよ!？」

「そうですよ！ 十字教では暴食は七つの大罪の一つです!？」

「私はいいんだよ!？」

*

*

お昼休みが終わり、美琴と分かれた上条と貴音、インデックスは次の競技場へと向かっていった。

「………なあインデックス。この前のローマ正教ってどうやって出来たんだ？」
「唐突だねとうま。そうだねとうまは十二使徒って知ってるかな？」

「ああ。知ってるよ」

「その十二使徒のペテロって言う人がね………」

「という訳なんだよ」

「ふーん」

「その十字架を霊装とかにしたら強そうですね。ここはローマ正教の土地だーって言えばそうですし」

「あるよ」

「えっ?」

「使徒十字っていう今貴音が言った霊装があるんだよ」

「どうやって使うんですか?」

「こっそりと、貴音は後ろ手で土御門にダイヤルしていた。」

「使徒十字は正座の力を借りて使用される大規模霊装。十字架を大地に立てて夜空の光を集めるんだよ。角度を合わせて空からの光を正確に受け止め、それを術式に組み込んで魔術的效果を発動させるんだよ!」

「おおっ。さすがインテックス。魔術の事に関しては一級品だな!」

「えっへん。でも突然どうしてそんなこと知りたくなつたのかな?」

「学園都市の始まりはとある一つの研究所だったと言われてるんだ。その研究所は今どこにあるのかはもう分からない。そんな風に何事にもルートがあるんだったら、十字架

「一つ一つにもそれぞれの始まり方があるんだろ？」

「なーんだ。つてつきりとうまがまた一人で突っ走ってるのかと思ったんだよ」

「毎回毎回走り回っていられるかっての」

「じゃあとうま、私はこもえとお話があるんだよ！」

「おお。じゃあな」

上条はインデックスに手を振ると、貴音の持つケータイに視線を落とす。

『カミヤん。どうやったかは知らないが、自然にインデックスから情報を引き出したな』

「人つてのはこうやって使う物なんだよ」

上条はそのままケータイを耳に当てると。

「そんじやまあ。そつちで調べておいてくれ。こつちはこつちでやることがある」

『ああ。また何か分かったら連絡するぜい』

そして上条は、貴音の腕を引っ張ると抱き寄せて地面を蹴る。そのままビルの屋上に着地すると、上条は貴音に聞いた。

「なあ、お前。俺に何か隠してないか？」

「お、おう？ な、何のことですか？」

「俺の知らないこと。いや、忘れてることはたくさんあるだろうな。だけど、教えてくれてもいいんじゃないか？」

「ご主人。そんなのありすぎて困ります。答え合わせはまた今度にしましょうよ」
「・・・そう・・・だな。じゃあ次の競技場まで競争な！」

「え、あ。ちよつと待っててくださいいよっ！」

上条はそのまま一気にかけ出した。

追撃の再開とその終わり Accidental Fi

ring

今上条は問題の前にいた。競技場に向かう途中、小萌先生とステイルを見つけたのだ。その側に姫神もいた。

「上条君。タスケテ」

「えー……姫神。あれは止めなくていいんじゃない？　むしろあいつは一度小萌先生に本格的に叱られた方が人生のためだ」

上条はそう言ったが、ステイルはその上条に自分の胸元を指して見せた。髑髏の悪趣味なストラップが光っている。どうやら着信でもしているのだろう。

（あれが使徒十字に関する件だったら小萌先生に聞かせるわけにはいかないだろうな……）

上条がそんなことを考えていると、ステイルがお手玉していた煙草の箱を投げつけた。

それを受け取った上条は即座にステイルの考えをくみ取った。

そして一本口に咥えて、煙草の箱を姫神の方へ突きつけると、

「姫神、ライター持ってる?」

え? と反応の遅れた姫神に対し、小萌先生は高速でグルン!! と振り返って、

「上条ちゃん! 何を無意味なチャレンジャー精神を発揮しようとしてますかーっ!

姫神ちゃんももつと強く引き留めなくてはダメなのです!!」

ものすごい速度で接近してきた小萌先生をすりと回避すると、上条は姫神に啜えていた煙草と箱を渡して。

「お望み通り口論は止めた。そんじゃ、後よろしく!」

ものすごい勢いで走り去っていった。姫神は上条から渡された一本の煙草を見つめると、吸い口を彼と同様に啜えようとして、

「何してるんですか姫神ちゃん! あなたも無意味なチャレンジをしなくていいのです!!」

と、取り上げられた。

*

それからしばらくして、一つの競技が終わり上条は町中を歩いていた。

「ご主人。どうしたんですか? 急に立ち止まって」

「・・・血だ」

「へ？」

「それもとびきり強い・・・。誰かが怪我をしてるのかもしれない・・・。距離が遠いの
にこれほどまで強くにおうつて事は、かなりの大怪我だぞ!!」

上条は撃ち出された銃弾のように飛び出した。その後を貴音も追う。

「こっちかつ!」

上条は嫌な予感がしていた。大覇星祭でこれほどまでの血の匂いがしたことは今までない。この血の匂いをかいだことあるのは。裏の世界に生きていたときぐらいだ。

「・・・あそこかつ!」

上条の視線の先に強い匂いを発する場所がある。だが、その場所には学生を中心とした集団が人混みを作っていた。

上条はそれを飛び越えるようにビルの外壁沿いに路地裏の真上まで来ると、そのまま落ちた。

ダンッ! と両足のバネを使って衝撃を吸収した上条が顔を上げてみたのは、

血。

狭い路地だった。

背の高いビルと細い道の組み合わせのためか、真昼なのに太陽の光が全く当たらない。じめじめした道路は黒っぽい色をしていて、空気も全体的に流れが滞っているような匂いがする。

そんな暗い路地裏が、

より一層暗い赤色によって染め上げられている。

「か、上条ちゃあん!!」

聞き慣れた声は小萌先生のものだ。

ただしその体も、服も、擦りつけたような赤黒い血で染まっている。その大きな瞳からぼろぼろ流される涙が、跳ねた血と混じり合って顎に伝っていた。

おもむろにその血に手を伸ばした貴音に、上条は

「舐めるな!」

「んぐっ」

「貴音。その血を今すぐ拭け。もしくは洗い流せ、これは俺達が舐めていい血じゃねーんだ」

「わ、分かりました」

血は、小萌先生のものではない。

小萌先生のすぐ足元に、一人の少女が倒れている。血で染められた地面に黒い髪を浸しているのは、姫神秋沙。その血とは対照的に、顔から手足の先までが、真つ青に色が抜けてしまっている。

「小萌先生。何があつたんですか。姫神は、なんでこうなつたんですか」

「わ、分からないんです」

上条の感情を押し殺したような平坦な声に、小萌先生は震えるような声で応える。

「せ、先生、ここで女の人とぶつかつたんです……。それで先生はちゃんとかめんなさいって言って、その人に笑つて許してもらえたと思つてたんですけど。何か、急に怖い顔したと思つたら、いきなり……。姫神ちゃんに……。ツ！」

「オリアナか……」

「このタイミングで動いたとなれば十中八九ヤツでしょう。……。随分とまた、龍の逆鱗に触れる真似をしてくれたものですね」

貴音が憐れむようにそう言った。

姫神秋沙はオリアナの件には全くの無関係。ただの一般人だ。だが、インデックスと同じ、歩く教会の方法で作られたイギリス清教のケルト十字。それをつけていたという理由だけで、オリアナは姫神に魔術を使ったのだ。

「あつち行つてください」

言葉と同時に、路地裏の入り口に留まっていた人達が、栓が取れたように再び大通りへ戻っていった。

貴音の『人払い』だ。

上条は右手を姫神の胸の中心で開いてそして、姫神の体を喰らうように巨大なガラス細工のような龍が、上条の右手から出てきて姫神の体を通り抜けた。

「ここまでやっておいて、姫神のことをこんなにして、その理由が、間違えただけ、だって? ……あ、の、野郎。ふざけやがってエエエエエエエエエエえええ!!」

上条は手近な壁を思い切り殴りつけた。それだけで壁には円形の穴が開く。泣き続けている小萌先生が、思わずビクリと肩をふるわせる。

「貴音」

「は、はい」

「姫神の事、頼んだぞ。俺はあいつを……喰い殺す!!」

「分かりました」

貴音はそう言うのと、姫神の体に右手で触れ左手は空中に掲げる。例えるなら、まるでアンテナのように。

上条はそれを確認すると芸術品とも称される青い眼を開いて学園都市を掛けだした。

倒すべき敵、守るべき者 Parabolic Ant

enna

「どこだ……どこにいる……、オリアナア!!」

上条は綺麗な装飾品のような眼を限界まで開いて辺りを見回す。

かなりの速さで走っているため、人混みで多くの人とぶつかってしまう。

「きゃっ! ちよつと前見て走りなさいよ!」

「うるせえ! 男とイチャついてろ! 派手な下着身につけやがって!!」

「なっ!」

怒声には怒声で返しながら上条は走る。

「どこだ……どこだ……」

ビルや人や動物までも透けて、遠くの方まで上条の眼には見えている。

「くっ。こっちの『眼』は限界か……。仕方ない」

上条はそう言うと、人混みから飛び出し、少し離れた歩道で止まる。

「……『目を凝らす』」

上条は青い眼を閉じると、赤い瞳となった眼を開く。その眼はまるで、猫や蛇のよう

に瞳孔が縦に長かった。

そしてそのまま辺りを見回し、何かを見つけたのか、上条はもう一度駆けだそうとして。

「……………とうま、こんな所で何してるの?」

上条はギクリとした。

慌てて振り返ると、そこにはチア衣装を着たインデックスが立っていた。

彼女は首を傾げている。

傾げながら、しかしその眉は、怒ったように寄せられていた。

(マズい……………ッ! ウチの学校、次はこの辺の競技場で試合すんのか!?)

上条は一瞬慌てたが、少しして気持ちを整えると、ゆっくりとインデックスから目を離して、

「…………『目を隠す』」

そう呟いた。

「あ、あれ? とうま? とうま!?!」

(悪いな。インデックス)

「とうま!」

(バレて・・・ないよな?)

予防線を張っておこうという考えで上条は眼を開く。

だがそれが仇となる。

「とうまつ! 逃げようとしても無駄だよ!」

「うげっ」

上条は慌てて振り返る。流石に念を入れすぎたらしい。

「きょうぎじょうにクラスの皆が向かってるのに、とうまはどこへ行こうとしてるのかな?」

上条は頭の中で高速演算を開始する。

(馬鹿正直に答えるとインデックスが危険な目に遭う。いや、それは別にいいんだ。十分痛い目に遭って、反省したところで助ければいいんだから)

そう、上条自身は、インデックスが事件の中心に向かってくることに反対はしていない。問題は、“禁書目録”という重要物をイギリス清教に持ち帰られる可能性があること。管理者である上条当麻が、ステイルや土御門の警告を無視したとなれば、イギリス清教上層部も黙っていない・・・。危険な目に遭わせ、管理が出来ていないと見限られると、魔道書図書館を学園都市においておくことが出来なくなるかもしれない・・・。

と、上条は考える。

「あー。えーとだな。心配するな。お前が思うような事件は起きてないから。ただ、暇そうにしているところを、運営委員に見つかって手伝いを任されたんだ。だから安心して、競技場で待ってろ」

「とうま、とうま。次は『くみたいそう』だって言ってたよ。ちゃんと来れる?」
「.....」

上条は一拍置いて、

「行くよ。出来るだけ早く、手伝い終わらせてさ。ちゃんと行く。だから待っててくれるか、インデックス」

叶えられる自信があまり沸かない約束を告げる。

「うん」

「ありがとな」

上条は背を向けて走り出すと同時に、ポケットからも凄いい勢いで一台の携帯電話を取り出した。

『ん。どうしたのだね?』

「馬鹿なことやってんな! 姫神は? 無事ならこっちに合流しろ!」

『んもう。相変わらずユーモアがなくて人使いの荒いご主人様ですね。待っててください

い。今行きますから』

上条はため息をつくのと、その場から高速で離脱した。その直後、光速に近い速度で一人の少女が通りに突っ込んでくる。

「ご主人っ！」

「おう。何か報告はあるか？」

「秋沙さんのほうはご主人自身あまり心配してなさそうなので、特筆することはありません。ですが、イギリス清教が掴んだ情報なら、なんとなく分かりました」

「マジか？」

「ええ。どうやら十字架さんは好きな時に好きな場所で使えるような物ではありませんが、天文台さえあれば使えるようです」

「研究所とかの天文台じゃあなさそうだな」

「ええ。魔術を発動させるための、星座の位置関係を大切にする天文台ですよ」

「……で？ どこなんだよそれ」

「……第二十三学区。航空・宇宙開発分野専用学区です」

「……いつも通り理事長権限で突破しますか」

貴音の返事を聞いて、上条達は音速を超える速度で飛び出した。

携帯を左手に、右手を力一杯握りしめて。

右の拳を握り締める理由 Light_of_a_Night_Sky.

ght | Sky.

オリアナ||トムソンは少々焦っていた。あの場はなんとか逃げおおせたが、対峙した“人間”はその『氣』だけで並の人間を凌駕していた。

(何者なのかしら・・・。あの少年。うふ、お姉さん興奮しちゃう)
オリアナがそんなことを考えていると、

「今夜は星が綺麗だな——、

——こんな夜だ、お前達の願いは聞き届けられそうか？」

不意にそんな声が響いてきた。オリアナは慌てて振り返る。

(何・・・!!)

声をかけられて初めて気がついたのだ。そこに人がいる事に。

ゆつくりと暗闇の中を歩く少年は、余裕そうな笑みを顔に浮かべ、その口には空のビ

ニール袋が唾えられていた。少年はそれを横合いに吐き捨て、口の端から垂れる液体を拭きながら言った。

「よお。オリアナ。オマエ、自分が何やったか分かつてるよな？ 関係のない一般人を巻き込んだんだ。それ相応の覚悟は、出来てるよな？」

「んふ」

滑走路、お互いの距離は二百メートルほど。片方は一瞬で詰める事のできる距離だろう。

「あらあら残念。お仲間さんはおいてきたの？」

「ああ。食事は済んだ。俺は足手まといはいらない。オマエの相手は俺一人で十分だ」

「大きく出たわね。でも、残念だけど期待している結果が得られるとは思わない事ね」

言ってる。と上条は笑う。今彼の目の前にいるのは、敵であり、的でもあるのだから。

「さあ、宴を始めようぜ。夜はこれからだ」

その言葉の直後、戦いの火ぶたは切って落とされた。

オリアナは単語帳のページを噛み切ると、魔術を発動させる。だが少年は、横に素早く移動することでかわす。かわす。さらにかわす。

壁のような魔術を放つ。が上条は高く跳ぶことでこれを回避する。

(!? かわされた)

「なるべく怪我は負いたくないんでね。さて、行くぞ」

上条はそう言うのと、その両手につけていた赤いグローブを胸の前でクロスさせ、

「オペレーション X X」
ダブルイクス

『了解しましたご主人！ X X BURNER発射シークエンスを開始します』
ダブルイクス

「な、何をする気……」

オリアナは上条の両手が輝くのを見て確信する。

(!! さっきの強力な飛び道具!!)

『ゲージシンメトリー！ 発射スタンバイ!!』

「……… X X BURNER!!」

Xグローブの新機能。両腕につけられたカウンタバーナーによって両手撃ちが可能となった最強の飛び道具。

それをなんとかかわしたオリアナだったが、その体はもはや火傷だらけだった。

「弱いな。オマエ。つまらねえわ」

「………」

上条はニタリと笑うとそのまま言う。

「まあどつちにしろ。お前達の計画はおじゃんなんだ。例え学園都市の外だろうが中だろうが・・・学園と自然とを照らしあげるナイトパレードが始まるのは日没と同時。星座の星が顔を出す前かもな。だから、諦めろ」

上条は少しだけ後ずさりしたオリアナとの距離を一瞬で詰める。そしてその右手を振りかぶった。

「俺はオマエを止めに来たんじゃない。オマエに一発食らわせるために来たんだ」

ドゴオツ!! と、恐ろしい打撃音が響く。が、上条は至って真顔だった。

「・・・さて、後は魔術師同士で楽しく鬼ごっこでもしてくれや」
そう言つて上条は闇の中へ消えていった。

——街中。

「ご主人。ナイトパレードが始まると大丈夫ってどういう意味ですか？」

「・・・現在時刻は午後六時二十九分五十三秒」

上条がそう言つた次の瞬間。

ドガツ!! と。

強烈な光が地上から放たれ、夜の闇が一気に拭い去られた。

それは学園都市の至る所に飾り付けてある、電球、ネオンサイン、レーザーアート、ス

終わつた後に待つ者達 Those Who Hold

Out a Hand.

「いやー。忘れてたわwww」

「何が忘れてたよ……。白々しい！」

バチバチと地面に紫電が迸つては消えていく。上条は常盤台中学代表生、御坂美琴の指名により、グラウンドの真ん中辺りで少女と向き合っていた。

「あの一。上条さんはこの後も連戦なので、お手柔らかに……」

そう。上条はこの後も長点上機学園の代表生鈴科白夜こと一方通行と戦うことになつている。

「知らないわよ。怪我しないようにすれば？」

「はあ……」

観客席の方からは、上条が強いのかどうかの議論が聞こえてくる。上条は実況解説の言葉に耳を傾け、

『無能力者を指名してきたと言うことですからね。あえて弱い相手でかつこいいところを見せに行くのでしょうか』

『何せ常盤台の超能力者ですからね』

「・・・余計なお世話だっつもの」

上条の味方、というか応援もちらほらいた。というより、今この学園都市で競技が行われているのは実質ここだけなので、見に来る人の数が半端ではないのだ。

「一番デカイグラウンドってどうなのよ」

「そこであんたを負かしてやるわ!」

試合開始のホイッスルが鳴った。と同時に、上条の元へ代名詞である超電磁砲が飛んでくる。

「おっと」

「・・・消さないのね」

「まあな」

『かわしました! いえ、これは当てなかったただけでしょうか!』

『手加減でしょうか?』

「・・・あー」

「こっちは本気よ!」

電撃の檻が上条を囲む。上条を焼かんと通り過ぎた。

「ビリビリイって、相変わらずビリビリしてんのな」

直撃だった。上条の着ていた体操服はあちこちが焦げ付き、破れているところまであった。かわしてすらいなかった。

「・・・あんた」

「手加減してるって言われるな。だって俺無事だから」

「ふっぎけんじやないわよっ!!」

特大の電撃が上条に向かって飛んでくる。それを上条は数歩下がって右手を前に突き出した。

美琴にとっては何度か聞いたことがある能力が無効化されたときのガラスが割れるような音。それと同時に、美琴の髪から飛んでいた電撃も消えていた。

「・・・ハア・・・ハア」

「ホラホラどうした。みこっちゃん。お前の電撃そんなもん?」

「こ、このやろおお!!」

ズゾゾゾゾゾゾ。と、砂鉄が美琴の頭上に集まっていく。

「お、おお?」

「電流に沿って砂鉄が高速で動いてるわ」

「全面体チエーンソーって訳か!？」

ザザザザザザザザザザ!!! と上条がいた位置の地面が美琴の落とした砂鉄で削

られる。

「ど、どうよ」

『あーっと。これはやり過ぎのようにも見えませんが!』

『地面をえぐるほどの威力ですからね・・・』

全員が心配する中。

「これ、中に空間があるんだな。砂鉄の流れが目に見える。面白ッ!」

「え・・・。アンタそこにいんの!」

「ん。はいはい。上条さんはここですよー」

地面が削られる音をかき消し、砂鉄が強制的に元の状態に戻される。そして中から無傷の上条が姿を現した。

「は、はは・・・。アンタ強すぎよ・・・」

「そうか? お前もまだ伸び代あると思うぜ? なんて立って人は無限の可能性を秘めてんだからな」

「・・・もうダメ」

そう言って美琴は座り込む。

「ん? もう終わりか?」

「これだけやってアンタに傷一つ付かなかったのよ? どうしろって言うのよ」

「さあな」

「今日は私の負けでいいわよ・・・」

「へえ。負けず嫌いの前が負けを認めるとはねえ・・・」

「むっ」

「まあ学生応援席で見てろ。次はあのアクセラレータだからよ」

「負けないでしようね？」

「そんなバカなあ」

美琴が退場すると同時、白夜がリングインする。

「連戦で大丈夫かア？ 上条」

「心配されることでもねえぜ。白夜」

『学園都市第一位の登場です』

『これは、面白くなりそうですね』

開始の合図とともに、上条の元へ砂の津波が襲いかかる。

「連続・普通のパンチ」

「これを拳で吹き飛ばす上条。」

「ハッ。やっぱ聞く分けねえか」

そういう白夜の手元には小さな風の集まり・・・いや、あのとときと同じ高電離気体が

あった。

「お、おい……」

「クカカカツ！ 吹き飛ベエツ!!」

それが一気に巨大化した。

(アイツ……。これを生み出すための演算スピードが上がってやがる!?! マズっ。このまま打ち消せるわけが……。いや、枷を外してもいいんだっとな)

上条は半身になって腰を落とすと、白夜が先ほど美琴がやったように上条に落とそうとする高電離気体を目標にする。

「必殺マジシリーズ。マジ殴り」

軽い声と同時に、高電離気体を拳から放たれた拳圧が吹き飛ばした。

「なっ……」

グラウンドはその風であれ、観覧席にまで被害は及んでいた。そのヤバさは誰もが感じていた。それを上条が一撃で葬ったのだった。

「この程度か」

「このッ……!」

右の苦手左の毒手。その両方が上条に触れて――。

「……ア?」

何も起きなかった。これには研究者達も、美琴も、妹達も、もちろん本人の白夜も驚いた。

そして上条は不思議そうに。

「体がプルプルする。なんだ？　これ。筋肉が震えてんのか？」

バツ。と白夜は思わず上条から距離をとる。

（化け物だ……。思わず一瞬でもアイツを殺そうとして本気で向き変換をしたんだ……。だが、アイツは……。）

「案外大したことねえんだな。一方通行も」

「アア？」

「学園都市第一位。なんてはやし立てられても所詮は人間が生み出せる者の限界か……」

「ンン？」

上条はため息をつくと、目を閉じてからこう言った。

「——平眼球共。俺に従え——!!」

瞬間。会場を混乱が襲った。恐ろしい莫大な数の視界が突然シャッフルされたのだ。実況者は見えないながらに叫ぶ。

『な、何が起こったのでしょうか！　我々も何が起こっているのか分かりません！　どうやら今この場の全員の視界がシャッフルされているようです！　原因は彼なのでしょ

うか!!』

運悪く、いや、もしくは良く。白夜の視界と入れ替わった美琴は見た。上条の両目が青く、まるで芸術品のように輝いていたのを。

(・・・な、何よ・・・これ・・・)

終わつた後に待っていた者 The Next Chapter

「お前、スゲー根性だな！」

「ん？」

いつも通りの目に戻つた上条の耳にそんな声が聞こえてきた。混乱中のはずの会場に、たった一人、体操服のジャージを肩にかけた少年が飛び込んできていた。

「さつきから見てたが、お前、スゲー根性だな」

「は？・・・え？ 今時根性論？」

「俺は削板軍覇。超能力者の第七位だ。お前は？」

「上条当麻。無能力者の一人だよ」

そう言つて上条はつまらなさそうに言った。実際問題、目の前にいるこの男に彼は興味が無いだけなのだろうが。

「ハイパー・エキセントリック・ウルトラグレート・ギガエクストリーム、もつかいハイパー・・・」

「？」

「すごいパンチ!!」

直後起きた爆発と、その威力全てを上条当麻は受けきっていた。右手で己の身体を庇うようにして。

(念動砲弾・・・だったか? どう考えても念動力系の能力じゃあねーだろこれはっ!)
「すごいパンチを受けきるとは・・・なかなかの根性だな!」

「・・・・・・・・付き合ってらんねー……。一撃で決める」

上条はそう言うやいなや、いつも通り拳を握り削板の腹部に一撃を叩き込んだ。

会場を振るわせる轟音に、皆の視線がそこに集まる。上条はいつも通り、感觸の無くなった拳の先を少し眺めて、踵を返して歩き――

「こりゃ、根性入れねーとヤベーな」

――だそうとして止まった。

(なっ・・・・・・・・! 相応な威力で殴ったはずだぞ!! 一体どんな身体の構造してりや今の攻撃で起き上がれる!)

「こねーのか?」

(インパクトの瞬間に威力を受け流した・・・? 根性論を掲げる奴にそんな事ができるとは思え・・・・・・・・)

「超・すごいパンチッ!!」

「ッ！」

上条は相手の力を冷静に分析するために、あえて左手で受ける。

(コイツ！ 根性でここまで強くなったとしたら、ほぼ俺の下位互換だぞ!?)

「さつきまでの根性はどうしたーっ！」

「っ。根性じゃねーよっ！」

人の反射神経を超えた速度で繰り出された上条の拳を、削板は首を捻ってかわす。

(見えてっ！)

「根性ッ！」

「潰されてTシャツにでも張り付いてろ！」

言い合いをしながら上条と削板は闘いを継続する。上条は技術優先で、削板は力優先の拳がぶつかっていく。

「超ッすごいパンチ！」

「連続・普通のパンチ！」

拳と拳がぶつかり合うが、その威力も数も上条の方が上だった。

(削板軍覇・・・超能力者、第七位・・・念動砲弾・・・)。良く分からない力つて言う点では、上条^オ当^レ麻と似たような能力なんだが・・・そんな事よりもアイツ自身が一番厄介だ！・・・ハア)

「根性オオオ!!」

「るせえ! 何でもかんでも根性で何とかかなると思うなバカ者め!」

上条はそう言うと、右手に赤いボンゴレのガントレットを出現させた。

「パワーフルチャージだっ!」

『All, Right. Master』

「マスターブラストッ」

前方に構えられたガントレットから、異能の力をかき消す幻想殺しの力を持ったエネルギーの奔流が削板軍覇に向かって撃ち出された。

「スゲー根性だ!」

(・・・また根性かよ)

それすら耐え切った削板にある種の尊敬を抱きながら上条は腰を落とす。

(コイツ相手に本気になるのもどうかと思うけどな・・・。脚力全開で行くぜ!)

瞬間。上条の体がかき消えた。

そして、消えたと思ったら数十人に増えていたのだった。

「おおっ。すごい根性だな」

「行くぜ。両手連続・普通のパンチ」
そして競技場に噴煙が舞った。

アドリア海の女王編

北イタリアの旅行 Un_Viaggio_in_Italia.

上条当麻は不幸な人間だ。もう一度言おう。上条当麻は不幸だ。

「えー、来場者数ナンバーズの結果、あなたの指定数字は一等賞、見事ドンピシャです！
賞品は北イタリア五泊七日のペア旅行、おめでとうございます!!」

何だよそりゃ、と上条はガランガラン鳴り響くハンドベルの音を聞きながら、むしろ肩を落として隣に立ち喜ぶ貴音を睨みつけていた。

ニコニコ笑顔で旅行書類を受け取った貴音と街を歩きながら上条は問う。

「なあ、お前が言うから来場者ピツタリ書き込んだけど……。なんでまた？」

「そんなの。最近二人きりになってないからに決まってるじゃないですか！ しかもイタリアですよイタリア！」

「イタリアねえ……。俺には裏の世界しか思い浮かばねえよ」

「ああく。ボンゴレですネ？」

「リング、炎、争奪、チョイス、7・、アルコバレーノ、ヴィンディチェ……うっ頭が……」
「痛くなりますよね〜」

——と、いうわけで上条と貴音は二人で出かけることに期待していたが……。

「とうま、たかね。二人して喜んでるのはいいけど。私はどうすればいいのかな？」

「……あ」

「忘れていたんだね!?」 私のことをすっかり忘れて、二人でうきうきしてたんだね!」

寮室に帰ってきて現実を突きつけられた。そうだ。いけないではないか。最低でも、貴音は。上条はインデックスの保護者という烙印を押されている。つまるところ。大抵の場所へはインデックスと共に行かないといけないという事。これはペアチケットなので、どちらかがいけない。

「……」

上条は無言×音速というスピードで携帯電話を取り出すと、『おじ』あてに発信する。返答はワンコールもなかった。

『わかつている。すぐ用意させよう』

「マジで!?」 持つべきものはいいおじさんだよなあ。うんうん!」

『ふ。私にできる程度ならいつでも言ってくるがいい』

「(・・・ちよろいな)」

——そんなこんなで翌日の朝。

急遽人数変更が起きたにもかかわらず、案外すんなり飛行機に乗れそうだった。

「忘れ物はねーなー?」

「おなかは満腹!」

「パスポートOK!」

「チケットよし」

「でも二人きりじゃない・・・」

すでに何度か海外旅行を経験している上条と貴音は、完全に楽しんでいた。

チケットを見せ搭乗ゲートへ向かう上条。その時、そばにいた客に聞かれた。

「あんた。ずいぶん荷物が少ないね? 外国に行くのに大丈夫かい?」

「大丈夫ですよ。俺はそっち系の能力者なんで」

ああ。便利、と上条は思う。能力と言っておけば大抵何とかなるのが素晴らしい。と

彼はインデックスと貴音をつれ、自分たちが乗る飛行機に向かうのだった。

離陸まであと三十分。

そろそろ旅客機のエンジンもいい感じに温まってきたている頃合だった。

キオツジアの街並 Il_Vento_di_Chiooggia.

北イタリア、特にヴェネト州の玄関口といえはマルコポーロ国際空港が有名だ。

アドリア海に浮かび『水の都』と呼ばれるヴェネツィアからは対岸に当たるイタリア本土沿岸にある空港で、用途も観光客の郵送が大半だ。ここからバスや鉄道を使って唯一の陸路である全長四キロ前後のリベルタ橋を通り本島に入るか、後は対岸からボートを使った海路で入るかで観光客の流れが大きく分けられる。

「んーっ！ 着きましたなあ！ イタリアアッ！」

「ほんと何年ぶりでしょうね〜」

上条と貴音は思いつ切り伸びをして体から力を抜く。空港から出たばかり、というにはどうにも荷物が少ない状態だが。

「うっひゃ〜いるいる。空港での外来人を待ったストリートチルドレンが」

「とうま。テンション上がつてるところ悪いんだけど。確かにイタリアは物騒だけど、あまり詮索しないほうがいいかも」

「マジか！」

そのあと、上条たちがガイドに置いて行かれるという事態が発生したのだが、無事バスにも乗れたのだから良しとしよう。

今はホテルに向かう道すがらの細い通りだ。

上条はあー、あー。こんな感じかーとか思いながら歩いていたが、貴音にツイツイと袖の裾を引っ張られた。

「なんだ？」

「インデックスがいらないんですけど……」

「……ん？ へ？（。 ㄩ。）ハア!?」

上条は二、三度辺りを見渡した後。

「インデックス!! どこ行きやがった!! どうすんだあああああ!?!」

「え、えとどうしましょう!?!」

一応上条たちの頭の中にホテルへの地図は入っている。だが、インデックスにその地図を見せたことはあっても、彼女は禁書目録なのだ。こんなところで離れた時点で危うい。

「テメツ……自分がどんだけ大切な存在か自覚し忘れてんだろツツ!!」

叫びに周りを歩く人が振り返ったが、上条にはそれを確認するだけの余裕もない。すると、貴音の胸におでこを押し付けるように崩れている彼の元へ、地元のおばさんが近

づいてきた。

彼女は力仕事でもしているような、どこか豪快さを感じさせる笑みを浮かべつつ、

「Ci sono delle preoccupazioni?」

「へ?」

何か悩み事でも? と言われているだけなのだが、貴音は突然のことに対応できていない。貴音は外国語の読み書き、話すができても聞き取るのが苦手なのだ。

「・・・Bene. Non ho visto la parte posteriore di una ragazza di questo molto indossava un abito bianco? (・・・えつと。白い修道服を着たこのくらいの背の女の子見ませんでした?)」

「・・・Hm. Abito bianco・・・ Mi dispiace, non ho visto (うーん。白い修道服か・・・。ごめんね、私は見えないや)」

「Capisco. Grazie (そうですね。ありがとうございます)」

「ご、ご主人?」

「・・・ああ。お前聞き取り苦手だったな。インデックスの特徴を聞いて、知らないって言われたところだよ」

「ほほう」

「うーん。八方塞がりか……」

「あら、困っていらつしやるのですか？」

「？」

二人して首を傾げた。まさかここにきて日本語を耳にするとはい思ひもしなかつたからだ。

「オルソラ！ どうしてここに？」

上条は思わず、首をかしげて問いただしてしまった。

「かく言うあなた様は何故こんな所に？ 確か、日本にある学園都市にお住まいでございましたよね？」

「旅行でな。そつちは？」

「実はつい先日までこちらに居を構えていたのでございますよ」

「ふーん。戻つて来てゐることは、今日は引越しか何かか？」

「ええ。今日は家財道具をロンドンに送るために戻つてきたのでございます」

「ほう」

上条がふと隣に目を移すと、救世主が現れたといわんばかりに、知り合いに会えて涙を流しかけている貴音の姿があつた。

とにもかくにも、無事にオルソラの口からインデックスがどこにいるのかの情報を聞き出した上条達は件のオルソラ邸に向かうことにした。

ロンドンへの準備
U n | F r a m m e n t o | d i
u n | P i a n o .

オルソラの住んでいた家は、大きな通りから一本小さな道へ入ったところにあるようだ。すぐそこに海水の運河が流れていて、潮の香りがする。石畳の道路に小さな貝がへばりついている。

どうやらアパートメントの一室を借りていたらしく、彼女が立ち止まったのは五階建ての四角い建物の前だった。といってもオートロックに床暖房完備の現代的建物ではもちろんなく、壁の表面は薄いベージュ色に塗られた煉瓦造りで、何だか歴史的建造物のような風格すらあった。

「凄っ。学園都市と比べちゃいけないのは分かっていますが……、周りも周りですごめかしい建物ばかりですよね」

「何でもかんでも発明して最新の物と交換したがる。学園都市と同じにしちやいかんだろ」

「古めかしいのではなく、実際に古いだけなのでございますけどね」

オルソラのその言葉に上条が『あ、そうなの?』と聞くとオルソラは肯定の返事だけ

「んー？」

「か、勝手にはぐれたことも、当麻の気持ちも考えずにのんびりしたことも、全部謝るから許してほしいんだよ——っ!!」

「……いいか。次勝手な行動とつたら月に飛ばすからな？」

「さ、さらに酷いところへっ?」

右手をならすのをやめた上条はそのまま右手をスナップする。するとインデックスが頭を抱えて苦しみだした。

「いや〜！ たかねにぐりぐりされてる感触があるーっ!!」

ぎゃー！ とかいいながら転げ回るインデックスを一瞥すると天草式の面々をチラリと見る。と、彼らはどうも、風景に不釣り合いなひそひそ話をしていた。貴音も気になるのか、上条の側へと寄ってきた。

「……あれが教皇代理が一目置いていた御仁……。しかし実力はいかほどのものか……」

「そこに疑問を抱くのは、あなたがオルソラ様救出作戦に参加していなかったから……」

「かの御仁は、ローマ正教が誇る二百五十名の戦闘シスター相手に武器も持たず、あの二人で宣戦布告をした殿方なのですよ……」

(なにげに私は戦力外通告ですか?)

(土壇場でのあの最終兵器は貴音が起こしたようなものなんだけどな……)

「あとこれは近頃になって教皇代理が得た情報だが、学園都市では七天七刀を手にしたあの女教皇様^{プリエステス}に拳一つで立ち向かい、顔面を殴り飛ばして地に手をつかせ、泣かせたとか……」

天草式の面々の会話がピタリと止まる。思念会話をしていた上条達もピタリと止まる。

最初に話を始めた少年が音もなく首だけ上条達に向けて、

「……怪物?」

「おいテメエら。人の顔見るなりその曲がりに曲がつた評価はなんなんだよ? そもそも、俺は神裂の顔面なんか殴ってねーよ。蹴りは一発か二発入れて泣かせた記憶はあるけどよ」

上条は唇の端をひくひく震わせながら訂正する。それを見た天草式の面々は顔色を真っ青にすると慌てて部屋の中へと逃げ帰る。

理由として、上条が否定ではなく訂正で済ませたため、化け物認定されているだけなのだが。あまり間違っていない。

上条はその後の天草式の会話にため息をつくとき、早々に部屋の奥へと入り込んだ。

「あうあう。待つてくださいよう」

「・・・・・・・・おかしい」

「? 何がです?」

「平和すぎる。絶対何かある。ここまで不幸件数が低すぎる……。貴音、嵐があるぞ」

「A・R・A・S・H・I?」

とりあえずオルソラの手料理を食べ、引越しの手伝いをした上条達が外を見ると、すつかり日は落ちていた。

「・・・・・・・・ふう。終わったな」

「ですね」

「これからどうする? オルソラは?」

「これからキオツジアにお別れを告げに回りたいたいと思っています」

「ふーんそうか」

上条は貴音とインデックスとともに、オルソラに別れを告げてそれぞれ反対へ歩き出そうとした、まさに一歩手前で、

ピクン、とインデックスが顔を上げて、

「まさか・・・・・・・・これって」

突然彼女が叫んだ。

「みんな伏せて!!」

上条はとりあえず、オルソラの元に走る。こういう場合、狙いはインデックスでも、上条当麻でもない。ついこの前までここに住んでいたオルソラの可能性が高いんだから。

ガチンと、どこか遠くから金属のような音が聞こえた。

貴音が笑う。

上条がオルソラを抱えて跳んだ。

その瞬間。先ほどまで上条達がいた辺りの地面が抉れた。

「ご主人。狙撃です」

「どこから狙ってるか分かるか?」

「ここから今の場所を狙える場所は二つ。ポイントそのうち一つは目視できる場所ですが見えな

い。なのでおそらくもう一つの方かと」

「了解」

上条はそう言うのと、自信の影の中からスナイパーライフル取り出し、一発撃つ。

その視界の端で、貴音が水路へ引きずり落とされた。

「たかつ!?!」

「だいじよぶ・・・ですつ!」

「おま、昔からの病気のせいでもともに泳げねえだろつ!」

上条も慌てて飛び込むが、その際襲撃者と思われる者の顔面を蹴り飛ばしていた。水の中に沈んでいく貴音を引き上げて水面に顔を出させる。

「おい。水飲んでねえだろーな!？」

「え、ええ……何とか……」

上条達の耳に太い男の叫び声が飛んできた。インデックスが何かをしたのだろう。

そして上条の耳にイタリア語が聞こえてきた。

Abbandoniamola i vanguardisti

「前衛は見捨てる！」

Ora si ritira da qua
今すぐここで撤退の船を出せ!

Quella donna uccider sulla nave
あの女は船の上で殺してやる!!

「……」

「へ? え?」

真剣な顔をする上条に貴音が不思議そうな顔をするが、上条と貴音の下に地面が出来る。

「はっ」

そのまま上条達は打ち上げられた。運河の底から飛び出した、一隻の帆船の甲板の上。

「まるで幽霊船だな」

その帆船は氷のような、半透明の物質で作られているようだった。マストや帆、ロー

「プまで全て同じで、帆船と機能するか疑問に思えるほどだった。

「それ、本当にそうですよね……」

「そう、それ以上におかしいのはこの船のサイズだった。

運河の幅は二、三十メートルはあったはずだが、飛び出した船は横幅だけで運河の壁となる左右の道路を砕き、強引に本体を膨らませていた。

「……こんなもん、今までどうやって隠れてたんだ?」

横へ広がっていた船の甲板は、手すり辺りでオルソラを引っかけると、今まで道路の高さに固定されていた甲板が一気に真上に突き上げられた。

「きゃ……ッ!!」

オルソラは船の縁に引っかかっているだけなので、上条と貴音は慌てて甲板を走りオルソラを引き上げる。

「大丈夫か?」

「え、ええ。何とか大丈夫でございますよ……」

「インデックス!」

「な、何かなとうま!」

「天草式の連中に話を伝えろ! この船、おそらく一隻じゃないはずだ!!」

「へ?」

「いいから、天草式の連中に、協力を仰げつつってんだ！ 魔力のない魔道書図書館が一人でも無理しようとするじゃねえっ!!」

「わ、分かったんだよっ!」

走り出したインデックスを見送ると、上条はオルソラを支えるようにして船内へと入っていく。

その時、この船に大きな振動が走った。

「な、何? なんなの!?!」

「石橋だ。この船、海に出る気だ」

「なんですとお!?!」

「大きな声を出すな。とりあえず今は隠れて様子見するぞ」

「は、はい! 分かったのでございますよ」

楽しく始まったはずのイタリア旅行は、思わぬ形で別の側面を見せ始めていた。

水の都の船の上で I l | m a r e | e | l a | S c o
n f i t t a .

「いやー。完璧に氷だな。こりや」

上条は隠れた部屋（おそらく砲台を扱う場所）の中で気楽そうに言った。

「・・・これ魔術なんでしょうね。ご主人、うかつに触れないでくださいよ？ ふ、船だけ消し飛んで海にポチャンとかごめんですからね？」

「へいへい」

上条は軽く返事をする。

（どうやら、不死身になってもプールの授業をまともに受けていなかったってのはイタいみたいだな。泳げないって怖いことだよ・・・。かくいう俺も川に架かる橋の上だけは嫌いだけど）

「・・・ご主人。凄いですよ」

あ？ と上条が貴音とオルソラが覗く照準窓をのぞき込むと、暗い海面だけが見えていた。

「暗いな」

「こちらが明るいですけどね」と。

ドパア!! と先ほどと同様海面が爆発した。水を割る轟音とともにシャチのごとく上条達が乗っているのと同じ規模の氷の帆船が飛び出した。そうしている間にも次々と海面を砕いて半透明の軍艦が現れる。ここからでは一方向しか見えないが、おそらく四方で同じ事が起きているだろう。

水平線まで何もなかったアドリア海が、無数の船で埋まっていく。

「……まるでこの海の王国だな」

「さしずめ旗艦は女王って所ですか?」

上条の言葉に貴音が乗ったところで、突然船室のドアノブが回った。

「……あー。まあ、魔術で作られた船だから、その辺は自由か」

ノブの音は一つではない。

がちやちやちやちやちや!! と数十もの音が一気に重なった。どうやら船のドア全てを開け放ったようだった。

「探すの面倒くさがりですか」

「んだそれ」

そしてドアの外——通路には、早足で部屋を見て回ろうとしていた人物が、ちよう

ど上条の前で動きを止めていた。

「アニエーゼ……」

「サンクティス……」

上条はラツキーと口に出すと同時、瞬時にアニエーゼを拘束した。

「むぐ!!? むぐぐぐ!!?」

「ちよーと大声出さないでねー。はいはい。大丈夫だからねー?」

「よいしよつと。さて、説明してもらいますよアニエーゼさん。この艦隊が、一体何をす
るためにある物なのか」

そう言つて貴音はアニエーゼの口の部分のみ拘束を解く。

「ちよつと、なんで私は捕まつてんですか。普通は逆でしょう!」

「知るか。こっちは見つかったら殺る気でいたんだ。死ななかつただけでマシと思え
よ」

「あ、相変わらず、ぶつ飛んだ考えをお持ちなんですネ」

「悪いですか? こっちはそういう世界に生きてきたんです」

「で? この艦隊はなんなんだよ」

「……いいでしょう。説明してあげますよ」

おう、話せ。と言う上条を一瞬にらむアニエーゼだったが、手も足も出ない状態なの

に気付き黙り込んだ。

「まずこの船は『女王艦隊』です」

「ふーん」

「アドリア海の監視のために作られた艦隊なんですけどね」

「で？ 結局、この艦隊を使って親玉は何をしようとしているんだ？」

「その前にもう一度確認しますけど、貴方達は『アドリア海の女王』とは無関係なんですよね」

「アドリア海の女王……。ローマ正教の対ヴェネツィア攻撃用の切り札か！」

「あなた物知りですね」

「一応な」

「そんな物が今更ヴェネツィアを狙っているって言うんですか？」

「そんなわけないだろ。多分コイツが狙ってるのは……、学園都市だ」

「……ツ!?!」

貴音が驚いたように目を見開くが、アニエーゼも同様に驚いていた。

「で、でも。対ヴェネツィアなら、ヴェネツィアにしか砲頭は向かないのでは？」

「バーカ。それは正規の方法で撃つたときの話だろ？ つまり、この艦隊の中におかしな魔力の流れを生み出しちまえば話は早いんだ」

「……………」

「簡単だろ？ 一人の精神を壊してしまえば、それだけで照準は狂う。それを上手く調節させれば、任意に標準は変えられるんじゃないか？」

「……なるほど。つまるところ、アニエーゼさんは人柱って所ですか」
「……………」

「アニエーゼ。お前ボスに会ってアイツをひとまず安心させてこい。こっちはこっちで、暴れる準備をするからよ」

「な、なら。あのとときのアンタみたいなのを期待してるんですけど」

「なんだ？」

「シスター・ルチア、アンジェレネの両名を助けてはくれませんかね」

「ん、いいぜ。暴れるついでだ」

「久しぶりに暗殺者アサシンになりますよ」

「オルソラ、お前も来いよ」

「は、はい！」

アニエーゼと分かれて上条達はシスター二人を探して歩き出した。



しばらく歩いていると上条が立ち止まる。貴音が彼をのぞき込むと、彼は美術品の眼を細めて、

「……見いつけた」

そう言った。

(……わお。ご主人が義眼を開いているなんて珍しいですねえ！)

(……別にいいだろ？ こうやって探す方が楽なんだよ)

そして、二人の暗殺者は動き出した。

ドアの前にいた氷の鎧を音もなく撃破して、扉の前まで移動する。そして、扉を爆破で吹き飛ばすと同時、煙幕に紛れて五人の男達を絞め落とした。

「……鈍つてはないな」

「ですなー。さて、そのシスター！ あんたらの隊長に頼まれて、助けに来ましたよ！」

「……助けに来た。そんな言葉を私達が信じると思うのですか。そもそも貴女達に敗北したからこのような場所に放り込まれたというのに」

「ああ。そりや悪かったな」

上条は誠意とか言葉だけの謝罪を述べる。そして上条はしゃがみ込んで、ルチア達と目線を合わせると。

「そつちがこつちを信じるのは、全てが終わつてからでもかまわねえよ。アニエーゼが今陽動で動いてくれてる。こつちはその間に準備を進めなくちゃならない。その前に、あいつが言つたんだ。オルソラの時みたいに、お前達を助けてほしいつてな」

「・・・・・・・・」

「し、シスター・アニエーゼに・・・・・・・・ですか？」

「別に信じなくてもいい。だが俺は勝手にお前らをおの艦隊から引き離す。アイツに頼まれたからな」

「ま、まさかシスター・アニエーゼは・・・・・・・・」

「今旗艦に向かつてる。この女王艦隊の旗艦、アドリア海の女王の人柱なんだろう？ 困だ」

「お、困つて！ あなたつ！」

「俺はお前達とは異教徒で、顔見知り程度でしかなく、信頼できる相手じゃねえだろうな。だから信じろとは言わない。だが、これは俺のプライドの問題だ」

「・・・・・・・・プライド？」

「俺は、俺と一度でも関わった人間を、老衰以外で死なせる気はねえんだよ」

上条はそう言った。ルチアはその言葉を信じることにした。自分たちをまつすぐ見るその目に、偽りはないと感じたから。

貴音も、ルチアが縦に首を振った事に安堵したその時、

「ゴガツ!!」と。突然、氷の壁を打ち破る爆発音が炸裂した。

その爆発音と衝撃波だけで、上条達は床に投げ出されかけた。無論オルソラ達は投げ出されたが。

見ると、上条達がいた船室の壁が破壊されていた。

「なるほど……」

「……ネズミは排除つですか?」

「人をテーマパークのメインキャラクターにするんじゃねえっ!!」

次々に砲弾が上条達の乗る船に当たっていく。

「あつはつはつはつはっ!!」

「な、何を笑っているのです!」

「いやー。インデックスもたまには仕事をするんだなって思つてよ」

「な、なんの話ですか!?!」

「貴音、俺の死ぬ気は絶望からじゃない。希望から生まれるんだぜ?」

上条はそう言うのと傾く船の床で踏ん張り、拳ほどのサイズの箱を取り出す。そこに開いた穴に右手の中指にはめられたリングに灯された炎をセンターストーンごと突っ込んだ。

指輪を抜くと、箱が開き、そこから一組の手袋とアメ玉サイズの何かが入ったケースが出てくる。

上条は手袋をはめ、そのアメ玉を丸呑みした。

貴音はその様子を見て笑うと、踏ん張るのをやめた。

火砲と砲火の戦い

L o t t e | d i | L i b e r a z i o n e .

船は沈んだ。それは乗っていた者全てが海へと投げ出されたことに等しい。

アニエーゼがいるアドリア海の女王に通信が入る。どうやら、上条達が乗っていた船が沈んだことを伝えるための通信らしい。

が、どうやらその船の沈没跡の下部に巨大構造物があつたようだ。アニエーゼは少し考える。上条当麻自体は信用できる者だ。あの時自分の願いを聞いてくれた時、オルソラを助けに来たときと同じような決意があつた。だが、組織とはなんだ？ 彼はあの時単体で……。

(天草式……ッ！)

そして、アドリア海の女王に今一度通信が入る。

『ビショップ・ビアージオ！ 緊急です！』

「何だ？」

『敵がいます！ 敵は炎で空を飛んでいるようですが……』

「……何？」

(上条当麻………!)

*

上条はその両手に灯した炎で自由自在に空を飛んでは、海水を凍らせて出来たその艦隊を炎の熱で溶かしていた。

「………貴音? 貴音? 聞こえるか?」

『はいはい聞こえますよ——?』

上条が耳にかけたヘッドフォンから貴音の声が聞こえてくる。上条は少し安心して

「スピーカーにしてもらえるか?」

『分かりました!』

ブツツ。と音声が一度途切れもう一度繋がる。切り替えが行われたのだろう。

『とうま! また一人でやるつもり!?』

「そんなつもりは毛頭ない。そこにいるんだろ? 建宮」

『ああ』

「お前から天草式にも要請を仰ぐ。あのデツカイアドリア海の女王の破壊とアニエーゼⅡ
 サンクティスの救出のな!」

『……分かった。だが勝算はあるのか？ 勝てない戦に人員を割くわけにはいかないぞ』

「ハッ。なければ、作ればいいだけの話だろ」

上条は笑うと、空中でX B U R N E Rを放つ。

『……』

「俺が動く理由はいつも一つだ。俺がしたいことをするため。今回はそうだな……。今回も俺の我が儘だ。付き合いきれないのなら帰ってもいいぜ？ 俺と貴音だけで何とかするからよ」

『今回はお前達の救出という目的で、それなりに装備は持ってきている。だが、俺達の位置もバレているため、あまり奇襲は出来ないぞ』

「任せとけ。貴音、俺達で上下艦の危険性を落とすぞ」

『了解です！ ご主人！』

貴音が上条の側の空中にエネとして出現する。その両手には大型の自動拳銃が二丁。

“閃光の舞姫エネ”の出撃だ。

「ほんじゃまあ、いつも通りに」

「いつきまつすよ〜!!」

ドンッ！ と上条達は暴れ始める。それと同時に、下に向いていた敵の目が、上条達を

探すことに必死になった。光速に近い動きで破壊活動が続ける方が危険度が高いと判断されていることだろう。

上条と貴音は別々の艦に降り立った。と同時に、少し離れた艦が左右に揺れる。どうやら上下艦が激突したようだった。

「……………おーおー。派手におっぱじめやがって」

「……………遠慮という言葉を知らないんでしょうかね」

「さあ、お前達の相手は目の前だ。今夜は遊び明かそうぜ！」

同時に二つの閃光が炸裂した。

「人間魚雷、回天。って知ってるか？」

修道服の男達は首を傾げる。

「伝わってないならそれでもいいけど、その名の通り、爆弾を人間が操作するっていう物なんだけどな。ただ落とすだけなら人間は必要ないんだ」

上条がそう言っ指を鳴らすと、空中に穴が開き、黒い大きな筒のような物が落ちてくる。それはその船に激突すると大きな爆発を起こした。

「それが回天だ！ 敵の船を沈めるために日本の軍が作り出した命を粗末にする恐ろしい兵器なんだぜ！」

あつはつはつ！ と上条の笑い声はその場に響く。上条は振り向くと、数隻分離れた

ところにあるアドリア海の女王に向かって飛び出した。

一方、榎本貴音は。

「いつきまつすよー!!」

巨大な白い翼を展開し、そして叫ぶ。

「永久追尾空対空弾、発射!!」

その羽の一枚一枚がミサイルに変化し、周りの船を破壊する。当たらなかつたものも、向きを変換し、必ず命中していた。

「科学の力はこんなもんじゃあすみませんよっ!」

貴音も同様に、アドリア海の女王に向けて駆けだした。

アドリア海の女王 La Regina del Mar
| Adriatico.

上条と貴音はアドリア海の女王の中で二手に分かれていた。アニーゼを助ける役（貴音）ラスボスを倒す役（上条）といった具合に。

さて、そんな役割を承った上条は、つい先程上から崩れてきた天井を右手で破壊したところだった。

上条の前には一人の男が立っていた。豪華な法衣に身を包んだ、四十代の白人だった。

上条はその男、ビアージオリーブゾーニを見据える。

「……その右手」

放たれたのは、以外にも日本語だった。全ての装備を外して、右手の指輪も外していた上条は、その右手をビアージオに向けて広げると

「この右手がどうかした？ うらやましいのか？」

そう言った。ビアージオは顔の表面に皺を生んだ。音もなく表現されたのは、うつすらとした嫌悪と苛立ちだ。

「承服できないな。主の恵みを拒絶するその性質もさる事ながら、それを武器として振り回すというのが何よりも。一度でも御言葉に耳にしたのなら、即座に腕を引き千切つてでも恵みを得ようと努力するのが筋だというのに」

「生憎、切つても生えてくるんでね」

「……、所詮は異境の猿に、人の言葉は通じないか。せつかくそちらの言語に合わせたのに、返つてきた台詞がその程度の品性とはな。ならばこのビアージオ・ブゾーニが主の敵に引導を渡そう。猿が人のフリをするのは、見るに耐えないんでね」

ビアージオと名乗った男の両腕が左右へ交差する。

キン、と小さな金属音が聞こえた。

それぞれの掌には、首にあつた十字架が一つずつ握られていた。

ひゅん、とそれらは上条の腹の前へ軽く放り投げられる。

「十字架は悪性の拒絶を示す」

ゴツ!! と二つの十字架が膨張した。

膨張速度は砲弾に等しい。一瞬で長さ三メートル、太さ四十センチまでに巨大化した十字架が襲いかかる。まるで金属で構成された、鉄骨の暴風だ。

「おっとー」

上条は右手で壁と化した十字架を殴り飛ばす。しかし右手で潰せたのは片方だけ

だった。もう片方の十字架を左手で殴り飛ばす上条。その単純な破壊力で十字架はバラバラに壊れたが、同様に上条の左腕が、溶けたように無くなってしまった。

「げっ！」

即座に再生させる上条だったが、それを見たビアージオは彼を見る目を変えた。

「十字架によつて体が溶け．．．、そしてその再生能力．．．。貴様、吸血鬼か！」

「．．．．．さて、どうだろうね」

上条はニタリと笑う。その口の端、犬歯に当たる部分には人ではありえない鋭さと長さを持った、牙が生えていた。

「断じて認めん。我が眼前にアンデッドが存在し、聖職者の祈りを妨げ、神の奇跡を破壊する。我らが主の定めし唯一の理法を外れた者を、私は断じて認める訳にはいかん」

「そんな事言われてもなー」

「貴様は異教徒でも、猿でもない！ もはやバチカン、いや十字教の敵だ！ 今ここで、このビアージオ・ブゾーニが直々に地獄へ送つてやる」

「そりやそりや光栄だ。だがな、俺はお前らの言う吸血鬼アンデッドは違うんだよ」

上条はそう言うのと、両手の親指と人差し指で四角を作る。だがその手は、数字の三を表すときのように、中指も立っていた。ビアージオの方へ向いた左手の甲には、魔法陣が刻まれている。

「拘束制御術式第三号・第二号・第一号、開放。状況A『クロムウエル』発動による承認認識。目前の敵完全沈黙までの間、能力使用。限定解除開始。」

上条がそう言うのと、彼の手の甲の魔方陣が赤く輝く。

——では教育してやろう。〃本当の吸血鬼ノスフェラトゥ・キングの闘争というものを……」

その言葉と共に、アドリア海の女王の中に、吸血鬼の王が解き放たれた。

それはアドリア海の女王だけでなく、全世界でソレは観測された。数十年前、滅んだとされる吸血鬼と同じだけの魔力量が確認されたのだ。

その発生源である上条当麻はユラリと動き出す。

「——ならば、その悪性は我が十字架が拒絶する」

ゴツ!! と七つの十字架がそれぞれ爆発的に膨張する。

人間の感覚的にはクロス方向に咲き乱れる金属製の爆炎が縦横無尽に舞う。上条はそれをかわそうともせず、そのまま身で受け続けた。

ポロポロになり、既にオーバークイルになったであろうその体は、もう一度再生される。

「……吸血鬼つてのは、吸った人間の命を自分の命に変換する。つまり、今まで吸った

人間の数プラス俺の命を削らないと俺は死なない。まあ最も、今も今までも一度もこの命が削られた事はないけどな」

上条は愉しそうに笑う。だが、その眼はだんだんと正気を失いつつあった。

（マズいな……。ここ最近、輸血の血ばかり飲んでいたから、それに加え怒涛の回復……。くっそ、これでインデックスさえいなければ……。つていうか今この辺りにはシスター姉がいつぱいいるんじゃないか？ やめろ、ダメだ。考えるな！）

上条が慌てて理性を取り戻そうとすると、その半身を十字架が吹き飛ばす。

（あー。もういいや。全世界から敵と認められてもいいから、コイツぶっ倒した後、血を飲もう。もう誰のでもいいからこの渴きを潤してもらおう。うん、そうしよう）

上条はそう思うと、その眼を真っ赤に染め上げた。吸血鬼の象徴でもある、真っ赤な瞳に。

そこからは一方的な蹂躪だった。

まず始めに、上条の影から現れた大型の三つ首の犬が、ビアージオを喰らおうとするが、十字架の攻撃によって甲板まで吹き飛ばされる。

上条は好都合だと言わんばかりに笑って、艦隊の破壊を使い魔達に命ずる。それにテンション上げ上げな使い魔達は、一斉に上条の影から飛び出していった。

そして、上条は十字架の攻撃を物ともせずビアージオまで近づくと、半身を影の狗

に変えてこう言った。

「死なない程度に喰い殺せ」

一瞬で、ビアージオの体はボロボロになっていた。正気を八割方失っていた上条は、ビアージオの背後にあった両開きの扉に手をかける。その先にいる、アニエーゼを新たな目標として。

「.では教育してあげましょう。本当の吸血鬼の『闘争』というものを!!」
by 榎本貴音

開いた扉から出てきたのは、大きな牙を剥き出しにした上条当麻だった。アニエーゼは思わず二、三步下がる。先ほど、扉の向こうから感じ、今も感じる強大な吸血鬼のオーラ。それは目の前の少年から放たれていた。普段は吸血衝動が幻想殺しによつて押さえられているはずだが、上条の目は虚ろで、アニエーゼを狙っているようにも見える。(いや、狙っているんでしょね。吸血鬼が好んで吸うのは童貞と、処女の血ですから. . . 。まあ別に、十字教に未練はありませんし、吸われても.)

そこまでアニエーゼが考えたところで、上条を抱き留めた者がいた。電脳少女、榎本貴音だった。

「.ふう。間に合いました。まさか拘束制御術式を解除するとは.自分で言つておいて、案外簡単にバラすものですねえ」

貴音はそう言うとお上条の唇を奪う。すると、上条に残された二割の理性が戻つてきた。

「たか.ね.」

「ご主人。吸うなら私です。絶対に他の人のは吸わない約束でしょ？」

貴音はそう言いながら服の首元を開け、肩を露出させる。

「あ、あの。上条当麻は、大丈夫なんですか？」

「……ええ。安心してください。こういうときでもなけなしの理性だけは強く持つ男ですのぞ」

上条はその会話に加わる事はせず、貴音の首筋に噛みついた。

「あ……っ。んんっ……」

「なんちゅー声を出してるんですか」

「いや……。だつて……。！ 何度吸われてもっ……。んっ！ 慣れないものは慣れないんですものお……。！ んんっ！」

貴音が体をビクビク跳ねさせたと同時に、上条が首から牙を離す。

「あの、上条当麻。吸血鬼つて眷属から血を吸うものなのですか？」

「あ、アニーゼか。いや、他のヤツはそんなことしないだろうな。貴音と俺が特別なだけだ。アイツは吸血鬼眷属だが、常に美味い血……。まあ要するに処女の血な訳だが……。を有してるから、俺は他の人間の血を吸わなくてすむんだよ。まあ後数秒でお前の血を吸うところだったんだけど」

上条が貴音の方へ向くと彼女はビクビク震えていたのが嘘のように、シャキッと立つ

ていた。(頬は赤く紅潮しているが)

「まあなんにせよ。一件落着という事で、降りたら色々待つてますよ。まあこれからの事はアニーゼさん方自身が決めないと——」

貴音の言葉は、最後まで進まなかった。

ガクン、と。不意にアニーゼの膝が崩れたからだ。

「おい、アニーゼ?」

上条が慌てて支えるが、アニーゼの体から力が一瞬抜け、持っていた天使の杖が、ガラんと妙に響く音を鳴らした。

「がっ」

上条に支えられたアニーゼは、そのまま上条の右手を包み込むように手足を丸め、
「い、ぎ。がアアああああああああああああああああああああああああああああ!!」
アアアアアアアアああああああああああああああああああああああああああああああ!!」
ガチガチと歯を鳴らしながら叫んだ。

何が起きたか分からない。

が、冗談ではないのは、その苦痛に満ちた表情から簡単に理解できる。痛みのほどは想像もつかないが、アニーゼの顔から一気に泥のような汗が噴き出した。

「おい、アニーゼ! どうし——」

言いかけた上条は、ふと視界の隅におかしなものを捉えた。
榎本貴音。

彼女が滅多に使わない。使うことを嫌っている『吸血鬼の力』を完全解放していた。真つ赤な瞳がそれを表し、それだけでなく彼女の体中から吸血鬼としての魔力があふれ出る。

榎本貴音は元々病気だった。突発的に眠くなる病気で、覚醒剤（安全）などを使って目を覚ます治療が現在最も有効と言われている。完全な治療は出来ないため、エネとなり病気が無くなった彼女のテンションは恐ろしいほどに高まっていた。（そのおかげで上条も、彼女が先輩だと気付かなかった）

そんな彼女は、『吸血鬼』としての上条の『眷属』となり、夜の王になったため、病気は眠気という概念が『幻想殺し』によって中途半端にかき消され、夜普通に眠れば、朝眠気に襲われることはないという。（吸血鬼の眷属は親吸血鬼の能力を役務すること出来るため、貴音は上条の持つ体質イマジンイーターも使えるらしい）

話が逸れたが、そんな吸血鬼の力を好んで使わない（上条の力はバンバン使う癖に）貴音が、解放しているのだ。その目線の先には、

ピアージオ♯ブゾーニ。

つい先ほど、上条がポコポコにしたはずの司教が、よろよろと扉にもたれかかりなが

らこちらを睨んでいた。血走った目はギロギロとせわしなく動き、本当に焦点が合っているのかも分からない状態だった。口の端から、だらだらと粘性の強いよだれが溢れている。

そして。

ビアージオは右手をまるで胸を搔き毟るように、首にある四本のネックレスに繋がられた十字架を全部まとめて握り潰していた。その手は不自然に震えている。

上条はその十字架を「芸術品」と称される青い眼で見つめる。

『刻限のロザリオ』．．．．．まさか、それが？ 霊装を介してアニエーゼに何かしたのか!!」

上条は青く光るその両目を極限まで見開いてビアージオを睨み付ける。

その様子に少し気圧されたようなビアージオは笑う。

興奮と緊張を伴う、熱した息の塊を吐き出しながら、

「ハッ、『刻限のロザリオ』か。未調整では使えんよ。今ではまだ正規の『アドリア海の女王』程度しか動かせん」ぐらぐらと揺れる瞳で、上条を睨みつけ「だが、『力』だけならすでにここにある。少しは考えなかつたか。ローマ正教はこれを奪われて自分たちに向けられることを恐れたが故に、照準制限や女王艦隊など様々な手を加えたのだ。ならば実際に敵へ渡ってしまった際、最後の最後の手段として何を用意していたと思う」

つまりは自爆、と。

ローマ正教の司教は、自らをも呑み込むその言葉を、心底楽しそうに告げる。

「ビアージオオ!!!」

貴音は怒り狂っていた。殺気という殺気がその視線に乗せられビアージオを貫いていた。

「絶対許しません・・・ッ！ あなたに教育してあげます！ 人間というものが持つ強さを！ 逃げ場を探し続けるアンタの方が、人間じゃないって事をねッ!!」

貴音は影を操る、上条も手伝うことにする、彼女が本気になったんだ。手伝いくらいはしてあげよう。

上条はそう思い、世界を操作する。青白い月が浮かぶ夜だったのが、真っ赤な血塗られたような月が顔を出す。同じような色をした霧が空を、女王艦隊を覆う。

*

*

『女王艦隊』が崩れていく。

核となる十字架を破潰された事で。

全てを巻き込む大爆破を妨げたと確信すると同時に。

上条は大きな黒い翼を広げ空を飛ぶ。貴音は木の枝に宝石がいくつもぶら下がったような綺麗な羽を広げていた。

「おーい？　なんでその羽なんだ？」

「かわいいでしよう？」

「まあいいか」

そして上条達は、そのままイタリアの地に降りたつた。

学園都市への帰還

L ⊠ i n i z i o | N u o v

〇・・・・・

上条と貴音は現在、インデックスの前で正座をしている。と言つても、魔術的+物理的拘束をされた上でなのだが。周りを見れば、どこから駆けつけたのか神裂やステイルまでいる。

(…・…・…なんで私達拘束されてるんですか?)

(…・…そりゃあ、俺達が吸血鬼って事がバレたからだろ。まあ、故意じゃないけど)

(…・…私にいたっては故意ですよ)

(…・…俺も半分故意だけど…)

脳内でそんな会話をする上条達にインデックスは胸を張ったままの体勢で聞く。

「で? どうまは何で吸血鬼って事黙ってたのかな!?

「聞かれなかったから。それに、今更こんな拘束必要か? 二ヶ月ほど一緒にいただろ」

「…・…そ、それは私がしたわけじゃないかも」

「僕がさせてもらった。今まで知らなかったが、十字教の完全なる敵の種族であると感じたため、念のためだ。一応、インデックス救出の時に世話になったから、拘束で済

ませている」

「ほむほむ」

「俺達は何もしていないのな。俺達の教えは女教皇様と同じ、救われぬものに救いの手を」

「・・・吸血鬼という存在にも手を貸すって事か」

上条はそう言うのと、幻想殺しを全身に展開する。それだけで、魔術的拘束は解かれ、上条の単純な力で物理的拘束も解かれた。

「なっ！」

上条は同様にして貴音の拘束を解くと、眼を真っ赤に光らせて吸血鬼であることを改めて誇示しながら言った。

「俺の事を信じようとはしなくてもいい。だが俺は、俺達は見ても通り吸血鬼だ。だから、仲良くしようとしなくてもいい。返せって言うんならインデックスも教会に保護者権を返す。その代わりその時は、俺に、いや・・・俺達の学園都市に一切手を出そうとするんじゃないぞぞ？」

上条はそう言つて背中から翼を生やすと、空港に向かって飛んでいった。

「・・・インデックス。どうするのですか？」

「わ、私はとうまを信じたいんだよ！」

「そうだね。上に確認を取るまでもない。今彼と繋がりを断つてしまうと、今上条当麻が言った通り彼の住む学園都市とイギリス清教は対立してしまうことになる」

「え？ そうなの？」

ステイルの言葉に、インデックスは不思議そうな顔をして質問する。その問いにステイルは、

「上条当麻が今ここで宣言しただろう？ 学園都市に手を出すな。あれは学園都市と繋がりを断つて言うこと、つまり学園都市は魔術との関わりは無くなる。すると魔術と科学の戦争が始まるだろう。今まで始まっていなかった方がおかしいんだ」

「で、でも何とかなるんじゃない？」

「なるでしょうね。それも、戦争なんて始まらない。魔術が全て消え去るという大一番狂わせのみが起こるでしょう」

「え？ え？」

「上条当麻の恋人であるあの榎本貴音という少女、彼女が手に入れた魔術に対する最終兵器ジョーカーを使われ、魔術師は以前のアニメーゼ部隊のように魔術を使おうとしたところで魔力が暴走し、死に至るだろうね。それだけでなく、各地に存在する霊装や魔術的意味を持つ建築物も全て崩れ去るだろう」

「……わ、わ。私とうまと仲直りしてくるんだよ!!」

走り出したインデックスは建宮にムンズと捕まれた。

「……………その必要は無い。聞いているんだろう？ 上条当麻」

「……………え？」

誰の声だったか。

疑問の声が投げかけられるが、上条当麻は顔を見せない。だが、その代わりに、インデックスが抱えていたスフィンクスが黒猫に変化する。

「「「なっ?!」」」

「す、スフィンクス!」

「……………あの三毛猫ならマスターが連れて行ってますぜ。お初にお目にかかりますな。我が主吸血鬼上条当麻の使い魔にございます。皆様イギリス清教の結論は今後とも禁書目録は我がマスターが預かるという形でよろしいのですね？」

「……………あ、はい。そうです」

「では、インデックスはん。マスターがいるところまで影移動しますんで、あつしの体、そのまま抱いててくださいね。離すと影の中に置いてきぼりですのでお気をつけて」

「ちよ、まっ!」

ステイル達が止めにくるが、インデックスはそのまま落ちるように影の中に消えていった。

*

「……と、とうま？」

「聞いていた。あいつら、深読みしすぎだろ。帰るぞ、インデックス」

「……一日しかないなかったけどいいの？」

「……学園都市が一番落ち着きます」

「ほら、置いていくぞ」

「ま、待つてほしいんだよ！」

上条達を乗せた飛行機はイタリアから学園都市へと飛び立った。

学園都市騒動・神の右席『前方』編

午前中授業のひだまり Winter | C l o t h e

s.

九月三十日。

九月末日であるこの日は、学園都市の全学校が午前中授業となる。理由は単純で、明日から衣替えだからだ。

東京西部を再開発し、都の三分の一もの面積を誇るようになった学園都市は、百八十万年前後の学生を抱える。となれば衣替え一つを取り上げても服飾業界は大忙しだ。

実質的な採寸や注文は大覇星祭前後に済ませているので、今日行うのは新調した冬服の受け渡しだけとなる。しかし、そうであっても大混雑が起こる辺りにスケールの特殊性が見出せるだろう。また、新しい服を『慣らす』意味も含めて、この日から冬服を身にまとうのも風習の一つとなっている。

だが、それも衣替えに縁のない学生にとってはただの午前中授業である。

例えば上条当麻や榎本貴音は、今年高校に入学したため、入学時に購入した冬服をそ

のまま着てもサイズの全く問題がない。よって、今日の混雑に身を投じる必要はないという訳だ。

それは彼らだけでなく、学年単位でそういった傾向があるらしい。バタバタと慌てているのは主に二年生と三年生で、一年生は全体的にのんびりしたものだった。

さて、今は三時間目と四時間目の間にある、十分程度の休み時間である。

「・・・カン」

「ウエ?!」

「ツモ、四暗刻」

「なああ!?!」

「役満三万二千点・・・ツ!?!」

「さあ、キリキリ払え」

上条、貴音、土御門、青髪ピアスの四人は教室で雀卓を囲んでいた。

「もう、つまらんわー」

「カミヤン強すぎだぜい」

「まるで麻雀の鬼ですよ・・・」

「あつはつはつ。雀鬼ってか? 鬼なのは間違いないけどなー」

今のところ上条の一人勝ちである。土御門や青髪ピアスも弱いわけではないのだ。

だが上条には勝てない。

貴音に至っては上条に執行に狙い撃ちされて、シオシオに干からびていた。

「麻雀の打ち過ぎで肩がこってるわ」

「そんなに打つてないだろ？」

「ここんトコ右肩の辺りが妙に痛いし、自分で自分の肩をグニグニしとると今度は左の肩が痛くなってくるんや」

「あー。あるあるだな。最近ないけど」

「でしたら通販で肩もみマシンでも買ってみたらどうです？」

「そういうのは多分ブラフだぜい。特に『気持ち良かったか良くなかったか』なんてのは明確な数字で表せるものじゃないし、『テストメンバーは全員気持ち良いと答えました。あなたは知りませんけど』ってオチじゃねーのかにやー?」

「けっ! 義妹に毎日揉んでもらうとるお前には分からんわい!!」

「毎日じゃねーぜい三日に一回ぐらいだにやーっ!!」

「え。結構少ないんだな」

上条は雀卓を影の中にしまいながら、貴音に肩を揉まれていた。『お疲れ様ですご主人』という言葉と共に。

それを見た土御門と青髪ピアスは何か切れたのだろう。上条に襲いかかってきた。

「うおおおお!? 何だ何だ!?」

「にやーっ! カミやんは今から私刑ですたい!」

「重たいから覚悟せよ!」

「待て待て待て!!」

停止の声をかけながら上条は教室を走り回る。そして気付く。

「青ピ! お前彼女いたよな! 揉んでもらわねえのか?」

「……あ、そやね。つい前のノリでカミやんにイライラしてもうたわ。ボクにはもう肩を揉んでくれる彼女がおったんやっただよ」

くるくる回り出す青髪ピアスに矛先を向けるべく上条は嘘を吐く。

「そうだよな。ついこの間から毎日寮に連れ込んで……、どうせイチヤイチヤチュウチュウしてんだろ?」

その言葉だけでクラスの男子八割が青髪ピアスの方へ向いた。上条は心の中では、否定してくれて、そのまま少しの制裁ですむはずと思っていたのだが。

「なっ……。カミやん何で知つとるん!? 見てたんか!」

「あ!? マジだったのかよ……」

「あー! カマかけよったな!」

「もう遅い……。頑張れ、青ピ」

「アオガミ……コロス」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアア!!」

(悪い青ピ。骨も拾ってやれそうにない)

上条は心の中で青髪ピアスに全力で土下座した。

だが、次の瞬間。

教室内で暴れていた男子達が全員地にひれ伏した。

「ふ、吹寄……!」

「やっぱりこの騒ぎの原因はお前か上条当麻!!」

「俺であつて俺じゃねえ!」

「やっぱりあなたじゃないの! いい加減にしなさい!」

「俺だつて迷惑してんだよ! 何だクラスの三バカつて! 人権侵害以外の何物でも

ねえよ!」

「……主人は吸血鬼のように……」

上条がデカい声で叫んだ後、貴音がポツリと何かを言ったが、クラスメイトには聞こえていない。

「一緒になつてバカ騒ぎしてるからでしょうが!」

「良いぜ! だったら教育してやるよ。本当の上条当麻の実力というものを!!」

上条が能力を解放しようとしたところで、小萌先生が入ってきた。

「さーて皆さん。本日最後の授業は先生のバケガクなのですよー……って。ぎゃああ!! ほのぼのクラスが一転してルール無用な不良バトル空間っぽくなってますーッ!!」

「平和のためです」

「はっ。元から平和だろ」

その場でのこれはお流れとなった。

*

そして放課後、今度は貴音と上条がにらみ合っていた。

「……ご主人。ここは公平に鬼ごっこで決めましょうよ」

「それ、公平か？ まあいいじゃん。やろうぜ」

発端はいかにも簡単な事。吹寄が『何だ、肩こりが原因だったのね。私もそういえば凝るわね』と言ったのに対し、貴音がグヌヌと震えていたのを見た上条が、『諦めろ』と言った事。

「ルールは簡単です。範囲は学園都市、時間は一時間。一時間後に鬼の方が負けです」

「良いぜ？」

「交代の方法は『右手首から先が胴体へ触れた事』。腕や足、頭は交代ではありません」
「ほうほう」

「足止めは何でもござれです。ただし周りの人に危害を加えない程度で」

「了解。それじゃあ最初の鬼は？」

「ジャンケンで決めましょう」

貴音がそう提案する。クラスの皆も何故か帰れずにいる。

「最初はグーッ！」

右拳と左拳が突き合わされ、衝撃波が教室を揺らす。

「ジャンケンホイッ!!」

貴音が上条の拳を開いた手で受け止めた。ドゴンという衝撃が学校の校舎を襲う。

「ご主人が鬼ですからねー。ではっ！」

貴音はエネになると、光速の速さで窓から飛んでいった。

「だ、大丈夫なのかにやー？ カミヤん」

「ああ、大丈夫だ」

上条は待つ十秒の間に、貴音と自分のカバンを影にしまう。

「ほんじゃまあ、行きますか」

上条は窓枠を蹴り飛ばし、街へと飛んでいった。
「……ば、化け物だぜい」

*

人は皆上を見上げていた。ビルの上で交互に何かがぶつかっている。そんな大きな音がするからだ。

音の原因は上条当麻。彼は大覇星祭の時美琴を抱えて走ったときよりも速く、目にも止まらないスピードで走っていた。

(どこだ?)

上条はビルの角を蹴ると交差点を斜めに渡る。上を見上げ、原因を知りたがる人が増えるが、上条は気にしない。

(純粋な身体能力+吸血鬼の身体能力+体強化魔法+推進力。つまり最速！ お前まで繋げたレールを、辿って行ってやるぜ！ エネ!!)

*

悪魔の片方はその両手をもう片方に触れようとして、それを片方が手首を掴んで止めていた。お互いもの凄いい力なんだろう。ギリギリという音が聞こえてきそうだった。

美琴は思わずしりもちをついてその二人を見ていた。周りもその様子に驚いている。

やがて、片方が口を開いた。

「確か手で体に触れないとダメだったんだよな？」

「ええ、ですからご主人の判断は正しいですよ。この距離で手首を捕まれば、体に触れることは出来ませんからね」

「当たり前だ。触れられたらゲームオーバー。なんて修行よりは楽すぎる」

「それにしても、『神々の義眼』まで開眼して、少々本気になりすぎでは？」

「知ってるだろ？ 一度でもあそこに住んだ連中は、本気で遊ぶんだ」

少女はえええ。知ってます。と言うとそのまま蹴りを放つ。それを跳んでかわした少年は、少女の両手首を持ったまま少女の背後に立ち、そのまま手首を持って地面にたたきつけた。

「グハッ!!」

「アデューー!」

「・・・っ、こ・・・んの・・・待たんかこのバカトーマアアアアア!!!」

「鬼ごっこで相手に待てというバカがどこにいる! あ、そこにいたわwww」

「殺す！ 霊符「夢想封印」!!」

「フーフー バカメー。魔砲「ファイナルマスタースパーク」!!」

巨大な弾幕がぶつかり合うのを、野次馬はただ見ていた。その規格外の大きさに、超能力の類いで無いことに気付く者もいれば、レベルの差に愕然とする者もいた。

「カウンターバーナー無しっ。行くぞ」

「は!?! え、ちよまつ!」

「XX BURNER!!」

「げっ。夢符「二重結界」!!」

貴音が慌てて結界を張るが、そこまでの威力は無い。『あれ?』と違って貴音が目を凝らすと、上条の体はXX BURNERの威力で後方へ飛んでいった。

「あ、ああ~~~~!!」

貴音は悲しそうな声を上げると同時、ユラリと立ち上がると結界を張ったまま、空気を切り裂き飛び出した。

「な、何してんのよ。あいつら……」

美琴の疑問に答える人物はいなかった。

*

上条は両手の平から炎を撃ち出しながら、ビルとビルの間を飛んでいた。

周りの音は聞こえない。風を切る音のみが上条の耳には届く。

(・・・貴音、来てんのか?)

『神々の義眼』多数の者から『芸術品』と称されるその眼球の王様を上条は開いて後方を見る。

(来てるな)

貴音はエネの姿となり、上条とほぼ同じスピードで追いかけてくる。

(・・・なるほど。コーナーワークで勝つつもりか?)

上条は右手の炎の炎圧を強め左に曲がる。

(・・・ご主人っ!!)

(コイツ直接脳内に・・・!)

(・・・絶対追いつきます!)

上条と貴音が同時に加速する。通りの上の空中での高速レースが始まった。

(イニシャルって言うより)

(ミッドナイトですね!)

上条と貴音はほとんど同じスピードで飛んでいた。が、上条は何かを見つけ、一気に

急降下する。

「……………ご主人、どこへ……………。って用水路!?!」

そこは人が二人ほど横になれるスペースの用水路だった。そこを上条は水しぶきを上げながら飛ぶ。

「……………良いですよ。ご主人。こうなった以上私も本気を出します!　いつきますよ!　エネちゃん。ブーストツ!!」

貴音が急加速するが、上条も同様に速度を上げる。

(ご主人……………どうしてあんなに早いんでしょう……………?　まさか、晴れ属性の活性と雲属性の増殖で、大空の炎の推進力を格段に上げているのでは!?)

貴音のあながち間違っていない推理に上条は笑う。そして、そのまま用水路に沿って飛び続ける。

(……………さて、仕掛けるとしたら)

(純粋なスピード勝負ですからねっ!!)

用水路の側を歩いていたら人達が悲鳴を上げる。それもそのはず、いきなり水しぶきが上がったのだ。原因はすぐさま別の方向へと消えていくのだが。

(はっはっはっ!　水路の水しぶきをともに食らって!　貴様は無事なのかなあ?)

(嫌みかこのバカトーマ!!)

(フーフーフ バカメー。貴様は俺には追いつけん!)

(ハッその内追いつ・・・へ?)

次の瞬間貴音が見たのは空中で天地逆転した上条が、貴音に向かって左手を向けているところだった。

「ちよっ。まさか!」

「XBURNERエアー!!」

「バリアツ!!」

貴音がそう叫ぶと、彼女の前に簡易結界が現われる。だが、それを貫いて貴音にXBURNERは直撃した。

「わ、忘れてました・・・。。。。大空の炎の属性は・・・調和・・・」

「バリアが効かねえって・・・。なんか、いじめに遭って『〇〇菌』って言われるみたいなものだな」

「・・・実体験じゃないですよね、それ」

「はっはっはっ」

罰ゲームはどんな味? P a i r | C o n t r a c t .

御坂美琴はコンサートホール前の広場にいた。

「……よ!」

「!? あ、アンタ……」

一人でポツンと立っていた美琴の眼前に、いきなり少年は現われたのだった。

「な、ななななんで……」

「いやー。そういう罰ゲームがあったなーっと思ってよ」

「ウゲツ」

「と言うわけで、今日上条さんの買い物に付き合え! それで罰ゲームの命令内容だッ

!!

「は? え、ええ〜!」

美琴の絶叫がその場に響いた。

「……ねえ」

「なんだ？」

「なんで私はアンタと一緒にアクセサリー系を見るわけ？」

「・・・いやね、お世話になってる人へのお礼に、何か買おうと思ってるんですよ。そこで、誰かに意見を聞きたいなーと思っていたところ、ちょうど良く御坂との罰ゲームを思い出したという次第です」

「それって『女』なのよね」

「じゃなかったらこんなキラキラした店には来ねーよ。ギトギトした店にも行ききたかねーけど」

「なんで、私なの？　っていうかどこが罰ゲーム？」

「それを言ったら御坂さんが放電しそうなので言いません」

上条がそう言ったとたんすでに放電が始まったので、彼は右手を御坂の頭に置いて、
「で？　御坂さんはどんなものプレゼントされたら嬉しい？」

「は？」

「今御坂さんは俺の重要参考人なんですよ。分かります？　だから意見を求めているの。やっぱ指輪とかか？」

「結婚の申し出と間違う場合があるでしょうがあああああああ!!!」

「それもそうですねえええええ!!」

突然の美琴の大声に上条は耳を塞ぐ、幻想殺しも音は消せないらしい。

「つていうか、アンタそんなのしてたっけ?」

美琴は上条が首につけている黒いチョーカーを指して言う。その『チョーカー』も今は補助演算用からアクセサリーに変わり、前に黄色の鈴がぶら下がっているのだが。

「ちよつと前からな。というか、真剣に選んでくれないと上条さん困るんですけど?」

「だから、どんな奴に、どんな理由で渡すのよ!」

「お世話になつてる人に日頃の恩返しで渡すつて言つてんだろっつ!」

美琴としては、その『お世話になつてる人』や『日頃の恩返し』という部分が気になつて仕方が無いのだが、まあこれはこれでいいか。とだんだん慣れてきていた。

「で? アンタは何をプレゼントしたいのよ」

「常時つけていられるもの、かな」

「ネックレスとかブレスレットとか?」

「バンブルとかバツクルとか」

「それ、男物でしょ」

「イヤリングとかリングとか」

「だから指輪は……」

「安心しろ御坂。俺は愛の告白は指輪無しでつて決めてるから」

「アンタが決めてても向こうは知らないでしょうが！」
ごもつともである。

「……………さて、御坂。何が良いかな？」

「……………アンタが選ぶとダメ、外に出てなさい」

「……………えー？ 分かったよ」

ミサカとミサカの妹と Sister_and_Sisters.

上条当麻は地下街の待ち合わせ用小広場（禁煙）のベンチに腰掛け、陰から取り出した五〇〇ミリリットルのペットボトルに入った特製ドリンクを飲んでいた。

今は一人きりである。

美琴に店から追い出され、『候補が出揃ったら連絡するから、あんたの連絡先教えなさい！』と半ば強引に携帯電話を奪われ、上条は返してもらったそれを持って待っていた。

「……暇だな」

上条はそう呟くと、神々の義眼を開き辺りを見渡す。

（……学生の街って言うてるけど、用は小さな国だよな。犯罪や悪質な裏の顔。政治問題に高齢者問題……命がけでええつ→へええつ！）

フツ。と上条は自分の頭の中での自分のモノマネに少し笑う。と、上条の視界に御坂美琴によく似た魂が映り込んだ。

上条は慌てて神々の義眼を閉じると、目の前の少女に話しかける。

「よう。御坂妹。……一〇〇三〇二号でいいよな？」

「はい。毎度毎度、よくあなたは私とお姉さまを見間違わないものです」
「まーな。で？　ゴーグルはどうした？」

「……これぐらいのサイズのミサカをご覧にならなつたでしょうか、とミサカは自分の胸のちよつと下あたりに掌を水平に差し出します」

御坂妹が示しているのは、小萌先生と同じかちよつと低いぐらいの高さだ。上条は彼女の仕草を見ながら、やや怪訝な顔をして、

「お前ら、サイズ変更とかできたっけ」

「その反応からして知らないようですね、とミサカは「ああ！　打ち止めかー」……知っているのですか」

「ああ。この辺からアホ毛が飛び出たミサカはミサカはく！　つてやつだろ？　あいにく今日は見てないが……どうかしたか？」

「平たく言えばゴーグルを取られてしまったのです」

「そうか」

上条は御坂妹の言葉に被せるように言葉を放つ、その理由は彼女の語尾が長いからだ。どれだけ短い返事でも、その後のミサカはくがやたら長い時があるため、上条は御坂妹との会話を苦手としていたりする。

「……とは言っても俺は打ち止めを見たわけじゃないしな」

「そこで上条は、一旦区切つて。」

「お前らは？ 見たか？」

と、いつの間にか同様にベンチに座っていた黒猫、植木にとまるカラス、お座りする犬に話しかけた。

御坂妹はその行動の真意が読み取れないのか、首をかしげるし、後ろのベンチに座る中学生ぐらゐの少年は、可哀想なものを見る目でこちらを見ていたのだが、

「あのお嬢ちゃんやろ？ 見てへんで」

「ごめんなーマスター。何なら今から探してこようか？」

「探し物なら任せてほしいのだが……」

「いや、いいさ。知らないならそれでいい。だとよ、御坂いも……うと……？」

上条はクルリと御坂妹のほうへ振り返つたが、御坂妹は何かとんでもないものでも見たかのように目をパチクリさせていた。

（あれー？ なんか御坂妹固まつてるんだけど。いや、猫とか犬とか普通に喋るでせうよ？ カラスも話しかけたら喋ってくれるし……。あ、ヤベ。一般常識自体を忘れてたわ）

半分以上弁解を諦めた上条は完全に開き直つたのか、固まる御坂妹にさも当たり前顔をして、

「え？ どうしたの御坂妹？ 何その顔。え？」

「あ、いえ。何でもありません。．．．そうですよ。学園都市なのですから、実験で喋る動物が生み出されても不思議ではありません．．．」

後半ぶつぶつと何か言っていたが、上条は御坂妹のためにも聞かないでおいた。

「ちよ．．．．．アンタ達何やってんのよ!？」

上条達の元へ御坂美琴が駆け寄ってくる。どうやら御坂妹の顔を見て慌てたようだ。彼女は携帯電話を持ったまま、こちらへ近づいてくる。

「しかし．．．見た目だけはソックリだなお前ら」

魂の波長が見える上条にとつて、御坂美琴と御坂妹の違いは大きい。だが見た目だけは、本当にどうしようもないほどにソックリなのだ。

「ミサカは奪われてしまったゴーグルを取り戻すために遠路はるばる地下街までやってきたのです」

「．．．おい、お前ら。とりあえず散開。打ち止めを見かけたら報告入れろ」

こくりと頷き三匹は散り散りになっていく。美琴は不思議そうに首を傾げた後。

「ああ！ そうよ！ 何でアンタ電話に出ないのよ！」

「は？ え．．．．．」

上条が慌ててスマホを確認すると、そこには“不在着信鳴神娘”とあった。

「あー悪い。ミュートにしてたから全然聞こえてなかったわ」

「ほら、あんたが言ってたプレゼント。選んであげたんだから感謝しなさいよね！ほら店舗に戻る。キリキリ歩く」

「はいはい」

と上条が立ち上がり、美琴について行こうとしたところで、

「わーい。ヒーローさんだー！　つてミサカはミサカは救世主を見つけたことに若干驚いてみる！」

上条の左腕に十歳ぐらいの少女がぶら下がってきた。

上条はその声に心当たりがありすぎて、ゆっくりそこを見ると、御坂妹と同じゴーグルを首に引っかけた打ち止めがそこにいた。

「な、何やってんの？」

上条はとりあえず事情を聞こうと疑問を投げかける。

しかし、答えが返ってくる前に、

「検体番号二〇〇〇一号、ミサカの前にノコノコと顔を出すとは良い度胸ですね、とミサカは本気モードに移行します」

「ふふふミサカはもうそのゲームには飽きてしまったのだ、つてミサカはミサカはr y」
「逃すとお思いですか！　とミサカはカバンの中からサブマシンガンを取り出します

!

「ジャゴツ!! という鈍い金属音に美琴が『ぶっ!』と吹き出し、打ち止めはその間に高速で人混みの中へと消えてしまった。」

「………楽しそうだな。で? どんなの見つけてくれたんだ?」
店の中へ戻っていく上条に美琴は慌ててついて行った。

▽

午後五時。

鈴科白夜は冷房の効いたマンションから外へ出ると、ガードレールにもたれ掛かる。片方の手には連絡用の携帯電話が握られていた。

結局、いつまで経っても帰ってこない打ち止めを捜すことになった。

今日は学園都市全体が半日授業だったらしいが、この時間になると平日とも区別はない。

「………そういや夕立が降るってたなア……」

『あちゃー。そりや降り出す前に見つけて帰りたいじゃんか』

同じくどこかで頭上を見上げているのか、電話の向こうから居候場所の主、黄泉川愛穂の声が聞こえる。

子供を捜すのは時間がかかるとはよく言うが、白夜は幼少期からいうところの手のかからない子供だったため、その経験は無い。最も、一番身近にいた少年達の影響で誰よりも早く大人になっていったのだが。

「オマエは車だろオがよ」

『ドア開けて傘を差すまでも濡れるのは嫌じゃんか』

それぐらいはいいだろ。と思わず白夜はツツコミそうになったが踏みとどまる。経験上、ボケる人間は大抵、ツツコまれると調子に乗るからだ。

「で、あのガキがどの辺にいるのかは大雑把に掴めたんかよ」

『あの子の後ろで流れてたのは近くの地下街で使われてる室内音楽っぽいじゃんか』

「ああ？ 事件でもねエ迷子捜しに解析機材でも使ったのか」

『だから迷子捜しもウチらのお仕事じゃんか。えーつとね。あの子がかけてきた電話の、音声の後ろで流れている音楽を解析して場所を確認してるじゃんよ』

「はん。そりや町中に流れてる『耳に入らない音』の事か」

『へー。気づいている人がいるなんて。厳密には可聴域外の低周波だけどね』

馬鹿が、と白夜吐き捨てた。彼は世界のあらゆるベクトルを観測、計算、制御する能力者だ。目に見えない、耳に聞こえない程度で見逃していたら、放射線など防ぐことはできない。

まあもつとも白夜がそんなものが流れていると知ったのは上条が教えてくれたからなのだが。

「ありや店内BGMとかのスピーカーから、音楽に混ぜてこっそり流してるモンだよな」
『そ。あの低周波だけじゃ意味がないんだけど、私達警備員が持つてる特別な周波数をぶつけると、きちんとした音になるって訳じゃん。スピーカー、一つ一つが違う音を検出するようにできててね、その音を調べると「どこから電話を使っているか」が大体分かる。ま、今じゃ逆探知を欺く機械なんて簡単に手に入るから、こういうた努力が必要じゃんよ』

つつてもこれも探索法の一つで、普通は何種類かの方法を使って多角的に情報を整理するんだけどね、とか何とか黄泉川は言っている。

面倒な仕組みだ、と白夜は息を吐いた。

この手の大雑把な仕掛けを難なく実行していくのが学園都市の特徴だろう。実際には制度の改定や装置の配備など様々な問題があっただろうが、それらを全て『実験だから』の一言で押し通せるのである。

「で、俺はこつから地下街に向かやア良いのか」

『ひとまずは、ね。あのすばしっこいのが一ヶ所に留まっているとは思えないから、そこから聞き込み開始じゃんよ』

「……、この鈴科お白夜れが？ この格好シロずくめでか？」

『はいスマイルスマイル笑顔の練習ー』

無理だろ、と白夜は舌打ちをする。

とにかく彼は悪い意味であまりに有名すぎる。この超能力者が笑顔なんぞ作って接近したら、相手はショックで死ぬかもしれない。『殺人犯に狙われているかと思つてとつさに撃つちやついました』という事態になつても彼は納得する。はつきり言えば、それは仕方がないだろう。仕方がないから返り討ちにするしかない。

だが、何にしても打ち止めを捜すには情報を集める必要がある。

学園都市掲示板にでも聞か、と白夜は思わず呟いた。

と、黄泉川は不意に言った。

『ねえアクセラレータ一方通行』

「何だ」

『そんなに他人に好意を向ける事が怖いのか？』

「……また随分と楽しげな話題だなアオイ」

『暴君つてのは楽しやんか』

黄泉川は話を聞いていない。

というよりも、聞いた上で受け流している。

『そりや人それぞれで苦悩もあんでしようけど、でもやっぱり気楽な部分もあるはずじゃん。だって、暴君は裏切られない。仲が冷める心配もない。自分の見せた好意を跳ね除けられる恐れもない。何故なら恐怖と憎悪の対象でしかないから』

すらすらと言葉は出た。

白夜はそれを聞く。

『人間関係つてのが好意と悪意のみで成立している、なんて単純な事は言わないじゃん。でも、今までの君は目の前の全てを拒絶と悪意で跳ね返せば良かったのは事実じゃん。楽だよな。これからは違うけど。だから尋ねてるんじゃないか。好意と悪意、どちらを見せるのか選ぶのはそんなに怖いのかって』

「見せる見せないの問題じゃねエ」

『ん?』

「俺は見せ方を知らねエ。要するにガキなんだ。何でもカンでも反射してきた俺は相手に対しての見せ方を知らねエ。そんな俺にも友達はある。オマエの言う好意を見せれる友人がな」

『なら——』

「だがな」

白夜は黄泉川の言葉を遮る。

「あいつに俺は好意を見せた事はねエ。あいつが勝手に見てきたんだ。俺の反射の膜を喰い破つて、強引にな。見せるのが怖いんじゃないやねエ。見せ方がわからねエだよ」

『……でも逆も言える』

「見せ方がわからねエから、見せるのが怖い」

『その通りじゃん。距離を詰める方法がわからないから、これ以上それを離されるかもしれない行為に出るのは怖い。自分の行いが裏目に出てさらに距離が遠ざかれば、もう自分からもとに戻すことができなくなるのが。でもね、それをしないことには始まらないじゃんよ』

「説教か」

『柄じゃないのは理解してるけど、私も一応は教師だからじゃん。ま、私ごとき下つ端警備員に、君の闇を知る機会なんてないとは思ってるけど』

「回りくどいな」

『君が昔いた所なんだけど……。出てきた名前が名前だけにね』

「特力研だろ」

正式名称は特例能力者多重調整技術開発所。鈴科白夜が、九歳までいた『学校』だ。そこはとある少女の特性を元に多重能力者の研究・実験を主体としていた。今でこそその少女以外、学生は一つの能力しか使えない、二つ以上の力を同時に発現させるのは不可能だという結論が出ているが、そのデータは主にここで採取された。

つまり、法則を発見するまで延々と『失敗』を繰り返していたのだ。

能力開発は暗示や薬物すら用い、脳の構造に直接影響を及ぼす。その『失敗』という二文字がどれほどの参事を生んだかは想像しない方が良い。死んだほうがマシ、というふざけた言葉の意味を知ることになるからだ。

そしてあそこは潰れた。鈴科白夜がなおも沈み続ける闇の底の底に巣くう黒き龍の皇^{おう}によって。白夜はその事を人伝に聞いた。時を同じくして聞いた『少女』は誰よりも嬉しそだった。自分がその原因の一つだから。幾千もの偶然の中のたった一ピースにハマってしまった事で、『置き去り』^{チャイルドエラー}の子ども達を酷い目に合わせてしまった自分に重い責任を。学園都市の学生の誰よりも大人びた白夜の友人達は、その責任をだれに言われるでもなく自ら背負っている。

「ま、やれるだけやってみんよ」

『頑張るじゃん』

緩やかに交差する二組 Boy | Meets | Girl

(×2).

上条当麻は小さな紙袋を影に閉まっていた。

中には美琴が選んだ銀のハートと星のアクセサリーがついたネックレスが入っている。

彼はため息交じりで、

(「なんか、すっごいオシャレなの買わされたな。ま、アイツに渡すんだから何でもいいだろう。)

「何を莫大な疲労感に肩を落としているの？ ってミサカはミサカは癒し系マスクットとしてあなたの背中に張り付いてみたり」

その声と同時に、背中にのしつという重み加わった。背中に伝わる丸っこい感触に、上条は一瞬驚いて、即行でその正体を確かめるため、後ろに手を回し、背中にくっついてあるものを顔の前に引きずりだした。

「何やってんだ。ラストオーダー」

「えへへ〜？ なんだろう？」

上条が首をかしげると、

上下反対になっている打ち止めも仕草を真似て首を傾げていた。



見つけた。と白夜は思った。

ここは地下街の入り口を入れてすぐそこ………といった場所である。ファーストフード店のオープンスペース、そのテーブルの一つに少女達がいた。

インデックスと榎本貴音。どちらも上条当麻と親しい関係にあるものだ。

片方……、シスターの方が大量のハンバーガーに顔を埋めていたのだが。

「オイ。榎本」

「……ん？ あ、白夜じゃないですか。どうしました？」

「むぐ？ あ、白い人だー」

「ラストオーダー、見たか？」

「ラストオーダーですか？ ちょっと待ってください」

貴音は携帯電話を取り出すと、電話帳を開いたとは思えない速度で耳に当てた。

「……あ、もしもし。ご主人ですか？」

『……………』

「今、インデックスと一緒にファーストフード店にいるんですけど、白夜さんがラストオーダーを探している。」

『……………』

「ほほう。それはまた面白い事ですね。ええ。それでは」

「ン？」

「ご主人が一緒にいるようです。またお互いの位置がわかると言っても、こっちはまだインデックスが食べてるので案内はできませんけど？」

「じゃあ待つか」

「あ、ハイ」



「ミサカはこれをつっぱらってきたの、つてミサカはミサカは戦利品を自慢してみたり」「いきなり泥棒^{ルパン}宣言かよ。やるな、御坂上位個体……………つて、これ妹達が頭に着け

てるヤツだろ」

打ち止めがぐいぐいと指差しているのは、彼女の首にぶら下がったごついゴーグルだ。暗視装置のようにかにも重たそうな軍用電子機器だ。御坂妹が奪われたとか何とか言っていたのはこれのことかもしれない。

と、いうよりまず見てみて分かったのが、これは以前インデックス捜しの時に上条が使ったゴーグル型デバイスの劣化版だ。御坂妹がいうには電子線を見る機能がついているらしい。そのぐらい上条のゴーグルにも付いていた。

「どうもこれはミサカのために作られたものじゃないから上手く装着できないの、ってミサカはミサカはちよつとしょんぼりしてみる」

「はあ？ ようはゴーグルを固定するバンドの長さを調節すりや良いんだろ？」

「？」

「貸してミン」

上条が言うのと、打ち止めは彼の正面に立って、心持ち顎を上げて爪先で立った。これは単に首に下がっているゴーグルを取りやすいようにしただけである。この仕草に何らかの深い意味を感じ取るうとしてはいけない。

上条は打ち止めの首と言わず、頭からゴーグルを外すと、手元でそれを弄りもう一度打ち止めの頭に戻そうとする。

と。

そこで上条は視線を感じた。

嫌な予感がする。

「どうしたの？ ってミサカはミサカは素朴な疑問を投げかけてみる」
打ち止めの無邪気な声にも応えず、上条は己の背後を振り返る。

ゆつくりと、恐る恐る。

「嘘だろ……」

そこにいた人物を見て、上条は思わず呻き声をあげた。

そこにいたのは青髪ピアスと土御門元春だった。

彼ら二人は、一度上条の顔を見て、それから打ち止めの顔を見て、さらにもう一度上条の顔を見た。

それから彼らは言う。

「この子つたらーっ!!」

んだよその分かりづらいリアクションは!! と上条は叫び返す。すぐ側では、早くも警戒し始めた打ち止めが上条の背中に隠れつつある。

土御門と青髪ピアスはお構いなしだ。

「にやーっ！ いや小萌先生とかならまだ実年齢とか色々あるから分かるけどこれってどうなんだにやー申し開きはできるのかにやーっ!!」

「てっ、テメエ!! 節操無しにもほどがあるやろオオがアア!! カミヤんはどこまで全方位死角無しの体勢築いてやがんねん! もう縁側で背中を丸めて膝に猫を乗せとる可愛らしいおばあちゃんとかにも声かけてそうやし!」

だが! と青髪ピアスと土御門は同時に上条の顔を睨みつける。

彼らは最高の笑みを浮かべ、

「友人として! 成功を祈る!!」

この見るからに有害発言者な二人を撤去すべく上条は拳を握る。

「お前ら……………」

幻想殺しという名前は良い。まさにこういうときに振るうべきだと教えてくれる。

「……………滅込みパンチ!」

上条はそう一言呟いて、現況である二人を地面に埋め込んだ。

「あ、あの、お友達? ってミサカはミサカは確認を取ってみたり」

「子供は見ちゃいけません。コイツらの生き様およびトークはまだ刺激が強すぎる」

首から上を地面にめり込ませた二人を放って、上条は打ち止めの頭にゴーグルを引っかけると、歩き出した。

*

「ううむ、個性的なお知り合いだったかも、ってミサカはミサカは腕を組んで首をひねってみたり。そして未だにやや消化不良な部分があるのはどうしてなんだろう、ってミサカはミサカは放たれた言語を一つ一つ再チエックしてみる」

「もういい時間だ。ついて来いよ。白髪赤目の超能力者の所まで連れてってやる」
「え、あ、うん！」

打ち止めが上条について歩いて数分して、上条は人混みの中に見知った白い修道服を見つけた。

「ははっ、あの三人で何が目立つって、あの修道服だろうな」
「？」

上条の言葉に打ち止めが首を傾げた瞬間、人混みの向こうから放物線を描いて少女が上条の首に抱きつく。

「ごっしゅじん！」

「ははっ。どうした？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「よオ、白夜。元気そうだな」

「この肌でどこが元気そうに見える」

「俺から見たらオマエのそれは正常だ。よってオマエは元気。悪かったな、この面倒くさい二人の子守してもらって」

「なんですと!?!」

「いや、そこまで面倒でもなかった。打ち止めの相手する方が疲れる」

「あつはつはつ。お互い保護者扱いされると大変だな。ま、なんかあったときは呼べよ。何だったら声に出さなくてもいい。プライドが邪魔するんだったら、地面を殴るだけでも良い。頼むから、友達を頼ってくれよ?」

「それはオマエも言えることだ。上条。毎回毎回一人で全部背負い込んで。オマエもだ榎本」

「私もですか?」

「・・・友達を、頼れよな」

「・・・ああ!」

「・・・ええ!」

「・・・行くぞ、打ち止め」

「インデックス。帰るぞ」

二組は離れていく。貴音と白夜は同時に来た道を振り返る。
しかしそこにはもう何もなかった。
ただ、漠然とした『人混み』があるだけだった。
いつも通りに。

曖昧に過ぎていく日没 Hard Way, Hard

Luck.

「おおー、雨が降ってる、ってミサカはミサカは夜空を見上げてみたり。ミサカはお月様を見たかったのに、ってちよつとしょんぼりしてみる」

打ち止めは真つ暗になった街の中で、手の平で雨滴を受けている。

パラパラと雨が降っている。

だが傘を差すほどではない。白夜にしてみれば雨など反射してしまえば良いのだから。

「痛っ!! 転んだー、ってミサカはミサカは地べたで状況報告してみたり」

「見りや分かる」

「すりむいた、ってミサカはミサカは掌をじつと眺めてみる」

「痛エのか」

「消毒が必要かも、ってミサカはミサカはちよつと涙目になってみたり」

「. . . あーはいはい」

白夜は面倒くさそうに頭をかくと、近くของバス停を指す。

「?」

「そこにいろ、絆創膏と一緒に消毒液を買ってきてやる」

白夜は薬局に入ると、目についた絆創膏と、消毒液。そして、綺麗な天然水のペットボトルをレジに置いた。

「.....面倒くせエ」

こういう思いやりに溢れた行動は、自分には似合わない気がする。と白夜は頭をか

店を出て、夜道を歩く白夜はそこで足を止めた。

ゴン!! と。

猛スピードで突っ込んできた黒いワンボックスカーが、白夜の体に激突したからだ。

無論。

一方通行たる白夜には、傷一つついていなかった。

(何だア.....?)

車は盗難車。運転手は顔を隠して素性を知られないようにしていた。

(つまり、まア、あれか。 . . .俺に恨みがあるかア、俺を利用しようと躍起ンなってる
研究機関かア、そのどっちかつー訳だ)

白夜は笑う。

憐れむような眼で。

(悪リイが俺は)

ワンボックスカーのベクトルを真下に蹴り飛ばす。

「——もう、戻る気はねえ」

そんな白夜を囲むように、三台のワンボックスが急停止した。

しかし人間は降りてこなかった。そこから覗いたのは無数の銃口。

それを見た白夜はため息をつくと同時に、軽く、地面を蹴った。

変に隆起したアスファルトが、全てのワンボックスのエンジン部に突き刺さり、大きな爆発を生んだ。

「演出ゴクロー。——華々しく散らせてやるから感謝しろ」

炎の中で白夜は楽しそうにいう。

圧倒的なその力を前に。

と、

「だーから言ったじゃねーかよお。あのガキ潰すにやこんなもんじゃ駄目なんだよ。ガキ相手だからって甘い事ばっかしやがって。だから最初から俺が出るつつつてんじゃねえか」

開きっ放しの後部スライドドアから黒ずくめの男が蹴り落とされた。その後から

のっそりと現われたのは、つい最近会った顔だった。研究者のくせに顔に刺青を彫っている。

両手に着けられた機械製グローブマイクロナニユビレータがはめられている。

「……キハラくんよオ、ンダア？ その思わせぶりな登場は。またあの木原神拳で遊ぼうつてのかア？」

木原数多。

かつて、学園都市最強の超能力者の能力開発を行っていた男だ。

だが今は、木原一族は上条当麻の手によってほとんど無力化しているはずだ。何故今？ そんな疑問が白夜の中で渦巻く中、木原数多は口を開いた。

「いやあ、俺としてもテメエと会うのはお断りだったんだけどな。上の連中が言うから仕方ねえじゃねエかよ。何でも緊急事態だとかで手段を選んでる余裕はねえんだと。だから、まあ、悪りいんだけどここで潰されてくんねーか」

「俺を潰すとアイツが黙ってねエぜ」

「そう言うなよ。誰がテメエのチカラを発現してやったと思ってるんだ？」

「あ？ ナニ？ 何ですかその義理と人情に溢れた台詞。似合わねエよ。今すぐ捨てちまえ。忘れてやるからよ」

「……大人の事情だ。だが安心しろ。統括理事長サマはカンケーねえからよお!!」

金属製の細いグローブに包まれた拳が白夜の顔面に飛来する。

それと同時に、白夜は自ら木原数多の方に歩み寄りながら、威力だけを倍増した拳を力ウンター気味に放った。

ゴン!! と。

双方の拳が、お互いの頭蓋骨を揺さぶった。

「あ………? ナニ反射切ってんだこの野郎?」

「反射したらフェアじゃねえだろオが」

数発。殴打の連打が続く。さながらボクシングの試合でも見ているようだった。

一撃。重たい一撃が白夜の鳩尾に入った。

「がッ………!」

さらに数発。顔面に入る。

そこからは罵声と拳の殴打だった。

惨めに地面に這いつくばって、反射をしても木原神拳は防げない。

絶体絶命の状況で、白夜は目にした。

一〇〇メートルほど離れた場所。

そこに、

その先に。

黒ずくめの男に二の腕を掴まれ、

だらりと残る手足を揺らしている、小さな少女がいた。

「回収完了、つて所だな」

やらせるか、と白夜は思った。闇に少女を落とすものかと、白夜は全力で空気を操り暴風を起こす。

「打ち止めアアあああああああああッ!!」
ラストオーダー

ベクトル操作で、木原数多は弾けない。空気を操った暴風を使っても、即座に打ち消ジャミングされてしまう。

ならば、

操られた暴風が、打ち止めの元へ突っ込んだ。

風速二二〇メートル。

少女の体が地面から離れ、風景の影へと消えていった。

「あーあーあーあー」

木原がのんびりした声を上げる。

「ゴルフボールじゃねーんだからよー。ヤード単位で人間を飛ばすんじゃねーよなーもう。飛距離抜群じゃねーかよ。一体誰が回収すると思ってるんだ。俺はやんねーけどな」

その後の白夜の耳に届いた声は打ち止めの回収やら、自分の始末といった言葉ばかり

だった。

「せっかく不意をついたんなら俺を殺さなくちやーなあ。起死回生の一手のつもりかも知んねーけど、あれは一〇分もしねー内にカゴの中だぜえ？」

「……、黙れ。オマエにや……一生、分かんねエよ」

「そーかい。じゃあ殺すけど、今のが遺言でイイんだよな？」
くそ、と白夜は口に出さずに呟く。

助けは？ 来ない。そんな都合良く来てくれるはずがない。自分の力で何とかできない状況に遭遇した所にパズルのピースのようにその解決方法を携えた人間がポンと現われるようなら誰だつて道を踏み外さない。人類皆兄弟。みんなで笑ってみんなが幸せ。極めて優しい幻想だが実際にそんな事が起こるはずがない。

(……、誰か)

それでも、白夜は思う。

(起きろよ幻想^{ラッキ}……。手柄ならくれてやる。俺を踏みにじつて馬鹿笑いしても構わねエ)

雨で濡れた地面に転がり、頭蓋骨を叩き潰される直前で、どこまでも無様に。

(誰か、誰でも良いから、あのガキを……)

願いが届くはずがない。

ハンマー
工具箱は容赦なく振り下ろされる。

その直前で、

爆音と共に工具箱が吹き飛ばされる。

あ？ と木原は工具箱が飛ばされエンジンと痛む手を止める

装甲服を着込んだ連中が、原因を探す。

誰も、誰も吹き飛ばされた工具箱が、かすただけな事に気づかない。

その証拠に、吹き飛ばされた工具箱の飛んだ先には、大きな穴が開いていた。

距離は二〇メートルもない。そこらの脇道から、不意に出てきたのだろう。小雨の降り注ぐ夜の街の中、傘も差さずに立っているその人影は、街灯の光を浴びてぼんやりとその姿を見せている。

青いツインテールに耳元にはヘッドフォン。口元・・・首には悪趣味なガスマスクを付け、黒くダボついたジャージを羽織った目付きの悪い少女。そこまでは普通だった。

圧倒的に異質なのだ。

その両手に持つものが。

それは口径にして三十ミリ。最大射程は四キロと広い。ハルコネン。

それが二丁。そして少女は背中に某ロボットアニメのようなタンクを背負っていた。

白夜は、倒れたまま思い出す。

どこかで。

どこかで見た事がある。

彼女の名前は。



「くっそー。エネのヤツ、出会ったと思っただけに消えちまいやがって。一体どこまで行っちゃまったんだ？」

人気の無い地下街でぼやく上条は、そのまま階段を上がり地上に出る。

「あーらら。雨が降ってやがる」

上条は夜空を見上げて呟いた。パラパラと小粒の雨滴が路面を黒く濡らしている。

(・・・傘・・・、はいらないか)

上条は全身を覆うように能力を展開させる。その瞬間から彼に当たる雨滴が傘の表面のように弾かれていく。

(……………にしても、なんか警備員の数が多いうような……………?)

上条は少し考えてみる。が、その思考は簡単に遮られた。たった一瞬だけ発動した、西洋の術式によって。

(……………天罰術式!? ……だったか? 今確かに魔術の気配が……………。考えずぎかな)

周りでバタバタと警備員が倒れていく。上条はその様子を見て確信する。

(対象に対して敵意を向いたものを昏倒させ、無力化する……………。天罰術式であつてそうだ)

上条は倒れた警備員のトランシーバーに耳を当てると状況を確認する。

(ゲートを破壊して侵入者? おそらく…………魔術師か。学園都市が何の対策も取らないわけがない…………。だが、なぜアイツは俺を頼つてこない? 言いくるめられているのか?)

上条はたまに会う統括理事会の面々を思い出す。くだらない事で真剣に会議したり、学園都市のピンチには珍しく息の合つていたりする彼らは、何かあると真つ先に上条当麻を頼る。

(大丈夫…………だよな?)

そこへ、

上条の腹に小さな衝撃が走った。

誰かがぶつかっただらしい。と、上条が視線を下に向けると、小学生ぐらいの少女の頭が見える。

良く見覚えのある顔だ。

「ど、どうした？ 打ち止め」

ぶつかった。というのは上条は間違っていない。だが、彼女は上条のお腹から背中に手を回すように抱きついていて、離す気はないといった感じだ。

「助けて……」

打ち止めは、上条のシャツを掴んだまま、顔を上げた。

その大きな瞳は真っ赤に充血していて、透明な液体が頬を伝っていた。

冷たい雨の中でも、それがなんなのかすぐに見分けられた。

「お願いだから、あの人を助けて……ッ！ ってミサカはミサカは頼み込んでみる!!」

やっぱその説明口調、雰囲気台無しだな。頼み込んでる事は報告しなくて良いんだよ。と上条は苦笑しながら。打ち止めの頭に手を置き頷いた。

*

学園都市統括理事長・学園都市科学天使・学園都市科学魔神はそれぞれ別の場所で、別の状況で、こう言った。

「さあ。久方ぶりの楽しい楽しい潰し合シヨータイムいだ」

冷たい雨に打たれた街
B a t t l e | P r e p a r a
t i o n .「Freeze
動くな！」

ザーザーと降る雨の中、暗い夜の街に響かせるように、少女の声は透き通るように雨をすり抜け耳に届く。

「・・・何だ？ オマエ」

「能力複製コピーの多種能力者キヤット・・・」

「コピーキヤットお？ そりや模倣犯の事だろ？ 何だつてあんちんけなガキに」

「木原さん知らないんですか？ 能力者の間で有名です。一度出会ったら自らの能力を複製され、相手のものにされるって」

「はっ。んなバカな」

「・・・そしてその全てが超能力級」

「!?!」

木原と同時に、白夜まで驚く。

(そんなヤツは・・・)

(学園都市にただ一人……)

(榎本貴音!!)

「……Sembradi essere a conoscenza della
ovvio, ma agi in ritardo. Resa, o Hai
tsukuba, di aspettare la morte, si pre-
a di selezione?」

少女の口から飛び出したのはこれまた流暢なイタリア語だった。意味は、『どうやら気づいたようですが、もう遅いです。降参するか、地べたを這いつくばって死を待つか、選んでください?』だ。

当然、純日本人である彼らに伝わるはずもない。

「……死ね」

少女は端的にそう告げた。

少女が持つ二対の銃口が火を噴いた。その場に少女と木原、白夜を残して、隊員達は地に伏せた。呻き声が聞こえる事から、まだ生きているのだろう。地面にクレーターのような大きな穴開いていることから、おそらく着弾の衝撃波で気絶、もしくはは行動不能なのだろう。

「お久しぶりです。木原数多」

「お、おう」

「誰の命令だ？」

「あ？」

「答えてもらおうか？ 誰の命令だ」

いつも聞く少女の声とはかけ離れていた。低く、殺意のこもった声。

「言え、テメーにこんな事させようとしたのはどこのどいつだ」

「と、統括理事会からの命令。と言う事で上から回ってきている」

「……あの親バカ共がトーマを頼らないわけがない……。となると、そのことに不満を抱いている幹部共か……」

「……オ……イ………榎本」

「……何？」

「……頼みがある」

「この期じに及んで人を頼るのか。情けない。それでも超能力者の第一位か。無能力者が見たら泣くね。それこそ笑いすぎで」

敬語など抜けきり、どこかあの男を思わせる話し方をする貴音。白夜はそんな貴音を少し睨みつける。

「アハッ。いい目をする。殺意じゃない、やっぱりあんたの目には闘志が宿ってる。

「やっぱりトーマと一緒にいた影響だらうな。で？　言ってみろよ。聞くだけ聞いてやる」

「・・・・・・・・」

貴音のその言葉に、一瞬不服そうな顔を白夜はしたが、口を開く。

「たった一つだけで良い。調べてほしい。ラス「トーマの所だ」・・・・・・・・そうか」

言い終わる前に貴音の返答が入った。

「はっ。あのガキ、カミジョーのところにいんのかよ。うっわ、回収面倒くせえ！　やめだやめ。何言われようが直に幹部は潰れんだろ？　お前等のハタラクィでよお？」

聞かれた貴音はクスリと、女の子らしい柔らかな笑みを浮かべた後、猟奇的に口角を釣り上げて。

「当たり前だ。売られたケンカは買う。しかもいつでも良い値段で買ってやるよ」

「・・・・・・・・いくらぐらいなんだ？」

「そうだな・・・・・・・・」

そこで貴音は一拍おいて、

「人数分の魂だ」

「・・・・プツ。アハハハハハッ!!」

「あ？」

「魂を！ 喰うのか!!」 お前らは魂喰ソウルイーターいか!!」

「・・・さあね」

貴音はそう言うのと、白夜を一度足蹴にした後、頭を掴み自分の顔と同位置まで持ち上げる。

「ウグ・・・」

「良く聞け第一位。私はお前に興味がほとんどない。トーマが仲良くしてるからしておこうと言ったところだ。悲しいだろ。友人だと思っていた片方は自分の事を全くの他人だと思っていたなんて。ああ、その通りだよ。私はアンタになんの期待もしていない。アンタはただのガキだ。あれから何も成長してないんだな。正直失望だ」

「・・・つつ」

「悔しいなら足掻いてみるよ。このクソツタレな世界をぶっ壊す。そんなステキなチカラを手に入れて見ろよ。お前のその手でよ」

「・・・キヤラ崩壊ヤバイぞ?」

「ほつといてくれる?」

貴音はそう言うのと、白夜を病院にテレポートする。怪我の治療依頼の手紙と一緒に。

「木原数多。また後で」

「ん? あ、ああ」



上条は拳を握りしめる。

白夜が攻撃されるという事はおそらく目的は打ち止め、そして虚数学区・五行機関。統括理事会の理事の連中は榎本貴音が使えることを知っている。

つまり………

(幹部の連中が……っ。勝手に動いたな………!)

「どうしたの？　ってミサカはミサカはなんか怖い雰囲気ヒーローさんに話しかけてみる」

「……どうもしないよ。ただ、つくづく人間の裏って面白いなって思っただけだ」

上条は口元だけで笑った。

眼や雰囲気は全く笑っていない。ゆっくりとした動きで銃を三つ取り出す。

オリハルコン製のリボルバー、ハーデイス。対化物戦闘用13mm拳銃「ジャツカール」。

そして、

高出力型試作1000m陽電子銃。

「わっ。大きい！　ってミサカはミサカは興奮してみる！」

「元ネタは高出力第二次試作460m陽電子砲……。いわゆるエヴァ専用改造陽電子砲NERV仕様だな。というか見た目はそのままだし。初号機が俺達人間に変わっただけの大きさだから、めっちゃデカいんだよな……。」

「それを片手で持てちゃうところが凄いかも、ってミサカはミサカは褒めてみる」

「あっそ」

「来た！　ってミサカはミサカは目視での確認を報告してみる！」

「ああ、俺も見えてるよ」

上条は打ち止めの額にキョンシーのようにお札を貼る。

「へ？」

「剥がすんじゃないぞ？」

「大丈夫だよ？　あいつ等の狙いは私だから私に弾が当たることは「俺が、巻き込んだままうって言うてんだ」……？」

上条はそう言うのと、前方からやってくる黒いワンボックスに向けてジャツカルの引き金を引いた。

撃ち出された銃弾は全て、ボンネットに突き刺さり小さな爆発を起こしてエンジンを破壊する。

「純銀 マケドニウム加工水銀弾頭弾殻。マーベルス化学薬筒 NNA9。全長39cm。重量16kg。13mm炸裂徹鋼弾。対化物戦闘用拳銃「ジャツカル」専用弾：。パーフェクトだキハラア」

上条は妙に渋い声でそういった。そしてゾロゾロとサブマシンガンを構えて降りてきた黒服達に向かって上条は一言。

「さあ、おいで。糞餓鬼!!」

*

銃声の嵐の後、上条はハーデイスの銃身から潰れた銃弾をポロポロ落ししながら言った。

「生きてるか？ 打ち止め」

上条が尋ねると、少女は無言で何度か頷いた。

目の前にいる黒服達も恐ろしいものを見たように突っ立っている。誰かのかけ声で再度引き金が引かれ、銃弾が上条達に襲いかかる。が、上条は自らの体の後ろに隠した

打ち止めを守るように、自分の体の重要部位には銃弾が当たらないように、ハーデイスの銃身で受け止めていく。

(す、凄い……ってミスカはミスカはその動きに驚きを隠せない！)

「な、なんだアイツ！ 化け物か!!」

そんな声が聞こえる。打ち止めは思わず顔をしかめたが、まあ今の彼の動きはそう言われても仕方のないものだった。

「……い、いや待て……。あの持つてる銃に書かれてる文字……」

「じ、XIIII!?!」

「まさかアイツが……!!」

「お喋りはそこまでだ。夜は長い。ゆっくり眠りな」

その言葉の後に、立っていたものは上条と打ち止め以外いなかった。

雨粒を血の色に変える Revival of Destruction.

死体（死んでいない）の海の中に一人立つ上条は銃口を依然水平に構えたままだった。打ち止めは首を傾げるが、その疑問の正体は前方から歩いてくる人物によつて解消される。

見えない一撃。

距離も離れているのに、一、二歩下がった上条がいた場所を潰すように、アスファルトの地面にクレーターができている。

「ハッアアイ♪ びっくりしちやったカナ。怖くないよー?」

「そんな戯れ言を信じろつてのかよ」

「ハハッ。怖がつてるねえ。でもさー、こつちにも事情があるからさー、あんまり言うこと聞いてくれないとー」

「んだよ」

「グツチャグチャの塊にすんぞコラ」

「あ?」

上条は数歩後ろに下がる。

ドツ!! という轟音が響く。

見えない一撃が、上条の体を横に吹き飛ばす。

「っ………」

ガラガラと、瓦礫をかき分けながらビルの中から這い出た上条は、右目が神々の義眼、左目が吸血鬼の魔眼で開いていた。そんな彼はうなるように言う。

「………お前は」

『『神の右席』の一人、前方のヴェント』

ヴェントと名乗った女は、イタズラのように舌を出す。

「目標発見。まあそんなワケで、さっさとぶっ殺される上条当麻」

舌に取り付けられた細い鎖がじゃらじゃらと落ちた。

——その先端にあつたのは、唾液に濡れた小さな十字架。

上条は無言で携帯を取り出すと、とある場所に発信する。

打ち止めはそれを怪訝そうに見ていた。

「よう。今回の犯人を見つけたぜ？」

『……ふむ。そうか』

「どうする？ 殺るか？」

『・・・だが』

「そうだ。相手は人間だ。魔術という玩具オモチャを持った人間だ。だが、俺は殺せる。微塵の躊躇も無く、一片の後悔も無く塵殺できる。この俺は化物だから、ではお前はどうか？ 銃は俺が構えよう。照準も俺が定めよう。弾を弾装にいれ遊底を引き、安全装置も俺が外そう。だが殺すのはお前の殺意だ。さあどうする!? 命令オウケイを!! 学園都市統括理事長、アレイスター＝クロウリー!!」

電話の向こうで歯軋りが聞こえる。おそらく悔しがっているのだろう。上条は返答を確信してニタリと笑う。

釣り上がった唇から白い牙が何本も見えた。

『私をなめるな従僕!! 見敵必殺!! 見敵必殺』サーチ&デストロイ『サーチ&デストロイ』だ!! 従僕!!

私は命令を下したぞ!! 何も変わらない!! 我々に敵対するあらゆる勢力は叩いて潰せ!! 全ての障害はただ進み押し潰し粉砕しろ!! それが例え誰であっても!! それが例え何であっても!! 逃げも隠れもせず正面玄関から打って出る!!」

「クツククク・・・」

上条は携帯電話の通話を終了させると、ハーデイスを影にしまう。

そして同時に、もう一丁の拳銃を取り出した。

ジャツカルに似た白色の拳銃。454カスールカスタムオートマティックだ。
「さあ、夜はこれからだ！」



榎本貴音は掃除をしていた。学園都市には喰屍鬼グールが稀に訪れる。それも訪れるときは一度に大量に現われる。それは何故か、上条達が学園都市の中心にエサを置いているからだ。だからそれを食べたいグールはなにも考えずに学園都市までやってくる。グール専用として解放した入り口から入れて処理する。

定期的に処理しなければ、被害が出る。彼らはゴミ処理係に変わってゴミ処理をしているのだ。

入り口近くで待機していた貴音はハルコンネンの銃口をグール達に向ける。

そこに情は無い。これはただの掃除なのだから。

「意思もない、ただ血を求めるだけのなり損ないが、死ね」

引き金を引く貴音。ベルトに運ばれ次々と二門のハルコンネンに装填されては撃ち

出されていく。三十ミリという化け物級の銃弾が、グール達を死滅させていく。

「御主人様のためだ。せめて苦しまずに逝かせてあげようか？ いや、もう死んでるんだったな」

貴音はクスリと笑う。ハルコンネンの引き金から指を離し、前を見る。吸血鬼としての視力が、視界を綺麗に映し出す。

「……まだ来るか。ご主人、そっちは大丈夫でしょうね？」



打ち止めも、ヴェントも困惑していた。

目の前の、上条当麻という高校生はいなくなつたと言つても過言では無かつた。

代わりに立っていたのは赤いコートに赤い帽子、サングラスに白い手袋をした、高身長青年だった。その両手には、上条が先ほど握っていた二色の拳銃が握られている。

「へえ。姿も変えられるのかい？」 面白いじゃん」

「な、なんで変えてるの？ ってミサカはミサカは恐る恐る尋ねてみる」

「姿形など俺にとつては何の意味もない。つまるところ、ただの余興だ」

上条当麻の声では無かった。低い、高校生とは思えないほど低く、それでいてどこか色気を匂わせる。そんな声だった。

「姿に合わせて声を変える必要も無いのだが、変えた方が面白いでは無いか」

「へー？ どう楽しませてくれるんだい？」

「それはお前が知る必要は無い。お前は今からここで、一つの命として散るのだから」

上条が持つ両手の銃が火を噴いた。その重たい反動が、驚異的な破壊力の反動を、上条当麻の吸血鬼の体は受け止める。ただそれだけじゃ無い。異様なまでに似合っているのだ。今上条当麻がなっている姿に、二丁の拳銃が。

それもそのはずだろう。彼が今なっているのは、両の拳銃の元持ち主で、上条の吸血鬼としての能力の核。アーカードの姿なのだから。

それに対抗するように風の塊が飛んでくる。

だがそれは、ヴェントが振るうハンマーの動きとはどこか軌道がずれている。

(・・・まあ問題は無いだろ。吸血鬼の回復力どうこうの前に、俺の肉体の防御力を突破できるヤツがいるとは限らないし・・・。いやーそれにしてもピアージオの時の十字架はビビったよな。流石に吸血鬼の体も聖十字には敵わねーか)

(「当たり前だろう。そもそも何故敵うと思つた」)

「いや、だつてアンタ最強のチート吸血鬼じゃん。それに加えて俺、幻想喰いの持ち主ですよ？　そう簡単にやられるとは俺自身でも思わないわけでした」

「まあ、目の前の敵は大丈夫だろう。油断はするなよ。上条」

（誰がするかつての）

上条は自信が取り込んでいる命との会話を終わらせると、改めてヴェントに向き直る。

「幻想殺し、つて言つたつけ？　その右手、報告にあつた通り効き目バツグンみたいねえ。所々に織り交ぜてる私の『本命』が全く効いてないわ」

（本命つてこれのことか？　いやいや、こんなしよぼい魔術消せなくてどうする。こっちが今まで何を消してきたと思つてんだよ、コイツは）

打ち止めがビクビクと震えている。それに気づいた上条は一瞬で影になり姿を元に戻すと。打ち止めのおでこに貼つたお札を剥がし、目視できる結界を打ち止めの周りに張つた。

『これは!!　つてミサカはミサカは一人で戦おうとするあなたに問い詰めを行つてみる!!』

「邪魔なんだ。怪我をされても困るからそこでじつとしてくれ、どうせアンタの狙いは俺なんだから？　前項のウエンポ・・・だっけ」

「前方のヴェントだよ。しかしよく分かってんじゃん。そうだよ。私の目的は上条当麻」

話しながらもヴェントは巨大なハンマーで空気を薙いでくる。

「それ以外は全部おまけ。あの禁書目録ですら、アンタに比べりや軽いつてコトよ。今のアンタは間違いなくローマ正教の敵、いやもしかしなくても十字教の敵。そして我々はどんな手を使っても敵を殺す。極端な発言をしてあげよう。我々は、日本という一家を消滅させてでもアンタを殺すわよ。……と言つても、その右手の事を考えると、私のいつものパターンは使えなさそうだけど。何せ、直接殺さなくちゃならぬみたいだしね」

良いながらヴェントは手品ののように書類を取り出しヒラヒラと振った。

何かの命令書のような。暗がりで見づらいが、上条の目には見えている。それは日本語では無かった。書かれていた内容は、

「この通り、ローマ教皇直々のサインつき。アンタは二十億人から狙われる身なのよ」
それを聞いた上条の表情は読めない。顔全体が闇のように黒く、その表情は読み取れない。

ようやく読み取れるようになったと思つたとたん。その唇の両端は釣り上がつてい

「フツ。フハハハハハハハハハハ!!」 そうだ。そうで無くてはならない。私のような化物は、人間に倒されなくてはならないのだ。良いぞ、良いぞ! 二十億人か!」

その変化に誰もが驚いていた。

次の瞬間。上条の後ろから出てきた半透明の何かが上条当麻を殴りつける。それと同時に、殴りつけられた反対側から、半透明の、先ほど上条がなった青年。アーカードが現われた。

「何、人の主導権乗っ取ってんだよアーカード」

「い、いやすまない。つい楽しくなっちゃってしまっただけ」

「なら戻ってくれ」

「ああ。分かっている」

「確かにアンタにとって、それは嬉しい事なのかもしれない。だがな、アンタは既に人間に倒されてるんだ。その所分かつとけよ、公爵」

「ククク。分かっているさ」

そう言っただけで半透明のアーカードは上条の体に消えていった。

「まあ最も俺を殺すのは、人間で無くてはならないし、それをするのは意外と簡単だ。ただ単純に、心臓を破壊すれば良い。それもたった数百万回だ! 楽しいだろう?」

上条は聞いたが、もう答える者はいなかった。

ヴェントが口元から血を流していた。彼は思わず『もつたいない』と口にする。彼女は苦しみながらどこかへ飛び出していった。

(攻撃を受けて慌てて避難した・・・？ いや、でも、一体誰が？ 貴音・・・は俺が勝つって信じてるし。アレイスター・・・は過保護だけど闘争に口を出す奴じゃ無い・・・。それにしても)

『神の右席』。

前方のヴェント。

そして、ローマ正教。

上条は目下の問題を解消する策を考えるために必死に頭を回転させる。気がついたら周りに打ち止めの姿は無くなっていった。

神の右席と虚数学区と Fuse Ⅱ KAZAKIR

I.

「これは……まさか……!」

『「界」の出現……。何故私がここにいるのに……!?!』

「解析できますか!?!」

ハルコンネンを撃ちながら貴音はエイムに問いかける。

『もちろんです。……やはり勝手に虚数学区・五行機関が展開しています。おそ

らくこの学園都市の内部で魔術を使えば、暴走・自爆するでしょう』

「なるほど、対魔術師最終防衛線ラインが発動するような事態という事ですか……」

『しかしこれは不完全』

「……は?」

『霊装や教会が崩れる事は無いと思います』

「……核は?」

『おそらく……この街で唯一虚数学区に繋がる存在……』

「……まさか!!」

「貴音は何も無い虚空を見上げる。そこに流れるAIM拡散力場の変化を見逃さないために。」

「・・・うーん。打ち止めもどつか行っちゃったし、ヴェントもどつか行っちゃった。さて、なんでだ？」

（「私もよく分からないが、おそらく彼女なら分かるのだろうな」）

「エネの事か？ まあ確かに、学園都市の超能力事情に関して言えば、アイツが一番詳しいけどさ・・・。さて、超能力？」

（「ん。そうか」）

「『界』か!!」

上条は答えにたどり着くと同時に、当たりをキョロキョロと見渡して、変化を探す。

（待てよ、待てよ・・・。。エイムが界を作れるのは、理事会の連中と理事長は知ってるのだが、統括理事長しか知らない事もある・・・。と言うか勝手に発動させるか？

なんだ？ 何かが引つかかる・・・。。幹部の連中が勝手に動いたとしても、これはやり過ぎだ。統括理事長が一枚噛んでるに違いねエ・・・!!）

上条が推理にいそしむ中、突如として、凄まじい閃光が学園都市を覆った。

視界が塗り潰される。上条は慌てて眼を開く。見る事に関しては神の領域に達するその眼を。

状況を掴もうと当たりを見渡す。色は一色だが、その光量はナイトパレードにも匹敵する。

その直後、落雷のように遅れて、音と衝撃が襲いかかる。

「うおっ」

光と音が離れてやってきたという事は、今のは遠距離での出来事だったのだろう。

(やべっ。今の閃光と爆音の間の時間計っておくんだった。そしたら距離が割り出せるのに)

その時、上条の頭に声が響いた。

虚数学区・五行機関が部分的な展開を開始。

該当座標は学園都市、第七学区のほぼ中央地点。

理論モデル『風斬氷華』をベースに、追加モジュールを上書き。

理論モデル、内外とともに変貌を確認。

妹達を統御する上位個体『最終信号』は追加命令文を認証。

ミサカネットワークを強制操作する事により、学園都市の全AIM拡散力場の

方向性を人為的に誘導する事に成功。

第一段階は完了。

物理ルールの変更を確認。

——これより、学園都市に『ヒューズIIカザキリ』が出現します。

——関係者各位は不意の衝撃に備えてください。

光の中心点から、無数の翼のようなものが吹き荒れた。まるで刃のように鋭い、数十もの羽。一本一本は一〇メートルから一〇〇メートルにも及び、天へ逆らうように高くとか買う広げられていく。

周囲にはビルがあるが、そんなものを気にしている様子はない。濡れた紙を引き裂くが如く、次々とビルが倒壊していった。人間の作り上げた貧弱な構造物を食い破りながら、翼は悠々と羽ばたく。世界の主は人間ではないと、言外に語っているかのように。まるで、巨大な水晶でできた孔雀の羽のようだった。

「とち狂ったか・・・アレイスター!!」

上条はその様子を離れたビルの屋上から見ていた。

彼は知っている。

遙か前方に見える、非化学極まりないものの正体を。

「天使を・・・墮ろすなんて・・・。しかも・・・風斬だど？ 巫山戯てんじゃねエエ!!!」

上条の咆哮と同時に、破壊の一撃が放たれた。

生み出された壮絶な雷光は、蛇のように生物的な動きで学園都市の外へと飛んでいく。上条はその残像を目で追う。強烈な光が突き刺さった地点は、まるで土地の地下に

まんべんなく爆薬が仕掛けてあったように、森と土と木々と人が上空まで舞い上げられた。

数秒遅れて、爆音が全身を打つ。

それはもはや衝撃波だった。あまりの威力に上条も「おおー」と声を出す。

「とりあえず、あの天使を止めに行かぬーとな」

上条は光の中心に向けて走り出した。

「天使だろうがなんだろうが、そんな地上にあっちゃいけないもんがあるなんて、ふざけた幻想は、俺がこの手でぶち殺すっ!!」

走りながら、上条は幻想喰いのリミッターを「怒り」という感情でぶち壊した。

立ち塞がる障害の違い
Two? Kinds of E
nemies.

インデックスが御坂美琴に出会った直後。上条当麻がそこに現れた。

だがそれは、上条当麻であつて上条当麻ではなかった。全ての能力を開放した状態と言つても過言ではない姿だつた。

「駄目だよ、とうま！ ひょうかを殺さないでツ!!」

上条は化物の姿のまま振り返つた。そしてインデックスたちに向けてジャツカルを撃つた。

「なつ。ちよつとアンタ!!え」

「と、とうま ?」

二人がゆつくりと振り返ると、彼女たちの後方には黒づくめの男達が額から血を流して死んでいた。

「あ、アイツがやったの?」

「と、とうま!! 待つんだよ!!」

ゆつくりと、ゆつくりと上条は歩いていく。その身に降りかかる障害を、一撃で殺し

ながら。

「待ちなさい！ 今アンタがアイツに近づいたら間違ひなくやられるわよ!」

「で、でもとうまを止めないと!!」

ある程度近づいたところで上条の言葉が聞こえてきた。それは、上条の行く道をふさぐように立っている連中に対して言っているのだ。

「ばっ………化物!!」

「よく言われる。それと対峙しているお前は何だ？ 人か、狗か、化物か」

右手のカスール。左手のジャツカル。それぞれが火を噴き目の前の敵を沈めていく。

「とうま——」

インデックスの声は最後まで出なかった。前進を阻止する黒ずくめたちが一掃されたからだ。血が飛び地面を濡らす。その原因はデンド○ビウムのようなバックパックを背負った貴音が撃ったハルコンネンの銃弾だった。

「ご主人。元氣そうですね」

「……エネ。そう見えるか?」

「いえ、実は全く」

上条は何も言わないが、貴音の左腕は無くなっていた。血のようなどす黒い塊が異形の形の腕を形成していた。

「ご主人。進路は？」

「見てわかるだろうが、まだだ」

「じゃあ、私が切り開きます！」

貴音はそういうと、黒い腕を地面に突き刺す。そして引き上げるような動作をする。と、アスファルト舗装の地面を突き破って巨大な砲身がその体を現す。

高射砲、だった。

「88mm……！！」
アハトアハト

「吹き飛ばせっ！！」

打ち出された砲弾が、豆腐のようにビルを削り光の中心へと道を作った。

上条がそこに向かって走り出した後、貴音は美琴とインデックスに振り返る。

「あなた達にはあなた達にしかなできないことがあるでしょう？」

「じゃあー！」

「……でも、それはここから先じゃない。ここから先は化物フリークスの闘争です。人間が立ち入るのであれば、相手を殺す覚悟をお願いしますね？」

貴音は殺すという言葉をいとも容易く笑顔と共に口にした。多量の殺気も混ぜながら。

「たかね。とうまは無茶しそうなんだよー！」

「心配、ですか？ 吸血鬼ノスフェラトゥの？ 英国の十字教シスターが？ 確かに心配なんでしょうけど、やりすぎるとそれはあなたの神への冒瀆です。あなたが侵すのは暴食だけに止めておいてください。それでもここを通りたいというのなら、私を殺して行ってください。これは悪戯じやありません。あなた達に死んでほしくないから言っているだけです。からおかつそれでも通ろうとするのなら、殺してでも通るといふのなら、こちらも全力で殺しに行きますんで、よろしく」

*

上条当麻は爆心地についてた。

アクション映画の舞台のような背景が広がるそこで、上条は言いようのない高揚感に包まれていた。

爆心地のさらに中心点。

そこにいるのは、一人の天使。

本体は普通の人間と同じサイズだ。

それに対して翼の方の縮尺があまりに巨大すぎて、まるで翼の塊に人間が飲み込まれそうになっているようにも見えた。

「うっわ・・・すっげえ」

人間じゃねー。と上条はつぶやく。今までいろんなものを見てきた上条でもこれにだけない。友人が、人為的にこんな姿にされていて誰が納得できようか。

「おやおや。大罪人同士、傷の舐め合いでもやってるトコだったかしら」

上条は振り返らずに後ろを見る。空中に浮かぶ二個の青い魔方陣が、ヴェントの方を見ていた。

「せっかく後回しにしてやろうって考えてたのに、自分から殺されに来ちゃったの。これ以上悲惨なモンを見たくないから先にぶっ潰して欲しいってコトかな」

「調子に乗るなよ魔法使い。テメエらだって、人間の道を外れた化け物だ。化物を倒すのはいつだって人間だ。魔法使いなんか倒せるわけがないだろう？」

「はっ。それはどうかな吸血鬼クン。今のソイツに、私の『本命』が通用するとは思えない。そもそも人間と同じ精神性を保っているかどうかもわからないね。でも私は殺す！ 私の力が足りずとも、今の不完全な『墮天使』なら、空中分解しそうな内燃制御系に介入する術式を組んで、自滅を誘発させてやるわ!! 怪物を怪物の力で吹っ飛ばしてやるって言ってるのよ!!」

「へえ。面白い。だがお前が人間じゃないのが残念だ。この俺が、お前に教えてやるよ。俺の戦いを」

上条はそう言うと、人差し指と中指を立て、カメラのポーズをとる。

「拘束制御術式第三号・第二号・第一号、開放。状況A『クロムウエル』発動による承認認識。目前の敵の完全沈黙までの間、能力使用。限定使用開始。」

——では、教育してやろう。『本当の吸血鬼』の闘争というものを!!」

彼らのそれぞれの戦場 The Way of Light and Darkness.

グワツと空気が一瞬で変わる。

闇の中で無数の眼が、ヴェントの方を見ているというなんともおぞましい光景が広がっている。

「こんな膨大な魔力……。アンタただの吸血鬼じゃ無いね!？」

「んー？　そうかもな。何せ俺の吸血鬼の元ベイスになってるのは元ワラキア公国公爵、ヴラドⅡツペシユなんだから」

「ドラキユラ伯爵……？　馬鹿言ってるじゃ無いよアンタ」

「公爵、ね。伯爵って……位一個下がってるじゃん」

上条はその闇の中でどこにいるのか既に分からない状態で、なお喋り続ける。辺り一面の眼の大群の中に、上条の体はある。

「魔術師がさ、信じる神様を冒瀆する。この右手とこの体質……。嫌うのは分かるけどさ、科学を敵に回したら駄目だろ」

「私は科学が嫌い！　科学が憎い!!」

ヴェントは闇雲にハンマーを振るい、風の魔術を起こし闇に当てる。その度に彼女の口から血が流れ出るが、それでもなお続ける。

「私をこんな風にした科学が嫌い！ 私の弟を見殺しにした科学が憎い!!」

上条の闇を天使の攻撃が貫こうとする。が、突き破れずに終わるが、それは別に上条を狙って攻撃をしているわけでは無い。

「科学なんてこんなモンだ!! アンタもその一員なのよ！ 気持ち悪いと思わないワケ!?!」

闇を払うように今一度、ヴェントの攻撃が空を切る。

「無駄だよ魔法使い。お前は今水面に映る月を相手に攻撃しているんだ。吸血鬼つてのはそういうものさ。特に、俺みたいに大量の命を持つているタイプは、な」

それと、と上条は続けて言う。

「お前さあ。俺の主人の事を侮辱したらしいな。それだけで理由は十分」

上条は最初から返答など求めていないように言葉を紡ぐ。

「お前、学園都市（じく）から生きて帰れると思うなよ。ぶち殺すぞ人間!!」

上条が姿を現した。だがその手に持っているものは異常だった。高出力型試作46mm陽電子銃（ボジトロンスナイパーライフル）。その破壊力からやはりこれも人間は扱えないとされている。しかし、撃ち出すためにはかなりの電力を必要とする——が。

このまち学園都市最強の電撃使いである超電磁砲、御坂美琴の電撃を幾度となく消してきた上条はその問題を難なく解消する。

髪から、腕から、腰から、電気がポジトロンスナイパーライフルに吸い込まれていく。「外さねエよ。何の因果か知らないが、ここでは魔術師は魔術を使うと暴走・自爆する。ならば、今のそれがお前の限界だ。人を使つた盾すらも使えないお前はな!!」

『神の右席』を……舐めてんじゃねえぞおおお!!」

姿を現した上条に向かってヴェントは攻撃を仕掛けようとする。が、その距離はどれだけ走っても数十秒はかかってしまう。それだけあれば上条には十分だ。

「科学が嫌いって言ってたよな」

スコープ越しにヴェントを覗く上条は呟く。

「その科学の力によって倒されな」

引き金が引かれ、莫大なエネルギーが光弾を放つ。それは文字通りヴェントの体の中心を撃ち抜いた。

「科学を否定するって事は、お前どうやって日本に來たんだ？ お前は どうやって地球で暮らすんだ？」

「……は？」

「世界は自然科学で溢れてる。例えば、ギリシャ神話で太陽は金の馬車に乗った英雄と

例えたらしい」

「は？ 馬鹿じゃ無いの？」

「そうだよな？ そうさ。太陽は熱を持った熱の星。恒星さ。それが分からなくても、熱を持つ球体ってのは分かる。それが自然科学だ。家が建つ仕組み、食事を作るまでの工程、国から国へ渡る手段。全て、科学だ。お前が否定しようとしているのは、全人類が生活に必要としているものだ。『神の右席』なんて大層な場所に座ってて、そんな事も分かんねえのか。お前等の信じる神様は下界の進歩を全く認めようとしななんだな」

「ふざけんじゃ、ないわよ……」

「うるさいガキが。テメエがどんな理由で科学を嫌ってるのなんか全く、これっぽっちも、興味なんかねーよ。だがな。それだけで、なんの関係も無い人間を巻き込むのは間違ってる。何も知らずに、ただそこにいるだけの人間をな!!」

「……私の弟は、科学によって殺された」

「……急にどうした」

赤く染まった歯を食いしばり、光弾を受けた体を起こし、全力でハンマーを振り上げ、彼女は続ける。

「遊園地のアトラクションの試運転モニタで誤作動を起こしたおかげでね。幼い私は弟と一緒に、二人揃ってグチャグチャの塊になった。科学的には絶対問題ないって言われてたの

よ！ 何十もの安全装置、最新の軽量強化素材、全自動の速度管理プログラム！ そんな頼もしい単語ばかりがズラズラ並んでいたのに！！ 実際には何の役にも立たなかった！！」

「お前……」

「だから私は科学が人を救うなんて信じない。その天使も同じってコトよ。何が人を守ってるだ。その陰でしつかり破壊してんじゃない！！」

「当たり前だろ。そんなこと」

上条は呆れたような顔でそういった。ヴェントも思わず『は？』としか声が出なかった。

「試運転モニターで事故った？ 当たり前だったの。頼もしい単語ばかりが並んでいた？ そんなの失敗するの前提で実験体テストターが欲しかっただけに決まってるだろ。科学つてのは初めは失敗するもんさ。それこそ、この街じゃ、成功するまで何十人という置き去りチャイルドエラーを殺してるか分かったもんじゃねーんだぜ？」

上条は反論しようとしたヴェントの口が開くより先に口を開く。

「さつきからテメーが吐いてるその血だが、RH-だろ？ 今この空間は俺の体の一部みたいなものだから分かるんだけどよ。確かにこりや珍しい。おそらく、一人分しか用意できなかっただろうな。それで、あんただけが助かった。だから科学を信じない？」

馬鹿か。お前の弟がどうやって死んだかとか、どんな気持ちでお前が助かったとか。至極どうでもいい。お前の人生だから、ケチをつける事はしねーけどさ。もつと楽しく生きようとか思わなかったわけ？ 弟さんの分までさ。まあホントにどうでもいいんだけど」

上条は面倒くさそうにそう言うと、拳を構える。

「悪いけど、殺すのは『遊び』のルールに反するんでな」

上条は一瞬で距離を詰める。ヴェントは驚きのけぞるが、もう遅い。

「通常「普通のパンチ」」

上条の恐ろしい威力の拳が、ヴェントの胸の中心を撃ち抜いた。

「チャンスをやるよ。じっくりもう一度自分の人生と向き合ってこい。この大馬鹿者」



「どうですか？ エイムさん」

『問題ありません。インデックスさんと御坂美琴さんの協力によつて、エラーは順調に

回復されています。一時は私自身が暴走しそうになりましたから」

「私もちよつとやばい状態です。輸血パック何袋目か、分かりませんかね」

貴音は数十個目の輸血パックを唇で挟み、牙を立て、中身を吸い出す。

「……………んむ？」

『……………あれは……………』

少女二人が見る方向には、巨大な気が移動していた。



上条は気絶したヴェントを放って、吸血鬼の能力を再拘束し始める。

その時、

ゴンツ!! と。

突然目の前のコンクリートの山が砕け、周りが灰色の粉塵で覆われた。

「……………お前誰だよ。まあ神の右席の関係者なんだろうけどよ」

だが、上条の眼には関係ない。吸血鬼としての“魔眼”に、眼球の王と呼ばれる“

神々の義眼“彼の眼の前では、目くらましなど通用しない。

ちなみに粉塵の原因は、風力発電のプロペラだった。

上条はぐつたりとしたヴェントを抱える男に向かって話しかけていた。

「失礼」

男は言った。流暢な日本語で。

「この子に用があつたものでな。手荒な真似を避けるために目を眩ませてもらつたが、
気に障つたかね」

「誰だ？ って聞いてるんだけど」

「後方のアックア。ヴェントと同じく、『神の右席』の一人である」

「・・・ヘエ」

上条は異常なまでの闘争心を剥き出しにした。あれだけの風力発電のプロペラを引き
き千切れるのだから、相当強いと踏んでの事だ。

「アンタ強いんだろ？ だったら遊ぼうぜ？」

「一つだけ、貴様に教えてやる」

彼は堂々と背中を向け、それから言った。

「私は聖人だ。無闇に喧嘩を売ると寿命を縮めるぞ」

「・・・なんだ。つまんねーの」

上条がそう言うと、彼が剥き出しにしていた闘争心が消える。忠告を受けたからではない。ただ単純に興味がなくなつたような雰囲気だつた。

既に消えたアツクアに向かつて上条は言う。

「聖人つてさ。俺の中では弱い方なんだよ。神様のご加護つてだけで自分自身は何も強くない。でもさ、アンタが俺と戦いに来たときは、その時は遊んでやるよ」

d. 正と負の進むべき道へ The Branch Road

上条当麻は、天使の羽も、輪っかも無くなった風斬に話しかけていた。

「なあ。風斬。大丈夫・・・そうだな。怪我があつたらなんか俺のせいになれそうだし、無事で良かったよホント」

「だめ、ですよ」

「駄目?」

「良かったなんて、思えないです・・・」

風斬の視線を上条も追う。破壊された町並み、下敷きになった人々。

「・・・何で、こんな事になっているんですか・・・」。全部、私のせいなのに。私がここにいなければ、少なくとも周りに被害は出なかったのに。どうして、私一人だけが無事なんですか。おかしいでしょう、こんなやつて。結局、私って何なんですか!? みんなと一緒にはいられない、少しでも近づけばこんな風に壊してしまう! なら、なんで私は生まれたんですか!! AIM拡散力場に支えられているだけのくせに! 能力者の人達の力でやっと存在している化け物なのに!! せっかくあの子に『友

達」って言ってもらって、それで少しは人間らしく慣れたと思ったのに。あんな羽が生えて、凶暴な火花を散らして、みんな叩き壊して！ これじゃ本当にただの化け物じゃないですか!! もう嫌なんです。私を殴って全部終わりにしてください」

「……………別に良いけど。まあ俺の話聞け」

上条はポツリポツリと彼女の叫びに返答を始めた。

「まず、こんな事になってるのは統括理事長がお前を呼んだからだ。『界』の出現のために、何故か俺を頼らなかつたがな。お前が無事なのは、お前が中心にいたから、お前が原因だから。お前は風斬氷華。それ以上でもそれ以下でもないだろ。お前が生まれたのは俺の右手への恐怖だろうな。AIM拡散力場の集合体が幻想殺しに『死』を感じ取り、感情が生み出された……………それがお前。それじゃあ『死ぬ』か?」

上条の肩から先が一瞬にして半透明の龍の顎に変わった。ソレは一度大きな咆哮を上げると、風斬を呑み込むように顎を開いた。

「でもさ。俺はお前を殺せない。インデックスに殺すなって言われたから。お前の『友達』であるインデックスに。残念だったな。お前はまだ生きなきゃならないんだ」

上条のその言葉の後、一瞬にして、風景が、空間が、元通りに戻っていく。

「え……………?」

「形状記憶魔法。今回、侵入者が現われたって言う通報と同時に俺と貴音が学園都市全

域を覆ったヤツだ。全てが終わったたら、壊れた箇所を復元するって言うな。今回の事件は夢にしてやろうぜ。幸い、夜だし。長い長い嫌な夢だったんだ」

「そろそろ、目を覚まして、明るい明日を迎えましょう?」

「……貴音。意外と遅かったな」

『ただいまですつ!』と敬礼をして、榎本貴音が上条の隣に立つ。その背後に、エイムもいた。

『……氷華ちゃん。初めましてだね』

「え……?」

『私はエイム。この学園都市のAIM拡散力場の集合体が持つ意識。一言で言うと天使です』

「天使……。つてさっき私になってた……」

『ええ。あなたがなっていたのは私の力を真似た物、不完全だった。だから周りに被害が出た。私なら、なんて言うつもりはないけれど。被害を出さずにやる事もできます』

「風斬、お前は悲観する必要はないんだ。今までお前がみていた物は、今日ここで起こった事は、全て悪い夢だったんだよ。忘れちまえ」

『「なかなかロマンティックですね。ご主人(マスター)」』

「そろつてるぞ」

地べたに胡坐をかいて座る上条の足の間に貴音がすわる。彼は貴音の腰当たりを抱きしめると、彼女の肩から顔を出した。

「なあ、貴音。今回なんかあったか？」

「えーとですね。つてかくすぐつたいです。耳元で喋らないでください」

「悪い悪い・・・ふうー」

「ひゃうっ!! ご主人っ!!」

「悪いって!」

上条はふわりと重力を無視して浮かび上がる。とすぐに降りてくる。

「で? 本日の業務連絡をよろしく頼む」

「はいな! では、今日は魔法結界のおかげで、実質的な被害はゼロ。ですが、白夜さんが暗部に入ったようですね」

「暗部かあ。あいつ等元気か?」

「はい。彼は、今も元気で。彼女はいつでも連絡が取れると思います」

上条は『そうか』と軽く返すと、ニタリと笑う。

「とりあえず、俺に相談も無しで勝手な事したアレ馬鹿野郎イスターを叱りに行かなきゃな」

「ですね〜」

「エイム、風斬を任せたぞ」

『了解。御主人様』
「ヤ」マイマスタ

この日、学園都市は正式に魔術集団の存在を肯定した。

学園都市の外——ローマ正教には『魔術』というコードネームを冠する科学的超能力開発機関があり、そこから攻撃を受けたのだという報告書をまとめ、その日の内に世界各国のニュース番組で取り上げられた。

一方、ローマ正教は学園都市の内部で『天使』の存在を確認。十字教の宗教的教義に反する冒瀆的な研究が行われているとして、ローマ教皇自らが学園都市を非難した。争いが、始まろうとしていた。

学園都市とローマ正教の正面対立。

世界で三度目になるかもしれない、大きな大きな戦争が。

C文書・神の右席『左方』編

あまりにも暗い聖堂 Bread and Wine.

左方のテツラ。

彼はバチカンの聖ピエトロ広場にいた。広場は幅に二四〇メートルぐらい楕円形で、中心からやや外れた所には噴水がある。テツラはその噴水の縁に腰を掛け、頭上の星空を静かに見上げている。

人工的な明かりの乏しい広場では、彼の顔は見えない。そのシルエットだけが優しい闇に包まれ、一種のヴェールとして機能していた。

「また飲んでいるのか、テツラ」

低い男の声が聞こえた。

そちらに居るのは、テツラと同じ『神の右席』の一人、後方のアックア。彼の隣には豪華な礼服に包まれた老人もいる。

ローマ教皇。

このバチカンにおいて最も力のある人物は彼のはずだが、『神の右席』が二人も揃うとなると、不思議なぐらい存在感が翳ってしまっている。

「これでも一応、補充しているんですがねー。『神の血』ってヤツを」

「パンに葡萄酒か。ミサの仕組みだな」

「私の『神の薬』^{ラファエル}は土を示しますから、力を補充するためには、大地の『実り』や『恵み』を利用するのが手取り早いのですよ」

それは神が『信仰』を、吸血鬼が『血』を必要とするように。

彼は自らの力を必要とするために、それらを口にしていた。

「安酒だな。こんなものは観光客向けのぼったくり店でもお目にかかれないであろう。

『神の右席』の名を使えば、もう少しマシな銘柄を集められたはずである」

「よしてくださいよ。酒の味など分かりません。ただの儀式に使ってる道具ですからねー、贅沢な事を言つては本当の酒飲みに失礼です」

「………信徒の指導者としては、派手な飲酒は控えていただきたい所だがな」

「おっと、私が責められるのは心外です。私の場合は儀式として必要に迫られているだけですが、アックアの方はそうでもないのに酒の味や銘柄に詳しいようですがねー？」

「傭兵崩れの嗜みだ。戦場ではそういう物も必要だな」

「ハハツ、アックアはごろつきですからねー。我々、敬虔な信徒と違つて悪い子なんですよ」

軽い口調で口添えするテツラに、教皇は顔をしかめた。

それから教皇は、三十万人もの人員を収容できる大きな広場を見渡し、
 「しかし……ろくな護衛もつけず、『神の右席』の二人ローマ教皇わたくしまで野外に集
 まるとはな。やはり会合は屋内で行うべきではないのか。この状況を警備の者が見た
 ら泡を噴きかねんぞ」

「大丈夫じゃないですかねー。『使徒十字』の霊装効果はまだ有効ですし。気持きもちちの悪
 い空が広がっているじゃないですか。無数の結界が衝突・競合しすぎてオーロラみたい
 に揺らんでいます。あの壁をぶち抜いて呪術狙撃するのは難ですよ」

テツラはワインを口にしながら、夜空を見上げてそう言った。

「さて、と」

テツラはゆっくりとした動作で立ち上がると、軽く背筋を伸ばしながら、

「『神の血』の補充も終わりましたし、そろそろ私は行きましようかねー」

「あれを使うのか」

「民間人を使う事が不服ですかねー、アックア」

「……殺し合いなら、それで糊口を凌ぐ兵隊に任せれば良いであろう」

「ハハッ、貴族様らしい意見です。しかし、我々ローマ正教の最大の武器は、数です。二
 十億人という数字は大きな強みです。わざわざこれを出し惜しみほうが不自然なん
 ですよ。学園都市の総数はたった二三〇万。まさに文字通りの桁違いというヤツです」

「戦争の勝敗は人員と物資の量で決まる、か。野蛮だな。旧時代の戦争を覗いているような気分である」

「それに、吸血鬼が相手なら、こちらには秘密兵器がありますしねー」

「・・・そうか」

「我ら『神の右席』は不完全なれど、その神秘性をもって民を導くもの。ならば怯える子羊達には勝手に導かれてもらいましょよ。この羊飼いである私の手によつて……」

笛に合わせて消えていった子供達のように」

早すぎる変化の速度 In a Long Distance Country.

ここのところ、小さな火種が乾燥した藁の山へ燃え移るように、ここ数日で世界の動きは大きく変わった。ローマ正教側が世界中で同時に起こすデモ活動と、それに対する一部の過敏の反応が、次々と争いを加速させてしまっている。

そんな今回の大きな『争い』の中心には、とある一人の少年の存在がある。

上条当麻。

イマジネーター
幻想喰いという力を持つ特別な、だが普通の高校生の彼。しかし、この少年は『神の右席』の言う事が正しければ、現在二十億もの人間を敵に回している状態なのだ。この数ヶ月で彼が巻き込まれ、そしてなし崩し的に解決してきた事を思い返せば、まあ無理もない話ではあるのだが。

そんな少年は、

「……調子悪いですねえ……。主人」

学園都市統括理事会の地下室で、能力の測定と調整を行っていた。

より厳密に言うならば、能力の測定は上条だけではない。榎本貴音も一緒に測定を受

けていた。

「……完全に能力の暴走状態……。制御が効かねえ……。ッ！ 貴音……離れる……。ッ！！ 第二波来るぞっ」

「うええええ!？」

ズドンッ!! と腹に響くような大きな音が響く。その音の発生源は上条当麻だった。

(えーと。先ほどまでが死ぬ気の境地状態だったから……。今度は?)

貴音が噴煙の向こうにいる上条をみると、そこにはコウモリのような翼を大きく広げ、紅の眼をした吸血鬼がいた。

(う、うええええ!?! ヴ、ヴァンパイア!? ま、マズいですよコイツア!!)

「ここから早急に離れるんだ。お嬢ちゃん」

「逃げて、貴音ちゃん」

「……え? え? アーカード!? ミナさん!? なんかハッキリしてますけど!？」

「何故かはじき出されたようだね。今の彼は第三波が来るまで吸血鬼として暴れるだろうが……」

「……止める手段はないし、ね」

「ここからでられる確率は低いと思います。この密室は全方位窓の無いビルの外壁と同じ『演算型・衝撃拡散性複合素材』で覆われています。そう簡単に破られるはず

が………」

そういつた瞬間。

上条当麻の一撃で、その恐ろしい耐久力を誇る窓の無いビルと同じ素材に亀裂が入った。

しかも、その一撃は拳ではなく掌で行われていた。

「What's!？」

「ハハハハハハハッ!! やはり我がマスターは素晴らしい! 戦う気も失せるほどだ!」

「アハハ………凄いな。やっぱり。神成かみじょうと、そう呼ばれるだけはあるわ」

さらにその握る力を込めていくと、まるでスポンジが潰れて周りが引つ張られて行くように、壁にさらに亀裂が走る。

「ちよ、ちよつと待てやゴラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「ふむ。仲間内での闘争か。面白そうだ」

「楽しみすぎですよ。アーカードさん」

「闘争とは、それだけで良いものさ。今の私は、それほど闘争に興味も無くなったがね」
上条の脇腹を全力の勢いで蹴り飛ばす貴音。蹴り飛ばされた上条は喰屍鬼グールのように意思を持たぬ者のように起き上がる。

「暴走状態とは……ここまで酷いものなのですか……?」

「恐らく、暴走状態によって、シユレディンガーが暴れている」

「シユレディンガー……って、あの猫の実験を行った人物ですよ。確か平行世界の提唱をした……」

「私の喰らった命の中に同じ考えと名前を持つヤツがいた。マスターにあつたのもヤツを喰らい、私が何者か認識できなくなっていたときだった」

「その考えを……ご主人は喰らっていたんですか?」

「ああ。自分を認識できていたのは恐らく、幻想喰いではなく、マスター自身の強い精神力によるものだろう。だが今は暴走状態にあり、精神が不安定、そして、ヤツのどこにでもいてどこにでもいないというチカラが、彼自身を血を求めだけの化物にしてしまっている」

「じゃあ、私が元に戻して見せます」

「できるのか?」 ドラキュリーナ 吸血姫

『『できない』『できない』じゃないです。やるんです!!』

貴音は駆け出すと同時に、いくつかのカードを出現させる。

その中の一枚が輝くと同時に、貴音は息を吸い込んだ。

「麗装「博麗式段幕」!」

その一枚のカードに描かれた二つの陰陽玉と一本のお祓い棒^幣。多量の御札が貴音の周りに出現する。

陰陽玉は彼女の両腰の辺りに一つずつ、少し間を開けて浮く。御札は左手に、お祓い棒は右手に握って彼女は上条の懐に入る。

「妖器「無慈悲なお祓い棒」！」

「ガア・・・ッ!!」

振るわれた右手のお祓い棒で上条の体は吹き飛ぶ。数メートルノーバウンドで飛ぶと、床を転がった。

「・・・どうやら、「人間」の時の防御力は無くなってるみたいですね。なら、いけますッ！」

大量の御札が意思を持って飛び出し、そのいくつかが上条の体を肉体的に引き裂く。

「・・・ほう。血を求めるだけのグールになっても回復するという知識はありますか、大抵のグールは傷ついてもそのままなんですけどね」

貴音は褒めると同時、ジャツカルをその左手に持つ。

「安心しなさい。心臓は狙いませんっ」

放たれた銃弾は上条の額に吸い込まれたが、それは頭を破壊する一撃にはならず、上条の指で挟まれて止まった。

「ヌルフフフ。撃たれてみて初めて分かりますが、もの凄い破壊力ですねえ。この銃弾」
「当たり前だ、マイマスター。それは我らが王立国教騎士団HELLSINGの対化物
用戦闘拳銃『ジャツカル』だからな」

「まあ最も、私には効きませんがね」

「ご主人は何で彼のモノマネしてるんですか」

「あつはつはつ」

上条が愉しそうに笑うと、スピーカーからアレイスターの声が聞こえてきた。

『上条君。君宛にイギリスからの贈り物だ』

「贈り物………?」

『君の部屋の前に置いておいた。開けてみてくれ。彼からの手紙では、生ものだからすぐ開けるんだぜい。だそうだ』

「………ふーん」

上条は上っ面だけの返事をして黒い炎を灯し空間を渡る。

「お、第八属性『夜の炎』」

窓のないビル内に造られた、上条当麻専用ルーム（無駄に豪華）の前に大きな段ボールがあるのが上条の眼に見えた。

「………中身は何だよ」

(・・・この大きさ。身長低い人間なら余裕で入るのではなからうか)

丁寧に段ボールのガムテープをはがしていく上条。その一方で、雑念が結構多かったのだが。

段ボールのふたを開けると、銀の逆さ十字が見える。

「ハッ。吸血鬼に棺桶送るとは・・・。眠つてろつてか?」

上条が右手でその棺桶に触れると、幻想殺しが発動した。上条がびっくりして停止している、中から衣擦れの音がし始めた。

「・・・小さな吸血鬼でも送ってきたのか・・・?」

上条が棺桶を開けると、可愛らしいゴスロリ衣装を着たレディリーと目が合った。

「不死者つてトコはあつてたか。元だけど」

「と、当麻あく!!」

「おとと・・・」

涙目で上条に抱き着いてきた彼女には、以前のような大人っぽさはどこにもなかった。

「どうした? レディリー。何しに来た?」

「あ、えと。当麻にほら、私、面倒見なさい、つて、言つたれしょ? らから・・・」

「落ち着け落ち着け。後半呂律回つてないから」

「ひっひっふー、ひっひっふー」

「それ、ラマーズ法だから。お前妊娠してないから、落ち着け」

数度深呼吸を繰り返したレディリーは落ち着いたらしく、上条を見る目が変わった。

「約束したでしょ。面倒見てもらうって。ようやく、戻ってこられたのよ」

「・・・ほほう、なるほど。こりゃ本格的にアルコバレーノへの引越しを考えた方がよさそうだな・・・」

『手配しておこうか?』

「・・・相変わらず、どこから聞いてんだよ。引越し業者、というより俺の学生寮の管理を誰かに任せたい」

『・・・ふむ。美咲ちゃんでどうだ?』

「あいつか。キレイ好きの家事万能少女だから、期待はできそうだな。頼めるか?」

『君の頼みだと言えば、喜んで引き受けるだろう』

「まあ、それでいくつかのアジトの管理をあいつらに任せてるからな・・・」

「ね、ねえ。何の話してるの?」

「こつちの話だ。お前は気にしなくていいんだよ。レディリー」

上条は優しくレディリーの頭を撫でた。

行間 一 引つ越しの準備中の一幕

「服も数着あるし、食料に関しては買えばいいし……」

上条は窓のないビルを出て第七学区内をフラフラと歩いていった。

駅前の辺りで、常盤台中学の制服を着た御坂美琴の背中を発見した。

しかもジューズの自販機にハイキックをぶち当てては、『この自販機は駄目なのか。あれ……?』などと首を傾げている。

その様子を見た上条は、そのまま気配を、存在感をゼロに近づけて、早足でその場を離れる事にした。

「……君子危うきに近寄らず。また触らぬ神に祟りなしとも言おう」

「何がよ?」

「お前がだよ」

上条は心底嫌そうな顔を隠そうともせず、キョトンとした顔の御坂を見る。

「何よその顔」

「お前に会ったからこんな顔になってんの」

「だから何がよ?」

「これ以上のトラブルは本当に許してください。面倒事は勘弁です」

「だから何だっつってんのよッ!？」

美琴はマツハで逃げようとする上条の首根っこを掴んで、その耳元で囁み付くように叫ぶ。

「っつーか事あるごとに会話を切り上げようとすんじゃないわよ! この前送ったメールの返信も放つたらかしだし、あれどうなってるのよちよつとアンタのケータイ見せてみなさいよ!!」

「メール……? そんなのあつたっけ?」

「あつたわよ!!」

上条はちよつと考え、自分の携帯電話を取り出し、美琴に見せるようにメールボックスを開いて、それから小首を傾げると、

「……ねーじゃん」

「あつたっつってんでしょ!! ぎえ、受信ボックスに何も無い!? もしかして私のアドレスをスパム扱いしてんじゃないでしょうね!!」

(……そもそも届くわけないだろうが。よく見てみる。登録してる人間全員“仕事”の人間だ。それは“仕事用”の携帯電話だからな)

上条は一息ため息をつく、美琴から携帯電話を取り上げて

「ほら、もう終わりだ。そんなに人の携帯電話を見るんじゃないやねえ。個人情報とか、見られたらマズイものとかあるんだよ」

上条は心の中で『バラバラ死体の画像が送られてきていたりな』と付け加える。

ちようどその時、飛行船の側面の大画面で『見えない戦争』の爪痕が報道されていた。『……どうなったんのよ。九月三十日に何が起きたかなんて知らないけど、別にこんな望んでなかったじゃない。あの一件が引き金になったなんて言われても、当の学園都市は全然静かなモンじゃない。何でこいつら、勝手に殴り合って、勝手に傷つけ合ってるのよ。黒幕は顔も出さなくせに、こいつらだけが苦しめられるなんておかしいじゃない』

「……、ほんと。常盤台なんて顔だけでバカだな」

「はっ」

「いいか。どうもお前は、『この一連の騒動には背後に誰かがいて、そのたつた一つの原因を取り除けばすべて元通り』なんてくつだらねえことを望んでるんだろうけど。もう黒幕なんていないんだよ。確かに全ての元凶となった九月三十日の事件を起こした犯人ならいるだろうけどよ。その時点で、綺麗に止める事ができていればその方法で何とかなっているだろうけどな。ただただもう『遅い』んだよ。もう火は付いてしまってる。山火事はこれだけ大規模に広がってしまったている。この騒動を止めたいんだつたら」

上条はそこで言葉を区切つて、

「ニュースを報道するもの、騒動に一度でも加わつたものを全て消すしかないんだよ。大げさでも何でもない。これ以上騒ぎを広げたくないなら。火の回つた山を、山ごと消し飛ばすしかないんだよ。悪役はたった一人？ そう思うんらお前は何も知らない表の住人だ。人間の裏を一度でも見た人間はそんなことは言えない」

——子供が考えたところで、答えは出ないんだよ。

決定打となる引き金 M u z z l e | o f | a | G u

n.

上条がのんびり歩いていると、その最中に人とぶつかった。

今度は五、六十歳ぐらいの初老の女性だ。

「親船さん」

「上条君。ごめんなさいね」

「それは、ぶつかった事に対してですか？ それとも、これから俺が首を突っ込む事件のことに對して、ですか？」

「正解です」

ガチリ、という小さな金属音が聞こえた。

上条は『チャカカ・・・』と眩くと親船最中のコートで隠れている拳銃の銃口に手をかざす。

「そこまでして、裏切ったフリをするのか」

「すみませんね、本当に」

暫くそのまま歩いて、上条達は離れたところにある児童公園に来た。

上条はとりあえずベンチに座って地面の影に、荷物をしまふ。

「んで、俺はどうしたら良いんだ？」

「世界中で起こっている大きな問題、その解決をあなたにお願いしたいのです」

「具体的には？ まさか解決に手っ取り早い『理由』や『原因』が存在するのか？」

「その、手っ取り早い『理由』や『原因』が、存在するとしたらどうしますか？」

「聞くなよ」

「ですよね。そして、解決方法はあなただけが持っているものに期待して」

「俺だけが持つてるもの……」

上条は熟考して答えを導き出す。

「まさか……そういう事なのか」

「ええ」

「この混乱の裏にはその手の『異能の力』が関わってて、そいつをぶっ壊せばそれで元通り。今ならまだ解決できるって？」

「そういう事です」

「だったら、やるしかねーだろ。どうせ、統括理事会のほとんどの連中は反対するだろうけどな。俺がそんな事するって聞いたら。特に、統括理事長。はな」

上条はゆつくりと立ち上がると、学生服の内側から黒塗りの銃を取り出す。

「さて、ここからの案内はチミがしてくれるのかな？　土御門「元春くん」

「カミヤん。やっぱりバレてたか」

「それと、親船に何を言われたか知らねーが、その腰のベルトに挟んでるモノは抜くなよ？」

「バレバレだにやー。でもそれじゃあ」

「安心しろ。貴音」

「はいな！」

影の中から高速で出てきた少女に土御門は数歩後ずさりする。

「影縫いで親船さん作れるか？」

「一週間なら」

「十分」

上条はそう言うと、ジャツカルをしまい、454カスールカスタムオートマチックを取り出す。それと同時に、貴音によって親船最中の体がほんの一瞬だけ影に包まれて元に戻った。

そして、

次の瞬間彼女の胸のど真ん中に大きな穴が開いた。細身の人の腕なら余裕で通りそうぐらい大きな穴だ。

「カミ……やん?」

「十三ミリ爆裂徹甲弾。これを喰らって無事な化物フリークスはいないと言わせた一品だ。土御門、お前が案内してくれるんだろ? このくだらない一連を終わらせるその方法がある場所までよ」

上条はカスールをしまいながらそう問いかけた。それを横目に貴音は親船最中の携帯電話で救急車を呼んだ。

「説明は後だ。時間が無い」

土御門はそう言った。

「第二十三学区へ向かうぞ。航空機用の意がある。今回限り、親船最中の力を使って準備させたものだ。そいつを無駄にさせるつもりはない」

「OKOK。行こうぜ」

上条は土御門の後に続いて児童公園の外に出ながら、そう言った。

児童公園には、血まみれの親船最中だけが取り残される。

遠くから聞こえる救急車のサイレンを馬鹿にするように銃声とは思えない音が響いた。

魔術師から遠いもの Power Instigati
on.

学園都市・第二十三学区。

航空・宇宙産業だけに特化しただけの学区で（もはや学区じゃない）、学園都市の主要な空港も全てこの第二十三学区に集中している。

「第二十三学区って事は、飛行機に乗るのか」

「ま、国外に出るからな」

「でしようねー。しかも騒動の中心だろ？ どうせ行くの。バレたら国際的非難の的だな」

バスターミナルから国際空港行きのものに乗り込んだ土御門に、上条達もついて行く。

「なあ？ 土御門。俺達はどこに行くんだ」

「フランス」

「フランス？」

「ヨーロッパか……。また遠いな。つつと、大体一時間ちよつとか」

「・・・? ご主人。一〇時間ぐらいかかりませんか?」

上条の回答に疑問を持った貴音が質問するが、上条は分かりきった様子で。

「いや、どうせあれに乗るだろうし」

上条は空港のターミナルビルからやや外れたところの滑走路に止めてある、全長数十メートルクラスの大型旅客機をさして言う。

「あの、嘘ですよね?」

貴音は半分絶句しながら、上条に確認する。

「あれ、ですよね。確か——」

「——時速七〇〇キロぐらい出るヤツ」

はっはっはっ、と土御門は笑いながら、

「何事も速い方が良いだろ」

「速すぎなんですよ!! 乗った事あるんですか、乗ってる間分厚い鉄板でゆっくり体を押し潰されてるみたいな感覚がするんですよ!? 胸が小さくなっちゃいますっ!」

「もー。貴音つちつたら、これから非公式国外活動をするっていうのに、まさか機内食をゆったり食べて映画を観ながらフランスへ向かおうとか思ってたんじゃないだろうにやー?」

「それ以上小さくなる胸なんてないだろ・・・」

「い、いや、流石にそこまでは思つてませんけど……。え、マジであれ乗るの？ わつ私はあまりオススメはしませんよ!? ……つて、ご主人今失礼な事言いませんでした!？」

「大丈夫だつて。マツハ3を超えちまえば感覚的にもう違いなんて無いから。安心しろよ貴音」

「どの辺がどう大丈夫なのか説明してください!! あと謝れ!」

貴音がグダグダと文句をつけたが、上条と土御門は『はいはい機内でな』と言うだけで取り合わない。

土御門の案内で業務用の扉や通路を潜り抜けると、一般的なゲートを使わずに超音速旅客機へ向かった。

*

「C文書。——それが今回のカギとなる霊装の名前だにやー」

広い機内に、土御門の声が響く。

超音速旅客機のサイズは、一般的な大型旅客機より一回り大きい。そんな広々と感じてしまう空間を、どうせ三人でしか使わないのだからと、上条と貴音と土御門は一番高級なファーストクラスのと真ん中を陣取っていた。箱詰めのようなエコノミーとは違い、足を伸ばしてもスペースが余るぐらいの余裕があった。

そんな中、土御門は隣の席にいる上条達の方へ顔を向けて。

「正式にはDocument of Constantine。初期の十字教はローマ帝国から迫害を受けてたわけだが、この十字教を初めて公認したローマ皇帝が、コンスタンティヌス大帝。で、このコンスタンティヌス大帝がローマ正教のために記したのがC文書って事になるぜい」

「それに記されていたのが、十字教の最大トップはローマ教皇であるという事と、コンスタンティヌス大帝が治めていたヨーロッパ広域の土地権利などを全てローマ教皇に与える。だろ?」

「………なんか、ローマ正教にとって胡散臭いぐらい有利な証明書ですね」

土御門は座席横にあるタッチ式の液晶モニタをいじりながら言った。

「霊装としてのC文書の力は………そうだな、コンパスみたいなもんだって言われている」

「コンパスう?」

「C文書が示した土地・物品は全てローマ正教に開発・使用の決定権が委ねられるって事になるんだ」

「はえー。コンパス兼礼状ですね・・・」

「このC文書、その真偽はもの凄く胡散臭いんだろ？」

「ああ。だが、C文書の真の効力——霊装としての力は、その程度のものじゃない。かつたんだよ」

「はあ？」

「その程度って事は・・・」

「C文書の真の効果はもつとスケールがデカいんだ。そいつは『ローマ教皇の発言が全て「正しい情報」になる』というものだった」

「そ、それって!!」

貴音は身を乗り出して。

「『学園都市にはホモしかいない』と言ったら、誰もが信じるって事ですかあ!? 根拠がなくとも!?!」

「そういう事になるが・・・、なんで同性愛者の話なんだよ・・・」

「カミヤん。貴音っちの例えはあながち間違つてないぜい。どんなにくだららない事でも、『教皇様の言う事だから間違いない』って思わせるだけのものだにやー」

「物理法則がねじ曲がるわけではない。」と

「人間の心理ですね。従わない人間がでると困るから、威厳を保つための小細工が必要なんです」

「神は絶対なんて言葉は揺らぐ。それこそ、神を信じなくなる人間も多数出てきた。でも、ローマ正教としては、『神は絶対』を貫かなきゃならなかった。だから必要だったんだよ。大きな危機の前に、人々の心が離れちまわないように。C文書っていう霊装が」

「いわば、理想と現実の隙間を埋めるための霊装、と言ったところですね」

「なあ、貴音。お前大丈夫か？」

「言わないでください……。我慢してる……。んですから」

「貴音っち、本当に大丈夫か。辛かったら深呼吸してみろ」

「ほら吸ってー」

「すー」

「吐いてー」

「はー」

「もう一度吸ってー」

「すー」

「また吐いてー」

「はー」

そんな事をやっている内に機内のスピーカーからポーンと柔らかい電子音が聞こえてきた。更に続けて、まるで合成音のように整えられた女性のアナウンスが流れる。

「・・・つと、そろそろ時間がなくなってきたみたいだにやー。カミヤん、貴音つち本当に大丈夫か？」

「しんどそうだけどな。こりや一度吐いちゃった方が楽になるのか？」

「それならほらほら。案内するからこつち来いこつち。シートベルトの着用ボタンとか外しちゃつて。フライトアテンダントとかいねーから気にする必要はないにやー」

土御門は何の気なしに席から立つと、貴音ものろのろとそれに従う。自分の意思で動いていると言うよりも、朦朧となった頭が勝手に動いているような感じだった。

上条はそんな二人の後ろを歩いていった。土御門は通路を歩き、扉を開け、更に細い通路を歩き、頭がぶつかりそうになるほど低いハッチを潜り抜け、金属が剥き出しで周囲から轟々と音のする所まで歩いてきた。

「というか、どこだこっちは？」

上条の質問を無視して、土御門はリュックサックのようなものを押しつけてくる。

「はいこれ着けてこれ」

「おい？ これって」

「??? 土御門さん？ あの、吐いた方が楽になるっていうのは？」

「大丈夫大丈夫。すぐ開くから。ほら早く着けて」

言いながら土御門は既にリュックサックのベルトを体に巻いている。両肩の他にお腹や胸にもベルトを固定させる方式の、なにやらごつい仕組みだ。

上条はそれが何か分かつているからテキパキと着けていくが、貴音は頭が回らないのだろう。見よう見まねでベルトの固定器具を留めている。

「よし、貴音つちもオツケーだにゃー」

土御門は壁についている缶詰の蓋ぐらい大きなボタンに掌を叩きつけると

「じゃ、思う存分吐いちゃおうぜーい!!」

ごうん、という妙な音が聞こえてきた。何らかの太いポンプが動いているのだ、と貴音が気づいた直後、

ガバツ、と。

唐突に機体の壁が大きく開き、その向こうに青空が見えた。

「はい？」

と貴音は思わず目が点になった。

そして、目を点にしている場合じゃないほどの烈風が畿内を吹き荒れ、あつという間

に全てが機体の外へ放り出されそうになる。

「つつ、つつつつつつ土御門オーツ!？」

貴音は慌てて機内の壁の突起に両手をかけたが、何秒持つか分からない。

轟々と風が流れる中、土御門はニヤニヤと笑いながら、

「さあ貴音っち、準備は終わったから思う存分吐いちゃうにやー」

「吐いちゃうにやーじゃねーですよっ!! どうなつてんですかあ!! あつ、あんた。さては荷物搬入用の後部ハッチを思いっきり開放しやりましたかーっ!!」

「いや、貴音。馬鹿正直にフランスの空港に着陸しちやったらローマ正教のクソ野郎どもにバレちまうだろ」

「そうだにやー。この飛行機はロンドン行きですよ? オレ達はここで途中下車」

「馬鹿ですか!! 機体の速度を考えなさい! 時速七〇〇〇キロオーバーでハッチなんか開放したら、この飛行機が中からバラバラになっちまうちゆうんですよ!!」

「悪いもう開き済み」

「死!!」

「バーカこれくらいじゃ死なねーだろ。ほら行くぞ」

上条が貴音を壁から引きはがし、そのまま大空へと投げ捨てた。土御門が続いて飛び出そうとした瞬間に、リュックサックを投げ捨て上条が飛び出した。

「ちよ、カミヤん!？」

現在時間はお昼過ぎ。

清々しいほど青い空の下、女子高生の悲鳴と男子高校生の笑い声が炸裂する。

「いやあああああああああああああああああああああああああああああッ
!!」

「イヤッホオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ
!!」

三六〇度で青空展開中。

上条は完全に楽しんでるが、貴音はものすごい勢いで回り始めている。

「貴音ー。お前エネになれば飛べるだろー?」

「………ハッ!!」

上条がそう声をかけると、貴音は何か気付いたようで、とつさに大きな白い天使の羽がリュックサックを強制分離させて広がり、風に逆らい始める。

「戦略用エンジェロイド……。Type "α" 『イカロス』……モード空の女王
起動」

呟いた貴音の衣装が変わり、彼女の頭上に光の輪が浮かぶ。その様子はまさに天使だった。

「おおっ。ウラヌスクイーンか……。じゃあこっちも」

上条は手袋をはめると一息でハイパー化した。

上条と貴音。両者ともそれぞれの方法で減速していく。

アビニオンでの一幕

上条はきりもみ回転をして落ちていく貴音について近くの川にかかる橋の上に着地した。貴音も何とか（一度水面をなぞったが）橋の欄干に着地した。

「しかし大きな川だな。一〇〇メートルぐらいあるんじゃないの？」

「・・・ですね」

貴音はまだ空の女王の状態が解けていないのだろう。彼女の姿は天使そのものだった。

上条の神々の義眼と似たような赤い眼が、彼を見つめていた。

「は、ふっ」

「おとっ」

急に力が抜けたのか、貴音は空の女王の状態から元に戻ると上条に体重を預ける形になった。

「大丈夫かー？」

そう問いかけながら上条は周りを見るが、人はいなかった。デモや暴動を恐れて外出を控えているのかもしれない。

と、その時。バゴン、ガゴン、といった、とにかく重たい感じの何かを外れる音がする。

「……………へ？」

上条と貴音が顔を合わせて見ると、彼らが今いる橋の片側が、すでに崩れていた所から更に崩れ始めていた。

「おっ。おっ。(^ ω ^ ≡ ^ ω ^) おっおっおっおっおっ!!」

「……………」

「そんなこと言ってる場合じゃないですよ……………」

「逃げろおおおおおおお!!」

全速力で逃げ出した上条達は崩れ行く石橋を振り返っていた。

「アジャパー」

「これ、私達のせいですかね……………」

「さあ…………。元々崩れてたし…………。大丈夫なんじゃね」

「あれ? あれって…………、天草式の五和、でしたっけ」

「ん? ああ」

「いっつわさーん」

「あ、え？」

「お久しぶりですねー！」

「あ、はい。ご無沙汰しています」

現在は他の天草式メンバーと同様、ロンドンで生活しているはずだ。特別な何か用がなければフランスにいる訳がない。

「なあ五和。もしかして、お前もC文書を？」

「へ？」

「ほら、あれですよ。世界中のデモ・抗議活動に関わっているっていうあの」

「どっ、どうしてそのことを知っているんですか!? た、確かに私達はC文書について調査を行っていますけど。私達天草式がようやく探り当てた糸口をそんな簡単に!? 流石は元女教皇様を拳一つで殴り倒した御方ですっ!!」

（・・・というか。原作の上条当麻はボロボロに負けただろ……。何で殴り倒した、なんて話になってんだ？）

何やら瞳をキラキラさせている五和だが、上条は我関せずと言った調子で思考を巡らせる。

「それより、あなたは日本の学校は大丈夫なんですか？」

「ん。大丈夫だと思う。今日中にコトを終わらせれば」

「五和さんは、何か聞いていませんか？」

「私達は、その。イギリス清教からの要請を受けて、フランス国内の地脈や地形の魔術的価値などの調査を行っていたんですが」

上条と貴音は適当に聞き流しかけて。

「私『達』？」

「ええ。天草式十字凄教の戦闘メンバー五十二名。総員でフランス国内の主要都市を洗っています。私はこのアビニオンを担当しているんですけど」

「そっか。ここ、アビニオンっていうのか」

上条は何故か納得したように眩くと、答えを口にした。

「じゃあ教皇庁宮殿が怪しいな」

「ほえ？ 何故ですか？」

「C文書はバチカンでしか使えない。なんて条件は、俺がここ、アビニオンに落とされた事で間違いなく覆される。だったら、教皇庁なんて名前がついてるそこが怪しいだろ」

「……行ってみますか」

「ちよ、ちよつと待ってくださいよ」

歩き出した上条達に五和が慌ててついてくる。

——と、暴動が道を塞いでいた。

「……なんか、怒ってませんか？」

「俺達が日本人だってバレてるんだろ？」

「敵だと認識してる訳ですか」

「だな」

「ご主人。何とかありませんか？」

「お前が何とかしろよ」

こちらへ走ってくる連中を前にして上条達は解決人の押し付け合いをしていた。その横で五和はオロオロしていた。

「……しょうがねえ。二人同時にやるか」

「……ですね」

上条はボンゴレギアを纏った両手を前方に構え、貴音はモード空の女王で黒塗りの弓を引いていた。

「……XX BURNER」

「……APOLLON」
最終兵器

「……お互い最強の武器だな」ですね」

瞬間爆音と線香が通りを埋め尽くした。

家庭教師ヒットマンREBORN！ 主人公の死ぬ気の炎 最強の攻撃、XX BU
RNER。

それのおとしもの 最強のエンジェロイド。イカロスの国一つを吹き飛ばす、APO
LLON。

二つの巨大すぎるオーバーキルすぎる攻撃が、町の一角の通りに放たれていた。

しかしそれは、誰も殺していなかった。

「あまり派手にやりすぎると、敵が危機感抱くぞ？ エネ」

「はア？ ご主人の方が派手でしようが」

土煙の中を堂々と突き進む上条たちは、ポケットに手を入れていたり、腰の後ろで絡めたりと、緊張感は既に無くなっていた。

その時、唐突に上条のポケットにあつた携帯電話が着信音を鳴らした。

土御門からだつた。

『カミヤん、そつちは大丈夫か!?!』

「おう。大丈夫だが？ そつちは？ 暴動に巻き込まれたりするのか？」

『今は教皇庁宮殿つて建物に向かつてる最中。このフランスでC文書を扱える場所つ
ついたらあそこぐらいしかないだろうしにやー』

「おっ♪ やっぱり。お前もそこに向かつてるんだな」

『?』

「つてこたあ。俺の予想もあながち間違つてなかつたわけだ」

『そりやそうかもだが……。カミヤん、どうして教皇庁宮殿の事を知ってる? 確か説

明する前に飛行機から飛び降りたはずなんだがにやー』

「こつちは天草式の五和つてヤツと合流してだな。色々推理してたんだけ。さつき暴動を一つ消したところだけ」

『そうか。こつちも似たようなもんだにやー。ま、色々あつた。アビニョンの細い道と人の波を使った暴動つてのは、相性が良すぎる。真つ向から突つ込むだけじゃ本命には近づけもしない』

「ありや。近づかないで解除する方法つてあるのか? 流石に、これ以上騒ぎを大きくするわけには……」

上条は周りに集まつてきている連中を一瞥しながら言った。

『ある』

「あるのか」

『逆転の発想つてヤツだな。教皇庁宮殿へ行けないなら、教皇庁宮殿に行かずに問題を解決できる方法を使えばいい』

「えつと……どういふことだ?」

殴りかかってきた人間の波の中にきれいに消えた上条と貴音は五和も連れて路地裏に身を隠す。

『その天草式のヤツから少しは話を聞かなかったか？——つて事で問題です。アビニヨンの教皇庁宮殿が重視されている理由は何でしょう？』

『そりゃー。バチカンにある施設を遠隔操作できるからだろ？ だからC文書もここで扱う事ができるって。あ、そつか。その線を切ればいいのか』

『ご明察。そいつを切つちまえば連中はC文書を扱えなくなるはずだ』

「なるほど。それじゃあそいつをぶつ壊しちまえば早い訳だな」

『そうなるが。パイプを見つけるのも壊すのも時間がかかるぞ？』

「そんな馬鹿なあ。見つけるのは貴音がいるし」

「はいな！」

「ぶつ壊すのは俺の右手がありや十分だろ」

『それなんだが……。カミヤんの幻想殺しで、本当に地脈が消せるのかは分からないな』

「は？ いやいや、地脈って魔術的なものなんだろ？」

『それなんだが』

土御門は遮るように言う。

『どうも、カミヤんの右手は正体が掴み切れてないんだよな。魔術でも超能力でも何で

も打ち消す……とは言うが、例えば……そうだな。人間の「生命力」だってオカルト的な力だが、カミヤンは握手をただけで人を殺せるって訳ではないだろう？」

「それは……」

「……出来ませよ」

『「え？」』

「……やろうと思えばご主人は、相手に触れるだけで「生命力」をゼロにすることはでき……ます……」

「言いたくないなら言わなければいいんだぞ？」

『……というか。何でカミヤンより貴音つちの方がカミヤンの右手について詳しいんだぜい？』

「それは……」

二人そろってその場にいない土御門と目を合わせないようにしてしまふ。

V. S. 神の右席

上条たちがやってきたのは、アビニヨンにある小さな博物館だった。

『博物館』という独立した大きな建物があるのではなく、他の集合住宅や店舗と同じく、道の左右に聳える砦のような建物の一角を利用していただけだ。

正面の入り口のドアの前に、金属のシャツターが下りており、『閉店』と書かれたプレートが引つ掛けられている。

「貴音。開けられるか？」

「ええ。任せてください」

上条当麻に体を預けるように貴音の体から力が抜ける。そして少ししてシャツターが自動的に開いていった。

「……警報装置も作動しないようにしてあります。さあ、行きましょう」

「……相変わらずの手際だな。電脳少女さん」

「……自分の体を動かすようにロックを外すのですから、簡単ですよ」

「……えっとー。貴音、どこだ？」

「ここまでくれば私でも分かります。こっちみたいですよ」

槍を片手に五和は奥へ進んでいく。

上条はその先の不自然に何も無い床を神々の義眼を使って、『見る』。

「ほうほう。確かに地脈に『何らか』の仕掛けが施されてるな……」

「どうです？ ご主人。壊せそうですか？」

「問題ないだろ。幻想喰いなら、地脈を丸ごと一本切断するとしても、一瞬で終わるからな」

「そうですか。ではでは、お願いしますね」

「ああ、任せとけ」

上条は、ラインがあると思われる地点の真上に立つと、右拳を握りしめた。

すると、手の甲に『幻想紋』が刻まれ、袖で隠れて見えてはいないが、腕にも同色の波が刻まれていく。上条はその拳に更に力を込めると、服の上からでもわかるほどに、彼の腕の紋様が輝き出す。

「幻想の^{マスタ}アアア——」

上条が勢いよく右手を降り下ろすと同時。

大きな音が響く。

ただし、それは上条の右手が生み出したものではない。

唐突に博物館の外壁を引き裂いた何らかの攻撃が、床に拳を叩きつけた上条の体を

狙って襲いかかったのだ。

感覚としては、巨人の振るう刃。

色は白。

攻撃は上条に向かって一直線に進む。

それに気づいた貴音は、刃と上条の間に飛び出ると、右手を振り抜いて白い刃を消し飛ばした。

「この・・・ッ!!」

第二撃は直後に来た。

外壁を次々と引き裂いて、建物の外から『白い刃』が襲いかかってくる。

壁から壁までを一気に突き抜けた『白い刃』の動きは、まるで子どもが乱暴に木の枝を振るうような雑なものだ。しかし、そこへ圧倒的な破壊力が加わると状況は変わってくる。石の壁や床が崩れ、ガラスのショーケースが砕け散り、その破片が四方八方へ飛び交っていく。

轟音が連続し、天井から細かい粉末が落ちてくる。

(まずいですよコイツァ・・・・・・・・。このままじゃ、建物自体が保ちません・・・・・・・・ッ!!)
「ご主人ッ!!」

貴音は叫びながら出口へ走る。

上条もそれについて、彼らは急いで博物館の正面出口へ向かう。

その間にも『白い刃』は壁を引き裂き、獲物に追いつくように振り回される。

上条達は博物館に転がるように飛び出した。

そこへ、

「おやおや。やはり近距離から放たなければ精度が落ちるみたいですねー」

声は間近から聞こえた。

鼻先数十センチの位置。

眼前の人物は、上条の返事を待たずに右腕を振るった。

その腕には、白い何かがまとわりついていた。

緩やかな動きに反して、それは滑り落ちるギロチンのような速度で上条の首を狙う。

空気を裂く轟音が炸裂する。

「ああ、もうー！」

面倒くさそうにかざした右手に、放たれた『白い刃』が激突する。

『白い刃』は粉々に砕け散った。

「・・・・・・・・小麦粉か」

上条は白い粉末状になり、周囲に飛び散った物質の正体を即座に見破った。

「ローマ正教ですか」

「間違いではありませんが、どうせなら『神の右席』と呼んで欲しかったものですねー」

上条はそう言われて心の中でガッツポーズをした。

『神の右席』。

そこに所属する『前方のヴェント』は、九月三十日にたった一人で学園都市の機能をほぼ完全に麻痺させた事があるのだ。

「私の名前は『左方のテツラ』」

男の手のなかに集まった白い粉末が、形を成す。

それはやはりギロチンだ。

「やっと私の出番がきたようです。何せ、『一神の右席《わたしたち》』は人間が使うような普通の魔術は扱えませんからねー。C文書の行使は他の術者に任せなくてはなりませんし」

テツラは処刑用の刃を無造作にぶら下げ、楽しそうに笑った。
にっこりと。

「そんな訳で、暇潰しにでも付き合っていただきましようかねー。対地脈用の探査に引つ掛かったのはあなた達が初めてですし、少しは楽しませていただけるとありがたいのですが」

「……潰す。その、人をなめ腐った態度ごと、体型を矯正してやる……」

左方のテツラが右手を振るった。

その動きに合わせて『白いギロチン』が動いた。形を変え、白い津波となり横一線に全てを薙ぎ払っていく。

上条は自らを護るように左腕を構える。

そのあまりの威力に、上条の左の服の袖が切れ、腕が露出した。そこには波線状の幻想紋が刻まれている。

「五和。お前は自分の身を護ることだけを考えろよ！」

上条はそう言うのと、彼女の返事を待たずにテツラの元へと走り出した。

テツラの方は上条のチカラに注目したらしい。

「本来なら今の一撃で死んでいたはずですけど。なるほど、それが一幻想殺し《イマジンブレイカー》。……前方のヴェントを追い詰めたと聞いていますがねー」

ニヤリと笑い、テツラはギロチンを振るう。

白い刃はネジのように尖り、その鋭い一撃が上条の胸へと一直線に襲いかかる。

上条の右手が防御するよりも先に、貴音が彼の前に飛び出し左手を振るう。

「すいません、と謝っておきます……」

それは誰に向けたものか。五和がそう言った時にはテツラを囲むように直線的な複数の光が、蜘蛛の糸のように張り巡らされていた。

「——七教七刃!!」

鋼糸。

ゴバツ!! と空気を裂きながら、テツラを囲むワイヤーが凄まじい速度で襲いかかる。

「おお。七閃」

拳銃の弾丸よりも素早かったのでは、と思うほど。

しかし、

「——優先する」

テツラの表情は変わらず、そう口元で呟いただけだった。それだけでテツラを狙う七本のワイヤーは、その体を切断するどころか、タコ糸のように絡みつくだけで、皮膚に傷一つ与えることもなかった。

五和の顔が驚愕に染まる。

テツラは右腕を軽く振るい、それこそ蜘蛛の巣を裂くように、皮膚に接触している七本のワイヤーをブチブチと切り取っていく。

「『優先する』……」

「へえ……。『神の肉』に対応した武器か。おもしろーじゃん」

「へえ。東洋人でも分かれますか」

感心したように告げる上条に、テツラは挑発するように告げる。

「ミサでは葡萄酒は『神の血』、パンは『神の肉』として扱われます。そしてミサのモデルとなったイベントは、言うまでもなく『十字架を使った「神の子」の処刑』ですよねー？」

「おう、そうだな」

「『神の子』は十字架に架けられた』……冷静に考えれば、ただの人間に『神の子』を殺せた、というのには普通ではありません。私でも難しいでしょうねー。しかし、神話は時として『優先順位』を変更します。例えば『神の子』が世界人類の『原罪』を背負うために、本来の順位を無視して『ただの人間』にあつさり殺されてしまったように」

「なるほど、『神の子』の神話を完成させるための秘儀……優先順位の変更。それがテメエの扱う唯一の術式ってわけか」

「ええ。その名を『光の処刑』。小麦粉を媒体とした刃物への任意変形はその副産物のよいうなものです。お分かりいただけましたでしょうかねえ？」

「ああ、よく分かったぜ。お前が、副産物をメインとして扱っているってことがな」

「……この私の前では強さ弱さなど関係ありません。そもそも、その『順番』を制御できるのですからねー」

「順番……」

「しかし、さて、どうしましょうか。私は種を明かしましたが、そこから先はありますか。まさかとは思いますが、謎解きが終わったらそれでおしまいなんて考えてはいませんよねー?」

「ああ、クリアだ」

上条はハーデイスを取りだし、シリンダーに赤い弾頭の銃弾をこめる。

「さあ。チエックメイトだ」

「そんなオモチャで私を叩けるとでも?」

上条は口角をつり上げて、引き金に指をかける。

「優先する。——弾丸を下位に、人肌を上位に」

テッラが発したその言葉に、上条の言葉が重なっていた。

「——バーカ」

ドンツ!! と銃声が鳴り響いた。

放たれた銃弾は、テッラの心臓に当たって、爆発した。

「ガッ……ハ……ッ」(銃弾が……爆発した……?!)

「思った通りだ。今お前は銃弾より人肌を強くした。だが爆発の威力よりは弱いだろうな。当たり前さ」

「炸裂弾!!」
バーストブレット

上条はハーデイスの銃口から出る煙を吹き消した後、彼はニタリと笑う。

「答え合わせは、必要か？」

「.....くっ」

上条がニタリと笑った瞬間、鼓膜を破るほどの轟音が鳴り響いた。

それは魔術によるものではない。

爆薬がアビニヨンの街並みを突き崩す音だ。

当然ながら、それはテツラや上条達が巻き起こしたものではない。

第三者が横槍を入れたのだ。

空を覆う鋼鉄の群れ C r u e l | T r o o p e r s .

上条と貴音、そして五和は。教皇庁宮殿に向けて走っていた。

パワードスーツ

走りながら当たりを見渡せば、そこら中にいるのが駆動鎧だ。機体名はH S P S — 1

5、通称は『ラージウエポン』。学園都市の技術の粋を集めて作られている。

彼らは暴徒達に向かって対隔壁用ショットガンを放っている。

恐らく中身は空砲だろう。

だが、莫大な炸薬を使って放たれる衝撃波は、それだけで人間の肺から酸素を吐き出させ、その体を地面へ突き飛ばす。

(こんな事をするのは……)

学園都市上層部。

統括理事会。

さらにそれを束ねる、実質上の科学サイドのトップ。

(探しているんですね。ご主人と私を)

(ああ。あの衝撃波喰らって無事なのは、俺と貴音ぐらいしかこの地にいない。俺の予想だが、そろそろ上の羽虫が動くぞ)

(羽虫……。あれは。学園都市製のHSB-02……。超音速ステルス爆撃機ですか!?)

上を見上げた貴音の目には、青い大空を悠々と舞う漆黒の爆撃機があった。

一〇〇メートルクラスの機体は一つだけではない。一〇機以上の爆撃機が大きく弧を描く形でアビニヨンの上空をぐるりと回っている。

上条達がアビニオンへやってくる際に利用した、時速七〇〇〇キロオーバーを叩き出す超音速旅客機。あれと同じ技術を使った爆撃機だ。その圧倒的な速度は、ただ真っ直ぐ飛ぶだけで追尾ミサイルを振り切れるとまで言われている。

(ちよつと、待つてください……? あれが動くという事は……『アースブレイド地殻破断』ですかあ!?)

「ああ、おそろくな」

念話をやめた上条達は、教皇庁宮殿に突入した。

教皇庁宮殿の中は広がった。

「何も……ないな」

「誰も……いませんね」

上条は何かが気になったのか、携帯電話を取り出してテレビ機能を付けた後、登録メモリからある番号に電話をかける。

「・・・あー、御坂」

『なつ、何よ』

「ちよつと聞きたい事があるんだけど、今大丈夫か？」

『へ、へえ。それって私じゃないとダメな訳？ 他の人でも別に良いんじゃないの』

「ん？ ・・・そうか、そうだよな。別に御坂じゃなくても——」

『ノンノンノンノン!! ちよ、アンタ私に何か聞きたい事があつたから掛けてきたんじゃないかったつけ!』

「ん、まあ。そうだな。御坂、ニュース見れるか。アビニョンって街でなんか起きてないか？」

『はあ？ アンタ何を言ってる訳？ テレビなんてどこを点けても臨時ニュースしかやってないじゃない。アビニョンってフランスの街でしょ。なんかそこで、どつかの宗教団体が国際法に抵触する特別破壊兵器を作つて、その制圧掃討作戦が開始されたつて大騒ぎになつてるでしょ』

「・・・そうか」

『何でも本来ならフランス政府が始末する所を、特殊技術関連のエキスパートが必要だからって、学園都市がかなり深く食い込んでるとかって話だけど。・・・つか、アンタ今どこにいる訳？ むしろこの情報が入つてこない場所を探す方が難しいんじゃない

ないかしら』

「・・・仕方ねーだろ。現地にいるんだから」

上条がポツリとそう言った瞬間。

轟音と共に、上条の真横にあった分厚い壁が唐突に破られた。

（駆動鎧!? つつか速い!!）

避けきれなかった上条の体に駆動鎧がぶつかる。手にしていた携帯電話が床に落ち、液晶画面が粉々に砕け散った。

「テツラ・・・」

駆動鎧は動いていなかった。機能停止していたのだ。

その原因を作った『優先』の魔術を使って駆動鎧を潰した男は、汗一つかいていなかった。

「やられましたねー。暴動という混乱を収めるために、さらに大きな混乱を生んで呑み込んでしまうとは。学園都市もそれだけ本気という訳ですか。ある程度の国際的非難を受けてでも、こいつをどうにかしたいようですねー」

手に持つ丸められた羊皮紙。蠟で封をされたそれこそが・・・。

「C文書・・・」

五和が呆然とした調子で呟いた。

「それを持ってバチカンヘトンスズラですか？」

「行かせると思うのかよ。俺が、俺達が黙って行かせると思ってるのか？」

「だから何だと言うのです。このアビニオンを制圧している学園都市の部隊では、私を止める事はできないんですがねー。それとも、あなたの右手は彼ら全員よりも優れていると？　そう断言できる根拠があるんですか」

「ああ」

上条はそう言うと、右拳を握りしめた。

*

暫くして、無謀にも突っ込んだ五和が床に転がされていた。

「がっかりですね。幻想殺しイマジネーションキラーと言うからには多少は苦戦すると思つていたのですが、まさかここまで未完成とはねー。あれが本来の性能が回復していれば、少なくとも今の攻撃からそちらの魔術師を庇うぐらいの事はできたはずなのに」

「……………」

「おや。もしかして、知らない？」

「ッ」

「くくつ、そんな訳がありませんよねー？ 普通ならば知っていなければならぬ。だとすると……ん？ もしかして知っていたはずの事を覚えていないとか？」

「大したもんだな」

「まさか凶星ですか」

「……だが外れ。大外れだ馬鹿野郎」

「……なに？」

「右コイツ手に関する知識は全てこの世界から欠落した訳じゃないぜ？ 一応五割方エネの頭に入ってる。だから大抵の使い方は分かってるんだが……。自分が他人に明かさなかつた核心はまた自分で見つけるしかないんだけどな。お前の言う通りだよ」

「なるほど。そうかそうかそうですか！ 確かそういう報告を受けた覚えは無かつたんですが……。もしかして、隠していたとか？ 何のために？ そちらでのびている魔術師にはちゃんと話したんですか？ どうして記憶を失ったのか、そこから調査してみるのも面白いかもしれませぬねー？」

「無駄だけどな」

上条の中で静かな怒りが燃え上がる。目の前の敵は上条や貴音が一番嫌う人種だつ

た。

「お前にかける時間はもうあと数秒で良いだろ。幻想紋章」マスターエンブレム

上条がそう言つてテツラに右手を向けると、テツラを幻想紋が囲む。

「これは……」

「それは、俺が見つけた幻想喰いの技さ。さあ、踊れ」イマジナイスター

上条は余裕そうな表情を貼り付けたまま、体中。顔にまで刻まれた幻想紋を赤く光らせて、彼は笑う。

「幻想の煉獄オオオオオオオオ!!」マスターブラスト

上条が右手を空中に振り抜くと、そこから炎の柱が伸びテツラを呑み込む。テツラを囲む幻想紋が反応し、爆発を起こす。

(……あれを喰らっているんな意味で無事なヤツはいねエ。終わりさ)

上条は床に転がるC文書と思われる残骸に触れて完全に破壊されている事を確認する。

「はは。なるほど」

「お前、意識があるのか」

床に転がったままテツラは、忌々しげに上条を睨みつける。

「確かに幻想殺しは我々とは相性が悪い。何でもかんでも無効化してくれて、まったく

自分達の努力を否定されているような気分ですよ」

「……………」

「……………尋ねないのですか」

「何を」

「イマジンブレイカー幻想殺しについて」

「……………知ってるのか」

「くつくつ。そこで私に確認を取るといふ事は、どうやら本当に記憶を失っているらしいですねー」

「……………」

「ふふ。その幻想殺しが、何故あなたの『右手』に備わっているのかを考えてみる事です。そこには大きな答えが隠されている。あらゆる魔術を問答無用で打ち消してしまうというその効力にも、意味があるんですがねー……………」

「……………結論だけ言えよ」

「せつかちですねー。簡単な事ですよ。幻想殺しの正体は——」

上条はその言葉の続きを聞き取る事ができなかつた。

莫大な轟音と共に。

左方のテツラの体がその場から消え失せたからだ。

天井を突き破って襲いかかってきたオレンジ色の閃光が、テツラの真上に降り注いだ。直径三メートル程度の光の柱が床を貫いた途端、恐るべき爆風が教皇庁宮殿の室内に吹き荒れた。

爆風と同時に上条の左腕が肩から消え去った。即座に左腕は再生したが、その場には敵であつたテツラの姿はなかつた。

「幻想殺しの正体が何だよ………」

『イマジンプレイカー幻想殺し』そう呼ばれる能力の本質は、異質に変化した世界を元通りに戻す世界の基

準点。その副作用として、消した異物を自らの物として吸収するため、正式名称は

『イマジニーター幻想喰い』とする」

「………エネ」

「それが、私にご主人が教えてくれた幻想殺しの正体、です。それにしても、携帯電話が
おしやかですね」

「ん？」

『アースブレード地殻破断』……。巻き込まれたのか。俺のケータイも」

「仕事の方は無事ですすけどね」

「買い直しかー。ま、ディスプレイも砕け散ったからここで消えなくても使い物にはなりそうにないけどな」

その解は次の謎へと Question.

イマジンイーター
幻想喰い。

それは上条当麻という少年の体に宿っている能力の名前である。

その特性から、『世界の基準点』『均衡を執る者』『幻想を喰らう者』などといった異名がつけられている。

その能力の九割を「上条当麻」は理解していたが、上条当麻はその事は知らない。現在幻想喰いの能力は榎本貴音が「上条当麻」から聞いた五割、その程度しか知られていない。

彼が見つけた四割、九十五%までの四十五%は封印されているのである。（封印されてからこれまで過ぎた時間の中で、彼が再度見つけた能力は行使されてはいないため

不明）

イマジンブレイカー
幻想殺し。

『この世界』での、上条当麻の能力の呼称。

その能力は『例えそれが神様の奇跡であっても、力の善悪強弱問わず問答無用で打ち消す異能力』として知られている。

だが本質は幻想喰いと同じなため、『例えそれが神が起こした奇跡でも、問答無用で喰い殺し、自らのスキルとしてしまふ異能力』。

右手の甲に常時刻まれている幻想紋が広がると、それだけで通常『右手首から先』に限定されている効果範囲が広がっていることがわかる。

幻想紋。

その昔、『神殺し』をしたと言われる青年がその体に刻んでいたという能力持ちの証。幻想喰いを宿す者を示すものとして、使用者の体の一部に出現する。

ただし、使いこなせていない場合は出現する事はない。(全身にまで幻想紋が広がっているような場合、幻想喰いの内なる力をほぼ完璧に引き出せているといってもいい)

上条当麻は『「上条当麻」』とだけ書かれたノートを開いていた。

「・・・しっかし。俺が使ったっていう力の表現はあっても、それがどうやってくり出されたのか分からなきや、何の意味もないよな」

幾度となく、自らの深層に潜り込んだか分からない。己に問いかけ、答えを待った。だが、何度やっても返答はなかった。

「仕方ないか。『失った記憶』ってのがそう簡単に蘇ったりする訳ないよな・・・」

実際、夏休みが終わってから上条が使った「死ぬ気の炎」についても、上条は使った初めて、思い出したようなものだ。

「……使えば、それに関連した記憶も蘇ってくるんだろうけど……。流石にあんなわかりやすい手段舞みたいな発動条件じゃないだろうし……。――」

上条は記憶を失ってから毎日、自分の能力について分かった事をノートに記している。所謂自分探しのようなものである。（最初の文は上条が書いたものではなく、現時点で分かっている事を記したものに過ぎないのだが）

死ぬ気の炎

おおむね原作通りの能力。

上条は自分の意思で（死ぬ気弾、死ぬ気丸を使わず）ハイパーモード死ぬ気状態になる事ができる。

大空の炎・晴れの炎・雲の炎・夜の炎を行使できる。

匣兵器である『ナッツ』に状態変化のモードカニビオフォルマXで、オリジナルのボンゴレリングから、

沢田綱吉専用の大空のリング *ver X* に変化するようだ。

「そーいや、吸血鬼としての特性は大分前から分かってたんだよなー。これはエネが教えてくれたから知ってるだけなんだけど……。――」

上条の吸血鬼体質の元は知っての通り『アーカード』だ。最強のアンデッドと言われた彼の。

二番手に彼の眷属、ミナハーカーがいる。最強のアンデッドとその眷属を吸血鬼の核として取り入れている上条だが、吸血鬼の力は大概その無尽蔵な魔力と、恐ろしいま

での回復力だ。特に使う必要はない。上条当麻が『人間』の時は。

「……………」

「ご主人様。何か、分かりましたか？」

「いんや。いつも通り収穫なしだよ」

「次はどうします？」

「ん？」

「次に出てくるのは……………」

「後方のアックア。だな」

「です」

「……………今回は、聖人が相手だし『武術』で遊んでやるか」

「……………武道家にでもなるつもりですかあ？」

「……………いやいや、遊ぶだけさ。つとその前に、エネ」

「? 何ですか？」

「『あいつ等』に招集をかける。お前も行動に移せ。そろそろ起きる。闘争が」

「イエツサー」

『グループ』『スクール』『アイテム』『ブロック』『メン
バー』……『ドラゴン』編

愛しい貴方へ極上の鉛玉を Management.

世界には死角というものがある。

もちろんそれは車などに存在する、ただ見えない場所だけに留まらない。

例えば大手デパートの清掃室。

デパートの従業員は『外部の清掃業者が使っているんだろう』と思っているし、清掃業者は『あそこはデパートの従業員が使っているんだろう』と考えている。客が入るようなスペースでもないから、内部に監視カメラなども設置されず、誰の目にも止まらない。結果として、誰もが知っているのに誰も入った事のない、カギの置き場所も分からない部屋が出来上がるわけだ。

普段は施錠されつばなしの鉄のドア。

別の場所ではその奥に人材派遣マネジメントが経営する紹介屋が存在するが、この場所ではまた違ったものが存在している。そこは広々とした応接室に類似した空間が広がっており、

華美な内装が施されているわけではないが、やたらと存在感のある部屋だった。

「今回も自由に動いて良いというのは本当なんだろうな?」

テーブルに置かれたパソコンに向かって、そう男が声を発する。

上座に当たるソファに深く腰かけているのは、全体が黒一色の男だった。軽い変装でもしているのか、全体の顔立ちとは判別できないが高校生程の年齢に見える。衣装は長いコートを着て中にVネックの黒シャツを着ていた。

その男の通り名は「黒皇龍」^{ドラゴン}

「BLACK CAT」^{ブラックキャット} の名で学園都市の『闇』を暗躍する災厄の暗部組織のリーダーだ。

「それが本当なら」

『ああ。いつも通りだ。自由に動いてくれて構わない。ただし』

パソコンで誰かと通話をしているのだろう、彼の目の前のテーブルに置かれているパソコンのモニターには「SOUND ONLY」の文字が表示されており、くぐもつてはいるが男の声が聞こえている。相手の顔を見る事はできないが、声色や言葉遣いなどから黒^{BLACK CAT}猫とそれなりに交流のある相手のようだと推測できる。

「あまり目立つな。だろう? 分かっている。目撃者は出さない」

『なら、良いんだが』

「全員殺してしまえば目撃者なんていなくなる」

『それを止めろと言っているんだ。キミの場合は本当にやりかねそうで怖いんだ。だからもう一つの方もしつかりと守ってくれよ?』

「怪我人を極力出さな、だな。了解だ」

潜入任務のようなステルス行動を求められているのだが、^{BLACK}黒^{CAT}猫の顔色が変わる様子はない。かなりそう言った注文には慣れているといった風だ。しかし、ゲームや漫画の中のものと違い、四方八方が敵といった状況ではなく、今回の事件で遭遇するであろう人間の九割がその姿を見られても何の問題もなく、現場さえ押さえられなければ無視していい存在だ。

それが分かっているからこそ、^{BLACK}黒^{CAT}猫は簡単にその注文を請け負ったのだろう。もしくは本当に慣れていただけなのかもしれないが。

通話相手との会話が終わった^{BLACK}黒^{CAT}猫は、徐にパソコンのキーボードに手を伸ばし、つい先ほどまでしていた通話を切ると、自身の斜め横の席に座る黒髪の女に目を向ける。「どうするの?」

その一言には様々な意味が含まれているが、この場合は単純で、今後の予定を尋ねるものだ。『上』から伝えられた事件に対する姿勢・準備・計画・戦略。その全てを内包した女の問いかけに、^{BLACK}黒^{CAT}猫は「それを聞くか」といった風な面倒臭そうな顔を一瞬したが、すぐさまそんな事には慣れたもののように面倒臭そうな雰囲気すらも取り繕っ

て、

「首を突っ込むに決まっているだろう」

「だよね。分かった」

女は二つに結ばれた髪の毛先を揺らしながらゆったりと立ち上がった。眠そうな目をし、若そうなのにどこか大人びた印象を受けるその女は、黒を基調としたパーカーと首にかけられたガスマスクも印象的だった。

この女にも通り名は存在しており、その名は ハッククイーン “電脳乙女”
Darkness “闇夜” の名で学園都市の『闇』を暗躍する災厄の暗部組織ドラゴンの構成員だ。

「だとしても準備だけは怠るな」

「了解」

目線だけでの会話や、単語だけでの会話などを駆使して、彼等は今回の作戦行動に向けた準備を進めていく。指示語だけが飛び交うその空間は、メンバーが揃う前は日常的にあつたものだった。

BLACK CAT Darkness “黒猫と闇夜” は今のメンバーが集まり、暗部組織ドラゴンが結成される前からタッグを組んで行動している。その頃の彼らは二人の異名を合わせて Darkness BLACK CAT “闇夜の黒猫” 学園都市の宵闇を駆け、不吉を届ける黒猫として恐れられていた。

「普段通りの装備で行こう」

「えー」

「文句を言うな。その30m^ハm^ル対化物用^ネ「砲」は置いてこい」
Darkness

闇 夜はどこから持ってきたのかニメートル以上もの巨大な「砲」を、不満そうな顔をしながらもいそいそと仕舞いに行つた。黒 猫はその様子を溜め息交じりに見送つて、自らの武器に目を通す。暗闇では視認性が著しく落ちる黒色のDESSERTERTAEと、超金属製^{オリハルコン}の回転式装飾銃。それらを後ろのベルトや、太腿に巻いたホルスターにしまう。必要はないかもしれないがランポータタイプのサバイバルナイフも装備して立ち上がる。

「準備は良いか?」

「(^ q ^) ハイ」

真剣な顔をしてかなりふざけた返答をした闇 夜^{Darkness}に対し、黒 猫^{BLACK CAT}は問答無用で背中

から抜いたDESSERTERTAEを乱射した。闇 夜^{Darkness}は素つ頓狂な悲鳴を上げた

が、冷静に全弾回避していた。おかげで闇 夜^{Darkness}がいた後ろの空間には何発もの弾痕がついてしまつていた。

黒 猫^{BLACK CAT}は空になつた弾倉を引き抜き、新しいのと取り替えながら弾息をついた。文句を垂れながら空の弾倉に新しい銃弾を補充していく。

「チツ。弾の無駄遣いだ」

「分かつてるなら撃たないですよ・・・」

「くだらない事をしてるからだ」

Darkness

闇 夜は不服そうな顔をしてはいたが、自らに過失があったのは認めているのか、それ以上言い返すような事はしなかった。そんな彼女は背中にPGMヘカートIIを背負い、赤と白の十字架がそれぞれついた二丁拳銃をホルスターに収めた。

「お前、んなモン扱えたか？」

「まーね。誰かさんのおかげで力だけは普通じゃないから」

「力だけじゃないだろ？」

「酷っ。誰のせいどころなっただと思ってるのよ」

「少なくとも今の俺じゃあないな」

「今じゃなくてもアンタのせいどころなってるの！ 分かつてる!」

Darkness

闇 夜の言葉に黒猫は何の反応も返さず、その事に対し不機嫌そうな顔をする

Darkness

闇 夜を無視して、携帯電話を取り出した。

そこに登録されている番号へ掛けると、応答した相手に短く告げる。

「終いだ」

電話が何かを言う。

BLACKCAT

黒猫は続けてこう答えた。

「そうだ。今回のヤマで全部終いだ。だから根気よくいけ。下部組織に連絡しろ。いや、病院は良い。最初っから偽物で行こう。そんじゃあそっちは——死にたい？」

チツ、と黒BLACK CAT猫は舌打ちして。

「そうか。完全に姿消すには、そっちの方が都合も良いか。仕方がない。セイヴェルン、お前はそのまま計画通りに動け、全体的なバックアップは榎本が担当する。裏方周りは一任するから安心しろ。それじゃあな」

黒BLACK CAT猫は通話を切る。

上条当麻かみじょうどうま、榎本貴音えのもとたかね、フレンドダIIセイヴェルン、こがねやみ個鐘弥美。

彼等四人を総称して『ドラゴン』と呼ぶ。

社会の裏に存在し、表舞台とのバランスを保つために活動している小組織だ。

誰にも聞こえぬ確かな号砲 C o m p a s s .

十月九日。

学園都市の独立記念日でもある今日は、その内部に限り祝日となる。

第七学区の病院も、朝からのんびりとした雰囲気に含まれていた。カエル顔の医者は正面玄関から外に出て、柔らかな麻の陽射しを受けていた。医者の傍らには、十歳ぐらいの少女が立っている。

打ち止めラストオーダーと呼ばれる少女だ。

彼女は九月三十日に木原数多率いる『ハウンドドッグ猟犬部隊』に連れ去られ、『テストタメント学習装置』という機材を使って脳内に特殊なデータを入力されていた。今まではそのデータの除去を行っていたのだが、その作業が終わったので退院する事になったのだ。

「せつかくの退院だというのに、誰も迎えに来ないとはね？」

医者は呆れたように言ったが、打ち止めは対して気にしていないようで、

「ミサカは一人でもタクシーに乗れるもん、ってミサカはミサカは胸を張って宣言してみろ」

「ま、頭の中のウイルスも完璧に駆除できたし、もう心配はないんだけどね。タクシー代

は黄泉川さんの貸しにしておくから、ひとまずまっすぐ彼女のマンションへ向かうんだよ。」

その時、ちょうど病院前のロータリーにタクシーがやってきた。

カエル顔の医者が手を上げてタクシーを止め、荷物を抱えている打ち止めを後部座席へ乗せる。

それを見守りながら、運転手は言った。

「お客さん、どちらまで？」

「第六学区の遊園地！　ってミサカはミサ——」

「第七学区のマンション『ファミリーサイド』の二号棟。忘れずにね？」

打ち止めが言いかけた寝言を封じ、結局カエル顔の医者が面倒を見る羽目になった。

運転手は苦笑しながら、

「了解しました」

「詳しい住所を教える必要があるかい？」

「いいえ。この街は学生寮ばかりでマンションは少ないですから。名前が分かればカーナビで検索もできますし」

カエル顔の医者が車内から首を引つ込めると、後部ドアが自動で閉まった。窓に両手をつけて外を眺めている打ち止めを乗せて、タクシーは丁寧な挙動で病院の敷地から出

ていく。

タクシーが消えると、彼は仕事場である病院へ戻った。清潔な通路を歩いていき、簡単なソファとテーブルだけが置かれた談話スペースに入ると、壁際にあつた自動販売機でコーヒーを買う。

自販機は紙コップ使う方式のものだ。四角い金属製ボックスの中に『コーヒー』という液体が入っているのではなく、あらかじめ焙煎された豆をすり潰す所から自動で行われていく。そのため多少時間はかかるが、味と気分転換の効率はそこそ良い。

ふう、と医者息を吐いて、

(さて、と。次は妹^{シスターズ}達の方の調整を終わらせて、一刻も早くここから出してあげないと――)

そう考えたカエル顔の医者の思考が、唐突に途切れた。

カツリ、と。

談話スペースに向かう病室側の廊下からブーツの音が響いたからだ。

もちろんそれだけでは誰も手を止めたりなどしない。医者にとってその靴音はとある少年と深い関わりを持つ少女のものだからだ。

その感覚が正しいことを確認したカエル顔の医者は、少女に目を向けて、

「調整はもう終わったのかい？」

「ええ。ルナテイクはもう帰って良いと」

その少女は、真つ黒な服装に金色の髪がよく目立つ中学生ぐらいの少女だった。

彼女の後ろから白衣を着た少女と瓜二つの女性が小走りで駆けてくる。

「ヤミちゃん待ってちょうだい。まだお話は終わってないの！」

「調整は終わったはずです。今は貴女の話聞いてる場合ではありません」

女性の懇願を無視して少女はどこかへ行こうとする。その行き先を察した女性は、少女の前に両手を広げて立ち塞がる。

「お仕事はやめてって言ってるじゃない」

「ルナテイク、何度も言っていますが、家族面をするのをやめてくださいと」

そんな様子をコーヒートの待ち時間に眺めていたカエル顔の医者は、呆れた調子で彼女達に声をかける。

「またやっているのかい？ ルナテイク君」

「カエル先生、彼女の足止めをお願いします」

「ヤミちゃんを止めてください先生」

カエル顔の医者は、少女を通し女性に話しかける。

「いつも言っているだろう。患者に必要な物を用意するのが僕の仕事だ」

「・・・はぁー」

「そんなに嫌かい？ 彼女が仕事をするのが」

「一度見捨ててしまった償いがしたいだけなのかもしれません・・・けど」

「君が面倒を見ていた頃とは違って、彼女は自分の意思で今を生きている。子ども
の成長は意外と早いものなんだよ」

「そうですね・・・」

カエル顔の医者は振り返る。

すでに、そこには誰もいなかった。彼女の固有スキルを使って、すぐ近くの階段へ飛び込んだのか、影すらも見当たらない。

医者はしばらく、誰もいない空間を眺めていた。

ピー、という電子音が聞こえる。カエル顔の医者は、自販機の取り出し口からコーヒーを取り出すと、苦い液体を一口含んだ。

○

上条当麻は第七学区の道路を車でもって疾走していた。

『フェアレディS30Z』悪魔のZと呼ばれたその車体は、今現在学園都市の超科学技術オーバーテクノロジーを詰め込んだ怪物車モンスターカーに変貌していた。

そのZに乗っている上条は隣に乗った貴音に目を向けて、

「これから何をするかは分かっているか？」

「徹底的な邪魔、でしょ？ 分かっているわよ」

「なら、いいんだけどよ」

上条はそう言いながら目的地に向かって車を走らせる。

彼等の目的地は、第七学区コンサートホール前広場。とあるルートより入手した情報にあつた、統括理事会の一人親船最中の暗殺を阻止するための行動だ。

誰に頼まれたわけでもないが、統括理事会の人間は半分親戚のようなもの。上条達にとつても死んでもらつては困るのだろう。

「で？ もしかして講演の方を中止させればいいのか？ 私もご主人リイダーも講演を中止させる

事ができるような交渉術なんて持ってないわよ？」

「知ってるさ。それに中止させる事はできない。なんと言つても、もう講演は始まつてるんだよ。残念な事に、俺達ができるのは奴さんの邪魔くらいさ」

「はあ!? 本気!? っていうか間に合うの?」

「車で行つても間に合わねーかもな。でもよ、銃弾なら分からねーぜ?」

上条はそういうと、車を横滑りさせ車体を停止させる。ちやうど助手席がコンサートホールの方を向くように。

貴音はその行為の最中に意思を読み取り、狙撃銃を取り出した。

「ほんと、無茶な注文ね。ここから狙撃手じゃなく、そいつが撃つた銃弾を狙えなんて! 私じゃなきゃ断つてるわよ」

貴音は言いながらへカートと自分の両足を助手席の窓から投げ出し、車内で体勢を整えるとそのまま射撃準備に入った。

「距離は?」

「5249フィート」

「風は?」

「狙撃に影響なし」

「ありがと」

簡単に現在の状況を確認した貴音は、現在の環境が自身の狙撃に全く支障をきたさないことを認識した。

時間にしてほんの数秒。極度の集中下では数分にも感じられるそんな時間が経過し

たその時、彼女は何の気なしに引き金を引いた。

撃ち出された銃弾は、風を切りながら飛んでいく。

そして、親船を狙って相手の狙撃手が撃った銃弾に空中で直撃。その衝撃で二つの銃弾はそれぞれ別の方向へ弾かれた。

「ふう」

「おつかれさん。何か見えるか？」

「……ご主人。^{リーダー} どうして向こうが使う狙撃銃が磁力狙撃砲だと教えなかったのよ!？」

「言わなくても当てられるだろ？」

「あせったけどね。タイミングは間違っていないはずなのに向こうの銃声がしないものだから」

「大丈夫。お前なら、何があっても当てられる」

上条は何の根拠もなしにそういった。上条と貴音がお互いに見せる無条件の信頼。それがこの場面でも顔を見せていた。

「ヘカートの音に気づいた警備員が^{アンチスキル} こつちを見つける前に退散するわよ!」

「分かっているからそんなに急かすな」

彼らに乗せたZは華麗な方向転換を見せて、そのまま現場を去っていく。

「^{リーダー}ご主人。あのスナイパーは何者なの?」

「あ？ どうしたよ」

「少し気になったのよ」

上条はオーディオの位置についているパネルを操作し、助手席側のフロントガラスに情報を表示させる。

「スナイパーの名前は砂皿緻密。偽名かどうかは確認できなかった。経歴や実力についても、聞いてはみたが信用はできない。ただ、狙撃手紹介料が七十万だ。結構な『目玉商品』で、あつた事は確かだぜ」

「MSR—001まで持ち出してたものね……。狙撃には最適な銃よ」

「撃ち出された後の銃弾をあゝの距離から狙撃^{ヘカイト}で撃ち落とされるとは、奴さんも思つてなかつただろうな」

上条のその言葉に貴音の動きが止まる。どうやら彼といた影響で感覚が狂つてしまつていようだった。自分がやった事が異常だと認識できていないようだった。

「反動を極限までゼロにし、尚且つ反動すらも計算に入れる。故に『ブレ』を全く起こさない狙撃ができるから、超精密で繊細な照準装置を取り付ける事もできるが、お前の目には全くカンケーないもんな！」

ケラケラと上条は笑う。だが貴音の方は内心穏やかではないようだった。だが、考えないようにするために、話題を変える事にしたようだ。

「そう言えば。親船最中はなぜ狙われたんですか?」

その問いかけに上条は無言でパネルを操作し、別の情報を表示させた。

「それが親船最中が標的になった大きな理由だ。学園都市の学生共に選挙権を与えてやろうって訴えてるんだと。この街の三分の二は未成年。オトナが上から決める政策には無言で従わなくちゃあいけない。明日から消費税を30%に増税しますと言われても、口を閉ざしていなきやあいけないわけだ。だからソイツを与えてやろうとしているらしい。な? 分かりやすい『目の上のたんこぶ』だろうか?」

上条の口調は喋る内容に比べて軽い。

「仮にだ。この訴えが通り、子供達の選挙権が認められたら、『戦争』だって止められるかもしれないな」

「ご主人^{リィダー}にしては馬鹿なこと言うわね。そんな簡単に済む事じゃないわよ。平和的だけど現実的じゃない。暴力って言葉をまるで理解していない。いつもの「上から目線性悪説」はどこへ消えたのよ?」

「人権や男女の壁も、最初はそうだったろ。そう言った問題が解決したのは、別に特別の有力者が一人で全部片付けたって訳じゃない。多くの人間を導いたって功績は大きい、何より『自分には力がない』と勝手に思い込んでる馬鹿の意識が変わって、大勢が動いたからこそ、歴史はきちんと変わったのさ」

上条の言葉に、貴音は先ほどスコープ越しに見た広場の様子を思い出す。

休日にも拘わらず、多くの子供達が集まっていたように思う。

「それだ。人間、子供も大人も関係なく上つ面だけでも良く見せようとする傾向がある。訴えが通ったところで、表面にペンキ塗っただけの『ボク良い子ちゃん』が大量に出てくるだけさ。悪い方には傾かんよ」

「ちよつと安心したわ」

胸をなで下ろすようにそう言った貴音に、上条は怪訝な顔をする。

「は？ 何に」

「アンタがしつかり当麻のまま。上から目線で人の悪性を語ってるのを見ると、そう思っちゃってね」

「んだよお前、可愛いな」

「ふえっ!？」

上条としては素直な感想だったのだろうが、車内という密室空間で唐突に言われたその一言は貴音にとつてかなりの不意打ちかつ大ダメージだったのだろう。耳まで真っ赤にして俯いてしまった。

だが、一番聞きたい事を聞けていなかったのを思い出した貴音は、口を開く。

「さつき、スナイパーは雇われだ。みたいなこと言ってたよね」

「・・・ん？ ああ。それがどうかしたか？」

「誰が雇ってたの？ あのスナイパー」

「——『スクール』」

「何？」

「俺達の『ドラゴン』と同じ・・・・学園都市の裏に潜んでる組織だよ」

「・・・『スクール』ねえ」

「どうした？」

「・・・あのさ。えつと、なんでこの時期に『スクール』なんて暗部組織が動き出したのかな？ って思ったら気になっちゃって」

あー、と上条は一度だけ息を吐くと、

「いずれにしろ、そう待たないうちに他の連中も動き出すだろうよ。実際『グループ』も『ブロック』も動いてる」

彼等は学園都市統括理事長、アレイスターの直轄部隊。

善悪関係なく、あの『人間』の手足として動く。それだけを期待された小組織だ。

「元々『ドラゴン』以外の暗部組織は複雑な行動理由を持つてる。ウチみたいに自由気ままなモノじゃあないだろうさ。だからこそ様々な力によつて上から押さえつけられ、制御されていた。ところがどうしたこの間の『〇九三〇』事件を契機に発生した暴動のために、駆動鎧の大半がアビニヨンの後始末にいつちまった。あの部隊は『電話』の人間にとつて使い勝手の良い手足。そいつが自由に使えなくなつたんだから、今が好機！
つて訳さ」

「なるほど。ようするに今の暗部組織は『ヨーロッパの火薬庫』の風刺画で押さえつけてる人間がいなくなつちやつた状態なワケね」

そうなると、後は自由に四方八方へ飛び散つて爆発するのみである。

「二度暴れ出したヤツらを押さえつけて、抑制する事は今からじゃあ不可能に近い。だったら被害を最小限に留めよう、つていう方向に『学園都市』は切り替えた。だから俺達に『手段は任せる。だが結果は出せ』つていう無茶苦茶な指令が下つたわけだ」

上条はそう言いながらも楽しそうに笑つていた。

ゆつくりと動き出した者達 Hikoboshi II.

下部組織である妹達シスターズの識別番号000001「美咲」が回してきたキャンピングカーの中に、上条当麻かみじょうとうま、榎本貴音えのもとたかね、个鐘弥美こがねやみの三人は乗り込んでいた。

時間は昼時。

ボルトで床に固定された小さなテーブルには、上条当麻作の小さく摘まめる昼食が並んでいた。上条当麻はおにぎりと沢庵を、榎本貴音は定番の種類を揃えたサンドイッチを、个鐘弥美は粒・漉のたい焼きを、それぞれ食べている。昼飯一つにしても手を抜かない料理人の意地が垣間見える瞬間だった。

「ねえ、リーダ主人。諸々の報告や説明に入る前に質問してもいい？」

「ん？」

「さつき乙で聞いたけど、正直言つて親船最中は私的に殺すだけの価値はないと思うのよ。確かに『目の上のたんこぶ』だったんだらうけど、表裏がないし放っておいても問題はなかったんじゃない？」

「ですが、『スクール』は目を付けられるリスクを負つてでも、予定を無理に遭わせて狙撃を執行しました。彼等のスナイパー、一度『別の暗部組織アイテム』によって潰されているんです。

そこをわざわざ補填してまで」

「じゃあ逆に考えればいい。価値がないからこそ、親船最中が選ばれたって事さ」

「価値がないからこそ？ 意味が分からないんだけど」

『スクール』にとつては誰でも良かったんだよ。とにかく騒ぎを起させれば構わないから、できるだけ『死んでも影響の少なそうなVIP』……『つまり最も警備の手薄なVIP』が選ばれたんだ」

上条は愉しそうな声で、

「他のVIP。まあ統括理事会だけで考えても、ここ数日内に野外で公演するような人間は他にいなかった。潮岸は四六時中駆動鎧を着込んでる。そんな相手に狙撃が成功するわけがない。だから『もつと狙いやすい相手』を選択したと考えた方がいい」

「それが正しいと仮定するなら、『スクール』は何を求めていたのでしょうか？」

「じゃあ私は、ここまでの話で仮定して、『VIP用安全保障体制』を提唱したい」

貴音はどれだけ張つても主張しない胸を張つて言った。

「十二人の統括理事会を始めとして、学園都市にはいくつかVIP認定された人員・組織が存在する。こいつらは普通とは違う警備で守られてるし、命の危機に見舞われれば様々な部署から招集がかけられる。救急車の移動用に道路が封鎖されたり、手術のため各業界の大物が病院に集められたりってね」

つまり、と貴音は言葉を切つて、

「VIPが暗殺されかけたら、どうなると思う？」

「治療先の施設を守るために、よその人員が呼ばれますし、特殊な研究者や機材等も、必要なものは片っ端からかき集められます。なるほど、その混乱に乗じて『スクール』は何かをしようというわけですか」

面白くない手です、と弥美は付け足す。

「保険の可能性の方が高いからな。『スクール』の連中なら、本気になれば力業で大抵の施設は突破できるだろう。だがその保険に対し『スクール』の連中はかなり神経質な調整を行った」

「となると結局親船は『保険の一つ』で、『スクール』はこれから本命の『どこか』または『誰か』襲う予定ね」

「ああ」

上条はあつさり頷いた。

「親船暗殺は実行時点で保険としては機能したも同然。仮に死んでたとしても、その場合も心肺蘇生、検視や解剖で多くの人員が割かれるからな。曲がりなりにも統括理事会、十二人しかいない最高のVIP。学園都市の得体の知れない技術を総動員して対処する」

うわあ、と貴音は嫌そうな顔をした。

上条は構わず、楽しそうな表情で告げる。

「エネ、親船最中暗殺未遂によって、警備が手薄になった施設をチェックしろ。その際に気を付けるべきは、暗殺の『成功』と『失敗』の二パターンとも洗い出す事。両方の場合で『警備が手薄になる施設』が存在するはずだ。十中八九『スクール』は次にそこを狙う」

「了解」

貴音はそう頷くと『目を覚まし』て、電子の世界へ潜っていった。その間貴音の体の方からは意識が無くなり、力が抜けたような状態で椅子から落ちそうになった所を、金髪を束ねて巨大な手にした弥美が、その体をベッドに寝かせた。

上条はその様子を見ながら、テーブルの上のお握りに再度手を伸ばす。

「いつ見てもスゲーよな。その体」

「最終調整前に放り出された未完成品ですけどね」

「完成品がもう見れないってのが残念だよな」

と、そこで唐突に運転席と後部の居住区を隔てる壁に設置されたスクリーンに電腦少女、エネが表示された。

『そう言えばご主人。結局『スクール』の狙いは分かっているんですか?』

「警備を手薄にして施設を狙うのでは？」

「襲おうとする施設には何があるか。その役割は何か。それが聞きたいんだろ？
まあ、時間つぶし程度に教えてやるよ」

上条は指についたご飯粒をペロリと舐め、沢庵を口に放り込んでから話し始めた。

「まず、暗部の連中が一番に考えるのは『何故、学園都市に暗部ごんな所があつて尚且つ自分が所属しているのか』だろう」

「私はリーダーに救われましたので」

『もともとご主人にはついていきますし』

「うるさいうるさい」

上条は手を叩いて場を仕切り直すと、

「そしてその原因の一端と怒りの矛先は、学園都市の権力的頂上である統括理事長。アレイスター・クロウリーにあるわけだ。そしてそんな事を考えるヤツらの最終目標はその統括理事長の『裏』、弱みなんかを握ってしまうことだ」

『ですがそれは、実質的に不可能に近いじゃないですか。だってアイツ、外に情報を漏らすことなんてほとんどないんですし』

「それでもさ貴音。やってみようって意志だけは無駄に強いのが人間だ。それに、何事にも『裏』ってのは存在するんだよ」

どこかの飲食店のメニューや大学の入学方法、知つての通り学園都市にも『裏』はある。だったら、

「こう考えないか？ 統括理事長の秘密は正規の方法じゃ絶対手に入らない。なら非合法な手段で手に入れればいい。例えばどんな手を使つても、さ」

『それは………まさか………』

「そう、『滞空回線』学園都市におけるアレイスターの直通情報網を形成する中核だ。その体内に収められている内容は、一般の『書庫』に収められているモノとはレベルが違う。そしてそれを閲覧するための小型デバイスがあるらしい」

『え。そんな物、私達の備品には全部載せてあるじゃないですか』

使つてないだけで、とか余計な事を貴音は付け足した。

だが、実質その通りだ。先ほども乗っていたZにも、オルソラを乗せたバイク・更には携帯端末まで。基本的に彼等に支給されている装備や、所有物には『最高機密』への接続権が搭載されている。

例えば、滞空回線の接続権を持つていたとしても、上条は中の情報を真つ先に疑つてかかるし、時に『滞空回線』のネットワークに“エネ”を差し向けることもあるぐらいだ。ゆえに使用頻度は低い。

ピーツ！ という警告の電子音がキャンピングカーに響き渡つた。

車内スピーカーから、オペレーターも兼ねた運転手の慌てているようには聞こえない声か飛んでくる。

『緊急です。とミサカは慌ててデータを送りながら報告します』

エネのバックに学園都市の地図が表示される。

「第五学区・ウィルス保管センター？」

『学園都市のコンピュータウイルスを解析してワクチンソフトを作る施設ですよ。私もよくここ製のワクチンと喧嘩をしますから。．．．．．どうやらそこがクラッキングを受けているようですね』

連続的に表示されている文字列を目で追いながら、エネが言う。

「何する気だ？」

「確かそこには意図的に作り上げられた実験用ウイルスもたくさんありましたよね？」

「おいおい．．．。ソイツが外部に漏れ出したら大パニックだぞ？」

『その「外」はどこまでの「外」ですか？』

「さてね。もし『外』なら真つ先に狙うべき場所があるはずだ」

『外部ターミナル緊急遮断を開始しました。と、ミサカは現状を報告します。第三学区・北部ターミナル遮断、第十二学区・東部ターミナル遮断、第二学区・南部ターミナル遮断、おっと。第十三学区西部ターミナル遮断確認できません。と、ミサカはぶつちやけ

危機的状況だと言うことを伝えます』

全く緊張感のない声に、上条は苦笑しながらも仲間に表示を出す。

「エネ。西部ターミナルの制御権を奪取。速やかに学園都市に返してこい」

『了解です!』

「弥美は俺と来い当分の間は行動を共にしてもらうぞ」

「分かりました」

上条達を乗せるキャンピングカーが第七学区を突き進む。

「……………第十八学区に入るまでずっと五分つて所か」

「素粒子工学研究所に一体何があるんです?」

「正式名称を超微粒子物体干渉用吸着式マニピュレータ。平たく言って原子よりも小さな素粒子を掴む機械の指だ。通称を『ピンセット』」

学園都市に五千万個ほど散らばる目に見えない機械の情報を閲覧するために作られた学園都市の最暗部への『鍵』だ。

またもや警告の電子音が鳴り響いた。

上条が応じるように大声で言う。

「今度は何だ!?!」

『第二十三学区でもクラッキングを確認。航空宇宙工学研究所附属の衛星管制センター

が電子攻撃を受けています。と、ミサカは再三の事件を報告します」
「衛星ですか？」と弥美は眉をひそめる。

学園都市が打ち上げたものといえば、気象衛星という建前のスパイ衛星だ。これを使って学園都市や周辺地域を逐一監視しているのだが、

「ハッ。ますます面白くなってきたな。衛星ひこぼしⅡ号には地上攻撃用大口徑レーザーが搭載されてたはずだ」

「マズいですね。ウィルス保管センターへのクラッキングも継続中なんでしょう?」

「対策チームは右往左往してるだろうな。いつもの実力を出させないための囲かもしれないが、『スクール』の作戦に便乗した他の組織の作業かもしれん」

にしても何のために……? と、上条は首を傾げた。

地上攻撃用のレーザーはあるが、そこでどこを狙うのかは全く想像がつかない。候補がたくさんあるため、どのような行動に出るのか予想はつかない。

『奴さんの狙いは第十三学区です』

第十三学区? と弥美は眉をひそめた。

姿を見せないエネは声だけで彼等と会話をしていく。

「そんなところを狙ったって、外部接続ターミナル以外にめばしい施設なんかありませんよ? あるのは幼稚園やら小学校ばかりで」

『ですから、それが狙いなんですよ』

エネは説明するのも嫌だという感じで忌々しそうに低い声で答える。

『第十三学区は学園都市でも最も幼稚園や小学校が集中している学区です。そこを攻撃すれば最年少の住人の大半が虐殺される。するとどうなるか。．．．．．そんなところへ自分の子供を預けたいと思う親がいると思いますか』

「．．．．．」

『学園都市はあくまでも学生の街です。どれだけの住人がいてもいつかは卒業していきます。新入生がいなくなってしまうえば、都市の人口は減るばかりで、最後には機能もできなくなるでしょう』

「．．．．．十年単位で、この街をゆっくりと殺していくつもりか」

実際には学園都市は様々な科学技術を掌握しているため、財政面ではそれほど簡単には倒せないだろう。しかし、それにしても『子供のいなくなった学園都市』はその存在意義を奪われるにも等しいことに変わりはない。

「．．．．．だからって、子ども達に手を掛けていいわけないだろうが!」

「リーダー．．．」

『管制センターのクラッキングから逆探知したところ、この行動を起こしているのは「ブロック」という組織であることが確認されました』

「ほお……。学園都市を潰すつっ一手前勝手な理由で子供達を虐殺しようとしてんのは
そいつ等か」

上条は凄まじく憎悪に満ちた笑みでもって立ち上がった。

「美咲。送迎ご苦労さん。後は俺達でやるから問題はねえ」

『了解です。と、ミサカは務めを果たしたことを誇ります』

上条はキャンピングカーの側面ドアを足の裏で蹴り付け、強引に開ける。

そして逆上がりのようにキャンピングカーの屋根に登ると、そこに置いてあったアメ
リカンタイプのバイクに乗り込んだ。

「ライダー！」

「飛び乗れ！」

上条はバイクを操り車の屋根から飛び降りる。

側面ドアに平行するようにバイクを走らせれば、その後部座席に弥美が飛び乗る。

「エネ、ナビゲート任せられるか？」

『人使いが荒いご主人様ですこと』

「頼んだぞ」

超能力を封じられた土地で Reformatory.

弥美を後ろに乗せた上条の操るバイクは第十一学区を直指して疾走する。

上条は軍用ゴーグルを掛け、そこに表示される3Dマップを頼りにバイクを駆つていく。

『何をしに行くんですか』

上条がヘルメットに着けた無線機から、弥美のそんな声が聞こえてきた。彼の行動の理由をよく分かつていないのだろう。

「人間つてのは保険が大好きだ。何か失敗したときのため、突然の事故に備えてな。そんな人間だ。十三学区に向けた衛星砲も保険の一つ。もしかしたら衛星の機能停止を狙っただけかもしれない。と、すると『ブロック』のメンバー自体がいる場所が……一番怪しいに決まってるだろ」

『何かの事件を起こすには、ですか』

「ああ。学園都市は衛星が四六時中見張ってる。だから警備ロボも案外ルーズなものさ。その衛星が機能を失いそうになってる。だったらやることは一つだ」

『壁超え……』

「そう。それも恐らく『外』から中へのな」

第十一学区。

海に面していない学園都市は物資のやり取りは陸路と空路の二種類でしか行えない。そして外壁に面した第十一学区は、陸路最大の玄関口として機能していた。

海原光貴を含む『ブロック』のメンバーはそこにいた。

辺りには四角い建物が並んでいた。普通のビルとは違って壁のない建物で、立体駐車場にも似ている。学園都市製の電気自動車が出荷を待つて待機しているのだ。

一日に七〇〇〇トン以上の物資をやり取りする第十一学区の倉庫街は広大だ。

出入りを直接管理するゲート周辺の管理は厳重だが、それに反して倉庫街の方は、隅から隅まで監視を付ける事はできない。この学区は、一般的な港の埠頭とも似通っているだろう。昔懐かしいマフィア映画よろしく、夜な夜な怪しげな取り引きの場に使われることも珍しくない。

そして、

(あれが『外壁』……)

海原は視線をそちらへ向ける。

軽く五〇〇メートル以上離れているにも拘わらず、その威容をまざまざと見せつける巨大な壁。万里の長城のように壁の上には通路があり、双眼鏡で確認すれば今もドラム缶型の警備ロボットが行き来しているのが分かる。

魔術師の中には外壁を乗り越える者もいる。しかしそれは、外壁の警備が『科学的』なセンサーに守られているからであり、『魔術的』な策に弱いという側面があるからだ(……と海原は信じたい。そこまでアレイスターに計算されて遊ばれているとは思いたくない)。

しかし現在は衛星による監視が消えたため、警備強度は極端に下がっている。魔術的な手を使わない普通の人間にもチャンスは訪れる。

あの向こうに、『ブロック』のリーダーである佐久が呼び寄せた五〇〇〇人の傭兵が待機しているはずだ。

近くの建物や社内に散らばって身を潜め、学園都市製の衛星のセキュリティが切れるのをじっと待っていたのだろう。

それが分かっても、海原には情報を確実に伝達する機会に恵まれなかった。

『グループ』の人間はこれを知らない。学園都市の上層部も掴んでいるかどうか。『衛星による攻撃の阻止』というとりあえずの危機を自分達の手で解決した彼等は、その事で安堵してしまっている可能性が高い。

(その傭兵達を招いて、何かを実行するのが『ブロック』の目的……。ですが、それはなんでしょう。連中は一体どこを襲おうとしているのか……。)

「山手。心配でも、しているの?」

ふと、近くにいた手塩愛未がそんな事を言った。

山手というのは、海原が変装している男の名前だ。

「別に……」

海原は短く答えた。本来、変装とは元となる人物を最低一週間は追跡調査をしてから行う。モデルの人物像を掴めない内は、迂闊な発言は控えた方が良い。

手塩の方も、海原の態度を特に気にしなかった。

大きな計画の最中で、緊張していると判断したのだろう。

「衛星を潰したのは良いが、まあだ警備ロボットの方は動いてやがるな」

佐久辰彦はそう言った。

手塩は熊のような大男の方へ顔を向ける。

「問題が、あるのか」

「いいや。あの手のロボットには火器は搭載されちゃあいないし、障害にはならないだろう。タイミングさえ誤らなければ外壁は越えられる」

「何で武装していねえんだ？」

海原はとりあえず会話に混じった。

核は海原の目をチラツツと見て、

「理由は色々だよ。あそこにあるロボットは、常に外周部を守ってるからな。万に一つでも誤作動して、塀の『外』を歩いている人間に弾が当たっちゃったら問題だ。後は装弾数の都合もある。あの機種のロボットはマガジンの交換なんてできやしねえから、弾倉が空になったらそれまでだし」

「では、仮に発見されたとしても、警報を鳴らして、終わりなの」

手塩愛未は拍子抜けしたように言った。

「それなら、手間をかけなくても、強行突破で、良かったんじゃないの？」

「いいや。外壁警備のロボットは特殊回線を持つててな。警報が入ると第二十三学区の完成へ直通で連絡を送って、そっちの無人攻撃ヘリを呼び寄せる仕組みになってる。今の主力は『六枚羽』っていう、迎撃兵器ショーにも登場した最新型だ。見つかったら苦労するぞ」

佐久は太い腕に巻かれた腕時計に目をやった。

「あと一〇分で、外壁場の警備ロボットのローテーションが切り替わる」
「……………」

「ヤツらの動力は電気だからな。二十四時間稼働させるわけにはいかない。どこかで充電しなくちゃならないって訳だ。だから、駆動組と充電組に自然と分かれちまう」

この交代作業のために、一日の内ロボットを使った外壁警備は、二〇分から三〇分ぐらゐの隙が生まれるらしい。

普段ならそれでも問題はないのだろう。

学園都市の人工衛星は、絶えず学園都市とその周辺を監視しているのだから。

しかし今は違う。

その二十分間は、正真正銘の『空白』となってしまう。

「可能な限り、車を用意しておけ。ナンバープレートを付け替えるのも忘れるな」

佐久辰彦は、『ブロック』の下部組織の連中へ指示を出した。

「その辺の立体駐車場に停めてある、出荷予定の電気自動車だ。そいつを使って五〇〇〇人ほど運搬しなくちゃいけないからな」

空白の二〇分が始まった。第十一学区の倉庫街、立体駐車場の四角い建物に取り囲まれたまま、海原光貴は懐にある黒曜石のナイフに意識を集中する。

一方通行達『グループ』に連絡するタイミングはない。

仮に今から連絡できたとしても、すぐさまここに駆けつけてくる保証もない。

そう、元からここに向かっていた人間以外は。

初めに気付いたのは、下部組織の人間だった。異常な速度でこちらへ向かってくる単車が向かってきているのが見えたのだ。

その報告を受けて、『ブロック』のメンバーを含めた面々は傭兵の移動を継続しながら警戒態勢に入る。

そのバイクの後部座席に座っていた人影が、バイクから飛び降りその勢いのままバイクより先に彼等の元へ着地。下部組織の人間達を一斉に昏倒させた。

その方法はなんとも奇抜で、少女の金髪がハンマーのような形状に変化し、それで殴られたのだった。

一方でバイクはそのまま横倒しに投げ出され、乗っていた運転手はそんなバイクに目もくれず少女の元へと悠然と歩いてくる。

(彼等は………)

海原はその正体を思案するが、答えにいたるよりも先に他の人間から答えが出された。

「黒衣に金髪……それにそのワケ分んねえ能力、『金色の闇』か！」

(金色の……闇っ?!)

海原はその名に素が出てしまうところだった。

『金色の闇』は暗部でも深いところにいるという一人の抹殺者イレイザーの異名だ。土御門達にはなっているかもしれない。それだけ有名な異名なのだ。

「よお、お前等」

少女に追い付いた男の方が声を出す。それだけで作業をしていた傭兵も、『ブロック』のメンバーも動きを止めてしまうほどの威圧感だった。もし学園都市の強さの頂点がいたら、彼が一番だろう。

「不吉を、届けに来たぜ」

そう言われ、男の太腿につけられたホルスターから抜かれた拳銃を見た瞬間。彼等は目の前にいる男が何者かを理解した。

リボルバーの装飾銃と男の鎖骨の少し下に刻まれたX I I I Iの刺青。それは学園都

市で最も統括理事長と近いとされ、そしてアレイスターと対等に立てるチカラを持つている者の証だった。

「BLACK CAT
黒猫……！」

「一黒皇龍……！ 学園都市の最暗部が何故ここに！」

「心当たりぐらいはあるんじゃないか？」

黒猫。上条当麻はそう言つてリボルバーを備兵含めた『ブロック』の面々に向けた。彼に注目が向いている隙に、海原はその場を退散していった。

「どこで分かつたんだ？」

「何がだよ」

「俺達がここで人員を招き入れるって事がだよ」

何だそんな事か、と上条は呆れたような表情で、

「問題作成者の前でつらつら解説を述べるのもどうかと思うんだが、まあ雑談ついでだ答えてやる。最初に『誰か』を疑つたのは第二十三学区の管制センターのクラッキング、その開始時点だ。『外』を狙つたウィルス保管センターと『中』を狙つた管制センター。攻撃対象がバラバラすぎて一瞬別々の組織がやったのかと思つたがな。同じ組織がそれを行った場合、ある利益が得られるって分かつたんだ」

「ほう？ その利益ってのは？」

「監視衛星の機能停止。ウィルスの漏洩を停めようとする最中、危険性の高い攻撃衛星が乗っ取られる前にクラッキングの進行を止めようとする場合、どうしても正規の手順じゃ追いつかないことが多い。するとどうなるか、デメリットを無視して地上アンテナを破壊するっている目先の利益に飛びついちまう。そこで気付いてももう遅い。学園都市を四六時中見張ってる『天の眼』はその能力を發揮できなくなってしまふ」

「正解だ。良く分かつてるじゃあねえか。学生こどものように見えるが存外頭が回るんだな」

「そして、この利益を使ってさらなる成果が上げられるとしたら、『外』との物資または人材の運搬がとてつもなく楽になるって事。だったら、陸の玄関口なんて呼ばれてる第十一学区こが怪しいと、そう睨むに決まってるだろう」

「おうおう。そこまで分かつてここに來たって事は、どうなるかってのも分かつてるんだろうな！」

上条と弥美に、壁の乗り越えが終わった数百人の傭兵が持つ銃が音を立てて向けられた。

「黒皇龍に金色の闇つつつてもたかガキ二人。やっちゃまえ！」

二人に向けて大量の銃弾が放たれた。一秒間に二千発以上の銃弾が上条と弥美を貫かんと迫ってくる。が、

「防げ——」

「トランス
変身」

「セイレーン」

「シールド
盾」

上条は天女の羽衣のような攻防一体の武器、セイレーンで銃弾から身を守り、弥美は左手に巨大な盾を出現させ、その身を守った。

「なっ……!」

「お前等。俺等がなんて呼ばれてるか、知ってるんだよな。あんまりにもお情け過ぎねえか?」

上条は言いながらゆっくりと歩いていく。銃弾を防ぎながらゆっくりと。

「ば、化け物!」

「知ってるさ。だから『龍』なんて呼ばれてるんだろ?」

ここでの龍は恐らく『蛇』を表しているのだろう。絶対に叶わない力の象徴の『龍』と呼ばれ、神の使いとされる生き物『蛇』の役割を持つ。それが現在の上条当麻だ。

「行くぞ、姫っち」

「うん」

ある程度傭兵達を始末し終えた。上条達は、暫く前に見逃した『ブロック』の事などとうに忘れ、別の行動へと移ろうとしていた。

「現在行動可能な組織は三つ。『グループ』『スクール』『アイテム』だ」
「なるほど」

「とりあえず、セイヴェルンに連絡を取るぞ。今後のことをもう一度話し合う」
「了解」

『ドラゴン』のメンバーは一度正式な拠点の一つに陣取り、小さな会議のようなものを開いていた。

「はふうー。結局『ドラゴン』が一番落ち着くって訳よ」

「悪かったな。別組織の潜入なんかさせてよ」

「リーダーの言う通り爆弾^{ボム}使いとして『アイテム』にいたら麦野と絹旗には舐められるしで最悪だったのよ。でも、リーダーが私の能力を隠せて言うんだから従うまでよ」

「お前の物体移動^{オブジェクト}はある意味で空間移動系能力の中で最強クラスだからな？」

「そう？ 実感なんてないわ」

「俺の知る空間移動^{テレポルト}は触れた物体を任意の場所に出現させるもの。俺の知る座標移動^{ムーブポイント}は視界内の物体を、高速でいどうさせるものだ。どちらも自分を移動できるが、代わりに距離制限がある。だが、フレンドアの物体移動^{オブジェクト}は違う。重量制限はあるものの、一度見たものなら地球の裏側からでも呼び出すことができるからな」

距離制限がなく、一度見たものならという特性はかなりの強みだ。だからこそ上条はフレンドアのその能力を空間移動系能力の中でも随一の能力だと明言する。

「そんな話なんて今はどうでもいいでしょ？ これからどうするの？」

「エネはもう少し落ち着きを持つべき」

「私は落ち着いてるわよ。それよりもイヴ、いつもの『ですます口調』はどこに行ったのよ」

「いいじゃない、別に」

バチバチと火花を散らす二人に、呆れた視線を向ける上条とフレンドア。だが、上条はもう慣れたものなのか、フレンドアよりも早く復帰して話を進める。

「約一名待ちきれないようだし、とりあえず今後の予定を通達するぞ」

「ええ」

「うん」

「何？」

「作戦目標は今回の騒動の鎮静化並びに被害の最小化。戦法は自由、各自の判断に任せ
る。いいか、総員。適当にやれ」

「了解」

第二十二学区・神の右席『後方』編

平穩から破滅に続く道筋 Battle_of_Collapse.

本日の四時間目はとある事情で異様に長引いた。

平凡な高校生・上条当麻を含むクラスの面子が購買や食堂へ走った時には、すでに後の祭り。完璧に出遅れたために購買のパンは全て消滅し、食堂の席も埋め尽くされ、昼休みが終わるまで空く様子もない。トドメに食券販売機は、真夜中の煙草の自販機みたいに軒並み売り切れランプが点灯中。なんとという不幸。この状況も榎本貴音が歴史教師に放った一言『へー。じゃあもしも織田信長が安土・桃山幕府を作っていたら日本はどうなっていたんですか?』によって全てが脱線してしまっただけである。

「……で? どうするんだよ。お前等は」

自動販売機でMAX缶コーヒーを買って教室に戻った上条は、貴音特製の弁当に箸を突っ込みながら、教室で唸っている食糧難にあえぐ食堂&購買組に話しかける。

「……脱走だ!! 脱走してコンビニへ行くんだ!!」

「は？」

一体誰が叫んだのか。

気がつけば食堂&購買組の男女が円陣を組んで作戦会議を実行する。

こういう時、やはり力を発揮するのは吹寄制理だ。

そんな馬鹿騒ぎをする彼らを横目に貴音はため息をつく。上条は既に食べ終わり、マツ缶を飲んでいた。

「……今気づきましたけど。今日はマツ缶ですか？」

「ん、ああ。今日はマツ缶」

「それコーヒーじゃないですよね」

「飲むか？」

「ご主人の飲みかけ限定でいただきます」

「……お、おう」

騒がしい昼休みが過ぎ去って、何事もなく放課後になった。

下駄箱で靴を履き替え、校門を出た上条達が見つけたのは、黒服を着た男達だった。

「なあ、あれなんだと思う？」

「……さあ？」

『何か騒動かなー？』と言った具合で通り過ぎようとした所で、男達が動いた。

「・・・上条当麻だな」

「ああ。そうだけど」

「・・・貴重な放課の時間、邪魔してすいません。こちらを」

男達の一人が差し出してきたのはアタッシユケースだった。その大きさは薄く小さく、タブレットが二、三枚入る程度に見える。

「見ろって事か？」

「こちらで」

受け取った上条が開こうとすると、男達は後ろに止めてあつたバンに乗れと指示してきた。それは黒塗りのハイエースで、外から中は覗けないようになっていた。

（・・・なるほど。見られちゃマズい内容って事か）

「おおっ！ マジックミラー M M号！ 君をハイエースしたい。ではないですか！」

真剣な上条とは違い、貴音は別の所でテンションが上がっていた。

バンに乗り込んだ上条はアタッシユケースを開ける。そこには上面と下面にディスプレイとキーボードが組み込まれていた。

二人で見るために、上条はイヤホンの片方を貴音に渡す。それを貴音が耳に付けたのを確認した上条はエンターキーを押す。

『———やあ、上条君。悪かったね、貴重な放課後を潰して。ああ、君の寮に向かいなが

「このお話はする事にするよ」

アレイスターの映像と声が聞こえると同時、車が動き出した。黒服が運転しているの
だろう。

『さて、後方のアックアという名前に覚えはあるかい?』

『『神の右席』の一人だろ? 九月三十日に会った』

「一瞬でしたけど、この間のアビニオンでも。地殻破断より一フレーム速くテツラを回
収してましたよ」

「ん、そうなのか。で、そいつがどうしたんだ?」

『後方のアックアはだね。どうやら上条君、君が狙いのようだ』

「毎度毎度、どこから情報を仕入れてくるんだ? 滞空回線?」

『今回に至っては後方のアックアから果たし状が届いているんだ』

「は、果たし状……」

「変な所で律儀なんですね。アックアというのは」

「どうせ、始末するから覚悟しろってトコだろ」

『まあその通りだがね。今回の介入はあまりできそうにない』

「介入?」

「やっぱり、ヴェントの時の天使。テツラの時の超音速爆撃機はアンタの仕業だったん

「だな？ アレイスター」

『当たり前だ。君は毎回毎回無茶をする。君が止めなければ勝手にアビニョンまで連れて行つた土御門を三枚に下ろす所だった』

「止めて良かったんだな。危うく俺の友達が切り身になる所だったか」

「・・・晩ご飯は何にするんです？」

「買ってあるわ」

「バンの後ろの席から買い物袋がによきりと出てきた。振り返るとレデイリーが座っていた。」

「れ、レデイリー・・・。何やってんだ？」

「別に。マンションへの引越しは完全に完了してる訳じゃないし、まだ学生寮には禁書^あ目録^こもいるし、食材が足りないんじゃないかなーって、買っておいただけだから!!」

「どうやら和食ぐらいが作れそうな材料ですね・・・」ツンデレ？

「・・・それじゃ、本日の料理当番として腕によりをかけて作らねーとな」ツンデレ

「学生寮前についたバンから降りて上条達は寮に帰る。」

「・・・で、とうま。何で予言^ン巫女^{ビル}のレデイリーが隣にいるの？」

「この前話しただろ？ 少ししたらマンションに移るって、その時からの同居人だよ」

「じゃあ何で今いるの？」

「晩飯の食材を買ってきてくれたんだ。さて、作るから待ってろー」

上条は台所に入ると調理を始める。

（おー。様になってる）

レデイリーが台所に立つ上条にそんな感想を抱くと、貴音が肩を叩いてくる。

「にゅ?」

「……えつと、お風呂掃除を頼めますか?」

「……うん。いいよ」

お互い、触れない事にしたようだ。

「さあ私達はお部屋の片付けをしますよー……。つてなに台所にむかつとるか——!!」

空腹に負けて台所に向かって歩いていったインデックスを貴音は、彼女をジャーマン

スープレックスでベットに突き刺す。

「むぎよおおつ!! たつ、たかね、これは一体どういう事!?!」

「どういう事でも何でもありませんよっ!! お片付けするつつつてるでしょうが!」

「えー。今から『超機動少女カナミンインテグラル』のさいほーそーが始まる時間だよ

?」

「そんなどこかの大英帝国国教騎士団長の名前のカナミンは見なくて良いんですよ!!!」

そう言って貴音が読み散らかしてあったラノベを本棚に戻そうとした所で。

「こつ、この本格的な和食の匂いは何なのかーっ!？」

唐突に少女の叫び声が上がったと思つたら、ベランダの方からメキヤメキヤーツ!! というプラスチックの破壊音らしきものが響いてきた。インデックスがギョツとして首を回し、貴音がびっくりして本を落とすと、そこから出現したのはメイド服を着た土御門舞夏だ。

「どうやら『火災時とか緊急時以外は壊さないでね的に各部屋のベランダを区切つてい
るボード』を遠慮なく破壊し、侵入してきたらしい。」

「……なんだ。舞夏か」

「……匂う、匂うぞー。…………その味噌汁…………隠し味に粉末状に削つた
乾燥ホタテを入れているな……………」

「……正解正解大正かい! ……何なら味見するか? 我が弟子よ」

今まさに味見しようと小皿に少量の味噌汁をよそつていた上条は、ゆっくりとした動作で土御門舞夏へ小皿を手渡す。

まるで茶道みたいな挙動で舞夏はそれを受け取ると、全く無音で唇をつけ、一泊の間
をおいて——クワアアア!! と勢い良く両目見開いた。

舞夏はわなわなと肩を震わせながら、

「ぎ、流石ししよー……。負ける……………」

「流石に弟子より劣ってはいられんよ」

「こ、こうしてはおれん!!」

何やら口調を百八十度変えたまま、舞夏はいそいそとペランダを通って隣室へ再び戻っていった。その後ろ姿を見送るかのように、髪の毛が洗剤の泡だらけになったレデイリーが脱衣所から顔を覗かせる。

「な、何があつたの……?」

「ん、弟子が料理を教わりにきた」

「そ、そう……ていうか、騒がしかったけど、なんでそんなに平気そうなの?」

「な、なんで舞夏が……?」

「慣れだ。高校上がってアイツが最初に訪ねてきたときからずっとだからな」

「当麻はあれに七ヶ月も付き合ってるの?」

「意外に楽しいもんだぞ? と言うか見てたのかよ」

「とうま、とうま。レジャー温泉ってなに? 初めて会った時に行ったセンターと何が違うの?」

いつの間にかテレビを点けたインデックスがCMでやっていたレジャー温泉を指して問う。

「……うし。飯食ったら行ってみるか」

「どこに?」

「そのレジヤール温泉。第二十二学区のだろ? 行ってみりやどんなものか分かるだろ」
上条はそう言うのと、晩飯の用意を再開した。

標的《ターゲット》は上条当麻 Target | not
die "Imagine Eater"

「それじゃあ行きますか」

「はいな！」

「なんで、レデイリーがそつちなのかな？」

「さあね」

「インデックスは腰に回した手を離さないでくださいね」

「わ、分かってるんだよ！」

上条達の学生寮の前に、一台の車と一台のバイクが止まっていた。

上条とレデイリーが乗っているのはメルセデス・ベンツSSK。貴音とインデックスが乗っているのはハーレーダビットソン・ソフテイル。

本来学生が住む学生寮の前に車が止まっているのは異様な光景だった。

上条達の乗るベンツSSKに続いて貴音達の乗るハーレーが走り出す。

「レジャー温泉って結局どこのなの？」

「第二十二学区。地下街になるんだけどな」

およそ二キロ四方と、学区としての面積は一番狭いものの、地下数百メートルまで開発が進んでいるという、元々SFっぽい雰囲気を持つ学園都市の中でも際立って近未来な場所だ。

「アミューズメント施設と合体してるんだ。だけど、風呂入りに行くだけだから遊びには行かぬぞ」

「ちえつ」

「ちえつじゃねーよ。しかし、夜の学園都市つてやっぱり空いてるな」

「ステアの挙動もエンジンの響きも心地良いですし、路面のコンディションも丁寧だから思わずスピードが出ちゃいますよね」

「・・・後ろをついてこないんだな」

「テへ」

いつの間にかベンツSSKと並走していた貴音が話しかけてくる。

上条の寮は第七学区の端だ。隣の第二十二学区までは歩いて行ける距離である。上条達が乗り物を使うのは、単に湯冷めしないようにという配慮だろう。

第七学区を抜けて第二十二学区へ入ると、インデックスが何かを言っていた。きつと驚いているのだろう。

それもそのはず、第二十二学区の地上部分は他の学区と大きく異なる。いわゆる一般

的な家屋やビルは存在せず、風力発電のプロペラだけが並んでいるのだ。

上条達の乗るベンツが急加速し、四角く切り抜かれた地下ゲートをくぐると同時、横滑りを開始した。

「え、ええ!!」

第二十二学区の地下は巨大な円筒形になっていて、その道路は直径二キロの筒の外周を這うように、ぐるぐると回りながら下っていく。反対の上り車線と合わせると、理髪店の前でクルクルと回っているポールのような配置になるらしい。

いつまでも緩やかなカーブを描くトンネルをおぞましいスピードでドリフトしながらベンツSSKは進んでいく。

「あつはつはつはつ! 一つ見てもご主人は馬鹿じゃないのって言いたくなるぐらいの超絶ドリフトですなぁ!!」

「確かレジャー温泉は第三階層だったよな。 という事はそろそろだな」

「なっ、何が?」

そうこうしている内に、第三階層——地下九十メートルへの入り口ゲートが見えてきた。上条はアクセルを踏み込むと横滑りさせていた車体を、四角いゲートの中に滑り込ませた。

「うわぁ . . .」

「何度見ても・・・っていうか夜はほとんど初めてか。ここの空は外と変わりねーな」
「ご主人。あれですよ。レジャー温泉」

「ん、そうだな。街のお風呂ランキング三位」

「そんなに有名な所なら、知り合いと顔合わせたりしそうですねー」

*

貴音達がお風呂に入っていると、御坂美琴が入ってきた。

「あつ、あれ!? 何でアンタこんな所にいるのよ!？」

「お風呂では、静かに!」

「・・・お湯にタオルは入れないのよ」

貴音とレディリーに指摘され、地味にヘコむ美琴。そこでふと、タオルの事を注意してきたのが見覚えのある、有名人だと気づいた。

「え? レディリー!! タングルロード? な、なんでアンタがコイツらと一緒に・・・」

「分け入った事情だね。あなたの言うあの馬鹿と同棲中なのよ」

「は、はあ?」

「私と、でしょうか? 何を勝手に話をねつ造してるんですか。それと鳴神。漏電するな。」

「ここを電気風呂にする気か」

その後、少しして美琴が考え込みすぎたのぼせていたりした。

「？」

一足先にお風呂から上がっていた上条は自販機の前で、コーヒー牛乳とMAXコーヒーのどちらで攻めるべきか考えていた所で、ふとバタバタという足音を聞いて振り返った。

救護室、と書かれた部屋から出てきた女医さんが女湯に突撃していくのが見えたが、ここで貴音に念話したりすると、透視を疑われるので素直に悩み直す事にした。

そんなこんなで楽しいお風呂タイムは終わった。

上条はレジャーお風呂のビルから出て、MAXコーヒーを片手に正面入り口に突っ立っていた。

「……………地下街だつつのをすっかり忘れてた」

しばらく経つてから完全な無風状態である事に気づき、肩を落とす上条。がつくりしながらも、彼はふと考える。

(そろそろか……………いや、もしかしてまだ何も起こらない?)

うーむ、と悩む上条の隣に、何だか湯上がりでいい匂いがする貴音が近づいてきた。

「そんな所にいると湯冷めしますよ♪ ご主人」

「髪、結わえてないんだな」

「ええ。久しぶりに外で下ろしてます」

「家では良く下ろしてるけどな。ところで、インデックスとレディリーは？」

「何か、ビルの中にある『食べ物空間』の試食コーナーを駆け回っていただけど…」

「レディリーは連れ回されてる。と？」

「・・・えへえ」

「んだよそれww」

「散歩でもしますか？」

「二人で夜のデートだな」

「ん、んなっ／＼／」

「突然のアタックにはまだそんな反応するんだな」

「慣れる訳ないでしょう!!」

　　プンスカ起こる貴音の頭をポンポンと叩き、上条は謝りながら歩き出した。

　　しばらくくくだらない事を話ながら歩いていると、川の上に鉄橋が架かっている。そんな道に出てきた。

「貴音は気づいてるか？」

「ええ。さつきから数十人。天草式の連中でしょうね。それともう一つ一際大きな影が」

「多分後方のアックア、だな」

「そしてそして・・・」

「人がいない」

時間は午後10時を回った程度、いくら学生の街だからといつても夜遊び派なら活発に動いている時間帯だ。

不自然なまでに無人の風景に得体の知れない悪寒を覚えた上条は、『気持ち悪い』と呟いた。

声が聞こえる。

前方から、上条達が来た方とは反対側の鉄橋の端から、武骨な男の声が飛んでくる。

「——貴様の前には、いくつかの選択肢があったはずである」

上条と貴音はこの異常な事態に対して、いまだ平然としていた。

上条達にとってはこの程度は常識の範疇なのだろう。

「——私の宣告を受けとめた上で熟考し、自分の命を預けるに足ると判断した選択肢が『これ』だと言うのなら、私は真つ向から立ちふさがるのであるが」

だが、と声は嗤った。

「——率直に言おう。もう少しまともな選択肢はなかったのかね」

嗤う声に合わせるように、上条の声も嗤っていた。

「いんや十分。俺にやこれぐらいが十分だよ」

「宣言通り、ですね」

「策を練る必要性は感じられない。私はただ、この世界で起きている騒乱の元凶を排除しにきただけである」

「話し合いはなし。最初っから殺す気か」

上条はため息をついた。『殺せる訳ないのにな』と呟く。

「貴様が人ならざるものであるという報告は受けている。しかし、人のそれである事も」

「人は殺さないって言ういい人主義？」

「だから、吸血鬼用の兵器を用意した」

「……は？」

上条達が首を傾げた瞬間。闇の向こうで何かが光った。と思った瞬間銃剣が飛んできた。

東洋『武術』対 西洋『聖人』 Oriental
 S. Western. V

学園都市統括理事長アレイスター・クロウリーと、イギリス清教最大主教ローラ・スチュアートが話をしていた。

「聞き間違いだと言いたいんだけどな……。今なんと云った」

『だから、バチカンの特務局が動いたって言いけるのよ』

* 「——我らは神の代理人。神罰の地上代行者」

「え、ええ……」

* 『バチカン法王庁特務局——』

* 「——我らが使命は、我が神に逆らう愚者を、その肉の最後の一片までも絶滅するこ

と」

*

『イスカリオテ機関第十三課』

「カトリックの絶滅機関か。兵力は？」

『派遣兵力はただ一人なりけりよ。』バラディン「聖堂騎士」

*

「エエエイメンツツA M E N!!」

「『アレクサンド・アンデルセン』!!」

遠く離れた二つの場所。三人の言葉が重なった。そしてそう名前を呼ばれた男。アンデルセン神父はこちらへ歩きながら口を開く。

「我に求めよ、さすれば汝に諸々の国を嗣業として与え、地の果てを汝の物として与えん。汝、黒鉄の杖をもて、彼等を打ち破り、陶工の器物の如くに打ち砕かんと。されば汝ら諸々の王よ、さとかれ、血の審判人よ教えを受けよ。惧れをもて主に仕え、おののきをもて喜べ、子に接吻せよ。おそらく彼は怒りを放ち、汝ら途に滅びん。その怒りは速やかに燃ゆべければ。全て彼により頼む者は幸いなり。一撃で何もかも一切合切決着する。眼前に敵を放置して何が十三課か!? イスカリオテ何が法皇庁か!? ヴァチカン」

「ふっふっふっふっふっ」

上条の体から吸血鬼の能力が九割五分抜かれた。そして姿を現したのは戦闘モードのアーカードだった。彼は笑いながら上条の前に出てアンデルセンの前に立つ。

「クククツククククク。そうでなくては、そうであろうとも。さあ!! 殺ろうぜ
ジューダスプリースト
ユダの司祭」

「ハアハハハハハア。以前の様にはいかないぞ吸血鬼」
バンバイア

「止めようがないな」

「・・・ですね」

上条と貴音は、じゃれ合い始めた二人の化け物（一方は人間だが）を放っておく事にした。

「さて、吸血鬼の能力はあそこの赤い長身男に全部奪われたから今回は人間として戦う
ぜ」

「・・・今一度言っておこう。私の望みは騒乱の元凶を断ち切る事である」

「お前等が勝手に起こしてんだろ・・・で? どうすりや良いわけ?」

「全ての元凶は貴様の肉体の一部を起点とする特異体質にある。ならば、命までは奪わなくても良いであろう。——その右腕を差し出せ。そいつをここで切断するならば、命だけは助けてやる」

「だからそのズボンのジッパーを下げようとするんじゃないやありません」

「ん。そうか」

「・・・そういえば、近くに天草式がいたでしょう? 彼らは?」

「殺してはいない。私が倒すべきは、奴らではないからな」

お互いの距離は10メートル前後。

争いを回避するのは不可能。そんな事は百も承知だからこそ、下手な一手は打たず、最適のタイミングを把握して突撃しようとしていた。

だが、

真横。

「い、意外と速……」

上条が呟いた時にはすでにアックアは貴音の真横に飛び込んでいた。貴音も急いで反応していたが、彼女のクロスした腕の中心を横から殴るように肘が放たれた。

「大丈夫かー?」

上条の間延びした声が響く。アックアから上条はすでに距離を取っていた。

「さて、こりやそれなりに本気を出さねばならんようだ」

「……主人……」

上条がそう言つて靴を脱ごうとすると、轟!! と音が聞こえた。音源は全長五メートルを超す得物。騎士が使うランスに似ているが違う。

その太さはまるでビルの鉄骨を使ってパラソルの骨組みをくみ上げたオブジェ。

それは撲殺用の金属棍棒だ。

「行くぞ。我が標的」

「おいで、俺の食材」

上条が中途半端に身構えたよりも速く、アックアの筋肉が爆発的に膨らみ、残像すら渦巻かせて真上から巨大なメイスが振り下ろされる。

しかし、

ズドン。と、予想以上に間抜けな音を立ててメイスが地面に落ちた。

「・・・なるほど。『合気道』であるか」

「ほーう。良く分かったな」

「今の攻撃の威力をほとんど消した今の一撃。一瞬の事だったため良く分からなかったが、この手の感触は伝わってきた。ほとんど力の加えられていない手が一瞬の内にこちらの攻撃を利用して威力を相殺した。それができるのは」

「そうそう。早い話、西洋じゃ総じて体格とパワーに頼っちゃうんだよ。力なんて『添え物』でいいだろ？ 相手の力を受け流し利用すれば、アンタみたいな馬鹿力の攻撃をここまで落とせるんだから。言うほど簡単でもねーけど」

言いながら上条は靴と靴下を脱いで影にしまう。ペタペタと軽い音はその場に響く。

「そうか。どこまでいなせるかな」

「良い事を教えてやる。『重力』に逆らうんじゃねーよ！」

上条がそう言うと同時に、アックアがメイスを放ってきた。またもや恐ろしい威力と速度で襲い来るそれに上条は冷静に左手を向ける。

一瞬。

上条の左手が消えた。いや、これは一瞬ではない。今も消えている。そして聖人の振るうメイスが動きを停止していた。

(う、動かない・・・ッ?! 一体何がッ)

「悪いな。これが俺の愛気道だ」

上条がそう言った瞬間。彼の左手が可視化する。そしてアックアの持つメイスが大きく吹き飛ばされた。それでも手に持っている当たり流石と言えよう。

(ご主人の・・・合気道・・・?)

貴音が打った背中をさすりながら戦場を見ると、そこにはまるで洗濯機の中の洋服のようにアックアの周りをバラバラの状態で回っている上条がいた。

「あ、愛気道!! 風歩!」

「風歩・・・だと」

「名前だけ分かってもしゃーねーだろ。捉えられてないんだからな」

そこから上条の動きはさらに変化する。なめらかな曲線だったのが、角張った四角形が中心的となってくる。

「・・・くっ!」

「・・・雷歩・・・」

「イテ。あ、イテテテテ。でっ、いでででっ! あだだだ、あだ——っ!!」

「ご主人!!」

「・・・何か知らんが好機!!」

ドゴオツ!! と、轟音が響いた。雷歩がとけた上条の体をメイスが吹き飛ばす。数十メートルをノーバウンドで飛んでいった上条は、ビルに当たって止まった。その後を光速でエネが追う。

「ご、ご主人!!」

「外れたかー」

「雷歩で外れたんですか?」

「いんや。雷迅はできるから雷歩のさわり程度で外れる訳がない・・・。今のはその上をやろうとしたんだよ」

「・・・私もやりましょうか?」

「いや、いい」

上条はゆっくりと立ち上がる。その体に貴音の手が入る。骨が一瞬で外れはめ直された。

「でーっ!! 何すんだよ!!」

「本当はあのスキマ達に止められてるんですが、いたしかたありません。あんなむき苦しい男にご主人が負けるところなんて見たくないですから。枷を、外してあげます」

「………なんか、よくわかんねーけど。ありがとな」

上条はニコリと笑うとそのままビルから跳びだした。

「帰ってきたか」

「ああ。そう簡単に逃げるわけにも行かないんでな。俺の奥義の一つを特別に見せてやるよ。しかも、七十%っつー手加減付きだ」

「聖人相手に手加減とは」

言葉の続きを聞く前に、巨大なメイスが襲いかかってきた。

「すぐに本気が出るのである!!」

その力を目の前にしてなお、上条当麻は笑っていた。

「合気道は常に相手の力を利用する。それを分かかっててそっちから来てくれるとはねん。じゃ、遠慮なく」

（ご主人の奥義。七十%で出せるものと言ったら……）

「居合い払い 奈情嶺」

（居合い払い 奈情嶺!）

「ツ!」（こ、これは．．!! まるで激流に放り込まれたような感覚!）
「逃がすかよ」

（あー。あれはご主人完全に調子に乗ってますわ。．．．．ツ）「ご主人!!」
「んあ?．．．おわっ!!」

貴音が気づいて声をかけた時には時すでに遅し。上条の手は止まり、彼の足元に銃剣が数本刺さっていた。

「アンデルセンか．．．。ぐうっ!」

「よそ見とは。余裕であるな」

上条の体全身から血が流れ出した。

「ご、ご主人!」

「安心しろ．．．全部擦り傷程度だ。数が多いから酷く見えるがな．．．」

「もう意識も朦朧としているようだ。ひと思いに、気絶させてやる」

ドゴオ! と、上条の脇腹にメイスが食い込む。振り抜かれなかったメイスには、力をなくした上条の体が引っかかる。

「ご、ご主人! 　ご主人!!」

「一日待つ。麻酔もなくここで引き抜かれるのも酷だろう。義手の準備でもしておくが良い。期限までに騒乱の中心——その元凶たる右腕を自ら切断し、我々に差し出すと

言うならば、その命は見逃してやるのである」

「は？、ふざけ」

それだけ言うと、アックアは無造作にメイスを横へ薙いだ。

『神の右席』にして、聖人としての資質をも兼ね備えた怪物の一撃。

メイスに引つかかっていた少年の体が、砲弾のような速度で鉄橋から飛んだ。手すりを飛び越した体は数百メートルも真っ直ぐ突き進み、少女にキャッチされた。しかし、少女もまたその速度に空中で踏ん張れず、川に沈んだ。

誰にいうでもなく、アックアは言った。

「一日待つ」

敗北く復活 桁の違う怪物の闘争 Vampire.

Human. God.

川の底に沈んだまま、少年は動かなかつた。少年の周りには魚がたくさん集まっており、擦り傷から流れる血を止めようとしているようにも見えた。

少年の体のすぐ側に少女も沈んでいた。お互い、少しも動かない。

水面は遠く、結構大きな船が見えている。上条達を探しているのだろうか。だが彼らは川の底に完全に沈んでいるため、見つけるのは相当困難だろう。

そこでもうやく少年は目を覚ました。川にいることもお構いなしで時計を確認する。

(・・・あれから半日。そろそろ吸血鬼の体質が抜けきった体にも適応してるだろ・・・。おい、エネ。起きろ)

(・・・うん?・・・はわあ!?! み、みずう!?)

(大丈夫だ。絶対におぼれない。コイツらが、結界張つてくれるから、そのせいで上の奴らは俺達を見つけられてないみたいだけどな・・・)

(エネさん初めまして。この人の使い魔やつてます)

(魚さんかー。水の中の使い魔は私も知りませんでしたわー)

（・・・とりあえず。もう少しここでゆっくりしてようぜ。時がきたら、復活よ）

（やっときますか？）

（やろうか）

貴音は銃を取り出すと、上条の眉間に突きつけ発砲した。

「復活!!^{リ・ボリ} 死ぬ気であいつを倒す!!」

*

街中で、聖人・神裂火織と聖人後方のアツクアが戦っていた。

戦況はアツクアが有利だった。

全ては二十二学区第七階層の病院に入院している上条当麻を守るため。少年の右手を、守るため。

アツクアの力に絶望しかけたその瞬間。

ドゴオ!! と、水が破裂する音が聞こえた。

第三階層に雨が降る。莫大な水量が巻き上げられた証拠だ。その方向は、上条当麻と榎本貴音が沈んでいた川の方。神裂は思わずそちらを見た。上条達は助けられたはずだ。この目で見てはいないが天草式がそう言っていた。彼らの言葉を信じるなら、彼は

病院に入院しているはずだから。

瞬間。

アツクアの体が数メートル後ろに滑った。その原因を作ったのは、神裂を守るように立つほぼ無傷の上条当麻のせいだった。

「……………エネ。同調率は」

『えーと、これが同調率ですかね。97%です。完全じゃないですよ?』

「……………むしろこの肉体でそこまでの数値を叩き出すこと自体が凄いな。……………さて、後方のアツクア。待たせたな。約束を果たしにきたぜ」

「大人しく右手を差し出しにきた。というわけではなさそうだが」

「安心しろ。もう負けねーからよ」

上条はそう言うと、彼の右腕にはめられた枷を外す。以前神裂と戦った時と同じように。

「さて、と。途中になってたからな。見せ直してやるよ、俺の愛気道をな」

そう言うと上条の体がバラバラと分かれていく。

「それは……………確か雷歩といったな」

「ああ。だが、見えてないだろ? 風歩すら見切れてないのに、雷歩を攻略しようなんて

考えるだけ無駄だぜ?」

上条がそう言いながら『雷歩 奈情嶺』をくり出すが、弾かれてしまう。

「チツ。速さで動くヤツは対処が早くて面倒臭いな」

「……流石の攻撃であるが、先ほどと全く同じ動きなのでな。簡単だった」

「……しようがねーな。だったら見せてやるよ」

数度呼吸を繰り返した上条が両手を振るうと、フオツ。と肩から先が両腕消える。

（何かする気か……。しかし、その間合いで何ができる？）

瞬間。

バヂツと、アックアの体が左に傾く。神裂も、追い付いた天草式の面々も驚いていた。届くはずのない距離。だが上条の攻撃は届いた。

「俺の体に枷が付けられていた理由。それは順風満帆過ぎたせいだから。そんな俺が編み出した技だ。聖人なんて才能持ちのオマエもゆっくりと味わいな」

そう口上を述べる上条の両腕はビリビリと音が鳴るほど高速で動き、風を切る。

そして、上条の攻撃が始まった。

「?! なっ、何だあれ!?!」

「攻撃の軌道だけが見える……!?!」

「まるで、雷のムチ!」

高速での連続打撃がアックアの体が持ち上げられ叩き落とされ、また持ち上げられた

と思っただけ叩き落とされた。彼が持っていたメイスも、少し離れた所に転がっている。

「なっ・・・!!?」

「なんだ、今のは!!?」

「ぐはっ、ごっ・・・」(い、今のは・・・!? まるで重力操作ではないか!?)

「オマエでも弾くどころじゃねーだろ。昔の俺の技『雷迅』だ」

元より上条は聖人を普通の人間のように扱える。それも武術を使つてのことだが、今回は上条自身が最も得意としていた武術での戦い。負けるはずがない。

「だが、まだ弱いのである!!」

「うーん。勢いだけは良いな。いやはや良くやった。大したもんだオマエ」

アックアの単純な攻撃を雷迅でいなす上条。そして愉快そうに笑いながら言った。

「———だけど、だからこそ残念だ。あと、十年熟成させたらまた来い」

上条がそう言うと同時に、アックアの背中に大量の打撃が落とされた。

そしてまるで何かに上から押し潰されたようにアックアの体が地面に叩きつけられる。

「や・・・やったの・・・!!?」

「そういうのは、フラグって言うんだけどな・・・」

上条はフラフラと後ろに下がるとしりもちをつくように座る。

「い、いや。まだ立つ可能性も・・・」

「ただだけバケモンですか」

「立つわきゃね——」。もし立てても背骨がネジ曲がりまくってるはずだ。殆ど動けず、お前等の誰でも簡単に勝てるさ」

上条がそう言つて立ち上がろうとした所で、数百にも及ぶ銃剣が上条に襲いかかってきた。

「クツ。まさか!」

上空から降り注ぐ聖書のページ達を忌々しげに睨みつける。

「シイイイイイイイハアアアアアアアアアアアアア!!」

「やっぱりオマエか! アンデルセン!!」

大量に飛んできた銃剣を全て弾き飛ばす上条。目の前に立つ狂信者の神父を軽く睨みつける。

「ウチの馬鹿吸血鬼はどうした? 戦つてたんだろ?」

「・・・決着は着いていない。だが、貴様の右腕。それが異教徒以上の化け物だと聞いて始末しにきた」

「元々それで来てたんだもん。相手してやるよ。かかってこい」
「皆殺しだ」

「アンデルセンの猛攻をかわしたり、受け流したりする上条だったが、だんだんと体中に切り傷ができはじめる。

（やっべ。流石に刃相手じゃ俺の愛氣道も文字通り刃が立たないな）

無言の死闘の最中に上条はそんなことを考える。体中にできた小さな切り傷がだんだんと閉じ、完全に傷すらつかなくなった。

（残念。もう俺に傷は着かねえ）

「ボツ!! と、空気が潰れるような音が響く。瞬間、アンデルセンの目の前に拳の壁ができあがった。それは一撃で数十発のダメージを彼の体に加え、吹き飛ばす。が。

簡単に戻ってきた。

「面倒くさいなー。再生者」

奇声と共に飛んできた銃剣を全て弾いた上条は、後ろに下がり始める。

それを追ったアンデルセンが先ほどまで上条がいた場所にたつた瞬間。彼の動きが停止した。

「ぬう・・・!?!」

「オマエのお家に送り返すぜ。バチカンにな。アデュー」

アンデルセンがその場から消えたのを確認すると、上条は座り込む。

『王室』『騎士』『清教』派編

何気ないやり取りの違和 Irregular Spa

rk.

イギリス方面で不穏な会話が交わされている事など露知らず、吸血鬼兼人間の高校生、上条当麻は本日最後の授業を終え、HRが始まるまでの短い休み時間を満喫していた。

学園都市では十一月に控えている超巨大文化祭『一端覧祭』の準備をそろそろ始めるぞーという気配がさざ波のように近づいてきている。

色々あって中間テストが中止になり、心に余裕がある所も拍車をかけているのだろう。

教室全体のテンションがなんとなく上がっている。そんな中、上条当麻は、

（分体として入院させておいた俺の分身が、御坂と接触してたとはなー。ま、俺が駆けつけたって言う証拠を作るためこっちに向かわせて回収したけど・・・）

上条は分体から受け取った記憶を思い出していた。

——第二十二学区第七階層でのこと。

「とつ、とにかく、行くわよ、病院に！ アンタ口で言っても聞かないんだから、ちゃんと病院に戻るまで見逃したりはしないわよ!!」

「・・・そう、か。知つちまったのか、お前。でも、違うんだ。俺、記憶がないから詳しい事は分からないんだけどさ。以前の自分なんてものは思い出せねーけど。どんな気持ちで最期の時を迎えたのか、もうイメージもできないけど。だけど、ボロボロになるとか、記憶がなくなるまで戦うとか。自分一人が傷つき続ける理由はどこにもないとかさ」

「多分、そんな事を言うために、記憶がなくなるまで体を張ったんじゃないと思うんだよ」

「昔の事なんか思い出せやしないけど、だけど、思い出せなくても、その欠けた部分のおかげで俺はここにいる。もう覚えてすらいない頃の俺が、今の俺を動かしてる。残っているんだよ、『頭』じゃなくて『胸』に。だから俺は、『上条当麻』を思い出せなくても、俺を思い出せなくても、俺がやろうとしていた事、俺がやるべき事ならきちんと分かっている」

上条の体の傷がどんどん治っていく。そして病院の服が彼の普段着に再構成されていく。

「御坂。お前は首を突つ込むな。人任せて良い事じゃない。強制されてるわけでもねーけど。でも、だからこそ俺がやらなきゃなんねーんだ。例え、死ぬ気になっても」

（——うくんマンドム。ありや絶対フラグ立つたね。鈍感系主人公？ 何それオイシイの？）

「にやーっ。カミヤん。そろそろハッキリさせておこうぜーい！」

真剣（？）に悩んでいる上条の元に土御門がピヨーンと飛んでくる。

「・・・ハッキリさせるって？ 何をだよ」

「それはもちろん決まってるんだにやー！ カミヤんと貴音つちが同棲してるのかどうかだぜい！」

「・・・は？」

トイレから帰ってきた貴音と、上条が声をそろえて驚いた。

「この前ウチの舞夏がカミヤんの家に突撃するその一歩手前で、カミヤんの部屋から貴音つちの声があったんだけどにやー？」

「たまたま来てただけだよ」

「ふーんそうか。それならカミヤん。こつちも最終兵器を使わざる終えないぜい」

「最終兵器・・・だどっ!？」

「い、一体何を持ってると言うんですか!」

「防犯のためとって俺んちのドアの前に仕掛けたカメラ。あれは偶然にもカミヤん家のドアの前も撮しちゃつてたんだぜい」

「・・・あのカメラかつ!」

「そこに撮された、数週間に及ぶ帰宅・出発の瞬間を、見せてやつても良いんだぜい?」

「・・・何故、そこまでして俺達を・・・」

「・・・なーに、我々はただ真実が知りたいだけです」

「上条!!」「榎本さん!!」

「お前が!!」「あなたが!!」

「榎本さん（上条くん）と、一緒に住んでるんじゃないかってことをね!!」

「・・・」（どうするよ）

「・・・」（言った方がスッキリするってこの事ですかね）

「・・・でもよ。こういう場合否定したら追求されて」

（肯定したら怒られる。つてパターンですよね・・・）

（・・・えーつと、どうする?）

「・・・あー」

「えー」

「どうなんだ!？」なの!？」

「E x a c t l y」

*

それとなく体中に埃や擦り傷を作った上条当麻と榎本貴音が街中を歩いていた。

「ご主人……。私疲れました……。」

「ああ。だがな貴音。俺の予想だと、今日は英国イギリスに行くことになりそうぞぞ」

「ええ!？」

「なるほど、ユーロトンネルの事件で禁書目録の呼び出しか」

「ああ。そんな所だろ」

「……。英国か。久しぶりだ」

「……。アーカード……。先に言つとくが、国教騎士団があるとは限らないからな？」

「ふっ。楽しみはいくつ持っていてもいいものさ」

「あらそう」

そこで上条は振り返って、

「こそこそ後をつけてる土御門さんに案内してもらいましょうかね。イギリスへの行き」

方を」

「・・・土御門さん？」

「ほう。あの時のグラサンか」

「に、にやー。お三方、そんな怖い顔で睨まれたら土御門さんのお口も閉じちやうぜい？」

「なら無理やり・・・って言いたいところだが、推測するに俺が学生寮から引越しまつたから住所を調べて何かしらの仕掛けをするつもりだったな？」

「うっ」

「そんなことしなくても素直に行くんですけどねー」

「うぐぐ・・・。それじゃあ説明するぜい」

「ここぞか」

上条の問いに土御門は『ここぞだにやー』といって話を始めた。

「それじゃあ簡潔に。イギリスに行ってくれ」

「でもどうやって」

「飛行機はこつちで用意しておいたから。第二十三学区に着いたら、国際空港の第三受付にあるクロークサービスで三二九三番のロッカーの荷物を受け取れにやー。パスポートとか必要なものは全部そこに入ってるから。学園都市のIDがそのままクロー

クの番号札代わりになってるから、受付に上条当麻って名乗れば荷物は出てくるぜい」
「ん、了解。よし貴音、インデックス呼んでこい。レデイリーは呼ぶなよ。あいつはいろいろと面倒だ」

「はーい」

▽

「……ちなみに。飛行機は超音速旅客機だぜい」

「………私も留守番していいですか？」

インデックスを連れてきた貴音に止めが刺された。逃げようと後ろを向いた貴音を上条が捕まえる。

「離して、くださいっ！」

「ほら、行くんだよ」

「い・や・で・す！」

「じゃあ寝てろ」

上条はそう言うと、貴音の目を見つめる。すると貴音が気を失った。

「……ほう。吸血姫相手に魔眼を使えるのか」

「常識だ」

言いながら上条は影から棺桶を引きずり出すと中に貴音を詰める。

「どうせ貸し切りだろ？ だったらこれぐらい乗せられるだろ？」

「あ、ああ」

「んじやあ行くぞ、インデックス」

「う、うん。分かったんだよ」

*

英国。 ロンドンへと着いた超音速旅客機の機内で上条とインデックスは目を回していた。

「……絶対こんな時間で着くのはおかしいんだよ……」

「最大時速七〇〇〇キロオーバー。相変わらずのオーバーテクノロジーだよな……。と
いうか、インデックスは何でそんなにフラフラしてんだ？」

「とうまが途中でちよーおんそくひこーきのドアを開けたからなんだよ！ どうしてそんなことしたのかな!？」

「虫の知らせって奴だ」

上条は超音速旅客機の貨物室から棺を取り出すとその場で開ける。

「ぐふっ……つ、辛かったです」

「はいおはよう貴音。さて、どこに集合するのかね」

「さあ？」

実は搭乗口近くで五和が待っていたりするのだが、彼らは荷物として乗せた貴音を受け取るために別の出口を通って空港を出たので、まったく行き先がわからないでいた。

「……さてさて、どうしたものか……」

イギリス迷路の魔術結社 N∴L∴

「大方、イギリスのお偉いさんの所に行けばいいんだろ。こういう時」

「じゃあバッキンガム宮殿ですかね？」

「ほんじゃまあ、行ってみますか」

上条は手袋をつけるとハイパー化する。同様に貴音は空の女王となり、インデックスを抱えて空へと舞った。

「・・・どこだ？」

「あの辺じゃないですかね。公園みたいな」

「んじやあ行ってみるか」

上条達はとりあえずそこに向かってみることにした。

英国の首都の一区画が丸々抜けている場所。それがイギリス女王の暮らしているバッキンガム宮殿らしい。

敷地に降りようとした上条達に魔術攻撃が飛んできた。

「ゲッ」

「絶対防衛圏展開!!」

上条の前にインテックスと共に躍り出た貴音がバリアを張って魔術攻撃を防ぐ。

「いきなり攻撃か。手厚い歓迎ありがとよ」

上条は悪態をつきながら魔術攻撃をしてきた女性を睨む。

「・・・あなた方でしたか。もつとまともに来てください」

「至極まともな方法なんですが？」

「・・・」

二人そろって首を傾げられ、神裂は頭を抱えた。

神裂に連れられ上条達は宮殿の中に案内される。そこには『景色』と呼べる世界が広がっていたが、上条と貴音は大して気にもしていない。

「・・・とうま。凄いつて私は思うんだけど。とうまとたかねは何も思わないの？」

「・・・あー。なんだっけ。既視感を感じるんだが」

「紅魔館と地霊殿がこんな感じですよ」

上条がうなづいていたのを見かねて貴音が教える。上条はすぐに『ああ！』と手をたたくが、景色を思い出せたわけではない。

「おなか減ったんだよ」

「・・・また食うんですかこの腹ペコシスター」

「何か言ったかな!？」

「来たか」

貴音の発言にインデックスが怒った。その少し後、スーツの男がやってきた。スーツと言つても、パーティで着るようなそんなスーツだが。

「はい？」

「ん？」

「ふむ。君達が禁書目録の管理業務を負う者か」

「いやいや管理業務と言われたら微妙なんすが……どちら様？」

「ああ、すまない。騎士団長ナイトリーダーと呼んでくれ。しかし、あの一〇万三〇〇〇冊を保全する人物とは、どのような者かと興味を抱いていたのだが……まさか頭に張り付ける形で管理していたとはな。恐るべき東洋の神秘」

「どっちかって言うのと西洋の神秘っすけど。インデックスが噛み付いてるだけですし」

「んなこと言つてないで助けてくださいよッ!!」

上条はインデックスを貴音の頭から引きはがすと、バッキンガム宮殿の廊下を歩きだした。

「つつか、そもそもなんで俺達はこの呼ばれたの？」

「………学園都市の案内役である土御門は何も言つていなかったのですか………?」

「いや、大体当たりは付いてんだ。ユーロトンネルの爆破と何か関係があるんだろ？」
「その通り。今から行うのは作成会議のようなものだ。王室派、騎士派、清教派のメンバーが集まった、な。王室派のトップ——つまり、王の血を引く方々が参加するため、建前では『謁見』という形になるが」

「あ、そうなの？」

「んじゃあ仕方ありませんね」

そう言った上条と貴音の着ている服が、黒を基調としたスーツに変わる。

「・・・魔術？」

「姿形など私にとっては何の意味もない」

無駄に上条達は決めて言うのと、それきり何も言わなくなった。騎士団長がその先はな
いと判断し、巨大な扉のノブを回す。

しかし扉が開け放たれる前に、隙間からこんな言葉が漏れてきた。

「ぐおおー……………ドレスめんどくさいな。ジャージじやダメなのかこれ……………」
騎士団長の動きがピタリと止まる。

貴音は聞き取れなかったのか頭にはてなマークを浮かべていたが、上条は

「あはは。なんか親しみやすい人っすね」

「……………しばしお待ちを」

ボソツと放たれた言葉と共に、扉の隙間に身を挟むように室内に入る込む騎士団長。

「ぬぐお!? 入る時はノックぐらいせんか貴様!!」

「謝罪はしますがその前に一言を。——テメエ公務だつてんのにまたジャージで登場しようとしただろボケ馬鹿コラ!!」

「いえーい騎士団長が一番乗りー」

「部屋へやってきた順番とかそんなのはどうでも良いんです!! いいから、女王らしく!! いや良いです。意外なキャラクターとか誰も求めていませんから無理にエレキギターとか持ち出さないでください!!」

ドツタンバツタン、という物音に、扉へ不審そうな顔を向ける貴音。ネイティブな発音に戸惑っているのだろうから上条はクスリと笑う。

ややあつて、騎士団長が扉の隙間から顔を覗かせた。

「色々と面倒をかけて申し訳ない。もう大丈夫だ。女王エリザードは目を覚ました」
「?.....私のスキル!」

「そつちじゃねえ。大変そうっすね」

上条は苦労が分かるといった具合に笑いながら扉をくぐって中に入る。

RPGなどでよく見る階段状の壇上に玉座があるので、パーティ会場のような大広間に、丸く木の年輪のように何十にもテーブルが配置されている。

その中央。

『彼女』こそが英国の女王様なのだろう。確か、エリザードと呼ばれていた。五〇代前後の年齢の割に上条達十代の芯や骨格を凌駕しているようにも見える。

気になる点と言えども一つ。彼女が来ているドレスもそうだが、それより右手に持った一本の剣。

イギリスの淑女の見本たる女王様なのに剣を……しかも抜き身のままウロウロ状態。

貴音はその剣を見て、真つ直ぐに感想を抱いた。

そして真つ直ぐに感想を述べた。

「い、意外なキャラクター……ッ!? う、ウチの姫神があれほど努力しても手に入らなかつた強大な個性を、こんなにも簡単に……ッ!!」

「いや違う、あれで正常だ! エレキギターや、サッカーボール、剣玉、サーフボードなどのいらぬ道具は全て撤去してある!! 馴染みがないかもしれないが、あの剣こそがクイーンレザント英国女王エリザード様の象徴なのだ!!」

「あ、はあ……。って、その台詞の時点で大分キャラクターが……」

「……だな。……って、あの、そちら様はどちら様で?」

貴音が驚いている間に入ってきた初老の男を上条は指して言う。どこかの執事だろ

うか。上条はどことなく見覚えがあったが。

「ん。彼は」

「私の従僕だよ少年。本来はもう一人、従僕が居たんだがな」

上条の返答に答えた人は上条達と同じように扉から入ってきた。金髪の女性が二人。答えたのは葉巻を啜えた長髪の女性の方だ。

「あ、貴女は……」

「ああ、彼女は『騎士派』の団長さんだ」

「大英帝国王立国教騎士団団長——インテグラル・ファルブルケ・ウインゲル
ツ・ヘルシング！」

「……ほう。私の名前を知っているとは」

「なんで、この次元に……」

「久しいな。インテグラ」

「?!」

上条の体からよく出てくる命の一人がまた顔を出す。まあ今回ばかりは仕方ないの
だろうが。

「ア、アーカード!!」

「マ、マスター!?!」

「セラス、ウォルターも、久しいな」

「・・・久しぶりの再会か？ アーカード」

「ああ、そうだな」

「・・・ご、ご主人ご主人。セラスさんとインテグラさんです！ さ、サインとかもらった方が良いのでしょうか？」

「・・・馬鹿言え。お前こんな時に何言ってるの？ ヘルシングに喧嘩売る気かよ」

言わずもな。ここに集まったのは大英帝国国教騎士団。通称ヘルシング機関に所属するメンバー。団長インテグラル。吸血姫セラス。死神ウォルターの三人だった。

「アーカード。貴様が消えてから三十年だ。生きていたのなら、何故帰ってこなかった」「そうですよマスター！ しかも、闇夜の黒猫とか言う殺し屋に殺されたって聞きましたし！」

「・・・私はもうヘルシングのゴミ処理係ではなくなった」

「[?:]」

「今の私はそこに居る上条当麻の吸血姫の核となっているただの命。意識を持つのは彼が私を吸ったのではなく喰らったのだから」

「何があつて彼の核になったのだ」

睨まれた上条は『おお怖い怖い』と笑い飛ばす、アーカードも少し楽しそうに。

「負けたのだ。人間である我がマスターにな」

「負けッ?! マスターが!?!」

「ほう。負けた・・・か。その少年。上条とか言ったな」

「・・・ええ」

「君が闇夜の黒猫。だな?」

「ええ!?! でもマスターが居なくなつたのつて三〇年前ですよつ!?!」

「私が過ごした時間はそれ以上だがね」

「・・・俺は黒猫」

「私が闇夜です!」

「なるほど。二人で一人の暗殺者という訳か」

「クツクツクツ。さて、二人が怖いからな。私はマスターの中へ戻るとしよう」

「俺に逃げるんじゃねーよ・・・」

「・・・ちよつとあなた! マスターを、どうやって倒されたんですか!?!」

「ガクガクとセラスに胸ぐらを掴まれて揺さぶられる上条は少し目を回したようにして。」

「ど、どうつて・・・普通に・・・倒したというか・・・食べたというか・・・」

「た、食べたあ!?!」

「いや、あんまり正確には覚えてないんだけど……っていうかアンタが説明してくれアードオオオオオオオ!!」

上条は叫ぶが特に何ができるわけでもない。ふと気づくと三人ぐらい女性が増えていた。

「そろそろみんな集まってきたな」

「なあなあ。どちら様？」

「えっと。第一王女リメエラ。第二王女キヤーリサ。第三王女ヴィリアン。だそうです」

「ふーん」

「さて、それじゃ適当にトンスラするか」

『は?』と上条と貴音は声を揃えて言った。エリザードは笑顔で言った。

「大きすぎる議場の場合、全ての発言が記録されるため、思うように自分の意見を述べられない事も多い。それに現在一秒一秒進行中の事態に対して、一〇〇人単位の間がああでもないこうでもないと言いつつても時間を浪費するだけだ。時には少人数短時間で話を決めてしまった方が効果的な場合もある」

「……女王陛下の場合、その事例が多すぎる気がしますけど」

騎士団長がボソツと言う。

上条と貴音は巨大な会場を見渡し。

「ならわざわざこんなデカいところ用意しなくて良かったんじや……」

「国の舵取りをする場面では、専門家づらして『意見』を言おうとするヤツはいらないからな」

上条の言葉に、第二王女のキャーリサも頷く。

「最低でも『王室派』、『騎士派』、『清教派』の各代表が揃ってれば構わないの。……私としては、禁書目録を招集した『清教派』のトップがここにいないのが気に食わないけど、まあ『聖人』が代理に現われたんなら許容しよーか、といった所か」

「す、すみません。ウチの最大主教は例によつて、裏でコソコソやっているようです」

「あの女狐エ……。というか、清教はカトリックで、ヘルシングはプロテスタントですよ。仲良くできるんですか?」

「……ステイルは嫌うでしょうが、私はそこまで気にしていませんので」

「まさに聖人!!」

「それにしても、『騎士派』は騎士団長、ナイトリーダーヘルシング、『清教派』は神裂として……『王室派』は『女王』に第一、第二、第三王女と目白押しだな……。何というか、招待される人員に偏りがあるような、ないような……」

「うふふ。結局、良かれ悪しかれ、この国は『王国』……。王様の国という事なの

よ」

「・・・なるほど」

第一王女のリメエラが、上条の顔を見てそんな事を言った。国家としての意思決定に關して、やはり『王室派』の意見が最重要視される、という訳か。上条がそう思っていると、何故か第三王女のヴィリアンが申し訳なさそうに無言で頭を下げてきた。

一方で、キヤーリサは上条を指差して言う。

「ところで、『王室派』、『騎士派』、『清教派』の代表はよしとして・・・その小僧達はどーいう役割なの？ 会議に出席させる上での立場を明確にしておきたい」

不要な人員なら省きたい、と暗に示しているような口調だった。

上条としても、特に絶対参加しなくては気が済まない。という訳ではないのだが、と
いうかできれば場違いすぎて、目線が痛いので（特にヘルシング勢）でたくはないのだが、女王はニヤリと笑ってこんな事を口にした。

「そいつは学園都市統括理事長を裏から操る腕の持ち主で、聖人二人に無傷で打ち勝ち、天使に拳一つで挑み、ローマ正教に喧嘩を売り、幾多の戦鬪で勝った実力を持つ少年と、それと同等の力を持つ少女だと聞いている」

「拳一つで・・・聖人に？」

「神裂も、アックアもたいして強くなかったから。どっちかかっていうと弱い」

写真撮影の一悶着 N∴L∴

女王を始めとして上条達が集まったのは、会議場のある一階から階段を使って三階まで上った上で、広い廊下の曲がり角にある、応接用の簡素なスペースだった。各々がソファに座り、適当にくつろいでいる様子を見て、通りかかったメイドがビクツと肩をふるわせている。

上条と貴音は軽く面々の顔を見る。

イギリスの女王様に、お姫様が三人、騎士派なんて大仰な組織のトップと、絵本に出てきそうな役職の人がてんこ盛りである。彼らの知り合いのインデックスや神裂にしても、片や一〇万三〇〇〇冊の魔道書を正確に記憶する禁書目録に、片や世界で二十人と居ない聖人。ここは本当に二一世紀の現代社会なのか、と疑いたくなる面子だった。かく言う彼らも幻想喰いとその眷属なのだが、自らの事には目が向いていない様子だ。
(何か・・・凄く場違いな気が・・・)

居心地の悪くなった上条に続いて貴音もソファから立ち、何となく時間を確認する。そこでふと、ある事に気づいた。携帯電話にも付いている情景や人物を切り取る事のできる機械。

カメラだ。

「……うーん、女王様にお姫様か。どいつもこいつも思わず一枚撮りたいほど有名人だな……」

「……というか、セラスとインテグラルさんに関しては何撮っても良いですよ？ 私保存したいです」

学園都市製の一眼レフカメラまで持ち出した貴音に上条は止める気も失せてきた。と。

気がつくのと、いつの間にか上条の隣にキヤーリサが肩が触れるか触れないかの距離までしていた。

「は？ なんすか」

「馬鹿者。撮影したいのではなかったの？」

「あ、いや」

「そーですけど……」

諦め気味の貴音は上条の顎が自分の頭に乗るような形で上条の前に立つ。そして上条にカメラを渡す。上条は貴音の言わんとする事をくみ取り、影を操ってカメラのレンズをこちらに向ける。

「しかし、まあ……良いのか、これ。作戦会議中にカメラで王女と記念撮影って」

「良いんじゃないでしょうか」

「言っておくけど、私だけの悪癖という訳じゃないから、ほら、姉上もカメラの気配に気づいて接近してる」

「ッ!?!」

気がつくときャーリサとは反対側の隣に第一王女のリメエラが立っていた。彼女は上条立ちの前に浮いているカメラのフアインダーを写す画面に目をやりながら、

「……おやおや。妹のキャーリサがバツチリ映っているのに、この私が見切れているのは許せないわね。ううんと、こう、もつと、こう、近づけば、これでオーケー……?」

ぐいぐいと上条によってくるリメエラ。それに続いて第三王女のヴィリアンも上条の背後に。逆サイドの背後にセラスも立った。気づきにくいのが、ちゃっかりとフレームに映ってくれているヘルシング家当主様も居た。

(……ねえ、これどういう状況?)

(さあ? とりあえずさっさと撮って終わりにしましょう?)

(……そ、そうだな)

上条が影を操ってシャッターボタンを押そうとする。

しかしそこで待ったをかけた者がいた。

イギリスの女王様・エリザードだ。

「………まったく、お前達はここがどこだか分かっているのか？」

カーテナ・セカンドの先端をくるりと回し、ドカリと床に押しつけた女王は呆れたよ
うなため息をついていた。それを見て、騎士団長と神裂火織、ウオルターがうんうんと
頷いている。そうだそうだ、言つてやれ言つてやれ、という感じに。

だからエリザードはこう言つた。

「ここは連合王国、女王の国だぞ？ 主役の私を差し置いて撮影開始とはどオいう事
だあーッ!？」

「ああもう馬鹿めッ!! 他国の者の前で遠慮なくお祭り好きの魂を見せつけやがっ
て………ッ!! 今は作戦会議の時間です!!」

上条達の元へダツシユしようとする女王を、両手で頭を掻き毟つた騎士団長が全力の
タツクルで阻む。ドタバタと転がる二人を見て呆れた上条の脇を、第二女王が肘の先で
ちよいちよいとつついた。彼女は目で語っている。馬鹿は良いからさっさと撮れ。

ピピッカシヤツ、と薄いフラッシュと共にシヤッターが切られると、床に押し倒され
たエリザードが、ガバア!! と絶望的な表情で顔を上げた。

「わあ撮りやがった!! ホントに私を除け者にしたまま撮りやがった!! やり直しやり
直し、私も写るからもう一枚どうだろう!!」

カーテナ―セカンドをぶんぶん振り回して喚く女王だったが、三人のお姫様達は『やるべき事はやった』という表情を浮かべ、それぞれが元の位置へと歩いていく。

上条が呆れながら『作戦会議の内容は?』と問いかけると、エリザードは立ち上がり言った。

「ぎ、議題はフランスについてだ」

「フランス?」

「ユーロトンネルの事故が関係してるのか?」

「察しが良いな。その通り。五日前に起った爆破事故だ」

貴音の疑問に上条が再度確認を取ると、女王のエリザードは軽く頷く。

「イギリスとフランスを繋ぐ唯一の陸路であるユーロトンネルは、三本並んで海底を走っているはずなのだが、それが全部まとめて吹っ飛ばされた訳だ。私はこれを、フランス政府による破壊工作であると判断した」

「.....証拠は、あ・る・の・か・な?」

「あくまで判断であつて、確証はまだないだろうな。おそらくそのためにインデックスが招集されてるだろうから」

口を挟んだキヤーリサに上条が答える。

「証拠が揃い次第、『こちら側』から行動するんでしよう?　そもそも勝手な行動を取る

人も居そうですけどね」

「それは自分の事を言ってるんですか?」

上条がポツリと呟いた最後の一言に貴音が突っ込む。

そして上条は何かが分かったようにニヤリと笑うと、そのまま部屋を出ようとする。

「……どこへ行くんだい?」

「……ちよつくら散歩さ。そもそもインデックスが調査に向かうユーロトンネルの方には俺は行けないだろうしな。俺の場合、右手が邪魔だつて言われそうだ」

上条はヒラヒラと右手を振りながら扉を開ける。その背中に待ったをかけたのがインデックスだ。

「とうま。絶対危ない事しちや駄目だよ!」

「死なない男相手に何を言う。イギリスを観光してくるだけだつつの」

「それに、多勢に無勢になったら、零号解放すれば良いだけです」

上条達はケラケラと笑いながら廊下に出て行った。

東方神秘の幻想異境 N∴L∴

黄色のベンツSSKが街中を走っていた。

会議の様子はあの部屋に仕掛けた盗聴器から聞こえてくる。それをカーステレオで聞きながら、上条は隣に貴音を乗せて走っていた。

「しかし、本当なんですかー? 『騎士派』の連中が第二王女と組んでイギリスを変えようとしてるなんて」

「大雑把な解釈だけど大まかその通りだ」

「けど一体どうやって・・・」

「カーテナ」

「かーてな? ってあのエリザードが振り回してたあの剣ですか?」

「いやいや。あれはセカンドだろ?」

「まさか、オリジン原型が!?!」

「おそろくな。今あいつ等が話してるだろ? スコットランド地方で何らかの発掘作業って。確証は持てないらしいけどな。だが、俺の眼はごまかされない」

「全てを見透かす全知の眼と謳われる『神々の義眼』・・・相変わらず情報戦において

はチートな能力ですねぇ」

「そうでもねえぜ？ その場の過去・未来しか見えねえから不便っちゃ不便なんだぜ？」

「その問題も『透視』や『遠視』の組み合わせで解決するくせに……」

「あつはつはつ。違いねえ」

暫く彼らがのんびりドライブをしていると、上条達が走る道路脇の歩道を向かい側から小柄な女の子が走ってきている。

四角いカバンを三つも抱えて。

「ええつと、どれです、どれです、これですかっ!? これでしたっ!! くっそー、ちよつと持ち上げて重さを確かめればすぐに分かったのにっ!!」

早口の英語が良く分かっている貴音は上条の顔を見て判断する。『ああ。あいつは敵なんだ』と。

「ご主人……」

「……ん？ ああ」

上条はすれ違いざまに貴音の眼前に突き出した白銀の銃を発砲し、少女が捨てた四角いカバンを撃ち抜くいた。

その異変に気づいた少女がハッと顔を上げる。

ベントゥSSKを一八〇度回転させながら上条は再度銃を数発放つ。

「ちよつとやり過ぎでは!」

「いいや、ちよつとマズそうだ」

上条は飛び上がるようにフロントガラスを飛び越え、ボンネットに手をつけて前方に転がる。

? と貴音が首をひねった直後。

少女が車の側面に滑り込んでいた。

「あ?」

「文句はないですよね?」

少女はその『槍』の鉄のドアに突きつけていた。

ドアごと貫通し、貴音の腹を破るために。

「オツ……オオオ? ノオオおおおおおおおおおとおおおとおおおとおおおおおおおおおおおツ!」

貴音はインパネを蹴り飛ばし、ベンツSSKの後方——トランクの方へとつきに跳んだ。

少し離れた所で貴音が顔を上げると、少女がベンツSSKのドアを筆り取っていた。少女はそのままドアを振り回すと、振り下ろす。ただしそれは貴音に向けて、ではない。

ベンツSSKの前方……エンジンルームに向けて、だ。

凄まじい轟音と共に、ベントツSSKが爆発した。

「あああ……。SSKちゃん……。テメエゆるぎさん!!」

上条は車の恨みとばかりにカスール改造銃を少女に向けて乱射する。

少女はカバンを盾にしようとしたが、先ほど撃ち抜かれたカバンを見て、とつさに回避に行動を変えた。

「どうやらそのカバンが重要みたいだな」

「……ご主人？」

「エネ。あの四角いカバンが最重要アイテムらしいんだけど。ぶっちゃけ女の子ポコポコにするのはどうかと思うからさ。あれを集中砲火しようぜ？」

「いいですとも。あれも霊装の一種だしたら、ご主人の右手で殴ってみるのも面白そうじゃないですか？」

「よつよくぞこの短時間で私の弱点を見破りましたっ！ しかしここでやられる訳にはいかんです！ ベイロップに尻を握り潰されないためにも、ここは戦略的撤退をさせていただきます。とおうツ!!」

少女のスカートの中から伸びている『尻尾』を振り子のように大きく動かすと、少女は真上に飛んだ。

垂直跳びで三階ぐらいの高さまで上昇すると、ビルの窓を突き破って建物の中へと飛

び込んでいく。

「にやろお・・・」

上条はハイパーモードになると炎を全開にして、先の少女の追跡を開始する。

*

「ひいひいっ！ 何なんですか聞いていませんよ！ あんな男の事なんてっ!!」

少女は悲鳴に似た叫びを上げながらビルの中を走っていた。先ほどから彼女が行こうとする先に少年が現われる。額に炎を灯し、両手の炎で空を飛ぶ上条が。後ろからは貴音が追ってくる。

二人に挟まれて少女は行動が取れなくなった。

「・・・み、見た所、魔術師でもなければイギリス人でもないご様子。あなた様方は何故にこの私を追いかけていますかな？ ま、日本人街に住んでる移民だったらごめんなさいだけど、違うよね？ 匂いで分かりますもん。あなたはイギリスについて、それほど知っていると見えません」

「あなたが『新たな光』のメンバーさんですか？」

「大正解。『新たな光』のレッサーです。第零聖堂区と共闘している事といい、組織の

名前を知っている事といい……うーん。ただの一般人ならさっさと帰れと忠告したかったんですけど、この状況ってどうなんでしょうねえ」

「さあな。俺は事の成り行きが気になるから戦闘に参加してるだけなんだ。無事に届けられそうか？ 第二王女の元へ、カーテナⅡオリジナルは」

「……ッ!? な、何であんたがそんなこと知ってるんですか!!」

「あーた、そこは誤魔化せば良い所でしょうが……。何あつさりゲロっちゃつてくれるんですか……」

「ハッ!」

「気付くだろ。普通……」

「別にいいですよ？ 開いてくださいよ。そっちの方が楽しそうですし」

「……あなた達は一体……」

「暇人さ。長い、長い時を過ごして経験値を積み過ぎた、な」

y. その剣は戦と災厄を招く S w o r d | o f | M e r c

午前十二時。

日付の変更と共に、それは起こった。

例えば。

北部アイルランドにあるベルファスト、エニスキレン、ロンドンデリーなど各地の都市の病院や警察署などの主要施設が、大勢の警官や軍人によって封鎖された。彼らは『騎士派』あるいは『王室派』の第二王女派閥の息がかかった集団だった。一般人はただならぬ雰囲気屋内で脅えるか、好奇心に押されて野次馬になろうとした所を、警察に捕らえられたりしていた。

例えば。

スコットランドの独自通貨を製造している造幣局や、宗教的な拠点であるホリールー・ド宮殿などが、その施設を守っているはずの警備員や騎士達によって占拠された。ま

た、エジンバラのヨットハーバーで調査活動を行っていた元アニエーゼ部隊は、数で圧倒する『騎士派』の集団によって包囲される事になる。

例えば。

ウエールズにあるカーデイフ城、スウォンジール城、オイスターマウス城、コンウェイ城、ペンリン城、ボーマリス城、カナークオン城などの各種城塞が、『騎士派』の手によつて次々と陥落していった。地方議会や裁判所などは言うに及ばず、だ。

例えば。

イングランドの中心部、ロンドンとその近郊にも『騎士派』の手が伸びた。というより、最も『騎士派』が多くいるのは、イングランドだった。彼らは聖ジョージ大聖堂やウエストミンスター寺院といった宗教的拠点、バッキンガム宮殿や国会議事堂などの政治的要衝へと、次々と足を踏み入れていった。

「うわあ。そこら中『騎士派』の連中だらけですなあ」

「どうするんです？　ご主人。とりあえずあのうざいレッサーは眠らせておきましたけど」

「兵が多いなー。潰すか」

「まじやか？」

「そのまさか。宣言は任せませ」

「ええええええええええ!! マジでやるんですかあ!!」

貴音の悲痛な叫びはロンドンの街中へと消えていく。

*

「何?」

「テムズ川を。何か、さかのぼってきます!! 何か………!! 幽霊船が……」

!!」

「幽霊船……だと?」

かつて、ある吸血鬼が英国にやって来た。自らが渴望する、一人の女を手に入れるために。

その吸血鬼が乗り込んだ帆船は、霧の中を波から波へと飛び移り、ありえない速度で疾走した。

乗組員を皆殺しにしながら。そして遂に、死人と棺を満載した幽霊船はロンドンへ着

港した。

船の名はデメテル号。ロシア語でデミトリ号である。

槍袈の絵の前で集った彼らは、今こうして槍袈の前で再会した。

ロンドンの地を、白き騎士団が埋め尽くしていた。

その中央に空から降り立つ男が一人。上条当麻である。

大英帝国『王室派』 反キヤーリサ対 残存総兵力72名。

大英帝国『騎士派』 キヤーリサ親衛隊 残存総兵力2875名。

学園都市 独立行動隊 残存兵力2名。

降り立った上条当麻の目の前には騎士団長とアンデルセンが立っている。

「……………」

「……………」

「伴侶よ。我が伴侶、榎本貴音よ！ 願いを！」オーダー

上条が見える位置の建物の屋根の上に貴音はいた。

「我が伴侶、吸血鬼上条当麻よ。命令する。白衣の軍には白銀の銃を以つて朱に染めよ。

黒衣の軍には黒鉄の銃を以つて朱あけに染めよ。一木一草尽く我らの敵を赤色に染め上げ

よ！ 見敵必殺！ 見敵必殺！！ 総滅せよ 彼らを生かしてこの島から帰すな

！！」

「了解。認識した。我が伴侶」マイスイートハート

「拘束制御術式零号開放!! 帰還を果たせ!! 幾千幾万と共に、帰還を果たせ!!」

「——わたしは多くの魂を喰らいこの身に宿す冥界への導き手……」

その口上はイギリス中に響いた。

遠く離れていたイギリス女王にも、インデックスにも聞こえた。

その口上を聞いて一番慌てたのは、『騎士派』のヘルシング家の人間だ。

「マズイ! 河が来るツ! 死の河がツ!!」

「主への忠誠を誓い、たとえ解き放たれようとも……」

上条の口上に合わせ、棺が開いていく。

騎士団も 戦闘団も 皆、唯一人の男に恐怖し 唯一人の男に、己が矛先を向け突撃していく。

「ここにいる全てが感じたのだ。『恐ろしい事になる』と。この化け物を倒してしまわないと、恐ろしい事になると!!」

「必ず……舞い戻る」

「来るぞ。河が来る。死の河が!! 死人が舞い、HELL SING地獄が歌う!」

ズタズタのボロボロにされた上条当麻の影の中から大量のトランプが飛び出し、周りの人間を引き裂く。

「・・・No, IX。ジークフリード」

それに続いて銀色の鋼糸が周りの人間の首を次々ともいでいく。

「・・・No, VII。エクセリオン」

そして、それに続くように上条の血が、ロンドンの街に流れ出していく。まるで津波のように、全てを呑み込まんと襲いかかる。

「戦鍋旗^{カザン}・・・!! イエニ・チエリ軍団!! イスカリオテ!! 最後^{ミレニアム}の大隊。貴様はそんな

ものまで、そんなものまで喰ったのか!! 道理で死なぬはずだ。道理で殺せぬはずだ!!

奴は一体どれ程の命を持っている!? 一体どれ程の人間の命を吸ったのだ!?

「ワラキア・・・公国軍・・・!! お・・・お前は、お前は、自分の兵まで・・・ツ。自

分の家臣まで・・・ツ。自分の領民まで・・・ツ!! 何て奴だ・・・ツ。お前は何だ!!

化け物!! 悪魔・・・!! 悪魔^{ドラクル}・・・!! 悪魔^{ドラキユラ}・・・!! 何だ!! 何が…何が起きて

いる!?

「死だ!! 死が起きている!!」

天も無く、地も無く。人々は突っ走り、獣は吠え立てる。まるで彼らの宇宙が、一切合切咆哮を始めた様だ。

死ねや、死ねや。人間は、歩き回る陽炎に過ぎない。闘え 死ね。あとは全てくだらないものだ。死んでしまえばよい。消えてしまえばよい。

きつと彼らの全てが仇人で、世界がその絶対応報に 頭を上げたのだ。

血の海の中を歩きながら上条はバッキンガム宮殿を目指す。今回のことの発端がいる。その場所を。

今日はお休み　く雑談でもして過ごそうく

とある日の事。

貴音「あのーご主人？」

上条「ん？ どうした？」

貴音「ご主人って、結構厨二病じゃないですか？」

上条「……………」

貴音「ご主人？」

上条「いや、今ものすごいブーメランを見た気がして……………いや、そんな事よりだな。この超能力者の街で厨二病どうこう言われてもなー」

貴音「いやいや。いや？ ……ふむ、確かに。鳴神娘も『これが、私の、全力、だあーッ！』とか言ってますし。白夜さんも『全つ然、足りてねエ。お前、そんな速度じゃ100年遅せエつつつてンだよオ！』とか言ってますし」

上条「原作で一番痛いのが」

上貴「その幻想をぶち殺す!!」

空気「……………」

上条 「つて、俺のセリフじゃねーかつ!!」

貴音 「ご主人も言ってるんだから痛いと思ってるんでしょ？」

上条 「まーな。主人公が一番痛い子なのはラノベの王道っぽいし」

貴音 「そうじゃない主人公もいるかもしれないませんが……。大抵は痛い子ですよ」

上条 「俺はそうじゃない。と一概に言い切れないから困る」

貴音 「……私も、です」

空気 「……」

貴音 「間が持ちませんよ。ご主人！」

上条 「誰かゲストとかで呼んでみるか」

貴音 「え？ 呼べるんですか？ 学園都市の人間とか？」

上条 「バーカ。俺は幾千幾万（誇張）の作品の中を渡り歩いた男だぞ？ 前回の死の

河の時もそうだが、何か出てきちゃいけないのとか出てきたじゃん」

貴音 「ああっ!!」

上条 「何だよ。その『ヤベエ』みたいな『ああ』は」

貴音 「一応この回って前回までのまとめというか、考察的なのを話す回なんですよ」

上条 「思い切り最初から外れてたな」

貴音 「いやー、思い出してよかったです。このままだと本当に雑談で終わる所でした

よ」

上条「……………思い出さなかったらどうなったことやら。とりあえず、ゲスト呼ぼうか」

上条はそう言うのと足元の影に手を入れて誰かを引きずり上げた。

「Yahoo! ドモドモ。とうまの正妻登場だよ」

上条「……………」

貴音「アンタは正妻じゃないでしょうがツツ!! 愛人ポジがいいとこですよツ!」

「おお! 案外貴音も優しいネ」

貴音「だああああああ!!」

上条「頼むから自己紹介してくれ……」

こなた「ほいほい。改めて、当麻の正妻、泉こなただよ」

貴音「だから誰が正妻ですってええええええ!?」

こなた「私に決まってるじゃん」

貴音「私ですッ」

こなた「私だよッ」

上条「結局、今回の事の始まりはユーロトンネルの爆破事件にフランスが関与してるんじゃないか。だな」

たかこな 「ちよつ。勝手に始めないでよ!」

上条 「描写としてはなかったが、超音速旅客機のドアを開けて外を見てみたけど何もできそうになかったからやめたこともあったな」

こなた 「ね、ねえ当麻。な、何か怒ってる?」

上条 「? 怒ってないが?」

貴音 「ご主人。無視されるの辛いです」

上条 「あ、悪い。話を進めた方が良いかと思つてな」

貴音 「そうですね。では進めましょう」

上条 「それじゃ、イギリスに着いて最初は貴音の開封だったな」

こなた 「開封!? フィギアにでもなつてたの?」

貴音 「いえ……。超音速旅客機を拒絶してただけで……………」

こなた 「ぷふっ」

貴音 「今笑いましたね!」

上条 「バツキングダム宮殿に着いて、イギリス女王の新たな一面を知って、驚きの出会いを果たしたりしたな」

貴音 「……………ヘルシングの皆さんですね」

こなた 「ヘルシング……………」

上条「お腹が減るシングとかはなしで」

こなた「おおう！ さすが我が旦那。私の言わんとする事を当てるとは」

貴音「どーせ神々の義眼とかですよ」

上条「いや。普通にこなたの考えそうなのはわかる」

こなた「ほら！ ほーら。やっぱりわかるんだよ。うんうん」

上条「単純だから」

こなた「?!」

貴音「・・・・・・・・・・・・・・・・!!」ヒイ~~~~ヒイ

~~~~ヒイヒイ

こなた「むう。呼吸困難になるまで笑いやがって・・・」

上条「んで、場所を移して写真撮影までしたんだよな」

こなた「いいなあ、いいなあ」

貴音「・・・・・・・・!!」ヒイ~~~~ヒイヒイ

こなた「いい加減笑うのやめてくれるかな」

上条「んで、邪魔になるからってイギリス観光と偽ってSSKでロンドン走って」

貴音「レッサーさんに会ったんですよねー」

こなた「曲がり角で？」

上条「何そのギャルゲーみたいな出会いは」

こなた「ちつちつちつ。出“逢い”と書くのだよ」

上条「知ってるよ」

貴音「あながち間違つてはいないんですよ。まあ、違うと言つたら違うんですけど」

上条「それでSSKちゃんが……(ω・ω)」

こなた「うんうん。分かるよ分かるよ。大切なものが壊されると悲しいよね」

貴音「……私も同感です。つい今しがた大切な者に悪い虫がついてるんですけど」

こなた「それは誰の事かな？」

貴音「鏡を見たらどうですか？」

こなた「へ？　かがみん？」

貴音「鏡ミラーですよッ」

こなた「……要するに私の事だと」

貴音「ええ。そうですね。いい加減ご主人の事は諦めてください」

こなた「無理。当麻とは結婚までいったんだから」

上条「それで『新たな光』のレッサーと鬼ごっこをして、キヤリリサがカーテナの

原型を手に入れて、革命が始まった」

たかこな「また無視!？」



上条「そこから調子に乗った俺がエネに命じて零号開放して、今に至る。と」

こなた「当麻。無視はきついんだけど」

上条「あ、悪い」

こなた「もー気を付けてよね」

貴音（……あの二人何だかんだ言つて息ピッタリで仲良いんですよねえ……。

ウラヤマシイ。べ、別に寂しいとかそんなのではなくて……）

上条「……えつと。振り返り終わつたが、どうするんだ？」

貴音「あつ。そ、そうですね。とりあえず……、終わつておきましょう」

こなた「む。私の出番はもう終わりなのかい？」

貴音「残念ながら」

上条「それでは皆さん」

かみたかこな「「あばよっ！」」

## 争い終結！　すぐさま次の争いへ・・・。。。。。

死の河がイギリスの街を覆い、上条と貴音はカーテナを握るキャーリサの前に立っていた。

「よお。クーデター姫」

「その言い方は気に食わない」

「気に食うも食わないも、事実だよ。お姫様」

「さて、その馬鹿げた剣。ぶち壊してあげます」

貴音のその言葉の後、上条は即座に飛び出した。その牙を、カーテナに突き立てるために。

「くっ！」

何か言葉を発する暇がなかったのか、キャーリサはカーテナをふるう。それだけで爆発並みの衝撃波が四方に散らされ、物が吹き飛んだのだが、少年は気にも留めず突き進んでくる。

「俺を止めたきや。惑星で十字架でも作るこった」

そう言った上条はまず初めに彼女が持っていた通信機を壊しに行く。右手でカーテ

ナを狙うと見せかけて左手でカスールの引き金を引いたのだ。通信機には穴が開き、数メートルほどノーバウンドで飛んで行った。

持っていた腕に走る痛みにキヤーリサが顔をしかめると同時、彼女の体がふわりと浮くとそのまま地面に叩きつけられた。

「ガツ・・・・・・・・・・」

「相変わらずなんというか・・・・・・・・。容赦ないですね」

「・・・・・・・・容赦したら、こっちの命が危ないだろ?」

「人間の体の時は体に傷一つ入らないクセに何言ってるんですか」

上条は地面に転がるカーテナに近づくと、容赦なくその刀身に触れ、木っ端微塵に消してしまった。

「いやあ、初めて見たよ。死の河に、幻想殺しか。君は私が思っているより特別な存在のようだ」

「誰だテメエ」

「右方のフィアンマって言えばわかってもらえるかな?」

「なるほど、『神の右席』・・・・・・・・まだいたのか」

「本当にいい偶然だ」

フィアンマの右肩の辺りから、何か巨大なものが生えた。翼のような、腕のよう

な……この世の物とは思えない、不可思議な物質が。

「チツ、やはり空中分解か。我ながら扱いにくいじゃや馬を手にしてるもんだ」

「……なんか独り言言ってますよ」

「……しつ、見ちゃいけません」

「しかししかしいい偶然だ。俺はついているのではないだろうか。こんなところでダブルで手に入るんだからな」

フィアンマが攻撃動作に入ったのを確認した上条はその攻撃を左手で防ぐ。彼はその防いだ腕の間から、神々の義眼でフィアンマの鑑定を始めた。

「喉が渴いた。戻ってこいオマエラ」

上条がそういうと、赤黒い液体のような人の死体のような集まりが上条の体に吸い込まれていく。

「死の河が吸い込まれていく。なるほど、数百の命を持つ吸血鬼の復活か」

ならば、とフィアンマは手の中で何かしらの霊装を発動させた。

「それは、『自動書記』ヨハネのペンの外部制御霊装か」

「そうさ」

フィアンマがそういうと同時、上条達の足元からインデックスが飛び出してくる。

「安全装置……ねえ」

ポツリと呟いた上条の後方、バッキンガム宮殿の入り口辺りにはイギリス正教のメンバーなどが集まりつつあった。

そんな彼らに気付いているのかいないのか、上条は一冊の本を手に持っていた。

「・・・・・・・・なんだ、それは。どこから出した」

「俺の頭の中。そしてこの本の本体は・・・・・・・・エイボンの書。さ」

「魔導書の原典だどっ!？」

「あ。そういえばご主人。インデックスの魔導書全て頭に記憶してましたね」

「・・・・・・・・貴様は何でも持っているんだな」

「ほしいものは手に入れる性分なんでね」

「私もそうするさ」

フィアンマは第三の腕に命じ、その場に莫大な閃光を放つと、消えた。

「・・・・・・・・なにか、してくるな」

「くっそう。完膚なきまでに首輪は壊したんですけどねえ」

『『自動書記』の制御装置がああ首輪なんだろ。要するにあれが壊れたから外部制御に不具合が起きてるんだ』

「あ、私のせいですか」

心配して駆け寄ってくる仲間気付いているくせに、上条は爆弾を落とした。

「ま、今更インデックスが死のうが生きようが知ったこつちやねーが。あいつは気に喰わねえな」

「貴様ツ！ 何を言ってる!!」

「当り前さ。誰だつてそうだろう？ 足手まといや使い物にならない人材は必要ない。俺は俺の目的のために、インデックスが必要だったただけだ。そろそろ見えそうさ。目標が」

「………な、なにを言ってる………」

「関係ないんだよ。お前らにはさせて、そろそろあいつを追いかけるか。捕まえたらぶち殺す」

「………ご主人」

「ん。ああ」

上条は静かに振り向くと紅い、ファイアーオパールの瞳でその場の全員を見据えていった。

「んじや、アイツ追っかけてくる」

# 第三次世界大戦・神の右席『右方』編

## 善と悪、各々の入国 World War III.

そして、第三次世界大戦が始まった。

一〇月一九日は運命の日として、長く人々の記憶に留められる事になる。

どれだけ綺麗事が並べられていようが、どれだけその裏で『神の右席』が糸を引き、ドロドロとした思惑をを隠していようが、一度始まってしまった戦争はそうそう簡単には終わらない。

そして、上条当麻もロシアにいた。

一〇月下旬だが、すでに辺り一面は白い雪に覆われていた。数センチ程度の雪は交通機関を完全に麻痺させる事はなかったが、日本人が普段着で出歩くには少々堪えるものがあった。

戦争。

それは上条の心を昂ぶらせてやまなかった。空を飛ぶ戦闘機が、ミサイルが。地上を駆ける歩兵や戦車が。少年の目を輝かせる。

「——諸君、私は戦争が好きだ」

雪の中で上条は眩く。

「諸君、私は戦争が好きだ

諸君、私は戦争が大好きだ

殲滅戦が好きだ

電撃戦が好きだ

打撃戦が好きだ

防衛戦が好きだ

包囲戦が好きだ

突破戦が好きだ

退却戦が好きだ

掃討戦が好きだ

撤退戦が好きだ

平原で、街道で、

塹壕で、草原で、

凍土で、砂漠で、

海上で、空中で、

泥中で、湿原で



この地上で行われるありとあらゆる戦争行動が大好きだ

戦列をならべた砲兵の一斉発射が、轟音と共に敵陣を吹き飛ばすのが好きだ

空中高く放り上げられた敵兵が、効力射でばらばらになった時など心がおどる

戦車兵の操るティーゲルの八八mmアハト・アハトが、敵戦車を撃破するのが好きだ

悲鳴を上げて、燃えさかる戦車から飛び出してきた敵兵を

MGでなぎ倒した時など胸がすくような気持ちだった

銃剣先をそろえた歩兵の横隊が、敵の戦列を蹂躪するのが好きだ

恐慌状態の新兵が、既に息絶えた敵兵を、何度も何度も刺突している様など感動すら覚える

敗北主義の逃亡兵達を街灯上に吊るし上げていく様などはもうたまらない

泣き叫ぶ虜兵達が、私の降り下ろした手の平とともに

金切り声を上げるシュマイザーに、ばたばたと薙ぎ倒されるのも最高だ

哀れな抵抗者達レジスタンスが、雑多な小火器で健気にも立ち上がってきたのを

八〇ドcm列車砲ラの4・8t榴爆弾が、都市区画ごと木端微塵に粉碎した時など絶頂すら覚える

露助の機甲師団に滅茶苦茶にされるのが好きだ

必死に守るはずだった村々が蹂躪され、女子供が犯され殺されていく様はとてとても悲しいものだ

英米の物量に押し潰されて殲滅されるのが好きだ

英米攻撃機に追いまわされ害虫の様に地べたを這い回るのは屈辱の極みだ

諸君、私は戦争を、地獄の様な戦争を望んでいる

諸君、私に付き従う大隊戦友諸君

君達は一体何を望んでいる？

更なる戦争を望むか？

情け容赦のない糞の様な戦争を望むか？

鉄風雷火の限りを尽くし、三千世界の鴉を殺す。嵐の様な闘争を望むか？」

「「戦争!!」戦争!!」戦争!!」

「よろしい、ならば戦争だ

我々は満身の力をこめて今まさに振り降ろさんとする握り拳だ

だがこの暗い闇の底で半世紀もの間堪え続けてきた我々にただの戦争ではもはや足りない!!

大戦争を!!

一心不乱の大戦争を!!

我らはわずかに一個大隊、千人に満たぬ敗残兵に過ぎない

だが諸君は一騎当千の古強者だと私は信仰している

ならば我らは諸君と私で総力100万と1人の軍集団となる

我々を忘却の彼方へと追いやり眠りこけている連中を叩き起こそう

髪のをつかんで引きずり降りし眼を開けさせ思い出させよう

連中に恐怖の味を思い出させてやる

連中に我々の軍靴の音を思い出させてやる

天と地のはざまには奴らの哲学では思いもよらない事があることを思い出させてやる

「ヨーロッパだ! ヨーロッパの灯だ!」

「千人の吸血鬼カンブグルツベの戦闘団で世界を燃やし尽くしてやる

そうだ。あれが待ちに望んだ欧州の光だ

私は諸君らを約束通り連れて帰ったぞ。あの懐かしの戦場へ、あの懐かしの戦争へ」

「少佐殿! 少佐! 代行! 代行殿! 大隊指揮官殿!」

「そしてゼーレーヴェはついに大洋を渡り丘へと登る

ミレニアム大隊各員に伝達、大隊長命令である

さあ、諸君

地獄を創るぞ」

一通り喋りきった（振り付きで）少年は影人に囲まれながらやりきった感を出していた。

「……何、してるんですか」

「何でも良いだろ？　というか、なんでレッサーがここに居るわけ？」

上条は後ろを振り返ってそう問いかける。ズルズルと擬似死の河状態だった観客を自らの中にしまい込む彼は自分の後方にいる少女の返答を待つ。

「んー？　別にイギリス王室から命令を受けているとか、右方のフィアンマとやらに恨みがあるとか、そういう意図はないんですけどね」

レッサーは自慢の『尻尾』をヒュンヒュンと軽く左右に振りながら、極めて適当な調子で答えた。

「ただ、あなたがここで死んでしまう事が、イギリス全体にとって不利益となるのであれば、我々としてはサポートした方がよいんじゃないかな、と考えまして。……我々って言っちゃって大丈夫かな。ベイロープのヤツに尻を鷲掴みにされないかな……」

「……ハア」

上条はため息をついてオリハルコン製の裝飾銃ハーデイスを取り出しながら、

「要するに、戦力になりに来たって事だろ？ 必要ねーよ」

疑問の声を上げるレッサーに上条は銃を撃つ。レッサーの肩の上を通った銃弾は一キロほど離れたところにいた兵隊の胸を撃ち抜いていた。

「・・・なっ。ええっ!？」

「さて、気づかれた。死にたくなきゃ逃げろよ」

「へ？」

遠く離れた所から銃撃が開始される。近づけなければ当たる確率も低くなるのだが、上条の狙撃によって向こうも彼の射程を測りきれていないのだろう。

「わっわわわっ!!」

「死にたくなきゃ逃げろって・・・」

上条はため息をつきながら全員を戦闘不能にする。

「いいから帰れ。お前は足手まといだ」

上条はグローブもなしに死ぬ気の炎を両手にともす。

「喰らえ。XBURNER!!」

上条の左手から高火力の死ぬ気の炎が放たれた。ロシアの雪を溶かし、軍の兵を一掃する。

「さて、ここもそろそろヤバいな。移動を開始するか」

## 侵攻と逆襲の幕開け    Angel Stalker.

上条は迷いも無く雪原を歩き続け、迷いも無く雪で出来た空洞に体を滑り込ませた。

「きやあく雪で足がく」

「うるさい。邪魔」

何故かついてくるレッサーがわざとらしく抱きついてきたりしたので上条は払いのける。

「きや」

レッサーが尻もちをついているようだが、上条は気にせず空洞を進んでいく。

(む。これは以外と難しいですね)

内部には列車の線路が走っていた。平行するように日本の路線が奥の奥まで伸びている。

「資材運搬用か。魔術も魔術の方で力業使って隠してるな」

貨物列車が止めてあったのでそれに乗り込む上条。

「ちよ、ちよつとちよつと。何してるんですか?」

「本拠地に移動するために、定時で動くの待つんだよ。お前も見つかるとマズいから乗

るなら早く乗れ。荷物に混じって移動するぞ」

「あ、はい」

上条達に乗って暫くすると、上条達に乗る貨物列車が動き出した。

「それにしても、何故私を乗せたんです？ ついてくるなど言っておきながら」

「お前が見つかるとなし崩しの俺も見つかると言うが。面倒くさいんだよ、そう言うの。．．．今ここで骨も残さず消せば楽なんだろうけどな．．．」

「え？ じ、冗談ですよね」

「ん？ 俺何か言ったか？」

「え。いや、何でも．．．．．」

暫くのんびり貨物と一緒に揺られていると、貨物列車の速度が落ちてきた。

「さて、降りるか」

上条は至って冷静に言うとそのまま貨物庫の扉に近づいていく。少しだけ扉を開けて、レッサーが人目を盗んで列車を降りたのを確認すると、上条は隠れもせず普通に降りた。

「．．．なつ。何をしてるんですかーっ!? ．．．」

「良いからお前は隠れながら向かえ、俺は大丈夫だ」

上条はまるで誰にも気にされず歩いていく。そのまま出口を通って外に出ると基地

に着いたようだった。

「さて、さて……。ファイアンマか、アイツの手がかりでもあれば良いんだけど」

スタスタと上条は止まる事無く歩いていく。ここまで誰にも見つかつていないのだが、レッサーにはそのからくりが分からなかった。

が、とある扉の前で上条の姿が消えた。先程までそこに居た人が忽然と消えたのだ。

（まさか、これが!? 人から完全に視認されなくなる術式とでも言うんですか!?)

慌てて扉の中を覗いても、上条の姿は見えなかった。見えたのはファイアンマの姿だった。

（いきなり大本命に当たったんですか……。）

「必要なんだよ。ここは『空間』だ。座標と容積、その両方が重要って訳だ。ロシアの宮殿なんぞに興味は無い。玉座に座るのに憧れているだけなら、わざわざ聖ピエトロ大聖堂を吹飛ばす訳がないだろう。俺様にとって、ここはモスクワより重要なんだよ。若干、情勢を知るのにラグがあるのは問題だがな。それでも、計画を進める上でこの場所は外せんよ。『プロジェクトⅡベツレヘム』という観点から考えればな」

「『プロジェクトⅡベツレヘム』う? ンだよそりゃ。お前さ、一体何のために戦争起こした訳? やっぱり神様になりたいから。とかそういうくだらない理由な訳?」

上条の言葉が扉の向こうから響いた。レッサーは全身から変な汗が噴き出て、ファイ



ンマは怪訝な顔で辺りを見回す。

「その声は幻想殺しか。どこに居る?」

「お前の隣さ」

そういう上条はインデックスの制御霊装を左手で握っていた。

「残念だったな。それを持つ余裕があつたのなら右手で触っておけば良かっただろうに」

「壊したらお前と遊べないだろ? 何ならお前等も遊ぶか? さっきから殺気が凄いん

だけど?」

「無駄だ。お前達、止めろ。コイツに魔法も実弾も効かん」

「あら。よく知ってるじゃん。ほら、右方のフィアンマ。遊ぼうぜ」

謡うように言った上条はフィアンマに蹴りを入れ、雪原まで吹き飛ばした。

「へえ。素直に吹き飛ばされてくれるとは。嬉しいぜ?」

「馬鹿言え、全く避けさせずに吹き飛ばしたのは貴様だろう」

「あれ? そうだっけか?」

「そうさ」

「来いよベネット。銃なんて捨ててかかってこい」

「?」

上条はネタが通じなかった事に肩を落とす。が、すぐさま元気になると言った。

「そう言えば、お前は俺が記憶喪失なの知ってたな」

「ん。ああ、そうだな」

「そのせいで俺は能力に制限が付けられてるのは分かるか？」

「・・・ふむ。記憶がない事による自分の能力への知識不足か」

「その通り。だけどさ。使う内に体が覚えてるんだろうね。結構使いやすい武器になってきたんだよ。だからさ、試させろ」

「良いだろう」

「後悔すんなよ？ 俺は重力魔術師だからな」

体のリミッターを外されている上条は関節の制限がない。つまり、*“愛気”* 道の技を使うのは全盛期のままに使えるという事だ。

その頃。遠く離れた場所でエネが首を傾げていた。

「はて？ ご主人にG・マジシャンの事を話した事はありましたっけ？」

そして、上条のフィアンマの攻防は上条が一発入れるまでにフィアンマが十数発。そこだけ聞けば、上条の方が劣勢に聞こえるが、フィアンマの攻撃は上条の体に全くのダメージを与えないのに対し、上条の攻撃はいとも容易くフィアンマの体にダメージを与える。

要するに上条当麻の優勢で事は進んでいた。

「つまんねーなー。つまらん、もし『退屈』や『暇』が売れたら大分商売になると思うぜ。俺は今在庫一斉処分セール並みに格安で売るけどな」

「あの一少年。この子でいいんですか？」

「おう、良いぜ」

上条がそう言つてレッサーから受け取つたのはサーシャークロイツエフだ。

「貴様・・・何のつもりだ」

「一度そつちにやるよ。言つたる？俺は退屈してるんだ。だからさ・・・その子を持つて俺を楽しませてくれよ」

フィアンマは上条のその言葉にふつと笑うとサーシャを掴んで、上条に背を向けた。

「簡単には死ぬなよ」

「吸血鬼<sup>神</sup>の王<sup>上</sup>にして魔神<sup>統</sup>に向かつて言つてるって事を分かつてるのか？」

ここからが反撃の時 Heroes Congress  
t e .

「……アンタ。そんな性格だっけ？」

「あん？ 前方のヴェント……お前、生きてたんだな」

「本意ながら、なるべくアンタとは会いたくなかったんだけど……。どうしたの、あんな簡単に、しかもカギを渡しちゃうなんて」

「何だろうな。俺の、記憶に内部分から『ごうしろ』『ごうしろ』って声が聞こえてくる気がしてな。さて、そろそろ鬼ごっこの再会と行こうか！」

「一つだけ聞かせて欲しい」

「……んだよ」

「アンタは、何がしたいの」

「上条<sup>オレ</sup>当麻<sup>レ</sup>の目的は昔も今も変わらない。俺の大切な人を助けるのさ」

「それって禁書<sup>インデックス</sup>目録のことかい？」

「インデックスう？ 残念だけど違うさ。それと、悲しいけどこれ、戦争なのよね」

「……何当たり前の事言ってるの」

「じゃあ最後にフラグ立てていくわ。俺、この戦争が終わったら結婚するんだ！」

「「「ちよ、それ死亡フラグ!!」」」

そう言い残し、上条は雪原を駆け出した。

・  
・  
・  
▽

「さっきも言ったけどさ。暇が売れたら大分儲けが出ると思わねえ？」

「・・・まず暇を買い取ってくれる人がどこに居るのかな。それと、戦時中にそんな事を口に出れるって、やっぱりとうまはおかしいよ」

「そうかー?」

上条は泉こなたと雪原を歩いて居た。移動中の話し相手に上条が選んだのだった。エネをとある用事で連れて歩けない状態の上条は先程より、命のストックから『誰か』を引き出して話し相手になっている。

そんな彼の目の前を、岩が高速スライドしていった。

寒さを感じる事のない命の影のこなたが、セーラー服のスカートを押さえている。

「な、何？」

「お客様だぜ」

そう言つて上条が見る方向には、黒い何かがうごめいていた。

「なんでそんな事になつてんだよ………白夜」

咆哮とともにさらに広がった翼は、壮絶な武器となつて上条の頭上へと振り下ろされる。

轟音が炸裂した。

「うるせー」

左手で耳を塞ぎながら上条は言う。その右手で漆黒の翼を吹き散らして。

白夜が笑つたのが上条も遠目で分かった。

そして、横薙ぎの一撃が振るわれる。

(っ。消せるか!?)

速攻でその一撃に右手を合わせた上条だったが、バランスが悪かったのか少し横へ揺らぐ。

「次は恐らく……圧倒的物量と威力で潰しに来る……!」

上条がそう覚悟した瞬間。その通り、絨毯爆撃のように黒い翼が降ってきた。

(ヤバっ! 右手一本でどうにか出来るか! やるつきやねえ!)



本場の激突が始まった。

白夜が取った行動はシンプルだった。

背中から生えた漆黒の翼を、二本とも上から下へ振り下ろす。

それで、上条の視界は土砂で覆われた。

(なーるほど。俺を土砂で潰そうってか)

上条が取った行動もシンプルだった。

正面突破。振ってくる岩を体に受けながら、その吸血鬼としての驚異的な再生能力で突き抜ける。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おつっつっつ」

二つの叫びが重なった。

上条の拳は白夜には届かない。

だが、その眼前の空気を叩き潰し、爆発的な衝撃波を生み出した。

その威力に白夜の体は吹き飛ばされ、振るわれた黒い翼の軌道が変わり上条も吹き飛ばされた。互いが雪の上から素早く起き上がり、それぞれが距離を詰めるために拳を握って最短距離で突撃していく。

「何でだよ!! 何で誰もあのガキを助けてくれねえんだよ!! お前はヒーローだろオが





ざけるんじゃない。んな位置に立つてなきや、誰も助けちゃいけないのか!! 目の前で泣いてほしくない人が泣いてるんだ! 助けてくれって一言を言う事も出来ずに、唇を噛んで耐えている人がいるんだ。それだけで十分だろ? 立ち上がって良いだろ!

特別なポジションも理由もいらねえ。それだけあれば、もう盾になるように立ち塞がったって構わえだろがよ!! お前が何を守りたくて、どんな風に傷ついてきたのかなんて詳しい事は知らない。だが、打ち止めを守りたかつたんなら胸を張って守れよ!! 今の時、守りたいって思える事を誇りに思えよ。お前の人生だろ? お前が決めるよ!

自分の手で守りたいんならそうすれば良いし、見捨てたいんなら全部持ち去ってやる。だがな、おまえ自身は何をどうしたいんだよ!! 本当にそれで良いのかよ!! 大して知りもしない人間を勝手に持ち上げて、そいつに自分の一番大切なものを預けて、それで全部満足できんのかよ!!」

白夜の攻撃が上条に直撃する。が、先程と同様、右手だけでなく、左手が攻撃を防いでいた。

「お前が選べよ……。このままお前の手で守り続けるのか、他人俺に全部預けて逃げるのか、それとも俺の手を借りて協力して欲しいのか!! 傲慢だろうが何だろうが、おまえ自身が胸を張れるものを自分で選んでみるよ!!」

上条の拳が、白夜の顔面を捉えた。

その時白夜は見たのだった。上条の左手首。星のようなモノが輝いていたのを。

「………さて。じゃあやりますか」

上条はフラフラとした足取りで打ち止めに近づきその側にしゃがみ込む。

「こういう事は貴音の方が得意だろ………なのに」

「私はご主人からやり方を教わっていたので、ご主人の方が上手いはずですよ！」

「あんな事言うんだろうか……」

上条はとりあえず風邪を引いたようになっていいる打ち止めのおでこに右手を当てる。

それだけで、表面的に現われていた症状<sup>幻想</sup>の知識が頭に入ってくる。

(えーっと。禁書目録の知識と照らし合わせて………、あーもうこの力アレイスターとかエイワスとか関与してるだろ！　じゃあ、えーっと……エイムの超能力・科学知識も借りて……それで………)

エネが魔術の解析をする方法が上条と同じなら、上条の能力を使って同じ事をしていくはずだ。つまり、彼が記憶を失う前はどれだけ万能だったのか、と言う話になってくるのだが。

(………あー。これはインデックスに任せてみるか。科学の方は経験で何とかなつたが、魔術は無理だ！　こんな精密に生命活動を維持させたまま魔術を消すとか不可能

だろっ!」)

「大丈夫。私達は信じてるから」

「絶対帰ってくるんだぜ。バカ当麻」

「安心しなさい○○○○。当麻は誰よりここを愛しているから」

「行つてらっしゃい。当麻、お姉ちゃん」

「………ッ?!」

上条は突然脳裏によぎった見た事ない映像に、思わず右手を離しかけた。

(……な、んだ……? 今の……神社? 魔女? コスプレ? これが……エネが言っていた俺の故郷……? 俺の目的……?)

上条はとりあえず気持ちを落ち着かせると、紙に『Index—Librorum—Prohibitorum』と書いて立ち上がる。

「責任転嫁……になつちまうな。この、白夜の願いを叶えるためには、インデックスを無事に救わなくちゃならなくなつたわけだ……。あー面倒くさい」

## 展開される本物の闇 Up\_the\_Castle &amp; Battleship.

いつの間にか上条はフィアンマの秘密基地の近くまで来ていた。

「さて、突入したいわけだが。どういう事か周りに人も居なければ迎え撃つ気配もない。何故だ？」

『ん？ 決まっているだろう。重要な右腕を持ったお前を招くためだよ』

「あらそう。お招きありがとう」

上条はそう言うと、小麦粉で練られた小さな人形を右手で壊す。

そのすぐ後だった。上条の視界が揺れた。地面が爆音を鳴らす事によって。

「は？」

その時上条の携帯が着信音を鳴らす。相手は貴音だった。

「どしたア！」

『ご主人大変ですっ！ 世界中の教会から何か色んなもんがロシアに向かって飛んでい

ます！』

「はい!?!」

『恐らく右方のファイアンマの術式よ！ ロシアで何かするつもりなんだわ！』

「予想は的中して訳か。エネ、準備の方は？」

『バツチリです！』

「ならよしー！」

上条が頷いた瞬間。ゴツ!! という轟音が上条の真下から響き渡った。

その事に気づいたときには、すでに上条の体は宙に浮かんでいた。

今まで立っていた雪の大地に持ち上げられて、そう錯覚するほどに。地盤を大きく崩すように、上昇する。

「うっはwww これが『プロジェクト||ベツレーム』か!？」

さらに加速した地盤は、霧のようなものを通り抜け、青空が見える場所まで出た。

「おおうー！ 雲の上じゃねーか！」

上条は目の前で更に膨張・構築を続ける巨大な要塞の前に、携帯を見つめる。ものの見事に圏外だった。

「貴音エ!! ヤツを発進させろ！ てめえがメンタルモデルのアイツだ！」

(は!?! ご主人正気ですか!!)

「良いから。こんな巨大なのを落とせるのは……次元波動爆縮放射器しかねーからよ！」  
そうやって叫ぶ上条は、いつの間にか古めかしい室内に居た。それと同時に、エネとの

念話も切れる。

そんな上条の耳にノイズ混じりの音声が届いてくる。

『準備していたのは、巨大な霊装や施設などではない。コイツを組み上げるための空間だ』

「……は？ 何なんだよ」

『……では、歓迎しようか。俺様の城「ベツレヘムの星」へ』

「世界一嬉しくない歓迎だぜ」

上条は苦笑いをする外を見る。見る限り学園都市製の戦闘機が飛んでいる。

『天使の媒体サーシャ・クロイツェフ。一〇万三〇〇〇冊の遠隔制御霊装。儀式場のベツレヘムの星。そして俺様の力を振るうに相応しいお前の右腕。必要なものは全て手に入れた事だし、そろそろ脇役にはご退場願おうか』

「……何する気だ」

『出撃だ、大天使「神の力」<sup>ガブリエル</sup>。全部吹き飛ばせ』

その言葉の後、世界が夜へと変じた。

一瞬にして黒く塗り潰したような夜空へと変質していた。

「夜……。吸血鬼<sup>ヒトクサ</sup>の時間か」

『いいや、この場合はミーシャ・クロイツェフと呼んだ方が良いのかな？』

「どっちも正しいんだろ？ 魔術の事はよく知らねーけどよ」

上条は呆れ気味に言う。

（ま、もつとも「御使墮し」を基にしてる時点で安定してないんだろーけど……。だが相手は天使。科学サイドはどう出るか……。まあ一番の要はエネがあれを動かしてくれるかだな）

——学園都市第二十三学区。

「システムオールグリーン。口号艦本イ400式次元波動缶異常なし」

「発進準備、すべて完了」

「上部ハッチオープン」

突然、二十三学区の滑走路の中で何かが動くような感覚と同時に、接続ボルトが抜かれた地面が左右に開いていく。

「ドック上昇」

完全に開いた地面の下から、巨大な鉄の塊が固定された状態で第二十三学区に出現した。

『理事！ 学園都市第二十三学区に巨大艦を確認！』

「船……だと？ 陸にか!？」



「補助エンジン、始動」

巨大艦、そう呼称されたその船の後方、巨大な穴の下に開いた二つの穴から大出力の炎が吹き出し始める。

「続いて第一、第二フライホイール、接続」

巨大な船の後方から音が鳴り始める。巨大なエンジンが回転するような音が。

「ガントリールロック解除」

巨大な船を固定していたロックが外れ、後方に噴射されていた炎の推進力で船が前進し始める。

「BBY—01発進」

「口号艦本イ400式次元波動缶接続！メインエンジン点火！」

巨大なノズルが火を噴き、巨大な船は加速する。

「安定翼展開」

「あ！こ、これは……！！」

同時刻。その船は全国で確認された。日本は特に学園都市の監視と称し、常日頃から学園都市の生中継を行っていたのだが、それに映されたのだ。その船が。

そしてそれを見た者は興奮するものが大勢居た。

それは学園都市の科学力を持ってしても再現不可能とされ、建造がされなかった夢の

船。

正式名称を『型式番号B B Y—01恒星間航行用超弩級戦艦』

通称を

「ヤマトだ……。宇宙戦艦ヤマトだ……。！」

——ヤマト内部

少女、エネは次元羅針盤の上に座っていた。

「目標、高度三〇〇〇メートル。ロシアに浮かぶベツレヘムの星。見てなさい。邪魔するヤツは全部食い破って直進してやるから」

「……。相変わらず過激だな。エネは」

「それがたかねの良いところだと私は思うけどネ」

第一艦橋にはエネを含めて三人居た。

戦闘指揮席には比企谷八幡。コスモリーダー受信席に泉こなた。

上条の友人と、(自称)嫁がそこに居た。

「しかしベツレヘムの星……。ねえ」

「無法のビアンカも何しようとしてんだらうね」

「右方のフィアンマな」

「あ、そか」

「あのふざけた浮遊大陸に原作通り大砲をぶち込んでやりましょう！　．．．だから邪魔すんな蚊蜻蛉共!!」

半ギレ状態のエネがメンタルモデルの力を使って99コスモ式モファル空間戦闘機コロンを操り、ロシア軍の戦闘機を撃ち落としていく。

「うわ酷エ」

「本当に虫みたいだネ」

天空に皆殺しの天使 M I S H A | t h e | A n g e l

“ G A B R I E L ” .

叫び声が聞こえた。

人間のものではない。

もつと異質で、人間の心の中へと抵抗なく滑り込み、否応なく感情を揺さぶってしま  
う咆哮。黒板を爪で引っ掻く音より拒絶したいのに、それを拒絶する事すらももの凄  
い罪悪感の伴う、受け入れ難く切り捨て難い不可解な叫び。人間の声帯の限界を軽く突  
破したその声が、墨汁で塗り潰したようなような夜の戦場へ響き渡る。

天使。

神の力

ミーシャークロイツェフ。

「お、おいおい．．．止める．．．止めるバカヤロオオオオオオオオオオオオオオオオ  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
お!!!」

上条の咆哮に天使の攻撃がほんの僅かだが止まった。すぐに攻撃が再開されたので、気づいたものは少ないだろうが確かに一瞬止まったのだった。

「理性はあるのか……？ 一回念話をやってみるか！」

「オイこらミーシャ！ テメエ今度は何だ!!」

「……そ、そう怒らないでくれ。こちらも気が立っていたんだよ」

「……気が立ってたア？ だったらフィアンマに当たれよ！」

（命令にないんだな。これが）

（アイツ全部嘖き飛ばせって言っただろ。こつちも吹き飛ばせよ）

（無茶を言うな。止めて欲しければ……）

「……フィアンマを、か」

（早くしてくれよ）

「……ハア……。よし殺そう♪」

笑顔の状態でキレた上条は右手を使って近くの壁を壊しながら、フィアンマが居るであろう方向へカンで進んでいった。

「……？」

とりあえずで上条がたどり着いたのは、礼拝堂のように長いすが並べられた空間だった。

「——ッ！」

移動を開始した上条の真横、脇腹辺りめがけて体当たりをしようとする影が現われた。完全な死角からの攻撃。相当訓練された人間でも、この体当たりは受けてしまうそんな攻撃だ。

だが、

上条当麻は普通の人間じゃない。

彼は反射的にその影に手を伸ばし、とりあえず肉体に触れる。そこから体の支点となる部分へ手をスライドさせて浮かせる。

「——悪いな。誰か知らんが俺の前に出たって事で、勘弁せいや!!」

その場に稲妻のような軌道が残り、突撃してきた人物が地面に叩き付けられた。

「ふう……。疲れてもないけど息吹いちやうの。……。あ、コイツ……。サーシャックロイツェフじゃん」

「……。第一の質問ですが、あなたは何故私の名前を知っているのですか?」

眼を回していたと思っていた少女、サーシャから質問があった。

「前に一度会ってるから。とは言っても、お前の肉体と入れ替わった、今暴れている天使と会っただけであって、直接的な面識はないだろう? だけど一応天使との対決の時に

土御門元春……。俺の友人からお前の名前を聞いてた。だから知っていたって訳だ。ち

なみに会ったタイミングは八月の終わりね」

上条は何も気にせずにべらべら喋る。何故そこまでするか、そこに絶対的な自信があるからだろう。「自分が負ける事はない」「例え手の内がバレても負けはしない」なんて自信が存在するから彼は余計なお喋りが多かつたりする。

そんな上条を前に何かを考えるようなサーシャを放つて彼はグイグイ進む。

「あ、そうだ。おまえどつかから逃げてきたんだろ？ 儀式場まで案内してくれよ。そこに俺がぶつ壊したいものがあるはずだからさ！」

「第一の解答ですが「やっぱダメか！ そりやそうだよな。逃げてきたのにそこに連れてけなんてイヤだよな！ でもどうしておまえは逃げれたんだ？ ファインマはおまえが必要ないとみてわざと逃がしたようにも思えるぞ・・・」

「あの「それに俺みたい那不審人物と一緒にイヤか。そうか、そうだよな。スマン。じゃあ俺一人でアイツをぶつ殺してくるわ」

「ちよつと待つてくださいい!!」

「・・・なに？ 上条さんは今落ち込んでるんですか？」

「その原因は私ではなくあなたの自己解答自己完結によるものです！ それと、別にあなたを儀式場まで案内する事に反対はありません。ただ、がむしやらに逃げてきたので」

「場所が分からない、と」

上条はガシガシと頭を乱暴にかくと、神々の義眼を開いた。

「全く最初からこうしてれば良かったんだ。そうすれば面倒な事にならないですんだのに」



## 彼らの多角的な攻撃 Combination.

低い振動が断続的に続いていた。

地上の攻撃の振動が宙に浮かぶ『ベツレヘムの星』にまで届いているのだろう。

「……まだ上がってるのか。コイツは」

石造りの通路を軽く流しながら、等間隔に並ぶ窓の方に目をやって上条は呟いた。

上条が見つめる窓の外には高度が表示されている。床に目をやれば材質や産地、要らない情報まで表示されている。それもこれも神々の義眼のせいだった。

見たくないなら閉じれば良いだろう。そう誰もが言う。

だが今の上条は違う。

閉じれないのだ。見たくないものも直視しろ。と言わんばかりに神々の義眼は辺りの情報を上条の脳に叩き込んでくる。目を閉じても透視で見えるので、上条はもう気にしない事にした。

「これ……か？ モノレールだな」

「第一の解答ですが、まさか私が走ってここまで来たど？」

「イヤ思っちゃいねーけど、まさか魔術的なものじゃなかったとは……」

言いながら上条はモノレールに乗り込んだ。  
それにサーシャも続く。

「しかし現代的な乗り物だねえー。やつぱり人間は便利な科学に手を伸ばすのかナ？」  
「第一の私見ですが、あなたは口調が安定していませんようです。大丈夫ですか」

「・・・多分大丈夫。さつきからちらほらと見た事ない景色を見てるんだ。失われたはずの記憶を、世界中から欠片を集めてパズルを完成させるように、ゼロから俺の記憶が作られていつてる気がしてならねえ。思い出せるかも知れねーんだ。貴音との過去も、俺のこの旅の目的も」

「第一の質問ですが、それは良い事なんですか？」

「さあ？　だけど、思い出せたらそれは良い事だと思う。何かこう、今までこの世界で作ってきたものが喰い殺される気がしてならないけど・・・」

モノレールから見えた景色。

そこに上条は戦場には必ずある物を見つけた。

尻から炎を出して空を飛ぶ、

「地对空ミサイル・・・ッ!?!」

エネが使う『モード』ウラヌスクイーン『空の女王』。その永久ア追尾ル空対空弾テなら何とかなるのだろうが、生憎彼女はこの場にいない。

「・・・死んだな♪」

「第二の解答ですが諦めるのが早すぎでは!？」

「だってどうしようもねーもん」

完全に諦めモードの上条達のすぐ側で、爆裂音が炸裂した。

モノレールのガラスがまとめて粉々に砕け散り、車内に突風が入り込んでくる。

「うっは♪ ありがとなー! 愛してるぜミーシャちゅあく〜ん!」

上条が口にしたとおり、ミサイルは直撃していなかった。

大天使ミーシャークロイツエフが撃ち落としていたのだった。

そんな彼女(?)は現在、上条達が乗るモノレールに速度を合わせ並走していた。

そうしている間も天使は科学技術の結集であるミサイルを落としていく。

が、

上条<sup>右手</sup>に気づいた途端。

反射的にその翼を振るってきた。

ゴツギイイイイ!! と、岩と岩をぶつけるような凄まじい音が炸裂した。

それはミーシャークロイツエフの攻撃ではなかった。

横から割り込んだ何者かが、猛烈な速度で上条の拳のような飛び蹴りを放ち、ミー

シャークロイツエフを吹き飛ばした音だ。

「だつ、第二の質問ですが、一体何が………ッ!?」  
サーシャが呻くような声を出す。

大天使なんてものへ有効打を加えられる存在なんて、上条<sup>ま</sup>や貴音<sup>と</sup>みたいな<sup>な</sup>の<sup>の</sup>しか<sup>が</sup>ない。しかも、ここは高度五〇〇〇メートルを超える高空だ。こんな所までやって来れる事自体、普通の人間じゃ無理なはずだ。

しかし、上条には心当たりがあつた。

『聖人』すらも圧倒する、魔術的な天使であるミーシャークロイツエフと、こんな所で戦闘を出来そうな存在を。

それは科学によつて作られた存在。

AIM拡散力場の集合体。

紫電を撒き散らす、数十の翼を背中から生やしている者。

「……エ、エイム………ッ!」

モノレールの速度によつて吹きすさぶ烈風の中、上条はその名を叫ぶ。

(あいつ、何でここに………ッ!?)

上条の疑問は解消される前に目の前から消えた。モノレールが暗いトンネルの中へ突入していたからだ。

「………チクシヨウツ!! こうなつたらこの大陸ごとあの天使を落としてやる!!」

「だ、第二の質問ですが、一体何をやる気へブツ！」

▽

エイム。そう上条によつて名付けられた科学の天使は、目の前にいる魔術の天使に対して猛烈な殺意を抱いていた。

(コイツは……止める。生かして動きを止めて、地上を守る!!)

天使同士が激突した。

▽

空気が振動し、衝撃波で地が揺れる。そんな空間震とは別に、戦場を荒らす者がいた。その主砲はサーベルのように地を引き裂き、本来発煙目的の煙突から地上にミサイルの雨が降る。

ヤマトとその乗組員は、ある程度地上へ攻撃を加えながらロシアを北上していた。

▽

天使は止まった。

フィアンマの命令を聞かなくなった。いや、動けなくなった。

「……………効いてるみたいだなア……………強制的にあなたの存在を希薄にしますマツサージの開幕だああああああああああああああああああああ!!」

上条はヒヤッハー☆とか叫びながら儀式場にある直径三センチぐらいの柱を次々と破壊していく。

そして。

後方のアツクアに力の総量の半分を削り取られ。

上条当麻に存在を支える根幹を破壊され。

学園都市が生み出した最強の超能力者と科学の天使の猛攻を受けたミーシャ・クロイツェフは……………。

「……………おっしや。ここまで大きくなるとは思わなかったが何とか出来たな」

上条は独りごちていた。天使の対応に追われ、フィアンマを探すのを忘れていたのだ。

だが、幸運にもフィアンマの方からやってきた。

壁が破壊され、破壊の渦が飛んできた。フィアンマの右の一撃だ。

上条は自分の意思で対応はしなかった。白夜との戦いと同様、左手が勝手に防いだからだ。

「面倒な事をしてくれたな」

「……そうか？」

「ああ。おかげで学園都市やイギリスから邪魔が入る前に儀式を執行する必要が出てきた。という訳で、そろそろその右手をいただこうか」

「そう言われてハイそうですかかって渡すと思ってるのか馬鹿野郎」

「良い事を教えてやろう。正しい力とは、正しい世界でこそ万全に振るえるものだ」

「……違いはない。俺も万全じゃないしな！」

上条は心底愉しそうに笑う。世界を、人をあざ笑う。

「さあ、正しい力の意味を知ってもらおうか」

「じゃあ教えてもらおうか。この俺に、人間の力を」

巨大な歪みを正す時 Broken Right Ha  
nd.

上条当麻神上の統魔と右方のフィアンマ。

『ベツレヘムの星』の上で、二人の男は対峙していた。

本来、『第三の腕』なんてものを持つフィアンマに一人で挑むのは、恐ろしいほど無謀なものなのだろう。

だが、

対するは神上の統魔と呼ばれた実質、最強の人間だ。そんざい

どんな覚悟で、そこに立つか。どんな気持ちで拳を握るか。

その違いが、そこにはある。上条は誰かのため、フィアンマは自分のため。

「結局。正しい力って何だよ」

「・・・簡単だ。いくら悪魔の王を斬り伏せる剣を持っていたとしても、悪の権化が目の前にいないのであれば、剣を振り下ろす事はできんだからな」

直後だった。

斬撃が、来た。



真横からの一撃。

距離など関係なく、ベツレヘムの星ごと大きく削り取られていた。

だが、

そんな斬撃も途中で止まっていた。

確かに、幻想殺<sup>イマジンブレイカー</sup>しでは処理速度の問題上、打ち消しきれない。だが、上条の恐ろしいほど鍛え上げられた肉体が、その強大な一撃を右手一つで受け止めていた。

「ほう」

ファイアンマの笑み。

「これを受け止めるか。それは右手ではなく、お前の身体能力だろうな」

実際にはそれだけではない。上条の左手から出る柔の炎。ダメ押しで出していたこれは、彼の体が浮く事を押さえていた。

その時だった。

次にやってきた攻撃は、その場の誰も予想できないものだった。

砲撃。

上条はソレがなんなのか分かっていなかった。そこら中を適当に貫く青い光線。ファイアンマ、ではなく『ベツレヘムの星』を狙って撃たれているものだった。

「ふむ。俺様を狙ってこないとは・・・ロシアの兵器か・・・？ いや、光学兵器だから

学園都市か？」

「いや、違うな」

「？」

「ヤマトだ」

「大和？ 第二次世界大戦で海に沈んだ日本の軍艦か」

「そつちじゃねえ。アニメの方だ。宇宙からの侵略を止めるために二十九万八千光年の旅に出たヤマトだよ」

「………学園都市は、アレまでも実現していたのか？」

「いんや。俺達だ。秘密裏に俺達が作り上げたものさ」

「……まあ良いだろう。お前の味方ならお前を撃つ事はしないだろう。邪魔は入らない」

「遊ぼうか？」

「いや、良いさ。世界を救ってから考える事にしよう」

「あ？」

直後。

真下から真上に巨大な剣が跳ね上がった。

それは上条の右の脇の下を潜る形で、一気に右肩へと向かって行った。

回避する時間も、受け流す余裕もなかった。

トン、と。

信じられないほど軽い音と共に、上条当麻の右腕が肩の所から切断された。

「あら？」

——そして、気がつくとも上条当麻の意識は全くみたくない部屋の中にいた。

「やあ上条当麻くん。久しぶり、と言っても君は何も覚えていないんだろうけど」

「・・・誰だ？ お前」

「誰だつて聞かれたら、蛇としか答えようがないよ」

黒いセーラー服を着た彼女はそう言った。

「蛇？ それって目の蛇か？」

「そう。私は『目に焼き付ける蛇』元々の君の能力だ」

「俺の蛇……？ 聞いたことがないな、それは」

「聞いたことがなくても良いよ。榎本貴音が君に話していなかったただけだろうからね」

「……で。お前の望みは何だよ」

「いやいや特に何も無いよ。幻想喰いが暴走状態になってくれたおかげで榎本貴音が私に掛けた封禁は解かれた。望みってほどじゃないけど、君には全てを思い出してもらおうかと思つてね」

「は？」

「『目に焼き付ける蛇』っていうのは簡単に言うとは完全記憶能力のこと。例え何度忘れても私がいれば全てを思い出せるはずだ」

「じゃあ何で、貴音は。アイツはお前を封印したんだよ」

「それは君が悪魔ドラキュラだったからじゃないかな」

「……どういう事だ？」

「楽しんでる少女に上条は怪訝な顔で尋ねる。だが少女は久しぶりの会話を楽しんでるのか遠回りの回答を返してきた。」

「簡単な話だよ。思い出したら笑っちゃうだろうけど、君は人を人として見ないような残虐性の持ち主だったんだよ。仲間は要らない。自分は天才。才能に順風満帆すぎた君は師匠達から様々な枷をつけられている。そのいくつかは既に外れているけど」





「僕で良いなら」

「頼む」

上条当麻の意識は、再びベツレヘムの星に戻っていった。

## 最終術式下準備完了 Rebirth | the…

くるくると。

血のラインを描きながら、上条当麻の右腕は宙を舞っていた。

吸い込まれるように右方のファイアンマに右腕が掴み取られた。

イマジネーション  
ブレイン  
幻想殺し。

科学でも魔術でも説明の出来なかった、あらゆる異能の力を打ち消す特異な右手。

「掴んだ………」

ファイアンマの唇が愉快げに歪む。

ばん、と。

水風船が割れるような音と共に、切断された右手はバラバラに弾け飛び、血と肉と骨と血管と神経を綺麗に分解・展開させていく。

「世界環境は『ベツレヘムの星』によって整えた。そして媒体となるべき右手も切断した。俺様の内に宿っている力は、お前の右手を經由しなければ一〇〇%の力を発揮する事はできんからな。幻想殺しとは、神聖なる右手が自然と備えてしまった浄化作用の一種だったのだろうが、俺様にとっては、むしろ備蓄を削り取る食糧庫のネズミに過ぎん。



だがその不要な性能も、本来のピースである俺様の力を受け入れる事で、その役を終える。……それで右手は完成する。後は俺様の身の内にある『本来あるべき力』を全出力で振るえば、全ての救済は完了する。この俺様の腕には、本来ならば世界全土を救うだけの力が宿っているのだからな。それを人は『神上』とでも呼ぶのかもしれないが……。俺様としてはどうでも良い。並ぶつもりも超えるつもりもない。ただ、今ある力を集めて世界を救えば成功だ」

それらは右方のフィアンマの右肩から伸びた『第三の腕』へと呑み込まれていく。

フィアンマの方にも、世界にも、様々な場所に変化があった。

その間も上条は何を言わなかった。

「なん、だ……。？」

必要であれば惑星一つを塵にするほどの圧倒的な光の爆発が、用済みのアダプターを問答無用で粉微塵に変える。

はずだった。

それが、莫大な力が霧散した。

まるで、

まるで、少年の肩の断面から伸びた、見えない右手に弾き飛ばされるように——ッ

!!



「答えろよ。いや、いや。面倒臭い。……どうせ敵だ。世界を『救ってやる』なんて堂々切つて思ってるヤツにろくな奴はいないからな」

「お前は……誰なんだ！」

「ん。ああ。初対面か。こりや失礼。上条当麻だ」

（……なん……だ!? さつきまでと全然違……ッ!）

上条はキョロキョロと辺りを見回した後、ニタリと笑つてこう言った。

「お前はどうかやら、『俺』と戦っていたようだな。俺と……しかも二回。で、これが三回目……。それはもちろん。俺が上条当麻と知つての事なんだろう？ だったら話は早い。三回目は死んでもOKと見なすぜ！」

悪魔は、目覚めたばかりの悪魔はとりあえず目の前の獲物に狙いを定め襲いかかった。

「……なあ、お前はさ。考えた事はなかったか？ 何故、俺みたいなただの高校生に幻想殺なんて代物が付いているのか、なんてことは？ まあ、考えるだけ無駄だよな。結論なんていくらでもあるんだから。それこそ、ただの偶然であつたり、誰かの意図であつたりするのもかもしれない。けどな、今ここにいる、上条当麻の右手に幻想殺がある理由はオレが知ってる」

「?! ……なんだと?!」

戦闘中にそんな事を言い出した上条に、フィアンマは思わず聞き返した。それは一体何故なのか、理由が知りたかった。

「それは俺が、『上条』であり『神上』であり『神成』だからだよ。幻想殺しなんてものは俺の力の副産物に過ぎない。だから、表上は『あらゆる異能の力を打ち消す右手』だろう? おかしいだろ。何でそんな所で幻想殺しは足踏みしてるんだ? な。そういう事さ。上条当麻に宿ったのは幻想殺しなんてイマジネーションで陳腐でちっぽけなモノじゃねえ。今一度俺の能力について教えてやるよ。俺は

「———か?」

「そんな大層なもんじゃねえ。ただそこにあるだけのちっぽけなモノでしかないさ。ただ? この天才的な俺についてちっやってるもんだから結構ヤバいもんに変質してるっばいけどねエ?」

「……………貴様は……………」

「お前は、いつペン世界を見てこい。本当に世界に救済が必要かどうかをな。俺の知り合いにもいたんだよ。自分が理不尽な目に遭ったから世界を変えるなんて息巻いてた世間知らずのお嬢様がね。テメエとそいつに共通するものは何か? 世界を知りもしねえガキくせに、自分勝手に世界変えようと馬鹿みたいに足掻いていることだ。なあ?

「さ」

そうだろう、  
ク・ソ・ガ・キ  
♡  
┌

黄金に輝く天空にて  
Star of Bethlehem  
e m.

「ハイ、外れ。残念でした」

上条は笑う。フィアンマが振るう攻撃をかわしたり受け止めたりしながらケラケラ笑う。

悪魔は楽しんでいた。この状況を誰よりも。この戦争に参加する人間、全てが真剣に争っているというのに、彼は笑っていた。人を、世界を嘲笑っていた。

「あつちやも、こつちやもみいくんなご破算。さあて、願いましてはー」  
大きく手を広げて上条は詠う。

「何が起きてるのか良く分かってないが、どうやら世界中全員が協力してこの浮遊大陸と、そこに乗るお前をどうにかしようとしている事は分かったぜ。だからこそ言わせてもらう。お前、本当に世界を救う気があったのか？」

上条の疑問に、フィアンマは嫌悪感を持ったようだ。だがそれがアウト。彼の言葉に反応を返してはダメなのだ。

「ないんだな？　ないんだな？　明確な手段なんてないんだ。ただ、救いたいって言う

気持ちがあつたから救おうとしたんだ、そこまでは良いけど何でそれが救つてやるなんて上から目線に変わったんだよ。そんなヤツに救われるほどの世界は腐つてるのか？ 腐つてないだろ。どうせお前は神話のような世界崩壊が怒るなんて幻想にとりつかれて、それを阻止するために世界を救う気だつたんだ。今この瞬間までは」

「な．．．に．．．．．？」

「今お前は自分の目的が分かつてないだろ？　そもそなんで俺と対立してるんだ？　右手を取つたらハイお終いのはずだろ？　なんで俺はお前と戦つてる？　その答えは簡単だ。お前が世界を変えれないからだ」

「貴様．．．．．」

「それに空気が変わった。お前も世界を変えるために何かをしているんだろうが．．．どうせ暴走するんだろ？　止める気もないが．．．もう終わりにしようぜ？」

「お前は．．．分かつているのか」

「神々の義眼．．．イヤ違うな。神々の眼球はウソはつかない。テメエの力は人の悪意によつて強くなる。だが、人が動く最大の理由に善意がある。恐らく悪意へ善意の式ができてしまつて、天罰的な何かが暴走するつてトコか」

「俺様の知つている上条当麻と大分違うようだな」

「お前がどんな俺を知つていたのかとか、俺は全然知らないんだけどさ。誰がなんと

おうと俺は俺なんだよ。悪魔なんて呼ばれたり魔王なんて呼ばれたりした事もあったが、今の俺は何だ？ たった一人で敵に立ち向かった無鉄砲のバカか？ それともヒーローか……」

上条はクスリと笑う。その間にもベツレヘムの星は崩壊を始めている。大きな振動があつた。おそらく誰かが暴走を阻止したのだろう。

「もう、良いか？」

上条は先程までとは違った口の端が引き裂けるぐらいに釣り上げた笑い方で。

「もう、この辺りがお前の引き際さ」

上条の体が文字通り消えた。

「とりあえず、テンプレ言つとくぞ。テメエが、そんな方法でなけりや誰一人救えねえつて思つてんなら」

フィアンマの眼前に現われた、上条当麻の右手から肩口にかけてが波打つ紋様で彩られていた。

「まずは、その幻想を喰い殺す！」

幻覚が見えた。獲物を喰らうサメのように顎を開いた巨大な龍がフィアンマに襲いかかる幻覚が。

喰われたように見えた全身は五体満足で、地面に無様に転がっていた。



「さてと。とりあえずこの男を地上に降ろすか……」

上条は状況も分かっていないが、とりあえずで行動を開始する。

だがついてみてびっくり、残されたコンテナは一人用が一機だけだった。

「あー、これはアレだ。俺が残るからお前は先に行けパターンだ。面倒くさい」  
乱暴にファイアンマをコンテナに乗せた上条は、コンテナを発進させる。

「さて、せつかく目が覚めたのに。死ぬのかね。もつたいない」

上条はそんな事を呟いたが、別に策がない訳じやなかった。

現に、すぐ側までにVTOL機がやってきていたのだった。

「何だあ？ コイツは……」

上条はそんなVTOL機の風防を開けて出てきた少女に見覚えがあった。

「アレは……誰だ？ やつべ、老人みたいに記憶が曖昧だなあ……」

どうやら一生懸命上条を助けようとしてくれているらしい。

「……フツ」

上条はなるべく普通の笑顔で笑うと、首を横に振った。

少女もその反応に驚いているらしい。

「悪いな。まだやらなきゃならねー事があるんだ」

上条はそう言うと、VTOL機に背を向けた。

暫く歩いてしていると、上条自身はそれが何なのか分かっていないが、インデックスの制御霊装を見つけた。

「ん？」

『とうま』

「んん？」

ガクンガクンと揺れる地面で平気そうに立ち続けたまま、上条は逆さまに浮かぶシスター服の少女を見つめる。

『どうして脱出しなかったの？』

「何も終わってないからだ」

上条はそう答えた。そう答える以外なかった。

「悪いな。シスター。俺はお前の事を現在進行形で忘れてる。誰だっけ？」

『とうま……ま？』

「そんな泣きそうな顔されてもなー。覚えてねーもんは覚えてねーんだよ。そもそも何でこんな浮いた大陸に乗ったのかすらも分からねー。まあ落ちながらゆっくり考えるさ。俺がどうしてこんなところにいるのかを、な」

『覚えてないんだ』

「知らない。の方が正しい。お前の知っている俺を“A”とするなら今の俺は“B”。そして“B”は以前から過ごしていた記憶がある。つまり“B”から何らかの理由で“A”になり、現在“B”がいるって所だろう。なるべく“A”の記憶も思い出せるように頑張るわ」

『うん。分かった。．．．とうま。私こういう時なんて言ったら良いか知ってるよ』

「．．．へえ？　どんなのだ？」

『プラチナムカつく！』

「中の人ネタは止めろっ!?　．．．まあ、いいや。俺はこれからこの浮遊大陸を何とかする事にする」

『何もできないけど応援してるね』

「．．．誰に向かって言ってるんだ？　この俺だぜ？　何も心配は要らねーよ」

上条はそう言って遠隔制御霊装を右手で壊す。

「さて、もう一仕事しますかネ」

## 北極海の最後の決闘 Last Fight.

『ベツレヘムの星』は、こうしている今も降下を続けている。

「とりあえず、北極海に落とすか……近しい」

上条はそんな事を言いながら、連続空間移動を始めた。

▽

ベツレヘムの星が北極海に向かって落ちていく事は魔術師達が全員観測した。安全地点、おそらく上条当麻が導き出した被害が最も少ないであろうポイントに向かって。誰も何も口出しできない状況で、ただ見守るしかない状況で、歯がゆい気持ちでいつばいになる者もいた。

「ちよつと待て……。おかしい。何か巨大な……。天使の力？ 何故こんなもの

が———？ 何で今更、ミーシャークロイツェフが浮上しつつあるんだ!？」

▽

「……かー。面倒くさいなあ……。ハア、俺がやるしかねーんだよな……。しようがねえ、最後の大事なと行きますか」

上条は大型上昇用霊装に手を加え自らの意思で、北極海へ向かってくるミーシャークロイツェフを阻むように軌道を変える。

「目標捕捉つてかア!?!」

大天使が沿岸から北極海へ到達した。

同時。

「大陸落としッ!!」

真上から『ベツレヘムの星』がそのまま落下した。

大陸が壊れていくとか、沈むにつれて海水が流れ込んでくるとか、そんな事何もかも気にせずに上条は底へ、下へ走る。

ただ己の欲求を満たすため。そこにいる強大な何かと対峙するため。

「さあ、遊ぼうぜ大天使! 地獄の底で、天空の楽園で、現世の中心で、宇宙の闇の中で。素敵なパーティー踊ろうぜ!」

▽

上条当麻が乗り、今もなお北極海に沈んでいくベツレヘムの星を外側から狙う影があつた。

その矛先をベツレヘムの星に向けて。

「波動エンジン内出力上昇」

「波動砲への回路開け」

「回路開きます。非常弁全閉鎖。強制注入器作動」

「安全装置解除」

「セーフティ解除。最終セーフティロック解除。ターゲットスコープオープン」

「機関内タキオン粒子圧力上昇。エネルギー充填率一二〇%」

「軸線に乗った」

「波動砲発射スタンバイ。対シヨック対閃光防御」

「目標ベツレヘムの星」

▼ ヤマトの艦首にエネルギーが集まり莫大な光量を放つ。

「波動砲、発射！」

「ラストワード。幻想消去」イマジンキャンセラー!!」

内部からの幻想の破壊と、外側からの質量の破壊が、ベツレヘムの星ごと大天使を消し飛ばし、北極海で爆発を起こした。

一〇月三〇日。

学園都市とイギリス清教。

ローマ正教とロシア成教。

二つの勢力の争いが生み出した第三次世界大戦は終結した。

終戦間際、北極海に落ちた要塞『ベツレヘムの星』の次元波動爆縮放射器による消滅を確認。

沿岸部の各都市で若干の水被害が確認されたが、死者が出るには至らなかった。

北極海に向かっていた大天使ミーシャークロイツエフの反応は消失。その存在を支えていた力を失い、ただのエネルギーとなつて別の位相へ帰つたものと推測される。同海域で進行していた氷の融解の停止も確認された。

同海域において、生存者の反応はなし。

十字教三大勢力の連合による捜索隊が派遣されたが、水温二度の海水の中から生存者が発見される事はなかった。

上条当麻。

彼は、二度目の『死』を迎える事となる。

まとめとその他

## 全話のまとめ

上条当麻

かみじょうとうま

「『見せ場だけは』全部、俺とアイツで山分けさせてもらうぜ!!」

「さあ、遊ぼうぜ大天使！ 地獄の底で、天空の楽園で、現世の中心で、宇宙の闇の中で。素敵なパーティー踊ろうぜ！」

プロフィール

年齢：15歳

身長：175cm

存在：人ではなく、神でもなく、悪魔でもない。一言で言うなら人外。（自称ただの神上統魔にすぎないナニカ）



学園都市のとある高校に通うレベル0（無能力）の平凡な（？）男子高校生。  
父は上条刀夜、母は上条詩菜。

人物

根っからの性格はドの付くほどお人よしかつ世話焼きであり、目の前で困っている人がいればどんなにハイリスクでも、それが敵対者であつても全力で救済しようとする。

だが、とあることが原因で歪んでしまった現在の性格は、ドの付くほど外道で、とある人物から「息をしてちゃいけない人種」と言われたことも。

『仲間？ 何それ美味いのか理論』を掲げ、大抵のことは自分一人でやれるため、他人に助力を求めず、助けを求める敵にも容赦しない。男女の区別をつけず向かってくる敵には例え女子供だろうと容赦はしない。

基本的に敬語を使わない方なので、目上の相手にもため口で話すうえ、煽ったり貶したり辱めたりを平気でする。

不幸体質

先天的に何らかのトラブルに巻き込まれやすい不幸体質で、「不幸だ」が口癖。そのために荒事に巻き込まれることも多く、年齢に比して潜った修羅場は意外と多い。

幼少期には陰湿ないじめに遭い大人達からも疫病神と忌避され、命に関わるような出来事や見世物扱いされる事もあった。それを危惧した父・刀夜により、「迷信を信じない科学の街」である学園都市に送られた。

現在でも不幸ではあるが、むしろ不幸の避雷針として級友達から重宝されたり、「不幸だからこそ、面白いことに巻き込まれて退屈しない」として自分の誇りとしている。

能力

無能力者という扱いではあるが、それは学園都市の計測器が計測できないだけであり、超能力や魔術などの異能の力を無効化させ、なおかつ複製反映させる能力「幻想喰い<sup>イマジネーター</sup>」という特殊能力を持っている。

ただし普段効果が適用されるのは右腕の手首から先だけであり、銃や通常兵器などには無力、常時発動する異能には効果がなかったり、異能の定義が曖昧だったり、あまりにも膨大な量を受けると処理が追いつかなくなるなどの欠点も多々ある。

だがそれでも異能の力に対しては『究極のアンチ』『切り札』と呼べるほど強力であり、理論上は神すらも打倒できることになる。

『幻想紋』<sup>マスタースペル</sup>（現在は『蠅王紋』<sup>ゼラルスペル</sup>）と呼ばれている上条の右手の甲を基点に現われるその紋様が全身に広がれば、効果範囲も広がるというチート使用である。が、広がる速度が遅い

という欠点はちゃんとする。

左手にも何かがあるようだが・・・？

身体能力

肩書は普通の高校生ではあるが、拳一発で空気を叩き潰し、普通と名の付く質量進を持った残像続を繰り出したり、大通りのビルを蹴つて進んだり、一方通行を全力で食らつても筋肉が震えるだけだったりと色々異常。

合気道を本流とした独自の武道を使っており、幻惑的な歩法であつたり、空中での二段、三段ジャンプをやつてのけたりする。因みにまだ全力ではない。実力が天元突破しているのはどうしようもないところ。

頭脳

進学レベルとしては凡庸な学校（とある高校）に通っており、そこで全教科満点の実力を保持している。さらに、頭の中に禁書目録の持つ十万三千冊の魔道書を複製して記録するという所行もやつてのけたため、知識量は常人を遙かに上回ると思われる。

さらにとつさの際における判断力や機転にも優れており、それまで全く知識のなかつた魔術師に対しても相手の魔術を使う癖や、打ち消したときに流れ込む複製情報から攻

略糸口を戦闘中に編み出すなど離れ業もやってのける。

### 対人関係

傍から見ると異常な数のフラグを立てまくることも有名。

ただしそれは中学生までであり、高校に上がって時が経つにつれて、だんだんと生来の性格が戻り、人格は破綻。相手にフラグを立てるところか逆に怖がらせてしまうことも。

『榎本貴音』という恋人がいる。幼少期より共にいる幼馴染みで年上で先輩で同学年で同級生。気になるタイプ、と言うより積極的に関わって言うてしまうのは「手のかかる面倒臭い女」好きなタイプは『榎本貴音』とべた惚れである。

### カミヤん病

クラスメートの土御門元春が命名。

上条に救われた相手にはフラグが立ち、そげぶされると更正され自身もフラグを乱立するようになるというもの。

いずれにしても実質上条の味方になる（例外もあり）ので一種の勢力とも言えるほど大規模。

さらにその大半は魔術サイド・科学サイドいずれかにおける実力者。偽海原（エツアリ）がこれを上条勢力と通称する。

### 記憶喪失

この世界に來た当時、上条はそれ以前のエピソード記憶を全て失っていた。だが、自身のもつ能力で失った記憶を思い出す事ができたのだが、生来の性格が戻るのを恐れた榎本貴音の手によつてその能力を封印され、記憶を失っていた。

記憶喪失以後の彼は自らを偽善使いと自称し、卑下する一面があつた。それはおそらく救えなかつたヒロインがいた為。

だが、ベツレヘムの星の中でフィアンマによつて右腕を切り落とされた際に能力が暴走、結果としてその封印と解くところになつてしまった。

### 榎本貴音

えのもとたかね

「私はまだ『術符の宣言』すらしてませんよ?」

「そのみじめな幻想・・・私がぶち殺して上げますよッ!!」

プロフィール

年齢：16歳

身長：163cm

存在：人ではなく、神でもなく、悪魔でもない。一言で言うなら人外。（自称

超絶フリテイ電脳ガール  
TPDG)

人物

性格は明るく騒がしくとても悪戯好き。

誰に対しても賑やかな敬語で話すが、敵と判断したモノには容赦の無い毒舌を浴びせる。

上条を「ご主人」と呼んで慕い、忠誠を誓っている。が、まれに忠誠心はゼロになり、からかうことに全力を尽くすこともある。

ゲームが趣味で、ゾンビを撃ち殺すかなりグロテスクなオンラインゲームにハマっており、大会で全国2位になったほどの凄腕ゲーマー（上条曰く趣味がゲームなら特技もゲームという典型的なゲーマー）。ちなみにゲーム内ではかなりの中二病を患っており、ハンドルネームは「閃光の舞姫・エネ」

本人はテンションで付けてしまったハンドルネームや当て字サークルをかなり恥ずかしく思つて、黒歴史として隠したがっていた。

ハッキングを得意とし、大抵の電子機器は全て侵入・支配可能。

### 容姿

黒髪をツインテールにしており、その毛先は切り揃えたようにぱつっんとしている。

時と状況を問わずして睡魔に駆られる病氣（恐らくナルコレプシーだと思われる）を持つており、普通の高校の中にある養護学級に通つていた。

現在、というよりこの世界に來た時点でその病氣は完治していた。

理由は後述するが、彼女にはもう一つの姿がある。

电脑版　癬毛のツインテールにヘッドフォンを付け、袖口の緩いジャージを着た青色の容姿をしており、両頬には金具のようなもの（本人いわく「鉄です」）が貼られている。足の先はノイズのように欠けていて、胸はAAカップらしい。

その存在は電脳世界を自在に動けるAIに近く、電波回線を通じてどんな場所にも移動する事が出来る。

また他人とは画面越しに会話ができ、また携帯電話などの端末を接続すればそちらに

移動することもできる。

能力

上条と同じく無能力者という扱いだが、それは中学二年生までの話であり、現在は世界を渡る前持っていた、精神力に依存する 自分が自分を認識できる限り不老不死になれる「目を覚ます」という特殊能力を持っている。

応用法は、能力名から想像が付くとおり『どこにでもいてどこにもいない』の劣化版である。 電脳世界と現実世界を行き来することを可能とするが、電脳世界にいる間は現実の肉体から意識がいなくなったり、容姿が変化してしまったり、死んでしまうと生き返ることは不可能だったり、欠点はいくつかあげられるが、電脳世界に限定すると完全なる不老不死になれる。

また肉体が再起不能なまでに破壊された場合、電脳世界の姿のまま現実に飛びだしてくることも可能だが、相応の精神力を消費し、フルマラソンを全力疾走したぐらいの疲れが出るらしい。



大分前に弓兵と対決させて欲しい的なコメントが来ていたのを思い出したので、聖杯戦争に人格破綻を起こした神上統魔を投入した話を書きます。

※独断と偏見と曖昧な原作知識で書きます。読みたくない人はブラウザバックボタンを押してください。ホント、文句は受け付けません。

——それは、とある日の午後。始まりは上条が言った一言だった。

「………何か、ある」

虚空を見上げてそう呟いた上条に、台所に立つ少女貴音はジトツとした視線を向ける。

「突然電波系になってどうしたんですか？ 新しいキャラの開拓？」

「んなもん、俺には必要ねーよ。それより、何か面白そうな魔力のラインが……」

「面白……？ へえー。で？ 行くの？」

興味なさそうに貴音は言うが、その理由は上条がその魔力に興味を持った時点で結論は出ていることを知っているからだ。

「ああ。遊んでこようかと思ってる」

「向こうの世界の人にも事情とか、命があるんだから。あんまり壊さないようにね」

「善処するさ」

「行つてらっしゃい」

「来ねーの？」

「ついてきて欲しいんですかあ？」

「まあ・・・な」

「・・・気が向いたら行つてあげます」

「そ・・・か。んじゃ、先いつてる」

「ええ」

そう言つて上条は目の前にある魔力の流れ、召喚の術式に干渉した。

「じゃ、少し準備してから、向かいましようか」

——上条達がいた世界とは別の世界線。

「よつと」

それなりに大きな爆発音と共に、上条当麻は床に着地した。体についた埃を払つてから周りを見ると、それはもう無残な部屋だったものしか残されていなかった。

(無理矢理割り込んだ弊害かなあ・・・。ま、いつか)

ほどなくして、上条の居る部屋の前に三人の人間の気配がした。

（大人二人と子供一人……？ 子供の方が俺のマスターか？ んん？ 普通じゃねーな、このマスター……！）

と、まるでC4でも爆発させたかのようにドアがけたたましい音とともに開かれた。

「ほら、開いた」

「り、リズっ！ 貴女っ、なんてことをつ!!」

「どうせあちこち壊れてる。これぐらい、今更」

「そういう問題じゃないっ！ 御館様の居城を傷つけるなど——っ」

姿を現したのは二人の女性。シスターのような、メイドなのか良く分からないが、統一された恰好をしていて、姉妹なのかケンカもどこか仲が良さそうに見える。

「二人とも、どきなさい」

その場に凜とした声が響いた。二人の女性が左右に身を引き、その間からドレスに身を包んだ小柄な少女が姿を現す。

「——初めましてお嬢さん。フロラインご命令を、マイマスター我が主人」

上条当麻は、今ここに戦闘狂のクラスで、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンに召喚された。

——アインツベルン城。

「召喚に失敗するなど、アインツベルンの人間のすることか!」

「まったく、親が親なら子も子という訳か。我等の期待を悉く裏切りおつて!」

自身に向けられた侮蔑、嫌悪、憎しみ。ありとあらゆる負の感情をぶつけられても、イリヤスフィールは無表情で聞いていた。しかし『親』という単語が出た瞬間、僅かに体が震えたのをバーサーカーは見逃すことはなかった。

(あーあーイヤだねホント。こういう人間のクズつて始末して良いのかね?)

バーサーカーは霊体化と同じ効果を得ることが出来る能力を使って人間の意識から外れた状態で、彼等に近づいていく。

「聞いているのか!? 貴様は我等が悲願を達成する為に造り上げし人形なんガハツ?!」

「・・・人形? 貴様等は今私のマスターを人形と言ったのか? あれほどまでに立派に生きている少女を、自らの意思を持って立派に立っている人間を。意思を持たず生きてもいない。人形と、そう呼んだのか」

「も、文句があるのか! サークヴァント!」

「大アリだ。大アリだよ人間。貴様等の口から私のことを下僕サーヴァントと呼ばないでもらおう。

私の主はイリヤスフィールただ一人だ。貴様等じゃあないんだよ」

そう言つてバーサーカーは一度イリヤスフィールを護るように立つと、その場の全員に脅しをかけイリヤスフィールの後ろで姿を消した。すると先程までの威勢は何処にいったのか、アインツベルンの人間は恐怖の表情でイリヤスフィールを……その後ろに居るバーサーカーを見ていた。

上条当麻が参戦したF a t e / s t a y n i g h t

(ほむん……異常なし。平和なものだねえ)

バーサーカーはアインツベルンの城壁の上に立ち、そびえ立つ森を見下ろしていた。既に日は沈み、時刻は次の日へと変わろうとしていた。今日も昨日と変わらず、何も異常はない。

戦闘狂として上条が召喚されてから一月半の時間が流れた。上条とイリヤスフィール、そして付き人のメイド二人は既に聖杯戦争の開催地たる冬木市に来ており、イリヤスフィールの根城たるアインツベルン城でただ毎日が無駄に過ごしている。

バーサーカーには、イリヤスフィールが聖杯戦争を勝ち抜く気がないように思えた。

召喚を失敗したからか、神上の統魔という正体不明なサーヴァントを召喚したためか。理由は定かではない。しかし、それで彼がイリヤスフィールに召喚されたという事実は変わるわけではない。

いずれこの城にもサーヴァントの襲撃があるだろう。それ故、バーサーカーは門番としてサーヴァントを迎撃するのみに重鎮を置いていた。

つまるところ。ここに来て以来、昼夜問わずバーサーカーは見張りをしていた。

(サーヴァント。つてのが一般的にどれほどの強さなのかは分からないが……。まあ、負ける気はしねえよな)

と、ここに来て一ヶ月半。変わらぬ景色の中に見慣れないものを発見した。青いスーツを纏い朱色の魔槍を持ったそれは、サーヴァントで言うランサーだろう。

(あー。ランサーって一番早いサーヴァントだっけ？ どれぐらい早いんだ……。？ 実際に見てみりや分かるよな！)

バーサーカーは空中に身を躍り出させると、身に纏っていた赤い外套が風になびく。重力を感じさせずに地面に着地した上条は、サンングラス越しに値踏みするような眼で視線の遙か先に居るランサーのサーヴァントを眺めていた。

「……」(どうでも良くなっちゃったなあ……)

城の中にある自室の中、ベッドに横たわりながらイリヤスフィールは呆然と天上を見ている。

聖杯の器として成功作でありながら、召喚に失敗したことにより失敗作の烙印を押され、聖杯戦争に赴いた。己の祖父からは二度とアインツベルンの地に足を踏み入れな、と追放処分を言い渡されたのだ。

元より、イリヤスフィールは聖杯に興味はなかった。ただ一族の悲願だから手に入れる。それだけのことだ。しかし、それも『アインツベルン』の人間であればこそその話。自らの存在価値すら失ったイリヤスフィールにとって聖杯戦争はもうどうでもいいこと。反感を抱いた自分のサーヴァントに殺されてもいい、そう考えていた。

(……?)

違和感を感じ、思わずイリヤスフィールは身を起こした。

イリヤスフィールが住むこの根城を中心として聳える森。その森に侵入者がやってきたのだ。気配や魔力を遮断していれば感知できないが、どういう訳かこの侵入者は己の存在を隠そうとしていない。さながら森林の中を吼えながら走り抜ける猛獣のよう。

それと同時に、自らのサーヴァントたる赤い外套の騎士が動く。城の門前に移動し、

そこで動きを止めた。

まるで門番のように。

イリヤスフィールは眉を擡める。赤い外套のサーヴァントの行動に疑問を感じた。サーヴァントは聖杯を求めるために召喚に応じ、マスターとともに戦う存在。少なくとも、イリヤスフィールはそう思っていた。

自分のような戦う気がないマスターを護るために戦うなど、思ってもみななかった。今初めて、イリヤスフィールは己のサーヴァントに興味を覚える。生憎とこの部屋は豪華な造りなのだが、外敵の事を考えて外を見るための窓はない。真っ白な布地のパジャマを着たまま、イリヤスフィールは城門前を見渡せるところができる場所まで移動した。

「……………よう」

まるで友に会うかのように、軽く挨拶をする青いサーヴァント。対する少年はサンングラスと帽子で表情こそ読めないが、口角が釣り上がっているのだけは確認できた。

「まったく、なんでこんな所に住んでるんだ？ 結果は張ってあるわ、ここまで距離はあ

るわ……………面倒極まりない」



「ならば来なければいいだけだろう。わざわざこんな所にまで文句を言いながらも出向いてくる。貴様の方が私には理解できないよランサー」

「いけ好かねえマスターの命令でな。貴様は……何のサーヴァントだ？」

「さて、ね。イレギュラークラスとでも言っておこう。私のクラスは『バスターカー戦闘狂』戦闘狂という名の、戦闘に飢えた存在だよ」

「はっ。ならこれからやることに異論はねえよな！」

「闘争か？ 良いだろう。全力でかかってこい」

ランサーは一瞬で間合いを詰め、槍を突きだした。が、バスターカーの出した左手に触れた瞬間。空間に固定されたかのように槍が動かなくなった。

「なっ!？」

「残念だったなランサー。俺に得物を持って挑んだことがお前の敗因だ」

「くっ。……チィ！」

追撃をしなかったバスターカーに向けて、ランサーは電光石火の如く槍を放った。が、そのどれもが素手で捌かれなおかつ威力まで削られてしまった。

「このまま勝てるぞと踏んだが……いや、中々どうして」

愉快そうにランサーは笑った。いや、実際に楽しいのだろう。

「いいぜ、訊いてやる。テメエ、何処の英雄だ？」

「聞いても分らんだろうから、教えるのは止めにしておくよ。しかし、貴様はわかりやすいな。槍兵には最速の英霊が選ばれると言うが、お前はその中でも選りすぐりだ。これほどの速さは三人としまい。加えて、獣の如き敏捷さと言えば恐らく一人だけだ」

「——ほう。よく言った」

瞬間、殺気が膨れ上がった。バーサーカーの言葉は何かしらランサーの地雷を踏んだらしい。ランサーは槍を構え直した。地面へ切っ先を向け、無駄のない構えに。

「ならば喰らうか。我が必殺の一撃を」

「知ってるか？ 必殺って、必ず殺すって書くんだぜ」

ランサーは更に後ろに跳躍した。恐らくバーサーカーのリーチを気にしての行動だが、その距離は槍を放つという位置ではない。

「手向けだ。受け取れ」

100m以上はあっただろう距離を、ランサーは一瞬にして半分まで詰める。そしてそのまま大きく上空へ跳躍、投擲体勢に入った。

「——刺し穿つ」

ランサーは真名を開放する直前、目下に居るバーサーカーを見た。全身赤づくしの彼は得ランサーがいる方を見ようとせせず、ただ笑っていた。

何をするのか、どうやって戦うのかランサーにはわからない。しかし、だからといっ

て己が持つ槍が破れるはずがない。

「死翔ポルの槍ク——!!」

絶対なる自信を込め、真名を開放した。放たれた魔槍は標的目掛けて一直線に向かつていく。

「宝具……か。蠅王紋章ゼブルエンブレム」

口角を釣り上げたままバーサーカーはまるで身を守る盾にするかのように右手を槍に向け、言葉をつむいだ。瞬間。右手の甲に浮かんだ紋と同型の紋様をもつ盾が出現し、迫り来る死の槍を空中に停止させた。

「流石に素手で宝具に触れるのは怖いのでね。少しばかり時間を稼がせてもらったよ」  
そう言つて笑うバーサーカーの右手にはいつも通りの力が宿っていた。

瞬間。盾が消失し、再度バーサーカーに向かって迫り始めたはずの槍は、先程近接戦闘の時と同じように空中で動きを停止。真名解放以前の状態に強制的に戻されていた。

持ち主の手に戻った槍をキャッチし、地に降り立ったランサーはバーサーカーを凝視していた。

「なるほどなるほどゲイボルク。私の予想は当たっていたようだ。そして私を殺せなかったその槍は、必殺の一撃ではなくなってしまったことを覚えておけ」

嫌みつたらしく口角を釣り上げ、馬鹿にするような言葉遣いでバーサーカーは言う。

しかし、その言葉はランサーには届かない。

絶対なる自信を持って放った己の宝具を防がれたこと以上に、ランサーは全力で戦えないことを今更ながら忌々しく思った。頭の中でマスターを罵り、煮えたぎった精神を静める。

「なあなあ。今日はここらで終いにしねえか？」

「うん？ そろそろ門限か？ なら早く帰らねばならんだろう」

馬鹿にしたようなバーサーカーの言葉を無視してランサーは背を向ける。

「ああ、それと——」

森に向かって走り去ろうとした瞬間、ランサーは何かを思い出したかのように顔だけをバーサーカーに向けた。

「貴様の心の臓。必ず貫いて受ける」

その言葉を言い残し、ランサーは森の中へと消えていった。

「生憎、私の命は数百万あるんだがな……」

バーサーカーはサンングラスをかけ直し、帽子の位置を確認すると、外套についた埃を払う。さて、一休みするかと気を抜いたところで、背後の門が開く音を聞いてそちらを見た。

出てきたのは真っ白な服一枚を着たイリヤスフィール。今までのような無表情では

なく、純粋に驚いた顔でバーサーカーの顔を見ていた。やがて、ゆっくりとバーサーカーに歩みより、戦いでボロボロ（どことなくカツコイイ）になった外套を掴んだ。

「——バーサーカーは、強いね」

ぼつり、と呟かれた言葉。恐らく先程の戦闘を何処かで見ていたのだろうとバーサーカーは推測した。

そういえば、とバーサーカーは召喚された時の事を思い出す。ヘラクレスかと問われ、違う、と答えた。ただそれだけがバーサーカーとイリヤスフィールが交わした言葉。「じやなきや戦闘狂など名のれんさ。俺は強い奴と戦いたいだけの存在だからな。英霊ですらない」

「……………うそ」

「マスターに嘘をついてどうする。現にこの身は英霊と呼ばれたことは一度も無い」

「……………信じられない」

それは何に對しての信じられないだろうか。英霊でもない存在が召喚の儀で呼び出されたことか、それとも英霊を圧倒する実力を持つていたことか。

恐らく両方だろうとバーサーカーは当たりをつける。

「今更だがイリヤスフィール。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。我がマスターよ。お前のことはなんと呼んだら良い」

それまで驚きの顔を浮かべていたイリヤスフィールだが、バーサーカーの言葉を聞いた瞬間、マスターとしての顔になった。

「好きに呼んで……と言いたいところだけど、気が変わったわ。イリヤと呼んでちょうだい」

「ふむ。イリヤ……か。良い名前じゃあないか。我が主<sup>マインマスター</sup>」

「あなたは？」

「サーヴァント・戦鬪狂<sup>バーサーカー</sup>。真名は上条当麻。異界の地より聖杯に干渉しこの地に現界した。面白いことを求めるただの化け物さ<sup>ミディア</sup>」

「なんかスゴそう」

「ああ。実際に俺はスゴいからな。何でも出来る。して欲しいことがあったら言ってくれ、令呪無くともご命令には従います御主人様<sup>マイマスター</sup>」

「じゃあ、お願いしようかしら」

「何なりと」

「……………」

イリヤスフィールは無言で夜空を見上げる。数多の星が瞬き、とても綺麗な夜。この日を境にして人外同士による戦争が始まるなど、誰が想像しえようか。

「こんな時間にお出かけか。危機感がないか、よほど自分のサーヴァントに自信がある見える。ん？ 何故レインコートを着た少女が居るのだ？」

彼女の側に、楽しそうに笑いながら一人の男が現われる。

今更ながら見る人が見れば吸血鬼アーカードのコスプレだと言わんばかりの帽子とサングラスと赤い外套。

どのような事がおころうと彼女を護れる位置におり、その視線は遙か先の眼下に居る衛宮士郎と遠坂凜に。そして彼女の背後に佇む霊体となったサーヴァントと雨合羽を羽織った奇妙な格好の人物に向けられている。

「二ヶ月……………か。長かったね」

「ふむ。意外と早かった気もするぞ」

「そう……………だね。トウマと過ごしてたらあつという間だった」

「さて、彼の家で帰宅を待つとしよう」

「ええ」

イリヤを優しく抱きかかえ、上条は空中に身を投げだした。

ふわり、と重力を感じさせずにトウマは着地する。私はゆつくりと地面に降ろされた。

彼の腕に抱かれるのは嫌いじゃない。優しさが、伝わってくるから。

なごり惜しいものの、早く準備をしなければならぬ。衛宮邸の門前まで歩く。塀に囲まれた大きな家。

エミヤキリツグの……家。キリツグはここでどう過ごしたのだろうか。その息子であるシロウと、どう過ごしたのだろうか……。

——いけない。感傷に浸るためにここに来たんじゃなかった。さつきまで考えていたことを思考の隅へ追いやる。気を取り直し、門前を基点に二種類の結界を張る。

「出来たわ」

「流石だな、マイマスター。後は帰還を待つだけか？」

「ええ。早く帰って来て欲しいわね」

そう言うのと、トウマはどこから取り出したのか椅子に座り込んだ。



どこか堂々としすぎている、というか余裕の表情でいつも笑っている。戦闘狂、そう自己紹介してくれた通り、強敵と相まみえるのが楽しくて仕方ないのかもしれない。

彼の、トウマのことは正直あまりわからない。私に召喚される前過程としていた世界のことを話してくれたし、この一ヶ月の間、私の為に色々動いてくれた。まるで執事のような。

何故ここまでしてくれなのか……私では考え付かない。確かなことは、トウマは私を護ってくれるということ。

私は、それだけで――

「……………ん」

思考が中断された。結界内に二人の存在を感知した。

……………間違いはない、シロウとセイバーだ。

「来た」

短くそれだけを告げる。心臓が早くすごい勢いで動いているのがわかる。これほどの興奮を覚えたのは久しぶり。やがて視界に二人の人影が映った。

「こんにちは、シロウ」

親愛を込めて私はその名前を口にした。

「え、えつと……………何処かで会ったっけ？」

「いいえ。会うのは今日が初めてよ。もっとも、私は昔から貴方の事を知ってたけど」  
「シロウ、アレはマスターとサーヴァントです。暢気に話している場合ではありません」  
「それがシロウのサーヴァントなんだ？ 外見に合わず血気盛んね」

セイバーは既に剣を抜いていた。

恐らく結界が張られていることには気づいていたのだろう。だが、抜かれた剣は刀身が見えず、緑の風が渦巻いているのみ。

それは彼女の本当の剣を隠すための鞘。聖剣を不可視の剣と化す宝具、インビジブル・エア風王結界。高度な魔術で覆われたその刀身を視認することはできないが、特殊な眼を持つ上条にとってはさしあたつての問題にはなり得ない。

「お、おいセイバー！」

「もつと話していたいけど……時間がない、か。やつちやえバーサーカー」  
「了解」

その言葉を合図に、両手に拳銃を持って上条は飛び出した。

同様に飛び出したセイバーと衝突。あらゆる角度から放たれるセイバーの剣を拳銃で受け流していく。

ランサーの槍と違い、刃の向きが視認できないため迂闊に手を出せないでいた。

周りの皆はそう思っていた。だがまあ、彼が持っている得物を良く考えてみて欲しい

い。

金属音のすぐ後、銃声が響いた。上条の左手に握られたリボルバーが火を噴いていた。撃ち出された弾は何の変哲も無い鉛玉だが、この戦闘中に狙いを定めて打つなど、相当な動体視力と反射神経がないと無理だろう。

しかし。

セイバーは一瞬のうちに間合いから離れて右方に跳躍、銃弾は外れた。

先程までの激しい争いとは違い、静寂がこの場におとずれた。

「もう、要らねえな」

上条はそう言つて両手に持った銃を後方の地面に放り投げる。

「もう？ とはどういう意味でしょうか」

「銃身から伝わる衝撃で、刃の向きは大体分かる。その時アンタの剣の握り方も覚えた。

もう、素手でいける」

「そんな甘い考えで、私には勝てません」

剣を構え直し、再び迫り来るセイバー。だが、相対する上条は見えないはずの剣に向かつて左手を伸ばす。

瞬間。ランサーの槍と同じ現象がセイバーの剣にも起きた。

剣が動かなくなったのに驚愕したその一瞬があれば攻撃に転じることは可能。上条

の鋭い一撃が、セイバーの体を吹き飛ばす。

「セイバー!!」

「ああ、先に言つとくぞ。今のは宝具でも何でも無い。言うなればアンタがセイバーとして使う『剣技』みたいなもんだ。つと!!」

側転とバク宙を組み合わせたような動きで、突然飛んできた光の矢を回避した。

（え、ええ…何？ 援軍？ 同盟とか組んじやったりしてるわけ？ 面倒だなあ…）

「さて、見たところ貴様もサーヴァントらしいが、クラスは？」

「バーサーカー。言っておくが狂戦士じゃないぞ。戦闘狂だ。理性もちやんとある。所謂イレギュラーって奴だ。…外套の色が被ってんな…」

上条はそう言うと、自らが羽織る外套の色を何らかの方法で黒色に染め上げた。

「さあ、来いよ援軍。戦いに狂った人外の、本領発揮はここからだ」

「ふっ。良いだろう。後悔するなよ」

赤い外套の男は両手に白と黒の剣を出現させると、上条に斬りかかる。上条はそれを触れただけで止めて見せた。

「くっ。なるほど、これは…。まるで時間停止だな」

「アンタのクラスは？ もちろんセイバーじゃあないだろうし、ランサーでもない。アンタはなんだ？」

「アーチャーだ」

「弓使えよ!? それとも何か? 俺と戦うのに弓は要らんと」

「そうは言っていない」

「ま、使わないなら使わないで良いけど、後悔すんなよ?」

上条はそう言うのと、体を風のように散り散りにしてアーチャーに接近する。

(さっきのセリフから察するに、このサーヴァントのこの動きも戦うための技の一つという訳か)

上条はアーチャーの二刀をかわす……と言うより当たらない動きをしながら、攻撃。それも相手の力を利用した払いをかけていく。

一方のアーチャーは干将莫耶を投影し、同じく最大魔力を込め、地を這うようにして先程の夫婦剣を追わせる。投擲を終え、空いた両手に干将莫耶を投影。

残像を残し、弧を描きながら一組目の干将莫耶は上条の体を切り裂かんと飛来する。

だが、それはあつさりと両手の払いで弾かれ、干将莫耶は上空に舞い上がった。足を切断せんと飛来する二組目の干将莫耶は、元より捕えにくい歩法でかわされた。

「夫婦の絆は堅いぞ、バーサーカー」

そうしてアーチャーは最後の干将莫耶を投げた。上空にあった干将莫耶は、今しがた投げ放った干将莫耶と引き寄せあい、上条の前後から襲い掛かった。

干将と莫耶。二つで一つ。故に夫婦劍。互いは互いを引き寄せる。それは、離れていても必ず引き合う夫婦の絆の如く。

アーチャーは上条の姿を視界の端に捉えながら扉の上に跳んだ。

「残念。利用させてもらうぜ」

上条が両手を振るうと、全ての干将莫耶がその場で停止する。

何度か見た光景ではあるが、いざ空中で静止したのも目にするに驚きが勝るのか、イリヤ以外のその場の人間は驚きを顔に出していた。

「――I am the bone of my sword」

だがアーチャーは冷静に扉の上に着地すると共に詠唱を唱え、無銘の弓と刀身が捻れ曲がった螺旋の劍を投影する。その矛先を上条に向けて。

いまだに空中停止したままの干将莫耶、それをやった上条は口角を釣り上げると。

「うりやりやらア!!」

と、全部で四つの干将莫耶をアーチャーに向かって打ち出した。

「なにつ?! くつ。偽・螺旋劍」

回避と攻撃を同時に行うという離れ業をして見せたアーチャー。真名が唱えられ、螺旋の劍を放たれた。それは高速の速さで一直線に突き進む。例え障害物があろうと、一切を粉碎し目標を削る必殺の一矢。

だが、あろう事か上条は、その矢の運動エネルギーを衛宮士郎や遠坂凜がいる場所へ向けて転換して見せた。その技一つで。

だがまあ、戦い戦をもてに割り込めあましていたなかつたセイバーが余裕で間に合い、防いで終わったが。「そろそろ夜も遅い」

上条はそう言うのと一枚のカードを取り出した。

「スペルカード宣言。幻爆「イマジンプレイカー」」

瞬間。衛宮家の庭で爆発が起こった。

上条はイリヤを抱きかかえてこの場から全力で遠ざかる。

アインツベルン城に帰る道中、一度だけ眼を開き先程まで居た戦場を見た。そこには回復したセイバーと、赤い少女に怒鳴られている衛宮士郎の姿があった。